
闇と炎の相剋者

黒鋼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇と炎の相剋者

【Nコード】

N1062M

【作者名】

黒鋼

【あらすじ】

一巡目の世界から二巡目の世界へと戻ろうとしていた智春たちの前に突然現れたデウス。そんな機械仕掛けの神から逃れるため、自身を犠牲にして三人を逃がす操緒。そうして、操緒を犠牲にして智春たちが戻った先は洛芦和高校に入学するよりも過去の二巡目の世界だった。これは、やり直す機会を得た智春が紡いでいく物語。

プロローグ（前書き）

このサイトでは初投稿となります。

よろしく願います。

それぞれのキャラの性格が変になる可能性があります。

プロローグ

どことも知れない空間をどこまでも果てしなく落ちていく感覚、以前鋼に飛ばされた時とは違い、しっかりと自分の意思で僕は世界を越えていく。

僕たちを守っているのは、機械仕掛けの悪魔の発する漆黒の重力壁。世界の境界を切り裂き、僕たちがいるべき本来の世界への道を作っているのは、その悪魔が右手に持った巨大な剣。

剣の描く軌跡は虹色の道となり、僕に安心をもたらしてくれる。だが、永遠に続くかと思えた落下感はいきなり止まった。

「二巡目に戻れたのか…？」

そう思つて、周囲を見るも自分のいる世界は未だに昏い。自分たちが止まってしまっているのだ。

「…？鐵ッ！」

不安になり、自分たちを守っている機械仕掛けの悪魔の名を叫んでも変化は無い。

「アニア、どういふことだか分かるか…？」

疑問に思い、？鐵の腕の中にいる金髪の悪魔に聞いてみるも、

「私にも分からん…」

…というか、何故私に聞くのだ!？」

逆切れ気味に回答を返される。

こちらにも困惑気味ながら、返事を返す。

「いや、アニアなら分かるんじゃないかと思ったんだけど……」

「世界間の移動など一巡目に飛ばされた時だけだというのに、私
分かるわけ無いだろう!!」

そもそも、そっち方面は直貴が担当だ!!

…大方お前の操っている？ 鐵に何か問題でもあるんじゃないのか
!？」

そんな口論を繰り広げていた僕とアニアの両方の顔色が段々と悪く
なっていく。

二人揃って気付いてしまったのだ。

嘘であって欲しいと思う。

だけど、

「…なあ、アニア……」

「…何だ、智春……」

二人とも、声が震えている。

「…このまま？ 鐵が止まったままだとどうなる……？」

「……いずれ、魔力が尽きて、どことも知れない空間に墜ちていく
だろうな……」

どこかの世界に一人でも流れつければ良い方だ」

やっぱりか……

って、

「どうすんだよ!？」

こんな訳の分かんない空間で死ぬのは流石にごめんだぞ!」

「ええい、私だって抜かれるものならとっくに抜けているわ!！」

ギヤーギヤー騒ぐ僕とアニア、解決策も浮かばず、ただ此処で死んでしまうことへの不安で押しつぶされそうになり始めた。
そんな最中、

ズンツ!!!

「えっ!？」

突然目の前の空間が揺らいだ。

何が起きたのか分からない。

こんな世界の狭間に干渉できる存在なんて、それこそ最強の機巧魔^{アスラマキ}神である鋼でもなければ無理なはずだ。

なのに、一体だれが？

茫然としている僕らの前で、そいつは眩い光と共に現れた。

巨大な腕

機械仕掛けの人形の腕

世界を歪め、ねじ曲げ、へし折り、滅ぼそうとしていた圧倒的な“力”の権化

「デ、神デウス…!!」

「…っ、馬鹿な…!!」

何でこんな時に僕らの前に…!!
驚愕して固まったまま動けない僕らと同じように、デウスも出現したままの状態で動こうとしない。

いや、動く必要が無いだけだった。

「…グッ…!!」

突然アニアが呻き声を漏らした。

「…アニア、どうし…ッ…!!」

僕がアニアの方を見ると、彼女の体が段々と透け始め、その体から砂のような透明の粒が流れ落ち出していた。

「…な、何で…!!?」

いきなり非在化するなんてありえない!!

それこそ、嵩月みたいに発作が起きていた訳でもない。
なのにどうして!?

「…と、智春…」

「…? 鐵を…!!」

非在化が起きていて、苦しいにも拘らずアニアが僕に声をかけてくる。

その声が耳に届くと、僕はすぐさま考えもなしに行動していた。

「 ? 鐵! ! ! 」

自分たちを護っている機械仕掛けの悪魔を、デウスに向ける。

世界の移動で僕たちを護っている重力壁はそのままに、新しい重力球を生みだしデウスに向けて放つ。

発射された重力球は、 ? 鐵の腕の前に現れた幾つもの魔法陣を通じて加速する。

だけど、

「 …… な …… ! ! ! 」

「 …… う、嘘だろ …… ! ? 」

デウスに当たる直前に消滅してしまった。

くそっ、どうすればいい! ?

世界の移動はただでさえ莫大な魔力が必要になる。

その最中にこれ以上の力を使ったら、もう、操緒がもたない。

だけど、 ? 鐵を使う以外に、僕たちが助かる方法も思いつかない! !

そんな風に考えていた僕の体にも異変が起きていた。

「 ぐ、ぐ ああ あっ ! ! ! 」

「 智春! ! ! 」

何だこの感じ! ?

体が熱い、燃えるように熱い! ! !

だけど、それは僕という存在の外側が燃やされているだけで、中身は急速に冷え切っていく。

そして、燃焼と冷凍が混ざり合った部分が消えていく感覚。自身の存在が、世界のどこにも感じられなくなっていく。自分自身を世界に繋ぎとめられなくなっていく。これが、

「非在化!!」

一巡目の世界で悪魔になっているから、考えなかった訳じゃない。だけど、自分が男だから、雄型の悪魔だから、嵩月のことを、操緒のことをずっと忘れないでいれば非在化しないんだと思っていた。だけど、違った。いや、心のどこかで、忘れていた、思い出さないようにしていたんだ。

あいつは、一巡目の僕は悪魔でありながら演操者ハンドラーという矛盾した存在だった。

その体は、砂のように崩れ去っていくのではなく、水が蒸発し気体として見えなくなるかのように消えていつていた。

なら、僕もそうならないという保証がどこにあった!?

寧ろ、そうなる可能性の方が高い。

僕も、悪魔でありながら演操者なのだから。

「おい、しつかりしろ智春!!」

アニアが自分も非在化が進行しているのに、僕に向かって声をかけてくれる。

どうやら、僕の方が非在化の進行が激しいらしい。

何とか、アニアの方に顔を向けるが喋る余裕はない。

「があああっ!!」

「くそっ、どうすれば!？」

体が崩壊していく感覚から抜け出せない。

僕が消えたら、アニアは？操緒は？嵩月はどうなる。

？鐵が止まったら、この世界の狭間から抜けられずどうしようもなくなってしまう。

なら、僕は消えない!!

消える訳にはいかない!!

こんな所で皆を終わらせる訳にはいかない!!

そんなとき、頭に声が響いてきた。

『 だいじょうぶ、トモには操緒がついてるよ』

「…え…？」

操、緒…？

体の崩壊感も忘れて戸惑う僕。

そんな僕だったが、すぐに意識がもとに戻った。

何故なら、

「…え？」「」

僕の、いや僕らの目には不可解な状況が映っていた。

非在化していく僕とアニアの体、目を閉じカプセルの中に漂っている嵩月。

そして、それらの三人に向けて力を行使している？鐵。

その光景を見ている、僕と嵩月とアニア。

そんな僕たち全員が、どこことなく透けている。

「いつたい、何がどうなってるんだ…?」

疑問の声をアニアがあげるも、僕たち二人も訳が分からないのだから答えようがない。
そんな僕たちの前に、

『ふふうん、皆の体から魂だけを抜き取ってみました』

操緒が姿を現した。

「な!どういうことだよ、それ!?!」

『簡単だよ、今のままじゃ皆“あいつ”に消されちゃうから、魂だけでも別の世界に送って、生き残ってもらいます』

「なんで、そんなことできるんだよ…?!」

『ううん、良く分かんないけど出来ちゃったんだから良いじゃん』

いいのか、それで?

確かに全員助かるのかもしれないけど…

「あの、操緒さんは…?」

「そうだ、操緒、お前はどつなる」

『…私は、残るよ。』

『? 鐵を動かさなきゃいけないんだから』

な!!

それじゃあ、意味ないじゃないか!!

「やめろよ操緒、そんなこと!!」

「そうです!!

どうして、そんなことするんですか!?!」

「……………」

三人がそれぞれの態度で反対するも、操緒は力の行使をやめない。

『もう、決めたんだ。

ほとんど、魂も残ってないけど、今なら皆を助けられる。

だから、助ける』

操緒がそう言いきった瞬間、? 鐵から濃密な魔力が溢れだす。

『じゃあね、トモ。

今度の世界の私と仲良くな…』

儂げに笑い、僕たちに手を振る操緒。

「やめろ!! やめろよ、操緒——!!」

必死に手をのばして操緒を掴もうとする僕と青月。ただ、僕たちの意識はそこで途切れてしまった。

1回 予想外（前書き）

嵩月さん、非常に書きにくいです。

もっと、分かりやすくならないかなー、と思ったり。

だけど、それだと、嵩月の魅力は無くなるから難しいところ・・・

1回 予想外

「操緒————！！！」

「え、え？

な、なに？」

ガバツ！！

どこか別の世界に辿り着いたのか、僕は意識を取り戻した。ただ、飛ばされた時の意識がそのままだったようで、操緒の名前を叫びながら起きてしまった。

「ね、ねえ。

トモ、どうしたの？

いきなり叫んだりして……

もしかして……墜落のショックでおかしくなっちゃった！？
うわ、ありそうで怖いなあ……でも、だいじょうぶ。

トモには操緒がついてるから」

「……………」

この世界に到着して最初にかけられた言葉がそれかよ……
何だか先行きが不安になってくる……

意識が戻ったばかりだから、目の前に浮かんでいる幼馴染の姿をぼんやりと眺めたまま暫く身動き一つしなかった。

気のせいかな、いつもよりも薄くなって透明感が増してるような……

「つて、気のせいじゃないぞー！
…操緒、どうしたんだよ、それ！？」

『それ？』

…ああ、この体のことなら、なんて言うか……
操緒にもよく分かんないんだよね〜』

「いや、良く分かんないって……」

半ば呆れる僕に、ムツとした顔になりながら操緒が答える。

『…そんなこと言われたって、分からないものは分からないんだからしょうがないじゃない。』

飛行機が墜落して、気付いたらこんなことになって……

大方、操緒は死んじゃったから、幽霊になってトモに憑いてるってことじゃないの？』

「墜落！？』

飛行機は墮ちたのか？』

そんな……！！

僕が知っていて、巻き込まれた飛行機墜落事故っていえばあの事故しかないはず。』

だけど、此処は別の世界のはずなんだ……！！

ひよっとしたら、あの事件じゃないかもしれない。

それなら、朱湮さんや紫湮さんが助かっているかもしれない……！！
だけど、操緒はそんな僕の一瞬の希望をすぐに打ち砕いてくれた。

『うん、そうだよ。』

私たちが乗ってた飛行機。

成田発、ロンドン・ヒースロー空港行きMA901便』

「そ、そんな…」

ほんとに、あの事故だったのか。

僕が死んで、それを生き返らせようとした操緒が一巡目の僕に頼んで自分を副葬処女ヘリアル・ドールにして、僕を生き返らせたあの事故か。

くそっ、どうせ戻るなら、この事故が起きる前にしてくれよ…
そりゃあ、前の世界の操緒よりも薄い訳だよ…

『…まあでも、不幸中の幸いってことで。

良かったじゃん、こうして生きてるんだから！』

落ち込む僕を操緒が励ましてくるが、違うよ操緒。

その事じゃないんだよ…

「ごめん、少し寝る」

現実に意識が向いたのか、体の調子を思い出した。

ああ、確かにあの時、事故直後は体に結構怪我があつたなあ…
そりゃあ、起きてられる訳ないか…

『そつだね…トモもこんなことの後だし疲れてるよね…

おやすみ…』

そつして、僕は意識を闇に委ねた。

まどろみの中で、一緒にいた嵩月とアニアのことが頭をよぎったが、もう僕にはそのことを考えられるほど頭が働いていなかった。

?
?
?
?
?

あの後、起きてからは大変だった。

母親や、操緒の両親が僕の搬送された病院に押し掛けてきたからだ。戻ってくる前の世界で一度経験していることだったから、以前よりは楽だったけれど、それでも操緒の両親に会つと、本当のことを知つている分、以前には感じなかった申し訳なさでいっぱいになった。だけど、その事を言う訳にもいかない。

言つてどうなるかも分からないし、自分が何故知っているのか聞かれても答えようが無い。

言えたら、どれだけ楽だっただろうか…

その後は、以前のように過ごして怪我を治すのに努めた。

幸いにも、僕自身の魂はこの体の僕の魂と同化したらしく、体が悪魔化してはいなかった。

一度、直貴　一巡目の僕　がやつて来て強制認識の力を使つていった。

もう真実は知っているからなのか、全く効果はなかったけれど…

だけど、かかったように見せるために、前の世界の時と同じような行動をした。

そのことに、やや複雑そうな顔をあいつは見せていたけど、納得して去って行った。

その時、以前は分からなかった一巡目の嵩月が僕たちの方を見て微笑んでいるのが分かった。

そんな彼女の姿を見て、僕は一つの決意を固めていた。

…今度は出来るだけ邪魔な行動はしないようにしよう…

部長　？塔貴也　の邪魔をすることに専念しよう。

いや、それよりもまず秋希さんをベリアル・ドールにさせないよう
にしないとイケない。

そうすれば、少なくとも以前のようない悲劇は起きないはずだから…
それに、操緒が消滅する可能性も極端に少なくなる。

そんなことを人知れず決意した僕は、今、中学の入学式に向かって
いる。

「…はあ、なんだってもう一回中学に通わなきゃいけないんだ…」

『うーん、トモ、何か言った…？』

宙に浮いたまま、操緒が話しかけてくる。

「いや、何でもないよ。

ていうか、いつの間に着替えたんだよそれ…」

『ふふーん、ひ・み・つ』

相変わらず、操緒が着替える瞬間は訳が分からない。

……ヒソヒソヒソヒソヒソ……

そんな風に操緒と会話している僕を周囲の人は、気味悪そうに見た
り、会話にしたりしている。

『な〜んか、嫌な感じ…』

操緒はそんな人たちを不機嫌そうに見ている。

「しょうがないだろ、皆にはお前のことが見えてないんだから…」

一方の、対象にされている僕だが、一度経験していることでもあり、以前ほど居心地が悪くなったりしている訳ではない。ただ、

「あはは…やっぱり、対応策を考えといた方がいいのかなあ…」

自分から望んでなりたい状況という訳でもない。

出来るだけ、改善の努力をしてみよう。

多分無駄なんだろうけど…

? ? ? ? ?

何だかんだで学校に到着し、クラス分けが発表されている掲示板の前が混雑していたため、自分のクラスを操縦に確認してもらい教室に向かう。

前回の世界と、同じクラスだったから、さほど心構えも必要ないだろうと思っていた。

だけど、そんな考えはすぐに消え去った。

「……え……？」

教室に入った僕の目には一人の少女が映っていた。

長い黒髪を後ろで一つにまとめた少女だった。

眉がくつきりしていて肌が白い。
そして、言葉では表しきれないほどの人間離れした美貌を持った少女。

クラス中から、男女問わず様々な視線が向けられている。

男子からは熱烈な視線、女子からは羨望や嫉妬などのやや複雑な視線だ。

だけど、少女自身はそんな視線など気にしてもいないのか、背筋をピンと伸ばして、前を向いたままピクリともしない。

でも、僕はその時、そんな周りの視線や少女の様子に全く気付けなかった。

ただ疑問だけが、頭の中をぐるぐると巡回していた。

『ねえトモ、どうしたの？』

教室に入った瞬間、止まってしまった僕を不審に思った操緒が声をかけてくるが、それにも僕は反応できなかった。

なんで、どうして彼女がここにいるんだ？

だって、北中出身って言うてたじゃないか…

中学で会える訳がないから、入学式の後に潮泉の家の方に押し掛けるかどうか迷っていたくらいだ。

…流石に、実家の方に確認する勇氣は起きなかったし…

「……………嵩…月…？」

茫然としたまま、僕は彼女の名前を呟く。

そんな声が聞こえたのか、ゆっくりと彼女は僕の方を向いて、

「…はい、久しぶり、です。夏目くん…」

微笑みながら、僕の名前を呼んでくれた。

「嵩月！！」

彼女だと、僕を知っている嵩月なんだと、認識してからの僕は自分でも驚くぐらい行動が速かった。

彼女に駆け寄り、

「ほんとに、ほんとに嵩月なんだね？」

僕の知ってる、一巡目から戻る途中にはぐれた……！！」

彼女の肩を押さえながらそう尋ねる。

後から思えば、クラス中の視線が集まっていた、尚且つ中学一年の初めてのクラスで知り合いかどうか分からない面々が集まっている中ではかなり目立った行為だったと思う。

しかも、相手は断トツの美少女である嵩月だ。

クラスの面々が僕のことをどう思ったのかなんて、嫌でも想像がつかく。

だけど、その時の僕の頭からは周囲の視線も、操緒の言葉も消えていた。

ただ頭に残っていたのは、目の前にいる嵩月の姿だけだった。

「……はい……」

若干、頬を染めながら嵩月が頷く。

「……よかった……よかった、嵩月無事で……」

今迄は、一緒にいた二人のことを確認する方法が無かったから、ずっと不安だけが残っていた。

だけど、自分でも想像していた以上に嵩月の安否は僕の中でかなり

のウエイトをしめていたみたいだ：

僕は嵩月を抱きしめて、涙を流していた。

今迄に経験してきた嫌な涙じゃない、喜びと安堵の混ざったうれし涙だ。

嵩月も、そんな僕を受け入れてくれたのか、そつ、と自身も腕を僕の背中にまわして僕のことを抱きしめてくれた。

思えば、これがこの世界で初めて気が抜けた時だったのかもしれない。

それが分かったのは、入学式が終わった後だったけれど、その時の僕にはそんな嬉しい感覚に浸っている余裕はなかった。

?
?
?
?
?

結局あの後、間に割り込んできた操緒によって、僕と嵩月の時間は破られた。

まあ、実体を持っていない操緒だから物理的には意味が無いのだけれど、何とも言えない雰囲気醸し出していたのだ。

実際、入学式の真つ最中である今も僕の頭上に浮いたまま、髪を逆立てて、いかにも「私、怒ってます」という雰囲気でのいるのだ。

説明して弁解しようにも、今は入学式の真つ最中。

話しかけられるわけがない。

隣にいる嵩月は、操緒が見えていないのか、何かを気にした様子もない。

寧ろ、僕の方が気になってしょうがなかったりする。

今まで見てきた嵩月の制服姿は、洛高の制服ばかりだった。

勿論、あの制服も似合っていたけど、ブレザーを着た嵩月もかなり

いい。

高校生の嵩月よりも、幼さが残っている顔立ちで、美人というよりは美少女といった感じた。

今の僕の状態は、以前、嵩月の父親に前の世界の嵩月の中学時代の写真を見せてもらったときと似た感じになっている。

頭の中に色んな興奮物質が分泌しまくっている。

だけど、その興奮物質も頭上に浮いている操緒の雰囲気によって、かなりの速度で掻き消されていく。

天国でもあり、地獄でもある。

そんな状態が入学式の間中ずっと続いていた…

? ? ? ? ?

教室に戻った僕たちを待っていたのは、

「「「……………」」」

色んな感情が入り混じった視線だった。

女子からは好奇の視線が主に嵩月に、男子からは嫉妬などの視線が主に僕に向かって。

…うつつ…なんで僕がこんな目に…

予想していたよりも、非常に幸先の悪い中学スタートだ。

いや、嵩月も一緒だから、良いスタートなのか…?

とりあえず、今は、

「嵩月、これからよろしくね」

「はい、夏目君…それに、水無神さんも…」

『え…?』

周囲のことは忘れて、嵩月と、今後に向けてのことを話し合うことにしよう。

…HRが終わって嵩月と校門を出たら、すぐに嵩月組に連れていかれたけど…

2回 発覚（前書き）

青月組の皆さん、名前が分からないのがかなり難点だったりします。

あと、操緒の出番が今回は異様に少ないです。

今回はかなり短いですが、次話と繋げて書いているのでご勘弁ください。

2回 発覚

「……………」

『……………』

「……………どうして、こんなことになったの、でしょうか……………」

今、僕たちは嵩月組 嵩月の実家 にいるんだけど、周囲には大量の黒服さん。

といっても、嵩月組の方々では無く、嵩月のお祖母さんが呼びよせた御同業の悪魔の方々。

その全員が、気を失って地面に倒れている。

そんな光景の中央に嵩月がいて、僕と操緒は少し離れたところにいるのだけど……………」

「……………嵩月……………」

『……………嵩月さん……………』

「……………はい……………」

「『……………やり過ぎ……………』」

「……………う……………」

「……………う……………」

そんな上目づかいで睨まれても、流石にこの惨状はどうかと思う訳ですよ…

一瞬、ドキッ！として、周囲のことを忘れかけたのは事実だけどもあ、巻き込まれていなかった青月組の方々が、既に八枝さんの指揮のもと介抱の作業に当たっているから、死ぬ心配はないだろうけど…

「キュルルル〜」

「ああ、お前はよくやってくれたよ、ありがとう」

青月の引き起こした惨状に呆れている僕に対して、彼女を責めないで欲しいと言っているかのように甘えてくる翼の生えた火蜥蜴^{サラマンダー}。僕と青月の使い魔で、ペルセフォネというらしい（青月がそう呼んでこの子？を呼びだしていた）。

「だけど、お前もこれはやり過ぎだと思わないか…？」

「キュル？」

周囲を見回して、小首？を傾げるような仕草をするペルセフォネ。特段、疑問にするような結果では無いらしい…

『…ていうか、私は初めて“悪魔の力”って言うのを見たんだけど、凄いいもんだねー…』

操緒は何故か感心している。

つて、お前はやり過ぎだと思ってたんじゃないのかよ！？

『いや、トモに感想合わせてみただけだから』

こんな時に合わせなくていい。

「はあ、何か前回までと大分違うなあ」

少なくとも、こんなことは前の世界で高校に通っていた時もなく
たはずだ。

そもそもの発端は、数時間前に遡る。

?
?
?
?

入学式も終わり、クラスの面々に捕まる前に教室から逃げ出した僕
たちは、そのまま校門に向かっていた。

「へー、じゃあ非在化する心配は当分ないのか。
よかった、よかった」

「はい。」

「…あ…でも…」

「なに？…どうしたの…?」

「…前みたいなことになったら…また…」

「だいじょうぶ、その時は僕がいる。

もう、嵩月独りに苦しい思いはさせないよ。

あるとき、嵩月に誓ったのは嘘じゃない。

嵩月の生涯の契約者として生きていくって決めたんだ。

…だから、非在化の兆候が少しでも現れたらすぐに言っ
て欲しいんだ」

「…夏目くん…」

「…嵩月…」

歩きながら、非在化寸前だった嵩月の体が今はどうなっているのか、僕自身の悪魔の力はどうなっているのか、などの現状をお互いに報告し合っていた。

それで分かったのは、僕と嵩月の契約がとてもおかしなことになってしまっているということだった。

なんでも、嵩月は自分が赤ん坊の頃にまで戻ってしまったらしく、今は一生をやり直している感覚らしい。

そのため、後悔したことを出来るだけ起こさないように努力していたんだとか。

僕と操緒のことも探していたらしいが、小学校が違ったせいもあって、なかなか見つからなかったそうだ。

そんな中で、ロシアマフィアと嵩月組の抗争が激化したからヨーロッパに避難していて、漸く戻って来たのが小学校最後の年だったとか。

そこまで来たら飛行機事故に僕たちが乗るのを止めるのも諦めて、自分も僕たちの中学校に入学しようと決めたんだそうなのかな。

幸い、両親からの反対は特になかったため入学することは問題なかったらしい。

ただ、一つ問題があつて…それは……

嵩月はドウターが呼び出せるらしい。

初めにそれを聞いた時は、流石に一瞬自分の耳を疑った。

僕以外と嵩月が契約をしたのかとすぐに考えた。

だけど、僕のその考えは、僕の顔を見た嵩月がすぐに思い至つたらしく、すぐに否定してくれた。

流石に、小学生相手にそういう行為を行う相手は嵩月自身も嫌だそうだ。

その理由を聞いて、僕自身も非常に納得がいった。

後で操緒に聞いたら、その時の僕は、それはそれは複雑な顔をしていたらしい。

悲しみやら怒りやら嫉妬やらが入り混じって、訳の分からない顔だったそうだ。

まあ、そんなことはどうでもいい。

ただ、なんで呼び出せるのかは当然疑問だった。

そのことを嵩月自身に聞いてもよく分からないらしい。

ただ、体の擬態を解いたとき、左目は緑色になるが、右目はそのままの色だそうだ。

さらに、ドウターを呼び出せるようになったのも、あの飛行機事故の後らしい。

その事を聞いても僕はよく分からなかったけど、僕がいつ戻ってきたのかを聞いた嵩月自身は非常に納得がいったそうだ。

ようするに、今までは契約者である僕の魂がこの世界になかったから召喚できなかった、ということらしい。

そのことが切っ掛けで、嵩月は僕との契約が切れていないということが分かつたらしい。

だけど、それを認識しているのは魂であり、非在化の危険は前回の世界と同じだそう。だから、今の体で悪魔の力を完全に引き出して、非在化の危険を無くすにはもう一回青月と…その…やらなきやいけないらしい…
もちろん、嫌じゃないし、むしろ、僕自身健全な男子学生である訳で…やりたくないと言えば嘘になる…
まあ、今は危険が無いから、追々青月と考えていくということになった。

「ただ、僕にはドウターが呼び出せるということが問題だということ意味がよく分からない。
むしろ、プラスなんじゃないかと思うんだけど…」

「あー、ドウターが問題なんじゃなくて…」

「じゃなくて…?」

「…あの…その…」

何故か非常に言いつらそうにしている青月。

…なんだろう…なんだかすごく嫌な予感がする…

そんな嫌な予感に苛まれながらも、校門を通り過ぎる。

いや、通り過ぎようとした瞬間…

キキーン!!

そんな、甲高いブレーキ音を立てて黒塗りの高級車　でかいメルセデス・ベンツ　が僕たちの前に止まった。

『な、なに？』

操緒はそんな急展開についていけないのか、戸惑っている。ただ、僕にはなんとなく予想がついてしまった。

さっきまでの嵩月の態度、この車、そして…

車から降りてきた二人の男

一人は、頬に傷を持ち、顔が厳つい、いかにもカタギには見えない人物……広域指定悪魔結社『嵩月組』の組長　もとい社長の

嵩月父だ。

もう一人は、顔の左側に大きな傷痕が残る人物……嵩月組若頭の八伎さんだ。

この二人が来たということは…ああ、やっぱりそういうことなのか…

「…親父さんにばれたのか、ドウターのことが…」

「……はい…」

そりゃあ、言いづらいだろうなあ〜

あの親バカの嵩月父が娘に契約者がいると知ったら、どんな反応をするのか想像はいくらでもつく。

しかも、嵩月はまだ中学に入ったばかり、この前までは小学生だったのだ。

僕が嵩月父の立場になっても、同じような反応をするに違いない。

「……………」

僕たちの前に黙って立ちふさがり続ける嵩月父。
無視することも出来ず、ただひたすら、長い沈黙が続く。
操緒の奴はさつさと姿を消して、逃走している。

薄情者……！！

下校しようとする生徒も近寄れず、後ろの方に生徒がたまってきて
いるのが分かる。

もう暫くすれば、教員が様子を見にやってくるだろう。

さすがに、入学したその日にそんな問題児として認識されたくはない。
い。

だから、

「…あの…」

こちらから声をかけた訳だが…

ギロツ！！

一睨みで黙らせられる。

だけど、ここで怯んで止まるわけにはいかない。

僕だけがそう見られるなら良いけど、嵩月までそんな風に三年間見
させるわけにはいかない。

だから、

「…此処にずっといても他の人の邪魔なので、場所を移しませんか
…」

そう二人に提案した。

一瞬、嵩月父が凄まじい形相で僕の方を睨んできたが、

「…お父様…」

僕と嵩月父の間に嵩月が割って入り、逆に父親を睨みつける。

「……………」

その事で、一瞬嵩月父に動揺が走った。

その嵩月父に、八丈さんがこっそり耳打ちをする。

こちらの提案にのって欲しいのだが…

暫くして、八丈さんが嵩月父から離れる。

そうして、嵩月父は一言、

「乗れ」

それだけ言って、自分は車に戻って行った。

嵩月と目を合わせ、自分たちも乗り込むことにする。

そうして、僕と嵩月が乗ったのを確認した運転手が車を発進させた。

? ? ? ?

そうこうしているうちに車は目的地に到着した。

社内の空気は、あまり思い出したくない。

少なくとも、二度と味わいたいものではなかった。

車が到着した場所は嵩月の実家。

『嵩月組』だ。

3回 宣告（前書き）

遅くなってすみません。

しかも、またもやあまり話が進んでいないという顛末。

次で、嵩月組の話は終わりになるはずですので、ご容赦を・・・

3回 宣告

嵩月組に到着した僕たちは、嵩月組の若衆たちに睨まれながら（主に僕と操緒が）屋敷の中へと入って行った。

到着した部屋は和室で、屋敷の中でもかなり奥まったところであり、一般の構成員がいる場所とは明らかに雰囲気も造りも違っていた。その部屋で僕たちを待っていたのは、二人の女性だった。

片方の、女性には前回の世界で会ったことがある。

和服姿で、小柄だけどそれを感じさせないぐらいに背筋がしっかりと伸びている。

以前会った時は凜々しい雰囲気醸し出していたけれど、今は僕のことを値踏みするような視線を僕に向けている。

一度だけだったけど、以前会った時は、操緒と嵩月の体が入れ替わっていて、色々大変だった記憶がある。

その際、僕は彼女の体に意識が移ってしまった

嵩月のお祖母さん

もう一人は、会ったこともない女性だ。

嵩月のお祖母さんと同じで和服姿だが、それほど小柄では無い。

見た目は、『嵩月が成長して大人になったらこんな風になるのではないか？』と思わせる程の美人で、艶やかな黒髪を後頭部で結っている。

そんな彼女は、僕たちが入ってくると、今までは閉じていたであろう目を開き、静かに僕たちの方に視線を向けてきた。

その視線から僕が、何かを感じ取れるわけではない。

ただ、彼女の視線には怒りとも値踏みとも違う、何か別の感情が宿っているようだった。

そんな二人は明らかに上座といえる場所に中央を開け、僕たちから見て左に嵩月祖母、右にその女性が座っており、嵩月父はその二人の間　中央　に腰を下ろした。次いで、八丈さんが僕たちから見て右側、その女性の斜め前に、体を横に向け嵩月父と視線が直角に交わる形で座った。僕たちがどうするべきかと悩んでいると、

「…どうぞ、お座りください」

「『は、はい』」

八丈さんに座るよう促され、若干どもりながらも返事をして、僕たちは嵩月父たちの正面に相対する形で座る。

…もちろん、正座で…

操緒も宙に浮かばず、僕の隣で正座をしている。

本当に足が床についているかどうかは分からないけれど…

僕たちが座ったのを確認した八丈さんが、正面の面々に確認をとる。

「社長」

声をかけられた嵩月父は左右の二人に視線を向ける。

その視線を受けた二人は、それぞれ頷きで了承の意を示す。

それを確認した嵩月父は、

「ああ」

八丈さんに返事をする。

それを受けて八枝さんが続ける。

「それでは…お嬢様…」

「…はい…」

「何故、このような事態になったのか…お分かりですね…？」

八枝さんが嵩月に質問する。

…いや、これは質問ではなく、単なる確認だ。

向こうが聞きたいのはその事実では無く、それに至った経緯、僕からの嵩月への想いと覚悟なのだろうから…

嵩月もそれは分かっているのだろう。

だから、

「…分かります…」

…私と、夏目くんの、契約のこと…」

「そうです」

肯定の返事を返す。

『契約？なんのこと？』

操緒が一人、頭を捻っている。

まあ、こっちの世界の操緒には何も説明をしていないのだから、その反応は当然なのだけれど…

ギロツ！！

そんな操緒に向けられる鋭い視線。

『ひっ、な、なに…？』

自分が見られているとは知らない操緒だが、流石に直接睨まれれば分かるのだろう。

高校時代の操緒では考えられなかったが、流石に怖いようだ。

僕だって、出来ることなら逃げ出したいけど…

嵩月とこのことを認めてもらうためにも逃げるわけにはいかない。

「では、お嬢様…説明していただけますね…」

「……………」

八丈さんに催促されるが、嵩月は俯いて黙ったままだ。

どう説明すればいいのか？

そもそも話して大丈夫なのか？

話すとして、何から話せばいいのか？

そんなことを考えて困ってるんだろうな、と思う。

僕自身は全部話してしまっても構わないんだけど…

それに、説明があまり上手くない嵩月に任せてたら今日が終わっても話が終わらない気もするし…

そう考えると、僕が説明した方が良いような気がする。だから、

「嵩月」

俯いている嵩月に声をかける。

その僕の声に反応して、嵩月が僕の方へと顔を向ける。

「僕が話すよ」

そう言った。

「え、でも……」

「だいじょうぶ」

戸惑いながら、父親たちの方を見る嵩月。

そんな彼女につられて、僕と操緒もそちらの様子を伺う。

「……」

嵩月父は当然良い顔をしていなかった。

寧ろ、憤怒の表情を可能な限り表に出さないような表情をしている。

嵩月祖母は、最初の中から表情に変化が起きていない。

もう一人の女性も、無表情から変化がない。

八丈さんは逆に表情が変わっていて、僕の方を興味深そうなど

こか感心したような表情で見えてきている。

「社長」

八丈さんが嵩月父に確認をとる。

「構わん。」

納得のいく説明を本人からしてもらうのも良いじゃろう」

言外に「出来るものならやってみろ、出来なかったらただじゃ済ま

さん」と示しているような顔をしながら、僕の方を見てくる嵩月父。

「では、話していただきましょうか」

了承も得られたことで、僕に振ってくる八伎さん。

僕も息を大きく吸い、隣と斜め後ろにいる少女たちに声をかける。

「嵩月」

「はい」

「全部話すよ。」

「良いかな？」

「…はい…」

一旦、俯いてしまったが、顔をあげた時にはさっきとは違い、覚悟を秘めた表情で僕の方を見つめてくれた。

僕がこれからするのは、今の嵩月一家の信頼を根本からぶち壊してしまうことだ。

自分が愛情をかけて今まで育てた娘が、生まれた時から人格があったのだと知ったら、必ず親の認識は変わってしまうだろう。

それが、良いことであることは少ない。

それでも、僕は話す。

嵩月本人に了解してもらったのもそのためだ。

「操緒」

『なに？』

操緒は未だよく理解できていないという顔をしながら僕の呼びかけに答えてくれる。

「今から話すのは信じられないことかもしれないけど、全部本当のことだから」

『…いや、いきなりそんなこと言われても何がなんやら…』

「…まあ、信じる、信じないは後にして、とにかく聞いて欲しい」

『うん、分かった』

どこか流されたような気もするけど、まあいいや。

改めて、正面を見据える。

じゃあ、始めよう。

「はじめまして。

嵩月…いや、お嬢さん、奏の契約者の夏目智春といます」

頭を下げつつ自己紹介をする。

操緒は、

『契約者???』

かなり戸惑っているようだが、とくに何も言っていない。

「…奏…」

名前で呼ばれたことに照れているのか、嵩月…奏は真剣な顔にも、

うつすらと赤みが帯びている。

…僕も何だかんだで恥ずかしかったりするのだが…

「僕と奏が契約したのは、僕の主観では大凡1カ月前、奏の主観では大凡12年前のことです」

一応、奏の方に確認の意味を込めて視線を送るが、

「…奏……奏…」

反応してくれない。

…何故か、照れが悪化している気が…

「12年前じゃと…！」

嵩月父は驚きの声をあげている。

他の3人も声には出していないものの、同じように驚きの反応をしている。

それも当然だろう、12年前といえば奏は生まれたばかりだ。

親の目から離れてそんなことが出来る訳も無いし、まだ首も座っていないだろうから行為自体が無理なはずだ。

そんな彼らを見捨てて僕は話しを続ける。

「そもそも、僕と奏は契約する行為をこちらの世界ではしたことがありません。

奏、擬態を解いて…」

そのことを証明するために、奏に擬態を解いてもらおうと思ったのだけ…

「…奏…奏…奏…奏…」

…まだ、どこかに旅立ったままだった。
流石に放ってはおけないので、

「嵩月!！」

「は、はい!!!
って、あれ…?」

前から呼んでいる呼び方で、肩に手をかけて呼びかける。
そのお陰で、戻ってきたけど…

「はあ、ちゃんと聞いといてよ…」

「う、ごめんなさい……」

話が途中から耳に入っていなかったようだ。

「まあ、いいか。」

奏、擬態を解いてくれる…?」

改めて説明をして、お願いする。

「分かりました」

今度はすんなりといき、奏の体に変化する。
左目の色は緑に変わり、右目の色はそのままだが奏の双眸はどちら
も輝いていて、体からは陽炎が立ち上っている。

『うわ、なにになに…!?!』

操緒が驚くのはごく当たり前のことだと思っ。

突然、目の前の人間から陽炎が立ち上るなどあり得ないことなのだから。

「なん、じゃ…!?!?」

「…どっいつこと…?」

「…ほう…」

「……………」

4人ともそれぞれ別々の反応で驚いている。

そりゃそうだろう、ドウターがいて、契約者がいるにもかかわらず、彼女の瞳は片方だけが緑。

そんな馬鹿なことがある筈がないのだから。そんな中で、

「奏、ドウター呼んでみてくれるかな…?」

「僕も会ってみたいから」

僕は決定的な証拠を示すように頼む。

ドウターと契約者、それらが存在するにもかかわらず、嵩月奏は契約していないという矛盾を示す証拠を。

「はい　ペルセフォネ」

彼女がその名を呼ぶと、突然、部屋の中央に炎の魔法陣が描かれ、

燃え上がった。

そうして、その炎が消え去ると、

「キュルルルーーー」

魔法陣は消え去り、代わりに一匹の翼の生えたサラマンダーがいた。そのサラマンダーは、僕の方を見ると、

「キュルル！！」

すぐさま走り寄ってきて、甘えだす。

これは、決定的な証拠だろう。

ドウターが召喚者の奏ではなく僕になつくということは、僕が契約者として間違っていないことを示すのだから。

「.....」

操緒も含めて呆気にとられている5人に向かって宣言する。

「僕たちは、未来から来ました」

4回 認定（前書き）

京都訛って、こんな感じでよかったのでしょうか・・・？

4回 認定

「僕たちは、未来から来ました」

「……………」

僕の言葉に奏が頷く。

「未来、じゃと……!?!」

当然、嵩月父は納得していないようで、怒りの表情をしている。契約の話をごまかそうとしているように思われたのかもしれない。だけど、このことを理解してもらわないと僕たちの話は全て嘘になってしまう。

『へへ、そうなんだ』

こっちはこっちで、簡単に納得している操緒。
怒っている嵩月父よりも、話を理解していないんじゃないかと思える。

『最近トモが前に比べて変だったのはそういうことか……うん、納得』

「いやいや、お前は疑うってことを知らないのか……?」

『じゃあ、嘘なの?』

「そりゃ、こんな場面で嘘は言わないよ。

けどなあ……」

『ならいいでしょ、別に』

信頼されているのか、はたまた馬鹿にされているのか分からないけれど、今の操緒は前者だと思う。

何だかんだ言っても、操緒はこんな場面でふざけるような人間じゃないはずだから。

そんな操緒との会話を切り上げ、膏月組の方々にさっきの言葉の続きを話す。

「はい。」

正確には、前の世界から飛ばされてこの世界の自分と同化し、この世界が自分たちの世界の過去だった、というのが正しいのですが

…」

コクコク

奏もその説明に同意なのか、首を縦に振っている。

とはいえ、それで説明が終わるわけではない。

「……仮にそれが本当だとしましょう。」

ですが、何故その事を私たちに話したのですか…？

本来であればそのことは隠すべきことのはずです。

それに、今その事を話す必要はないと思いますが…」

怒っている膏月父に変わり、飽く迄冷静な八伎さんが僕に聞いてくる。

それはそうだろう、僕も八伎さんの言っていることは正しいと思う。

未来のことを知っている。

つまりは、それだけ自分にとって物事を有利な方向に進めることが可能であるということ。

しかも、その事を知っている人は少ない方が良い。多ければ、その事について対策をたてられたりもするだろうから。

僕自身、今日学校で奏に会わなければ誰にも話すつもりはなかった。たとえ、それが操緒であったとしても…

それでも、話すつもりになった。

それは、

「確かに、今この場で言う話ではないと思います。

奏との馴れ初めは適当にでっちあげて、“想い”の話に持っていければ、契約の不自然さも誤魔化せたとおもいます」

「……………」

八伎さんたちは黙って聞いている。

「だけど、僕は向こうの世界で奏の生涯の契約者になることを誓いました。

その事を、奏に対する“想い”を話すのに、嘘の話を出すわけにはいきません。

そうじゃなければ、向こうで過ごした奏との日々も、僕自身の奏に対しての想いも、何もかもが嘘になってしまう気がしたので…」

そう、僕にとっては、移動してきたばかりのこの世界は、未だに夢なのではないかと思える。

あんな最悪から日常に戻ってきて、しかも、やり直せる機会を得ることが出来た。

そう簡単には信じられない。

そんな中で確実なのは、自分の言うこと、行うことだ。日常会話で、たわいもない冗談として、嘘を言うのは別にかまわない。

だけど、こんな大事な場面で嘘はつけない。

ついたら、その事が事実となって、僕たちを苦しめるような気がするから…

「…夏目くん…」

「キョル…」

奏とペルセフォネが僕の方を見つめてくる。

その視線には 僕の勝手な思い込みかもしれないけど 何物にも代えがたい“想い”があった。

「…分かりました」

八枝さんたちも、一先ず納得したらしく、話の続きを促してきた。

「では、続きを話します」

僕も、話の続きを話し始める。

僕と奏の出会いである、高校の入学式の日の話から始まり、第一生徒会との事件、奏に非在化の兆候が起きるまでに起きた魔力を使う事件の数々、そして、一巡目に飛ばされたこと、その時の契約にまで至った状況や心情、そして、二順目に戻ってくる途中でのこと。

奏の補足説明もありながら、かなり一般に漏らしたら拙いであろう

事も含めて話した。

それでも、隠すべきことは隠して話した。

とくに、僕が一巡目で悪魔化した事を話したら、どうして悪魔が生まれたのかは嵩月家の方々でも知らなかったらしく、かなり驚いていた。

「…これで、僕の話は終わりです」

話が全部終わり、一時の沈黙が訪れる。

それぞれがそれぞれに思うところがあるのだろう。

それなりの時間、僕と奏は待っていた。

待っている間、僕はともかく、奏はかなり不安そうな表情をしていた。

それも当然だと思う、結果がどうであれ、今迄家族を騙していたのだ。

どんな反応が返ってくるか分からない。

それが、一番不安なのだろう。

そんな不安の中、最初に口を開いたのは意外な人物だった。

「…まあ、うちは逆に納得がいったわ」

「…え…？」

その人物とは、この面々の中で最も高齢の人物 嵩月祖母である。

「奏、あんたに最初舞を教えた時の事を覚えとるか…？」

「…いいえ…」

「…あなたはなあ、基本の立ち姿をほんの1時間でやってのけたんや…」

立ち姿って言うとは…

ああ、以前僕がとぼっちりで受けたあの姿勢か…

あの姿勢というより、律都さんに竹刀で叩かれまくったせいですから大変だったけど…

「…あの立ち姿は基本中の基本、それ故に最も極めるのが難しく何年もかかるんや。」

それを極めてはいないとはいえ、一時間やそこらで形に出来るもんやない。

そんなもん、天才だったとしても無理や」

「…それは…」

「けどなあ、さっきの話を聞いて納得がいったんよ。」

元々経験したことがあるんなら、そらできるわ。

体は覚えてなくても、一時間もあれば体がついてくるようになるからなあ」

成程、そりゃあそうだ。

あんな大変な姿勢が一時間で出来たら驚愕するだろう。

それに、高月祖母は高月流炎舞の総師範だ。

だれよりも、すぐその問題に気づけるだろう。

「…それに、契約が終わってるんなら、本来私たちが言うことは何もないんよ。」

やり直しがきくわけやない、一生に一度っきりのもんや。

その事は、奏も分かってるやろ…?」

「はい」

「なら、私からはもう何も言うことはない。

ただ、想いの強さは確かめさせてもらうけどな」

「え？」

あ、あの、お祖母さま…それは、どういつ…?」

「まあ、それは後。

今は、二人の話が先や」

戸惑う奏を余所に、話を終わらせる嵩月祖母。

嵩月祖母が話を振ったのは嵩月父ともう一人の女性。

…そついえば、結局あの女性って誰なんだろう…?

嵩月家、もしくは組の関係者さんなんだろうけど…

「奏」

そんなことを考えていると、その女性が口を開いた。

「はい、お母様」

お母様!?

奏のお母さんって死んだんじゃないの?

あれ、でも、いつ死んだかは聞いてないから、まだ生きてるのが正しいのか…?

でも、見せてもらった中学時代の写真には映っていなかったような…?

そんな困惑を必死に顔に出さないようにしながら、二人の話を聞く。

「それが、あなたの選択なのね…?」

「…はい…」

嵩月母は操緒と僕の方を見ながら言葉を続ける。

「きつと、たくさん辛い思いをすることになるわよ。

それでもいいの…?」

「…はい、だいじょうぶ、です。

夏目くんと、一緒なら…」

奏の答えを聞いてから、ジッと奏の目を見つめる嵩月母。奏もそんな彼女の視線に怯むことなく母の目を見つめ返す。しばらく、そんな沈黙が続く、

「…良いわ、認めます。

その代わり…夏目くんだったかしら…?」

「は、はい」

いきなり、声を掛けられ、戸惑いながらも返事を返す僕。

「奏を不幸にしたら承知しませんからね」

そんな僕にそう告げてくる嵩月母。

「はい、勿論です」

そう答えを返す僕。

そんな当たり前の事は今更言われなくても分かっている。

僕が、奏にすてられない限り僕は奏の事を忘れるつもりは更々ないし、その事で不幸にするつもりもない。

…あれ、よく考えてみれば中学1年生で既に人生の伴侶が決まりつつあるというすごい状況に…

しかも、僕の方の親族の承諾は一切なし。

いいのかなあ、と思うけど不満があるわけでもないし僕自身問題はない。

それに、あの母親が奏の事を反対するとは到底思えない。

むしろ、大歓迎だろうな…

そんなことを考え、最後に残った嵩月父の方に視線を向ける。

自分の両側二人が既に僕たちの関係を認めてしまった。

親として、嵩月組組長としては納得しているのだろう。

だが、個人としては認められない。

そんな感情が明らかに見受けられる。

あれ？でも、嵩月父の奏に対する執着は奥さんを失ったことによるものはずだから、そこまで酷くないはず。

僕がそう思った瞬間だった。

「認めん」

そう、嵩月父が言葉を発したのは。

「絶対に、認めん」

「あなた…」

「この子は…」

自分の両側で妻と母親に呆れられながらも言葉を続ける青月父。

「今までの話が本当だろうと、嘘だろうとそんなことはどうでもいい」

いや、どうでもよくはないのですけど…

「お父様…」

奏にも若干の苛立ちが見受けられる。

さっきまでの自分たちの想いを否定されたのだから当然良い気はないだろう。
僕もそうだ。

「わしが知りたいのは、お前に奏を任せても大丈夫かどうかということじゃ。」

さっきまでの話が本当なら、今後危険に身を投じていく可能性は高い。

そんな中でお前は護りきれえるのか…？」

『意外と考えてたんだこの人』

操緒が若干失礼なことを言っているが、僕もその事についてはおおむね同意だ。

「それが確認出来んうちは、お前に奏は預けられん」

「お父様…」

まあ、父親としては正しいのだろう。

だけど、今の僕には何も戦力といえるものがない。

アスラ・マキーナは持っていないし、悪魔の力も消えている。なら、どうすればいいのか？

橘高道場にでも通ってひたすら強くなればいいのか？

それこそ、生身でアスラ・マキーナと渡り合えるぐらいに…

だけど、そんなのはいつになるかも分からないし…

ああ、どうすりゃいいんだ…!？

「なら、ちょうどいいわ」

僕が困っている最中に突然高月祖母が言葉を発した。

「何がですか？」

これ幸いと、そんな彼女の言葉に飛び付く僕。

…自分でも情けないとは思っけど、背に腹は代えられない。頼れるなら頼るぞ。

「さっき、想いを確かめると言ったやろ…?」

「はい」

「せやから、戦ってもらっわ」

「『は?』」

その場にいた八伎さん以外の全員が呆気にとられた。
いや、戦うって誰と誰が？

そもそも、何で？

全員の疑問は分かっているのか、嵩月祖母は言葉を続ける。

「悪魔と契約者の想いの証であるドウター。

それがどれだけ力を発揮できるのか。

全員の視線が僕にすり寄っているペルセフォネに集まる。

もし、想いが薄いもんならドウターは弱いまんまや。

せやけど、その想いが確かなもんならドウターはより強い力を発揮できるやろ」

「はい、だけどそれとさっきまでの言葉が繋がる意味が分からないんですけど…？」

「なに、当面あんた自身に戦力はないやろ。

けどな、ドウターが護り、ドウターを扱うのは誰でもない契約者や。

せやから、ドウターが戦って、その結果があんたの強さってことになる。

そして、それはそのまま想いの強さにもつながる」

「…まあ、分かりましたけど……戦うって誰と…？」

あらかたの疑問は解消されたんだけど、一番の疑問がそれだ。

「ああ、それなら…八伎」

「はい」

その指示のもと八丈さんが動き出した。

そうして、30分後には、僕と奏と操緒それにペルセフォネは嵩月組の庭にいた。

嵩月組の方々は攻撃がそうそうとどこかない所で待機している。

因みに、反対していた嵩月父は、嵩月祖母と嵩月母の口撃により沈黙させられていた。

…なんとなく同情を覚えなわけでもないけど…今の僕はそんなことを考えていられるほど暇ではない。

既に、目の前には大量の黒服さん。

嵩月組とは主従関係にあり、今回は京都からわざわざ嵩月祖母を護衛してきてくださった悪魔の方々だそうだ。

これから、彼らと戦わなければいけないんだけど、正直ドウターを使って戦ったことなんてないので、どうすればいいのか全く分からない。

因みに、今回基本はドウターが戦い、奏は戦わない予定だ。

まあ、よっぽど危険なら戦っても良いと言われているけど…

「では…」

「ちょ、待つ…」

「…始め!」

そんな事を考えているうちに、いつの間にか開始の合図が嵩月祖母の口から発せられる。

その声が発せられたと同時に、目の前の黒服さんたちは一斉に動き出す。

その数、総勢20人ほど。

そんな彼らが一斉に僕たちに向かってくる。

しょうがない、ここまで来たらやるしかない！！

「ペルセフォネ！！」

そんな僕の言葉に反応して動きだすドウター。

僕と奏を背に乗せ、一気に空中に飛び上がる。

そしてそのまま口から地獄の業火を吐き、地上の黒服さんたちに攻撃する。

だけど、相手だってそんな攻撃に当たりたいわけではない。

すぐさま散開し、炎を避ける。

そうして、散開すると同時に空中にいる僕たちに向かって攻撃を仕掛けてくる。

青月組の配下の悪魔だから、炎を使うものだと思っていたら違っていて、彼らが放ってきたのは土。

「なっ！！」

足元の土を弾丸として放ってきた。

その弾丸を避け、時には炎で迎撃し、更に上空から炎の雨を降らせる。

だが、相手もさるもの、土を隆起させ壁にして炎を防ぐ。

そして、その隆起した土をそのまま土の弾丸へと変化させ、時には土の槍にしてこちらに飛ばしてくる。

こちらも、そうそう当たるわけではないが、いかんせん数が多い。

土を迎撃し、そのまま炎の壁を地面に奔らせる。

そうして、逃げ場をなくし、その中に雨霰と炎を降らせる。

だがそれも、数人がかりの土のドームで防がれる。それでも、数人は倒すことが出来た。そんな中、

「あつ！」

土の飛礫がこちらに向かって飛んでくる。先程までとは数が違い、けた外れに多い。ペルセフォネは捌ききれず、数発攻撃を受けてしまう。

「キュルラー！！！」

「だいじょぶか！？」

僕の問いに頷くようにして答えるペルセフォネ。

「あの、夏目くん……」

「なに？」

「下に降りましょう。」

…その、ペルセフォネも、そろそろ……」

「ああ、そうだね」

確かに、ペルセフォネも炎を吐き、飛び回り疲れていないはずがない。

そこに、先程の飛礫。

確かにそろそろ限界だろう。

「よし、 ペルセフォネ!!」

タイミングを見計らい、地上に炎を降らせると同時に、自分たちも降下して地上に降り立つ。

当然、相手も狙ってくるが、そこは着地と同時に作らせた炎の壁で防ぐ。

実体はない炎だけでも、ペルセフォネが作り出した炎の壁の色は白。かなりの高温だ。

瞬時に土を焼きつくしていく。

だが、僕自身も熱いため、そうそう長くは続けられない。

壁の炎を相手に向けて解き放つ。

そうして、その相手の怯んだ瞬間に、次の手をうとうとした瞬間、

フワリ

と、風が僕の横を通った気がした。

「って、奏!!」

なんで!?!」

僕の横を通ったのは、さっきまで僕の後ろにいたはずの奏だった。

僕の叫びを無視して、奏は黒服さんたちに攻撃していく。

炎が舞い、土が飛び交う。

僕たちの目の前では、一方的な攻撃が行われていた。

黒服さんたちが放つ攻撃は、奏が纏っている炎に防がれてほとんど通っていない。

逆に、奏の攻撃は防がれても実体がないため、何割かは素通りして通っていく。

勿論、奏も傷つけないように抑えているのだからけど…
それでも、熱にやられて倒れていく黒服さん達。
僕とペルセフォネは、自分たちに飛んでくる攻撃と奏に当たりそう
な攻撃を炎で消し去りながら、ただ見ているだけだった。

結局、僅か2分で戦闘は終了し、嵩月祖母と嵩月父にはなんとか認
められた。

ペルセフォネを僕がちゃんと使えており、そのペルセフォネの力も
確認出来たからだそうだ。

ただ、戦闘を認められたせいで、嵩月家の方々や八伎さんからは

「婿殿」

と呼ばれ、嵩月組の方々には、

「若」

などと呼ばれるようになってしまった。

確かに、奏とそういう関係として認められたから分かるんだけど…

皆、気が早くないですか…!?

操緒は操緒で、

『まあ、暫く見てから私は決める』

なんて言って、不機嫌になるし…

僕の中学生活…どうなるの…!?

4回 認定（後書き）

次回から学校生活に移る予定です。

5回 逡巡（前書き）

大体一カ月ぶりの更新です。

遅くなってすみません。

祝、PV15000、ユニーク3000突破

こんな作品をたくさんの方々が読んでくださり、とてもうれしいです。

ありがとうございます

今後は可能な限り早く書いていきます。

5回 逡巡

「おはよう、青月」

「…あ、おはようございます。」

夏目くん

朝の通学路で、いつものように奏と合流して学校に向かう。

「水無神さんも、おはようございます」

『うん、おはよう、青月さん』

見えない操緒に奏があいさつをしているのも、いつもの朝の光景だ。操緒のほうには、まだ少しきこちなさが残っているけれど、それも暫くすれば消えるだろう。

「じゃあ、行こうか。」

遅刻するってことはないだろうけど、何があるか分からないしね」

「はい」

そう言って、学校に向けて歩き出す僕と奏。

それに浮かんで憑いて来る操緒。

何だか、中学時代に戻ったというよりは、高校入学したての頃に戻ったような気分だ。

入学して早1週間

僕自身、一度中学時代を経験していたということや、奏のフォロームもあって、僕が【幽霊憑き】という噂はまだ流れてはいない。寧ろ、奏と一緒に過ごしている時間が多いせいかな、

「何で嵩月さんがあんな奴に…!!」

とか

「嵩月さんに近づくな…!!」

などの嫉妬の視線や話題が多い。

まだ入学して1週間だというのに、気の早いことである。僕個人としては、

『僕たちの事を何も知らないくせに何を勝手な…!!』

と、思うところもあるが、基本は反応しないようにしている。

一々反応していたらきりがないことは（奏が美少女であるということから）分かっているし、奏の悪評ではなく、僕の悪評ばかり言われているということも理由の一つである。

奏の悪評が聞こえてきたら、僕はそんなことを言っていた奴を絶対に許さないだろう。

…ああ、でも一人…いや二人か…既に奏、というか嵩月の家の事を散々に言ってる人がいたな…

そんな、彼ら兄妹の事を思い出しながら今日も通学路を学校に向かって歩き出す。

「…まったく、あの二人がいなけりゃここまで必死に隠さなくても良いのに…」

つい、口から愚痴がこぼれてしまう。

『しょうがないよ、ばれたら困るんでしょ…?』

「…私も、そう思います、けど…」

奏と操緒の二人が同時に僕の愚痴に返事を返してくる。

「うーん、というかあの二人は僕が演操者だハンドラーって知ってるのか…?」

そう、それが一番の疑問。

僕が演操者だと知っているのなら、奏との仲をどうにかしようとするのは、まだ以前の世界で理由を聞いているから納得できる。

だけど、知らないんだったら、口頭注意ぐらいで終わるんじゃないだろうか…?

まあ、どっちにしてもうるさいのに変わりはないんだけど…

そんなことを考え、奏と（たまに、操緒にも周囲には分からないように）話しながら学校へ向かう。

そうして学校に到着し、向かった教室には、

「うげ」

『ありゃー』

「うー」

さっきまで話題に出ていた兄妹の妹の方がいた。

僕たちのクラスにいる友人と話に来ていたようだ。

口から出ていた言葉は瞬時に引っ込める。

耳聡い彼女の事だから、無駄かもしれないけれど…

極力彼女に見つからないように、自分たちの席へと向かう。

まだ入学した時のままの席だったため、僕と奏の席は前後している。だから、二人して向かう先は同じであり特別おかしなことがあるわけではないんだけれど…

ギンツ

僕たちはとっくに見つかっていたらしく、彼女は僕らを睨みつけてくる。

だけど、高校時代の彼女に比べればまだ幼さが残っているため、以前よりも恐怖心は少ない。

といっても、あくまで以前よりはというだけの事であり、相変わらず僕は彼女の事が苦手だ。

彼女 佐伯 玲子 は家が法王庁の系譜であるということもあってか、悪魔である奏に対して良い感情を持っていない。

それでも、高校時代はクラスメイトとして過ごしてきた時間のおかげか多少はマシになっていたような気がする。

だけど、今はその時間がほぼゼロだ。

それに加えて、前の世界では中学一年の時は同じクラスだったはずなのだが、奏が加わったことによって変わってしまったのか佐伯は別のクラスだ。

この一年では、ほぼ挽回する機会はないだろうと思う。

それと、以前の世界では知らなかったのだが、僕たちが混ざり込んでせいで変わった事なのか、元々この通りだったのかは分からないけど、佐伯の兄の方である佐伯玲士郎も同じ中学にいるのだ。

その事が、さらに僕と奏での仲を隠さなければいけない事に拍車を

かけた。

まあ、隠すということをしなさいといけないということに対しては、今の奏の状態は出来過ぎなぐらいに都合がよかった。

擬態を解いたとしても片目が緑になるだけなので、ドウターを呼び出したりすることがなければ、既に契約しているということは分からないはずだ。

まあ、色々考えたけど、僕たちが通っている中学はごく普通の中学なので、洛芦和高校のように生徒会がいくつも存在するなどというおかしな状況は起きていないし、生徒会が生徒個人に対して権力を行使するということも無い。

だから、中学で何か起きるとは考えにくいんだけど…

『うわー、見てる見てる…いや、睨んでる…?』

「あそこまで、分かりやすいとなー」

「……………」

今の佐伯の様子を見てると中学にいる間に何か起きるんじゃないだろうかという不安がある。

操緒は佐伯に見えない事を良い事に言いたい放題だし、僕と奏は言う訳にもいかないので苦笑するしかない。

これが、普通の喧嘩が原因だったりすれば周囲にいざというとき説明も出来るんだけど…事情が事情だけに説明できるわけもない。

まあ、これが洛高だったら特別隔離クラスだろうからいざとなればどうとでも出来たんだろうけど。

「まあ、いいや」

とりあえず、暫くは耐えなきゃいけないんだからいつまでも気にし

てたらきりが無い。

佐伯兄妹のことも重要だけど、今の僕には現実問題としてわりと切羽詰まった問題がある。

『それでトモ、部活どうするの…？』

「陸上部、入るんですか…？」

操緒と奏が聞いてくる。

そう、僕の現状問題は…部活をやるかやらないかということだ。

「…まだ決まらない…」

『え〜、いい加減決めないと駄目だよ。』

時間は無限じゃないんだよ…！』

「でも…そろそろ、決めないと…」

「しょうがないじゃないか…どっちも大事なんだから…！！」

『そりゃそうなのかもしれないけどさ〜』

「むー」

操緒は実感が無いだろうから半ば呆れたように言ってくるし、奏は分かっているからか真剣な表情をして悩んでくれている。

僕たちが一巡目の世界に飛ばされた原因、あの悲劇の黒幕
？塔
貴也

彼を放っておくことは僕には出来ない。

彼が行動を起こさなければ、朱湮さんが死ぬことも無かったし、紫湮さんの魂が消滅することも無かっただろう。

それに、環緒さん　一巡目の操緒　が危険にさらされることも無かっただろう。

だから、僕は部長　？塔貴也　をとめる。

それは可能な限り早い方が良いでしょう。

だから、洛高に入学　受験に落ちるかどうかはこの際考えない
する前に部長には会っておきたい。

そうになると、橘高道場に通うようにするのが一番確実だろうと思う。
秋希さんがいつベリアル・ドールになったのか分からないから、可能な限り近くにいて、防げるようにしておきたい。

それに、？鐵を呼びだせなかった時の僕はとても分かりやすいほど、足手纏いだった。(？鐵を呼び出しても駄目な時は駄目だったけど)

だから、自分でもある程度戦えるようにはなっておきたいという願望もある。

アスラ・マキーナを使っていた人たちは、アスラ・マキーナがなくても強かった。

冬琉会長　エクス・ハンドラー元演操者だった事を考えて　は言うに及ばず、六夏会長の二丁拳銃に、佐伯会長のサーベル、瑤さんの剣、それぞれがその分野でもかなりの実力を持った人たちばかり。

そんな、人たちの様になれるとは思ってないし、朱湮さんみたいなフェミニナ・エクス・マキーナ機巧化人間のような人になろうとも思わない。

だけど、自分で自分を、奏や操緒を守る強さは欲しいと思うのだ。そう考えると、橘高道場に通うのが一番良い事なのは自分でも分かっている。

だけど、僕は以前の世界で得た友人たちを失いたくない。

杏や樋口、それに吉田先輩を筆頭とした陸上部の友人たち。

幽霊憑きといわれて皆から避けられていた僕にも変わらず接してくれた彼ら。

皆がいたから僕は今の僕になれているんだと思う。

もしも、皆がいなくて　まあ、樋口は僕が幽霊憑きだから友人になつただけだ　操緒だけだつたら、どうなつていたのか分からない。

それに…杏の家の酒屋でバイトとして雇ってもらえていたのも大きい。

あれがなかったら…ああ、考えたくない…！！

だから、僕はどうするべきなのか決められない。

操緒は友人を大事にするべきだと言っていた。

奏は未来を知っているからか、控えめではあつたけど橋高道場に通つた方がいいと言ってきた。

僕自身、どうしなければいけないのか頭では分かっている。

分かつてはいるんだけど、感情はそれを良しとしない。

入学して1週間…そろそろ決めるべきなんだろうな…

6回 原動力(前書き)

またもや遅くなつてすみません。

今回、かなり甘くなつてしまいました。

自分自身、キャラがおかしくなつたと思つていますがそれでもいいという方はどうぞお読みください。

あとがきで、割と重要なアンケートを行いますので可能なら、お返事いただけると助かります。

6回 原動力

奏と操緒、それに、クラスの友人たち（何故か男子よりも女子の友人の方が多い）と話しながらHRまで過していると、

「たのもー」

という大きな声とともに、一人の少年が教室にやってきた。

当然クラスメイトたちの視線はそちらへと向けられる。

だが、その少年はそんな視線を気負いもせずに入ってきて、そのまま、

「夏目智春っているかー？」

などと喋り出した。

当然、彼に注目していたクラスメイトの視線が僕の方へと集中する。僕を呼んだのは、それなりに二枚目の容姿で、日本人とは考えにくい色素の薄い髪を頭に生やした少年だった。

「……………」

その少年を見て…というよりも声を聞いてから…突然の事だったため、僕は呆気にとられてしまいすぐに返事を返せなかった。

『トモ？』

不思議そうな顔で操緒が僕に声をかけてくる。

その隣では 非常に分かりにくいけれど 奏が僕ほどではないけれど困惑の表情を見せていた。

それもそのはずで、僕を指名したのは、

「…樋口…？」

「なんで…？」

いや、確かにあいつは同じ中学だったから来てもおかしくはないんだけど…

でも、あいつが僕と話すようになったのは、大体中1半ばぐらいからだったはずだ。

それに、あいつが僕と話しに来た理由が全くもって分からない。

自分の興味がないことには、あまり活動意欲を示さないのが樋口だ。今の僕には、あいつの活動理由　オカルト関係　は無い様に過しているから、なおの事あいつがわざわざ僕のところに来てきたことが分からない。

…まあ、向こうから来てくれたんだ、良しとしよう。

「…あれ？俺名前言ったっけ…？」

まあ、いいや。

「お前が、夏目智春だよな…？」

僕の言葉が聞こえたのか、多少頭を捻りながら樋口が僕の席に近づいてきた。

因みに僕が自分から名乗ったわけでは無い。

教室中の視線が一瞬僕に向いたのだから、よっぽどの馬鹿でもない限りそりや分るだろう。

「ああ、確かに僕が夏目智春だけど…何の用…？」

若干、疑惑の意味も込めた視線を樋口に向ける。

因みに、奏は黙って事の成り行きを見守っており、操緒は樋口に見

えないのを良い事に樋口の前に浮かんで顔芸やらをして自分でそれを笑っていた。

当然樋口は気付かずに、僕の方を見て話を進める。

「いやー、あんたに聞きたいことがあってさ」

「聞きたいこと…?」

怪訝そうな顔をして、奏と顔を合わせる。

奏も 非常に分かりにくいのは今更言うまでも無いが 僕と同じような怪訝顔だ。

まさか、操緒の事がばれたりしたのだろうか…!?

樋口の情報網はそれなりに侮りがたいものがある。

高校の入学式の日の朝には、既に朱湮さんの所在を突き止めていたことからそれが分かる。

だけど、本当の裏の世界の情報は何だかんだで樋口には流れていなかった。

だから、安心していただけ…

まさか、こんなに早くばれたのか…!?

「そう、それだよ…!」

だが、僕の焦りとは裏腹に樋口の声は明るかった。

「…は…?」

僕と奏は二人揃って呆気にとられた。

今こいつは、何と言った…?

> 「そう、それだよ…!!」 <

意味が全くもって分からない。

「だから、夏目と嵩月だよ…!!」

僕たち二人を指さしながら樋口は言葉を続ける。

「夏目みたいに、どこがいいとはつきり言えない。

よく言っただとしても中の上ぐらいの男子と。

嵩月みたいな上の上プラス特上の女子がどうしてそんなに仲がいいのか…!？」

「いや…どうしてって…」

あまりに咄嗟の事だったので、頭がついていかない。

それでも、次の樋口の言葉で半ば強制的に自覚させられることになった。

「俺も気になって調べてみたんだが、二人は小学校も違うし、その小学校で何か交流があったわけでもない。

それに、家族同士の繋がりがあつたわけでもない。

二人の小学校時代の知り合いに話を聞いてみても、そんな人物は見たことがないという。

どう考えても、二人が出会った形跡はなかった」

ギクリ!!

完全に不意打ちだったせいか、全く心の準備ができていなかった。そのせいか、僕と奏の背に何か嫌なものが奔った。

そんな僕ら二人の様子に気づいているのかいないのか分からないが、樋口はそのまま言葉を続ける。

「なのに、入学式の日に教室で出会った瞬間に抱き合っわ、意味深な言葉で話し始めるわ…」

ダラダラダラダラダラ

冷や汗がすごい事になっている。

顔にまで出ていないのがせめてもの救いだろうか…

「さて」

急に語り口調から、一転してこちらに話しかけてくる樋口。
さらにこわばる僕と奏の顔。

「俺としては、これ程の不思議も珍しくてな…」

なんてこった…!!

操緒との事からじゃなくて、奏とことから樋口がよってくるなんて思いもしなかった…!!

だけど、朱涅さんの事例もあるように、樋口はオカルト関係だけじゃなく、美人や美少女にも興味があつたんだ…!!

だけど、なにもこんな目立つ場所で質問しなくても…!!

「…聞かせてくれるよな…?」

そう言った樋口の姿が、僕と奏にはとても恐ろしいものに思えた。

? ? ? ?

「…ふう…」

『あははは、トモ、お疲れ』

「むー…」

その後、樋口に質問攻めにされていた。

周囲の人間は全く助けにくれず、寧ろ、自分たちも知りたいのか樋口と一緒にあって質問してきた、その質問の内容でさらに佐伯の視線が厳しいものへと変化していった。

それでも、何とか全部誤魔化し、納得していない様子が多々見られたけれど、下校時間にこぎつけた。

HRが終わるやいなや、僕と奏は樋口率いる【智春& amp ;奏赤裸々隊】（命名操緒）に捕まらないように教室から飛び出した。

そのまま下駄箱に辿り着き、靴を履き替え、全速力で学校から離れていった。

そうして、ある程度離れて追いかけてこない事を確認すると、普通のペースで歩きだした。

そして、現在近くの公園のベンチに座って話している。

因みに、奏はただ今ものすごく不機嫌である。

理由は、質問内容が色々まずかったからだと思う。
その内容としては、

？なんで夏目みたいな普通の男子と、嵩月さんみたいな可愛い女子が云々？

？嵩月さんなら、夏目なんかじゃなくても云々？

等々。

周囲から見れば、基本奏と僕は釣り合わないように見えるのだろう。そんなことは言われなくても分かっているのだが、奏は僕が低く見られるのが嫌だったようなのだ。

それだけ想われているのだから、嬉しいんだけど、僕自身としてはあまり気にし過ぎて欲しくは無い。

どうせこれからも言われ続けるのだろうから、ある程度開き直った方がいい様な気もするのだ。

それに加えて、僕と奏での仲も当然聞かれた。

自分でも苦しい言い訳だった。その際の強引な言い訳が奏の不機嫌の理由の一つでもあると思う。と思うけど、とにかく付き合っていない事だけは押し通した。

大半は当然信じていなかったが、操緒の事を知っている同級生も何人かいたので彼らが止めてくれた。

こんな事に自分が役に立ったのが、操緒は不満そうだったけれど…

「ねえ、嵩月」

「……………」

「いいじゃない、僕らの事がどんなふうに言われても」

「……………よく、ないです……………」

「どっしり…？」

「…だって、夏目くんが、否定された、みたいで…」

ああ、そっか。

奏から見たら、僕はかなりいい風に見えるんだろう。
でも、そんなことはない。

「…僕は、あれで正しいと思ってるよ。」

…実際、今の僕は周囲の評価通りの人間だと思う」

「そんなことないです…!!！」

普段の生活では珍しく声を荒げる奏。

操緒は黙って見守っている。

「夏目くんは、夏目くんは…!!！」

段々と、奏の興奮の度合いが加速していく。

流石にこのままじゃまずい。

段々と奏の周りの空気が変わりだしている。

とにかく宥めないといけない。

その前にまず、周囲に人がいないのを確認する。

今の奏を宥めるには、表向きの関係じゃ駄目だから。

「操緒、頼む」

『オツケー』

何だかんだで付き合いの長い操緒はすぐに周囲の状況を確認してきてくれる。

『誰もいないよ』

「ありがとう」

その確認も終わり、再び奏に向き合い、そつと奏を抱きしめる。

「あ…」

興奮していた奏も、咄嗟の事に驚き言葉が止まる。
そんな彼女に僕は言葉をかける。

「奏、ありがとう。」

その気持ちはとつても嬉しい。

だけど、今の僕にはその言葉は相応しくない」

「そんな、こと…」

「違うよ、今の僕は頼りないままだ。」

奏やペルセフォネに護られているだけのしがない中学生」

次第に奏の雰囲気に戻っていく。

それを感じ取りながら、言葉を続けていく。

「だから今日の僕たちの言葉は、間違っていないけど間違ってるし、正しくないけど正しいんだ」

「どういう、こと…ですか…？」

「間違ってるのは僕と奏の関係。」

友達じゃなくて、恋人、もしくは契約者とか婚約者」

言ってる顔が熱くなるけど気にせず言葉を続ける。

「はい」

奏も頬を朱に染めながら答えてくれる。

…というか、その返事は普段からは考えられないほど速かったんですが…

「正しいのは、僕自身が奏に釣り合っていないこと。

これは、奏がどう考えてたとしても、僕はそう思ってる」

「……………」

『うんうん、トモはまだまだヘタレだよ。

自覚するようになったってことは、かなりマシになったんだろっけど…』

そこにいるさかい

「だから、奏のその気持ちは僕がその気持ちにふさわしくなれるまで、奏に護られてばかりの男じゃなくなるまで取っておいてくれなかな…」

「それって、高校まで…?」

ある意味当然の確認だろうけど、今回はその答えじゃないんだ。

「違うよ。」

ひょっとしたら、高校までになれるかもしれないし、高校に入学しても無理かもしれない」

まあ、高校入学までは流石に無理だと思うけど。

「じゃあ、いつに、なったら…?」

「とりあえず、秋希さんか、冬琉会長に合格を貰ってからかな…」

「…え?」

そう、僕は決めたんだ。

友達も確かに大事だ。

だけど、それは僕の努力次第で変わるはず。

なら、今は力を優先しよう。

奏と並んで歩いて行けるような力。

その事を自覚させてくれたのが、皮肉にもさっきまでの樋口だったりする。

「だから、それまでその気持ちは待ってくれるかな…: 奏」

「…はい」

そう言って、彼女は笑った。

その笑みは今迄に見たことがないほど綺麗で、印象的で、僕の網膜に焼きついていてた。

そうだ、この子のこんな笑顔が護れるぐらいに強くなってやる。

そう、誓いを新たに僕は進む。

「奏」

「智春くん」

互いの顔、前髪、眉、眼、鼻、頬、そして、唇が目に入る。

次第に、二人の顔の距離が狭まっていく。

そうして、僕と奏での距離は零になり、僕の唇には暖かいものが触れていた。

6回 原動力(後書き)

現在、智春のアスラ・マキーナをどうしようか迷っています。

1：黒鐵

2：黒鐵・改

3：まさかの鋼

4：その他のアスラ・マキーナ

—先ず皆さんの意見をお書きください。

それをもとにして一度シナリオを考えてみたいと思います。
ご協力お願いします。

P・S：いざとなれば、タイトルも変えます。

7回 地獄の始まり（前書き）

今回は、智春の視点、第三者の視点、秋希の視点の三つの視点から書いてみました。

多少、違和感を感じられると思いますがあまり気になさらないでください。

今後も所々で入ってくる可能性があります。

アンケートの期限ですが、第10回辺りまでとさせていただきます。その辺りに来たら、また知らせます。

7回 地獄の始まり

樋口達から質問を受けるようになった週の週末、僕は橋高道場の前にいた。

先日決めた事を実行に移すためだ。

…因みに、樋口達からの質問は学校では継続して行われていたが、初日と同じような回答を続けて誤魔化している。

奏もその受け答えで特に機嫌が悪くなるようなことも無くなった。

…僕の気持ちを尊重してくれたのか特に何か言うことも無くなったけど、やはり自身が思っている事とは違うからか、時折複雑そうな顔を僕に見せている。

それさえも、可愛いとってしまうようになった僕はそろそろやばいんじゃないかと思わなくも無いけれど…

まあ、そんなこんなで終わった一週間を思い出しながら僕は未だに橋高道場の門を叩けないでいた。

『どうしたの、トモ…?』

不審に思ったのか操緒が声をかけてくる。

「いや…」

『なあにい〜、嵩月さんが一緒じゃないと結局無理なの…?』

やっぱりトモはどこまでいってもトモだね…』

笑いながら話しかけてくる操緒を見ていて否定の言葉が出そうになるが、

「……………はあ」

結局溜息に終わる。

もしかして、操緒の言う通りなのだろうか…？
それだとかかなり不安なのだけれど…

因みに、今日は奏は一緒では無い。

これは、僕自身が強くなるための事なのだ。

それに奏を付き合わせているわけにはいかない。

代わりとっては何だけど、奏はお祖母さんと律都さんから炎舞の特訓を受けている。

…それはもう、かなり過酷な内容のようだ。

お祖母さんと律都さんから、その特訓の内容を聞いた奏は泣きそうになっていたのである。

…あんな風に、明らかに僕に助けの視線を向けてくる奏はかなり珍しかったし助けてあげたかったけれど、無理だと分かってしまった。

…奏の後ろから僕らの方を見ている二人の雌型悪魔 嵩月祖母と
潮泉律都、そのどちらもがとても綺麗な顔で嗤いながら僕らの方を見ていたから。

さらにその後ろでは、恐らく止めようとしたであろう嵩月父と嵩月組のみなさんが黒こげになったり、虚ろな表情をしたりしながら嵩月母から説教を受けているのを見てしまったから。

八丈さんは、数人の部下と思われる人たちと一緒に気絶している人たちの手当をしていた。

…大丈夫なんだろうかこの家は、とつい思ってしまった…

そんなこんなで、奏は奏で今頃過酷な修練をしているはずだ。

だから、僕も頑張らなきゃいけないんだけど…

『ほら…!』

中々、そのための一歩が踏み出せないでいる。
操緒が急かしてくるが、そうそう簡単にはいかないわけで…

『もー』

操緒にも呆れられている。

だけど、僕としても言いたいことはある。

どうしても、前の世界の部長と冬琉会長にされたことが頭から離れないんだ。

勿論、この世界ではそんなことはされていないし、これからもさせるつもりは無い。

それでも、

「……………」

足は前に進んでくれない。

操緒もあまり気が長い方では無いから、そのうち、

『今日は止めて明日にする…?』

なんて言葉も口から出てくることになるだろう。

そんな事態になるのは、僕としても避けたい。

だけど、このままじゃ本当にそうなってしまつかも…

操緒もそろそろ、不機嫌になりつつあるし…

ええい、ままよ…!…!

と、思つて手を橘高家の門に伸ばした瞬間、

ギィィィ

という音がして、内側から門が開き始めた。
咄嗟に手を基の位置に引つ込める。

マ、マズイ…!!

突然の事だったから全く心の準備ができていない…!!
秋希さんでも、冬琉会長でも、部長でも、誰に出て来られても今は
まずい!!
とはいえ、僕がいくら焦つても門が開くことは止まらないわけで…

「…えーと…?
どちら様…?」

『あはは…』

結局出てきた冬琉会長に遭遇してしまった。

? ? ? ?

智春が橘高道場の前で色々悩んでいた頃、嵩月組では…

「そこは違つてしょ、捌くんじゃなくてしっかり避けなさい…!」

「は、はい」

「違う!!」

今度は捌くの!!

しっかり見極めてから行動しなさい!!

「はいいい!!」

やら、

「はあ、はあ、はあ…」

「なんや、もうへばったんかいな…」

こんなんで鳳島の小娘に勝てると思つてるんかあ!!?

「お、思つてない、です!!」

「ふん、そないなふうには見えへんわ。」

勝ちたいんなら、もっときばらんかいいい!!

「はい!!」

等々の言葉が飛び交っていた。

場所は変つて嵩月組本宅内

「…大丈夫かいのう」

「あなた…」

「わ、分かっとなるわい」

心配して見に行きそうになっている社長は妻に止められていた。

…ちなみに、凡そ三分ごとにこんな会話が飛び交っている。

修練を行っていくにあたり、嵩月父及び嵩月組の構成員の出入りは禁止された。

修練の邪魔になるだろうからというのが大きな理由である。

実際、今の嵩月組の様子を見てみると一概に否定も出来ない。

社長はあんなだし、構成員も一部を除いてかなり気持が修練に向いているのが分かる。

こんな面々がいても、修練に集中できないだろうし、仮に出来たとしても結局何だかんだで邪魔されそうな気がする…

更に、そんな面々を社長に代わって統括するべき若頭の八伎はとうと…

「美味しいですか…?」

「キュルル…!!」

「そうですね、それは良かったです」

「キュルル…?」

「私ですか…?」

「キュルウ」

「大丈夫です。」

後でしっかり食べますから、あなたは今の分をしっかり食べてく

ださい」

「キユウー」

「ははは、慌てなくても大丈夫ですよ」

組の一角でペルセフォネに餌を与えていたりする。

しかも、何故か会話も成り立っている。

因みに、餌やりなんぞ下っ端にやらせておけばいいという考えもあったのだが、それは社長自らが却下した。

ペルセフォネは自分の愛娘が呼びだしたドウターであり、自分にとつては孫同然の存在である。

それを、完全には信頼できない構成員などには任せられないという訳だ。

そのため、それなりに信頼されている人間で相談し合った結果、八伎にその役目が回ってきたのだ。

最初は、当然ペルセフォネも警戒していたのだが、二、三日もすると警戒心も解け　奏から多少言い含められたりもした　今では智春と奏以外の中では八伎が一番懐かれている。

八伎の方も八伎の方でペルセフォネをいたく気に入っており、今では彼の生活で唯一の癒しでもあつたりするのだ。

因みに、この事が、この世界で八伎が智春を奏の契約者として認めただ大きな原因の一つである。

…なんというか…本当に大丈夫なのだろうか、この組は…

話を戻そう。

あくまで修練なので、炎を使ったりして非在化する危険を冒すよう

なまねはしない。

が、その分純粹な体術の訓練になっている。
つまりは、

「炎がないとカナは何にも出来ないの…!？」

「炎は補助、使っているのは体術ではどうにもならん相手のときだけや…!!」

等の師匠二人の言葉からも分かるように、はつきりと自身がどれだけ炎に頼っていたのかが丸分かりになるのである。

これが実際の戦闘であるなら、火力やドウターであるペルセフォネや今は期待できないが アスラ・マキーナからの支援などによつて二人に勝てることもあるだろう。

だが、そんな予想外の事態はまず起きないのが修練である。

反射的に奏が炎を使ったりすれば、例外なく二人は指導を中断し、それなりに長い説教へと移行する。

奏としてもそんな事態になるのは遠慮したい。

だからこそ、更に自分で咄嗟に出そうになる炎を食い止めることもしなければいけなくなり、苦勞が倍増することになる。

しかも、奏は良く言えば発展の余地があり、悪く言えばまだまだ未熟という状態だ。

一通り完成した律都や、総師範である祖母に比べてまだまだ動きに無駄が多い。

その無駄は自分の方が実力が上なら問題ないのだが、現在のような状況になると途端に大きな差へと変化する。

基本の立ち姿勢にしても、立っているだけで重心がずれたりして体力を使用している奏に比べ、二人はそんなことで体力を使う馬鹿な真似はしない。

そして、それは動きだせば如実に表れることになる。

そのため、

「はあ、はあ、はあ」

「はい、じゃあ今日は此処まで」

「あ、ありがとう、ごさい、ました」

修練が終わった瞬間に、奏はその場に崩れ落ちてしまった。

一方の二人はと言えば、良い汗をかいた程度の疲労。

早朝から始まり、終わったのは昼食直前の時間帯。

その時間で此処までになるということは、かなり内容が濃いという事が良く分かるだろう。

「じゃあ、先にお昼ご飯頂いてるから」

「奏も早く来るんやで」

何気なく気遣っているようで、実のところあまり気遣っていない二人。

この程度でくたばっているようでは、これから先ついていけなくなるということを暗に示していた。

「は、はい」

それが分かっているけど、動けない奏。

そんな自分を不甲斐無く思いつつも、一先ず、体力をつけようと誓ったのだった。

奏の誓いに水を差すようで悪いのだが、奏自身の体力は全く問題な

い。

律都と祖母のどちらよりも多いだろう。

実際、平均的な女子中学生をはるかに超えている同年代の女性すらも超えているのだから。

であるから、実際は炎舞の技術を学んだ方がいいのだが…

まあ、あつて困る訳でもないし、現状をみるとどれだけあつても足りなさそうなので、奏の判断は間違っていないのかもしれない…

?
?
?
?

時間と場所は変つて智春たち

あの後、しどろもどろになりながら用件を伝えると、冬琉会長は出かける途中だったので、代わりに呼ばれた秋希さんが僕たちを家の中へと案内してくれた。

…正直言つて助かった。

冬琉会長の方が話は通り安いのかもしいけど、今はまだ秋希さんの方が気分的に楽だったから。
それに、

『秋希さんつて、まだ私みたいになつてないじゃん。』

良かったね、トモ』

そう、操緒が言うように秋希さんがベリアル・ドールにまだなつて

いないということも確認出来た。

秋希さんがベリアル・ドールになってしまっていたら、どうしようもなかったから。

その時は、アニアでも呼んでくるぐらいしか僕には思いついていなかった。

だから、彼女の顔を見た時はホツとして膝の力が抜けそうになってしまった。何とか堪えることができたけど。

「それで」

「は、はい？」

案内された先で秋希さんが急に僕に話しかけてきた。

「君の名前は…？」

「まだ、聞いていなかったと思うんだが…」

「あ…」

「す、すみません。」

「夏目です。」

「夏目智春」

『水無神操緒です』

聞こえていないだろうけど、操緒も一応名乗っている。

「ふむ、そうか。」

「おっと、私も名乗っていなかったな。」

「橘高秋希だ、よろしくな」

「はい、よろしく願います」

「因みにさつき門の所で会ったのが、双子の妹の冬琉だ」

「え…？」

「双子なんですか…？」

知ってはいたけど、初めて会ったように振舞わなければいけないだろうから、多少の驚きを示してみる。

「そうだが、それがどうかしたか…？」

「いえ…失礼ですけど、あんまり似てないなあ、と」

「ははは、よく言われるよ」

なんとなく空気も最初の緊張でぎこちなかった時よりもましになったような気がする。

少しだが、場の空気も和らいだところで、秋希さんが切りだした。

「それで、うちの道場に通いたいという事だったが…」

「はい」

「まあ、特に問題があるわけではないが…
どこの道場で、うちの話聞いた…？」

「マズイ……出来ればそこには触れないで欲しかったのだが……」

一気に頭が安堵から混沌へと変化し始める。

そんな僕の様子を見て多少訝しんだのか、疑惑の念を浮かべながら秋希さんが言葉を続ける。

「ふむ、その様子だと道場などから話を聞いたわけではないようだが…」

ならば、どこから…?」

段々と、疑惑の眼差しが鋭くなっていく。

秋希さんにそんな顔で睨まれるとかなりきついで出来ればやめて欲しい。

だが、僕が何も言わなければこの視線は更に厳しいものへと変わっていくだろう。

そして、此処に通うことは出来なくなるかもしれない。

そんな事態になるのは避けたい。

そんな風に悩んだ末に苦し紛れに出た答えは、出来れば使いたくなかった答えだった。

「その…高月組の方から…」

「!?!」

『あゝあ、言っちゃった』

しようがないだろ…!!

僕だって出来れば言いたくなかったよ!!

だけど、僕のその答えを聞いた秋希さんの変化は非常に分かりやすいものだった。

猜疑の眼差しから一転、値踏みするような視線に変わる。

「ふむ、構成員の方では無い様だが…?」

「その…嵩月組のお嬢さんが同級生で、親しくさせてもらっている
ので…」

「……………因みにどちらの方からの推薦だ……………？」

「一応、社長と八枝さんから…」

その僕の答えを聞いて、ますます秋希さんの視線が深く鋭くなって
いく。

「……………」

「……………」

僕の方としては、こんなことになるんなら言わない方が良かったん
じゃないかと思うけど…
こんな視線を向けられるようになった言葉を言われた時のことが頭
に蘇ってきた。

あれは、つい先日のことだ。

奏を宥めて、嵩月組まで奏を送っていき、そのままあがらせてもら
い、一緒に出された課題を片付けていた時のこと。

「推薦、ですか…？」

「そっじゃ」

僕と奏（+操緒）が休憩しに居間の方に行くと、嵩月父が既に休憩

していた。

嵩月父とは、最初こそ微妙な間柄だったけれど、暫く話をしているうちにすっかり打ち解けていたから、別段緊張することも無くなっていた。

そんな嵩月父に橘高道場の話を振ってみると、意外な言葉が返ってきた。

「あそこは、表向きにも道場を開いているがそこからはあまり人は入って来ない。

寧ろ、わしらのような裏の人間に対しての道場のようなものじゃ」

だから、一男子中学生が行ったとしても、通わせてはくれないだろうとのことだ。

確かに、あの二人の強さを知っているとそっちの方が自然に思えてくるから不思議だ。

『え、だったらどうすればいいの…?』

操緒の疑問は僕の疑問でもある。

決意した矢先に、そんな挫けさせる様な事を言われたのでは一気にやる気がそがれてしまうのではないか……

「なに、簡単じゃよ。」

わしと八伎の名前を出せばいい」

「良いんですか…?」

「おう、それで奏と婿殿の危険はかなり減るんじゃない?」
「なら、存分に使え」

何だか、嵩月父がすごくかつこよく見えるのは僕の気のせいでしょうか…？

奏も、すごい呆気にとられている。

「ただし、わしらの名前を出す意味、分かるとるじゃろっの…？」

「はい、決して泥を塗るようなまねはしません」

「ああ、それが分かってるならええ」

そうして、社長から許可をもらい今に至るといふ訳だ。
…因みに、八丈さんにもちゃんと許可はとりました…

暫く黙っていた秋希さんが口を開いた。

「ふむ、あの御二方の推薦があるなら無碍にはできんな…」

「一つ良いか、夏目くん…？」

「はい、何でしょうか？」

「君みたいなの、普通の少年が何故力を求める…？」

「普通の道場では駄目なのか？」

確かに、僕を知らない人間からしたら当然の疑問だろう。

こんな、いかにも普通の男子生徒が、妄想やらスポーツでは無く、裏の世界で力を求めるのだから。

だけど、僕にとっては今更だ。

そんなこと、この世界に来て、奏と会った時から決まってる。

「大切な人たちを自分の手で護りたいんです」

「……………」

秋希さんはジッと僕の目を見つめてくる。

僕も、怯まずに見つめ返す。

この言葉だけは、決意だけは恥ずかしがるものじゃない。

どれだけそうしていただろうか…？

ひよっとしたら10分、いや1時間だったかもしれない。

それぐらいの時間がたって、秋希さんがフツと表情を崩した。

「良いだろう、明日から通うがいい。」

ただし、平日は午後6時から9時までの三時間だ。

それで良いな…？」

「はい、ありがとうございます…！！」

「ああ、それと…」

そう言っつて、秋希さんが僕に手渡したのは三枚の紙。

一つ目は、名簿登録のための用紙。

名前やら電話番号、それに住所などを書いたりする登録用紙だ。

まあ、必要だろう。

二つ目は、月謝の料金表や一月目の振込用紙。

確かに、家が道場で成り立っている以上これは必要だ。

…母親に話すのは気が滅入るけど、こればかりは避けられない。

そして、三つ目は…

「あの、何ですかこれ…?」

「うん？」

ああ、君のトレーニング表だよ。

見たところ、特別体力や筋肉がついているわけではなさそうだからな。

それを順にこなしていつてくれ」

いや、かなりシネる内容なんです…

「まあ、強くなりたいのだろう…?」

だったら、それぐらいこなしてみろ!」

うん、僕を殺す気だこの人。

だけど、確かに必要であろうことも事実。

はあ、気が滅入るところじゃなく、どこかに墜落しそうな気分だけど…

「頑張ります…」

『ファイター』

やるしかない、か…

Side : Aki Kitsuataka

その少年がいきなりやってきた事に特段驚きがあったわけでない。寧ろ、家計の収入が増えることに対しての喜びの方が大きかった。だが、話を始めるとどこか違和感が付き纏っていた。

自分は彼の事を知らないのに、彼は私の事をよく知っているような感覚。

恋人や家族であったり、片思いの相手であればそれも良い。というか、寧ろ嬉しい。

だが、見ず知らずの相手からそういう感覚を受けるのはおかしな話だ。

お互い、会ったことも無かったのに。

まあ、そんなことは些細な問題だった。

より大きな、問題は私が推薦してきた相手の話を聞いたことだ。

「……………」

今迄、まだ普通に話していた少年がいきなり押し黙るのだ。

不自然すぎる。

見たところ、少年はどこかで剣道などの武道をやっていたような体つきでは無かった。

あのバカ塔貴也よりはましだけれど、普通の男子生徒より少しましな程度だ。

うちの道場は、基本的なレベルが高い。

というよりも、表よりも裏をメインに据えているため必然的にそういう人間ばかり集まってしまった。

だから、表から来るのならそれなりのレベルの人間にしか話はいかないはずなのだ。

だが、次の彼の言葉は私の予想の斜め上を言っていた。

「その…嵩月組の方から…」

まさか、この少年の口からその名前が出てくるとは思わなかった。あの組から来るのは、本当に数人の人間？だ。

それも、それなりの修羅場を潜ってきた者たちばかり。

だから、基本彼らを断るということを私たちはしない。

寧ろ、こちらから出向いて鍛錬させてもらっているほどだ。

だがこの少年、そんなに修羅場を潜っているようにも見えない。

その事を彼に聞くと、

「その…嵩月組のお嬢さんが同級生で、親しくさせてもらっているので…」

と言う答えが返ってくる。

ああ、確かに彼女はこの少年と同じ年ぐらいだったはずだ。

だが、それでもおかしい。

彼女は家業をあまり好いてはいないようだったのだが…？

「……………因みにどちらの方からの推薦だ……………？」

「一応、社長と八枝さんから…」

この答えには絶句した。

あの二人の名前が出るということは、本気なのだろう。

一体、この少年が嵩月組とどういう関係なのか興味が尽きないが、

それ以上に疑惑の念が強まる。

あの二人は身内には甘いが、そうでないものには徹底していたはずだ。

その二人の名前を出すことは、相当気にいられているか、その事を

知らない馬鹿なのかどちらかだろう。

恐らく、前者だとは思う。

本人もかなり言いにくそうにしていたから。

彼らの事を知らないのなら、此処まで気負うことは無い。

寧ろ、自慢げにその名前を語ることだろう。

だが、少年からそんな気配は微塵も感じなかった。

「ふむ、あの御二方の推薦があるなら無碍にはできんな…

だが、これだけは確認しておきたい。

一つ良いか、夏目くん…?」

「はい、何でしょうか?」

嵩月組との関係がどうであろうと、少年が彼らにとってどれだけの価値があるかと今は関係ない。

「君みたいな、普通の少年が何故力を求める…?

普通の道場では駄目なのか…?」

その私の問いに彼は、悩まずすぐに返してきた。

「大切な人たちを自分の手で護りたいんです」

綺麗事だと切り捨てることも出来ただろう。

少年の絵空事だと馬鹿にも出来ただろう。

だが、彼の目はその自身の言葉に絶対の確信を持っていた。その辺りにいる男子生徒には出来ない眼だ。

護るための力が今は自分にはない。
だからこそ……！！

彼は、自身の弱さを認めたらうで今此処にいる。

自身の強さを認めるのは簡単だ。

結果を示せばいい。

だが、弱さは中々認められるものではない。

認めたくないからこそ、強さを求めて人は走るのだから。

だが、弱さを認めた人間はそれ故に強さを求め行動できる。

それは、逃避からの強さでは無くて立ち向かっていく強さだ。

どちらも、悪いとは言えない。

だが、求めるのなら前向きに行きたい。

私自身、未だにその境地には至っていない。

理解は出来るが、感情はそれを認めない。

では、その境地に至った人間が強さを求めたらどうなるのか…？

その事に非常に興味が湧いた。

そして、出来るなら彼のその結果までの過程を自身で手伝ってみたい。

そう、純粹に思った。

だからこそ、私は彼をこの道場に通うことを認めたのだ。

彼が帰った後　トレーニングメニューと月謝表を見て非常に肩を
落としていたが　道場に向かって歩いてみると、

「や、秋希」

「ああ、塔貴也か」

幼馴染の少年に出くわした。

「なんか、機嫌が良さそうだね。

何かいいことでもあったのかい…？」

「いいこと、か。

そうかもしれない…」

「??？」

私の答えに塔貴也が頭を捻らせる。

「なに、面白いやつが来たなと思ってな」

「ああ、入門生の人のことか。

そんなに扱きがいがありそうなのかい…？」

「むう、お前は私をどういうふうに見てるんだ…」

そんな風に見られていたとは…心外だ。

「で、どうなのさ…？」

私の疑問を軽く受け流し、迫ってくる塔貴也。

「ふふ、会ってみたら分かる」

そう、あの眼は会って見ないと分からないだろう。

私もうかうかしてられないな。

そう思い私は鍛錬のために道場へと足を運ばせて行った。

8回 疲労の日常(前書き)

8回投稿しました

8回 疲労の日常

秋希さんから道場に通う許可をもらってからの数週間は本当にきつかった。

出されたトレーニングメニューは毎日行うことが前提のもので、それら全てを行うには少なくとも朝の4時には起きないといけなかった。

それでも、なんとかそれらのメニューをこなし終わると朝の7時。シャワーで汗を流したり、その他諸々の身支度を整えると、どうしても30分程度は経過してしまう。

母親が用意してくれた朝食　仕事が看護師なので、用意されていない時もある　を急いで腹に収め、家を出るのが8時ちょっと前。

因みに、母親に橘高道場に通うことと、それに伴って発生する月謝とトレーニングの事を話したら、

「あら、別に良いわよ」

と、以外にも簡単に了解してくれた。

正直、ここで色々言われると思ったから簡単にそれだけで済ましてくれるのは助かるのだ。

「だ、け、ど」

「な、なに…?」

「親に内緒で、勝手にこんなことを決めていた罰として、1学期中はお小遣い禁止ね」

「げ……!!」

それだったら、まだ色々言われた方がましなんだけど……
と思ったが、既に後の祭り。

お陰で、僕の財布の中身はかなり悲惨な状況になっている。
貯金箱に手を伸ばしたことも何度かあるけど、今はまだ何とか踏み
とどまっている。

学校でHRが始まるのが8時半で、家から学校まで20分ちよつと
だから、朝食を食べていると、ぎりぎり間に合うかどうかという時
間になる。

しかも、朝のトレーニング 多少慣れてきたと思ったら、更に過
酷な内容へとグレードアップさせられる の後なので、体力もほ
ぼゼロに近い。

そんな僕の状態を分かっているであろう操緒も、

『ほら、速く!!』

遅れるよ!!』

と言って、いつも急かしてくる。

その所為か、幾分早足になってしまふ。

途中で同じように疲労困憊の奏と合流し、これまた急ぎ足で学校へ
と向かう。

奏が疲れているのは僕のようなトレーニングをしているわけではな
い。

だが、こんな状況の僕から見ても、ある意味自分の方が楽だと思え
てくる。

奏は奏で、暫くの間こちらに逗留することが決まった祖母 どう

しても必要な用事の時は京都に戻っているが　　から毎日修練を受けさせられているのだ。

朝練は僕より少し遅い4時半から始まり、6時半に終わる。

そこから身支度なり、朝食なりを終えると7時半。

僕より早く家を出ることは出来るのだが、元々家から学校までが僕よりも遥かに遠いため結局は僕と似たような時間になってしまう。

そうして、二人して何とか到着した学校でHRを受け、授業に移るのだが、

『こらそこ、寝るな!!』

いかんせん、朝早くから起きてトレーニングを行ってきたため、とても眠い。

机に突っ伏し、休息の為に必要不可欠な睡眠を行う。

操緒が起こそうとするが、そんな声で起きてしまえるほど体力は戻ってないわけで…

結局は、眠ってしまう。

短ければその一限だけである程度回復し、起きて活動するのだが、そんな稀なことがそうそう起きる訳も無く、大抵は二、三時限眠ったままで過ごすことになる。

……まあ、一回習ったことだから、という余裕があるから出来るのも事実なのだけれど…

奏は生来真面目な性格だからか、頑張つて起きて授業を受けようとしている。

しているのだが、やはりきつい様で、かなり頭が揺れている。

頭が落ちるたびに、眼を覚まして授業を受けようとするのだがそれも長くは続かず、暫くすればまたうつらうつらとし始める。

…いつそ、眠ってしまった方が楽なんじゃないかと思うけど…

そんな僕らの様子を見て、真っ先に聞いてきたのは当然のように樋口だった。

この頃には、もう他のネタに移りつつあったので、僕たちとは普通に会話をする程度の仲になっていた。

二人揃って疲労困憊になって毎日登校してくる。

一体何があったのか……！？

というのが樋口の疑問だったらしい。

まあ、僕は隠すことでもないので、

「通っている道場の朝練だよ」

と答えて、トレーニングメニューが書かれた紙を見せてやった。

「なんだよ、そんな程度でそこまでなるわ、け………」

ピシッ

その紙の内容を見た瞬間樋口が固まった。

多分、自分が考えていた以上に僕のトレーニングの内容がきついのだと理解したんだと思う。

暫く、固まったまま動きそうにない樋口を放っておき、少しでも楽になるように眠ろうとした。
したが、

「おい智春、なんだよこれ!？」

樋口の大声によって、それも出来なくなってしまうた。
机に伏せていた顔をあげ、樋口の方を見ながら答えてやる。

「だから、トレーニングメニュー」

さっきそう言ったはずなのだが、理解していなかったのだろうか…？

「んなこたあ、分かってる」

「じゃあ、何…？」

正直言つて、今は寝たい。

寝ないと夜になったら死ぬから。
だから、話もさっさと切り上げたいんだけど…

「な、ん、で、こんなに内容がきついんだよ…！？」

「そんなこと僕が知るわけないだろ。」

こっちは、渡された内容をやってるだけなんだから」

「いや、それでもこれはいくらなんでもおかしいだろ…」

うちの野球部とか陸上部でも、此処までのことはやってないぜ…

よく、こんな道場に通う気になったな、お前…」

若干呆れた視線を向けてくる樋口。

まあ、確かに普通の人ならこんなトレーニングをさせるところに通
いたいとは思わないだろう。

うちの学校の野球部と陸上部はそれなりに練習がハードなことでは
名だ。

実際、僕も前の世界では陸上部に入部していたから、その大変さもよく知っている。

そんな僕でも、このトレーニングの内容にはかなり抵抗を覚えた。だけど、あの秋希さんが決めた内容だ。

あの、バトルマニアのパンク侍　今は以前のような格好ではないけれど　が今後の為には、これぐらいは必要だと言ったのだ。

あの人には未来のこととかは教えてないから、今後の道場での鍛錬や、嵩月家などの悪魔の力の為だと判断した結果なのだろう。

ならば、今後必要になってくるのはほぼ間違いない。

強くなるには、通い続けなきゃいけないし、その得られるであろう力を使っていく戦いは、ほぼ確定した未来としてすぐ近くまで迫っているのだから。

「うん。」

まあ、教えてくれる人がすごいからね……」

これは、本心だ。

彼女たちから教われれば、自分も強くなれるだろうという確信がある。

「すごいってどれくらいだ？」

全国優勝したことがあるとか……？」

「うん、そもそも大会に出てるのかどうか知らないけど……」

「なんじゃそりゃ……？」

樋口が頭を捻りながら唸っている。

『まあ、そりゃそうだよな』

実際に見てみないとあの二人の強さは分からないし……』

ああ、そうだな。

と、心の中で操緒に同意しておく。

以前は、返事を返さないとほぼ確実に怒っていた操緒だが、以前の世界での事情などを話すと渋々ながら納得してくれた。

とはいっても、かなり不機嫌そうだったし、普段あまり相手をしていないからか、寝る前や周囲に誰もいない時には遠慮なく喋りかけてくる。

まあ、以前と違って僕だけに見えると言う訳では無く、擬態を解いた嵩月や、嵩月組の皆さんにも見えているので、以前よりはましになってる。

「分からないなら、分からないでもいいよ。」

ただ、うちの剣道部の部長よりは確実に強いだろうね」

「へえ、そりゃたいしたもんだな」

どこか感心したかのような樋口。

それもそうだろう、うちの剣道部自体はさほど強くは無いが、部長はそれなりに強い事で有名だ。

実際に県では優勝しているし、全国大会でもいい所まで行ったことがあるそうで、今年は優勝を狙っているそうだ。

校内に流れている噂でも、不良20人を纏めて相手にして2分で終わらせたとか、付き合ってる彼女にちょっかいを出した奴を半殺しにしたなど、それなりの話を聞く。

まあ僕からしてみたら、それがどうしたっていう感じなのだが。

あの二人がやったとしたら、そんなものじゃ済まないだろうから……不良なんて100人来ても一瞬で終わらせそうだし、もし彼氏をとられそうになったら本気で相手を殺しかねない。

「ああ、そんな人たちだからトレーニングも厳しくてさ、今すごい眠いんだよ。」

だから、おやすみ…… z z z z z

「ああ、おやすみ……って、寝るな!!」

今日はお前にとっておきのネタを見せに来たんだぞ……!!」

「……とっておきって、どうせたいしたことないんでしょ……」

机に突っ伏した顔を横に向けて樋口に答える。

「何を言う……!!」

今回はすごいぞ、南米の古代文明の遺物で被ると何でも願いが叶うという……!!」

「ああ、はいはい。」

後でいくらでも聞いてやるから、今はおやすみ…… z z z z z

「だ、か、ら、寝るな……!!」

樋口の叫びを聞きながら、僕はまた夢の中へと旅立っていった。

?
?
?
?

そんな風にして学校生活を終わらせると、一先ず奏と一緒に嵩月組

に向かう。

わざわざ僕の家から一度帰って橘高道場に行くよりも、嵩月組から向かう方が早いのだ。

だから、嵩月組で時間になるまで過している。

過ごし方としては、まずは、学校で出された課題を終わらせたり、勉強の先取りをしたりしている。

先取りというよりは、改めて高校の勉強をやり直している。

中学の勉強の復習にもなるし、何より直貴のやつに負けないようにするために。

あいつが本当の夏目直貴だと信じたままなら、別に何とも思うことはなかった。そりゃあ、それなりのコンプレックスとかはあったけど。

だけど、あいつの正体が一巡目の僕だと分かってからはかなり悔しく思ったのも事実だ。

あいつは、元が一緒なのに天才と呼ばれて、技術云々は一巡目から持ち込んだものだけ。受けた難関大学もあっさり合格している。

ひよっとしたら、あいつの「認識操作」の力なのかもしれないけど、それでも元が同じでその差は悔しい。

だけど、元々同一人物なら、あいつに出来て僕に出来ないことはないはずだ……!!

だから、今のうちから高校の勉強をして、少しでも偏差値をあげる努力をしている。

僕だけだったら無理なのだろうけど、幸いにも奏も一緒だ。

以前の世界でも成績優秀だったし、こちらの世界に来てからは小学校のうちから高校の問題を解いていたそうだから、教師役を頼んでいる。

奏も快諾してくれたからより一層励みになる。

「だから、ここの答えは、 $x \parallel 2 / 7$ 、 $y \parallel 4 / 7$ 、 $z \parallel 1 / 7$ に

なるんです」

「え、でも、さっきのやり方だったら…」

「あ、それは…」

「そっか、ここが違うのか」

「はい、あと、他のパターンで、解くんなら…」

『うう、何を話してるのか全く分からないよお…』

僕と奏は、中学三年間と高校一年間を過ごしたから分かるが、操緒は中学一年間すら過ごしてないから当然分からない。

…いやまあ、塾とかで既に勉強しているなら別だが、操緒はそんなところ行ってなかったし、行かずに遊びまくっていたのだ。そんな操緒に教えるのは、僕の役割だ。

「いいか、操緒。

ここからここまでの範囲を和約すると…?」

『【私はその質問に答えを持っていない】』

「違っつて、この場合は【私はその質問に答えてもらった】だよ」

『何が違っつのよー!?!?』

「だから、この用法が…」

というような感じで、僕自身の復習にもなるし、操緒の勉強にもな

るため一石二鳥なのだ。

僕が違っていた場合は、奏が教えてくれるから、問題ない。

お陰で、僕が忘れていた部分も思い出すことができたし、そうそう変な問題が出ない限り大丈夫になった。

… 中学に関しては、だけど…

一通りそれが終わったら、後は時間まで自由に過ごすようにしている。

操緒は嵩月母や祖母と話しに行ったり、僕たちと話していたりしている。

奏は、お祖母さんに呼ばれたり、用事がなかった場合には僕と話していたり、自分の部屋に戻って休んでいたりする。

僕はと言えば、特にすることが無くなったら、基本ペルセフォネの所に行くようにしている。

嵩月家 特に八枝さん に任せきりだが、本来は僕が面倒を見なくちゃいけないんだと思う。

その事を嵩月父に話したら、

「なあに、そんなことは気にしないでええわい。

お前が、世話できるなら元々任せとる。

それが無理な内はむしろに任せとけ…!!」

と言われてしまい、今はありがたく任せることにしている。

まあ、実際は、その話の最中に近くに来ていた八枝さんの僕たちに向ける視線がどんどん鋭くなっていったからだと思うけど…

嵩月父の顔にも冷や汗みたいなのが見えたし…

そんなことを思いだしながらペルセフォネと遊んでいるわけだが…

「キユル？」

どうしても、背中の翼に目が行ってしまう。

あの時は、無我夢中だったから気にしなかったのか、それとも気にしないようにしていたのか　出来る訳ないと今なら思えるけど

自分でも分からないが、とにかくペルセフォネの背中に乗って飛んでも平気だった。

だけど、今こうして思い出してみると……

「うあああああ」

飛んでもいないし、足はちゃんと地面についていて、視点も低いのに、すごい恐怖感に襲われる。

「キユウ」

ペルセフォネが心配そうな顔？で僕の方を見てきているけど…

逆に、何とも言えない感覚になる。

僕がこんな状態になったのは、ペルセフォネに乗って空を飛んだからで、だけでも別にペルセフォネは僕の指示にしたがってくれただけだから別に悪くもなんともない。

それでも、どこか微妙な感情になってしまう。

これじゃあいけないことは分かつてる。

契約者から拒絶されたドウターの行きつく先は、はぐれ眷属だ。ロスト・チャイルド

そんな暴走体のような存在にこの子をさせる訳にはいかない。
だから、

「高所恐怖症って治せるのかな……？」

頑張ろう。

何をどうとは言えないけど、とりあえず、

「屋上から校庭が見れるぐらいにはなるう」

「キュルルーー!!」

先は長そうだけど…

? ? ? ?

時間になると、嵩月組から橘高道場へと向かう。

ちなみに、夕飯は嵩月組で頂くこともあるし、向かう途中にコンビニで買って済ますこともある。

奏とはここで別れる時もあるし、奏がついて来ることもある。なんでもお祖母さんに、

「他の流派も見て、今後の参考にするんやで」

と言われたかららしい。

まあ、僕としては構わないし、秋希さんや冬琉さん 会長って呼ぶのも今は変な感じだから も『嵩月組のお嬢さんなら』ってことで納得してくれた。

因みに、今日はお祖母さんたちとみっちり稽古の予定だそうで、奏とは半泣きのような表情になりながら別れた。

…あの奏が毎回そこまでの表情になる内容に興味もあるけど、僕自身自分のことで一杯だし、藪を突いて蛇どころか龍とかが出てきて

は困るので、聞かないようにしている。
そうして、着いた先では、

「遅いぞ」

「すみません」

「まあ、良いじゃないの秋希ちゃん。

まだ時間より10分は早いわよ」

「それでも、だ。

女を待たせるような奴はもてないぞ」

「あら、でも、夏目くんは奏ちゃんと相思相愛なんだから。

他の娘にもてなくとも気にならないんじゃないかしら…?」

「ふむ、ならば愛想を尽かされると言うのはどうだろう…?」

「あら、それなら良いわね」

何故か僕を話のダシにして盛り上がる姉妹を横目で見ながら、準備体操 出来るうちにやらないとさせてもらえないから をする。それが終わると、道場に置いてある木刀を手にとって軽く素振りをする。

だが、この道場ではあまり意味はない。

ここでの鍛錬の仕方は、ひたすら模擬戦をすることなのだから。

勿論、最初のうちは戦い方など全く分からないから、戦いにおける心構え、足の運び方、重心の移動のさせ方、等々の戦いにおける必

須事項を多少　本当に多少　教えてもらった。

だが、それをある程度習得したと判断されると、本格的に模擬戦に参加させられるようになった。

といっても、ほとんど何も出来ずに二人に叩かれまくって終わるのだけだ……

しかも、僕が以前一巡目の世界で冬琉会長に教わった事を見抜いたのかどうか分からないけど、僕が二人から主に教えられているのは二刀流だ。

だけど、最初から二本使って戦うのが前提という訳では無い。

僕がやっている模擬戦の仕方は、最初の1時間は使っている木刀は一本だけ、その後の1時間は必ず2本使わなければならず、最後の1時間は開始の時点では無手だが、道場内にあるものなら何でも使っているという対戦形式。

なんでも、初めのうちに適性のある得物や使い方を絞っていくために行うのだそうだ。

それがある程度決まれば、本格的にその方向性で鍛えていくそうだが正直言って、初めにこの説明を聞いた時は自分の耳を疑った。

そんな方法よりも、もっと基本的な所から重点的に教えて欲しかったから。

操緒に確認の視線を送るが、

『へー、凄いねー』

と感心しているばかりで、それが本当なのかどうか分からなかった。次に、周囲の門下生の方々　といっても、来ている日や来てない日がある　に視線を向けると、

『……………』

揃って、僕に憐みの視線を向けてくれた。

なんでも、後から聞いた話だと、このやり方はよっぽど期待されている人が、さっさと出て行って欲しい人に対して行われているらしく、

「さあ、始めるぞ。」

夏目智春

「ふふふ、頑張ってるね」

二人の態度を見る限りでは前者だったらしい。

実際、二人の僕に対する扱きぶりは他の人たちとは段違いで激しかった。

当初は、僕が他の人よりも段違いに弱いからそう見えるのだと思っ
ていたけど、違っらしい。

「あの二人には期待された方がまずい」

とは先輩方の言。

なんでも、期待している分強くなって欲しいという想いが大き過ぎて門下生に対してかける負担が大きいったとか。

それでも、それを乗り越えることができたら確実に段違いに強くなれるらしい。

それを聞いて凄く逃げたい気分になったが、やる気が出てきたのも事実だ。

正直言つて、時間は余り有るとは言えない。

だから、短時間で強くなれるのなら、なれるところまでなっておきたい。

……それでも、時々逃げ出したくなるけれど……

そんなこんなで、今日は他の門下生の方々がいないので、ひたすら秋希さんと冬琉さんから扱かれる。

こちらがどれだけ反撃しようとしても、向こうにとっては全て予想済みの結果らしく僕の攻撃は全く届かない。

逆に、攻撃した隙をつかれて僕が攻撃を受けてしまう。

「グー！」

それによって怯んでしまいそうになるが、何とか怯まずに次に来る攻撃を避けようとする。

が、

「ほう、怯まなかったのは偉いが、足が止まっているぞ！！」

秋希さんにとっては止まっていると判断できるほどに遅いらしく、二刀を使った攻撃が嵐の様に僕に襲いかかってくる。

それを、僕も持っている二刀で合わせるようにして受けようとするが、

「遅い！！」

秋希さんの攻撃の方が断然早い。それでも、大分手加減されているのが分かる。

初撃を止めたとしても、流れるように二撃、三撃と繋がって怒涛の如き勢いで連続して撃ち出される。

僕も何とか反応しようとするが、初撃を受け止めた状態で腕が固まっております、次に繋がらない。

二撃目はもう一刀で受けることができたが、そこから先の三撃以降には全くと言っていい程腕がついていかない。

こちらの防御が間に合う前に、秋希さんの攻撃が僕に届く方が速い。

その連撃から逃げるため、断念していた回避へと体を移行させようと
するが、

「阿呆…」

無理矢理変えたせいで体勢が崩れ、致命的な隙が生じてしまう。

かなり呆れながら　それでも手を緩めることはしない　秋希さ
んが木刀を振るう。
当然避けられるはずもなく…

「グハッ!!」

もろにくらって壁際まで吹っ飛ばされる。

「ク…」

何とか体を起こそうとする僕の眼前に、

ピッ!!

空気を穿つ音と共に木刀が突き付けられる。

「…参りました…」

・
・
・

「だから、言っているだろう…!!」

避けるか受けるかどちらかにしろと!!」

終わった瞬間から、反省点や改善点、それに ほとんどないけど
良かった点などを片っ端からあげられていく。

「はい…」

「勿論、途中で切り替えることも大事だ。

だが、お前はまだそれを上手く出来るわけではない。

だから、受けるなら受け切れ、避けるなら無様でもいいから全て
避け切れ」

「分かり、ました」

言っている秋希さんや冬琉さんは全く息切れしていないが、僕の方
は限界に近い。

一応時間は1時間なのだが、大抵僕が5分以内にぶっ倒れる。

長くても10分に届くかどうかといったぐらいだ。

そして、残りの時間は秋希さん達からの口頭での指導が終わった後
は、それを踏まえての再びの模擬戦である。

だから、実際は3時間のうち1時間ごとの区切りでは無く、30分
程度ごとの区切りと考えていた方がいい。

平日は一応時間になったら終わるけど、休日だと朝から晩までこの
方式だ。

朝のトレーニングよりも、正直言ってこっちの方が何倍もきつい。

……高校入学までに死なないといいなあ…

?
?
?
?
?

橋高道場での鍛錬が終わって、家に帰ると大体午後10時ぐらいになっている。

課題は終わらせてあるので、風呂に湯を張り、すぐに入る。

風呂からあがったら、翌日の用意をしてから、寢床にもぐりこみすぐに眠る。

この時に操緒が話しかけてくることが多いので、実際はすぐに眠ることはあまり出来ないけれど…

そうして、僕の一日は過ぎていくようになった。

以前の生活とどっちがマシかと聞かれれば、当然今の生活だと答えるだろう。

前は、普通に部活をして、クタクタになりながらも帰って課題を済ませて、夕飯を食べて、遊んだり、操緒と話したりして時間をつぶしていた。

勿論、悪くはなかった。

だけど今みたいに、自分の意思で何かをなしているというような充実感がなかったのも事実だ。

今は、以前とは違って段違いに疲れるし、小遣いの問題などもあるけれども、前とは比べ物にならないほど充実した毎日を過ごしている。

だから、どれだけ周囲の人に僕の生活がおかしなものだと言われたとしても、僕は変える気は全くない。

寧ろ、他の人に勧めるような気がするほどだ。

9回 想いの日常(前書き)

今回は、奏視点で書いたので、かなりおかしく感じると思います。

というか、奏自体一人称に向かないキャラですので…

ちなみに、今回は、次回と確実につながっています。

9回 想いの日常

奏

両親が私につけてくれた大事な名前。

そして、私と彼とを繋いでくれる大事な言葉。

普段は名字で私の事を彼は呼ぶし、私も彼の事を名字で呼ぶ。

そこに、不満はない。

ううん、嘘。

大いに不満はある。

だけど、隠さなきゃ私たちの身に危険が襲いかかってくるのも知っている。

以前の世界で彼 智春くん は佐伯会長から、散々私との契約について注意されていたから。

私には聞かせないようにしていたつもりだったのだろうけど、私は知っている。

明らかに私の方を意識しながら話していたのだから、気付かない方がおかしいと思う。

だけど、そんな忠告を無視して、彼に好意を向けている女性むすめはたくさんいたのに、彼は私を選んでくれた。

嬉しかった

水無神さんには悪いとは思ったけど、私が彼の一番なんだと確信できたから

雌型悪魔である私は人間とつながりがないと生きていけない！

だけど、自分は初めからそのつながりを求めていなかった。

他人に迷惑をかけるぐらいなら、というやつだ。

そんな風に過ごしてきた私が初めて惹かれた男性ひと。きっかけはよくある小説のようなものだったかもしれない。

第一生徒会に捕まって、処刑されかかった私を助けてくれた。

彼の中では、友達を助けたという感覚だったのだろう。

彼らしいと言えばそれまでだ。

だけど、それがきっかけで私と彼の仲が縮まったのも事実。それからの行動は、初めは恩返しのもりだった。

助けてもらったのだから自分も彼を助けないといけない。

それだけのつもりだった。

勿論、好意が全くなかったわけではない……と思う。

だけど、その時の私はそれを好意だとは思っていなかった。

ただ単に、護りたかっただけなんだ。

悪魔やアスラ・マキーナといった存在から彼を、そして彼の心も。

私たちの力は人の想いの結晶。

智春くんは優しい。

嫌いな人はいるだろうけれど、基本誰に対しても優しい。

そんな彼が私たちの真実を知って無事でいられるとは思えなかった。

……だけど、彼はそれを乗り越えてくれた……

本当の意味で私たちの事を考え、悩んでくれた。

それからだろうか、私の中で彼に対する想いが明確に形作られていったのは。

彼を護る。

それがいつの間にか、彼に護られたい、互いに支え合っていく存在

でありたい、という想いに変わっていった。

だけどそのころには私も非在化の兆候が出始めていて、想いを伝えるのは彼に対して重石になると思っていた。

そんな時に、彼の前で急激な非在化を起こしてしまったことがある。実際、自分でももう駄目だとその時は諦めていた。

だけど、そんな中で声が聞こえた。

嵩月！！

誰よりも私の事を想ってくれている声が……

あの声が聞こえたからこそ今は此処にいる事ができる。

ああ、そっか。

私たちはもう、あの頃から互いに助け合っていたんだ。

そんな最中で一巡目の世界へと飛ばされた。

結果的には、智春くんとながることができて、私にとってはマイナスばかりではなかった。

まあ、戻ってくる途中でこの世界に飛ばされたのだから、判断に困る所ではあるのだけれど……

?
?
?
?

こっちの世界で過ごしていた私の日常は再び灰色に染まっていった。

つながれた彼との絆は断ち切れ、私は再び独りになった。ただ、以前のような生活とは違う。

私には希望があった。

小学校は無理でも、中学には会うことができかもしれない。出来れば小学校のうちに会いたかったけど、探しても見つからなかったし、家の事もあったから途中で断念した。

それに、やり直す機会が得られたのは私にとっても幸いだ。

お母様は、私が小さいころから魔力をよく使っていたから、以前の世界では私が高校に入学する前に非在化してしまった。

だから、今の世界では可能な限り魔力を控えてもらっている。

そのお陰か、お父様と過ごす時間も増えて消えていった記憶以上に新しい記憶をつくっている。

だから、当面非在化の心配はしなくていいと思う。

そんな中で感じた突然の胸の高鳴り

言葉では言い表せないほどの圧倒的な歓喜

自身の胸の奥から止め処なく想いが溢れてくる。

その想いの中から、何かが突き破って出てきたそうにしている。

その衝動に身を任せると、

「キュルルルー!!!」

私の……いや、私たちのドウター（むすめ）が生まれ出た。名前は決めてあった。

彼の名前　智春　からつけようと決めていたから。

私と彼を結んでくれる恋の女神。

私たちに春をもたらしてくれる愛しい子。

だから、この子の名前は、

「ペルセフォネ」

どれだけ離れていても、この子がいるのなら私は大丈夫。だって、彼と私の想いの結晶がこの子なのだから。

この時はまだ、智春くんに会っていなかったから不安でいっぱいではあったけど…

その後、お父様たちにはれたけど、智春くんのお陰でなんとかなっ

た。私だけじゃどうにもならなかっただろうから、とても助かった。

入学式の日に出会った彼は、思っていたより背が低くて、子どもっぽ

い顔つきだった。

だけど、確かに私と彼はつながっていた。

彼は、私の知っている彼であってくれたのだから。

「……嵩…月…？」

そんな声が教室の入り口から聞こえた時は、すぐに駆けよって抱き

締めたかった。

だけど、自分がそうするよりも先に彼の方から私を抱き締めてくれ

た。

嬉しかった

自分の腕の中で泣いている彼は、誰よりも愛おしい人。

私が生涯をかけて護り、護られていく人。

そんな決意を、想いを、改めて思い出させてくれた。

その日中に彼の処遇が決まるとは思わなかったけど、それでも私は忘れられない思い出がある。

「嵩月：いや、お嬢さん、奏の契約者の夏目智春といいます」

そう、名前で呼んでくれた。

今迄、一度だつて名前で呼ばれたことはなかった。

それこそ、契約するとき　　性行為　　の時にだつて呼ばれなかった。

水無神さんや大原さんは、私よりも以前からの付き合いで仲が良いから納得していた。

朱湮さんはそんな雰囲気、名字で呼ぶよりもなんとなく名前で呼びたくなるような感じの人だ。

ニアちゃんは、そもそもの名前が長い上に外国人だ。

アニア・フォルチュナ・ソメシエル・ミク・クラウゼンブルヒ

名字で呼ぶのは長いし、ニックネームみたいなもので呼ぶ方が自然な気がする。

彼が親しい人たちなら、まだ納得がいった。ただ、

冬琉会長に、六夏会長、瑤さん、ついにはGDの千代原さんまで名前と呼んでいたと思う。

それなのに……私だけずっと名字で呼ばれているのが気になった（

佐伯さんは智春くんが苦手だから　本人から直接聞いた　だと
思う）。

何で私だけ名前で呼んでくれないの…？

出来るだけ考えないようにしていた。

考え出したら、自分を自分で抑えられそうになかったから。

それでも、どうしても考えてしまう。

私は彼に認めてもらえてないのか…

彼は私を友人だと思ってくれていないのか…

ただ単に自分にとって都合のいい存在だと思っ
ているんじゃないだろうか…

思考はひたすら負の大渦に呑み込まれて
いっていた。

そんな彼が、初めて私の事を名前で呼んでくれた。

嬉しいなんてものじゃない。

自分で自分が分からなくなるほどの熱に頭が犯されていた。

今でも、彼から名前で呼ばれる度に彼への想いが溢れ出そうになる。

分からないように過ごしているけれど、どうしても反応が遅くなっ

ているから、ばれてるかもしれない。

それはそれでいいのだけど…

だから、私にとって名前　奏　は大事なもの。

親からもらった大事なものというだけじゃなくて、私と智春くんの
想いの証。

そう思ってるのは、私だけなのかもしれない。

けど、それでもいい。

彼が私の名前を呼んでくれる、それ以上に大事なものなんて今は考
えられないんだから。

?
?
?
?

そんな風に過ごしていたある日、

「ねえねえ、カナちゃん」

ふと名前を呼ばれた。

今いるのは学校だからリツちゃんではないのは確かだ。

「…あ、大原さん」

振り向いた先にいたのは大原杏。

今のクラスでも一緒に、何かと私に気をかけてくれている。

普段は智春くんたちと一緒にいる私にとって、彼女は同じクラスの中ではよく話す方だ。

そんな彼女は、今、

「むうー」

少々機嫌が悪い様に見える。

「あ、あの…」

「カナちゃん…?」

「は、はい」

「私の言ったこと忘れたの…?」

大原さんの言ったこと…?

何だったっけ?

ウンウン唸っている私を眺めながら、大原さんは溜息をついた。

「はあー、名前」

「え…?」

「だから、名前で呼んでって言ったでしょ…!!」

「ああ!」

そう言えばそうだった、彼女には名前で呼ぶように言われていたんだ。だった。

名前云々で色々悩んでいたんだから、忘れていた私が悪いのはよく分かる。

「……その様子だと、完全に忘れてたみたいだね……」

はあー

と、また大きな溜息を零す大原…じゃなくて杏ちゃん。

「あ、あの…ごめん、なさい。」

大原さ…じゃなくて、杏ちゃん」

私がそう言つと、

「うん、そうそう」

そう言つて彼女は笑つてくれた。

いつ見ても喜怒哀樂のはつきりしている人だと思う。

…私も彼女みたいになれたらいいのにな…

「あの、それで、何の用…？」

「ああ、そうそう、あのね…」

にこやかに私に話しかけてくる杏ちゃん。

今度皆で勉強会でもしない…？

というか、開いてくださいお願いします…！」

「勉強会、ですか…？」

その単語の意味は分かるけれど、何故それを1年生の今の時期に言うのか分からない。

「うん、そう。」

勉強会」

「あの…どうして？」

「いやあ、この間のテストの結果が酷くてさー」

親に見せたら、かなり怒られてね。

次のテストで10点ずつ上げないとお小遣いがしばらく減るんだ

よ〜」

「……………」

どれだけ酷いのだろうか。

まだ1年生の初めの頃だから、そんなに難しい問題が出ているわけでもないし…

それなのに、親にかなり怒られる点数とは一体…？

「だ、か、ら、クラストップの二人に教われれば何とかなるんじゃないかと思って」

「あの、夏目くんも…？」

「うん、そうだよ」

さも当然のように言ってくる杏ちゃん。

確かに私と智春くんは今の世界では二人揃って成績トップですけど…ある意味反則をしているようなものだから、しっかり教えられるという訳ではないんですけど…

「まあ、そっちにも色々予定があるだろうし、そっちの日程に合わせるからさー」

「でも…」

渋る私に、杏ちゃんが不敵な笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「やってくれないなら、あのこと言っちゃおうかなー」

「え…!？」

あ、あの、その…!！」

あれを今言われるのはまずい…!!

何がまずいって、智春さんと私がしてきたことの意味が無くなってしまっから。

「ふふーん、言って欲しくないんでしょ…?」

「うー」

「そんな風に威嚇してきても駄目駄目。

さあ、どうするの…?」

こんな脅しみたいなのは卑怯だと思うけど…

勝ち誇った杏ちゃんの顔を見ると、自分が情けなく思えてくるのも事実です。

「……分かりました」

「やったー!!」

じゃあ、日程とかはまた今度ね!！」

そう言って、駆けだしていく彼女の姿を眺めながら、私は脅される原因になったあの日の事を思い出していた。

?
?
?
?

その日は、私も智春くんもどちらも修練や鍛錬の無い日でした。私も智春くんも一週間に一回はそういう日は有るのですが、中々被らないのでお互い揃って休日というのは初めてでした。そんなある日のこと、

「『デートをしてきなさい』」

そう私と智春くんは、お祖母様とお母様と水無神さんから命令が下りました。

「はい……？」

10回 デート（前編）（前書き）

10回投稿しました。

長くなりそうなので、前後編に分けようと思います。

奏に期待しているであろう皆様には申し訳ありませんが、本格的にデートに入るのは次回までお待ちください。

それから、アンケートについてですが、期限は2010/9/30
いっぱいとさせていただきます。

現在の状況としては、重複意見も1票ずつとしてカウントすると、

1：黒鐵 5票

2：黒鐵・改 4票

3：まさかの鋼 3票

4：その他のアスラ・マキーナ 3票

という結果です。

皆様のご意見お待ちしております。

100回 デート(前編)

「『デートをしてきなさい』」

突然、僕と奏に向かってその言葉は飛んできた。

全く前兆がなかったものだから、呆気にとられてしまった。
だから、

「『はい…?』」

僕と奏がこんな風に呆けた表情で、間抜けな声をあげた事に対しても責められる謂われはないはずだ。

『「うらそー!」

なに間抜けな顔してるの!?!』

それでもそんな風に声をかけてくるのは流石操緒だと思つ。
とりあえず固まっている奏は置いといて、話を進めよう。

「『いや、なにをいきなり……』」

そう反論してみるけど…

『「『いや、なにをいきなり……』」じゃ、なーい!?!』

「……………」

真っ向からセリフ自体否定されました。

『デートだよ、デート。』

別の言い方をするなら、逢引きとかランデブーとか…』

「いや、そんなことは分かってるから…」

『じゃあ、なに…!?!』

何故か、自分がするわけでもないだろうに鬼気迫った表情で僕に語り……いや、怒鳴りかけてくる操緒。

だけど、とりあえず話を聞いてくれるような状態になった。

「だから、【なんでデートをするのか…?】っていう…」

『【なんで】……!?!』

僕の言葉を途中でぶった切り、髪を逆立てながら怒る自称僕の守護霊。正体は教えたから知ってるはずだけど。

いや、せめて話は最後まで聞いて欲しいのですけど操緒さん…

『恋人同士の二人がデートするのに理由なんかがあるって…!?!』

操緒の言葉に同意するかのように、後ろで女性二人が大きく頷いているのが見える。

『今まで二人の様子をずっと見てきたけど、全くそうしようという気配が見当たらない…!!』

そりゃあ、道場とか炎舞の稽古とかで忙しいのは知ってるけど、それでもいききたいと思うのが人情…!!

というか、恋人同士になってから一度もその手の話が出てこなか

ったのには流石に驚いたよ…』

ジトー、と僕の方を睨みつけてくる操緒。

「いや、だけど…」

反論しようとしても、

『だけど、なに…!?!?』

すぐに黙らせられてしまう。

そりゃあ、僕だって今まで17年間生きてきて初めて出来た恋人で、しかも相手が奏なのだ。

デートだとか、バレンタインだとか、今迄全く自分には関係のなかったそれらに興味がないと言えば嘘になる。

寧ろ、相手ができたことで期待感とかが増えて、今まで以上にその手の事に関して考えるようになっていく。

しかも、あまり知らない相手という訳では無く、それなりに互いの事を分かり合っている奏が相手なのだ。

期待しない方が無理だと思う。

それらのことを踏まえたとえで、デートに行きたいか行きたくないかと聞かれれば…

行きたいに決まってる

今までは、戻ってきたという衝撃に加えて、嵩月家への説明、僕は橘高道場への入門、奏は炎舞の練習というそれなりの事情があつて、そう言った色恋沙汰に思考が向かなかつたんだと思う。

実際、そういう話をされて、考え出した今は行けるものなら行きた

いという思いになっているんだし……

とはいえ、それを今更操緒たちについても何か変わるわけでもないから黙っておこう。

そんな風に考えていると、知らない間に操緒の演説は終わりに近づいていた。

『だーかーらー、二人とも欲が無さすぎなんだよ。』

何でそんなにストイックなの……？

犯罪者になるほど暴走しろとは言わないけど、もっと自分に正直じゃないと……！

そうじゃないと、いつか爆発しちゃうよ。

こっつ、空気を入れすぎた風船が爆発するように、パーンと『

……なにがどうしてこんな話になったのさ……？

さっきまでは普通に操緒の恋愛観を語っていただけだったような気がするんだけど……

いつのまに人生観についての説教に……??

しかも、なんか後ろでは頷いてる人？たちもいるし……！！

『トモの答えは分かり切ってるから措いとして……』

おいこら、何分かったように勝手に納得してるのさ。

『だって、トモが私の言ってる事に返事もせずに黙って俯いてるんなら、自分で考えてその結果に納得したってことでしょ……？』

「……そうだけど……ち……」

何だかんだで、見透かされてるのか…

『じゃあ、別に良いじゃない。』

というわけで、奏ちゃんはどうしたいの…?』

僕を無視して奏に質問する操緒。

ちなみに最近では、操緒は以前の世界の様に奏を“ 嵩月さん” とは呼んでいない。

前と違って、僕がよく嵩月組に来るようになったことが原因の一つだとは思うけど、前の世界より操緒と奏の仲が近いように思えるから、僕としては嬉しかったりする。

それだからか、操緒も奏に名前前で呼んで欲しいと何度も頼んでいるのだが、照れているのなかなか奏も操緒を名前で呼ぼうとしないだからか、操緒は奏が自分のことを見える時には積極的に話しかけている。

今の状況がそうだ、という訳ではないけど操緒の努力がいつか実ることを祈っておこう。

まあ、そんなことは措いとして、

「…私も、行きたい、です…」

『オツケー、じゃあ奏ちゃんはお祖母さんお願いします。』

私はトモをどうにかしてくるので』

「ああ、まかとき」

いつの間にか僕の意思を確認することなく進んでいた事態に僕はどう反応するべきなんだろうなあ…

? ? ? ?

その後、嵩月組から追い出された僕は操緒の言葉のまま家に帰らせられ、デートの準備に駆り出されていた。

『前買っておいた服あったでしょ?』

「ああ、お前が選んでくれたやつか…?」

『そうそれ。』

とりあえずあれを着ていけば大丈夫だから』

そう言われて、黙々と操緒が以前選んでくれた服に着替える。

そう、僕には準備といってもなんにも分からないから、操緒の言葉に従っているだけだ。

まあ、僕が選んで失敗するより可能性は低いだろうから全然いいのだけだ。

『で、あとは財布とか時計とかハンカチ等々。』

大丈夫…?』

「ああ、その辺は大丈夫だよ」

流石にその辺りで失敗して、妻の世話になるのは避けたい。

『よし、じゃあ行くつか…!!』

僕が準備し終わったのを確認すると、操緒はそう言っただけで壁をすり抜けてさっさと外に出て行ってしまふ。

「っつて、ちよつと待て…!!」

僕は、まだ何にも聞いてないぞ…!!」

そう、デートをすするただけ言われ、準備のためだと言われて家に戻ってきたのだ。

何時に待ち合わせだとか、どこに行くのかだとか、そもそもデートプランとかはどうなっているんだ？

『あー、それならだいじよぶ。』

とりあえず、私に着いてくればいいから』

「…ほんとだろうな…?」

『私たちが信じなさい』

胸を張ってそう僕に答える操緒。

…正直言っつて、信用できない。

何だかんだで今まで真面目なことばかりだったから、操緒もあんまりふざけることはなかった。

だからこそ反動で、今回のような出来事に対しては凄いふざけそう

だ。まだ嵩月家の二人が参加していたからマシだと思っただけ…
だけど、ひよつとしたら逆に酷い事になるかもしれない。

……うん、考え出したらきりがなからやめよう。

そう、考えに区切りをつけて 思考を停止したとも言っつ ちゃ
つちやと出て行ってしまった操緒の後を追いかけるようにして、僕
は目的地に向かっつていった。

? ? ? ?

そうして、操緒に連れてこられたのは、

「…………なあ…………」

『んー、なにー?』

「な、ん、で、ショッピングセンターなんだよ…………!?!?」

そう地元で一番大きいショッピングセンター。

ここに来れば、日常生活で使う大抵のものは揃うという便利な場所
いや、確かに映画館だとかゲームセンターだとかそんな感じのこ
ろは揃ってるけど…

それでも、デートで来る様な場所じゃないと僕は思うんだが…

一応最初のデートなんだから、格好つけたいと思うのが男心だと思
う。

『トモは分かってないなー』

そんな僕を馬鹿にするかのような目で 実際馬鹿にしているのだ
ろう 見てくる操緒。

「なにがだよ…………」

『ごういう場所こそが二人にとっては一番なんだよ』

「なんでそうなる…?」

全くもって意味が分からない…

『だって、トモも奏ちゃんも二人で色々な事をしてきたんでしょ…?』

その言い方には何か別のニュアンスが含まれているような気がするけど…

「うん、まあ、僕たちだけじゃないけど」

『だったら、別に今更格好つける必要性も無いじゃない』

「そういうもんか…?」

『そうそう、だから水族館とか遊園地とかに二人で行ってバカツプルする必要なんかないんだよ』

「いや、バカツプルって…」

僕と奏はそんな風に見えるのか…?

僕は自分がそんな風に見られていたとは全く思っていなかったんだけど…

『普段はそうは見えてないから。』

僕の顔から感情を読み取ったのか、操緒が話しかけてくる。

でも、二人きりにしたらいちやつきだすでしょ…?」

「そんなことするわけ…」

いや、絶対にならないとも言い切れないか…
主に僕が原因だと思っけど。

『ほら』

勝ち誇ったように操緒が笑っている。

「……………」

特に言うことも無いので黙ったままでいる。

操緒が調子に乗ってより一層喋り始めるだろうけどそこは我慢だ。

今まで気にしていなかったけど、僕が今いるのはシヨップングセン

ターの入り口の広場で、しかも時間は休日の昼前ぐらいだ。

当然人が大量にいる。

そのお陰で操緒との会話も思ったよりも変な目で見られているとい
う訳ではない。

とはいえ、あくまでも“思ったより”なので当然僕の事を不気味な
モノでも見たかのようにそそくさと離れていく人もいる。

まあ、そんなに気にするほどのことでもないし、何より今は、操緒
から繰り出されるマシンガントークを無視して、この後奏とどうす
ればいいのか考えなければならぬのだ。

だから、周囲の事は気にならない。

操緒の声は…気にしない…!!

そうして待つこと30分。

時刻は正午になるつかというぐらい。

「あ、あの、お待たせしました」

そんな言葉が僕にかけられた。

それに反応して顔をあげた僕の視線の先には、

「ど、どう、ですか…？」

どことなく不安そうな表情の奏。

そんな彼女の身を包んでいるのは、淡い水色のロングのワンピース。その上から薄手の白の長袖のカーディガンを羽織っている。

それに、いつもは後ろで一括りにしてある髪をおろしている。

奏の私服は高校時代に何度か見たことはあるが、こんな雰囲気の私服を着ているのは見たことが無い。

なんというか、お祖母さんたちナイスです！！

『うわー、可愛いー』

『どこかのお嬢様って感じ』

操緒の言うように、いつも以上に清楚さが増しているし、以前から感じていた大人っぽさが少し減り、逆に年相応の可愛らしさが滲みだしていた。

「うん、可愛いよ」

そう自然と言葉が出てくる。

「あ、ありがとうございます」

そんな僕の言葉を聞いて、頬を染めて照れる奏。
可愛いなあ。

出来る事ならいつまでも観賞していたいけど、一応デートなんだから動かなきゃいけないんだろう。

「で、どうすりゃいいのさ…?」

『どっする、って…?』

「惚けるなよ。

ここまで連れて来といて後は知りませんってわけじゃないんだろ
う」

流石に操緒がこんな性格でも、嵩月家の女性陣も一緒に言ってきた
のだから何か考えているのだろう。
と、思った自分が馬鹿だった。

『うんそう。』

私は後は知らないから、どうぞ自由に〜』

「……は…?」

『じゃあね〜』

僕が呆けている間にサッサと姿を消してしまう操緒。
こうなったらいくら声をかけても無駄だろう。

「あ、あの…」

そんな風に呆けてる僕に奏が声をかけてくる。

「あ、ああ。」

「ごめん、ぼうつとしちゃって」

「い、いえ、それはいいんです」

「？」

「じゃあなに…？」

「操緒さんは…？」

「あー……消えた」

「え…？」

今度は逆に奏が呆けた顔になる。

ということは、奏自身お祖母さんたちから何も教えてもらえないままここに来たんだろう。

「ここまで連れて来といて、特に何か指示するわけでもなく、消えやがった…」

「……………」

「……………はあ……………」

とはいえ、このままずっとここにいる訳にもいかないだろう。

時間も時間だからどこかで昼食をとりながらこの後の予定でも話し合った方がよさそうだ。

「とりあえず、どこかで昼ご飯でも食べようか。
その後の予定はそこで話し合えばいいし」

「先ずその事を奏に伝える。」

「あ、そうですね」

「ああ、それと…」

「??？」

不思議そうな顔になる奏。

行くのなら早く行こう、という顔だ。

確かに昼時のこの時間だ、早く行かないとこの席も埋まってしまうだろう。

それでも、これだけは言いたいし、確認しておきたい。

「今日一日よろしくね、奏。」

「というか、奏って呼んだ方が良い？」

「それとも嵩月って呼んだ方が良い？」

今後の事を考えるなら後者なのだろうけど、これはデートなのだ。

例え半強制的に始まったものだったとしても、奏との記念すべき初デート。

だから、名前で呼べるなら呼んで今日一日を過ごしていきたい。

今の僕には普段の仮初の関係と本来の関係との区別はこの呼び方が一番だから。

「奏で、お願いします」

「うん、分かったよ。」

「じゃあ、行こうか奏」

そう言っつて、僕と奏はシヨッピングモールを歩きだした。

手と手が触れ合うことは無い。

だけど、お互いの手は触れるか触れないかの距離で彷徨っている。

それが、何ともいじらしく思えた。

10回 デート(前編)(後書き)

そろそろ大学が始まるので、更新スピードが週一ぐらいになるかと思われます。

可能な限り早く書くつもりですが、どうしても遅くなってしまうと思われます。

御了承ください。

11回 デート（後編）（前書き）

書いていて思った。

自分には甘い事などあまり書けないと……！！

書いていて、というか考える段階でかなりきつかったです。
それでも、可能な限り努力して書いてみました。
そんな話ですが、どうぞ

11回 デート（後編）

時間帯が昼時ということもあり、僕と奏は昼食をとることにした。とはいえ、中学一年の僕らにはそんなに自由に使える程所持金があるわけでもない。

それにこの後どこに行くかを決める際に、所持金の量は重要事項の一つになるだろう。

であればあまり金銭を消費したくない。

そういつた思考の結果、僕たちが一先ず落ち着いたのは、

「ごめん、こんな所で」

「いえ……私も、あんまり来たことないから……」

ショッピングモール内の某ファーストフード最大手店だった。

意外な事に、奏はほとんどこの類の店に来た事が無いらしい。

だけどもあ、改めて考えてみると、あの両親や祖父母、それに一緒に暮らしているであろう構成員の人たちと奏が、一般的なファミレスやレストランなどで外食している姿は中々想像しにくいものがある。

……逆に、和風の高級料亭とかは凄く想像しやすいんだけど。

もし、家族で一緒に行けたとしても周囲は恐らく構成員の方々が警護されていることだろう。

それに、こちらの世界でも奏は友人と呼べる存在がいなかったらしい。

だから、そういった子どもたちだけで遊びに行ったりすることもなかったのだろう。

自分一人でも外食はほとんどしていないらしい。

まあ、小学生が一人でうろついても、今の時代どうなるか不安

だからそれについては別に問題ないと思う。

とはいえ、友人がいなかった事に思うところが無いわけじゃない。だけど、それは奏が選んだ生き方で、悪いことが良いことかは僕が決めることじゃない。

けれど、出来るだけ奏には普通の生き方をしていつて欲しい。

僕の勝手な想いかもしれないけど、こんな命のやり取りが日常になっっている世界で生きていくよりは、きつと安全だろうから。

まあ、そんなことも分かった。

その事について色々思うことが無いわけでもないが、体は注文したものを代金と引き換えに受け取り、奏がとっついていてくれるはずの席へと向かう。

休日の昼時ということもあって、店内には家族連れから、友人同士で遊びに来ているであろう学生のグループや（僕らのような年齢より少し上の）カップルたち等々、様々な年齢や構成の人たちで混み合っている。

席が取れているかどうかは不安だったけど、幸いにも二人掛けの席が空いていたようで、奏はそこに座っていた。

窓際の席に座ってぼんやりと外を眺めている奏。

傍から見ればそれなりに画になったことだろう。

だけど、周囲の喧騒でそれも分からないものになっている。

……正直言つて、個人的には凄くありがたい。

見知らぬ他人が奏に興味を持つことがないのだから。

そんな風に、奏に若干見惚れながらも、

「お待たせ。

ごめん、遅くなっちゃって」

僕は彼女の正面に座る。

「いえ、だいじょぶ、です」

僕たちが頼んだのは、所謂セットメニューというやつだ。ドリンクとハンバーガー、それにポテトを付けた奴。そんなに高くもないから財布にも優しい。

「……でも、ほんとにそれで良かったの……？」

奏はあまり来た事が無いから、メニューも何が美味しいとか、どれが高いとか、量が多いとかの情報を知らなかったのだ。そんな彼女がとった方法は、

「智春くん、と同じのを……」

そう、僕任せ。

いや、こんな些細なことでも彼女に頼られるのは嬉しいのだけど、僕の好みと奏の好みが合うとは限らないし……
それでも、

「はい、美味しい、です」

奏の笑顔が見ただけ良しとしよう。

ハンバーガーを啜えたまま、うつかり見惚れてしまった僕を誰が責めれるだろうか。

僕が呆けているうちに奏は、ハンバーガーを啜えたまま、

「むー」

何やらポテトを見ながら考え込んでいる。
とりあえず、食べるか悩むかどちらかにした方がいいと思うのだけ
れど……
慌てて我に返り、誤魔化すように僕も自分の分急いでを食べ進める。
そのせいか、サッサとハンバーガーも食べ終わり、勢いのままにポ
テトに手を伸ばした時だった。

「あ、あの」

「？」

奏が声をかけてきた。

なんだろうと思って正面に目を向けると、

ズイ

と、ポテトが口元にまで伸びてきた。

「……………え……………？」

呆気にとられて固まってしまふ。

というか、頭が現実を追いついてこない。

いきなり前振りも何も無く、眼前に食べ物が出現したら誰でもそっ
なると思う。

そんな風に動かない僕を無視して あるいは分かっているても気に
しないのか、分かっているのか 奏は次の行動に移る。

「あ、あーん」

「……………」

あれか……！？

前の世界 1巡目 で樋口に入れ知恵された時のような……！！
思考停止して固まる僕 たっぷり30秒は固まっていたであろう。
よく見ると、奏自身も顔が赤くなっている。

ああ、奏も恥ずかしいんだなあー

いや、食べて欲しいなら置いてくれれば普通にそこからって食べるんだけど……

などと、どこか達観した自分が冷静に状況分析している。
とはいえ、

「うー」

奏も段々と涙ぐんできている。

人がたくさんいる場所でこれだけの事をするのは、流石に奏にはアイドルが高すぎたようで……

周囲の人たちからも、憐みの視線が奏に対してはきつと向けられているんだろう。

疑問形なのは、僕自身周囲に気を配る余裕が全くないからだ。

えーい、やっぱり僕が食べなきゃいけないのかこれは！？

そろそろ涙ぐんだ顔が、泣き出しそうになっている。

ええい、消えさせ僕の羞恥心。

「あ、あーん」

僕が口を開くと、奏は泣き顔から一転して、喜んだ顔になり喜々と
して僕にポテトを食べさせてくれた。

一回で終わると思って安堵してた僕につきつけられたのは、その後
も機会を見計らっては僕の口元に伸びてくるポテト。

初めは戸惑っていたけど、途中から何も感じなくなったのは一男子
学生としてどうなのか……

途中からポテトの味なんて、全く分からなくなってたし。

後から聞いた話だと、

『恋人同士でデートに行って食事をするなら【あーん】は外せませ
ん』

などと、母親から熱弁されたらしい。

それをまともを受け止めるのもどうなんだろう……？

171

注文したのもあらかた食べ終わり、今は今後の予定について話し
合っている。

「じゃあ、どこか行きたい所とかない……？」

「行きたい所、ですか？」

「うん。」

僕は結構来てるから大体の店の場所なら分かるし……」

「むー」

「そんなに真面目に考えなくても良いよ。
デートなんだから楽しめればいいんだから」

何事にも真面目に取り組むのは奏の美点だとは思っけど、今はそこまで真剣にならなくても良い。
ふざけて言ってくれた方がこっちとしても気楽に返せるし。
別に、普段から奏が気負ってるというつもりはないけど……

「あ」

何か思いついたのか声をあげる奏。

「うん？」

どこか行きたい所でもあった……？」

「はい」

思っていたよりもはっきりとした返事が返ってきた。
その事に軽い衝撃を覚える。
悪いとは分かっていたけど、こっぴつ時奏はあんまり自己主張しないものだと思っていたから、僕が決めることになるのだろうと思っていた。

だから、奏がこっぴつもはっきりと意見を言ってくるとは思わなかった。
悪い事じゃない。
寧ろ、良いことだ。

その事に、どこことなく父親が娘の成長を喜ぶとはこっぴつことなのか、と悟ったような気分　　本当かどうかは知らないけど　　になる。

「へー、ぶい……？」

そんな思いは顔に出さないようにして、普段通りに奏に話しかける。

「あの、　　です」

「いいよ、じゃあそこに行こうか」

だけど、後からこんなふうな軽い返事をした自分を呪ってやりたくなつたのは当然だと思う。

?
?
?
?

そんなわけで、

「わあ」

一目散に顔を輝かせて店内へ入って行く奏。

「あのー、奏さん……」

僕の声ももう届かない所にまで入り込んでしまっている。
そうになると、店先に一人取り残されるわけで……

「
」

周囲から無言の視線が突き刺さるのがよく分かる。

それが好意的ではないということも。

奏さん、取り残される方としては、少しはこちらのことも考えていた
ただきたいのですが。

とはいえ、いくら契約しているからといって、そんな思考が黙って
いるのだから伝わる訳もない。

逃げ出したいけど、奏一人残して外に出る訳にもいかず……

はあ、しばらくはこの視線に耐えなきゃいけないのか

と、思った矢先。

「あの、智春くん」

奏が戻ってきた。

お陰で周囲からの視線が少し柔らかくなったのが分かる。

「行きましょう」

「う、うん」

珍しく奏の方が僕を先導している。

いや、この場所で僕が先導してもそれはそれでおかしいだろう。
なんせ、今僕たちがいるのは

ファンシーショップ

男性が率先してはいる場所ではない事だけは確かだ。

「わー、かわいい……
あ、こつちも……」

僕自身はやることが無いから、ぬいぐるみを物色している奏の傍に
いるだけだ。

たまに意見を求められるが、

「うん、かわいいと思うよ」

ぐらいのことしか言えない。

ぬいぐるみのことなんて全く分からない。

それでも、あからさまに否定するのは奏の趣味を否定してるみたい
だし……

かといって、奏の趣味は諸手をあげて賛同するほどでもないのだ。

入ってしばらくは普通のクマとか、犬とか、ウサギとかを物色して
いたのだが、段々と人が余り寄っていないスペースに移動していた。

そこは爬虫類とか海洋生物　ラッコとかイルカみたいなメジャー
なものではない　のスペースだった。

基本、デフォルメ化されているからあからさまなものはないんだけ
ど……

「……これ、星、か……?」

奏に渡されたぬいぐるみの中の一つを眺めながらつぶやく。
そんな独白が聞こえたのか、

「違います」

「うわっ!?!」

か、奏……?」

いつの間にか近くに寄ってきていた奏が、やんわりと僕の言葉を訂正する。

「これは、ヒトデです」

「ヒトデ……?」

「はい、ヒトデです」

「……………」

あまりにも自信満々に言うものだから、納得されなかった。そして、黙り込んだ僕を見て納得したと思ったのか、奏は再びぬいぐるみを物色する作業に戻って行く。

「……………ヒトデ……?」

もう一度手元にあるぬいぐるみを覗き込む。確かに、星にしては色が派手だし、真ん中には口?みたいなものが描かれている。

……………あまり可愛いとは思えないけど……
初めてこっちの世界に来てから、奏のことに対して疑問を覚えた瞬間だった。

?
?
?
?

結局あの店では、ヒトデ？と蜥蜴？のぬいぐるみを購入し 勿論
出費は僕の財布から 、今は映画館に向かっている。

時間も空いたことだし、奏も特に行きたい場所が無くなっていた。
それなら、映画館もあるのだから、ということウインドウショッ
ピングをしながら映画館に向かっている。

途中、興味が惹かれるものがあつたら寄ってみることにしていたけ
ど、今のところ僕も奏もそういった所はない。
だから、とりとめのない会話をしながら映画館に足を進める。

・
・
・
結局互いに興味が惹かれるものがあまりなかったようで映画館につ
いてしまった。

で、問題は何を見るかという事なんだが……

「……【Demon Hunter】、【何はともあれ金！！】、
【機巧少女マキナ】、【君と同じ日】か」

……正直言ってタイトルを見て頭が痛くなつたのは僕だけだろうか？

【Demon Hunter】のスポンサーは佐伯グループ

【何はともあれ金！！】のスポンサーは洛芦和高校第二生徒会

【機巧少女マキナ】のスポンサーは王立科学狂会

一つだけマシなものがあることに感謝するべきなのかどうか……非
常に悩む。

分類で分けるなら、一つ目がSF、二つ目がコメディ、三つ目がア
ニメ、四つ目が恋愛、といったところだろうか。

これなら、来ない方がよかつたんじゃないかとも思う。

「奏は、どれが見たい……？」

同じように困った顔になっている奏に聞いて見る。

といつても一つぐらいしか選択肢はないんだけど……

「【君と同じ日】、で……」

「……それしかないよね」

「「……はあ……」」

自然、二人揃って溜息が漏れる。

それにしても、こんな所まで影響してるなんて思わなかつたな。思考が変な方向に向かいそうになるのをぎりぎりで食い止める。

とりあえず時間はちょうど良かったので、券とポップコーンなどを買って指定された席に向かう。

せめてこれはマシであってくれ……！！

結論から言おう。

良くも悪くもなかつた。

ストーリー自体は悪くなかつた。

病気で余命数カ月のヒロインが云々、といった所は凄くベタだとは思つたけど、その後の超展開は見ていて面白かつたし、以前の奏の事があつたからどことなく共感できた。

だけど、演じている役者が凄く下手なのだ。

棒読みが6割ぐらい入っているし、表情とセリフがあっていない。

だから、

「うーん」

「……………」

僕は頭を捻っている。

僕は結果が不十分だったため、満足できなかったからだが、奏は違うらしい。

今日一日楽しそうにしていた雰囲気から一転して、翳を背負っている。

「智春くん」

映画館を出て、近くにあった広場のベンチに座りながら話しかけてきた。

「覚えてもらえてる、って良いですね……………」

「……………」

そんな彼女の言葉に僕は黙っていることしかできない。

映画の最後でヒロインは死ぬ。

だけど、その時のセリフが、

『私が死んでも、貴方は私を覚えていてくれるでしょ……………？』

それだけで私は十分よ』

といったセリフだったのだ。

月並だろっし、よくある言い回しだと思う。

だけど、悪魔との恋愛でその言葉は重い。

悪魔が非在化して死んでしまう時 勿論寿命で死ぬこともある、想い人との絆は限界まで薄くなってしまうている。

雄型悪魔の場合は相手の事を忘れてしまう。

だから、自分が何故消えていくのかもよく分からないまま消えていくのだろう。

雌型悪魔の場合は自分が自分の事を忘れてしまう。

実際は、雄型悪魔の様に忘れるという訳ではないのだろう。

加賀篝もクルステイナさんの事を忘れたわけではなかった。

ただ記憶が記録になってしまったのだろう。

契約者は相手と自分がどのように過ごしてきたのか覚えている。

ただ、そこに何の感情も見出せなくなってしまうのだ。

一方の悪魔は全て覚えてたまま消えていく。

どちらも、世界のシステムになってしまっている以上僕たちにはどうしようもない。

だけど、一般の人間同士の恋愛のようにいかないのだ。

「智春くんは、覚えててくれますよね……？」

「当たり前だよ」

僕も奏もそうなってしまった悪魔を以前の世界で見てきた。

クルステイナさんと加賀篝、鳳島蹴策と氷羽子の兄妹、以前の世界での社長。

彼らの姿が目には浮かぶ。

「それでも、不安なんです。

いつか、私も、忘れられてしまっくんじゃないかって……」

「そんなこと……!!」

「分かっています」

「奏……」

奏はあくまで静かに語っている。

「分かっています、けど、不安なんです……」

それは、僕に負担をかけない為か、自分で抑え込んでいるようにも見えた。

よく見れば、隣に座っている彼女の肩が震えている。

僕が思っていた以上にさっきの映画は奏の不安を煽ったものだったみたいだ。

「大丈夫だよ。

例えば、奏との思い出を忘れても、それこそ今日の事を忘れたとしても、また新しい思い出をつくって行こう。

これからそんな機会はいくらでもある」

奏をそっと胸の内に抱きしめる。

嫌がる様子もなく、僕に抱かれたままになっている奏。

胸が湿ってきていることには何も言わないでおこう。

僕が言ってることは奏の不安を払拭するものじゃないし、一時的なごまかしなのかもしれない。それでも思ってることは本心だ。想い出が失われていくというなら、新しく作ればいい。奏に対しての気持ち冷めていくというのなら、再度彼女に対しての想いを熱く熱していこう。そう、改めて誓った。

・

暫く経って、奏も泣きやんだけど顔を胸に埋めたままだ。

幸い周囲に人があまりいないから良いけど、こんなとこ誰かに見られたら……

「あ」

そんな風に思った時だった、その声が聞こえたのは。

ギ、ギ、ギ、ギ、ギ

錆び付いた機械の様に首を動かしてそちらの方を見る。そこには、

「へー、夏目さんと蒿月さんってそういう関係だったんだー」

僕たち二人を見ている大原杏という少女の姿があった。

幕間 Resurrection Loss (前書き)

アンケート結果に伴い、話の方向性もほぼ決まりました。

結果としては、黒鐵・改です。

賛否両論あると思われませんが、アンケートの結果ですので納得していただけると思います。

今回の話は幕間ですので極端に短いです。

近日中にもう一話投稿する予定です。

幕間 Resurrection Loss

.....ト.....

誰だ……？

誰かが喋っている。

僕の意識自体がはつきりしていないからだろうか？

あまり声が聞こえない。

.....ト.....モ.....

周りは白い闇

自分と空間の境が分からなくなる。

.....ト.....モ.....
.....ソ.....コ.....ニ.....

聞こえてくる声は、いつだったか聞いたことがあるかのような声。
ただ、ノイズがかかっているのか雑音に掻き消されてほとんど聞こえない。

.....コ.....ン.....ド.....ハ.....
.....ワ.....タ.....シ.....ガ.....

聞こえる声から感じられるのは、

切望・歓喜・悲哀・消失

といった感情のうねり。

だけど、その声を聞いても不安を覚えることはなかった。
むしろ、入学式の日に奏に感じた安堵に似た感情が蘇ってくる。

・・・マツテ・・・テ・・・

その言葉を最後にその声は聞こえなくなった。

?
?
?
?

『トモ、朝だよ』

操緒の声が僕に覚醒を促してくる。

「ふあゝあ」

学生なら普通はまだまだ寝ていられる時間だけど、僕の場合はその
時間じゃ間に合わない。

だから、布団の中に蹲りたい願望をはねのけ体を起こす。

『おはよ……って、どうしたの?』

寝惚け眼をこすりながら僕の顔を見ていた操緒が突然驚きの声をあ
げる。

だけど、別に心配した声という訳ではない。

純粹に驚いているだけだ。

「……………なにが……………?」

とはいえ、僕も寝起きで何がどうなってるのか全く分からない。操緒が何に驚いていて、その原因が僕にあるのだということぐらいしか分からない。

『……………ほんとに分らない……………?』

「だから、なんのことなのさ……………?」

互いに疑問に疑問で返すという下手したら收拾がつかない状態に朝からおちいつている。

サッサと動き出さないと学校に遅れるんだけど……………

『涙』

「え?」

そんな風に思っていた僕に操緒からかけられたのは予想外の言葉だった。

『泣いてるよ、トモ……………』

そう言われて、手を顔に持っていく。手が頬に触れると、

「……………え……………?」

確かに自分のそこは濡れていた。

しかし、自分で認識した事によって止まることもなく、逆に止め処なく溢れてくる涙に戸惑ってしまふ。

「……………どうして……………？」

自分でも何故自分が泣いているのか分からない。

悲しくも嬉しくもなっていない。

だけどその事で不安になったりすることもない。
むしろ、何かすっきりした気分だ。

『夢で何かあったの……………？』

「夢？」

言われてみれば原因はそれしかないような気もする。
起きてすぐだし、寝る前は特に何もなかったんだから。

「……………あれ？」

『どうしたの？』

「いや、何か見たような気はするんだけど……………」

だけど、どんな夢を見たのか全く覚えていない。

普段だったら多少引つかかるだけで、それ以上何かあるわけでもないけど、今回は自分が泣いているんだ。

気にならないわけがない。

必死に頭を捻りながら思い出そうとしていると、

『……………げ！！』

トモ!!

時間!!」

時計を見た操緒が異様に興奮しながら話しかけてくる。

「なんだよ、今いいとこ……」

その意味するところは、

「ヤバツ!!」

普段行動を始める時間より、15分ぐらい遅くなっていた。速くしないと、学校に遅刻する……!!

操緒に急かされながら、着替えを終え、いつものトレーニングを始める。

普段よりも急ピッチで。

その時にはもう夢の事は頭からすっかり抜けてしまい、涙も止まってしまうていた。

?
?
?
?

少年は生きる

そこに不安はない

あるのは後悔

少女を犠牲に自分が生きたこと

それは他の少女たちにも楔となる

その楔がどうなるのか

他の少女たちが薄めるのか

少年が忘れるのか

この世界の少女が許すのか

それとも……

真の意味での彼にとっての救済とは……

今は願おう

それを少年が得られるであろう可能性が辿り着く事を

12回 発端は誰？（前書き）

今回、というか以前から青月組のことを書いていて、主要人物なのに社長たちにしつかりとした名前がないので非常に書きづらく思いました。

と、言う訳で、何かいい名前の案がありましたらお書きください。

アンケートとかいう訳ではないです。

単に、その方が今後も楽だろうなあ、と言う作者の発想です。

別に今のままでいいと思われるならこのままでいきます。

12回 発端は誰？

「勉強会……？」

「はい」

いつもの様に嵩月家で三人で勉強をし始める前に、奏の口からそんな単語が飛び出してきた。

「誰がそんなこと……」

僕と奏の二人だったらそんな話は出てこない。

そこに樋口が加わっても同様だ。

何だかんだで僕たちもあいつも成績は 今のところ 良いから。操緒が解放されていたとしてもないだろう。

操緒も今は僕と奏が先行し過ぎているだけで、中学一年の今の時期に習うべきことはとくに習得している。

そうなるに残りの選択肢は割と限られてくるが……

「あの、杏ちゃんが」

「ああ」

その答えを聞いて納得した。

確かに、杏の成績が良いという話を僕は余り聞いたことがなかった。少なくとも前の世界では、テストがあるたびに追試と闘っていた記憶がある。

そして、それはこの世界でも彼女が僕の知っている大原杏と同じように育ってきたのであるのなら、あまり変わらないのだろう。

『なになに、大原さんって頭悪いの？』

操緒が話に入ってくる。

「いや、頭自体は特に悪くはないんだけど……」

『え……でも、この時期のテストでヤバかったんでしょ……？』

それなら、相当ヤバいんじゃないかという判断なのだろう。

実際、その判断は間違っているわけではない。

普通の考え方ならむしろそちらの方が正しいのだろう。

「まあ、こつちでもそうらしいけど。

何と言ったらいいのか……」

個人的な判断だし身内贔屓かもしれないけど、杏はそれこそ世間一般でいわれている“頭が悪い”ではないと思う。

杏は要領が極端に悪いんだ。

単に一つの事に集中し過ぎやすい性格だから。

部活をやっているときは部活に集中しまくってるし、家の手伝いのときは手伝いを頑張っている。

その分、それらの事ではそれなりにしつかりした成果をあげていたけど、その二つの割合が多いせいかあまり頭が勉強に向かないのだ。

流石に、試験期間で部活が休みになったりすると家の手伝いも中止になり、勉強に集中しないといけなくなる。

だけど、今迄あまり勉強をしてこなかった分何をすればいいのか分からずに戸惑い、ようやくやるべきことを見つけた時には、既に遅く試験前日だったりするのだ。

そのことで同学年の陸上部員が連帯して彼女の勉強を見ていたという思い出がある。

学業の成績は良い方ではなかったけど、部活での成績はかなりいい方だった。

だから、そんな彼女が成績が悪くて部活を辞める事態におちいるのは先輩たちも避けたかったんだろう。

そのため、彼女が止めなくて済むようにさせて成績が良くなかった僕も彼女の勉強会に駆り出されていたのだ。

だから、この世界でも似たような事態になるのだろうと思って気にしないようにしていたのだけど……

その事を操緒と奏の二人に説明する。

『へー………つて、あれ？』

じゃあ、なんで勉強会なんて話になったの？』

コクコク

操緒が当然のように疑問を口にする。

奏も同意するかのように頭を縦に振っている。

「さあ………？」

当たり前のように疑問を僕に振られても困るのだ。

僕が知っているのはあくまで以前の世界での状況であり、この世界で否がどうしてそんな答えに辿り着いたのかは僕も推測ぐらいしか分からない。

そして、その事をいくら話したところで現状解決にはならないと思うんだけど……

『それでもいいから話しなさい。』

今私たちの中で一番大原さんの事を知ってるのはトモなんだから』

その事を口にしたところ、操緒から話すようにとの命令が来た。奏も、話して欲しそうにこちらを見つめている。

まあ、不安なのは分かる。

先日の一件が効いているのだろう。

なら、話そうか。

別に、話したところで誰に損があるわけでもないし、外れているかもしれないんだから。

「多分だけど……」

『「うん」』

「一番近い所にいたからだと思う」

「え？」

『どっぴいっこと？』

流石にこれだけじゃ分からないだろう。

分かったらそれだけ杏の事をよく知ってる　僕もそんなにすごくよく知ってるってわけじゃないけど　人間だ。

「この前デート中に杏に会ったでしょ？」

「はい」

操緒も頷いている。

まあ、後から話したのだから知ってて当たり前だし、奏は当事者だ

知らない方がおかしい。

「あの時、僕たちに会うより前におばさんかおじさんに『勉強しろ』みたいなことを言われてたと思うんだ。

それでどうしようか悩んでる所で僕たちを見つけた。

今回の世界では、奏だけじゃなくて僕も成績が良かったし、その事は何でかクラスみんなが知ってる。

だから、これ幸いと頼ることに決めたんじゃないかな？

いざとなったらあの時のことというか、僕と奏の関係をネタにすればいいんだろうから」

口にして改めて考えてみるとこの間の杏の行動も非常に納得がいく。

この間杏に見つかった時は、流石にばれたものだと思った。

この頃、というかまだ杏とはあまり会話をしていなかったから、僕たちの事を思っただけで行動する程の仲ではなかったのだから。

だけど、予想に反して杏は特に僕たちのことを言いふらす気はないと言っただけで行った。

慌てていた僕と奏が滑稽に見えるほどその去り方は格好良いものだった。

……やたらと顔を綻ばせて、今にもスキップしそうな雰囲気ではなかったらだけど……

それに、杏が僕と奏を発見し、多少なりとも会話をして去っていくまで僅か1分。

僕らが杏に対して不信感を覚えるほどに十分すぎるほど短い時間だった。

……まあ、今奏から話を聞いてその不信感もほぼ消え去ったが……

『おー、成程成程。』

十分納得がいく推論だよ。

トモつて意外と頭いいんじゃない……？』

「……別に……」

杏と付き合いがある程度ある人なら、これぐらいはだれでも想像がつくよ」

褒められて悪い気はしないが、“意外と”は余計だ。

「むー」

「……どうしたの、奏……？」

納得したような雰囲気操緒とは逆に、奏はどこことなく不満そうだ。

「……いえ……」

「なんだか、私たちの仲が利用されてるのが……」

「ああ、それに関しては大丈夫だよ。」

「杏はそこまで無粋じゃないはずだから」

今回の件は、単に杏自身も狙ってやったわけじゃないと思う。

偶然僕たちと話すきっかけができて 面倒見が良いからか普段から話そうとはしていたけど その相手がたまたま成績が良かっただけなんだ。

それに、純粹に僕たちと仲良くなりたいたいだけだと思う。

そこは以前の世界で中学三年間を一緒に過ごしてきた、はっきりと断言できる。

その事を話すと、

「そう、ですか……」

奏も納得がいったようで不安そうな顔も無くなった。ただ、操緒がふざけた調子になりだしたのが凄い不安を煽る。

『へー、それにしてもトモって大原さんのことよく知ってるね。』

……ひよつとして奏ちゃんよりも、大原さんの方が好きなんじゃないの……？』

「は？」

あまりにも予想外のセリフが操緒の口から発せられる。自分でも全く考えていなかったから、固まってしまっ

「そ、そうなんですか……！？」

若干顔を青褪めさせながら奏がすごい勢いで迫ってくる。その眼には涙が浮かんでいるような……

「いや、違うよ。」

いまのはあくまで操緒の冗談であって……」

必死に誤解を解こうとするが、

チャキ

「へ……！？」

気がつけば社長を筆頭に嵩月組の皆さんに取り囲まれていた。

いつのまに……!!?

「婿殿……」

凄く低い声音で社長さんに話しかけられる。

「は、はい!？」

「あなたなら奏の事を任せても良いと思っと思ったのに……残念じや……」

ドスを構えてたり、手の先に炎が纏わせてあったり、全身から炎を噴き出してる人もいる。

チヨツ……!!

展開が唐突過ぎませんか……!!?

「ご、誤解ですって……!!」

必死に話して、理解してもらおうとする。

そうしないと、僕自身の命が危ない。

冗談抜きで……!!

「操緒、おまえからも……!!」

そう言っつて、こんな事態を引き起こした張本人に事態を回収させようとするが、

『トモも酷いね、奏ちゃんというものがありません』

「ほら、しつかりするんやで奏」

って、なんで騒動を引き起こした張本人が当然のように安全圏に避難してるのさ……!?!?

お祖母さんも奏を慰めるのは確かに大事ですけど、こっちの事も少しは気にかけて!!

というか、奏がそうなってること自体誤解なんだってば……!!

「覚悟はできたかのう……?」

僕に向けられる殺気が限界まで高められていく。

って、覚悟なんてできてるわけないでしょうが!!

それこそ本当に僕がそんな風に想っているのなら、この状況も納得はいくし覚悟もできるかもしれない。

でも、今の状況でそれはない!!

クソツ!!

社長が暴走したら、止められるのはお祖母さんか奥さん、もしくは奏か八枝さんの4人だ。

そのうちの4人で今一番手っ取り早いのは……

お祖母さん・奏を慰めるという方向で行動している。

社長の奥さん・姿が見えない。

そういえば、今日は近所の奥さんたちと買い物をするに行くとか言っていた。

八枝さん……同じように姿が見えない。

どうせ、ペルセフォネの所にいるんだろう。

奏……俯いて涙ぐんでいる。

ということとは、この4人のうちで一番可能性が高いのはお祖母さん

か奏のどちらかだろう。
お祖母さんか奏を説得するなら、問題の解決という点からも奏の方がいいのかもしれない。
よし、方針は決まった。

ここまで1秒

こうなったら一刻も早く奏の誤解を解いて……

つて、一番遠い 構成員の方々の密集率が高い 所にいらっしやるうーっ!!

あの面々を掻き分けて行くのは流石にきついが、やらないと自分がどうなるか分からない。

……こうなったら……

「 ペルセフォネ!!! 」

僕の周囲に炎が渦を巻き、僕と奏のドウターが現れる。

「 キュルルルー!!! 」

現れたペルセフォネは、

「 ……は……? 」

餌を啜えているという少々間抜けな格好だった。

「 キュル? 」

すぐに餌を飲み込み周囲を見回すペルセフォネ。
それだけで、主人の危機をすぐに察してくれたのか臨戦態勢になる
ペルセフォネ。

ここまで10秒。

社長たちは、ペルセフォネの出現の際に一瞬怯んだが、すぐに元の
殺気を宿して僕の方を睨んでくる。

ただどこかところで役に立つとは思わなかったけど、橘高道場で
の鍛錬が役に立っていた。

だって、あの二人思いつき殺気込めて僕に攻撃してくるんだから
！！

おかげ？で何とか普通に殺気で怯むことはなくなった。
というわけで、

「行くぞ、ペルセフォネ！！」

「キュルルルー！！」

目標は、奏。

もしくはお祖母さん。

・
・
・
・
・

結果

ペルセフォネが消えたことで異常に気づいた八枝さんが社長たちを
止めてくれた。

この一件でこの組の実質的なトップは八枝さんなのだと実感し

た

奏は懇切丁寧に説明したので、なんとか納得してくれました。

操緒にも今後は余りその手の話題で弄るのはやめるように言っておいた。

……まあ、あの雰囲気から察するに十中八九徒労なんだろうけど……

13回 橋高道場（前書き）

まずは謝罪を。

およそ2週間放っておいてすみませんでした。

そして、気づけばPVが6万件、ユニークが1万件を超えていました。

ありがとうございます！！

今後はまた週一で書いていきたいと思えます。

13回 橘高道場

とある休日

いつものように橘高道場で秋希さんたちにボコボコにされる僕と、それをぼんやりと眺めている操緒。

平日であれば奏がついて来ることもあるが、休日なのでそれはない。今頃お祖母さんたちに投げられていることだろう。

「……ふむ、一先ず休憩にするか」

「……は、はい」

どこか浮ついた様子の秋希さんがそう話しかけてくる。

秋希さんにとってはちょうど良いタイミングだったのだろう。

僕もその誘いを断るなんてことはしない。

むしろ、こちらにとっては待ち望んでいた言葉だ。

確かに強くなりたくて道場に通ってはいるけれど、それとこれとは話が別だ。

休めるのなら休んでおきたい。

しかも、相手が秋希さんであるのならなおさらだ。

『トモお疲れー』

「ああ」

操緒が声をかけてくるが気の抜けた返事ぐらいしかできない。

初めの頃はその返事すら出来なかったのだからかなりマシになったのだろう。

技術的なことではなく、体力的な意味でだけ……

そんな風にして休憩していた時だった、

「やあやあ、皆さんお疲れ様です」

そんな声が聞こえてきたのは。

操緒を見上げていた視線をそちらに向ける。

そこにいたのは、一人の少年？だった。

青年というほど歳を重ねてはいないが、少年という区分にあてはまるのかどうかは微妙だ。

普通の男性よりも痩せ気味な体躯だが、背はそれなりに高い方。

170ぐらいはあるんじゃないだろうか。

こざっぱりとした短髪に、丸眼鏡。

美少年というほどではないけども、端正な顔立ち。

そして、僕は彼の事を知っていた。

もっとも、今日の前にいる彼では無く、3年後の成長した彼の姿だが・・・

あちらの印象が強すぎたためか、目の前の男性の姿に違和感しか感じられない。

僕と奏や操緒、それにアニアを1巡目に移動させた原因。

洛芦和高校科學部部长で、鋼の演操者でありながら鳳島氷羽子の契約者だった魔神相剋者^{アスラクライン}。

？塔貴也

勿論、今の彼が僕の知っている部長ではない事は分かっている。

以前の僕だったならそれでも嫌悪感を隠せなかっただろう。

だけど、秋希さんと冬琉さんに普段から扱かれているお蔭？で、前の世界との差がよく分かるようになった。

だから、特別驚きもしない。

？家と橋高家が隣り合ってるのも、その子供たちが幼馴染だとい

うことも知っていたから別にここに部長がいてもおかしくないし……
まあ実際はそんな理屈云々以上に、道場に突然入ってきた乱入者を
相手にするような体力が残っていないのだけれど……

『……………誰……………？』

僕は知っているから勝手に自己完結していたけど、操緒は頭に疑問
符を浮かべている。

一応教えてあるはずなんだけどな……

……………まあ、僕と奏が伝えたイメージは引き籠っていた結果の部長と
暗躍してた部長だからあんな爽やか好少年？の姿じゃ分からないか
もしれない。

かと言つて、今ここで操緒と会話するのは得策じゃないし……

後で説明すればいいや

そう思つて視線を操緒から道場に入ってきた部長に視線を戻す。

どうせ秋希さんか冬琉さんに用事があつてきたのだから僕には
関係ないし。

そんな気楽な気分で彼らの事を見ていた僕には気付けなかった。

周りにいた他の門下生の方々が音をたてないようにそろそろと道場
から出て行っているというのを……

?
?
?
?
?

本気の10分の1程度の力で左右の木刀を振る。

目の前にいるのはつい数週間前に入門してきた子ども
夏目智春
だ。

本来なら10分の1程度だろうと付いてこられるわけがない。

私も冬琉も、それこそ他の門下生たちも何年も鍛錬や実践を積み重ねてきた上で今の力がある。

その力に数週間程度の人間が付いてこられるわけがない。

まあ、例外もあるだろう。

一般的にそう言った人間は天才と呼ばれる。

常人が習得するのに数カ月、あるいは何年もかかる技をわずか数日や数週間で習得してしまったり、自身で新たな武術を創り上げてしまつ　　実際に使つていけるものに限る　　人などがそれに当てはまるだろう。

振るつた木刀は大雑把だが二本とも避けられる。

だが、この少年はその様な部類ではない事はこれまでの鍛錬を見てきて分かっている。

未だに剣術　特に二刀流　の技術を習得する程ではないし、か
とって冬琉の様に、もしくは普通の剣士の様に　　こういうと二
刀流がおかしく聞こえるがそう言う訳ではない　　一刀の方に適性
があるかというところ言う訳ではない。

もともと剣術にあまり適性がないのだろう。

だが、それ以外の武術も少しは試させてみたがやはりしっくりこない。
い。

おかしな言い方だが、武術全般に適性がないにも拘わらず二刀流だ
け(.....)多少なりとも適性があるように見えるのだ。

避けた先から次に繋がっているようには見えないのに、私に攻撃を加えようとしてくる。

だから、今は可能性が少しでもある二刀流を重点的に教えているわけだ。

二刀流だけではなく他の無手の状態での技や、棒術、短刀術等も今後教えていく予定ではある。

とはいえ、それはどんな状況にでも対応できるようにするためであつて、本筋は二刀流のままいく予定だ。

だが、それもどこまでいつても二流のままだろう。

一流に限りなく近づぐことはできるだろう。

それでも、決定的な才がないのだから一流にはなれないはずだ。

これがこいつの彼女　本人たちは否定しているが　であればまず間違いなく一流になれるだろう。

一度手合わせしたが、あの歳で既にそれなりの領域に足を踏み入れたりつたつた。

加えようとしている攻撃を、相手の腕に力が入った瞬間に腕ごと叩き据える。

あのまま進んでいけばまず間違いなく一流の武者になれるだろう。それこそ、この道場に今いる誰よりも。

話を戻すが、目の前の少年ではその領域まではいかないだろう。

であれば、何故この短期間で多少なりとも私と打ち合えているのか。最初にこいつに木刀を振るって向かっていった時も今と同じ程度の力だった。

本来初めての奴に振るう速度ではないが、こいつがどれほどの力を持っているのか判断したかったのだ。

特に何かしていたわけでもないのに、嵩月組のトップ二人の名前が

出てきたのだ。
気にならない方がおかしいだろう。

叩き据えられた夏目は、手から取り落とした木刀を私目掛けて蹴り上げてきた。

夏目は自分に向かってきた木刀に対して何かをしたわけではなかった。

かといって、私の振るった木刀が夏目に当たったわけでもなかった。避けたのだ。

決して華麗とは言えず、むしろ醜態をさらしたと言っても良い程に無様だったが、それでも私の振るった木刀を　本気ではないにしろ　避けた。

その事実纯粹に驚き、次に彼の言った言葉になおのこと驚いた。

『い、いきなり何するんですか!!』

【いきなり】

つまりは全く予想していなかったということ。

演技の可能性が全くない訳でもなかったが、その可能性は非常に低い。

ならば、本当に咄嗟の反応だったのだろう。

蹴り上げられ、回転しながら向かってくる木刀をそのまま夏目に打ち返す。

それなのに避けられた。

不思議だったが、一先ずその場は適当な言い訳を言って誤魔化しておいた。

その後も様々な場面で攻撃を仕掛け検証した結果、一つの結論に至

った。

打ち返された木刀に反応できず、今度はその木刀が腹へと突き刺さる。

夏目は他人と比べて動体視力と反射神経がかなり高い。

モノを見て情報として捉えてからの行動が他人の数倍は速く行えている。

それが生来のものなのか、鍛えた結果なのか、適応した結果なのか分からないが原因は分かった。

であれば、鍛え方はそれなりに方向性を決めることができる。

まさか打ち返されるとは思っていなかったのか、顔を苦痛で歪めながら後ろに下がり私と距離をとる。

その際に木刀を回収するのも忘れていない。

今はその方向性を考えている段階だが、夏休み辺りからは本格的に始められるだろう。

それに、あの二刀をこいつになら任せられるかもしれない。

休みといえは……ああ、今日はあいつと出かける約束があったか。

ふと時間を確認すると、大体良い時間になっていた。

「……ふむ、一先ず休憩にするか」

「……は、はい」

そう告げると返事をすると同時に腕を下ろし、壁際までのそのそと先程までの素早さなど嘘のように歩いていく。

そんな夏目を視界に捉えながら、耳は新たに道場に入ってくる人間の足音を捉えていた。

「やあやあ、皆さんお疲れ様です」

そう言いながらそいつは入ってきた。

「こら塔貴也ー!!」

ここは道場なんだからしっかりと背筋を伸ばせ。

それから、シャツの裾を出すな」

毎度毎度だらしのないのを治せと言っているのだが中々治らない。
最近では若干諦めつつある。

「ああ、ごめんごめん。」

次からは気をつけるよ」

「そう言っって今まで直してきた事があったか……?」

若干恨みがましい感じで睨んでみる。

「ハハハハハ、そんなことよりそろそろ時間だよ」

「ああ、そうだな。」

じゃあ、冬琉後は頼んだ」

「……ええ……」

今日は久しぶりの塔貴也とのデートだからな。
冬琉には悪いが楽しませてもらうとしよう。

「ふふ」

自然と口が綻ぶのが分かる。

まあ、特に誰が困るわけでもないし良いか。

あ、そう言えば夏目に塔貴也のことを教えるのを忘れていたな。

……また今度にしよう。

今からじゃデートの時間が減ってしまうしな。

? ? ? ?

「ふふ」

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ……」

そうよね塔貴也と秋希ちゃんは今昔からいつも二人でいちゃついて私がいるのもかまわずに……」

語尾に マークが付いているのがはつきりと分かるほど浮かれながら秋希さんは道場を出て行った。

逆に冬琉さんの機嫌は急降下しているようで、そちらの様子を見るのが怖い程暗い負のオーラを纏いながら、道場の隅の方でぶつぶつと独り言を呟いている。

「……………」

あの姉妹にこれだけの影響を与えるとは、流石？塔貴也……！！

などと驚いていたが、そこでふと気付く。

……あれ、もしかして僕があゝ冬琉さんの相手しなきゃいけないのか……!?

咄嗟に周りを見渡すが、秋希さんと塔貴也さんは言わずもがな、同じように休憩していた門下生の方々もいつの間にか姿が見えなくなっている。

僕の傍に浮かんでいた操緒もいつの間にか姿が見えなくなっていた。

逃げ遅れた!!

その事に思い当たり、僕も急いで道場から出ようとした瞬間だった、道場の隅にいた冬琉さんが立ち上がったのは。

ガッ!!

立ち上がると同時に自分の近くに置いてあった木刀の柄を掴んで幽鬼の様に、ゆらり、と僕の方に体を向けてきた。

因みに、今冬琉さんが持っているのは彼女用の特注の木刀で野太刀

(冬櫻)型の木刀だ。

普通の人だったらまず扱えないだろう。

重さは普通の木刀よりは当然の様に重い。

かといって普通の人には扱えないかというところ言う訳でもない。

女性には重いだろうけど 冬琉さんとか秋希さんとか朱湮さんとかは別 男性にとってはそれなりの重さ程度だろう。

……まあ、実際に使うとしたら重さに振り回されて碌な事にならないだろうけど……

問題は長さだ。

冬櫻を思い出してもらえれば分かるだろうけど、明らかに高3当時

の冬琉会長の身長よりも長かった。

因みに、冬琉会長身長はあの時の僕とほとんど同じだったから160代後半の筈。

(公式では智春が168cm、冬琉が167cmです)

それを前回の世界より3歳ほど低い(若い?)彼女が使っているのだ。

木刀が地に着かないようにするにはそれなりに腕に力を込めないといけないか、柄の部分じゃなくて刀身の部分を持たなきゃいけないんだろう。

……だから普通は無理な筈なんだけどなあ……

当たり前のように刀身は浮いている。

……そんな風に何だかんだと現実を忘れ去っていた僕だけど、

「さあ夏目くん……始めましょうか」

冬琉さんがゆっくりと迫ってきた。

一歩歩くごとに背負っている闇が増しているような気がする。

ただその背中とは対照的に顔は凄く晴れあがった笑顔で嗤っている。

「……ナ、ナニヲデシヨウカ……?」

自然、対応する僕の言葉も片言になってしまっている。

逃げようにも道場の入り口は僕から見て正面、つまりは冬琉さんの斜め後ろ。

無視して入口に行くのは無理だろう。

「何って、決まってるじゃない」

……決まってるんですか……
というか、決めないでください。
僕にも色々あるんですから……

「……ソノキマツテルコトトハ、ナンナンデシヨウカ……？」

その僕の言葉に、にこり、と更に笑みを深めて近寄ってくる冬琉さん。

「死合」

字が!!

字が違う気がするんですけど!!

「ホ、ホンとニ試合なんデシヨウか……!？」

「当たり前じゃない、他に何があるっていうの……?」

嗤いながら言わないでください!!

そんな顔じゃとても信じられません!!

「ごちゃごちゃ言わない……行くわよ!!」

問答無用!!

とでも言うように冬琉さんが向かってきた。
選択肢は……

1…逃げる

2…戦う

3…抱きつく

1はできるのならとつくにやってる!!

3は……って、なんだよ抱きつくって!?

……ということは……2?

無理無理無理無理無理無理無理無理無理

あんな好戦的な冬琉さん相手に出来ないって。しかも、全く手加減する気配が見えないし。それでも、やるしかない……!!

ごめん、奏

先に逝きます。

お母様先立つ不孝をお許しください。

操緒、道連れにするみたいになってごめん。

最後に冬琉さんせめて優しくしてくださいね。

「さあて、逝きますか」

そう呟いて両手の木刀を握り締め、正面に移動してきた冬琉さんを見据える。

……どれぐらいもつかなあ……

13回 橘高道場（後書き）

塔賣也と智春の絡みはもうしばらくお待ちください。

14回 ツンツン(前書き)

今回初めてオリキャラが出ます。

(嵩月母とかモブキャラは除外)

今後割とガッツリ絡んでくる予定です。

一応あとがきにちょっとした設定を載せておきます。

完全なオリキャラは、あまり出さないように書いていこうと思っ
て、出してもあと一人か二人ぐらいな予定です。

14回 ツンツン

「おい、大丈夫か!？」

冬琉さんによつてボロ雑巾と成り果てた僕を助けてくれたのは、他の門下生の人だった。
冬琉さんは、僕が倒れ伏すとサッサと道場から出て行ったから助けてくれるはずもない。

「……………な、なんとか……………」

それだけ言つて再び床に突つ伏す。

一応急所だとか内臓とかは狙わないでいてくれたし、骨折などの大怪我はしていないから大丈夫だ。
それでも、全身打ち身状態で体に入力するだけで体中に激痛が走るし、体力もゼロだ。
当分動けそうにない。

「ハハハ、sonだけ喋れりや大丈夫だろ。

早く動けるようになれよ」

「……………無茶言わないでください。

こうして喋るだけで精一杯なんですから……………」

「いや、それでもたいしたもんだぜ。

俺たちも最初それをやられた事があるんだが……………」

マジですか。

というか、これってこの道場ではちよくちよく起きてる事なのか……………」

堪ったもんじゃない。

「俺たちは小一時間喋ることすらできなかつたからな。それに比べりゃお前はマシだよ」

「……マシって……どこが？」

これがマシって本来だつたらどれだけ……

「……にしても……決まっても駄目だつたか……」

はあ、と大きく溜息を零す門下生の方。

因みに、彼の名前は八條和斉。はちじょうかずなり

「何だか昔の貴族みたいだ」と聞いた時は思ったけど、話してみるとそんな印象とは真逆の人間だつた。

この道場で使っているのは槍や毘などだ。

身長も180を超えてるからちょうど良い長さだし、それらを使う腕もかなりのもの。

そんな彼でも駄目だつたのか……

そう思うと、改めて彼女たち姉妹の出鱈目さがよく分かる。

因みに、彼の年齢は15歳で、洛芦和高校一年生だ。

秋希さんや冬琉さんの一つ上で、僕や橘高姉妹を除けばこの道場では最年少になる。

歳も近いし、話していて面白かつたので普段から休憩のときなどに話している。

「……どういうことですか……？」

決まっても駄目、って一体……？」

何か決まってるから、改善されたのだろうか……？」

いや、さっきの話振りからすれば、期待はしていたけど駄目だつた

んだらうけど。

「うん？」

ああ、お前がまだいなかった時の話だよ」

「だったら知らなくて当然だ」そう言っただけで八條さんは黙り込む。

……ここで止まられると凄い気になる。

いつの間にか戻ってきた操緒も眼を輝かせながら話の続きを待っている。

……っというか、いつの間に戻ってきた！！

幼馴染が酷い目に遭ってるのに助けがないなんて、それでも僕の守護霊（自称）か……！？

なんていう言葉は頭の中で思うだけに留め、視線を八條さんの方に向けるため体を仰向けにする。

「ギッ！！」

その際に激痛が奔ったけど、そこで更に身悶えたりすると余計痛みが増すので、必死になって体が動かないように歯を喰いしぼりながら痛みを耐える。

「おいおい、何やってんだお前は……？」

若干呆れた様な視線を八條さんと操緒の二人から向けられる。

「き、気にしないで、ください」

うつ伏せよりもこっちの視線の方が会話し易いからそうしたのだが

……逆に痛みが体中に迸る。

「そ、それより、話の続きを」

「うん？あぁ……」

まぁ、時間つぶしにやちようどいいかもな。

どうせ今日はもう終わりだろうし」

「お前も知ってたほうがいいだろうしな」そう前置きをして、八條さんは話し始めた。

別に深刻そうな感じではない。

どちらかというと、今迄僕を心配していた雰囲気が一転して、やる気がほとんど失われた感じになった。

「まず、あの姉妹には男の幼馴染がいる。

家も隣だし、中庭にはその3人用に建てられた勉強用のプレハブ小屋も建てられている。

ここまでは分かるな……？

元々知ってはいるけど、ここは初めて知ったような反応じゃないとおかしい。

だから、コクコク、と首を縦に振る僕と操緒。

それぐらいなら、何とか出来るようになってきた。

そんな関係だからなのかその男……まぁ？塔貴也って言うさつき道場に入ってきた奴なんだが……に惹かれるところがあつたのかわらないが、あの姉妹が揃って塔貴也のやつに恋をした。

それだけなら別に普通の三角関係だ。

……まぁ、三角関係が普通なのかどうかは置いて、だ。

一拍置いて話を続ける八條さん。

俺もここに通い出したのはだいたい2年前なんだが、その時は今と状況が違ってな。

あの姉妹がちょうど塔貴也の奴を巡って色々やってたんだよ。

どっちがデートに誘ったとか、料理は私が作ったとか、自分の方が塔貴也の助手には向いてるだとか……

……何と言つてドロドロ……

昼ドラとかによくある展開程ではないにしろ、それなりに粘っこい恋愛をあの姉妹行っていたとは……

で、どっちかが成功したりするとそつちはしばらく塔貴也の奴の方に掛かりつきりになるわけだ。

問題はこつからでな……失敗した方が道場に来る。

そつすると、大抵今日の冬琉の奴みたいになってるわけだ」

「じ、御愁傷様です……」

「……実際、ありゃあきつかったぜ……」

3時間ぶつ続けであの相手をしないといけないんだからな」

八條さんの視線が虚ろなものになって空中を彷徨い出した。

……ああ、ほんとにきつかったんだろうなあ……

自分自身つい先程その脅威に晒されたのだからよく分かる。

「……で、だ」

『あ、戻ってきた』

虚ろだった八條さんの眼にいつも通りの光が宿る。

「ちょうど今年の春休み明けぐらいだったか、塔貴也の奴が答えを出して秋希と付き合うことになったのは」

「へー、つて、だったら終わりの筈じゃないんですか!？」

答えが出たならどれだけやってもあんまり意味がない気もする。急造の関係ならまだ変わるかもしれないけど昔からの幼馴染同士なら無理だろうし。

「そう思うよなー」

俺たちもそう思って安心してたんだ。

念のため今日も道場から抜けてたわけだが……その様子を見ると違ってみたいだ」

「期待が外れた」といって頭を振る八條さん。

『ねえ、トモ?』

「うん？」

「なんだ、操緒?」

何か思うところがあつたのか僕に話しかけてくる操緒。それに八條さんに聞こえないよう小声で答える。

『冬琉さんに誰か別の相手がいれば良いんじゃない……?』

「……………!？」

いきなり何を言い出すんだこいつは……

『だから、冬琉さんが塔貴也さん？以外を好きになればいいんだよ
！！』

そうすれば、一先ず鍛錬の時に八つ当たり？される心配もないだ
ろっし……

何より、もし部長が暴走しても部長に協力することもなくなるだ
ろっから……！！』

僕の頭上で浮きながら熱弁する操緒。

「うっん、そうか……？」

言ってることは分かるし、上手くいけば不安材料を一つ消せるとい
うことから納得はできるけど……

『じゃあ、トモは他に何かいい方法があるの……？』

そう言われてもそんなに簡単に別の方法が思いつく訳もない。
そもそも、急に言われて頭の中が微妙に混乱しているんだから……

「……っというか肝心の相手は……？」

操緒の提案がどれだけ有効だろうと、相手がいなけりゃ話にもなら
ない。

冬琉さんの気持ちを塔貴也さんからその人に向けさせるということ
や、そもそもその人が冬琉さんの事を好きにならなきゃいけないと
か、色々問題はあがるが、せめて相手候補がいないと話にもならない
だろう。

『うん？』

『目の前にいるじゃない』

『目の前……？』

『つて、まさか操緒お前が！？』

『何考えての、バカハル……』

操緒が凄い馬鹿を見たような視線を僕に向けてくる。

うう、いくらなんでもそんな視線を向けられる謂われはないと思うのだけど……

『私じゃないわよ！！』

『もう一人の方！！』

『もう一人って言う……』

『まさか八條さん？』

『うん、脈有りだと思っただけどどうかな……？』

『……全くない訳じゃないと思うけど……』

彼女が欲しい云々言ってたし。

顔だつて悪くはない………と思う。

二枚目と言われるほどじゃないだろうけど別に悪くはない。

人によってはこっちの方が良いと言う人もいるんじゃないだろうか。だけど、八條さんには冬琉さんはそういった恋愛の範疇に入っていない様な気がするんだけど……

『まあ、聞いてみないと分からないって……！』

気楽に言ってくれるなよ。

提案したのはお前かもしれないけど、実行に移すのは僕なんだから。もし、この状態で更に追撃をかけられたらどうしてくれる……!!

「……………はあ……………」

それでも、何だかんだで実行に移すあたり僕も大分操緒に甘い気がする。

まあ、今回は上手くいった方が今後の為にもなることが大きいからだということにしておこう。

そうでも思わないと自分が操緒の良いなりになってるみたいだし……落ち込んだ状態の八條さんに少しでも良い方向に事が転がれば、と思っただけ声をかける。

「……………さっきまでの話を聞いて一つ思いついたんですけど……………」

「なんだ……………!?!」

「うわ!!」

「近い!!近いですって!!」

凄い勢いで寝ている僕に近寄ってくる八條さん。こっちは動けないんだからマジで止めて欲しい。僕にそのケは全くないんだから。

「あ、ああ……………すまん」

気付いてくれたのか元いた場所まで戻ってくれる。

「それで……!？」

とはいえ、勢いはそのままに話してくるので少々暑苦しかったりする。

「……あの……その……」

「……」

急かさずに待っていてくれるが、それでも言いにくいものがある。八條さんだって、まさか自分が冬琉さんと付き合うように勧められるとは思っていないだろう。

というか、そんな期待に満ちた視線を向けないでください。今までが地獄だったのはさっきのことですよく分かりますけど……

ええい、こうなりや言ってやろうじゃないか

それでどう反応するかで脈有りかどうかも分かるだろうし。それが分かれば操緒も諦めてくれるだろう。

「……その……冬琉さんにも誰か相手がいれば良いんじゃないでしょうか……?」

「……は……?」

あまりにも予想外の言葉だったのだろう、今迄見たことがないほど呆気にとられた表情で八條さんは固まってしまった。

……その反応は予想の範囲内だったから別にかまわないですけど……

「……えーと……」

もう一回言ってくれるか……？」

どうやら自分の聞き間違えだったとして捉えることにしたらしい。とはいえ、どれだけ聞き直されてもこっちからの提案は変わらないのですが。

「だから、冬琉さんにも秋希さんみたいに彼氏がいれば良いんじゃないか、と……」

「……………」

聞き直した結果が同じだったためか　寧ろ、より具体的な言葉が出てきた　更に固まり直す八條さん。

この固まってる間に言えるだけのことは言ってしまうおう。

「冬琉さんにも相手がいれば、とりあえずは今日みたいなことになるのも少なくなると思うんですよ。

相手との間で何か問題が起きたりしたらまたなるかもしれないですけど、少なくとも回数は減ると思うので。

それに……今のままじゃ冬琉さんがあまりにもかわいそうです」

実際、冬琉会長は恋心を捨て切れなかった。

塔貴也さん　この場合は部長か　がああなった理由はさっきまでの話を聞いてまだ分かった。

自分の恋人が消滅したのだ、やり直しを求める感情は、納得はできないけれど理解はできる。

秋希さんがいつ消滅したのかは知らないけど、僕の手元に黒鐵がきたのが僕の高校入学前日だったから、大方の予測はつく。

冬琉会長は思ってしまったんじゃないだろうか。

……秋希ちゃんさえいなくなれば

そもそも、副葬処女の魂がすり減っているのを演操者が分からないわけがない。ベリアル・ドール
ハンドラー

それが姉妹だったら尚更だ。

それでも黒鐵を使ったのはGDのこともあるだろうけど、秋希さんに対して妬みがあったんじゃないのか。

僕の勝手な想像だけど絶対にその感情がないとも思えない。

結果はあんなことになってしまったけど、冬琉会長は部長のことがほんとに好きだったんだろう。

だから、協力もしたし、鋼の副葬処女になったんじゃないだろうか。ベリアル・ドール

本当のことなのかは分からない。

だけど、冬琉会長の恋心が原因の一つのなら彼女はあまりにも報われない。

好きな人に振り向いてもらいたい一心で部長の恋人だった自身の姉を殺し、部長が振り向いてくれると思ったら彼は秋希さんを追い求め、自身も部長のそんな姿を見て罪悪感を募らせ、遂には消滅する可能性が他の機巧魔神よりも高い鋼の副葬処女になった。アスラ・マキナ
ベリアル・ドール

僕から見れば、彼女にとつての救いなど何一つない。

何よりも自身の幸せを追い求めただろうに、見返りがなかった。

彼女をそんな未来に辿り着かせる訳にはいかない。

操緒に言われるまで全くその事を考えなかった訳じゃない。

だけど、そう考える根拠が僕の勝手な想像だけじゃ踏ん切りがつかなかった。

でも、さっき八條さんの話を聞いて自分の考えに確信が持てた。

なら、彼女の未来を助けよう。

そこまで考えた時だった。

目の前で固まっていた八條さんが動き出したのは。

「……………なあ、夏目……………」

「はい……………?」

飽く迄自然に、僕が提案したと思わせるように返事をする。

「……………お前……………本気で言ってるのか……………?」

「はい」

少なくとも冗談で言っているつもりはない。

操緒が言い出したのは冗談かもしれないけれど……………

「俺が期待したのはあの暴走をどうやって止めるか、もしくは回避
するかってことなんだが……………」

溜息を吐きながらそう言う八條さん。

「だから、上手くいけば止められるじゃないですか」

【相手の人がへマをしなれば】という非常に不安な前提が付いて
来るが。

「……………お前はまた俺にあの地獄を味わえと言うのか……………?」

やたらと低い声音で、静かに訴えかけてくるような口調に変わり僕に話しかけてくる。

なんか、微妙に体が震えているのは何故だろう……？
身長が180cmを超えた男が縮こまって小刻みに体を震えさせているのはそれなりに不気味だったりする。

……いやそれ以前に“また”ってなんですか……？
そんなこと言われても僕は分かりませんよ。

「……今のあいつのテンションに戻すのに俺がどれだけ苦労したと思ってる……！！」

だから知りませんって！！

心の中でそう叫びながらも顔には出さないように努力する。

何故かそうしないといけないような気がしたからであって、特に理由はない。

「先輩方からは『お前が一番歳も近いんだから何とかしろ』という圧力を受けるし、あいつを慰めようとしたら『塔貴也はもつと頭が良かった』だとか『塔貴也の方が気が利いてる』、なんて勝手にあの野郎と比べられるわ……」

良い事なんか一つもねーんだぞ！！

それでもお前は俺にあの苦悩をもう一度味わえと言っのか……！
？」

えーと、つまり……？

『八條さん、冬琉さんを失恋のショックから回復させてみたいだね。』

……大分苦労して半ばトラウマみたくなってるのが気になるけど

……』

ああ、成程。

僕の疑問に操緒が答えてくれる。

というか、冬琉さんの恋愛って失恋前提……？

「あの……」

「何だ!？」

鬼気迫る表情でそう返事を返してくる八條さん。

ああ、こりゃほんとにヤバイスイッチ押しちゃったみたいだな……

「……どうして冬琉さんって失恋前提なんですか……？」

本当はそこまで思いつめる原因を聞いてみたいけど、今の彼にその話を聞くのは流石に無理だ。

その僕の言葉を聞いた八條さんは、

「ああ!？」

そんなんあいつが暴走し易いからに決まってる!！」

体を小さくして震えさせたまま投げやり気味に返される。

「え、と……？」

そこまでまだ冬琉さんと付き合いがあるわけでもないのに、決まっていると言われても実感が全く湧かない。

「人が何かする度に一々注意してきやがって、しかも反論して論破されると例外なく泣きだして暴走しやがるし……」

「どれだけ子供なんだっての……!!」

「え、でも……」

「しかも、普段から俺の生活態度が悪いだとか、自分がやるうとし
てる悪戯やらイベントに強制的に俺を引き込もうとしやがって……」

生活態度は俺の勝手だろうが!!

悪戯やらイベントは秋希とかが参加しないからって俺を巻き込む
なってるんだ!!」

因みに、橘高姉妹と塔貴也さん、それに八條さんは同じ中学出身だ
そうだ。

「あの……」

「それに道場でのことは周りに言うなってなんだよ……!!?」
頼まれたって誰がわざわざ言うか!!」

「……………」

「大体な……」

普段から色々溜まっていたのか、姿勢も元に戻って体の震えも治ま
り延々と愚痴を言い出す八條さん。
ただ、聞いてる方には……

『何これ、惚気?』

うん

段々と惚気話にしか聞こえなくなってきた。

まさか普段の生活の愚痴を言ってるだけなのに、そんな風に聞こえる話があるとは思わなかった。

ただ、本人にとってはただの愚痴なのだろう。

そこに含まれてるのが好意じゃなければ周りにもそう聞こえるのだからうけど……

『あ、そういえば』

「うん？」

「なんだ操緒？」

ふと思い出したかのように話しだす操緒。

『さつきから冬琉さんがずっと入口あたりにいるんだけど……』

「え……！？」

驚いて道場の入口に顔を向けると、

「……………」

確かに冬琉さんが顔をのぞかせていた。

若干顔が紅くなってるのは何でだろう……？

怒っている雰囲気ではないのが一先ずの救いなのだろうか？

『あ』

八條さんの視線が動き、冬琉さんの姿を捉えた。
その瞬間、

「……………」

あれだけ熱弁をふるっていた筈の口は閉じ、視線は冬琉さんに向けられたまま動かなくなった。

冬琉さんもばれたのが分かったのだろう。

顔を朱に染めたまま八條さんに向かってきた。

そして、向かって来た勢いのまま、

「なに勝手なことを入門したての人間に話してるのよ!!」

「ああ!？」

何が違っつてんだ!？」

「何から何まで違っじゃない!!」

ギヤーギヤー八條さんと言い合いを始めた。

床に転がってる僕はもう二人の眼中には入っていないようだった。

「……………なあ、操緒……………」

『なに、トモ……………?』

二人揃って呆れた視線を言い合いをしている二人に向けながら会話を交わす。

「……………もう、何も言わなくて良いよな……………?」

『……………うん……………』

言い合っている二人を見ながら、どうして以前の世界で冬琉会長は

あんなことをしたのか本気で分からなくなり、もう一回考え直した方が良いんじゃないかと思う僕と操緒だった。

14回 ツンツン(後書き)

はちじょうかずなり
八條和斉

年齢：15歳(誕生日は8/7) 身長：182cm 体重：70kg
血液型：?(該当なし)

容姿は中の上から上の下ぐらいな感じ

髪の色は灰色 目の色は黒

使用武器は文中でもふれたように、槍や昆などの得物

基本は槍、普段から持ち歩いているのは昆

(洛高生だから無問題?)

洛高では生物部に所属

性格は智春にとつての兄貴分のような感覚

Fateのホットドックが駄目な槍使いがイメージ的には近い

?
?
?
?

こっから微妙にネタバレ

実家は、華鳥風月の四名家ほどではないがそれなりに高位な悪魔の家柄

能力は影操作

影を実体化させて刃にしたり、影の中に相手を閉じ込めたりすることもできる

和斉の場合は武器に纏わせて武器を強化したりなど、サポートが主

和斉の魔精霊は、影が実体化してできた鳥
魔精霊自体が刃などの武器になることもある

この一族との間に使い魔ドウターができた場合は八咫鳥をモチーフにしたドウターとなる

智春は悪魔だとは気付いていない
ちなみに、和斉は操緒に気付いてはいるけど特別詮索するつもりはない。

ただし、智春が洛高に入学したら変わるかも・・・

橘高姉妹たちとは、彼女たちが中学に入学してからの付き合い

(和斉が道場に通いだしたのがそれぐらいの時)

15回 勉強会（前書き）

次回辺りにでも、水泳の授業の話でもやるうかどうか思案中
その際に、どれを着せるのか、男女共同でやるべきか……
意外と考えないといけないことが多かったりします
洛高だったら、水泳の授業はあっても男女別ですが……

私の中学は2年生まで水泳の授業はあって、男女共同の授業だった
んですよー

生徒の大半がサボる（自主見学）ということでは有名な授業でした
今どうなってるのか知りませんが……

めんどくさくなくなったら、とばして一気に夏休みに入ります。

原作までの道のりは、まだまだ長く険しいので……

ちなみに、水泳の授業をやるなら、多分原作6巻の「第二話 コン
プレックス」みたいなノリにする予定

15回 勉強会

時間は少し進んで6月も終盤。

制服も夏服に変わり、新鮮さも薄れ始め、あと2、3週もすれば期末試験が始まるという時期。

僕と奏、それに操緒は杏との予定からの約束である勉強会の開催地に向かっていた。

『あゝ、あづいゝ』

勉強会をやる際に一番の問題は、勉強会を行う場所だった。

図書館とか学校でやればいいと僕は思っていたのだけれど、学校は部活動とかの理由ではないため使用不可。

それなら、と思って図書館に聞いてみると、自習室とか個室は予約でいっぱい。

一般の人も使用しているのに、勉強会を行う際にどうしても会話は必要で、普通の場所では周囲の人に迷惑がかかる可能性がある、とこのことで却下。

「…………お前が暑いわけないだろうが…………」

『そんなこと言われても、暑いものは暑いんだから仕方ないじゃない…………』

ならば、誰かの家に集まってやればいいんじゃないかということになったのだけれど、僕の家は狭いから駄目。

奏の家は……………まあ、広いけど中学生が簡単に出入りすることができる雰囲気ではないだろう　僕とか橘高姉妹みたいな関係者は別。

その辺りの理由を説明するのは非常に面倒だったけど、今の時期にバレルと色々問題が起きてしまうので、適当な理由を言って誤魔化しておいた。

それで、色々相談した結果、言い出しっぺの杏の家で開催するとうことになった。

「奏は大丈夫……？」

「はい、熱いのは慣れてます、から……」

参加人数は、杏は勿論、頼まれた（脅された？）僕と奏、それに樋口とか杏の友達を加えた6人。

本当は、もっと参加したいと言ってたらしい　大半が男子だった

けど、7人以上じゃまともに勉強できるほどの広さが確保できないため、その人数に杏が絞ったらしい。

で、選んだのは、成績　テストの点　がヤバかった順。

非常に分かりやすい理由だった。

ちなみに、樋口がいるのはただ単にあいつが面白そう？だからというのと、教える役がもう一人は欲しいという僕と奏からのお願いが重なった結果だった。

「……もうちょっとで着くはず……」

僕の家からだとして、そんなに杏の家は遠い訳ではないから特に問題はないはずだった。

だけど、6月だというのに、今日の気温は30　越え、最高気温は36　だそうだ。

まだ午前中だから多少マシだけど、それでも暑い。

しかも、梅雨入りが遅かったせいも、まだ梅雨が明けたという情報が入っておらず、非常に蒸し暑い。

『ねえ、なんで、自転車にしなかったの……？』

「……止める場所がないんだからしょうがないだろ……」

幽霊　　というか射影体　　なのだから、温度など関係ないだろうに散々愚痴を言ってくる操緒を受け流しながら、奏と二人で歩き続ける。

確かに、最初は操緒の言うように自転車にしようかという案は有った。

だけど、大原家は前回の世界では酒屋を営んでおり、きっとこの世界でも同じだろう。

そして、それが同じなら前回の様に幾つもの自転車を止めるほどのスペースはないはずだ。

奏は遠いから自転車でも良いと言っただけだ。

「これも、体力づくりの一環、です」

とのことらしく歩いて向かうことになっている。

……そんなに体力がない訳じゃないと思うんだけどなあ？

? ? ? ?

「ああああ、いらつしやい。

ああああ、上がって上がって」

あの後5分ぐらい歩いて到着した大原家（酒屋）は以前の世界と変わらず営業していた。

「お邪魔します」

『お邪魔しまゝす』

「失礼します」

入口の所で会った大原父と大原母に挨拶をしつつ、大原家にお邪魔する。

親交の深かった彼ら家族に会うと、何とも言えない感慨深さがあるけれど、それは顔に出さないように努力しながら会話する。

その際に、

「あら、あなたが杏の言ってた夏目くん……？」

ふゝむ……これはこれで、意外と……」

「あ、あの……？」

「お母さん……！」

なんて言う会話があったり、

「嵩月って言う……嵩月組の？」

「は、はい」

「ああ、以前どこかで会ったことがあると思った」

「あ、あの」

「まあ安心しな、特に誰かに言うつもりはないから」

「あ、ありがとうございます」

なんていう裏話の会話があったりした。

青月組は大原酒店のお得意様だそうで、その繋がりから分かったよ
うだ。

まあ、大原父ならあの人たちとも渡り合えるだろうから、特別驚き
があったわけではないけど……

「ほら早く早く！」

夏目くんとカナちゃんが最後なんだから」

『私もいるんだけどな』

操緒の言葉に苦笑しながらも、杏に急かされ部屋に入る。

そこには、既に3人の人間が来ており、ノートや教科書を広げなが
ら話していた。

人数は女子が2人男子が一人。
要するに、樋口と杏の友達だ。

かといって、樋口が隅の方で居心地が悪そうに縮こまっているとい
う訳では無く、

「それで、振り向いて後ろを見たんだ……けど、誰もいない」

「「ゴク」「」

嬉々として怪談を女子三人に話していた。

相手の方も相手の方で、すっかり樋口の世界に引き込まれており、こっちは気付いていないようだ。なにもこんな明るい時間からそんな話をしなくても……

「だけど、いつまで経っても、その足音が遠ざからない。

自分が止まれば足音も止まる、歩き出すと足音もついて来る。

走れば足音も走る、どれだけ道を変えてもついて来る」

外見が整っている分他の男子に比べて樋口は目立つ。

そして、それは大抵が好意的な意味だ。

まあ、何が言いたいかというと、こんな場所で突然怪談を話したした場合に、一般的な容姿の男子生徒よりは樋口の方がまだひかれる可能性が低いのだ。

で、樋口は語り方も上手い。

気付けば樋口の世界に引き込まれていたりする。

まあ、佐伯妹とか朱湊さんだったら容赦なくその世界をぶち壊すのだが……

「それで、ベッドの下を覗き込むと……」

気付けば怪談も佳境に入っていた。

「「「「「「「」

半ば泣き出しかけている面々すらいる始末。

僕は前に聞いたことがあるから 前の世界ではなく今の世界でオチも知っているの、特別怖い訳でもない。

……まあ初めて聞いた時、それなりに驚くところがあったのは事実だけ……

「ガツガツと赤ん坊の血肉を貪っている妹の姿が……！！」

「「「ギャー！！」「」」

一段落ついたらしく、いかにも『やりきったぜ』とでもいうかのよ
うな表情になる樋口。

こっちとしては、なにもそんな長い話をしなくてもという気分だ。

搜索2時間、語りに1時間

そんなどうでもいい情報を聞かされた時の記憶がよみがえってくる。

『うーん、語りは良いんだけど、内容がちよっと薄い？』

もうちよっと二転三転しても良かったかもしれない』

操緒は操緒で、何故かさっきまでの怪談の評価をしていたりする。

「幽霊が怪談を評価するっていうのもどうなんだろう？」と、少し
疑問に思ったり。

「お茶、淹れてきました」

奏は荷物を置いてすぐにキッチンの方へ向かったようで、手にはお
茶とお茶菓子を載せたお盆を持っていた。

「あれ？何で嵩月がそんなことしてるの……？」

普通だったなら、杏とか大原母とかがやってそうなものだけ……

「あの、杏ちゃんは、怪談を聞いてて、お母さんは、忙しそうだっ
た、ので……」

「ちゃんと、許可はとりました」そう言って、テーブルの上にそれを並べ始める奏。

別に奏がやらなくても良いような気はするけれど……

「迷惑、でしたか……？」

空いたお盆を腕で抱きしめ、どこか捨てられた子犬や、子猫を連想させるような雰囲気になる奏。

「い、いや、迷惑とかそんなじゃないよ……！！」

「良かった」

そう言って、一転して笑顔になる奏。

「う」

なんか、今の奏の笑顔を見て頭の中がすごいことになった気がする。勿論、良い方向で。

「あー！！」

「ごめん、カナちゃん！！」

奏がやっていた配膳作業に気づいた杏が急いで、自分も手伝いに入る。

とはいっても、元々そんなに量があるわけでもないのだから作業自体はすぐに終わる。

全員の前に飲み物が行き渡り、教科書やらノートなどの勉強道具も広げられた。

ちなみに、長方形の机で席順は僕の隣は奏、向かいは杏の友達が二人、杏は僕の右斜め前、樋口は奏の左斜め前だ。

「じゃあ、飲み物とかも行き渡ったし、始めましょう!!
基本は自力で。」

分からない所があったら遠慮なく聞き合って理解を深めていきましよう!!

……それで、さっそく何ですが夏目くん……
「この問題を教えていただけませんか……」

「ああ、うん、どうぞ!」

そう杏が飲み会の挨拶?みたいになっているけど宣言し、それぞれ教科書とかノートに向かい始めた。

僕と杏は、一先ず杏の分からなかった数学の問題に挑戦しているけど……

「だから、 x にさっきの答えを代入して……」

「代入って何?」

「……………えっと、代入って言うのは」

だとか、

「じゃあ、グラフを書いて見た方が良いでしょう。その方が分かりやすいだろうから」

「うん、分かった!!」

「つて、違う!!」
それは反比例!!」

等々、色々と前途多難だということが判明した。

まず、基本が理解できていないのと、公式をほとんど覚えていないこと。

それ以外にも色々あるのだけど、その二つが主。

なので、テストまでに必要な所を纏めて、一気に覚えてもらうことにした。

幸い、まだそんなに公式とかの数が多い訳では無かったから手の施しようがあった。

これが、3年の今頃だったら、死んでたかもしれない……

なんか、前の世界よりも杏の成績が酷いことになってる気がするし

……

「じゃあ、次は英語をお願いします」

「……………うん……………」

ここまでで既に1時間以上経過している。

他の女子二人は奏と（何だかんだで）樋口が見てくれており、何とか成り立っている。

奏は説明があまり得意ではないからどうなるか不安だったけど、以外にも樋口が意を酌んで説明に協力しているので、何とかなるだろう。

・
・
・
そんなふうにして、ある程度勉強会も進んだ頃だった。

ポロ

僕の消しゴムが杏の手に弾かれて机の下に落ちてしまった。
まあ、良くあることだし特別思うことはない。

サッサと拾ってしまおう

そう思っつて、身を屈め、机の下に手を伸ばす。
その時だった、

「「あ!！」」

横から手がもう一本伸びてきて消しゴムを取る直前でぶつかり合った。

「あゝ、ごめん」

「う、ううん。」

「いいのいいの」

杏が咄嗟に手を引っ込めたので、つられて僕も手を引っ込めそうになったけど、まだ拾ってなかったと思っただして、消しゴムを拾い直した。

そうして、体を元に戻すと、

「……………?……………」

何故かその場にいる他の面々から微妙な視線を向けられた。

樋口からは、「……………智春……………お前つて……………」等という呆れ気味な視

線。

杏からは、

チラ、チラ

と、何故か顔を朱に染めながら妙に僕の方を意識した視線を向けられる。

女子二人からは、「キヤーキヤー」と、何故か黄色い視線が僕と杏の二人へ。

操緒からは、『……トモ……』と、やたら低い声音をのせた絶対零度の視線。

……で、見たくないけど、僕の左隣に座っておられる奏さん。

もう、なんか雰囲気だけでも人が殺せるんじゃないかってぐらい。

操緒の視線が絶対零度なら、奏の視線は八寒地獄の摩訶鉢特摩地獄まかはとまなみの冷氣だろう。

地獄の業火を使っている悪魔の一族なのに、これだけの冷氣を起こせるのは何故なのか……？

……いつ鳳島一族に変わったのでしょうか蒿月さん……？

ギリギリ

と、首を動かして視線をそちらに向けると、

「どうかしたんですか？

夏目くん……」

柔らかな口調でそう僕に語りかけてくる奏さん。

逆に、凄い怖い。

表情も、見た目は普段通りだけど、それなりに付き合いのある人間
だったら分かる。

あれは怒りで顔が固まっているのだと

いつだったか、間違えてアニアのベッドに潜り込んでしまった時の
奏に近いけど、あれ以上だ。

「イエ、ナンデモアリマセン」

だけど、僕には原因が分からない。
なんとなく、さっきの行動が問題だというのは分かるけど、それが
何故なのかまで分からない。

「……………」

とりあえず、今は気にしないようにして 出来ないけど 勉強
に集中することによしよう。

・

そうして再開した勉強会だけど、中々空気が元に戻らず凄く大変だ
った。

操緒と奏からは怒っている雰囲気常在に感じられるし、杏たちから
は妙に期待感に満ちた視線を向けられたから。

唯一樋口だけが、多少なりとも心配の視線を向けてくれたけど焼け
石に水だ。

僕の両隣と頭上が原因なのだから。

まあ、なんとか杏に教えないといけないものが教えられたのは良か
ったのだろう。

後で結果を聞いたなら、ノルマは達成できたと言っていたからおそらく効果は有ったのだ。

「今度何かお礼するね」

と、僕に言ってきたけど丁重に断っておいた。

そんなものが欲しくて参加した訳じゃないし、杏と（まだ前の世界ほどじゃないけど）それなりに仲良くなれたのだから。

P・S

操緒の機嫌は、僕が1週間あいつの愚痴を延々聞くとということではなくか解消された。

奏の機嫌は、夏休みに海に一緒に行くという約束で、なんとかある程度まで戻った。

..... 凄い疲れた

15回 勉強会（後書き）

次回で書かなくても水着姿の奏とか操緒（秋希とか冬琉も）は書く予定ですが、杏とか佐伯妹の可能性は極端に減ります。

個人的には、その辺飛ばしてちゃっっちゃと話を進めたかったり……

「じゃあ、無駄話書いてるんじゃないよ」と言われるかもですが、単に予想に反して自分で書きたいことが多すぎただけです

今頃になってそれに気付く始末

まあ、まだまだあるんですけどね（笑）

特に、智奏は

書く度にネタが思いつくというか、原作でカップルとしてほとんど絡んでないからいくらでもそっちの方向でのネタは使えるというか

……

16回 成長の一步(前書き)

水無神操緒 身長：159cm スリーサイズ：B80、W57、
H84 Cカップ

嵩月奏 身長：159cm スリーサイズ：B95、W58、H8
6 Hカップ

原作のキャラデータを一応載せておきます。

これを参考に中学の身体データは予測してください。

上記のデータはWikiより抜粋

カップに関しては、とあるサイトを使用して計測し、出た結果です。
なので本当かどうかは分かりませんが、一先ずこれを参考に使って
いきたいと思います。

水着回をどれぐらい書こうか迷ったのですが、夏休みに早めに入れ
たかったので少なめに書いています。

なので、恐らく期待していただいた方には申し訳ないのですが不十
分になっていると思います。

その不足分はいつか補充したいと思っています。

16回 成長の一步

期末試験が終わってからも色々あった。
具体的には、

『「「「」・・・な、なにが・・・!?」「」』

操緒や杏を中心に愕然としていた女子多数

「「「」ウオオオー！！」「」」

樋口を中心とした叫びながら興奮していた男子数名

「「「」うっう・・・」「」

奏が中心の　一番は奏（何がとは言わないが）　恥じらっている女子数名

「「「」・・・」「」

チラチラ

時々視線をその奏たちのある部分　あくまで“とある”　に
向けている大多数の男子

「「「」うわー」「」

そんな男子を見てドン引きしている佐伯を中心とした女子数名

「はー・・・」

そんな興奮したり、落胆したり、恥じらったりなどの微妙な空気を察して溜息をついている教師や僕が含まれているその他の男女数名着ていたのは男子は紺色のボックス型の水着、女子は全体が紺色のワンピース型の水着（旧スク）で、男女両方に一応名札が付いている（男子は水着の右上、女子は胸部）。

奏は普段は後ろで一括りにしてある髪を結び上げて後頭部の部分で纏めている。

操緒は水着　何故か紺ではなく白　に変わっただけで髪型に変化はない。

まあ、特に泳ぐ訳でもないのだから逆に着替えた意味が分からないんだが・・・
杏はいつも通りだ。

特に変化はないが、普段しているヘアバンドを外している。

佐伯は奏とは髪の質が違うのかやけに嚴重に後頭部で髪を纏めている。

・・・確かにかなり癖のある髪質だとは思っけど・・・

そんな混沌とした水泳の授業は、高校とは違い男女共同で行われていた。

ちなみに、体育の授業は2クラス合同で行われている。

そのため、樋口や佐伯も一緒なのだ。

妙に異性のことを意識する思春期の中学生だけのことはあり、普段は見るものがほぼ不可能と言っても良い同級生の水着姿に　特に

男子から女子　やたらと反応していた。

僕も段々そっちの方向に頭が向いていきそうになったが、なんとか踏みとどまって授業に集中していた。

とはいえ、その授業も一度だけ50mのタイムを計ったら、後は自由時間というかなり適当なものだった。
おかげで、生徒間の雰囲気は常に何とも言えない微妙なもののまま
だ。

で、それに拍車をかけたのは、

「よし、水中ドッジやるぞ!!」

「「「おー!!」「」」

と、樋口の奴が言いだした事にある。

そんなに反対する奴もいなかったからやることになったのだけれど、
意外な問題が生じた。

そこまで深くないから足が付くとはいえ、水面は大体胸元までである
場合が多い。

身長が高い奴ならあまり問題はないのだけど、大半は体の半分以上
が水中にあるわけで・・・

つまり、何が言いたいのかというところ・・・

揺れるのだ

何がとは言わないけど、女子のある部分が揺れる。

しかも、制服や体操服じゃなくて、着ているのは水着。

普段の体育の授業なんかとは比べ物にならないほどにそういった部
分とか、紺色の水着からすらりと伸びた手足が目飛び込んできて
いつも以上に同級生の女としての違いがどうしたって強調される。

そのうえ、球を投げる時に水中に体の大半があるので碌な勢いがつ
かない。

それを回避するにはそれなりに走って体の勢いをつけるか、水の抵
抗をなくすしかないので良く動く。

しかもその動きが横の動きじゃなくて、水中からジャンプして飛び出るといふ縦の動きなのだ。
非常によく揺れる。

さらに奏は相手チームだ

マズイ

中学１年生とは思えない、学年１ともいえるであろう“その部分”に僕たちのチームの男子の大半が目を奪われる。
当たって、外野に回るようになる男子が続出するも、

「「「「「「「「「「はあ「「「「「

何か満ち足りたような表情をして外野であるプールの外へと泳いで向って行った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

そんなことを彼らの後ろ姿を眺めながら気楽に思っていたが、僕も正直そろそろきつい。

球を避けることだとか、人数が減って狙われやすくなっていることだとか、その部分にどうしても向いてしまう眼だとか、反応しそうになっている自分自身を頑張っって押さえることだとか色々あるけど、一番きついのは奏が他の男子からそう言った視線を向けられているということだったりする。

男子の気持ち？（習性）は自分も同じだからなんとなくは分かる。
それでも、バラしていないとはいえ自身の彼女が他の男子からそういった気持で見られるのは非常にイライラする。

普段だったらそんな場面からは無理にでも奏を連れ出すのだが、授業中だから変に途中で抜けるのも難しい。

「はぁ」

結局最後までやるしかないのか。
そう思いながら溜息を洩らした。

瞬間

ドガッ！！

「ブッ！？」

顔面にボールが直撃する。

「やりい！！」

「夏目撃墜！！」

相手チームの男子が僕を狙って投げたボールだったらしい。
今回のルールでは水面から出ている部分は全て対象になっているから、顔面でもアウトだ。

「・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・」

さっきとは別の意味で溜息が洩れる。

考え事に集中すると周りのことが見えなくなるのはどうにかしないとな・・・・・・・・

そう思いながら、僕は外野に向かって泳いで行った。

・・・結果は、奏たちのチームの圧勝だった。

P・S：水泳の授業後、奏は杏たち発展途上組　奏もそうじゃないかと思うのだが　に囲まれ、色々聞かれたらしい。

操緒も放課後に嵩月組で奏や嵩月母たちに色々聞いていたようだが、はたしてこつちの世界で彼女は以前の世界より成長することができ
るだろうか・・・？

早めに気付いたという点では、前回の世界よりも成長する可能性は
有るのかもしれないが。

少なくとも、今のままだったら変わらないだろう。

だけど、早く気づいたからか努力しようとはしている。
してはいるんだけど・・・

『ほら、トモ。』

唐揚げ唐揚げ！！

あとは、このFカップクッキーとか、バストアップ体操を・・・

！！！！

「僕がやっても意味ないだろ！？」

『やってみないと分からないじゃない！！』

その思いつくのを僕がやっても効果がないだろうが・・・！！
しかも、僕は男だよ！！

？
？
？
？

夏休みが始まって早1週間。

僕はようやく夏休みの宿題を終了させていた。

部活とかで忙しい訳ではないから、普通の学生だったら喜んで夏休みの残りの時間を遊びに充てるのだろうけれど、残念ながらそう言う訳にもいかない。

残りの日数のほぼ毎日が道場での練習となっている。

僕個人としては、一応受験生である秋希さんや冬琉さんのことも心配だったのだけれど、その事を聞いたら、

「もう決まっているから大丈夫だ（よ）」

と、非常に心強い 期待外れの 返事が返ってきた。

洛高はこんなに早くから受験をやってはいなかったように思ったのだが、秋希さんや冬琉さん、それに塔貴也さんは特別枠で確定しているらしい。

後见人？的な立場にいるのは橘高姉妹がGDで、塔貴也さんはロイヤル・タワー・ソサエティ科学狂会。

確かに、橘高姉妹ほどの手練をGDが放っておくとも思えないし、塔貴也さんほどの技術者ならロイヤル・タワー・ソサエティ王立科学狂会は咽から手が出るほど欲しいだろう。

・・・だからあれだけ余裕があつたのか・・・

正直言って、羨ましいっつたらない。

以前の世界で僕が洛高に合格するためにどれだけ必死で勉強したかを思えば、3人の方法は（以前の僕から見ると）反則そのものに見える。

生徒会が複数在って、悪魔やらハンドラー演操者たちが裏で色々やっていたりと色々滅茶苦茶な高校だけど、表向きの洛高はそれなりに有名なミッ

シヨン系の進学校だ。

当然、試験の倍率は地元の公立の高校に比べると非常に高い。そんな高校に、条件があるとはいえ（実質）試験なしで入学できるのは非常に羨ましい。

とはいえ、その方法が可能なのは洛高だからであり、他の高校だったら中々出来ないだろう。

G D関係ならG Dに所属している高校であれば可能だろうが、ロイヤル・ダーク・ソサエティ王立科学狂会も一緒だとすると洛高ぐらいしかないだろうし・・・

まあそんなこんなで、僕の二回目の中学1年生の夏休みは、前回の世界以上に濃密なものになるだろうことが確定した。

自分で選んだこととはいえ、どうしても気が滅入ってしまうのは仕方ないだろう。

? ? ? ? ?

「山か海、どちらがいい？」

『「・・・はい・・・？」』

いつものような休日日程の道場での鍛錬の合間。

昼の休憩時間の橋高家の食卓で、秋希さんがこれまたいつものように唐突に口を開いた。

その唐突さに慣れてきたとはいえ、少々呆ける僕と操緒。

食卓に座っているのは、僕と操緒、それに秋希さんを除けば、八條さん、冬琉さん、塔貴也さんの3人。

八條さんと塔貴也さんは、『我関せず』と黙々と箸を進めている。冬琉さんは、一応話に参加するつもりがあるのか視線だけは僕たちの方に向いている。

因みに、本日の昼食 嵩月祖母の様に丁寧に言うのなら昼餉は親子丼、副菜には冷奴、汁物でインスタントの味噌汁だ。

作ったのは秋希さん

休日の道場での昼食は、弁当を持ってきたり、出前を頼んだりすることがない限りは基本的に橘高家の食卓で食べることになる。

とは言っても、社会人や大学生の人たちは午前中だけだったり、午後から来るような人たちばかりなので、一日中道場にいるのは僕や八條さん、それに用事がない場合の橘高姉妹の4人だ。

最近では、昼食時にはその面々に塔貴也さんが加わることもある。実験やら、開発やらでほとんどあのプレハブに籠りっ放しだけれど、たまに出てきて昼食に参加するのだ。

まあ、出てこないことの方が多いので、そういう時は秋希さんが甲斐甲斐しく 一巡目の様に 昼食を運んだり、実験や開発の手伝いをしたりと、世話をしている。

だから、この世界で僕が塔貴也さんと初めてちゃんとした会話をしたのは、ちょうど夏休みに入る1週間ぐらい前の休日だったりする。その際の会話は、

『はじめまして。』

君が夏目くんかい？

秋希や冬琉から話は聞いているよ』

『……はじめまして……』

え、と……?』

『ああ、ごめんごめん、自己紹介が遅れたね。
僕は？塔貴也。』

秋希と冬琉の幼馴染で、秋希の彼氏だよ。
だから、君のことも彼女たちから聞いてはいるんだ』

『はあ、そうですか・・・』

因みに、どんな話を・・・？』

『・・・君も大変だな・・・』

『いや、いきなりそんな同情の視線を向けられても訳が分からない
んですけど・・・』

『僕に協力できることがあったら、何でも言ってくれ、可能な範囲
で協力するよ』

『ありがとうございます？』

というようなもので、何だかよく分からないものだった。

まあ、変に意識して全く話さないよりは自然な感じだったと思う。
だから、塔貴也さんとも会話はする。

会話して思ったのは、

誰だこの爽やか好青年！？

というぐらい、僕の知っている部長と同一人物とは思えないぐらい
しつかりとした人間だった。

趣味が被っていることが唯一の共通点だろうか？

塔貴也さんの話はこれぐらいにして、話を昼食のことに戻す。

橋高家の両親はあまり家に帰って来ないらしく、家事は秋希さんと

冬琉さんのふたりが互いにこなしている。

それに、何故か？家の両親も（橘高家ほどではないが）家を空けることが多いらしく、そちらの家事も姉妹がこなしているらしい。

（こなすといっても最低限のことだ）

だから、食事も大丈夫だと思っていたのだが・・・

これが予想外に酷かった。

別に食べられないわけじゃないし、バランスが偏っている訳でもない。

だが、いかんせん味が雑？だったり微妙だ。

異様に濃かったり薄かったり。

もしくは、明らかに下拵えの方法を間違えたであろう調理法で作った料理が出ることもある。

それでも、塔貴也さんに言わせれば、

「大分マシになった」

とのことらしい。

実際、今の料理の腕まで上達したのは三角関係勃発中の姉妹による料理対決の成果なのだ。

ということは、塔貴也さんはこれより酷いのを食べさせられていたわけで・・・

「お疲れさまでした」

そう思ったら自然に言葉が漏れていた。

八條さんも珍しく塔貴也さんの肩に手を伸ばして慰めていた。

そんなわけだから、僕が通いだしてからしばらくして僕が自分から言い出して昼食の担当に変わっていた。

自分で言うのも何だけど、二人よりはまともな（奏や八伎さんほどではないが）食事を作る自信がある。

結果として、僕たちの昼食事情はかなりの部分が改善された。ただ、それではあまりにも二人（+塔貴也さん）の将来が不安なので、時間が残った場合には橋高姉妹の料理の練習に付き合っている。その結果、なんとかちよつと独創的な味わいにまで引き上げることができた。

これなら大丈夫だ

と思ったので、再び昼食の担当に復帰してもらった。

とはいえ、まだまだ不安なのは確かなので月1のペースにしている。っている。

今日はたまたまその日だったのだ。

おかげで、いつも以上に八條さんの顔が険しい。

まあ、そんなことはともかくとして・・・

「『山か海、どちらがいいか？』ですか・・・？」

「ああ

ふむ、なんだって今その話題が出るのか分からないが・・・
まあ、個人的に行くのなら、

「山、ですかね」

海はとりあえず今度奏と一緒にいくことにしているので、どうせなら山に行きたい。

登山とか修行とかじゃなくて普通のピクニック気分で行きたい。

その時はどうせだから奏とか樋口も誘ってみよう。

ああ、樋口はやめて。perlセフォネを連れて行ってみようか。

あの子にも嵩月組以外の場所も見せてあげたいし。
でもそうになると八伎さんとかも付いて来そうな気も・・・
・・・流石にないと思いたい・・・

「・・・山、か・・・」

「山、ね」

何故か最終通告の様な雰囲気僕に言葉を投げかける橘高姉妹。

「？はい」

とりあえず否定することではないので肯定しておく。

「ふむ」

そう言っただけで考え込む秋希さんと冬琉さん。

『「？」』

僕と操緒には全くもって訳が分からない。

一先ず考え込んでいる二人を置いて親子丼を掻きこむ。

「うーん、もうちょっと煮た方が良かったかも・・・」

秋希さん御手製の親子丼の評価を呟きながらも、箸を動かし続ける。
ちやつちやと食べないと時間が無くなってしまう。

少しでも食べてから休憩しないと、吐いてしまうから・・・

そんな風に急いで親子丼を食べている僕の耳には、先輩4人の不気味な呟きが聞こえなかった。

「今年は山か・・・熊鍋も上手いな・・・いや、ぼたん鍋も捨てがたい・・・」

「今年もあの場所なのね・・・」

それに、虫も大量にいるし、この前食材を置いていったから、ひよつとしたら“ジョニーさん”も大量に発生してるかも・・・」

「またあそこか・・・」

今年は飯に関しては心配しなくて良い分まだマシか・・・」

「・・・今年は何を手伝えればいいんだか・・・」

まあ、聞こえてたら何かが変わったっていう訳じゃなかったんだろ
うけど・・・」

17回 不安と希望(前書き)

山での合宿の前に数話挿みます。

今回の話(おそらく次回辺りも)のイベントは、原作の世界では行われていなかったという前提でお読みください。

そうでないと多少矛盾が起きてしまうので・・・

17回 不安と希望

何だかんだで夏休みも早二週間。

この一週間は家と橋高家を往復する毎日だった。

朝起きていつものようにトレーニングを終わらせて帰ってくると、近所の公園で小学生に交じりながら近所の人たちがラジオ体操をしている。

その人たちに挨拶をして、家に帰るとシャワーを浴び、朝食を軽めに取った後は一眠りする。

学校がある時は学校に行かないといけなかったからそのまま起きていたけど、夏休みになったので少し眠るようになっている。

といっても、10時頃には道場で鍛錬が始まるので眠れても2時間程度。

起きたら、寝起きで覚醒していない状態でも自転車を使って道場まで向かう。

到着するころには頭も冴え、体もある程度温まっている。

そのため、到着したらすぐに秋希さんたちに扱かれる。

橋高道場では道着とか、ジャージのような動きやすい服を選んで着ることはほとんどない。

寧ろ、着る回数が多い私服や制服を着ることがほとんどだ。

夏休みだから、用事もないのに制服を着ることはないため私服を着ている。

そして、その格好のまま午前10時から午後9時までずっと橋高道場で鍛錬だ。

ちよくちよく休憩は挟みながらやっているけれどかなりキツイ。

そして、それらが終わると橋高家で簡単な夕飯を作り 時間や体力に余裕がある時はしっかり作る 秋希さんや冬琉さんたちと食

事をとり、片づけをして家に帰る。

帰ったら先週末までは宿題を片付けていたけど、今週は大抵操緒と話したり、本を読んだりしている。

・・・そのため、夏休みに限って言えば、奏よりも橋高姉妹とか八條さんたちと会う回数は多い。

夏休みに入ってからまだ奏とは1、2回しか会っていないけど道場の皆にはほぼ毎日会っている。

仕方ないと思うけど、自分でも少し考えてしまう。

そして、こんな大変な生活だけど、その生活にだんだん慣れてきた自分がいることに驚く。

僅か3ヶ月程度しか通っていないのに、既に以前の世界での自分の体力以上の体力が付いている。

前の世界でも陸上部に入っていたから、体力がないという訳では無かったはずなのに・・・

それほど秋希さんから課されたトレーニングメニューが的確だったのだろう。

技術はほとんどついていないが、これは嬉しい誤算だったりする。

そんな日々の中で、今日は久しぶりの本当の休日。

何でも、

『今度出かける（合宿？がある）から準備がある

お前も準備や連絡をしておけ』

とのことらしい。

日取りは今日の4日後から夏休み期間中可能な限り。

だから、残りの今日を含めた5日間は休息とそれらの準備に充てるそうだ。

僕も当然のように連れて行かれるそうで、可能なら奏も連れて来る

よう指示された。

八條さんに聞いたら、ここ2、3年で恒例？になりつつある強化合宿？だそうだ。

実際来るのは時間に余裕がある学生だけで、社会人の人たちは大抵用事があるから不参加。

といっても大学生の方は今年は参加しないそうなので、僕たち4人（+可能なら奏と塔貴也さんも）だけだ。

去年までは参加していたそうなのだけど、今年は大学も4年目。そろそろ就活とか卒論が重なってきて忙しくなったそうだ。

・・・というか、よく今まで道場に通うことが出来ていたものだ、と感心したのを覚えている。

『頑張ってください』

と、一言応援の言葉を贈っておいた。

正直、変に年が離れすぎていても互いに気を使うだろうし、こう言っただけだが、僕としてはちょうど良かったような気もする。

なので、旅行気分でもあり少し楽しみだ。

・・・まあ、そんな気分よりも合宿に対する不安の方が何倍も大きいだけだ・・・

『・・・にしても、凄く久しぶりな気がするよ』

そんな不安に苛まれている僕に操緒が話しかけてくる。

今、僕と操緒は高月家へ自転車に向かっていている途中だ。

「確かにそうかもな。

実際、中学に入ってからほぼ毎日行ってたわけだし・・・」

『うーん、半年前のトモだったら考えられないよね。』

女の子の家に入り浸ってるなんて』

「お前の家は違うのか・・・？」

『おお！！』

『そういえばそうだった』

本当に頭から抜けていたのだろう、とても驚いたように声をあげる操緒。

確かに、以前の世界の半年前の僕でも嵩月家に入り浸ることになるうとは思ひもしなかっただろう。半年前と言えば・・・

『ともはさんですか。なるほど。いいお名前だ』

賛美の視線

『じゃあ、ともはさんのオススメで！』

期待の眼差し

『信じられない……あなた本当に夏目くん？
写真で見るより全然可愛いじゃない……』

驚愕の眩き

『……もしかしたら私のお義姉さまになるかも知れない人だって、聞かされていたものですから……』

恥じらいの笑み

『いいなあ……私、小さいからつらやましいです。ちょっと憧れちゃいます』

憧憬の溜息

向けられていたのは【夏目ともは】という男の娘

ハッ！！

凄い悪夢が頭の中をよぎったような……
というか、封印していたはずの記憶を思い出してしまった。
忘れたままでいればよかったのに何故思い出した！？
僕の馬鹿！！

『どしたの、トモ？
急に止まったりして』

気付けば走らせていた自転車を止め、頭を両手で抱え込み自転車のハンドル部分に押し付けていた。

「イ、イヤ、なんでモナイ」

『？』

もとの体勢に戻り、再び自転車を嵩月家に向けて走らせる。

怪訝そうな顔を操緒が浮かべながら憑いて来るけど、こればかりは知らない人に話す訳にはいかない。

可能なら、奏の　おそらくアニアも　記憶からも消し去ってしまいたいぐらいなのだ。

今の世界では絶対にしない！！

一回したらその後も連続でやらされるに決まっている！！

特に、朱湮さんとか冬琉さんにバレる訳にはいかない。

あの二人にバレたらいくらでも使われたりネタにされる。

『・・・まあいいけど・・・』

操緒がまだ納得していないのが良く分かるけど追及はしないでくれた。

早く嵩月家に行ってしまおう。

連絡はしてあるから大丈夫だと思うけど・・・

? ? ? ?

「えくと・・・?」

嵩月家（組）に到着した僕と操緒はいつものように裏口から入っていったのだけど・・・

（表口は明らかにまずいし、裏口が嵩月家の家族が主に使っている玄関で、いつも学校帰りに奏に連れられて入っているので、そちらからあがるようになった）

『・・・なんか、ピリピリしてない・・・?』

うん。

操緒の言う通り、何故か嵩月組の空気が固い。

というか、やたら殺気だっているというか、緊張しているというか・

・

出入り直前の空気に近い気がする。

因みに、以前にも数回ほどこんな感じの空気があって、その時は全部出入りの前だった。

今回もそうなのかなー、と思ってたんだけど・・・

「・・・あ、智春くん」

ちょうど奏が前方から歩いてきた。

いつものようなラフな洋服ではなく、かなり高そうな着物に身を包んでいる。

高いからと言って装飾が派手なのではなく、布がかなりの高級品のようなのだ。

祖母さんの好きそうな服だなー

なんて気楽に思っていたけど、

「・・・あれ・・・?」

奏は何でそんな服着てるの?」

出入りに奏が付いていくことはまず無いし、付いて行くとしてもそんな大和撫子風の格好にはならないだろう。

・・・いや、嵩月祖母とか母ならありえるけど・・・

「良かった・・・こつちに」

「え、え？」

僕の質問に答えるよりも先に、奏は僕の腕を掴んで引つ張っていく。それに抵抗もせず、戸惑いながらも奏が引つ張っている方向について行く僕と操緒。
心なしかいつもより奏の表情かおに焦りが見え隠れしているような気がする。

『どうしたんだろ？』

操緒が僕に聞いてくるけど、そんなこと僕に聞かれても分かる訳がない。

そうこうしている間に奏の部屋の前に到着していた。
扉を開け、僕（と操緒）を部屋の中に押し込む奏。

「ちょ、ちよつと」

「.....」

奏の部屋に入るのは初めてじゃないから、別に照れがある訳ではない。

だから、言ってくれれば自分から入るんだけど・・・

奏の部屋は、潮泉の自室ほどではないけれど、それなりに簡素な部屋だ。

畳敷きの和室の部屋で、部屋の中央には卓袱台が。

左奥の方には文机と、小さな本棚が。

本棚のやや奥には、以前のデートの時に買ったヒトデ？と蜥蜴？のぬいぐるみが。

文机の上には写真立てが一つ。

その中に納まっているのは、僕と奏、それに操緒とペルセフォネが写った写真だ。

ここまでだったら潮泉の部屋とほぼ同じなのだが、この部屋には床の間がある。

そこには、清流を泳ぐ鮎の描かれた掛け軸が掛けられている。

また、その下には桔梗が活けられた鉢が置いてあり、そこを見ているだけで外の猛暑を忘れて涼やかな気分になってくる。

とはいえ、今の僕らは戸惑ってばかりで、そんな気分には全くならないのだけど……

「……………」

奏は奏で黙り込んでるし……

まるで狩猟者に追われて隠れている獲物のように周囲に耳を敬てている。

本当にどうしたんだろう……？

奏の状態が状態だけに僕も操緒も話しかけられずにいた。

時間にして2、3分ほどだっただろうか、奏の緊張も解け、敬てていた耳を戻し普段の雰囲気に戻る。

それでも、やや周囲に気を取られている。

「ねえ、一体どうしたのさ？」

「そんなに警戒して……………」

仮にも自分の家だろうに……

ここで安心できないなら、奏は一体どこでなら安心できるというの

だろうか・・・？

「・・・いえ、だいじょぶ、です」

・・・何が「だいじょぶ」なんだろうか？

さつきから奏と会話が噛みあっていないような気がする。

確かに、元々慣れていない人には分かりにくいであろう話し方をするのが奏だけど、今日はそう言う訳ではなさそうだ。

普段は、文自体が分かりにくいだけで、意味は返事になっている。

だけど、今日はそう言った分かりにくさではなく、純粋に会話が成り立っていないような・・・？

「・・・」

正直言って、信用されていないのかと思うとかなりキツイ。

奏が話さないのだから何か理由があるのだろうけど、それでもだ。

だからと言って、奏に無理矢理喋らせるという様なことはしたくない。

だけど、黙っていたら奏が話してくれるという訳でもないだろう。

なら、結局聞くしかないだろう。

直球でいったらはぐらかされるかもしれない・・・

悪いと思うけど、変化球でいかせてもらう。

「・・・へえ、軸と花、変えたんだ」

多少わざとらしかったから奏にバレるかと思ったけど、奏も誤魔化せることなら誤魔化したかった様で僕の話に乗ってきた。

その事で、また少し心が軋む。

「はい。」

涼しい感じ、にしました。夏なので・・・」

「奏がやったの・・・？」

「教わりながら、ですけど。お母様に」

「それでも、すごいよ」

「・・・・・・」

頬を染めながら嬉しそうに顔を綻ばせる奏。純粹に褒めてもらえたのが嬉しいのだろう。

そんな彼女を謀ろうとしている自分がいることに、どうしても嫌悪感を感じてしまう。

こんな時に限って操緒は黙り込む。

喋ってくれた方がまだ気が楽なのだけれど・・・

「そういえば、奏の着物も桔梗の花だよね？」

「それも夏だから・・・？」

奏が来ているのは中振袖で、全体が淡い藍色で染め上げられており、そんな中に桔梗の花がひっそりと、しかし明確な存在感をもって一輪描かれている。

帯はやや淡い紺色だ。

本来、桔梗は秋の七草として有名だけど、実際の開花時期は6月～8月辺りなので夏に使われていてもあまり違和感はない。

それに、桔梗の花言葉は奏にピッタリだと思う。

『変わらぬ愛』

『気品』
『誠実』

他にも『従順』とかがあるけど、それ以外は奏を言い表してるんじゃないかってぐらいだ。
操緒には着こなせない服だと思う。

「これは、選んでもらったんです。お祖母様に」

ああ、やっぱり。

僕の予想は正しかった訳だ。

「よく似合ってるよ。」

奏はやっぱりそういう雰囲気の方が良く合うね」

自然とそんなクサイ言葉が口から飛び出てくる。

普段の僕からはとても考えられない台詞だろう。

その証拠に、奏の後頭部辺りに浮いている操緒の表情がすごいことになっている。

・・・僕だって似合わないことぐらい分かってるよ・・・

「あ、ありがとう」

更に頬を朱に染め、というか顔中を真っ赤に染め照れている奏。
下手すりゃこのまま発火するだろう。

まあ、そこまで言うつもりもないけれど。

「でもさ、

まあ、

どろどろして

ここが、

着物なんて

問題だ。

着てるの？」

さっきまでの緊張感はほとんど消えているから、いつもの会話の様に気楽に返してくれるかもしれない。

だけど、ここで意識が元に戻ったら全く意味がない。

・・・奏はどう返してくる？

返事までの時間が凝縮され、すごく長いものを感じた。

実際は2、3秒と経ってはいなかったと思うけど。

「悪魔の家同士の会合、です」

！！

意外とあっさり喋ってくれた。

「・・・え、と・・・」

どうしてその会合があると、奏はそんな格好をしないといけないの？」

とりあえず、奏が気付くまで普段の調子で会話を続けていこう。

「私も出ないといけない、から」

「へー、じゃあ、空気が出入り前みたいな雰囲気になってるのは・・・」

「はい。」

ひよっとしたら、出入りより危険だから、で・・・

「・・・はっ!!!」

ようやく自分が必死に隠していたことをほとんど喋ってしまったことに気付いたのか、奏の顔がみるみる赤から青に変わっていく。

「・・・」

「・・・」

しばらく互いが無言のまま時間が過ぎる。

「・・・え、と・・・」

「・・・ごめん・・・」

奏の目が潤んできたのが分かった僕は、すぐさま奏に謝った。

奏が望まないのに僕が勝手に誘導？して聞きだしたのだから、僕が悪い。

「い、いいんです。」

「それに・・・」

そんな謝罪している僕に対して奏が返事をしようとした、その時、

「奏ー、準備はできたんかえ？」

そんな声と共に、嵩月祖母が部屋に入ってきた。

「なんや、準備できてるやない・・・って、あんたもおったんか・・・」

「・・・あ、どうも。
お邪魔してます」

一瞬呆気にとられかけたけど、挨拶を返すことはできた。

「おるんなら丁度いいわ。
八伎」

「はい」

い、いつの間に!?

お祖母さんが名前を呼んだ瞬間、彼女の後ろに八伎さんが現れていた。

・・・八伎さんの能力って、ひかり先輩みたいな瞬間移動じゃなかったはずなんだけど・・・

「私は、奏を連れて一足先に向かったく。

あんたは、婿殿を着替えさせたらすぐにあの子と一緒に来るんやで」

「はい」

「じゃあ、奏、行くで」

そう言つて、お祖母さんは奏の手を取り、奏と一緒に部屋の外へと消えていった。

あとに残されたのは、僕と操緒、それに八丈さんだ。

「あの・・・」

突然の展開に全く付いていけず茫然としている僕と操緒。

一先ず、八丈さんに話を聞こうと思ったのだけど、

「すみません、時間がないのでお話は車の中で。」

「・・・付いてきてもらえますか」

「は、はい」

なんだか良く分からず、戸惑いながらも八丈さんの後ろについて行く僕と操緒。

連れていかれた先には、

「・・・あの・・・？」

何故か、黒のスーツが1着準備してあった。

構成員の方々が着るにはややサイズが小さいような気がするのだが？

「どうぞ、サイズは合っているはずなので」

「・・・って、僕が着るのかこれ・・・!？」

「出来るだけ急いでください、時間も迫ってます」

よく分からないけど、八仗さんに急かされるまま着てきた服を脱ぎ、用意されていたスーツに袖を通し、黒のネクタイを締める。

・・・洛高に通つといてよかった・・・

こんなことで八仗さんの手を煩わせる訳にもいかないし・・・
僕が着替え終わったのを確認した八仗さんは、

「では、行きましょう」

そう言つて、僕が付いて来るのが当然のように先を歩きだした。

僕と操緒も急いでその後を追う。

そうして、用意されていた黒い革靴を履き　　これまたサイズがぴ
つたりだ　　表の玄関から外へ出る。

そこには、

『ふえ！？』

構成員の方々が黒いスーツに身を固め、玄関から表門までずらつと並んでいた。

そんな構成員の方々の間を小走りに抜ける。

そして、抜けた先には黒塗りのでかいメルセデス・ベンツが止まっていた。

そのそばには既に八仗さんと社長が立っており、誰かを待っているようだった。

そして、社長の視線が僕を捉えると、

「おお、来たな婿殿。

さあ、早く乗れ」

そう言ってきた。

どうやら、僕のことを待っていたくれたようだ。

この暑い中わざわざ大変だろうに・・・

「すみません、遅くなりました」

どこに行くのか分からないが、待たせた訳だし、一先ず謝っておこう。

「なあに、構わん」

そう言いながら、後部座席に座る社長。

八枝さんも当然後部座席だ。

でかい車だからどうとでもなるが・・・

一応助手席に座る。

まだ僕の向かう先での立場が分からないのだから、念のためという訳ではないけれど席次の一番低い所に座っておく。

そして、僕を乗せるとすぐに車は発進した。

・・・状況に流されるままだったけど、万が一にもかなりマズイ所に連れていかれたらどうしよう・・・？

そんな不安も車が発進してから暫くしてから八枝さんが説明してくれて解消した。

いや、逆に余計な不安が増えたのだけれど・・・

その説明内容とは要するに、

僕を悪魔の家同士の会合に連れていく

とのことだった。

まあ、そのことはさっきの奏との会話でなんとなく予想が付いていたから特に問題ではない。

問題があるとしたら、その際の僕の立場だろう。

当初、社長は僕を奏の契約者、もしくは婚約者としてその場で紹介

するつもりだったらしい。

当然、嵩月家女性陣の猛反対に合い却下された。

だが、僕をその場に連れていくということ自体は奏以外の面々から賛成されたらしい。

その際にタイミング良く僕からの電話があり、僕が嵩月家に来ることが分かったので、そのまま連れていくことが決定したのだとか。

・・・奏がやけに緊張して周囲を警戒していたのはそれが理由か・

結局僕は見つかって連れていかれる破目になったのだけど・・・

まあ、それはいい。

悪魔に対して嫌悪感を持つてる訳じゃないし、どんな人？たちかも多少楽しみだからだ。

ただ僕が、

八枝さんの付き人

という扱いになることに関しては頭を抱えずにはいられない。

全くそんなことをした経験がないから、何をどうすればいいのか良く分からない。

一応一通りのマナーというか、振舞い方を教えてもらったから何とかなると思っけど・・・

まあ、もうなるようにしかならないから、やるしかない。

操緒は、僕が演操者ハンドラーということがバレると厄介なことになるためしばらく消えってもらっている。

そのため、暫くは独りで頑張るしかない。

それから、参加する家は華鳥風月の四名家を筆頭とした日本全国の一癖も二癖もある悪魔の家の方々。

それなら、彼らに会えるかもしれない。

僕から会うことができる機会はまずないだろうから考えもしなかったけど、出来ることなら彼らも助けたい。

僕の勝手な独りよがりなのかもしれないけど……

鳳島蹴策、氷羽子の兄妹

会ったこともないけど、真日との契約悪魔であろう 既に契約しているのかどうか分からないが 風齋一族の雌型悪魔

由璃子さんは……ほっとこう
十分幸せそうだし

別に今回だけで何か出来るとは思っていない。

それでも、何か変えることができるかもしれない。

そんな思いを胸に抱いた僕を乗せ、車は進む。

行先は、極山荘

……どこかで聞いたことがあるような……？

17回 不安と希望（後書き）

気付けば原作やアニメで、智春が奏を「嵩月」、奏が智春を「夏目くん」と呼んでいることに違和感を覚えてきました。

そのうち他のキャラの呼び方にも違和感とかを覚えそうで怖いです・
・

部長とか冬琉とか・・・

今後頻繁に書くであろうキャラは特に

18回 会合（前書き）

今回、かなりどうでもいい内容です。

次回への繋ぎと、四名家の当主をちょっとでも出したかっただけ
すし・・・

その分、次回をストーリー上重要な話にする予定です。

18回 会合

「だから、巡礼者商連合との連携など必要ないと言っているだろう
!?!」

「何を言う!?」

彼らは、我らに比較的協力的なのだぞ!!

法王庁のような馬鹿な奴らと同じではないのだ!!」

「そいつらに酷い目に遭わされた同胞たちがいることを忘れた訳ではあるまいな・・・?」

僕が今いる場所では、大勢の悪魔の方々が議論を交わしている。

初めは丁寧な口調だったのだけれど、次第に熱が籠っていき、今のような激論にまで発展している。

この場にいるのは主に男性（雄型悪魔） というよりも、それぞれの家の代表とその主従 で、女性（雌型悪魔）はほとんどいない。

彼女たちは、悪魔の家同士の友好のため、別の場所でお茶会をしているそうだ。

個人的にはそっちの方が良かったのだけれど、八枝さんの付き人という立場上彼や社長から離れる訳にもいかない。

しばらくすれば、本当に親しい家同士の会合に移るから僕は参加不参加どちらでも良いそうだが、それまではこの場にはいないといけならしい。

「ならば、我々悪魔だけで来るべき滅びに備えろというのか!？」

「勿論それが最善ではある。」

だが、それができないからこそ巡礼者商連合や法王庁の名前が拳がっているのだ。

他の選択肢に救いを求めるといふ結論は既に示されている以上、先程の発言は無意味なものだぞ」

「・・・そもそも原因が分かっているのか・・・？」

そこを突き止めない限りはどのような対策を施そうとも全て無意味なものになり下がるであろう」

現在の議題は、数年後に来ることが確定しているこの世界の崩壊に對してどのようになるのかということ。

とはいえ、議論は最初から今まで堂々巡りだ。

あの“^{デウス}神”のことを知らないのだから、そうなってしまつのは仕方がない。

僕は、前回の世界で“一巡目の”夏目直貴や律都さんから全て教えてもらったから解決策を知らない訳ではない。

というか、“潮泉律都”という存在なら全部知っているはずだ。

それこそ、どのような選択肢をとつたらより良い方向に行くかも知っているのだから。

なんせ彼女の悪魔としての能力は、別の時空間に存在する自分と感覚と思考の一部を共有する「意識共有」だ。

だけど、何故か彼女自身は悪魔とは知られていないからかこの場にはいない。

・・・嵩月母は潮泉の出身の悪魔だから、何で知られていないのか分からないけど・・・

寧ろ、今僕たちがこんなにも前回の世界と違う行動をしているにも拘らず、彼女が僕たちに対して何も言っただけなのが不気味でしようがない。

言っただけのこととは、特に問題がないってことなのか？

それとも、奏には何か言ってるんだろうか・・・？

この後奏に聞いてみるか。

「では、あなたは巡礼者商連合と組めば原因が分かるか？」

「そうは言っていない。

飽く迄、選択肢が増えるというだけだ」

「論外だ!!」

それだけのメリットでやつらと組むのは危険すぎる!!」

白熱している議論の中でも、全く口を開いていない家もあれば、常に議論に参加している家もある。

青月家 青月父と八枝さん は、全く口を開いていない。

同じ華鳥風月の華島家などは、率先的に会話に参加しているのに。

話す必要などないということなのだろうか・・・？

確かに、彼らには既に僕が知っている情報はほとんど教えてあるし、その中に“^{デウス}神”のことも含まれている。

だから、議論に参加する必要は全くない。

答えはもう出ているのだろうか。

「では、あなたには何か良い策があるとでも？」

既に我々だけでは手詰りなのですよ？」

「むう・・・」

議論を見ていて分かったのは、悪魔の家ごとにそれぞれグループになっっているということ。

主に5つに分かれている。

4つのグループは、当然のように四名家に属しているだろうと思われる悪魔の家々。

初めの席の座り方でそれは何となくだけど分かったし、実際に議論が始まると、それぞれが同じグループの主張を擁護するかしないで良く分かった。

残りの一つは、恐らくどこにも属していないであろう悪魔の家々。名家の庇護が無くても十二分にやっていけるだけの力は持っているであろう悪魔の方々。

いかにも歴戦の勇士としての貫禄が当主思われる方からは感じられる。

「……魔神相剋者だ……」

アスラクライン

「なに!?!」

「彼らなら、解決策になり得るのではないか!?!」

そんなグループの中でも、良く喋っているのは華島家と思われるグループと、鳳島家と思われるグループ。

風齋家のグループや、嵩月家のグループはあまり参加していない。それぞれの当主の雰囲気の違いもあるのだろう。

華島家は、どこか権力欲にまみれた政治家を連想させるような風貌の当主。

鳳島家は、冷徹無比な視線を漂わせるマフィアのボスのような風貌の当主。

風齋家は、常に前を見て走り続けているスポーツマンのような風貌の当主。

嵩月家は、普段の親バカの空気など一切感じられないヤクザの顔の嵩月父。

初見で一番まともだったのは風齋の当主だけど、この中ではその一

般人に最も近い空気のせいかな違和感がすごい。

「バカな!？」

「正気か貴様!？」

「そつだ、巡礼者商連合や法王庁だけにはおさまらずよりによって
アスラクライン魔神相剋者だ!？」

「所詮、ハンドラー演操者の別の在り方だろう!!」

どこまでいっても奴らは我々の敵以外の何者でもない!!」

「それを言うなら、契約者の別の在り方とも言えるが・・・?」

白熱した議論は二転三転していき、更に四、五転してもとの議題に
回歸するという結果に納まっている。

・・・聞いている限り、答えなど出ないのだから別の話をすれば良
いだろうに・・・

はあ、早く終わらないかな・・・

ずっと正座していたから足も痺れてきたし・・・

? ? ? ?

ようやく終わった討論は、結局何の結論も出せずに終わった。

嵩月父や八丈さんが何も言葉を発しなかったのが良く分かる。

あんな無意味な議論に参加しても、自分の利益など全くないだろう。

下手をすれば、自分たちの醜態を晒してしまうだけになる。

「……いつつ……!!」

痺れた足を引き摺るように動かしながら歩く。

ほとんど感覚が無くなっているせいか、非常に足元が不安定で怖い。だけど、まだあまり気が抜けない。

一先ず嵩月家に与えられた部屋に入るまでは、僕の立場は八枝さんの付き人なのだから。

下手な事をする訳にもいかない。

「……どうぞ……」

先行して僕たちを案内してくれていた極山荘の従業員の方が部屋の扉を開けてくれる。

そのまま部屋に入っていく嵩月父と八枝さん。僕も続いて入って行く。

部屋には既に、嵩月祖母、母、奏の女性陣3人が到着していた。従業員の方の目もあるからか、普段では考えられないほど当然のように堂々と上座に座る嵩月父。

僕と八枝さんは、入口の近くの席に座る。

……また、正座か……

「では、準備が整い次第お呼びいたします」

そう言って、扉を閉め、遠ざかって行く従業員さん。

ある程度遠ざかったのが分かったのか、奏が近づいてきた。

「……だいじょうぶ……?」

「ああ、うん。
足が痺れてるだけだよ」

そう言いながら、足を伸ばす僕。

行儀が悪いなあ、と思ったし、嵩月家の皆さんに失礼だと思うけど、普段からの慣れというのはすごい。

そんな気遣いを無視して、くつろぎだしてしまった。

「だらしないわ。」

今度その辺りの礼儀作法についても仕込んでやらんとな」

「まあ、仕方ないでしょう。」

普通の中学生にしては良くやっていた方だと思いますよ」

嵩月祖母が向けてくるやや呆れた発言に対して八枝さんがフォローしてくれた。

とはいえ、だらしないのも事実なので、多少痺れは残っているけれど、まともな姿勢に戻る。

・・・正座ではないけど・・・

「それにしても、よお、あれだけ無駄な議論を発展させることができるもんじゃのお。」

華島も鳳島も・・・

のお、婿殿」

「議題が議題ですから仕方がないとは思いますが・・・」

実際、滅びが数年後に確定しているのに、自分たちは何も出来ないのはかなりきついだろう。

原因も分からないのだから対処の仕様もない。

僕だったら耐えられそうにない。

「また、あの話だったのですか……？」

「ええ。」

『何をどうすれば滅びは回避できるのか？』という水掛け論でした。

まあ、答えが出てもまず否定されますからね……」

「アスラクライン魔神相剋者、か……」

そこまで会話が進んだ時点で、僕と奏に自然と視線が集まる。確かに今のまま歴史が進めば、僕がアスラクライン魔神相剋者になることは確実にある。

だけど、それで僕と奏の関係が変わる訳じゃない。そのことは話してあるから、今更問われても困る。

「それはそうと、夏目さんはこの後どうするつもりですか……？」

そんな空気を察してくれたのか、八丈さんがそう聞いてくる。

「……会いたい人がいるんです。」

会えるかどうかは分かりません。

だから、少し探してみたいと思ってるんですけど……」

今の僕が鳳島兄妹に会っても何ができるか分からないし、嵩月家と鳳島家の関係を考えたら会わない方がいいのかもしれない。だけど、今回会わなかったら、いつ会えるかなんて分からない。機会がある内に、少しでも会っておきたい。

「……あー、美里亜さんなら、私と一緒にです、けど……」

「美里亜さん？」

誰だろうか？

奏の事だから全く関係の無い人物のことを口に出すとは思えないけど……

「風齋家のお嬢さんですよ。」

家は長男が継ぐことになっていきますから、美里亜さんはあまり重要視されていませんね。

まあ、それでも風齋の家の子らしく戦闘能力は普通の悪魔とは比べ物になりませんが……

恐らく、夏目さんとお嬢様の仰っていた真日和秀の契約悪魔かと」

八丈さんがそう付け足してくれ、奏もそれで合っているのか、コクコク、と首を縦に振って同意している。

「風齋のお嬢さんなら、一緒にいても大丈夫でしょう。」

あそこは当主自身が争いを好んでいませんから……」

「もう少し、欲が出ても良さそうなもんなののに」

「……少しでも非在化の心配が減るに越した事はありません。」

その考え方なら、最低限の自衛が最善です」

お茶を啜りながら、そんな話をする嵩月夫妻。

話を聞く限りでは、そんなに好戦的な性格ではなさそうだ。

……なら、どうして真日和があそこまでやり直したがつていたのだろうか……？

今の話を聞くだけじゃ、非在化の心配など微塵も感じられないのだけれど……

ヴィヴィアンは消えていた訳ではないから、非在化したり、死んでしまった訳ではないのだろうし。

「……じゃあ、奏と一緒にいきます。

そのまま探せるようなら探してみます」

この後は、大人や後継者は会合が続くが、子供（高校生まで）は基本自由だ。

会合について行っても良いし、仲の良い悪魔の友人と話していても良い。

といっても、大抵その行動は親が決めるのだそうだけど。

僕と奏は例外だ。

「では、夏目さんにはお嬢様の護衛というかたちをとっていただきます。

なので、基本お嬢様に同行していただくことになります……」

「はい、それで構いません」

「分かりました」

八枝さんとの打ち合わせも終わり、話題も一段落ついた頃だった。扉の向こう側から、従業員の方向の声が聞こえてきた。

「失礼いたします。

準備の方が整いました」

「分かりました。

社長」

そう、返事を返し嵩月父に言葉をかける。

「ああ、分かった」

それだけ返し、社長と八枝さん、それに嵩月祖母と母は部屋から出ていく。

それからしばらくして、

「私たちも行きましょう。

夏目くん」

そう、声をかけ促してくる奏に、

「分かりました、お嬢様」

多少ふざけた調子で真面目に返事を返しながら廊下に出る。

そして、その調子で二人並んで歩きだす、

何だか変な感じだ。

その証拠に、

「うー、名前は駄目、でも、嵩月、って呼んでください」

少々奏も戸惑い気味だ。

やはり八枝さんや構成員の方に言われるのとは違うらしい。

「そう言う訳にはいきません。

お嬢様は大事に扱うよう、八枝さんから厳命されていますので」

実際にはそんなこと言われてないけど、そんな感じがいいのだろう
と思って、主従の関係風に声をかける。

「むー」

多少ふてくされたようになる奏。

「どうかありませんか、お嬢様？」

そこに追撃のように言葉をかけていると、

「何してんだお前ら……？」

かなり呆れを含んだ声が後ろから届いてきた。
しかも、普段から聞き慣れてる声だ。

驚いた僕と奏が二人揃って後ろを振り返ると、

「……プレイの一環か……？」

似合わねえからやめとけ」

「……は、八條、さん……？」

「おう」

灰色のスーツに身を包んだ八条和斉がそこにいた。

19回 邂逅（前書き）

少々遅れてしまいすみませんでした。

自分には珍しく、今回はそれなりに会話が多いことが原因の一つかもしれません・・・

そして、PVが何と10万件を超えました。

ありがとうございます！！

それだけ多くの回数読んでいただけるとは、感無量です。

今後ともよろしく願います。

19回 邂逅

八條さんの隣には、知っているけど想像もしなかった人物？（悪魔）と、全く知らない人物が立っていた。

一人は、

「なあ和斉、誰だこいつ？」

銀髪つぱく染めた髪を逆立て、紺色のスーツを着ているがネクタイは締めず、シャツを肌蹴させている。

その肌蹴た胸元のみぞおち付近に、逆さ十字架の入れ墨がのぞいている。

どこか間違えたホストのような格好。

見た目は、秋希さんといい勝負ができるだろうパンクっぷりで、いかに、頭が悪そうな顔。

鳳島蹴策

前回の世界で、ほとんど事件には関わってこなかったくせに最悪の結末の引き金になった一人だ。

「嵩月んとこのお嬢様と、その彼氏？みたいなもんだ」

「「違います」」

「ほー！！」

あの嵩月の親バカ当主が認めたのかよー！！」

「何勝手に話進めてるんですか！！」

これについては、現段階では断固抗議する必要がある。
なんだって、関わってもこない癖して、いつだって鳳島蹴策こいじうはキー
パーソンになるのだろうか。

「まあ、本人たちは否定してるから、そう言うことにしておいてやるか……」

「OK、和斉がそう言うなら俺もそう言うことにしといてやるぜ。」

俺は、鳳島だ。

鳳島蹴策。

よろしくな。

えーと……」

「ああ、夏目。」

夏目智春、です。

よろしく」

「……嵩月奏、です……」

「おお、よろしく」

何だかんだで、鳳島との自己紹介も済み、視線はもう一人の人物？

（悪魔？）へと向く。

歳は、僕たちと同じぐらいか少し低い程であろう少女。

背は僕や奏より少し低い程度だ。

見下ろすほどではないが、やや視線が下に行く程度。

和斉さんと同じ色のワンピースを着て、これまた同じ色のストッキングと、黒の肘まである長手袋を身につけている。

髪は、これまた八條さんと同じ灰色で、結って纏めてあるのを解いたら腰ほどまであるかもしれない長さ。そんな髪を顔の右側で一纏めにしている。所謂サイドテール、もしくはサイドポニーというやつだ。顔は、かなりの美少女。服と髪型のせいでそうとは思わなかったけど、着物を着せて髪を整えたら実物代の日本人形と間違えるほどじゃないだろうか？
眼の色は、黒。

「……はじめまして……」

そんな少女が僕に向かって挨拶してきた。

「あ、ああ。

はじめまして。

さっきも言いましたけど、夏目です。

夏目智春。

え、と……」

彼女の名前が分からなくて困っている。

「美呂^{みろ}だ」

「え？」

「八條美呂^{みろ}、俺の妹だ」

「……………」

「どうした？」

黙り込んでしまった僕を不審に思ったのか、八條さんが言葉をかけてくる。

「……そんな彼の言葉や視線が気にならないほど呆けてしまった自分があるのが分かる。」

「……改めて、はじめまして……」

嵩月奏、です……」

「……八條美呂……」

「……美呂ちゃん……で、いいですか……?」

すごく不満そうな顔になる美呂ちゃん。

それを見た兄の八條さんが、

「ああ、それで良い」

そう言いつつ、

「……兄様がそういうなら……」

という返事を返していた。

「……良かった……」

その返事に顔が綻ぶ奏。

そして、そんな一連のやり取りが全く頭に入って来ず、どこか他人事のように見ていた僕も、ようやく頭が回ってきた。

「・・・って、八條さんに妹なんていたんですか・・・!?!」

気付けばそう叫んでいる僕。

「なんだ、いたら悪いのか？」

「いえ、そういう訳じゃないんですけど・・・

・・・違和感がすごいというか・・・」

「気持ちは分かる」

そう言っつて、頷きながら話しかけてくる鳳島。

「こいつが妹といる時に笑い合った所なんて、俺でも見たことがないから・・・

折角妹がいるんだぞ!!」

もっと楽しむべきだろう!!」

・・・こつちでも妹好きの変態なのかこいつは？

・・・でも、ここにいてるってことは・・・？

「そうか？」

こいつが生まれた時からこの関係だから、違和感やら、楽しみやらを意識する訳でもないんだが・・・」

「それでも・・・」

知らぬ間に妹談議を始めた鳳島と八條さん。

一方的に鳳島が自分の主張を展開し、それに気だるそうに対応している八條さん。

僕と奏、それに美呂ちゃんを措いて熱弁を振るう変態（鳳島）。そんな二人を眺めていた僕たちの中で、最も意外な人物が口を開いた。

「……そうですね……」

「え？」

その人物とは、先程あつたばかりの人物である美呂ちゃん。

「……嵩月本家の跡継ぎである奏さんや、その従者である夏目さんには言う必要はないと思いますが……」

「「？」」

何故か空気が昏い。

それこそ、なぜか彼女の周辺の影が集まり、灰色の色調の彼女の服を暗い呂色に染め上げているようにも思えてくる。

その空気に吞まれてはいないけど、それでもどうしたって普段よりも体が強張ってしまう。

そんな中、

「……兄様に手を出したら沈めますから……」

「「……え……？」」

彼女が発した言葉に、僕らは茫然としてしまった。

言葉を発した当人は、先程までの暗い雰囲気嘘だったのではないかと思うほど年相応の可愛い少女に戻っている。

そして、それ以上口を開くこともなく、ジッ、と変態（鳳島）と会

話をしている八條さんの方を見つめ続けている。

その視線には、先程僕らが感じた昏いものはなく、どこか、隠している熱を含んだようなものを感じ取る事ができた。

ってというか、沈めるって!?

いや、それよりも、

『兄様に手を出したら』

って、どういうこと!?

・・・そうか、僕が八條さんを攻撃したらっていうことか。でも、それだと今美呂ちゃんが八條さんに向けている視線の意味が良く分からない。

奏はどこか納得がいったのか、僕の様子に混乱はしていない。それでも、戸惑ってはいるようだ。

そんな風に二人を眺めていると、ようやく鳳島との会話を切り上げたのだから八條さんがこっちに向かってきた。

「・・・ふう、毎度毎度こいつは・・・」

「おい、和斉!!

まだ、話は終わってな「うるせえ」・・・ガッ!!

向かってきたのだが、そこに話を続けようとする変態（鳳島）が追いついてくる。

それを、頭を殴ることで黙らせる八條さん。

殴られた方の馬鹿（鳳島）は頭を押さえてその場に蹲る。

話している途中で遮られたためか舌を噛んだ様で、蹲りながらも口を開いて舌を出すという非常に間抜けな格好になっている。

そんな馬鹿（鳳島）を一瞥して、僕らに話しかけてくる加害者。

「……ところで、何で夏目がここにいる……？」

嵩月のお嬢さんがいるのは当たり前だが……」

準不審人物を見るかのような視線を僕に向けてくる。

いや、そっちこそどうしてここにいるんですか……？」

「僕は、八枝さんの付き人で……」

今はお嬢様の「気持ち悪いからやめろ」……嵩月の護衛です。

……八條さんこそどうして……？」

その僕の答えを聞き納得がいったような雰囲気になるが、その後が続いた質問にはやや頭を捻る八條さん。

「……言っていないのか……？」

何故か奏に確認？をとっている。

「……何も言っていなかったので……」

奏も奏で分かったように返事を返している。

美呂ちゃんも、いつの間にか復活していた鳳島も何のことは分かっているようだ。

その所為か、感じる疎外感がそれなりにある。

奏の返事に溜息をつき、

「……別に言ってもかまわなかったんだが……」

先程の鳳島と同じように頭を殴られて蹲る僕、幸い舌は噛まなかった。

「俺たちが悪魔で、何かおかしいか？」

「お、おかしくはないですけど・・・」

「なら、何の問題もないだろうが」

そう言っつて、この話は終わったとばかりに、視線を蹲っている僕から美呂ちゃんの隣にいる奏に上げる。

「それで？」

お前たちはあんなプレイをしながらどこに行こうとしてたんだ？」

「・・・プ、プレイ・・・」

その言葉に若干落ち込む奏。

それでも、律儀に返事は返しているのはさすが奏だと思っ。

「・・・その、美里亜さんのところに・・・」

「美里亜？」

どこかで聞いたような・・・？」

名前を聞いて首を捻る八條さん。

そんな彼に言葉を続けようとした奏を他の人物が遮った。

「風斎んとこの長女だ」

その人物とは意外や意外、鳳島だった。

「家の方針か何なのか知らんが、ごく普通の一般人みたいな生活をしてるらしいぜ」

「ああ、あそこの家か・・・というか、何故お前が知ってるんだ？」
その点が疑問だったのは八條さんも同じだったらしく、鳳島に聞いている。

「ふ、美少女を調べておくのは当たり前だろ！！」

なんだか、樋口みたいな空気を感ずる。

「勿論、それが誰の妹でもなく、しかもツルンと、ペターンとしていることが最善だが、美少女であれば調べておくのが男というものだろう！！」

・・・あれ？

なんか、こいつのストライクゾーンがやたらと広がってないか？

「・・・ちなみに、そこの高月のお嬢さんはどうなんだ・・・？」

「・・・え・・・？」

いきなり話のネタにされて戸惑う奏。

そんな奏に構わず、鳳島は喋り続けていく。

「父親が父親だけあって、男の縁は全くなし・・・だった。
通っている中学も、ごく普通の公立校。」

中学でも、同年年の男子生徒から人気で、非公式ではあるがフアンクラブも出来ているほど。

・・・小学校5年生までは、全く成長の兆しが見られなかったにも拘らず、6年生になってから唐突に成長が始まり、今ではその年齢としては信じられないほどの大きさになり、多くの男子生徒の視線を集めるほどのエローンとした体形になった。

・・・俺としては成長してくれなかった方が良かったんだが・・・
ちなみに、スリーサイズは上から8「イヤーツ!!」・・・グハッ!!」

鳳島が喋っているうちに、奏の周囲の温度が上がっていき、最終的には超高温の右手が鳳島の頬を打ち抜いた。

喰らった方はいくと、すごい勢いでその場で体が縦に一回転半して、頭から廊下に突き刺さる。

「八條さんも余計なこと言わないでください」

そんな言葉をけし掛けた当人に浴びせるが、

「・・・まあ、お前も色々知れて良かっただろ」

「・・・」

それは、そうだけど・・・

「よし、じゃあ行くか」

「はい？」

行くつてどこへ」

「・・・決まってるんだろ、風齋のお嬢さんの所だよ。

俺たちは特に用事もないから、お前たちについて行くさ。

美呂も高月もそれでいいだろ・・・？」

「・・・はい。」

・・・兄様が行くなら・・・」

「・・・はい・・・」

女性二人の許可が取れたので、

「よし、じゃあ先に向かってくれ。」

俺はこの馬鹿を起こしてから行くから」

八條さんは廊下に突き刺さっている鳳島に向かって行った。

僕たちは、そんな彼の言葉に従って廊下を歩きだした。

しばらくして、後ろから聞こえてきた悲鳴は聞かないことにした。

?
?
?
?

美里亜さんの所に到着した僕たちは、自己紹介を済ませ、お茶会に興じている。

と言っても、実際に喋っているのは、美里亜さんや奏、それに美呂ちゃんが少して、僕は部屋の入り口辺りに座って三人の女子の話を

聞いていた。

一応、護衛 出来ているかどうかはともかく なので、席についてお茶会に参加するのもどうかと思ったのだ。

奏も少し不満そうだったけど、一先ず納得してくれたようで会話に参加している。

美呂ちゃんはほとんど何もしゃべらないし、僕の事など気にも留めていないようだ。

だから、主に喋っているのは美里亜さんと奏になるのだけど・・・

「それでね、真日和くんだったら・・・」

「へえ・・・」

「・・・」

現在は、美里亜さんの真日和に対する惚気話が盛り上がりだしたところだ。

どうやら、既に真日和と出会っているらしく、それに伴って好きになっただけでいいらしい。

まだ告白はしていないとか、自分の正体を教えた際の反応が怖いとか、色々その手の話で盛り上がっている。

奏も興味津々だったようで、普段の彼女からは考えられないほど積極的に話に参加している。

「今度、修学旅行で同じ班なんだ」

「頑張ってください。」

私も、応援します、から」

「うん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どちらにせよ、男一人でこの空間は結構きついので、早く二人に来て欲しいのだが・・・

そんな時だった。

「失礼します」

そんな声と共に、八枝さんが入ってきた。

「八枝さん？」

「ご歓談中失礼いたします。

・・・夏目・・・」

「はい」

呼ばれたので、部屋から廊下へと出る。

若干心配そうな視線が奏から向けられてけど、それに答える訳にもいかないのですそのまま廊下へ移る。

廊下には既に八枝さんが緊張した面持ちで部屋の入り口から少し離れた場所に立っていた。

「どうかしましたか・・・？」

飽く迄付き人の様に低姿勢で話しかける。

そんな僕に、声を低くして、周囲に聞こえないように返事を返してくる八枝さん。

「何かおかしいことはなかったですか……?」

「おかしいこと……?」

鳳島が色々を引き起こしてはいたけど、八枝さんの雰囲気からしてそんなふざけた意味の“おかしいこと”ではないのだから、だから、

「いえ、とくに何もありませんでしたが……」

そう、返事を返す。

「そうですね……」

「……何かあったんですか……?」

いつも以上に深刻そうな雰囲気から八枝さんが出ていた。その事に不安を覚えた僕はそう質問していた。

「……」

話すべきか、話さざるべきか悩んでいるであろうまま1分。八枝さんが口を開いた。

「実は……」

?
?
?
?

八枝さんとの話も終わり、部屋の中へと戻ろうとした時、遠くの方に八條さんたちの姿が見えた。八條さんの隣には、鳳島蹴策。そして、鳳島蹴策の隣にもう一人。

背中の中ほどまで、その艶やかな黒髪を伸ばしている少女。髪の毛先はそういう髪質なのか、銀色に輝いているように見える。同じように銀色に輝く鳥の翼を模したであろうブローチを付けた黒いドレスで身を包んでいる。顔は、ゾツとするほど凄まじい美貌だが、所々に幼さが見える。透明感があり、硬質な、まるで日本刀のような造形美だ。

鳳島氷羽子

鳳島本家の跡継ぎで、鳳島蹴策の実妹。
以前の世界では鋼の演操者^{ハンドラー}である部長の契約悪魔として、僕たちの前に立ちはだかった。
今の世界では、流石にそんな雰囲気は全く感じられない。だが、普段の空気はこうして見ているだけでも冷たい。

「おーい、夏目」

そうして、三人を眺めているうちに、鳳島（兄）が僕に気づいたらしく、声をかけながら近づいてきた。

「いや、どこにいるか分からなかったから探したぜ」

「・・・頭は大丈夫なんですか・・・？」

「うん？」

ああ、殴られるのには慣れてるからな」

そう言つて八條さんの方をみる鳳島（兄）。

そんな彼の視線に気づいているだろうに無視して僕に話しかけてくる八條さん。

「夏目には紹介してなかつたな。

蹴策の妹の・・・」

「鳳島氷羽子、ですわ。

はじめまして、夏目智春」

「え、ええ。

はじめまして。

よろしく願います」

相変わらずの口調だなあ・・・

と、若干以前の世界とのつながりを感じて感慨にふける僕。

「それで、美呂たちは中にいるのか・・・？」

「ええ。

今は、女性三人で美里亜さんの恋愛話に華が咲いているところで
す」

そんな僕の返事を聞いて、

「そうですね、分かりました」

そう言って率先して鳳島氷羽子が部屋の中へと入っていく。
・・・どちらかと言えば、部屋に入るのを渋るんじゃないかと思っ
てたからこの反応は意外だった。

まあ、後から奏に聞いたところによると、入ってきた途端、自己紹
介もそこそこに、口を開き、

『今後、お兄様を狙うのでしたら、細切れにしますから』

と、発言して奏と美里亜さんを固まらせたらしい。

そんな彼女に、美呂ちゃんは、

『師匠!?!』

と言って、すり寄っていったのだとか・・・

そんな話とはかく、部屋に入ろうとしている鳳島（兄）に少し話
があるから、と残ってもらった。

八條さんはやや不思議そうな顔をしながら部屋に入っていた。

「それで、話って何だ・・・？」

「・・・いえ・・・」

どう言っべきか・・・？

魔力を出来る限り使わないようにしろ
妹さんのことを決して忘れるな

等々色々言葉が浮かぶが、どれも今言うには少々おかしい。
だから、しばらく考えた末に、僕の口から出たのは、

「・・・氷羽子さんって、美人なんですね・・・」

と言う、自分でも良く分からないものだった。

「・・・はあ・・・？」

いきなり何言い出すんだお前は・・・？」

「・・・いえ、自分でも変だっというのはよく分かってるんですが、
・・・」

「は!？」

まさか、お前氷羽子の奴に惚れたのか？」

「そんな訳ないですよ!！」

そう言っつて、否定するが、さっきの発言のせいで今一説得力に欠ける。

「・・・まあ、人の恋路に口出しする気はないが、あいつはやめと
きな」

「だから、違いますって・・・」

いつもとは違う真面目な雰囲気（兄）がそんな僕を無視して

続ける。

「あいつには、既に惚れてる相手がいるし、その相手もあいつに惚れてる。」

「だけど、決して結ばれない。」

「だからこそ、今のこの自由な時があいつらにとって最も大事な時間なんだよ」

「……………」

以前の世界で佐伯会長が雪原さんに話していた内容が思い出される。鳳島一族本家の跡取りである彼女は、自分の意思で勝手に契約者コントラクターを選ぶことはできない。

もし選んだとしても、生半可な相手では鳳島一族、一千人の武闘派悪魔を敵に回すのだから生き残れはしないだろう。

その事は、蹴策も良く分かっているんだろう。

だから、彼からそれ以上の言葉は出ない。

今言った言葉が、彼と妹の最大限の理想の形なのだろう。

願わくば、いつまでもこの甘い夢が続いて欲しい。

そう思っているのかどうかは分からないが、少なからず考えてはいらるだろう。

「……………」

でも、それならあまり魔力は使われないほうがよろしいのではないかと。

「そんなのは、互いにとって不幸しか生まないです」

「……………」

んなこたあ言われなくても分かってるさ」

そう気楽に返事を返してくるが、流石にこれだけじゃ不安だ。いくらでも、これからこいつが魔力を使うような事件は起きる可能性があるんだ。
だから、

「・・・まあ、あなた一人で手に負えないようなら僕や八條さん、それに何よりも妹さんを頼るべきです。

そのときは僕は力を貸せるでしょうから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その言葉に、どこか思うところがあつたのか黙り込む鳳島（兄）
だけど、これ以上僕がここで何か出来る訳がない。
忠告以上に、今現在効果的な方法はないんだから。

「・・・・・・・・ああ、そんな時は遠慮なく頼らせてもらつよ・・・」

部屋に入ろうとしている僕に向かって、そんな声が後ろからかけられた。

それに手を振って鳳島を呼ぶことで返事にする。
今は、これが精一杯だ。

?
?
?
?
?

八枝さんから言われたのは、

『名家やそれ以外の雌型悪魔が数人、行方不明になりました。』

いずれも中学生から、高校生の年代で、未契約の悪魔たちです。

お嬢様や、美里亜さんも含まれますので、十分注意してください。』

という、やたらと不吉な言葉だった。

幸い、この会合中にはそれ以上何も起きなかったみたいだけど・・・
それでも、しばらく不安は拭い切れなかった。

19回 邂逅（後書き）

来週、書けるかどうかマジで不安です・・・

- ・ 書く気は大量にあるんですけど、モンハンをひたすらやってそらで
- ・

20回 ジョニーさん（前書き）

次回からおそらく本気の修行編に入ります。

今回は、まだ軽めなので。

何話ぐらい続けるかはまだ決めてません。

20回 ジョニーさん

一抹の不安を残しながらも終わった会合。

その数日後、僕と奏、それに橘高道場の面々は同じ県内のある山に来ていた。

山といっても、家族連れでキャンプに来たり、登山客で賑わっているような有名な山ではない。

寧ろ、本来であれば立ち入り禁止となっているであろう不気味な山だ。

木が鬱蒼と生い茂り、山の中でも木が密集している所に行けば、昼が夜になる。

そんな不気味な山にも川は流れている。

僕たちが寝泊まりする山小屋　コテージほどではないが、それでも大きい　の近くに流れており、鬱蒼とした山の木とは逆に日の光が射しこみ、水面に反射して輝いている。

澄み切った川の中には、魚たちが元気に泳ぎ回っている様子が見て取れる。

流れも穏やかだし、水深も浅いところが多く水遊びにはちょうど良い。

「・・・さて、開けるぞ」

「ゴク」

そんな穏やかな山の自然とは裏腹に、僕たち橘高道場一行（+奏）は緊張した雰囲気に含まれていた。

秋希さんが扉の鍵を開け、ドアノブに手をかける。

誰かが唾を飲み込んだような音が聞こえてくる。

それだけ緊張しているのだろう。

それもそのはず、

「うー」

「ほら、嵩月も落ち着いて。

大丈夫だから」

「・・・ほんと、ですか・・・？」

「・・・多分・・・」

去年の使用状況と、使用後の後片付けの顛末を聞く限り、50%以上の確率で“あれ”が大量発生している、という結論が事前準備の際に出されたからだ。

市内であれば、ほぼ100%発生していただろうが、幸いにもここは人里離れた山奥。

少しは発生していないんじゃないかという希望が持てる。

・・・ほとんど、無いに等しい希望だけ・・・

「・・・秋希、慎重にね・・・」

「わ、分かっている」

扉を開けようとしている秋希さんもいつもと違って、テンションが少しおかしい。

そんな彼女に、塔貴也さんが声をかけ、焦った勢いで飛びこまないように注意している。

「・・・冬琉、お前はなんで冬櫻なんて構えてるんだ・・・？」

「ね、念のためよ。」

「そう、念のため……!?!」

「俺に聞いてどうする……」

冬琉さんは、八條さんのとなりで愛刀の冬櫻を構えている。

それを見て呆れる八條さん。

この面子の中では、一番落ち着いているんじゃないだろうか。

『……私が先に見てこようか……?』

僕の後ろで脅えている奏を見かねたのか、操緒が僕に提案してくるが、

「……出来るならとっくに頼んでるよ……」

『……う……!?!』

そう指摘すると奏を心配していた顔を曇り顔に一転させる。

触れられたり、(多分)向こうが気付かないから実害がないとはいえ、流石に“あれ”は嫌らしい。

まあ、あれの恐怖は食料に対する実害よりも、生理的な嫌悪感の方が多から仕方ないと思うけど……

僕も、奏や朱湮さんたちほどではないけれど苦手だ。

食用の“あれ”も世界にはいるらしいが、失礼だとは思っけど、食べている人の頭がおかしく思えてしまう。

「……いくぞ……」

覚悟が決まったのか、秋希さんが手をかけていたドアノブを回し、

ガチャ

そつと、扉を押しこむ。
瞬間、

ズザアアアツ！！

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

何か、黒光りした群体が動いた気がした。

扉を開けようとした秋希さんの手が途中で止まり、固まってしまっている。

その後ろにいる塔貴也さんはいつも通りの胡散臭い程の爽やかスマイルだけど、ちょっと冷や汗が見える。

冬琉さんは、構えた冬櫻を使って今にも山小屋を切り崩そうとしている。

そんな彼女を後ろから羽交い絞めにして、必死に止めている八條さん。

力は彼の方が強いから、任せておいても大丈夫だと思いたい。

僕はといえば、今にも泣きだして周囲一帯を焼き尽くし出しそうな奏を操緒と一緒に必死に宥めている。

そんな混沌とした状況の中、

ガチャ

秋希さんが開こうとしていた扉を手元に引き寄せて閉めなおした。
そして、持っていた鍵を後ろの塔貴也さんに渡し、

「じゃあ塔貴也、後は任せた」

「・・・了解」

全てを自分の彼氏に放り投げた。

その言葉に特別反対する訳でもなく、塔貴也さんは鍵を受け取り、持ってきた荷物を漁りだす。

そして、そんな彼を視界の端に捉えながら、

「よし、中のことと荷物は塔貴也に任せて、私たちは私たちが他の準備をするぞ」

そう言つて、小屋に背を向けて川の方に歩きだす秋希さん。

そして、そんな姉に当然のようについて行く冬琉さんと、羽交い絞めを解き自分の得物を持って二人を追いかける八條さん。

「い、いいんですか・・・？」

自然とそんな言葉が漏れる。

あまりにも薄情なのではないだろうか？

「いいんだよ。」

適材適所、だ。

あいつが付いてきてもあいつにはやることはないが、ここならやることはあるしな」

「やることつて言つても・・・」

そう言われても、塔貴也さん一人にあの大群の対処を任せて良いも

のだろうか？

例え彼が以前の世界で“ジヨニーさん”の形の疑似感覚入出力デバイスを使っていたとしても流石に大群はきついと思うのだけれど・

そんな風に悩んでる僕。

そんな僕の視線が塔貴也さんの方に向いた。

いや、向いてしまった。

そこでは、嬉々として鞆の中から嚴重に密封された容器をとりだす塔貴也さんの姿が。

そして、その密封された容器の中身は、

『うげっ！！』

「き、きゃあああああああーっ！！」

容器一杯の“ジヨニーさん”

正式には、昆虫綱・網翅目・ゴキブリ亜目　ゴキブリ

見るだけで、背筋が寒くなってくる。

奏は、いつかのように耳をつんざく絶叫を上げて、僕にしがみついた。きた。

遠慮無しに、ものすごい力で抱きしめられる。

以前ほど苦しくはなかったけれど、それでもそれなりに苦しかったりする。

安心させる為に、僕の胸の内に顔を埋め震えている奏の背中に手を回しながら、頭を撫でてあげる。

そのお陰か、体の震えは徐々に治まってきているし、血の気をなくしたような肌の色も元の健康的な色に戻りつつある。

それでも、

「……ごめんなさい、ごめんなさい……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……ごめんなさい、ごめんなさい……ごめんなさい……」

またもや壊れた人形のようになって謝り続けている奏。

よっぽど嫌な事があったのだろう。

理由は分からない。

こんな状態に奏がなるのだから聞くに聞けない。

一先ず、奏を慰める。

そのまま、極力奏の体温だとか、胸の感触だとか、操緒の少々厳しい視線を気にしないようにしながら、嫌悪感を丸出しにして塔貴也さんに話しかける。

「……なんですか、それ……？」

「うん？」

ああ、これはね

そう言いながら塔貴也さんは容器を開け、中に入っているうちの一匹を指でつまみあげる。

『し』

操緒がかなり引いているが、塔貴也さんは見えないのだから気にしていない。

「僕が事前に作っておいた“対ジョニーさん駆除部隊”さ。

これなら相手に警戒されることもなく確実に駆除できるだろうからね」

「そ、そうですね」

そう言われると、こちらとしてもあからさまに反対する訳にもい
ない。

これから暫く寝泊まりする場所を確保してくれるのだから。

「おゝい、夏目。

早くしろ〜」

既に川の辺りにまで到着していた秋希さんから呼び声がかかる。

奏の絶叫は聞こえていただろうに、3人とも気にした様子がない。
多分、元々知っていたのだろう。

・・・知ってたなら教えてくださいよ・・・

そんな言葉を頭の中に浮かべながら、奏を促して秋希さんたちの方
に向かうことにした。

決して後ろを奏に見せないようにしながら。

?
?
?
?

『あゝ、惜しい!!』

もうちよっと速く動けば捕まえれそうだったのに・・・』

「って、言われても・・・」

現在、僕と秋希さんは魚狩りの真最中。

釣りではない。

釣りは、少し離れた場所で奏がしている。

既に何匹か釣れたのか、餌が食べられたのだろう、餌を再び餌箱から取り出して針につけている。

僕が今しているのは、川の中に入り、素手で魚を捕まえるという荒唐行。

塔貴也さんが小屋の中をある程度綺麗にするまでに、僕たちは食料調達をするということになった。

その分け方は、僕と奏、それに秋希さんが魚担当。

八條さんと冬琉さんが山菜や食べられる動物などの野菜と肉類担当。

そのため、八條さんと冬琉さんは得物とそれなりに大きな籠を持って森の中へと消えて行った。

あの二人に関しては心配もしていない。

残った僕たちは早速魚採りに取り掛かった訳だけどその際に、秋希さんから、

「最低でも一匹は捕まえるように。」

働かざる者食うべからず、だ」

と、ある種理不尽なお達しが下っていた。

奏の場合は僕や秋希さんが近くに行つて騒いだりしない限り問題ないだろうし、既に何匹か釣れている。

一方の、僕と同じように川に入って魚を狩っている秋希さんはいつと、

「……………」

ジツ、と川の中ほどに直立していて動く気配がない。まるで、ただの置物にでもなったかのようなようだ。

そんな秋希さんが現在身につけているのは、華やかさ等とはかけ離れた紺色の競泳水着。

まあ、こんな事をしていたら濡れるのは当然だから水着に着替えるのは分かる。

僕も、学校で使っている水着を着ているし。

ただ夏場とはいえ、普段過ごしている街よりもそれなりに高所にある川で何もせずに直立しているのは少々まずいのではないだろうか・・・？

陸地なら問題ないのだろうけど、川の中だと体も冷えるだろうに。そう思いながら、休憩も兼ねて僕と操緒が岸の方から秋希さんを見ていると、

シャツ

「『・・・・・・・・え・・・・・・・・？』」

秋希さんが閉じていた眼を開き、一瞬動いたような気がした。

僕たちの見間違いかとも思った。

実際、すぐに元の体勢に戻り、また直立不動の姿勢になっている。だけど、

ドサッ

という音が隣の方から聞こえてきた。

音が聞こえてきた方向を見ると、

『・・・・・・・・うそ・・・・・・・・』

ピチピチ、と魚が2匹ほど打ち上げられたのか悶えていた。
さっきまでの秋希さんの行動から考えると、ほぼ間違いなくやったのは秋希さんだろう。

操緒も珍しく呆気にとられている。
そして、また、

シュッ

という風切音と

ドサッ

という落下音が続けて僕らの耳に飛び込んでくる。

今度は注視していたからか、さっきよりは動きが見えた気がする。
それでも、腕の動いた軌跡が見えたぐらいだ。

腕が単体で見えた訳ではない。

・・・どれだけ速いのさ・・・

『・・・はあ・・・

秋希さんのやり方はあんまり参考になりそうにないね』

「・・・ああ・・・

自分でどうにかしないとだめなんだろうな」

秋希さんを見ていたのは休憩もあるけど、何か参考になることか
ないかという打算的な考えもあったのだ。

あったのだけど、いくらなんでもあれが参考になるとは思えない。

あのやり方は、本気で鍛えて、本物の速さを持つ人じゃないと出来
ない業だ。

静から動へ

その際のタイムラグがほとんどゼロで、尚且つ振り抜く腕がしつかりと魚を捉えていないと出来ない。

例え腕が魚に当たったとしても、上から押しつぶすだけじゃ水が吸収して威力も低くなる。

それに、方向を間違えれば全く意味がないものになる。

それらを全てクリアして初めて可能になるのだ。

到底僕に真似できるようなものではない。

それでも、

『・・・トモ・・・？』

少し思いついたことがある。

足を滑らせないように気をつけながら川に入る。

操緒が不審そうな顔を浮かべながら憑いて来るけど、あまり気にならない。

僕には秋希さんのような速さも正確さもない。

それでも、さつきまでの自分のやり方が間違っていたのは分かった。水の中なのに人が魚より速いわげがない。

それなのに僕は必死に魚を追いかけていた。

今まで朝のトレーニングをこなしてきた分、下手に体力に自信があったから身一つで何とかかなると思ってしまうた。ただ、やっぱり無理だ。

水や川の流れに足をとられるから到底満足には動けない。

それなら、秋希さんみたいに動かない方がいい。

体力だけを消耗しても無意味なのだから。

「・・・・・・・・・・」

かといって、秋希さんみたいな動きはできない。
それならどうするか。

幸い、さっきまでの魚との追い駆けっこで魚の行動パターンは何となくだが分かっている。

だから、魚の行動を先読みして腕を動かす。

右腕では魚を追いつつ、左腕を魚が来るであろうポイントに移動させる。

この方法が無理なら、石を使って追い込み漁をした方が良さだろう。だけど、それじゃあ意味がないような気がする。

幸い、体はついてきてくれる。

後はタイミングだ。

静から動、ではなく、動から静へ

最小限の動きで、待ち構えている罠へと誘い込む。
そうして、

「フツッ！！」

左腕を向かってくる魚に合わせて動かし、決して逃がさないよう思いつきり掴みあげる。

結果は、

『やったー！！』

なんとか魚の尻尾の部分を掴みあげることに成功した。

その魚が逃げないよう、急いで岸边に向かう。

今思えば、この時陸地に魚を投げていればよかったのだろう。

急いでいたせいで、川の流れに足をとられ、

「うわっ！！」

ドボン！！

石で滑って転んでしまった。

『ちよっ！！』

だいじょぶ、トモ！？』

「あ、ああ。

なんとか」

幸い、浅瀬で角張った石もなかったため、尻もちをついただけで無事だった。

ただ、

『あー、逃げられちゃったね』

操緒が僕の左腕を見ながらそう洩らすように、掴んでいた魚を逃がしてしまった。

「まあ、いいさ。

要領は分かったから何とかなるだろうし」

悔しくはあつたけど、時間はまだまだあるから何とかなるだろう。そう思いながら、僕は再び魚狩りへと戻っていった。

・
・
・
・
・

僕がその後捕まえた魚の数は3匹。

秋希さんが捕まえた数の5分の1だ。

奏は10匹。

途中から全然当たりがこなかったらしい。

『初めてにしては上出来だ』

と、僕は秋希さんや八條さんには褒めてもらえたけど、もう少し捕れたんじゃないかと思ってしまう。

八條さんと冬琉さんは、山菜を採ってきたのは勿論のこと、見事に、鹿を狩ってきた。

誰が捌くのかと思つたけど、懐からナイフを取り出した秋希さんが捌いていた。

「料理はあんまりなのにこういうのは上手いんですね」と八條さんに言つたら、聞こえていたのか鹿の角が飛んできた。

山小屋も、“ジョニーさん”は無事に駆除され、掃除も何故か済んでいた。

塔貴也さんに聞こうかと思つたけど、不気味なのでやめておいた。まあ、無事夕食にはありつくことができたから気にしないようにしよう。

夕食は、鹿の焼肉と、川魚と山菜の鍋だ。

鍋の支度は僕と奏が、焼肉の方は八條さんたちがやってくれた。

この調子で残りの日程も進んでくれたらいいんだけどな・・・

20回 ジョニーさん（後書き）

モンハンはひたすらジエン・モーランを狩ってました。

上位には入っているのですが、中々手が出ません。

イビルジョーとかやりたくねえ・・・

幕間 After scandal shocked (前書き)

幕間2回目です。

今回は主人公の母が喋りまくってますが、合ってるかどうか自信が無いです。

あまり記憶にないもので・・・

幕間 After scandal shocked

「ただいま、母さん」

「あら、おかえりなさい。」

直くん」

“こつちの世界”の“夏目智春”の実家に本来とは違う立場で帰るというのは、どうしても不安を拭い切れなかったが、以前かけた認識操作は効いていたようで一安心だ。

「今日はわざわざどうしたのよ・・・？」

普段から連絡の一つもしないあんたが帰ってくるなんて。

ひょっとして、部屋に隠しておいたエッチな本の回収にでも来たのかしらあ？」

「はは、違うよ。」

俺だつてたまには家族の様子が心配な時もあるさ」

こつちでもこの母親はこんな性格なのか。

まあ、変に性格が変わっていても対応に困るからこれでいいか。

『・・・“こつち”の夏目くんの事、聞かなくても良いんですか・・・？』

僕・・・いや、“俺”が一巡目での郷愁に浸っていると、嵩月がここに来た理由を思い出させてくれた。

念のため最初は姿を消していてももらったのだが、その心配がいらないうようなので自分から現れたのだろう。

そつだ、まだ“こつち”の僕が演操者ハンドラーになつてからどんな風に暮らしているのが分からなかつたから、一先ず確認に来たんだ。今はまだ“あいつ”の扱いをどうするべきかは決めていないけど、俺と嵩月に何かがあつた時のためにも予備になり得る可能性がある。“あいつ”の動向は可能な範囲で把握しておきたい。

「・・・で、もう一人の家族はどこ・・・？」

話題がそれなりに盛り上がつていたけれど、特に不自然さもなく切り替えれたのではないかと思う。

“あいつ”を見てみると、苦悩という苦悩を知らなかつた。考えなかつた。頃の自分を見ているようで腹立たしくなるけれどしょうがない。

「もう一人・・・ああ、智春のことね。」

あの子なら当分はいないわよ。

・・・まったく、折角直くんが久しぶりに帰つて来たつていうのにあの馬鹿息子は「

そのまましばらく愚痴を続けているこちらの世界での母親 夏目久沙子 の言葉を聞き続けていたが、少し疑問が出てくる。

・・・当分・・・？

「しばらく出ていていない」や、「友達と遊びに行つていて」なら分かる。

だが、当分とはどういうことだ？

少なくとも、俺のいた世界ではこの時期に自分一人がどこかに長期間出かけているということはなかつた。

勿論、ここが自分の育つた世界とは成り立ちからして違つたというこ

とは重々承知の上だ。

それでも、“夏目智春”という少年は自身から率先して何か行動を起こすということは少ない。

大抵は、巻き込まれて渋々付き合うという性格のはずだ。

その巻き込み役は、幼馴染の美少女であったり、中学時代から仲の良いオカルトマニアの少年であったりする。

幼馴染は副葬処女ベリアル・ドールになっているから、少年の方が原因になるのだから。

だから、今回もそうなのかと思いついて見たが、

「・・・誰かと旅行にでも行ってるのか・・・？」

「旅行？」

うーん、旅行って言うよりはキャンプの方が近いのかしら・・・？」

「キャンプ？」

部活をやってるなら、部活仲間とでも行ってるのか」

それなら納得がいく。

俺の時にはなかったけれど、世界が違うのだそれぐらいのイベントが起きることは想定範囲内だ。

だが、

「あら、部活じゃないわよ。

そもそも、あの子部活に入っていないし」

そんな俺の言葉はすぐさま“母親”に否定された。

・・・え・・・？

部活じゃない？

どういうことだ？

世界が違っても大半の人間は同じように過ごし、同じような性格が形成されていく。

それは一般の人間とは少し違う、“ただの幽霊憑き”である“こちら”の夏目智春とて同じはずだ。

「珍しいわね、直くんがそんな顔になるなんて」

「・・・む・・・」

驚きが余程大きかったのだろう。

こちらの世界では気をつけていたのに、呆れた顔になってしまっていた。

すぐに、元の作り笑いの表情に戻る。

「部活をやってないなら何やってるんだ・・・？」

あの愚弟は。

このままだと、ニート一直線になるんじゃないか」

やや、辛辣に言葉を吐きだしてみるが、

「うーん、それはないと思うわ」

「何故？」

「だって、あの子今すごく活き活きしてるもの」

「活き活き？」

飛行機事故の後に幼馴染が表向き行方不明になって、自身に幽霊として憑いているのに生き活きしている？
全くもって意味が分からない。

「ええ。

操緒ちゃんがあんなことになったから、無理してそうしてるんじゃないかと思っただけどそんな空気でもないしねえ」

「具体的には何かあったの？」

「具体的ねえ」

夏目久沙子という女性が、珍しく考え込む姿勢になり考え出している。

親としては正しいのだろうけど、この女性がやると違和感がすごい。

「まあ、やっぱりあれね。

自分から道場に通い出したってということ」

「……は……？」

道場？」

「またもや呆れてしまった。

ふ、と嵩月の方に視線を向けると彼女も困惑しているようだ。
こっちの世界の“僕”は何がしたいんだ……？」

「そ、橋高道場って言う少し遠めの道場」

「……橋高か……」

なんでまたそんな所に・・・？」

「さあねえ。」

私も良く分かってないんだけど、珍しくあの子が自分から言い出した事だったから特に理由も聞かずにOKしちゃったのよ。

だから、今更聞くに聞けないし・・・

今行ってるキャンプだって、その道場の強化合宿らしいし。

ホントにどうしちゃったのかしら」

“僕”が自分からその手の方向に手を出す？

全く想像がつかない。

しかも、橘高道場に通っている姿も中々ピンとこない。

もし、操緒をあんな風にした責任が自分にあると思ってしまう、強くなりたいのだと考えるようになったとしても、ピンポイントで橘高道場に通う意味が分からない。

「他に何かある？」

ここまできたら、少しでも情報が欲しい。

そんな不安要素だらけの人間を自分の予備として扱う訳にはいかない。

「うーん・・・」

ああ、そうそう」

少し悩んだ後、母親は思いついたかのように喋り出した。

それを黙って聞く俺と嵩月。

だけど、次の会話で彼女の口から飛び出て来たのは予想外の言葉だった。

「なんか、すごい仲が良い娘こがいるのよねえ。

登下校も一緒だし、学校が終わってから道場に行く間はその子と一緒にいるらしいし・・・」

紹介してって催促しても、中々首を縦に振らない所が小憎たらしいんだけど」

「それって、操緒ちゃんぐらい」

自分で喋っていて何だけど、操緒をちゃん付けで呼ぶのはすごい違和感がある。

「ええ。

ひよっとしたら、操緒ちゃんよりも仲が良いんじゃないかしら」

「へえ、なんて言う子なの・・・？」

ここで杏や佐伯の名前が出てきたら、まだ驚きは少なかっただろう。少なくとも、彼女たちと過した中学生生活は知っているからだ。だけど、

「確か・・・嵩月奏、ちゃん・・・だったかしら。

電話で話してるのを聞いただけだからはつきりしてないんだけど・・・」

「『……………え！？……………』」

出てきた名前にこれまでに以上に驚愕した僕・・・いや、俺と嵩月。

嵩月も自分の名前が出てくるのは予想外だったのだろう。

珍しく、すごく驚いた顔になっていた。

それは俺も同じだろう。

何故既に嵩月と、“あいつ”が出会っている！？
その事で尚更頭が混乱し、復帰するまでにしばらくかかってしまっ
た。

・・・一体、どうなってるんだこっちの世界は・・・！？

21回 強化合宿（前書き）

修行編は今回だけにしました。

なので若干の物足りなさがあるかもしれませんが、ご容赦ください。

21回 強化合宿

到着した日の翌日から本格的な修行漬けの日々が始まった。

起きる時間は　いつも早朝トレーニングをしていたから特別早いとは思わなかったけど　朝の6時。

夏場とはいえ、平地よりも高所である山の朝はかなり肌寒い。

山一帯に霧が立ち込める時もある。

まあ、朝食を食べたらすぐに動き出して汗を掻くから、肌寒いのが気になるのは最初の頃だけで、動きだせばあまり気にならなくなる。一方で、霧が立ち込めると視界が悪くなり、非常に困ったことになる。

朝食後、最初にやるのはランニング。

といつてもただのランニングではなく、山の頂上まで登り、小屋のある場所まで戻って来るといふそれなりに過酷な道筋。

制限時間などは特に決まっているわけではないが、秋希さんたちはモノの30分で済ませてしまっている。

奏も参加しているけれど、その奏だつて45分程度。

僕に至つては最低でも1時間はかかつてしまう。

そのことでやる気が無くなる訳ではないし、寧ろ負けられない気持ち湧いてくるから問題ではない。

それでもかなり微妙な気分にはなってしまう。

それに加えて、ただでさえ過酷な行程なのに余計な物が付いてくることが一番嫌な理由だったりする。

加わってくるのは、塔貴也さん特製の筋力負荷装置

両手両足に装着する腕輪と足輪の形状になっていて、それが筋肉に掛かる実際の負担を凡そ3倍程度に増幅させる。

調整すれば100倍ほどまでは可能らしいが、そんな余計な事はし

なくていい。

おかげで負担がとんでもないことになってしまっている。

しかも、これを着けているのはほぼ一日中だ。

流石に風呂やシャワーでは一応小屋の中に存在していた。外
しているし、寝る時も取ってはいるけれど、それ以外では休日以
外いつも着用させられている。

おかげで、トレーニングとか試合（という名の模擬戦）での疲労が
半端じゃない。

秋希さんが塔貴也さんを連れてきた理由が良く分かった。

万が一装置に不具合が生じた場合に、整備出来る人間がいた方が良
いに決まっているからだろう。

そんな負荷のかかる一日は、ランニングが終わったら本格的な地獄
に大変身だ。

日によってやる内容は変わる。

例えば、

「・・・あの、なんですかこの状況・・・？」

僕の視界はほとんど何も捉えていない。

何も分からず秋希さんたちに連れ出された先は、山に到着した日と
は真逆の暗闇だった。

「いや、こうしないと意味がないからな」

僕が今いるのは鬱蒼とした森。

それこそ、日の光が届かないから、秋希さんの姿も輪郭が分かるか

どうかぐらい、臆気だ。

戸惑う僕を余所に、秋希さんが説明を始める。

「夏目には、この暗闇の中で私とやり合ってもらおう」

「……え……!？」

「いやいや、無理ですよ!!」

「こんなに暗くて何も見えないのに!!」

何をいきなり言い出すんだこの人は。

見えないんじゃないや対処の仕様がないうのに。

心眼でも開眼させるといふんだらうか？

そんな僕の反論も、すぐさま切り捨てられる。

「だからこそ、だ。」

「……どうもお前は視覚に頼り過ぎているようだからな。」

「それでは奇襲されたりした時に何も対処ができなくなる。」

「見えなかったから何も出来ませんでした』、では話にならない」

「は、はあ……」

自分ではそんなに視覚に頼っている気はなかったのだけれど……成程、言われてみればそうかもしれない。

実際、こんなにも物が見えない中でやり合ったことは以前の世界でもなかった。

「で、でも、見えないのにどうすればいいんですか……?」

「それは自分で考えろ」

「んな・・・!!」

そこまで説明しといて後は全部こっちに放り投げられても、手掛かりが何一つないのにどうしろって言うんだ!?

「まあ、ヒントぐらいはやるか・・・」

「是非お願いします」

いくらなんでも無茶だと分かってくれたのか、あまりにも僕が情けなくて見ていられなかったのか分からないが　出来れば前者だと思いたい　秋希さんがそう提案してきてくれた。それにすぐさま返事を返す僕。

操緒がすごく情けないものを見るような視線を向けてくるが、全く気にならない。

少しでも頼れるものには頼っておかないと、僕の身がもたない。

こんな暗闇の中で秋希さんとやったら、それこそ30秒と持たないだろう。

「人間には視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚等の五感と呼ばれる感覚がある。

・・・まあ、実際には平衡感覚だとか内臓感覚だとかあるらしいが、今は必要ないから省く」

「は、はあ」

「それで、今の状態は五感のうちの視覚を疑似的に封じている状態なわけだ。

さて、ならばどうすればいいと思う・・・?」

「え？」

「そ、それがヒントですか・・・？」

「ああ、ヒントはこれだけだ

後は実際にやりながら見つけ出してみろ」

「そんな！？」

「いくらなんでも無茶でしょう！！！」

抗議してみるが、

「うるさい。

いくぞ！！！」

「え、ちょ、ちょっと！！！」

見事に僕の意見は却下され、強制的に始められた。

秋希さんも暗闇ではあまり慣れていないのか、それとも手加減してくれているのかは分からないが、いつもよりも攻撃は緩いように感じられた。

というのも、開始したばかりの頃は訳が分からず、ただひたすら秋希さんの攻撃を受けているだけだったからだ。

そのうち、10回に1回程度は防げるようになってきた。

自分でもその時は、理由はよく分からなかった。

だけど、後から振り返ってみると、音や空気の動きを頼りにしながら防いでいたような気がする。

非常に拙い技術だけど、『これをもっと突き詰めていけばいいのか』と納得した。

また、他の日には、

「・・・あの、八條さん・・・」

「なんだ？」

「これって、当たったらシャレにならないと思うんですけど・・・」

「ああ、そうだな」

「いや、そうだなって・・・」

今僕と八條さんは小屋近くに流れている川のやや水深が深めの所で対峙している。

深めと言っても、膝が隠れるかどうかといったぐらい。

対峙している僕らの格好は、互いに水着姿。

僕は学校で着ていた紺色のボックス型の水着。

八條さんが着ているのは特に派手な装飾などしていない黒色のトラックス型の水着。

互いに、ほとんど素肌だ。

攻撃が命中すれば、今迄にない程激痛が奔るだろう。

で、互いの手には自身が普段から使用している得物。

僕は右手には実際の太刀（本差し）と同じサイズ（らしい）の木刀を順手で、左手には同じく実際の脇差と同じサイズ（らしい）の木刀を逆手で持っている。

そして、体の左半身をやや前に出し左手の木刀を胸の高さで構えて

いる。

一方の右手の木刀は肩に乗せる形で構えている。

持ち方は秋希さんに教えられてこうなった訳ではない。

実際、秋希さんが使っている二刀流はどっちも順手だ。

僕のこの構え　持ち方　は秋希さんや冬琉さんたちとやっているうちに、自然と形成されていた。

秋希さんや冬琉さんの猛攻を防いでいるうちにこんな構えになっていた。

だから、僕の今現在の戦い方は防御がメインだ。

勿論、攻撃するときにはしているけれど、攻撃の回数よりも圧倒的に防御する回数の方が多い。

左で受け流したり抑えたりして、右で斬る。

もしくは、右で牽制し、出来た隙に左を使う。

まだ、自分でも扱い切れてはいないけど、このやり方が一番自分に合っている気がするから今後もこのままいくことになると思う。

「まあ、心配するな」

「な、なんののでしょうか・・・？」

「怪我しても嵩月のお嬢さんが手厚く介抱してくれるだろうからな」

「怪我するの前提ですか!？」

対する八條さんが持っているのは、木槍で長さは凡そ2m30?ほどだと思っ。

八條さんがよく使っている得物だ。

彼は、他にも昆や杖等の刀よりも長い武器を使う。

今まで、刀や銃を使ってきた人ばかりだったから、そういった多少異色な得物を使う人は初め見た時は新鮮だったし、純粹に戦い方に興味が湧いた。

だけど、実際に戦ってみると槍や昆等は僕の予想以上に参考にならなかった。

槍は、刺突の速さや、それに伴って体運びなどは参考になったけど、それ以外は全然だ。

昆や杖に至っては、全く参考にならない。

そりゃあ、そういった獲物を使う人への対処法は身につけることができるけれど……

「当たり前だろ。」

俺が、お前程度にやられるとでも思ってるのか？」

「ぐ……」

言い返せない。

「まあ、安心しろ。」

場所が場所だから俺もまともにやるのは厳しいしな」

「そのセリフで安心できる人がいるんですか……？」

「うん？」

美呂の奴なら似たようなこと言った時に安心してたぞ」

「えー……どんな状況ですかそれ……？」

槍や昆の威力は刀とは違う。

刀は斬ればそれがそのまま相手にとって致命傷となることが多い。

一方、槍は刀身の部分を使えば同じように致命傷は狙えるが、いかんせん狙って斬れる範囲が刀と比較すると大幅に狭くなる。

それに、刺突の速さはともかく、斬撃となると振り下ろし、振り上げ、薙ぎ払いなど動作が刀に比べてどうしても大振りになってしまう。

そのため、刺突をメインに措かない場合、槍の基本動作は回転になる。

相手の攻撃を柄で払い、そこから槍を回転させて斬撃に繋げる。

勿論、ただ斬ることや、突く事も出来るが、威力や手数求めた場合、どうしても回転を使った遠心力が必要になってくる。

そしてそれは、斬撃のない昆や杖の場合尚のこと顕著になってくる。斬って倒す事ができない以上、いかに速く相手に打撃を連続で打ち込み行動不能に出来るかが勝負の分かれ目になってくるからだ。

それ故、どれだけ速く正確に得物を回すことができるかが槍や昆には必要になってくる。

勿論、突きをメインにおくことも出来るが、それしかできない場合、闘いに措いて選択肢が非常に狭まってしまふ。

だから、メインが突きであっても回転の力は必須なのだ。

そして、突きも刀の突きより断然速く、強い。

両手で押し出される力は、僕や秋希さんの片手の剣では比べ物にならない。

それに加え、二刀を使い手数で攻める秋希さんにある程度拮抗できていることから、八條さんの槍のスピードが半端ではないことが伺える。

「まあ、不安なのは何となく分かるが、この場所で作るってことはどれだけ自分の体運びが無駄か分かるためでもある。

俺も、このやり方のお陰で大分体捌きがマシになったからな」

「そう言われましても・・・」

「実際にやってみりゃわかる。

初めは慣れないだろうが、そこから先はお前次第だ」

力で拮抗出来ているのは冬琉さんぐらいだろう。

とはいえ、彼女が拮抗出来ているのも今まで培った技術のたまものらしい。冬琉さん本人がそう言っていたから、純粋な力では八條さんが上なのだろう。

技術では秋希さんや冬琉さんの方が断然上だ。

だけれども、力も他の門下生の方でもっと強い人がいるのは知っている。

それでも、橘高道場内で彼以上の速さを持った人がいない以上、おそらく彼が最速だ。

そこに悪魔としての能力が加わったらどうなるかは分からないが、かなり強いのだろう。

以前の会合の後、奏から聞いたが、

八條一族の能力は影操作

自身の影は勿論、周囲にある物体の影を使い攻撃してくる。

時には、敵の影を使って攻撃してくることもあるらしい。

聞いた瞬間、絶対に八條さんの敵にはなりたくないと思ったのは、八條さんには絶対に秘密だ。

「分かりました・・・いきます!!」

「ああ!!」

そうして、僕と八條さんの川上での試合（模擬戦）が始まった。足を水にとられながらも、本来の防御とは一転して八條さんを攻める僕。

秋希さんや冬琉さんであればいつも防御に回って隙　まあ、実際は誘いなのだけれど　をつく形でやり合っただけけれど、八條さん相手じゃそうはいかない。

防御に回ればずっと防御になってしまう。

隙と思える誘いもなく、ただひたすら攻められる。

気付けば八條さんの連撃を防いでいるうちに　最初の頃は防ぐ間もなくやられていた　体力が底をつき、すぐさまバテた部分をつかれて負けてしまう。

かといって攻めれば勝てるという訳でもない。

気付かぬうちに攻守が逆転していて、負けてしまう。

結局は僕の力不足なのだ。

それでも、ただ守勢に回るよりは、攻勢に出た方が良いのも事実。秋希さんほどとはいかなくても、手数がもっとましになれば少しは護りに回りながらいけるのだろうけど・・・

「やあああつー!!」

「遅い!!」

足場が悪いから普通に動いていたのではどうにもならない。

上半身の動きや、腕の動きで対処できるのならそれも問題ないけど、そんな中途半端な技術で対応できるほど八條さんは甘くない。

それでも、今の僕は喰らいついていくしかない。

自身に迫る木槍の石突き部分を右手の木刀で受け流し、左手を八條さんの首元に伸ばす。

そして、左手の木刀が届くより前に相手の槍が動く。

石突きとは逆に槍の穂先が頭上から迫ってくる。

瞬間的に、左手をそのまま頭上に向けるが、

「ガッ!!」

穂先は方向を変え、左に流れて行く。

それと同時にさっき受け流したはずの石突きが右の脇腹部分にめり込んでいた。

「……とりあえず一本な」

「は、はい」

痛みに耐えながらも再び距離をとって対峙する。

……これは、本格的にまずいかもしれない……

早く足場というか、川の流れの中での動きを少しでも掴まないと大変なことになる。

「あと五本は最低でももらっていくからな」

「……ぐ……」

これが、ただの誇張ではないことぐらい僕にだって分かる。

「まあ、精々足掻きな」

『トモ、頑張つて!!』

操緒が後ろから応援してくるけど……

ごめん、足場に慣れるだけで精一杯だと思つ。

結局その日はなんとか慣れることまではできた。

できたけど、それが正しいのか間違っているのかがよく分からない。
・・・まあ、間違ってたらまたボコボコになるんだらうなあ・・・

また、他にも色々な方法の修行を課せられた。

【集団戦闘】や【遠距離からの狙撃】に、【奇襲の対処法】といったものまで様々だった。

どれもこれも実際の戦場では役に立つものなのだろうけれど、道場に通いだして半年も経っていない人間にやらせる内容でもないような気がする。

まあ、疑問は尽きないけれど、これが橋高道場でのやり方なのだから特に反対する訳でもない。

それに、やっている内容はともかく、僕が実際に必要としている力は、他の場所で習うよりも確実にしていると思う。

自分自身に実感がある訳ではないが、この短期間で教え込まれ、身についたことが尋常じゃないほどの量だ。

それでも、周囲のレベルが高いから、彼らに追いつくためにはまだまだ足りない事は分かっている。

それに、3年後には自分もそんな世界に踏み込まないといけないことはほぼ確定している。

洛高に入らなければそんな世界に入らなくて良いのかもしれないが、その場合世界はほぼ間違いなく滅ぶだろう。

だから、今はどんな事でも良いから習得しておきたい。
少しでも、未来を良くするために。

?
?
?
?
?

早いもので、2週間が経過し、夏休みも残り一週間程度になっていった。流石に、もう帰らないといけないので、皆揃って後片付けをしている。

「……あの、夏目くん……」

「あれ？」

「どうしたの、高月？」

僕が男部屋で荷物を纏めて帰り支度をしていると、奏が部屋の入口の所に立って僕のことを呼んでいた。一旦荷造りを中断し、奏の方に向かう。

「……その……」

「？」

「どうしたんだろう。」

話し方がマイペースでとろい部分がある奏だけど、今の彼女からは少し戸惑っているような空気が感じられる。

「……手伝ってもらえませんか……？」

「……手伝う、って……奏の荷造りを？」

特別奏は片付けが下手だった訳ではないと思う。

むしろ、あのお祖母さんの躰のためか、家事全般やそいつた自分の周囲のことは得意だし、大抵一人でこなせる。だから、とっくに荷造りは終わっているものだと思っていたのだけど……
まだだったのだろうか？

「いえ、その……私ではなくて……
……秋希さん、と冬琉さん、を……」

「……ああ、うん……
僕のが終わったらすぐ行くよ」

「……お願いします」

そう言って、奏は軽く頭を下げ、すぐに女部屋の方に戻って行った。
……さて、僕もさっさと自分のを終わらせないとな。

「なあ、？……」

「なんですか、八條さん……？」

「お前、自分の恋人と幼馴染を手伝う気はないのか……？」

「何を今更。」

そんな労力があるなら、次回の為の“ジョニーさん”撃退法でも考えてますよ」

「……それもそうだな」

「八條さんは手伝わないんですか・・・？」

「お前、分かって言ってるだろ」

「はは、そんな訳・・・ありますけど・・・」

こんな会話を二人はしていたらしいけど、できれば僕にも教えて欲しかった。

教えてもらっていたら、無理やりにも二人を引っ張って行ったのに・・・

だけど、おかげで最後の丸一日が荷造りに充てられている理由が良く分かった。

そりゃあ、あの状態から荷造りするのは男性にはきついだらう。

秋希さんの方はまだ　あくまで、『まだ』　マシだった。

だけど、冬琉さんの方は、以前の世界での朱湊さんの部屋の方がマシに思えるレベルだったのだ。（操緒も若干引いていた）

僕もできることなら逃げ出したかったけれど、奏に頼まれた手前そっういう訳にもいかないし、片づけないと帰れないのだから、ただひたすら無心になって二人の荷造りを手伝っていた。

・・・まさか、最後の最後でこんな大きな障害に出くわすとは思いませんでしたよ・・・

今後は料理だけではなく、二人の全体的な家事能力の向上を目指していこう。

そう、心に誓った瞬間だった。

21回 強化合宿（後書き）

槍術は習ったことがないので分かりませんが、以前杖術で習ったことを基盤に考えてみました。

何か違和感や御指摘などがあつたら遠慮なく指摘してください。

それにしても、『東京都青少年健全育成条例改正案』可決されましてね……

私は18歳以上ですし、現在都内に住んでいるわけではないですが、今後の日本文化の発展が阻害されるであろう点からも、表現の自由な発展という点からも、何より一男性として、漫画やアニメのフアンの一人としてはこの条例の可決は大反対です。

文化を規制しても反発が広がるだけです。禁酒法等が良い例でしょう。何より今後の日本の発展にも立ち塞がってくるでしょう。

折角、日本のアニメや漫画が世界に認められてきた矢先にこのような条例が首都で可決されたとあっては、どうしても勢いは落ちてしまふ。

というか、議員の大半や知事が漫画やアニメをしつかりと読んだことがあって、その上で専門家（大学教授などではなく漫画家やアニメ制作会社）を交え十分な議論が行われたのであればまだ納得するのですが、とってつけたような知識で指摘されたところを訂正した

だけの条例など到底納得できるものではありません。

それに、『青少年健全育成条例改正案』

『健全』な『育成』って何ですか？

手持ちの辞書で『健全』を調べたところ、

？心身ともに健やかで異常のないこと。

？物事に、欠陥や偏りが無いこと。

と出ました。

ふざけるな！！

そんな真つ白な完璧人間、現実にいた方が怖いわ！！

・・・まあ、言い過ぎな気もしますが・・・

これ以上書くと余計なこと書きそうになるのでここで止めておきます。

長々とすみません。

また、このあとがきを読んで不快に思われた方がいたらすみません。作品とは無関係な私の意見ですので、作品の評価には含めないで頂けると助かります。

22回 託された刀（ちから）（前書き）

一気に時間が進みます。

途中で省いたイベントなどは、皆様からの要望があれば外伝として書きたいと思います。

22回 託された刀（ちから）

夏の強化合宿という名の山籠りも終わり、早いものでおよそ半年。季節は、立っているだけでも汗が噴き出ていた夏から、寒さで凍え死にそうな冬へと変わっていた。

中学一年の2学期も半分以上が終わった。

この世界に來た当初では考えられないほど、以前の世界とは違った生活だったと思う。

以前の世界では、何だかんだで操緒関係のトラブルが少なからずあったし、所属していた陸上部での大会に向けての練習に励んでいた。

だけど、今の世界では、幽霊憑きの生活にも慣れているから操緒関係のトラブルはほとんど無いし、陸上部には入っていないから、当然大会に向けての練習で疲れる心地よさも感じない。

・・・操緒関係のトラブルや部活の疲労の代わりという訳ではないだろうけれど、悪魔関係のイベントが増えたのは事実だ。

大半は嵩月組　主に社長やお祖母さん　が原因だけれど、たまに八條さんが連れてくることがある。

嵩月組の場合は、他の悪魔との折衝であったり、市内の裏社会の取り締まりであったりと、普通とは違うのだろうけれどある種の社会勉強になっていたから、まだ頑張ることもできた。

・・・できれば、今後の生活で役立たないことを祈りたい・・・

一方の八條さん関連のイベントは、純粹にトラブルだ。

嵩月組での社会勉強ほど黒々としたものを感じた訳ではなかったが、僕にとってはこっちの方がきつかった。

終わってから考えてみても、僕に利益など何一つなかった。

いや、何一つといえればおかしいが、ほとんど利とするものがなかったのは事実だ。

というのも、起きたトラブルのほとんどが痴情の纏れ・・・いや、互いの誤解が原因だったから。

僕がそれらのトラブルに巻き込まれたのは、ただその場にいたからだ。

自分から進んで関わった記憶は一切ないのに、知らぬ間に巻き込まれていた。

主犯格は当然、八条和斉。

ただ、他の容疑者はその時々で変わる。

冬琉さんであったり、道場に見学に来ていた美呂ちゃんであったり、八條さんが連れてきた鳳島（兄）であったり、それについてきた鳳島氷羽子であったりと様々だ。

大抵が、世間的に何らかのイベントが起きる時に連動した。

もっとも最近に起きたのはバレンタインの際の騒動。

ここで語るのは省かせてもらうが、結果として、八條さんは白く燃え尽きた。

僕？

僕は塔貴也さんと一緒に、それに巻き込まれないように必死に逃げていました。

互いに、自身の最愛の人物からのプレゼントを持って。

・・・まあ、結果として二人とも巻き込まれた訳だけど・・・

他にも悪魔関係のイベントではないけれど、学校のイベントはたくさんあった。

学校最大のイベントと言っても過言ではない文化祭や体育祭。

文化祭はあまりやる気がない面々を杏が引っ張り、見事なお化け屋

敷を造り上げ、大成功だった。

ただ、僕と奏の担当の時間が違い、二人で回るということはあまり出来なかったのが少々残念だった。

僕は何故か午前の一着初めで、ゾンビの役をやらされた。

似合わないでいてくれた方が良かったのに、なぜかメイクや演技方を徹底的に指導され、当日には誰が見てもゾンビで僕だとは分からないまでになっていた。

一方の奏は午後の二番手で受付だったらしい。

まあ、客寄せに美少女を使うのはおかしなことではないと思うし、それが人も増えてきた時間帯であれば尚更だとは思う。

だから、奏が受付だというのは納得がいくけれど、あの話し方でちゃんとできたかどうかそれなりに心配だった。

以前の世界のフリマでちゃんと応対はできていたし、世間話をする訳ではないのだから大丈夫なはずだと気付いたのは、それなりに時間が経ってからだった。

一応、ナンパの心配もしてはいたけれど、後から考えてみればあの話し方にすぐに慣れることができる人間も少ないだろうし、無理矢理力づくにしてくる相手でも今の奏が一般人相手に負けるとも思えない。

・・・実際、何件かそういった一般客（別の中学や高校の生徒など）がいたらしいけど、誰も成功しなかったそうだ。

また、体育祭は特に何かがあった訳ではない。

強いてあげるのなら、以前の世界よりも運動能力がかなりあがっていたから出場した種目全部で一位だった。

その中には、陸上部員と競った競技もあり、負けた陸上部員はかなり悔しそうにしていた。

そのため杏に熱心に陸上部に入部するよう誘われたが、流石に断っておいた。

杏はまだ諦めていないようだけど、こればかりは仕方ない。

僕ができるのは、負けた本人がこの悔しさをばねに今後頑張ってくれることを祈っておくことぐらいだ。

奏とのイベントも色々あった。

さっき言ったバレンタインの時もそうだし、他の今まで自分には関係のなかった恋人同士のイベントでもかなり期待していたからよく覚えている。

合宿から帰って2日後には、以前から約束していた海に行ったのは脳内のメモリに焼き付いている。

クリスマスの一週間前が奏の誕生日なのはこちらの世界でも同じだったように、杏や樋口達と色々と準備して誕生日会もやった。

他にも、洛高のクリパに八條さんに誘われて行ったこともある。(第一生徒会が不安だったけれど、なんとかなった)

ただ、そんな生活の中でもひとつだけ不安な事がある。

それは、

夏目直貴　一巡目の僕　に、あの事故の後に会った時から一度も会っていない

ということ。

以前の世界では何だかんだで会ってはいたが　碌なもんじゃない記憶ばかりだが　今回の世界では会っていない。

母親が言うには夏休み中に何度か帰って来た　やって来た？らしいけど、幸か不幸か僕は合宿中で会うことはなかった。

それでも、それだけならまだ問題はない。

問題なのは、母親が“あいつ”に僕たち(僕と奏)のことや僕自身の近況を少なからず喋ってしまったということだ。

僕と奏を、単なる友人として捉えて説明していたのなら、奏のことはまだ何とかなったかもしれない。

だけど、明らかにそれ以上の関係にある、と自身の推察も含めて喋ってしまったているのだから質が悪い。

会って確認した訳ではないから分からないけれど、ほぼ確実に不信感を持ってしまっているだろう。

その不信感がこの世界にどんな影響をもたらすのか分からないが、最悪な方向に進まない事を祈るしかない。

僕が機巧魔神アスラ・マキナを手に入れられなくても“あいつ”が死ななければなんとかなるのかもしれないが、可能な限り以前の世界と違う展開になるのは避けたい。

せめて母親に口止めしとけば良かったのかもしれないが、あの母親にそんなものは無駄だというのも分かっている。

なので、結局ばれることになるのだろう。

おかげで、2学期が始まって最初の頃はテンションがガタ落ちだった。

そんな（色んな意味で）充実していた日々を思い返しながら、僕は橋高家の廊下を歩いていった。

今日は一巡目の橋高家を思い出させるような肌寒い天気だ。

段々春めいてきたとはいえ、まだまだ冬を感じさせるこの時期はあまりこの家の廊下は歩きたくない。

勿論、冬真っ盛りの12月頃よりはマシだけど、それでもこの昔ながらの日本家屋の廊下には、寒さを感じずにはいられない。

では何故そんな寒い廊下を歩いているかといえば、理由は単純明快、秋希さんに呼ばれたからだ。

『それにしても、何の用なんだろうね・・・？』

今日って誰かの誕生日とかだっけ……?」

「うん……一応、秋希さんと冬琉さんの誕生日はこの間だったし……」

「……塔貴也さんとの事で何か相談があるとか……?」

『それこそ私たちに聞くことじゃないと思うけどなー』

「……まあ、行ってみれば分かるだろ」

『それはそうだけど……やっぱり気なるし……』

操緒と話しながら早足で秋希さんの部屋まで移動する。

僕も呼ばれる理由が分からないから、少々不安だったりする。

簡単な連絡であれば、普段の鍛錬の時に口頭で伝えれば良いだろうし、やや込み入った事情の場合逆に僕に相談する意味が分からない。それこそ、塔貴也さんとか冬琉さんに相談すればいいだろうし、塔貴也さんとのことなら僕なんかより八條さんとか、他の門下生の誰かに相談した方が手っ取り早いだろう。

まあ、結局のところ行ってみないと分からないんだろうけれど……

そんな風に廊下を進んでいると、いつの間にやら秋希さんの部屋の前までやってきていた。

特に気負うこともなく、部屋の扉をノックし、

「夏目です」

と声をかける。

「来たか……入れ」

「失礼します」

一拍の間があつたが気にせず扉を開き中に入る。
が、入った所で立ち竦む。

いつも以上に真剣な顔をした秋希さんが目の前に立っていたからだ。
拾ってきた動物を冬琉さんに認めさせるときだって、ここまで真剣
な表情になつた秋希さんは見たことがない。

「あ、あの・・・」

戸惑つた声をあげるが、そんな僕の様子など全く気にせず秋希さん
は僕の方を、正確には僕の右斜め後ろ付近をじつと見つめている。

そんな彼女のただならぬ様子に戸惑い続ける僕と、左斜め後ろ（・・・）
に浮かんでいる操緒。

そうしたまま一分が過ぎた頃だろうか、

「ふう・・・」

秋希さんがようやく視線をずらし、卓袱台の近くの床に敷いてある
座布団の上に座る。

「えーと・・・」

「ああ、お前も座れ」

「は、はい」

そう促されたので秋希さんと卓袱台を挟んだ正面に座る。

そうして、しばらくぼんやりとしたまま僕の方を見ていた秋希さん

だったが、突然我に振り返り自身の近くに置いてあった箱を引き寄せ卓袱台の上に置いた。

「夏目」

「はい・・・？」

突然名前を呼ばれ戸惑う僕。

なんか、この部屋に入ってからずっと戸惑ってる気がするけれど、気にしない。

「よくこれまで頑張ってきたな。」

普通の中学生ならほぼ確実に止めてしまっただろうに・・・」

「あ、ありがとうございます・・・？」

脈絡もなくいきなり今までのことを褒め出す、という訳の分からないことに何とか反応する僕。

操緒も何かがおかしいと思っているのかかなり怪訝そうな顔になる。

「その褒美という訳ではないが、お前にやるものがある」

「・・・その箱と関係があるんですか・・・？」

「・・・ああ・・・」

開けてみる」

言われるままに、箱に手を伸ばす僕。

操緒も不信感以上に箱の中身に興味が湧いたのか僕の横に来て、興味深そうに箱に視線を向けている。

手元に手繰り寄せた箱はかなり大きかった。
それこそ、刀が実際に入るような・・・

「・・・まさか・・・」

急いで箱を開けて中身を確認する。
そこには、

『・・・うそ・・・』

二振りの日本刀が。

秋希さんが使っている秋楓と秋楓・紅とほとんど同じ大きさだが、鞘の色とか柄に巻いてある柄糸の色が違う。

長い方の本差しの方は、鞘と柄糸が、揃って淡い青紫の棟色。
脇差の方は、柄糸の色は同じだが、鞘の色は黒色だ。

「銘は春棟しゅんおつと春棟しゅんおつ・闇あん。

造りのことは言っても分からないだろうから省くが・・・
・・・鞘から出してみる」

言われるままに本差しの方を手に取り、鞘から抜き放つ。

照明の光を反射し刀身は明るく輝くと思っていた僕の予想を裏切り、刀身は光を吸収し黒々とした光を放っている。

「・・・黒刀、ですか・・・」

「ああ。

使っている金属は最高級の玉鋼で一級の刀工が鍛えたんだが、鍛えてる途中にとある悪魔が参加したらしい。

だから、普通の工程ではありえない黒刀になったそうだ」

本差しを鞘に戻して箱に置き、脇差を手に取り鞘から抜き放つ。
脇差もまた普通の日本刀とは違い黒刀だ。

「……それって大丈夫なんですか……？」

「ああ、製作過程に悪魔が関わったというだけで少し変わった日本刀ではあるが、普通の日本刀として使っても全く問題ない」

「……そう、ですか……」

「……不満そうだな……」

「いえ、そういう訳ではないんですが……」

そう、不満ではない。

ただ疑問が大きすぎるだけだ。

いくら僕が素人だといっても、鍛錬を始めて一年も経っていない人間に真剣を持たせる訳がないことぐらい分かる。

居合道などの初めから真剣を使っている様な流派なら分かるが、橘高道場はそんな流派ではないし、寧ろ実践を前提とした道場だ。

尚のこと真剣を持たせるタイミングには気を使わず。

それなのに、こんな素人に毛が生えた程度の人間に持たせるだろうか……？

秋希さんや冬琉さんが余程の馬鹿だったらそれも分かるが、二人がそんな人間ではないことぐらい分かっている。

「……どういことですか……？」

「なに……？」

気付けば自分の口からそんな言葉が漏れていた。

「いくら僕でも分かります!!」

僕が真剣を持つタイミングがおかしいってことぐらい!!」

「……………」

「渡されたことが嫌なんじゃありません。

むしろ、自分が認めてもらえたんじゃないかと思つて嬉しいです。

……だけど……いくらなんでも早すぎます!!」

何かあつたんですか……!?!」

黙つたまま僕の言葉を聞く秋希さん。

操緒も驚いてはいたが、特に茶化すことなく黙つて様子を見ていてくれる。

そうして、5分が過ぎた頃だろうか……

秋希さんが口を開いた。

「私には、もうほとんど時間がない」

「……………え……………?」

「私が君に物事を教える時間はもうほとんど残されていない。

長くても一月あまりだろう」

あまりに唐突な告白。

末期の病気に罹つた人物からの死をイメージさせるような言葉。

だけど、今の秋希さんがそんな病気にかかっている訳でもない。

なのに、何故こんな時期に……

時期？

「だから、教えられることは今のうちに可能な限り教えておきたい。その中にあるのは、真剣を使うことが前提のものばかりだ」

秋希さんの言葉も聞こえてはいるが、頭に入ってきて来ない。

「まあ、死ぬわけではないさ。

お前にも憑いているから（……………）見えるのだろう……？」

今からおよそ一月の制限時間

死ぬわけではない

憑いている

という言葉の数々が、僕に最悪の未来を予感させる。

「……………まさか、秋希さん……………」

『……………そんな……………』

操緒も気付いたのだろう。

かなり表情が強張っているのが分かる。

そんな絶望感に浸っている僕をしっかりと見据え、秋希さんは宣言した。

「私は副葬^{ベリアル・ドール}処女になる」

それは、僕たちが絶対にさせてはいけない、させる訳にはいかない
出来事の一つだった。

22回 託された刀（ちから）（後書き）

クリスマスのことを書くかどうか悩み、かなり虚しくなりました。

23回 幼馴染の信頼（前書き）

今回かなり難産でした……

なんせ、ストーリー上無視するわけにもいかない重要な話ですからそんな簡単に済ませる訳にもいきません。

それに、秋希がベリアル・ドールになった経緯も全く分からない以上完全予想で作るしかないわけです。

せめて、秋希が重症でも負えばそこから繋がられるんですけどそんな画は全く浮かんできません。

なので、かなり不十分な気もしますが、これが今の私の限界です。

23回 幼馴染の信頼

「自分がどうなるのか分かってるんですか・・・秋希さん!？」

秋希さんの言った言葉が初めは信じられなかった。

僕自身、どこか安心していただろう。

彼女が塔貴也さんを見捨ててまでそんなことをする人物ではない、と。

「当たり前だ。」

ベリアル・ドール 副葬処女となった女性は、アスラ・マキーナ 機巧魔神に封じ込められ、魂が消え去るその日まで解放されることはない」

「それが分かっているのにどうして・・・!？」

ところがどうだ。

蓋を開けてみれば、彼女は顔色一つ変えることなく、自身がベリアル・ドール 副葬処女になると宣言した。

その答えに辿り着くまでにどれだけの葛藤があったのか、僕は知らない。
恋人である塔貴也さんや、ハンドラー 演操者になるであろう冬琉さんがどんな

ことを秋希さんに言ったのか、僕は教えてもらっていない。
学生連盟からどんな交換条件や要求があったのか、僕は予想できない。

それでも、以前の世界での部長の姿や、冬琉さんの選択をみれば、秋希さんのやろうとしている事が間違っているのは分かる。

「どうして、か・・・」

「・・・少しでも多くの人間を助けたいと思うのは間違いか・・・？」

「・・・え・・・？」

「犯罪を犯した演操者や悪魔を野放しにしていたら酷いことになる。かといって、奴らを警察などがどうにかできるかと言えば無理だ。奴らを止めるには、同じだけの力、もしくはそれ以上の力を持つて対抗しないといけない」

それは、そうだけど・・・

実際、加賀篤が動いていた時に警察なんかは役に立っていなかった。警察が無能という訳ではないが、こっちの世界の事件を取り締まられるはずがない。

動いていたのはGDであり、下着ドロの件で佐伯に依頼されていた第二生徒会の真日和だった。

「・・・秋希さんのその考えは、素晴らしいものだと思います」

そう、悪魔や演操者^{ハンドラー}が跋扈している世界は関わらないで済むのなら誰だって関わらない方が良いに決まってる。

それが、全く関係の無い一般人であれば尚更だ。

「そうか、なら・・・」
「ただど!!」
「・・・」

「僕は、認められません!!」

ベリアル・ドール ^{アスラ・マキナ}
副葬処女や、機巧魔神の存在意義が間違つてるとは言いませんし、彼らが人を助けしてくれるのならこれ程心強いこともないと思います。
・
・

実際、僕は操緒に助けられた。

飛行機事故の時も、神デウスから逃げる時も。

だから、彼らの存在を否定することはできない。

だけど、秋希さんが助けようとしている人の中に身近な人は入っているんですか・・・!？」

僕が今秋希さんを止めるために一番大きな理由はこれだ。

確かに、以前の世界で起きた悲劇を起こさないようにする、ということが根本の理由ではあるし、それはこの世界で決心した時から変わらない。

だけど、凡そ1年橘高道場に通っていた身としては、そんな自身の未来をより良いものにするという感情だけで秋希さんの副葬ベリアル・ドール文化を止めようとするとはなくなっていた。

いや、そこにより親愛の情が加わったとも言うべきなのだろうか・・・?

今までは、どちらかと言えば自分中心だったけれど、今では純粹に秋希さんや冬琉さんの未来を変えてあげたいと思うようになってきた。

そして、その感情が今の秋希さんに最も感じているのが前述した言葉だったりする。

今の秋希さんの言葉からは、自身の夢しか感じられない。

それが良い悪いは置いておいて、問題なのは秋希さんという副葬ベリアル・ドール処女が周囲に対する影響をあまり考えていないことだ。

僕が今まで会ってきた副葬ベリアル・ドール処女たちは、良くも悪くも演操者やその周囲の人間や悪魔に大きな影響を与えてきた。

生きている？時はまだ良い。(演操者ハンドラーの人生を縛り付けるといっ点では良くないのかもしれないけど・・・)

「ただ、魂をすり減らして消えてしまった彼女たちは周囲の人たちに深い悲しみや悔恨を与えることになる。」

「哀音さんは佐伯会長や佐伯妹たちに、新屋敷さんは加賀篤に、紫湊さんは朱湊さんと瑤さんに、そして何より、会ったことはないけど、以前の世界の秋希さんは部長と冬琉会長に大きな悔恨の念を残して逝った。」

「そんな彼らの姿を知っているからこそ、僕は認められない。」

「身近な人・・・塔貴也や、冬琉のことか・・・？」

「当たり前だ!!」

「そんなことも考えないで決めたとでも思っていたのか!!」

「ここにきて初めて秋希さんの口調が荒くなる。」

「自身を馬鹿にされたとでも思ったのだろうか？」

「・・・ほんとに考えて決めたんですか・・・？」

「・・・なにを・・・!？」

「ほんとに考えたのなら、ベリアル・ドール副葬処女になろうなんて考えは出てこないはずです!!」

「・・・秋希さんが消えたら二人が悲しむっていうのもありますけど、それ以上に二人をより過酷な戦場に巻き込むんですよ!!」

「それが分かってるんですか・・・!？」

「そう、ベリアル・ドール副葬処女になってGDに所属するということは人の戦闘技術だけではどうにもならない戦場に足を踏み入れるということだ。」

「本音は感情論だけれど、そんな勢いだけの理論で秋希さんが止まっ」

てくれるとは思えない。

だから、目の前で起こるであろう危険な世界を教えるしかないと思っ
は思った。

僕も、以前の世界ではそんな世界にいたけれど改めて考えてみると、
我ながらよく生き残れたものだと思う。

一歩間違えれば死んでいたんだから。

「秋希さんや冬琉さんなら、悪魔や使い魔^{ドウター}、それにはぐれ眷属^{ロスト・チャイルド}には
勝てると思います・・・

実際、1巡目の世界の秋希さんははぐれ眷属^{ロスト・チャイルド}を倒してたし、可能だ
と思う。

だけど、機巧魔神^{アストラ・マキナ}や魔神相剋者はそれこそ人の技術でどうこうな
る相手じゃありません」

主な理由としては、護法装甲の存在がある。

冬琉会長は普通に斬り裂いていたけれど、あれは元演操者^{エクス・ハンドラー}の能力で
機巧魔神^{アストラ・マキナ}に付与されていた護法障壁の結果を無効化したからできた
ことだろうし・・・

「・・・ならば、尚一層私が副葬処女^{ベリアル・ドール}になるべきだ」

「秋希さん!!」

僕の言ったことは彼女の決意をより一層固めてしまったようだ。
気が弱い人なら、周囲の事を何よりも考える人ならこれで考え直し
てくれるだろうけど、残念ながら秋希さんはそのどちらでもなかつ
た。

「見縊るなよ、夏目智春」

獲物を射抜くような視線が僕に向けられる。

その視線は、今まで僕が秋希さんから向けられた視線の何よりも鋭いものだった。

それに、怯んでしまい、無意識のうちに体が下がってしまう。

「そんな世界であるのは百も承知。

冬琉であれば、十分渡り合っていける。

むしろ、あの世界だったら私よりも冬琉の方が合っているんだ。

それに、塔貴也は私が認めた男だ。

戦場には出ないにしろ、私が消えることになるうとも自分を見失うような男ではない!!」

・・・そうか、だから秋希さんは自分がベリアル・ドール副葬処女になることに不安がなかったのか・・・

勿論、多少なりとも不安はあったのだろうけれど、それよりも二人に対する信頼感の方が大きかったのだろう。

・・・その信頼が、二人にあんな事をさせてしまったと思えば、何とも言えない気分になる・・・

そして、僕の判断理由が未来の二人の行動が基準となっている以上、これ以上何も言えたくない。

秋希さんの二人に対する信頼は、これまで共に過ごしてきた日々の積み重ねだ。

それを、いくら結果を知っているとはいえ、僕が否定できる訳がない。

否定の言葉を紡いだところで根拠が言える訳もないし、何より何故そんなことが言えるのか怪しまれてしまう。

「・・・ク・・・!!」

自身の言いたいことが言えない。

自分に力がないことを悔しく思う無力感。

それは、よくあることだと思っていたけど、こんな所でそれを感じることになるとは思わなかった。

黙り込んでしまった僕に秋希さんが言葉をかける。

「・・・話は以上だ。

明日も早いのだろう、もう帰れ」

それは、この場ではもうこれ以上話すことがない、ということを示していた。

「・・・失礼しました・・・」

脇には春棟と春棟・闇が入った箱を抱え、秋希さんの部屋を出る。

普通だった嬉しきのである。その刀は、どこか禍々しい妖気を放っているようにも感じられた。

?
?
?
?

橘高道場から家に向かう僕と操緒の足取りは重かった。

あの後、冬琉さんと塔貴也さんの二人にも話を聞きに行ったのだけれど二人とも、

『秋希 ちゃん の決めたことだから』』

と言つて、秋希さんを止めようとしている様子は見られなかった。むしろ、冬琉さんは秋希さんの封印されたアスラ・マキナ機巧魔神を使うことが理由なのか今迄にない程意気込んでいるように見えたし、塔貴也さんは秋希さんをすぐにでも開放できるよう部屋中にアスラ・マキナ機巧魔神とベリアル・ドール副葬処女の資料を散乱させ、その事で頭が一杯に見えた。

だからなのか、あまり話を聞いてもらえた様な気がしない。そのため、二人からの説得は無理だということが分かった。

なんせ、二人とも秋希さんがベリアル・ドール副葬処女になることは認めている。そうになると、もう誰も秋希さんを言葉で止めることはできないだろう。

唯一の期待は橘高家の両親だが、未だに海外に出ているらしく、僕も一度も会つたことがない。だから、あまり期待しない方が良さだろう。

『……はぁ……』

自然と操緒の口から溜息が洩れる。理由は言わずもなだろう。

『……どつする、トモ……?』

「どつする、って聞かれてもなー?」

正直どうしていいか分からない。

言葉では無理だと分かった以上、止めるとなると力付くになるのだろつけど……

『トモが秋希さんに勝てると思えないしねー』

それができれば話は早いんだけど・・・

「そういう訳にもいかないだろう。」

「いっそ、イクストラクタを学生連盟から盗んでみるか・・・？」

『できるの・・・？』

「まあ、無理だよなー」

『「・・・はあ・・・」』

二人揃って溜息が洩れる。

実際、自分でも学生連盟からイクストラクタを盗むというのは悪い発想ではないと思う。

だけど、肝心な問題として僕は学生連盟の本部の場所も、イクストラクタの保管場所も知らない。

本部の場所は八枝さんにでも聞けば教えてくれるだろうけれど、イクストラクタの場所はたぶん無理だろう。

なんせ、学生連盟の主戦力を扱う場所だ。警備や情報の扱いだって半端じゃないはず。

仮に、それらの問題を全て解決して盗み出したとしても、朱湮さんのように学生連盟から追われるのは目に見えている。

朱湮さんが奪ったプラグインで追ってきたのは雪原さんだ。

ハンドラー演操者一人と考えればまだ何とかなるのかもしれないけれど、ハンドラーの演操者として考えるとどうにもならない。

大体、奪おうとしている物が全然違う。

プラグインだったらまだ何とかなるのだろうけれど、アスラ・マキナー機巧魔神では向こうも全力で取り返しに来るだろう。

それを、防ぎきれぬ気はしない。

僕が？鐵を召還してペルセフォネとの慟哭するクライイング・アスラ魔神を行えば可能性は見えるけれど、その後学生連盟に所属している学校も参加して全力で潰されるだろう。

・・・結論、八方塞だ・・・

「せめて、ベリアル・ドール副葬処女の解放手段があればなんとかなるんだけど・・・

『そんなの早々ある訳ないでしょ・・・』

「だよなー

鋼ならなんとかなるとは思っけど・・・」

有した能力が完全なる空間制御である鋼、もしくは白銀と合体？して鋼と同等の能力を得た？鐵・改であれば、副葬処女を解放できるのだろうけれど・・・

『鋼は一巡目のトモが持つてるし、？鐵は空いてるのかもしれないけど白銀は雪原さん？が持つてるから無理だろうし・・・』

「だいたい、あいつが協力してくれると思えないしな・・・」

なんせ、自分が死ぬことが分かっていたであろうに、その原因に対してほとんど干渉しなかった男だ。協力してくれるとは思えない。

『とりあえず、後1週間は奏ちゃんと相談しながら方針を決めて行くしかないよ・・・』

「・・・結局そうするしかないのか・・・歯痒いな・・・」

まだ寒い夜風に身を縮ませながら家路を急ぐ僕と操緒。

その道先は街灯の電気が切れているのか、異様に暗かった。

変質者でも出なきやいいけど・・・

そんな、どこか現実逃避に近い思考を頭に巡らせながら、僕は足早に暗い路地を歩き去って行った。

? ? ? ? ?

・・・トモ・・・ミ・・・ツケ・・・タ・・・
・・・

・・・ハ・・・ヤ・・・ク、ハ・・・ヤ・・・
ク・・・

・・・イ・・・ソイ・・・デ・・・ク・・・口・・・
ガネ・・・

ワ・・・タ・・・シ・・・ガキ・・・エ・・・ルマエ・・・
・・・二・・・

・・・ソレ・・・ガワ・・・タシ・・・ガ・・・トモニ・・・シテ・・・
アゲラレル・・・サイ・・・ゴノ・・・コ・・・トダカ・・・ラ・・・
・・・

23回 幼馴染の信頼（後書き）

今年の投稿はおそらくこれが最後です。

明日には実家に帰る予定ですし、年始は執筆作業があまりできないと思うので、次回は少々遅れると思います。

それでは皆様よいお年を！！

24回 帰還（前書き）

明けましておめでとございます。

今年もよろしく願います。

内容については、あとがきで。

24回 帰還

それは、世界の境界を渡る。

闇を纏い、虹を滑り落ちて行く。

自らの主 愛する人 の許へと。

?
?
?
?

『卒業おめでとございます』

秋希さんの宣言を受けてから早一週間。

今日、僕と奏のいる中学校では卒業式が行われていた。

「……はあ……」

教室から見下ろした校庭や校門の周囲は、卒業証書を持った3年生と、そんな彼らの周りに集まる1、2年生たちで混み合っていた。

本来、卒業式は喜びや悲しみで満たされるものだけけど、会おうと思えば会えるようになった今日では、悲しみは減り喜びの占める割合が増えているようだ。

「……決まりません、ね……」

それとは逆に、僕たちのいる校舎内は閑散としたものだった。

3年生がいないのは勿論、1、2年生のほとんどが部活に入ってい

る我が中学では、ほとんどの在校生が卒業生の見送りに出るため、校舎内に人はあまり残らない。

それは、教員でも同じことだったりする。

校舎内に残っているのは、僕や奏の様に部活や生徒会などやらず、上下の関係がほとんどない人間だ。

あの樋口ですら写真部の先輩の見送りに出ているのだから、残っている僕たちがどれだけ他とは違うのかが良く分かる。

『・・・もう、ニアちゃん？でも呼んでくるしかないんじゃない・・・？』

人がいないのを良いことに、僕たちは 奏は擬態を解いている
は秋希さんの問題を話し合っている。

話し合うといっても、もう何度も話をまた繰り返しているのだけれど・・・

「ニアを呼んできてどうするんだよ・・・？」

スリッター

分離機の理論は知ってるかもしれないけど、僕たちだけで造れるような機械じゃないぞ、あれ・・・」

ここ一週間、授業中も、トレーニング中も、果ては道場で練習している時まで、頭の中はその事でいっぱいだった。

実際、『真剣を扱っているというのに気が抜けている！』と冬琉さんにこっぴどく叱られました。

秋希さんも言いたそうにしていたけれど、原因が自分であることが分かっているからか、何も言ってこなかった。

・・・いつそ、言ってくれた方が楽なのに・・・

「あの、塔貴也さんに手伝ってもらおう、とか・・・？」

奏や操緒と何度も話し合い、何度も頭を悩ませてきた。

1週間という短期間でこれだけ悩んだことは、今まででもあったけれど、これほど酷い焦燥感を感じたことがない。時間が無駄に過ぎて行っている様な気がしてならない。

たかが1週間、されど1週間。

秋希さんが副葬処女ベリアル・ドールになるまで、早ければ2週間、遅くとも3〜4週間の期限しか残っていない。

『私は塔貴也さんの技術力をほとんど見たことがないからよく知らないんだけど・・・そんなに凄いの・・・？』

私には、ただの秋希さんに惚れてる爽やか？青年にしか見えないんだけど・・・』

話し合う内容は、勿論、どうすれば秋希さんを副葬処女ベリアル・ドールにしないで済むか、ということ。

ただ、この問題はこっちの世界に来てから散々話し合っているのだ。そんなに簡単に答えが出るとは思っていない。だけど、改めて期限を目の前に突き付けられると、そんな思いとは余所に答えを出さないといけなくなってくる。

追い詰められて答えが出るのならそれも良いけれど、焦って稚拙な案に頼ってしまう確率が高くなるだろうから困りものだ。

「こっちの“塔貴也さん”が“部長”とどれだけ同じなのか分からないけど、部長の機巧士としての腕は凄かったよ。

機巧偶人ガジェットに自分の意識を乗り移らせて行動してたぐらいだ・・・」

『可能性が少しでもあるのならやってみるべきだ』

『自分や仲間を信じる！！』

そうすれば明るい未来がやってくる』

よく見聞きする漫画や映画のセリフ。

漫画や映画だったら、そのセリフの後にほとんど必ずと言っていい程成功するヒーローやヒロイン達。

だけど、そんな成功することが約束されたセリフなんて全く意味がない。

『（成功する）可能性が少しでもある』ではない。『（成功する）可能性しか存在していない』だ。

『自分や仲間を信じろ！そうすれば明るい未来がやってくる』ではない。『自分や仲間を信じなくても、明るい未来はやってくる』だ。

「塔貴也さん、とニアちゃんが、一緒に研究してくれば・・・」

可能性なら幾らでもある。

寧ろ、ペルセフォネを呼んで闘ったりすれば力付くでもどうにかできるだろうし、僕たちの経験した結末を教えれば秋希さんが思い留まったり、塔貴也さんたちが考え直してくれるかもしれない、という点では可能性だらけだろう。

だけど、それじゃあ駄目だ。

力づくで戦い、勝ったとしても、秋希さんはそんなことで自分の信念を絶対に曲げることはない。

それは、道場に通った約1年という期間が何よりの証拠だ。

橘高秋希は、力に屈しない。

屈するのは、自分の認めた相手だけだ。

『以前の世界の事を話す』

成程、上手くいけばこれ以上ない程HAPPY ENDだ。

秋希さんは生きているし、冬琉さんや塔貴也さんだってあんなことはしないだろう。

三人とも口は固い 塔貴也さんが不安だけど、秋希さんから行ってもらえれば大丈夫だろう から情報が漏れることはないはずだ。後は、僕たちがどれだけ鳳島兄妹や真日和たちの事を解決できるかにかかってくる。

完璧とまではいかないにしても、これ以上ない程いい結果だ。

だけど、彼らが信じてくれる要素がどこにある・・・？

嵩月家での説明の時は、奏との契約における矛盾を証拠とした。だが、それは嵩月家の皆さんがずっと奏と一緒に過ごし、信頼してきたからこそ証拠になったんだ。

秋希さんたちは、僕や奏のことを昔から知っている訳ではない。

それこそ、信頼という点からいえば僕らよりも幼馴染同士の信頼の方が大きいだろう。

契約の不自然さを教えたとしても、それが僕たちが“未来”から来たという証拠にはならない。

実際に未来から来たことを証拠とするには、何か物を持っているか、事件を実際に予測してみることが必要だ。

前者は当然の様に却下。

そして、後者も今回は残念ながら却下。

理由は時間

例え、これから起きる事件を的確に当てて行ったとしても2〜4週

間程度では、十分な証拠となるとは言えない。

それに、残念ながらどっかの水色の髪の腹ペコ修道女（・・・誰だっけ・・・？1巡目で尼僧喫茶に連行されたけどいかなかったはずだし・・・）ではない僕たちはこの短期間で集中して何が起きるのかまでは覚えていない。

『うん・・・でもさ、ニアちゃん？って、1巡目に跳ばされてから5年間ぐらいあっちにいたんでしょ・・・？』

製造期間が1ヶ月ぐらいだとしても、アシラ・マキナ機巧魔神？も造ってたんなら、まさかずつと分離機スリッタの研究だけしてたわけじゃないだろうし、1巡目に跳ばされてすぐの頃は生活するのでやっとならったんだろうから、多く見積もっても研究期間は2、3年でしょ・・・？

それだけの時間で完成させた分離機スリッタを改善するのに1年で時間が足りるかな・・・？』

となると、先程から話し合っているように、今度は『秋希さんを副葬処女アル・ドールにさせない方法』ではなく、『どうすれば機巧魔神から副葬処女を解放できるのか』を考えないといけなくなるのだが・・・

それこそ、簡単な問題ではない。

唯一の、いや唯一二の答えはスリッタ分離機かアシラ・マキナ機巧魔神の二択。

だけど、鋼の演操者ハンドラーが“あいつ”である以上協力はほぼ不可能だ。？鐵と白銀も両方同時に大破するなんてことは早々無いだろうから却下。

そもそも、紫淫さんの魂が封印されている白銀を、僕らがどうこうして良い訳がない。

「あー・・・改善しなくてもなんとかなるんじゃないか・・・？

魔力は律都さんがなんとかしてくれるだろうし、確率操作能力は

ニアがいれば問題ないだろうから」

となると、現状、技術的にもしつかりと確立している分離機スプリッターが唯一無二の答えになる訳だ。

本来であれば、まだこの世界には生みだされていない技術だけれど、そこは僕たちと一緒に操縦に逃がされたニア・フォルチュナ・ソメシエル・ミク・クラウゼンブルヒ嬢がなんとかしていた。

この世界でその名前を初めて聞いたのが、本人の口からではなく塔貴也さんの口からというのがまた凄い。

僕らよりも大体5〜6年遅く生まれてきた彼女は、次々と機巧魔神アスラ・マキーナや副葬処女関連の新技术を生み出しているそうだ。

以前の世界でも天才少女だったが、今度はそれに輪をかけた状態になっている。

そのことから、彼女が僕たちの知っているニアなのだと確信できた。

ただ、『近々来日したい』と言っている、とも塔貴也さんが言っていた事に関しては色々思う所があるのも事実。

・・・会いたいような、会いたくないような・・・

会えばほぼ間違いなく大量に運気を吸われるだろう。

だけど、会わなかったら会わなかったで、ニアが洛高に来た時が怖い。

結局、大量に吸われることになるんだろうなあ。

できれば、樋口辺りに押し付けて逃げたいけれどそういう訳にもいかないし・・・

「あー・・・多分、無理、だと思います。

あっち、でリツちゃん、があれだけ魔力を出せたのは、契約してたから、って言うてました」

で、肝心の分離機^{スプリッター}だけれども、今の会話から分かるように、多分無理。
律都さんが契約していれば話は違うのだろうけれど、していないみたいだし・・・
そうなると大量の魔力をどこから持ってくるかということになるのだが・・・

『そっかー・・・他に大量の魔力が出せるのって・・・』

方法はいくつがあるが、

？加賀篝の様に大量の悪魔から魔力を得るという手段。

？^{アスラ・クライン}魔神相剋者の魔力の循環によって魔力を増幅させる手段。

？律都さんを無理やり契約させる手段。

実用的な手段はこの三つだろう。

だけど、どれも簡単に取れる手段ではない。

「・・・結局三つとも無理だと思うけど・・・」

ふと視線を校庭に向けると、人が校舎に戻り始めていた。
奏もそれに気づいたのか、

「あ・・・」

擬態を解いていた状態から擬態している状態へと戻り、瞳の色がどちらも黒くなる。

『・・・とりあえず、続きは放課後かな・・・』

操緒も先程までのシリアスな雰囲気どこへやら、普段の雰囲気に戻る。

そうして、僕たちが普段の学生生活の空気に戻ったところで校庭や校門付近へと出払っていた同級生たちが戻って来た。

そこからは、普段通りの・・・いや、卒業式というイベントで若干浮ついた雰囲気になっている学校だった。

幸いにも、1年生は午後には帰れるはずだから、精々後1、2時間の辛抱だ。

?
?
?
?
?

それは、世界樹の枝の一本に入り込む。

銀色の剣が中へと続く穴を開け、神から逃れる。

自らの友 自身を受け入れてくれた人 の許へと。

?
?
?
?
?

ようやく学校から解放され、僕と奏は家路に就く。

普段は、嵩月組にそのまま直行する僕らだけけど、今日はそのまま昼食を取ってから向かうことになると思う。

嵩月組に歩いて向かうとどうしたって30分以上は掛かる。

普段なら問題ないけれど、時刻は午後1時を過ぎたぐらい。学校で昼食を食べてきた訳ではないので、当然の様に空腹である。幸い、嵩月組に向かうまでに繁華街を通るので、その類の店には困らない。

早くて安いファーストフードから、ちよつと高めの凝った料理屋まで、ある程度の数は揃っている。

そんな店の中から、今日は珍しく奏が選んだ店に入る。何でも、店の前を通るたびに気になっていたのだとか。そして、折角の機会なのだから、ということだそうさ。

因みに、現在のメンバーは、僕、奏、樋口、杏（+操緒）の4人。二人ともこつちの方向に用があるとかで、一緒に昼食を取ることになっている。

特に問題はないのだけれど、少しでも良いから秋希さんの事を話し合いたいので少々思う所があったりする。

まあ、こんな僕たちとも仲良くしてくれる二人を追い払う訳にもいかないから、ありがたいのはそうなのだけれど・・・

「・・・にしても、カナちゃんの行ってみたかったお店ってここ・・・？
・・・ホントに・・・？」

杏が非常に疑わしげな視線を奏に向けている。

「は、はい」

それにやや戸惑いながらも返事を返す奏。

何故自分がそんな視線を受けることになっているのか全く分からないようだ。

「こりゃまた、何と言ったらいいか・・・」

樋口でさえ、どう反応したらいいのか困った様子だ。

『・・・別に悪いわけじゃないと思うけど・・・』

操緒は単に困っている。

自分は犠牲にならないから大丈夫だと思っているのかもしれない。
店の名前は、

【懐かし屋 味噌汁・肉じゃがから郷土料理まで】

・・・正直、僕もなんて反応したらいいのか分からない。
いつそのこと激辛料理店の方が、いくらでも騒げるだけマシだと思
う。

だけど、この店じゃそんな反応ができる訳でもない。
すごい、微妙な部分をついてくる。

そもそも、中学生が行くような店じゃないと思うのだけれど、そこ
は奏さん。

特におかしいとは思っていないらしい。

この一年で奏の一風変わったセンス　ぬいぐるみなど　には大
分慣れたと思っていたけれど、まだまだだったらしい。

「ま、まあ、食べれないってわけじゃないんだから・・・
とりあえず、入ってみようよ」

「『』・・・『』」

僕が促すと、どこか気まずそうな雰囲気になりながらも、店の入り
口に向かっていく樋口と杏。

「……?……」

そんな雰囲気を悟ったのか、さっきからの二人の反応に戸惑っているのか、奏が頭に疑問符を浮かべながら二人の後を追う。

……いや、実際に疑問符って頭の上に浮かぶものなんだな……

そんなどうでもいいことを想いながら、僕も操緒と一緒に3人の後を追って店内に入る。

「いらつしゃいませ」

店員の方の声を聞きながら入った先には、

「……」

「……おや、お嬢様に、夏目さん……」

何故か、顔の左側に大きな傷跡が残る人物……嵩月組若頭の八枝さんがいた。

店内に他の客がいれば、ひよっとしたらスルーすることもできたのかもしれないけれど、残念ながら店内にいる客は、僕らと八枝さんだけ。

しかも、僕は名指し。

無視できる訳がない。

「……なんているんですか……?」

頭が徐々に痛くなっていくのを感じながら、問いかける。

樋口と杏は固まったまま動かないし、操緒が話す訳にもいかない。

奏が対応するのが最善なのかもしれないけれど、何故か樋口達と同じように固まってしまっている。

「街を巡回するついでに昼食を取っていたのですよ。

ここは、かなり穴場ですね。

国内の色々な味がかなりのレベルで楽しめるので」

「はい。

八枝さんには、度々お越しいただいてまして」

「そ、そうですか・・・」

どうやら、ここは八枝さんの行きつけのお店だったようだ。

それなら、まあ、いてもおかしくはないのかな・・・

「後ろのお二人は御学友ですか・・・？」

八枝さんの意識が固まっている二人へと向けられる。

向けられた二人は、

「ひ、樋口琢磨です」

「お、おお、大原杏です」

かなりどもりながら自己紹介をしていた。

さすがに、八枝さんの様なカタギには見えない人物が相手では脅え
ても仕方ないと思う。

・・・僕も、初めて会った時は似たような反応だったし。

「二人とも、僕たちの友達です」

「そうでしたか・・・」

私は、八伎。

奏お嬢様のお父上の下で働いています」

「「よ、よろしくお願いします・・・!」「」

予想以上にスリリング（樋口と杏にとって）な昼食がこうして始まった。

・・・いや、お店の料理はどれもおいしかったよ・・・?

素朴だけど、どこか懐かしい味だったし。

だけど、隣にいる二人が異様に緊張しまくって、こっちもどうしてもそれを意識してしまう。

奏は奏で、余程料理の味が気に入ったのか、真剣に食べていて、話す余裕がなさそうだった。

おかげで、八伎さんが出て行くまで、それなりに空気がきつかった・・・はあ、どうしてこんな所でこんな目に会わなきゃいけないのやら・・・

?
?
?
?

それは、とある街に降り立つ。

桜の蕾に祝福されながら、屋敷を後にする。

自分自身 自身と同じ境遇にある人 の許へと。

? ? ? ?

時刻は夕暮れ時。

日が沈み始め、昼と夜が移り変わろうとしている逢魔時。

昼食の緊張も、今となっては遠い過去の様・・・な訳でもない。けれど、頭の中からはすっかり抜け落ちていた。

「・・・それにしても、もう1年か・・・

早いねえー」

どこか感慨深そうに操緒が言う。

「ああ、お前も大分その姿に慣れてきたみたいだな」

「うん。」

最初の頃は大変だったよ。

気付いたら車道に出てるし、トモのトイレに憑いて行っちゃってるし・・・」

「・・・大変、だったんです、ね・・・」

奏がどこか懐かしそうに言う。

実際、奏は操緒になったことがあるのだから、その境遇が分かるのだろう。

あの時と違うのは、まだ操緒が誰彼構わず見える状態ではないということだ。

だから、操緒が車道に飛び出しても誰も焦らない。

・・・まあ、トイレとか着替え中に憑いて来られるのは中々精神的に苦しいものではあったが・・・
きつと、佐伯兄も同じ境遇だったのだろう。
哀音さんも操緒に似た性格だったのだから。

・・・なんか、初めてあの人に同情を覚えた気がする・・・

『けど、寂しい訳じゃなかったから良かったのかも。』

トモとか、奏ちゃんがいたし・・・

うん、その点は感謝してあげる』

「なんで上から目線なんだよ・・・？」

「・・・ふふ・・・」

操緒のボケに僕が突っ込む。

僕に対して、操緒が突っ込む。

奏は、そんな僕らを見て笑っている。

どこか、和やかな空気。

そんな風にいつも通りの他愛もない話をしながら、奏と操緒と橘高道場に向かっていく時だった。

ズンツッ！！！！

いつぞやの神デウスの出現の時の様に、突然目の前の空間が揺らぐ。

瞬間、自身の体と心は臨戦態勢に入る。

一年間橘高道場に通い続けた成果だ。

体を半身に、重心を落とし、構えをとる。

得物は持っていないけれど、素手で立ち向かうしかないだろう。

最悪、ペルセフォネを呼ぶことも考えないといけなかももしれない。

見れば、隣で奏が同じように構えているのが分かる。

いやがおうにも場の緊張は高まっていく。

そうして、僕たちの緊張が最大限まで高まった瞬間に“それ”は現れた。

?
?
?
?
?

それは、辿り着いた。

彼らの姿を認めると同時に、その場に膝を着く。

自身の存在 魂 をすり減らしながら。

?
?
?
?
?

空間が軋んだ先に現れたのは、一体の機械仕掛けの悪魔。

右手には巨大な銀色に輝く剣を持っている。

全身の装甲は、元々は傷一つない綺麗なものだったのに、今では所々に裂傷や陥没部、錆などが見える。

だけど、僕にとっては何よりも力強い、そして、安心できる姿だ。

そう、僕は、いや僕たちはこの悪魔を、アスラ・マキーナ機巧魔神を知っている。

以前の世界で幾度も僕たちを護り、デウス神からも逃がしてくれた悪魔。

「「 ? 鐵ッ! ! !」」

僕と奏が名前を叫び、自身の持てる全力で走り寄っていく。

襲撃から一転、予想外の出現により、僕の心は支離滅裂だ。

どうして、? 鐵が! ?

? 鐵は秋希さんたちの機体になるはずじゃ! ?

いや、そんなことよりも、

「操緒っ! ! !」

この改造された悪魔が動いてここにいるということとは、なにより“操緒”がいるということ。

僕の後ろで浮かんで戸惑っている彼女ではなく、僕たちを助けてくれた彼女が。

そんな彼女は、僕たちが近づき、黒鐵に触れるか触れないかの所で、僕らが最後に見たあの笑顔を浮かべながら姿を現した。

『 ……タダイマ ……トモ …… 』

24回 帰還（後書き）

さて、今回の話は、以前のアンケートで？鐵・改に決まった時点で思いついた話です。

ただ、？鐵を得るのならイクストラクタを盗ませるかと思っ
ていました。

鋼だったら、直貴をどうにかしてやろうと・・・

そんな展開よりも、私はこちらの話にできたことを嬉しく思います。

実は？鐵・改の話を書いた時点で、秋希さんの話は重要でありながら、かなりどうでもよくなっていたのです。

勿論、軽視しているわけではないですけど、一つの区切りにはでき
きました。

次回、操緒にスポットライトが当たります。

それこそ、今迄の不遇な扱いの分まで。

25回 ミナカミミサオ（前書き）

・・・疲れた

いや、シリアスなのは良いんですけど、カタカナが・・・

まあ、本文を読んでいたただけなら分かると思いますが。

25回 ミナカミミサオ

『・・・タダイマ・・・トモ・・・』

そう言いながら現れた操緒は、僕たちが最後に見た時と同じ姿だった。

そう、全く“同じ”。

着ている服は当然のこと、髪型も、儂げに笑っている表情もそのまま。

まるで、僕たちと別れたその時から時間が止まってしまった様な。

だけど、操緒は操緒だ。

僕たちをその身を削ってまで、何度も助けてくれた幼馴染の少女。

僕が助けようとして、助けられなかった少女。

そんな彼女を僕は、

「・・・おかえり、操緒・・・」

『・・・ウン・・・』

そう言って迎えた。

?
?
?
?

『・・・私・・・?』

『・・・ソウダヨ・・・“ワタシ”・・・』

僕の後ろからこの世界の操緒が、僕と黒鐵の間から洛高の制服を着た操緒が、それぞれの姿を視界に捉え、それぞれ見つめ合う。

この世界の操緒は戸惑いながら、以前の世界の操緒はやっぱり儂げに笑いながら・・・

その沈黙は、決して何人足りとも犯すことのできない神聖なものだったように思える。

そこにどんなやり取りがあつたのか僕や奏には分からない。

傍から見れば 見えれば 単に同じ顔の幽霊が見つめ合っているだけだろう。

だけど、こつちの世界の操緒の戸惑いが次第に薄れていき、遂には彼女の表情は優しい笑みに変わった。

『・・・そつか・・・』

・・・“私”は、最後までトモの為に頑張つたんだね・・・』

『・・・ウン・・・』

・・・アト・・・フタ・・・ツ・・・』

『・・・』

そう、こつちの操緒が聞き返すと、以前の世界の操緒が消える。

「操緒っ!?!?」

遂に魂が限界まで使われて消えてしまったのかと思つたが、

ゴウンッ!!--

そういう訳ではなかった。

洛高の制服を着た操緒が姿を消すと同時に、？鐵が動き出す。

その姿は、以前の堂々とした姿ではなく、以前では考えられないほど弱々しいもので最後の力を振り絞って動いているようにも見えた。

？鐵の剣を持った右腕が動く。

それは、空間を切り裂き、どことも知れない異空間へと繋がる裂け目となる。

以前、雪原さんが白銀でその裂け目を作った時は大気が呑みこまれていくように空気が吸い込まれていた。

そんなことは、しようと思えば出来るだけの話であって、本来であれば空気が動くことはない。

実際に、僕がダルアの使い魔であるヘザー？ドクター やたらでつかいカメレオン を捉えた時にはそんな空気の流れは感じなかったし・

とまあ、そんな思い出話ではなく、問題は今？鐵が剣を振るい、空間の裂け目を作ったということ。

そして、空気が吸い込まれる訳ではなく裂け目から“吐きだされている”ということ。

本来空気は気圧が高い方から低い方に流れ、それが自然な空気の流れであり風であるのだけれど、今僕たちの目の前で起きている現象はそんな自然現象のようなものではない。

悪魔ではない僕のような人間でも魔力が感じられるほどの風だ。

そして、それは“何か”を裂け目の中の空間から吐きだしているように思えた。

そうして、空間の裂け目から空気が吐き出され続け、もう裂け目も閉じてしまいそうな頃に、

「……え……？」

それは飛び出した。

外見は、緑色の筒状であり、先端部分に竿がついたどこか卑猥な道具を連想させる形状。

だけど、そんな外見とは裏腹にそれがどれだけ危険で重要なものか僕らは知っている。

アスラ・マキナ機巧魔神の魔力を暴走させ、アスラ・マキナ機巧魔神自体を爆弾へと変える危険な道具。

それを、アスラ・クライン魔神相剋者が使うことにより更に魔力を暴走させデウス神すらも倒せる存在に押し上げる。(まあ、使用したハンドラー演操者は反動で死んでしまうらしいが)

それは、以前の世界でアニアが二巡目の世界から一巡目の世界に持ち込み、二巡目の世界の遺跡で発見されるといふ、タイムパラドックスが生み出したオーパーツ。

の道筋が生みだし、アスラ・クラインの魔力の形を司る魔神相剋者専用のプラグイン。

イグナイター
点火装置

以前の世界で何故か部長がやけにこれを欲しがっていた。

……自分でデウス神を倒すつもりでもあったのだろうか……？
まあ、まずあり得ないとは思っけど……

と、そんなことより。

「と、と……」

裂け目から飛び出したそれが地面に落下する前にしっかりと受け止める。

この類の精密機械？は衝撃に弱いだろうから、堅い舗装された道路に落下させる訳にもいかない。

受け止めたイグナイターは、以前の様に奏の胸元に飛び込んでいくこともなくしつかりと、僕の手の中に納まった。

「・・・操緒さん・・・」

僕がイグナイターを受け止めていた横で、奏が再び姿を現した操緒に話しかけていた。

「無事で良かった・・・」

感慨深いものがあるのだろう。

奏の眼には涙が浮かんでいた。

二度と会うことがないと思っていた親しい友に再び出会うことができたのだ。

それは、何と云えばいいのだろうか・・・？

感動？

歓喜？

安心？

どれも正しくて、どれも違う気がする。

結局言葉で言い表そうとするのは無粋だということなのだろう。それぐらい僕でも分かる。

『・・・タ・カツ・キサン・モ・・・』

・・・カラ・・・ダハ・ダイ・・・ジヨウブ・・・？』

「・・・はい・・・操緒さんのお陰で・・・」

『ソツカ・・・ヨカツタ・・・』

そう言えば操緒と別れた時、奏は非在化が限界まで進行していたんだっただけ。

その際に、僕と契約した訳だけれど。

実際に無事かどうかまでは操緒にも分かっていなかったしな。

『・・・トモ・・・』

「・・・操緒・・・」

操緒の視線が奏から、僕に向けられる。

ああ、無事で良かった。

お前が生きてくれていただけで、僕は・・・

『・・・モ・ウジブ・・・ンヲ、セメナ・・・イデイイ・カ・ラ・・・』

「!!!み、操緒・・・お前、なにを・・・?」

『ワ・タシハ・・・モ・ウキエル・・・ケド、トモニハ・ミン・・・ナガ・・・イルカ・・・ラ・・・』

なんで、操緒のこの言葉に僕はこんなにも動揺してるんだ・・・

操緒が消えてしまうから？

そうかもしれないけれど、違うと思う。

確証はないけれど・・・

『・・・タカツキ・・・サン・・・ニ、ソツ・チノセ・・・カ・イノ
ワ・・・タシ・・・
イ・・・マハイ・・・ナ・クテ・・・モ、シュ・・・リサ・ント・・・
カ・ニアチャンモ・・・』

「操緒・・・僕は・・・」

『ワタシノセイデ、トモ・・・ガタチドマツタ・ママナノハ・・・イ
ヤダ・カラ』

その操緒の言葉で僕の心が書き換えられていく。
いや、浄化されていくと言った方が正しいか。

自分では気付かなかったけれど、こっちの世界に来てからの僕は以
前の世界に囚われすぎていた。

奏はともかく、秋希さんに冬琉さん、塔貫也さんに樋口、杏や佐伯、
それにこっちの世界の操緒。

どうしても、以前の世界で出会った彼らと比べてしまう。
口には出さなくても自然と頭で考えてしまう。

それが、どれだけ彼らにとって酷いことか知りながら・・・

『・・・ダ・・・カラ、ス・ス・・・ンデ・・・トモ・・・』

そんな自分でも気付かなかった考え・・・枷が、消えていく。

「大丈夫です、操緒さん・・・私たちがいますから」

「奏・・・」

『そうそう、“私”も私なら分かるでしょ……？
トモのことは任せてもらって大丈夫だから』

「操緒……」

僕の両隣に立っている少女たちが洛高の制服姿の操緒にそう答える。
その二人の言葉で更に枷が消える。

前へ、この世界をより先へ、進んでいこうと思える。

『……ソツカ……』

その二人の言葉に、今迄儂げに笑っていただけの操緒の表情が穏やかなものへと変化する。

今にも消えそうな笑みから、今をしつかりと認めた確かな笑みへと。

『……フタリ……ガ・イルナラ、ダイジヨ……ウブダ・ネ……
……ジャア、モウサ……イゴ……』

「操緒？」

表情が変わったと思ったら、今度はより深い表情へと変化する。
何かを決めたような。

『クロガネ』

操緒の言葉と共に後で膝をついていた機械仕掛けの魔神が吠える。
吠えた魔神からは濃密な魔力が漏れだす。

それこそ、この魔神の断末魔の悲鳴のように。

甲高い金属音と漏れ出た魔力が重なり合い、周囲に響き渡っていく。

『トモ』

「何、操緒・・・？」

操緒の呼びかけに答えた僕の心は自分でも予想していなかったほど穏やかなものになっていた。

目の前で吹き荒れる魔力の嵐など気にならないほど、自分と操緒がしっかりと繋がっているのだと分かったから。

そんな気持ちで操緒を見ていた僕に、操緒が話しかける。

『シンパイシナイデネ。

トモには操緒が憑いてるから』

それだけ言つて、操緒が消えた。

目の前に浮かんでいた洛高の制服を着た操緒だけではなく、僕の隣に浮かんでいた中学の制服を着た操緒まで。

「操緒！？」

「操緒さん！？」

？
？
？
？

S i d e : M i s a o M i n a k a m i

さっきまで夕暮れ時の鮮やかな世界にいたのに、気がついたらいつの間にか周囲の景色が一変していた。

辺りは暗い。

夜の帳がおりた明りがない深夜の世界でもこれほど暗くはないと思ういや、これは“暗い”ではなく“玄い”かな・・・？

「それにしても・・・」

一体ここはどこなのだろう・・・？

暗くて辺りの様子がほとんど見えない。

にも拘らず、上下だけははっきりしている。

さっきまでの事を思い出しながら私は悩んでいた。

「ここに来る前に、あっちの私が？ 鐵？ で何かしてたからここにいると思うんだけど・・・」

はっきり言っさっぱりだ。

正直言って、未だに自身が副葬処女だペリアル・ドールという実感もないのだ。

だから、これが機巧魔神アスラ・マキナが原因で起きているということは分かっても、それが自分に対してどんな影響を与えるのかまでなんて分かるはずがない。

「・・・ん・・・？」

眼が慣れてきたのか、それとも私という存在がこの世界に慣れたのかは分からないが、周囲の様子が次第に見えてきた。

「教会？」

と、樹・・・？」

闇の中に朧気に浮かび上がったのは周囲の玄さとは対照的な純白な教会と、そのそばに聳え立つ純白の大きな樹だった。

闇の中でその二つはほのかな光を放っている様な気がした。

「あれ・・・？」

“私”・・・？」

その大樹の根本。

どこかで見えたような、いや先程まで会っていた少女が立っていた。だけど、さっきまでの洛高の制服姿じゃない。

私と同じ、中学の制服姿だ。

自然と足がそちらへ向く。

そんなに距離も離れてないからすぐに話ができる距離まで近づいた。

「イラッシャイ」

近づいたら、向こうから話しかけられた。

とりあえず話は通じるようで一安心。

「ねえ、ここってどこなの・・・？」

そんな私の当然ともいえる質問に、

「ゴメンナサイ」

謝罪で返された。

いや、私が聞きたいのはそんなことではなく・・・

「ワタシ」ガワタシニナレルノハ、ココシカナカッタカラ」

「・・・どういうこと・・・?」

その“ワタシ”からの言葉に若干身構える私。

いや、あんまり意味がない様な気もするけど・・・

どっちかっていや肉体的な強さよりも精神的な強さがものを言いそ
うな世界だしね、ここ。

「ワタシモトモトイツシヨニタイケド、ワタシノタマシイノザン
リヨウジャトモノヤクニハタタナイカラ」

「そんなこと・・・!」

「ウウン、イイノ。」

ジブンノコトハジブンガヨクワカッテルカラ」

何とも言えない気分させられる。

この目の前にいる自分と同じ少女のために何かしてあげたい。
だけど、自分では何もできない。

それが分かっってしまう。

「ダカラ、 “ワタシ” トドウカシテ」

「え・・・?」

ドウカ?

どうか?

銅貨?

ああ、同化か・・・

つて、えええええ！？

「ど、どういこと・・・？」

かなり不安に駆られる単語だ。

ひょっとしたら、自分が消えてしまつかもしれないのだから。

「ベツノセカイカラウツツテキタニンゲンハ、アクマニナルデシヨ・
・・・？」

「う、うん」

それはトモから聞いたから知っている。

じゃあ、何でトモは悪魔じゃないんだろう、とその時は思ったけれど結局聞けずじまいだ。

「ダケド、ジブントオナジソンザイガイタバアイハ、アクマニハナ
ラナイノ」

目の前の“私”が語るにはそういうことらしい。

移動した先の人間が死んでいたり、ベリアル・ドール副葬処女になっていたりした場合は同化が出来ないから悪魔になってしまう。

だけど、人間としてちゃんと生きていた場合はその自分と同化するらしいのだ。

・・・まあ、トモは一旦死んで、生き返ったところで同化したらしいけどそんなのは割とどうでも良い。

「あれ、でも私は・・・？」

そう、私にしる“ワタシ”にしる、ベリアル・ドールどちらも副葬処女なのだ。

この場合、どうなるのだろうか・・・？

「タブンワタシタチハドウカデキル」

前例がないから分からないけれど、と目の前の私が話す。
おいおい、そんな賭けみたいな方法で良いんかい・・・

「モウ、コレシカナイノ・・・
オネガイ“私”」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう言われると、私も拒否出来ない。

それに、目の前のワタシの気持ちも痛いほど分かる。
あんな姿になりながらも、トモの事を探して、追いかけてきたんだ。
そこまでしてトモの事を想い続けた彼女の申し出を断るなんて私には出来ない。

「うん、いいよ」

「ゴメンネ」

「ううん・・・私も置いてけぼりにされたくなかったし・・・」

「ソツカ」

そう私が了承して、彼女が頷くと、目の前の少女が儂げに笑いながら私に吸い込まれていく。

いや、私が吸い込まれているのか、それとも・・・
だけど・・・

脳裏に過るのは様々な記憶と思い出。
色褪せて思い出せなくなっているものもあれば、鮮明に覚えているものもある。

そっか、やっぱり“ワタシ”は“私”だったんだ・・・

S i d e : M i s a o M i n a k a m i E N D

?
?
?
?

操緒が二人とも消えてすぐ、戸惑う僕と奏を余所にその変化は現れた。

「「え!?!」」

僕たちの目の前で置き去りにされた？ 鐵の影の色が変わる。
アスファルトに移っていたただの暗い影が、暗い昏い虚無の闇の色へと。

そして、それは僕の足元で伸びていた影も同じだった。
同じように変化して、更に動き出す。

? 鐵の影が僕の方へと伸び、僕の影が? 鐵の方へと伸びる。
そうして、

その影同士が繋がった。

その瞬間、？鐵は自身の影の中へと沈んでいく。役目を終え、昏い世界のそこへと沈んでいく。

『お疲れさま……？鐵』

そんな黒騎士の姿を、いつの間にか戻ってきていた操緒が見届ける。

「操緒……？」

「操緒さん……？」

戻ってきた操緒はどこか今までの操緒とは纏っている空気が違っていた。

幼さがかなりの部分を占めていた以前の操緒ではなく、どちらかと言えば僕たちと以前の世界で共に戦ってきた操緒のような……そして、何より、

『ただいま、トモ』

今の操緒はほとんど透けておらず、誰からも見える姿になっていた。

25回 ミナカミミサオ（後書き）

多分、かなり読みにくかったんじゃないかと思います。

改めて、漢字の偉大さを思い知りました。

26回 選択(前書き)

えー、今回短めです。

- ・ 内容が内容ですので、色々付け加えると無粋かなーと思ったので・

26回 選択

『……トモ……』

私ね、トモのことが……』

?
?
?
?

操緒と黒鐵の帰還から数時間後、僕たち三人は一先ず嵩月家に集合していた。

あの後、とりあえず橘高道場に向かうことになったのだけれど、

『おい、夏目』

『はい……?』

どうかしましたか、八條さん?』

『お前……何かあったのか……?』

『な、なんのことですか……?』

『いや……普段からお前の後ろに浮かんでたヘリアル・ドール副葬処女の姿が見えないからな……』

『……それなんですけど……』

『いや、言いたくないなら言わなくても良い。
まあ、気が向いたら教えてくれや』

『は、はあ』

上記のような会話が僕と八條さんの間にあった訳だ。

というのも、何故か操緒の姿が以前の世界の様に誰にでも見えるようになってしまったから、一先ず混乱が起きないよう、姿を消してもらっていたのだ。

で、それが八條さんには逆に不自然だったようなのだ。

・・・この時ばかりは、見える人？が八條さんで良かったと思った。
塔貴也さんとかだったら、眼も当てられないことになってそうだし・

・・・
だけど、おかげで橋高道場ではこれからずっと姿を消しているという手段をとることは出来なくなってしまった。

とはいえ、あそこはあまり問題ではない。

今日は僕たちも十分に状況が整理できていなかったから、混乱を避けるために操緒に消えてもらっていた。

いわば、僕たちの都合だけだ。

実際、橋高道場に通っている人たちはほぼ全員が何らかの形で裏に関わっているのだから操緒が見えてもあまり問題にはならないのだ。けど、学校や家ではそうも言ってられない。

学校では、勿論姿を見せる訳にはいかないだろう。

高校の時に操緒が受け入れられたのは、洛高だったからであり、他の一般の　　こういって洛高が一般向けではない言い方だが、事実そうなのだから仕方がない　　高校ではまず受け入れられていないと思う。

それに、家でのことも問題だ。

青月組では、なにを今更という話だけれど、操緒が普段から僕と一緒にいるということも忘れてもらっては困る。

僕と操緒が帰るのは夏目家なのだ。

で、改めてそれらの当面の問題について今日中に話し合ってしまったおもうと思ったのだが……

『ジー……』

「な、なんだよ……」

『いやー、改めて考えてみると、前の世界のトモとは全然違う様な・

……ほんとにトモ……?』

「お前、同化して凄くややこしいことになってないか……?」

コクコク

僕の言葉に同意しているのか、奏も頭を縦に振っている。

改めて操緒に話を聞いてみたのだけれど、非常に面倒なことになっていた。

何でも僕たちの前から消えていた間に、以前の世界の操緒とこの世界の操緒が同化してしまっただけならいいのだ。

まあ、僕も奏もそんな感じだからその事に関しては特に問題は無い。

ただ他にも問題はあって、

『うーん……確かに、変な気分なんだよね。』

“こっちの”世界の私がメインだから確かに意識は“私”なんだけど、“以前の”世界の記憶もあるから“ワタシ”でもある訳で・

「あー、こんがらがって来たー!!」

「……でも、どっちも操緒さん、ですよね？」

「……確かにそうなんだけど……」

なんて言うか……“私”の中にいきなり未来の情報とかが入ってきたからどうすりゃいいのやら……」

それは、こつちの世界の操緒に以前の世界の操緒の記憶が流れ込んでしまったということ。

いや、問題というほどの問題ではないとは思うけど……

僕たちを追ってきた操緒は？ 鐵を動かし続けた事により、限界ギリギリまで魂が減っていた。

つまりは、感情がほとんど消え去っていたのだ。

それが原因なのか、ベリアル・ドール副葬処女同士が同化したからなのか分からないけれど、同化して出来上がった？ 新・操緒はこつちの世界の操緒がメインになっているらしい。

さらに、以前の世界の操緒が感情をすり減らしていたため、未来の出来事に対しての以前の操緒の感情はほとんど消え去ってしまい、新・操緒の中に残っているのは以前の操緒が覚えている範囲での物事の記録だけになっている。

だから、今の操緒の状態は非常に不安定なのだ。

……まあ、暫く時間がたてば整理もつくと思うから特に問題がある訳ではないだろう。

「けどまあ、おかしなことにはならなくて良かったよ」

ベリアル・ドール副葬処女同士の同化なんて、それこそ前例がないから何が起きるか分かったもんじゃないんだから。

下手すりゃ二人揃って消滅、なんてことになっていたかもしれない。

『十分おかしいことになってますけどー』

ジトー、と僕の方を舐めあげるように睨んでくる操緒。

「……………」

— 先ずだんまりを決め込んでみる。

『……………』

「……………」

『……………』

2分経過

「……………」と、そんなことより

『あからさまなものかどうかと思う』

「ふふふ」

結局知らぬ間に始まった僕と操緒の我慢比べは、僕が先に話題を変えると、という行動で僕の負けになった。

そんな僕ら二人を見て笑みをこぼす奏。

以前の世界のようにであり、どこか恥ずかしい。

それでどうこうなる、という訳でもないから特に問題ないけれど…

「そんなことより、これからどうするんだよ。」

スタビライザが原因でこうなってるんだろっけど……」

『……まあ、中学では姿は消してるつもりでいるけど……』

「それなら、別に問題ないんじゃない？」

「いや、僕が言ってるのはそこじゃなくて、橋高道場とか家でのこととかだよ」

「あ……」

橋高道場内なら問題ないだろうから良いけど、

『ん……別にトモのお母様なら私の事がばれても問題ないと思っけどー』

「そう、か……？」

普段の母の様子を思い返してみると……

「……確かに……」

操緒の事を否定する姿が全然浮かんでこない。

普段から脳天気なあの母親が見知らぬ幽霊ならともかく、操緒相手にどうこうなるとは思えない。

むしろ、話し相手が出来て喜ぶことだろう。

操緒も母も。

『・・・あれ・・・？』

結局問題って特になんじや・・・？』

「・・・」

「・・・」

そうかもしれない。

一応、以前の世界で一般人に見えるようになってから過していた記録もあるから普段の生活でも多分大丈夫だろうし、橘高道場の皆さんには真実2割ぐらいの説明をすれば特に問題ないと思う。
あれー・・・？

？
？
？
？

「・・・じゃあ、時間も時間だし帰るよ。」

遅くまでお邪魔してごめんな、奏」

「い、いえ。」

智春くんも、操緒さんも、気をつけて・・・」

『うん。』

じゃあ、おやすみ。

嵩月さ・・・じゃなかった、奏ちゃん』

「おやすみ、奏」

「はい、おやすみなさい。

また明日」

一先ず時間も既に夜遅くだから、膏月組を後にする。

暗闇の中にはつきりと浮かび上がる操緒の姿は、どこか幻想的で神秘的だった。

いや、大半が不気味なものに変わるだろうけれど。

『それにしても、なんかすごく疲れたね』

「ああ、明日が休日ならよかったのにな」

卒業式の終わった後でも、終業式までは在校生には授業がある。

もう、卒業式と終業式一緒でも良いと思うんだけどなあー

『ねー、トモ』

いつも通り、フワフワと宙に浮かんでいる操緒。

そんな彼女の口から、何気なく、

「ん、なに・・・?」

『私ね、トモのことが好きだよ。』

『勿論、異性としてね』

その言葉は飛び出した。

「……………」

『こんな私だけど、付き合ってください』

それは、雰囲気にもまれて、その場の気持ちだけで答えてしまえるほど神秘的で……

いつも可愛いと思ってたけど、それ以上に暗闇の中に浮かび上がる操緒は可愛くて。

でも、

「ごめん。」

そんな彼女を前にしても、心が彼女には向かない。

勿論、嫌いではないし、好きなんだと思う。だけど、

僕も操緒のことは嫌いじゃないし、好きだよ。

だけど、付き合えない」

脳裏に過ぎるのは奏の顔。

僕のために、自身が非在化するのものとわずに戦ってくれた少女。

それを言ったら、自身が消滅するのものとわなかった操緒もそうだけど……

それでも……

『そっか……』

「うん……」

彼女をそういった、恋愛対象や結婚相手として僕は見る事が出来ない。
ハンドラー
演操者としては失格なのかもしれない。
多分、加賀篝とかが知ったら僕はあいつに思いっきり殴られるだろう。

『……………うん……………』

「……………」

普通の操緒だったら絶対に僕には見せないであろう顔。
それを今、僕は見ている。

泣きそうでも我慢して、無理矢理清々しい顔にしようと努力している顔。

『あゝあ、振られちゃったな』

トモ、奏ちゃんのこと大事に……………』

「操緒、良いんだよ。」

泣きたかったら泣けば」

操緒の事を振った僕がかける言葉じゃないだろうけど、それでも、
そんな彼女を見ているとそう言わずにはいられなかった。
最初その言葉を聞いた操緒は一瞬呆けた顔になり、そして、徐々に
顔が崩れていき。

『う、うう、うううわああああああああああああん、あ
あ、う、あ、ひっ、あああああ……………』

泣いた。

人目も憚らず。

それこそ、いつだったか、彼女が落ち込んでいる僕を慰めてくれた時のような気丈さはどこかに消え去り、泣き続けた。

一人のごく普通の少女として。

ごめん操緒

だけど、僕は必ず君を助けてみせる。

それが、君をふった僕の、最初で最後の責任だ。

26回 選択（後書き）

奇しくも、アニメの最終話と同じ回にこの話を書くことになりました。

アニメでは結局選択しきれなかった選択を選んだ智春。

さて、今後どうしてやるのか・・・

27回 濃厚と希薄（前書き）

操緒の件は色々皆さん思うところがあったようですが、訂正するつもりはないです。

はっきりさせなくても良かったんですけど、ストーリー展開上そっちの方向でいかせるつもりでしたので・・・

27回 濃厚と希薄

操緒の告白があった日の翌日。

気まずくなるかと思っただ僕と操緒の関係だけど、特別何か変化があった訳ではない。

いや、寧ろ今まで少しはあった遠慮がほとんどなくなったような気がする。

最初は無理してるんじゃないかと思っただけど、そういう訳でもなさそうだから僕も気にしないようにした。

何より、

「操緒、ちゃん・・・？」

「はい、お久しぶりです。

久沙子さん」

「あらまあ、そんな所に浮いちゃって・・・」

「・・・なんか反応違いますか・・・？」

「あらまあ、智春なんかに憑いちゃってるの・・・？」

「こんなバカ息子で大丈夫・・・？」

「どういう意味さ・・・」

「あはは・・・」

僕の母親 夏目久沙子 には、簡単に認めてもらうことができ
てよかった。

まあ、元々操緒とこの母親は仲が良いから当然かもしれない。それに、幽霊だろうと悪魔だろうと神様だろうと気にしない大雑把な性格なのも理由の一つになるだろう。

「いやー、行方不明で心配だったけど、こうして話せるんなら大丈夫ね。

・・・で、今の操緒ちゃんの状態って何なの・・・？
死んで、あんたに憑いてる幽霊？
それとも、なんか他の別の原因があるとか・・・？」

「うーん、良く分からないけど、死んでる訳じゃないみたい。生き返ることもできるらしいし」

「へー、じゃあ頑張って生き返らせてあげなさいよ！！
あんたも男なんだから」

「分かってるよ」

男云々は余計だ。

例え僕が女だろうと操緒は黒鐵から解放するさ。

「さーて、じゃあ操緒ちゃん」

『なんですか・・・？』

「今後も頑張ってこのバカ息子を弄って行ってね！！」

「おい！！」

「何だよそれ！！」

『了解しました!!』

「お前も了解するな!!」

忘れてた!!

この二人が仲が良い理由の一つに僕に対する扱いが含まれていることを。

・・・まあ、ベリアル・ドール副葬処女になっても操緒がこうやって母親と笑って過ごせてるから良いか・・・

「あ、それでもちゃんとご両親には連絡しなさいよ。

今は向こうも深夜だから、時間をちゃんと見計らってね」

『・・・うん・・・』

そういえば、結局以前の世界で操緒が両親と再会することはなかった。

あの時は、僕も操緒も洛高で色々巻き込まれていたから仕方なかったのかもしれないけれど、今回はまだ少し時間がある。

僕らがイギリスに向かうのは無理でも、電話ぐらいはいれておいた方が良さそう。

自身の“一人娘”のことを心配しない親などいないだろうし・・・

『家政婦のオバちゃんにも挨拶しといたほうが良いかな・・・』

両親の話を持ち出された操緒はやはり想うところがあるのか、どこかしおらしく見えた。

それでも、

『・・・フフ・・・』

両親と話ができることが嬉しいのか、顔は綻ばせていた。

? ? ? ?

学校も終わって一路嵩月組へ。

操緒も姿を現し、傍から見れば男一人女二人の中学生のグループだろう。

中学での操緒の扱い? だけど、とりあえず隠す方針で三人とも一致した。

洛高みたく耐性のある人間ばかりじゃないから、というのがとりあえずの理由。

杏や樋口には機会をみて話すことにした。

樋口の場合は何一つ心配していないが、杏の場合は少し不安だったりする。

勿論、彼女のことは信頼しているし、話しても大丈夫だろうという確信がある。

それでも、今の杏はごく普通の子供中学生だ。

タイミングを計って悪いということはないだろう。

「また浮いてる!?!」

『おおっ!?!』

「……やっぱり、まだ慣れません、か?」

『改めて、よろしく願いします』

一先ず社長や八枝さんたち4人に前日の出来事と、それに伴って生じた操緒の事について説明しておくことにした。

今回のことはそれだけ重要なのだ。

予想よりもおよそ2年程早く僕たちの下にアスラ・マキーナ機巧魔神が来たのだ。

つまりは、アスラクライン魔神相剋者化により大量の魔力消費による非在化の危険も高まるということ。

で、それを聞いた皆さんの反応はというと、

「ふむ」

「ははー」

「そうですね・・・」

「成程」

とりあえず考察。

娘や孫のこととか組のことを考えてるんだろうなー、というのがなんとなく分かる。

そんな風に各々が思案に耽っている中、

「一つ良いかの」

「はい、なんですか？」

社長が口を開いた。

そうして、聞かれたのは、

「アスラ・マキーナ 嬌殿は今機巧魔神を使えるんか・・・？
使える、使えないによつてかなり変わってくるんでなー」

という内容の質問。

ハンドラー 普通は演操者にする質問ではないと思うけど、僕の場合は他と経緯
がかなり違っているから特別おかしな質問ではないのだろう。
なので、

「『使えません』」

操緒と二人、揃って答える。

「そうか・・・」

因みに理由は分かるんか・・・？」

「多分、ナノマシンが注入されてないからだと思います。
こつちの世界に来てから一度もイクストラクタに触れていないの
で・・・」

「ふむ・・・なら、使えるようになったらまた教えてくれや」

「分かりました」

そんな会話を社長としながら、前日の事を思い出していた。

・
・
・
・
・

そう、操緒と一緒に前日に試したのだ。
今まで通り、

『来い、？鐵！』

と声を上げて、アスラ・マキーナ機巧魔神が呼び出せるかどうか。

なんせ、イレギュラーが多過ぎる契約方法だったから不安だったのだ。

それで黒鐵が呼び出せていたら、秋希さんの事も特に問題ではなかった。

アスラ・マキーナ彼女が機巧魔神に封印されることになるうとも白銀と合体？した？鐵であれば解放できるであろうから。
だけど、

『・・・なんにも変化しないね・・・』

『・・・ああ・・・』

僕の影に変化がある訳でもないし、操緒が消える訳でもない。
ただっ広い河川敷に僕の声が空しく吸いこまれて消えていった。

『？鐵が壊れてて呼び出せないとか・・・？』

『僕も専門家じゃないから分からないけど、そこまで大破してたわけじゃないように見えたから違うと思う』

以前呼び出せなかったのは、僕が体調不良だった時と、自己修復機能やクロエによる修理ではどうしようもない程破損していた時だ。
今回はどっちも違うと思う。

僕が体調不良という訳ではないし、アスラ・マキーナ機巧魔神もあれぐらいの損傷は

自己修復で何とかなるだろう。
よっぽど修理が必要な時だって、大体1千秒前後で何とかならずだ。

流石にその時間は過ぎていくから違はず。

『トモにも、？鐵にも問題がないんなら、契約過程に問題があるんじゃない……？』

『契約って言っても……』

イクストラクタを開けて、ナノマシンをその時に注入されて……

『ああ、ナノマシンがないんだ……！』

『おお、それだ……！』

と、一先ず原因は分かったけど……

『『ナノマシンってどうすりゃいいの……？』』

イクストラクタに触れる機会がほぼないため、僕と操緒は原因が分かって喜ぶのではなく、茫然としてしまった。

？
？
？
？

嵩月組を出て、橋高道場へ。

嵩月組の皆さんは一先ず納得してくれたようで助かった。彼らに信用してもらえないと今後の出来事がかなり不安になってしまっし……そんなことを考え、操緒の動向を奏と監視しながら街を歩く。そして、特に問題も起きず橋高道場に到着する。いや、操緒のことで少なからず街がざわついたけど、予想の範囲内だ。

「こんばんは」

『こんばんは』

「お邪魔します」

いつも通りの挨拶をしながら道場に行くと、

「あら、今日は早いの、ね……」

『ああ、夏田ちよつど良かった……』

「そうそう、聞きたいことが……」

「お、夏田……と、嵩月のお嬢さんにベリアル・ドール副葬処女のお嬢さんか……なんか、やけにはつきりしてるな」

「……こんばんは、です……」

「お、今日は嵩月んとこのも一緒か。……喧嘩するなよ氷羽子……」

「・・・お兄様が、私と嵩月さんの関係をどんなふうに見てるのか非常に気になるのですが・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いつも以上に賑やかな面々が揃っていた。

そんな面々の中に違和感が二つ。

一つは、冬琉さんの後ろで宙に浮いている秋希さんの姿。

操緒がはつきりと誰にでも見えるようになったのと入れ替わってそうなってしまう様なタイミング。

クソッ！！

間に合わなかった！！

秋希さんの姿を見て、操緒と奏が茫然となっっているのが分かる。

僕たちが色々悩んでいる間に、秋希さんが副葬処女ベリアル・ドールになってしまった。

まだ、2週間は大丈夫だと考えていた昨日の自分をぶん殴ってやりたい。

こうなったら、ホントにアニアを呼んでこないといけないかもしれない。

そんな事実の中に隠れるように、しかし堂々と存在している二つ目の違和感。

橘高冬琉

橘高秋希

? 塔貴也

八條和斉

八條美呂

鳳島蹴策

鳳島氷羽子

といった面々に紛れ込んでいる一人の人物。

シャープに整った美少年とも見える容姿。

着ている制服は少し遠い場所にある麻波中学の女生徒の物。

そのお陰で彼女が女性だと分かる。

以前の世界とも変わらぬツカ王子っぷりだ。

そんな彼女の腕には、GDの腕章が巻かれている。

気付けば、それは冬琉さんの腕にも巻かれていた。

雪原瑤

確かに、冬琉さんに剣を習っている割には道場にいないことが不思議だったけど、このタイミングで来るのか。
そう思っていると、

「初めまして。

ボクは雪原瑤。

君が夏目くんだね」

「そうですけど・・・」

「よろしく」

無駄に演技がかった調子で彼女は僕たちに挨拶してきた。

僕の後ろに浮かんでいる操緒を興味深そうに見ながら・・・

27回 濃厚と希薄（後書き）

- さて、秋希の副葬処女化のタイミングがこれでよかったのかどうか
-

28回 再決起(前書き)

今週はレポートが大量にあるので、来週書けるかどうか分かりません。

そのため1週間遅くなるかもしれませんがご了承ください。

28回 再決起

「秋希さん・・・今日だったんですか・・・」

「ああ。」

お前に言えば必ず邪魔してくるだろうと思ったから言わなかった。済まなかった、とは言わんぞ」

橘高道場に浮いている秋希さんに話しかける。

透けている彼女の姿を見ていると絶望感に満たされそうになるが、

『・・・トモ、まだ秋希さんが消えた訳じゃないんだから・・・諦めちゃだめだよ』

「操緒・・・」

僕の後ろに浮いている幼馴染が励ましてくれる。

そうだな

限りなく難しいけれど、絶対に出来ない訳じゃないんだ。

それならやれることをやっていこう。

幸いにも、ベリアル・ドール副葬処女になったばかりなのならば今すぐに消えるということはないだろう。

僕たちが関わったせいでどれぐらい未来が変わってしまっているのかは分からないが、僕の高校入学時には？鐵が手元に届いていたことから、長くて1年程度が期限だろう。

下手すれば、もっと短いかもしれない。

そうすると、今日にでも行動を始めた方が良さだろう。

「ありがとな、操緒」

『うっん、私もあんな結末（未来）はごめんだしね』

僕一人だったら、この事で諦めてしまっていたかもしれない。
改めて、操緒が戻ってきてくれて良かったと思う。

『私が消える……？』

結末（未来）……？

おい、夏目どういふことか説明を……』

「ああ、すみません。

ちょっと塔貴也さんに話があるので……操緒」

『アイアイサ』。

さあ、秋希さんベリアル・ドール副葬処女同士、ちょっと変わったガールズトーク
でもしましょうか』

『お、おい……』

危ない危ない。

今の秋希さんにだったら知ってもらった方が良さのかもしれないけど、これ以上おかしなことになってほしくない。

それなりに慎重に、尚且つ大胆に今後は進めていかないといけないだろう。

何が原因で秋希さんが消えてしまつか分からないから……

因みに今僕は休憩時間。

さつきまで冬琉さんや八條さんとやり合っていた。

流石に、普段から真剣を使ってやり合っている訳ではないので、切傷などがある訳ではない。

あっても、打ち身だとかその辺だ。

動けないわけじゃない。

これが真剣を使ってやることになるとかかなり危なっかしい。

この時ばかりは、相手は冬琉さんや八條さんなどではない。

その時によって変わるが、塔貴也さんの造った人間大の殺人人形や

機巧偶人ガジェットであったり、八條さんが自身の能力を駆使して創り上げた

影人形や魔精霊サブ・ジンだったりだ。

（“記憶”の問題もあるので、ほとんど塔貴也さんの作品だ）

これだったら、一先ず人を傷つける心配はない。

とまあ、そんなことはともかく・・・

「塔貴也さん」

「うん・・・？」

ああ、夏目くんか・・・どうしたんだい・・・？」

秋希さんを解放するための手段に近づくための一歩を踏み出そう。

これで何かが変わるかもしれないし、何も変わらないかもしれない。ただ、

「アニア・フォルチュナに連絡を取ることはできますか・・・？」

彼女がいるだけでもかなり違うだろう。

僕たちと共にこの世界に跳ばされてきたであろう運喰らい（ラック・イーター）の少女。

災厄の王フォルチュナ辺境伯の末姫。

アスラ・マキーナ
機巧魔神の専門家である天才少女。

アニア・フォルチュナ・ソメシエル・ミク・クラウゼンブルヒ

ベリアルドール・スブリッタ
副葬処女分離機の製造方法を知っているであろう少女だ。

・
・
・
・
・

「アニア・フォルチュナに・・・？」

「はい」

僕の言葉を聞いた塔貴也さんはかなり呆気にとられたようだった。僕がこつちの世界でアニアの事を聞いたのは部長からだから、僕がアニアのことを知っているのは特におかしいわけではないと思うけど・・・

「なんだって彼女に・・・ああ、そういうことか」

疑問そうだった塔貴也さんの顔も操緒の姿を視界に捉えたことで得心がいったようで納得した顔になった。いや、操緒の隣に浮かんでいる自身の恋人の姿を幻視しているのかもしれない。

「ええ、アスラ・マキーナ機巧魔神の専門家である彼女に聞けば何か分かるんじゃないかと・・・」

今言ったのは本当の事も含まれているし、嘘のことも含まれている。

本当のことは、ベリアル・ドール副葬処女の解放手段について彼女が少なくとも塔貴也さんよりは知っているであろうということ。
嘘は操緒がああなった原因を僕が知りたい風に装っているということ。

実際はスタビライザによるものだと知っているわけだし・・・

「・・・うん、ちょうどいいか・・・」

「・・・どういうことですか？」

どちらの意味でさっきの言葉を取ったのかは知らないが、そんな僕の様子を見た塔貴也さんは決意したような表情でそう言った。

「僕も以前から彼女と連絡は取り合っていたんだ」

「・・・へ・・・!？」

そんなこと今まで一度も・・・

「まあ、特に教える必要もないと思ってたから言わなかったんだけど・・・」

大体僕が中学に入学したところに彼女の方から連絡があつてね。

それ以来メールやオンラインゲームなんかではよく話してるね」

「そうですか・・・」

・・・成程・・・

確かにその可能性は考えてなかった。

アニアが僕らと同じように戻ってきたのなら、何らかの手段で未来を変えようとするだろう。

彼女の場合は姉のクルステイナさんのことだと思ってた。

だけど、僕が橘高道場に通っているように、奏が僕たちの中学に入学してきたように、アニアが塔貴也さんと連絡を取るのには全くおかしくない。

むしろ、当然だと思う。

「それで、秋希のことがあったから一度直接彼女と話し合いたかったんだ。

流石にメールやオンラインゲームで黒科學の話を経々と出来る訳もないし・・・」

「じゃあ・・・」

「ああ、この間彼女が『近々来日したい』って話してたと言っただろ。具体的な日時は決まってるけど、夏までには向こうも来てくれると思うよ。」

まあ、詳しい日程が分かったら教えてくれるらしいから・・・それでいいかい？」

「はい。」

これ以上ないくらい大丈夫です。

ありがとうございます」

それだけ言っただけで、塔貴也さんとの会話を終え再び練習に戻る。

今度は春棟と春棟・闇を手に取り、鳳島蹴策の作りだした氷人形を相手に模擬戦を行う。

・・・そうか、アニアが来てくれるのか・・・

僕たちだけじゃどれだけ考えても堂々巡りだった議論にこれで終止

符が打てるかもしれない。

まだ、彼女に直接会って確かめた訳じゃないけど、今のアニアはリアルに『体は子供頭脳は大人』のどっかの名探偵？みたいな状況のはずだ。

それに、1巡目でアスラ・マキナ機巧魔神を開発した悪魔も彼女だ。

どんな専門家が来るよりも頼りになるだろう。

そう思うと、

ビュー！！

両手に持った黒刀にも勢いがつき、右手に持った春棟が氷人形の持っている薙刀を切り落とす。

「おお！！

危ない危ない、いきなり強くなったな・・・何かあったのか・・・？」

「・・・別に・・・

それより気を抜くなよ、その瞬間にその首とってやるから」

「は！！

やれるもんならやってみろ！！」

氷人形の後ろで人形を操っている蹴策が僕の剣筋がいきなり強くなったことに驚きながらも、その後の言葉の応酬にのせられたのか熱血バトル漫画のようなセリフを僕に言ってくる。

まあ、挑発したのは僕だけ・・・

パキパキ・・・

空気中の水分を凍らせて薙刀を修復していく氷人形。実戦だつたらそんな最中に遠慮なく攻撃を加えるけれどこれは模擬戦だ。

万全な相手の状態でこそ学べることがある。

だから、修復が終わるのを待つ。

そして、

パキッ！！

終わった瞬間に溜めた力を解放する！！

実際、実力は氷人形の方が若干上だろう。

今まで秋希さんや冬琉さん、それに八條さんたちのような圧倒的な上位の実力者たちとばかりやり合ってきたから、こうして実力がそれなりに拮抗している相手と闘うのは今までにないぐらい新鮮だ。

氷人形の振り下ろしてくる薙刀を左手に持った黒刀で捌きながら、時々右手で攻撃を加えながら微妙に立ち位置をずらしていく。

上位の人から学ぶことは勿論言うまでもなく多い。

だけど、実力が似通っている相手だからこそ学べることもある。

・・・純粹に自身の剣技がどこまで役立つか試せるということもあるけれど・・・

そうしてずらしていった立ち位置が逆転し、僕が立っていた位置に氷人形が立った。

それが分かった瞬間、

「クッ！！」

今までにない猛攻を仕掛ける。

タイミングを見計らった理由の一つ目は、僕が氷人形と蹴策の間に立つことにより蹴策の操作が不安定になること。

二つ目は、純粹に立ち位置の問題。

僕が最初にいた時は後が壁だった。

だけど、今は逆。

氷人形の後ろが壁だ。

僕の攻撃に押され、ジリジリと氷人形が後ろに下がっていく。そうして、

コッ

氷人形の踵が壁に当たった。

それが僕の耳に届いた瞬間、

右手に持っている黒刀で氷人形の薙刀を一気に押さえつける。

必死に元の位置に戻そうとしてくるけれど、それをそのまま押し留める。

そして、そのまま、左手に持っている黒刀を、

ガンッ！！

氷人形の胸に刺す。

そして氷人形は、胸に刀が刺さったというそれ自体が合図のように碎けて消え去った。

? ? ? ?

その日の帰り道

「はー、今回は俺の負けか・・・」

「まあ、夏目も毎日俺や秋希たちに扱かれてたんだ。あれぐらい勝てるようになってるさ」

「いえ、今回は立ち位置が良かっただけですよ。広い場所でやったら多分負けてます」

一緒に帰っているのは僕と操緒と奏に加え、八條と鳳島の両兄妹と雪原さん。

「それにしても、ずいぶんと早い成長の様ですわね・・・
僅か一年でお兄様の氷人形に勝てるようになるなんて」

「夏目くんも頑張ってます、から・・・」

僕らがいる今の光景は、以前の世界では考えられなかった光景だ。
八條兄妹は別としても、

仲の良い鳳島兄妹。

敵対関係にあった奏と氷羽子さんが親しげに会話をしている。

勿論、今でも嵩月家と鳳島家は仲が悪い。

だけど、その跡継ぎである娘二人は非常に仲が良い。

奏の方は、僕らに敵対している相手じゃない限り基本嫌悪感を示さない。

氷羽子さんの方は、奏が自身の兄に手を出す事がないと分かってからは年の同じ雌型悪魔の友人として付き合っているようだった。因みに、鳳島兄妹のことはややこしいので名前で呼ぶよう二人に言われた。

蹴策に至っては敬語じゃなくてもいいとも言ってきているから、存分に呼び捨てにしている。

「それにしても、あの道場は全員のレベルがかなりのものだからね。知らない間に実力が引き伸ばされてたんじゃないかい……？」

『トモに限ってそれはないと思うけどなー』

「……私もそう思います……」

割と辛辣な言葉を使ってくる美呂ちゃん。

この子はかなりの毒舌家だったりする。

今はかなり慣れたけど、初めの頃は大量に心が刺さったものだ。そんな美呂ちゃんも兄の和斉さんと話している時は雰囲気を一転させて、かなり甘えた調子になっている。

やっぱり兄という存在は、そんな頼れる存在なんだろうか……？
僕の兄と言える存在はあんな奴だったから何とも言えないけれど……

そんなごく普通の　少し物騒な　どこにでもある光景。

何が切掛けでこの光景が崩れたのかは分からないけれど、こんな何でもない光景を護っていきたいと思う。
それは皆同じだったのだろう。

29回 襲撃と再会（前書き）

遅くなってすみませんでした。

レポートやら試験やら重なりまくっていたせいで遅くなってしまいました。

まだ、終わってませんけど時間が出来たので一気に書き上げました。その為、かなり荒い仕上がりの気がします。

今後はまた週一で上げられるはずですので、よろしくお願いします。

29回 襲撃と再会

「 暴れ回れ、尖晶^{スピネル}！！」

目の前にいる男がそう言い放つと、男の影の色が変わる。

夜の闇の中ではつきりとは分からなかった影が、闇の中でも分かるほどの昏い闇の色、いや、見えているのに何も見えないほど完全な漆黒の虚無の色へと。

その漆黒の虚無を引き裂きながら、一對の腕が現れる。

機械仕掛けの巨大な腕。

現れた腕を使い、自身の体を影の中から浮かび上がらせる。

「^{アスラ・マキーナ}機巧魔神！？」

前触れもなく突然現れた襲撃者に浮き足出つ僕たち。

そんな僕らを見ながら、

「ひい、ふう、みい・・・悪魔が5人に演操者^{ハンドラー}が二人か・・・

はあ、回ってきた情報よりも面倒そうだな」

どこか場違いな溜息を洩らす襲撃者。

そんな男の背後に屹立する機巧魔神はピクリとも動かない。^{アスラ・マキーナ}

暗闇の中で圧倒的な威圧感を放つそれは、全体的な色調はくすんだ青で統一され、所々が赤で染め上げられている。

フォルムは黒鐵や鋼とは違い、細身？だ。

形状だけなら亜鉛華に近いかもしれない。

だけど、亜鉛華が全体的に角の少ない丸い形状であるのとは違い、^{アスラ・マキーナ}この機巧魔神は鋭角が多用されている。

そんな形も重なってか、今迄見てきたどんな機巧魔神よりも細長く^{アスラ・マキーナ}

見える。

だからと言って、油断出来る相手ではない。

「・・・情報・・・？」

襲撃者の口から洩れた言葉に反応する八條さん。

既に手には自身の得物である槍が握られており、更に影を槍に纏わせて強化している。

完全に戦闘態勢だ。

美呂ちゃんも自身の周囲にある影を動かしながら様子を伺っている。

「ま、いつか」

そんな八條さんの反応など聞こえなかったのか、自身で勝手に納得したようだった。

そして、再び僕らに、いや、奏たち雌型悪魔に視線を向け、

「さあて、補充補充！！」

そんな意味が良く分からない言葉と共に嗤いながら襲いかかってきた。

身構える僕たち。

八條兄妹はさっきの状態を発展させ、鳳島兄妹はそれぞれ氷の薙刀を構えている。

奏は擬態を解き、懐刀を構える。

僕も、春棟と春棟・闇を鞘から抜き構える。

八條さんがやや疑惑の籠った視線を向けてきたけど、とりあえず今は答えている暇がない。

既に、機械仕掛けの悪魔は僕らに向かってきてきているのだから。

僕らと襲撃者がすぐに戦闘に入ることになると当然の様に認識して

いた。
だけど、向かってきている機械仕掛けの悪魔と僕たちの間に一人の人物が割って入ることになった。

「ふう、GDに就任して最初の仕事がこんなことだなんてね」

その人物とは、学生連盟所属のGD、ハンドラー演操者で、こっちの世界ではつい3時間程前に会ったばかりの人物。

雪原瑤

「吹き荒べ、カルセドニ玻璃珠!!!」

彼女がそう叫ぶと彼女の影の色も襲撃者と同じように変化する。

暗い、昏い闇の色、漆黒の完全な虚無の色へと。

そこから現れたのは純白の巨大な腕。

浮かび上がってきた魔神の腕は、相手の機巧魔神の腕を受け止める。

「ちっ、GDか!!!」

襲撃者は想定外の相手に驚きながらも、自身の魔神を動かし続ける。未だ完全には姿を現していない相手を潰してしまおうと考えたのだろつ。

アシラ・マキーナ尖晶と呼ばれた機巧魔神が純白の腕を支えとして両足を振り上げる。だが、

「させるかよ!!!」

蹴策の放った氷の妖鳥の形をしたサノバ・ジン魔精霊が尖晶スヒネルに向かっていく。

「ちっ！！」

それに気付いたのだろう、今にも腕を蹴り壊そうとしていた足を下げ、後ろに引いて魔精霊サブバ・ジンをやり過ぎす襲撃者。

その隙に、影から完全に姿を現す雪原さんの機巧魔神アスラ・マキーナ。

その機体は純白の甲冑に身を包み、顔を仮面で覆っていた。

これで剣でも提げていたら主人に仕える騎士に見えていたことだろう。

「・・・玻璃珠・・・」
カルセドニ

そうか、最近GDに新しく就任したっていう　右手デストラ　はお前だったのか・・・」

「ふうん、知ってたのか」

「そりゃあな・・・」

瑶さんと襲撃者が会話をしているけれど、僕の頭の中が混乱しまくっているせいで、あまり頭に入ってこなかった。

白銀じゃなくて玻璃珠カルセドニ！？

知らない機体だけど、そんなことが問題なんじゃない。

どうして、白銀じゃないんだ！？

しかも、その機体の演操者ハンドラーが　右手デストラ　なんて呼ばれてるし！！

ひょっとして、白銀も？鐵もこの世界には存在していなかったとか？

いや、でも、それならどうして？鐵・改が僕の影の中にいる。

戦闘中にもかかわらず僕の頭は現実とは違う方向に向いてしまっていた。

それでも、構えを解いていなかったのは、自分でも偉いと思うけ

ど・・・

「けど、まあ、有名ってことはそれだけ対処法も知られてるんだよ
スピネル
尖晶！！」

襲撃者の声を合図に青い魔神から濃密な魔力が漏れだす。

何かやらかそうとしているのが良く分かる。

当然、黙って見ているわけにもいかない。

今までは、アスラ・マキーナ機巧魔神同士の取っ組み合いであり、襲撃者も割とアスラ・マキーナ機巧魔神の近くにいるため八條さんに指示されて巻き込まれないようにしていたが、そういう訳にもいかなかった。

「俺たちはハンドラー演操者を抑える。」

美呂、蹴策、お前たちはカルセドニ玻璃珠の支援を頼む」

「分かりました」

「おう」

すぐに八條さんが指示を出し、それに従って動き出す僕たち。

雪原さんにも聞こえていたのか、相手の魔神を出来るだけ襲撃者から引き離そうとしている。

が、相手もそうそうこちらの思惑に乗ってくれるわけではない。

細身の体系には似合わないほどどっしりと構え、一歩も前に進もうとしない。

そんな魔神に向けて、

「くらえ！！」

蹴策が能力を使って攻撃をかける。

蹴策は氷の牢獄を相手の機巧魔神アスラ・マキーナの頭上に作り出し、相手を牢内に捉えようとす。

当然相手は避けるために玻璃珠カルセドニから離れ、引こうとするが、

「逃がしません!!」

それを美呂ちゃんが押し留める。

周囲の影を束ね集めた縄を幾重にも魔神の足に絡みつけていく。予想外の方向からの奇襲によるけ、その場に留められる魔神。

漏れ出していた濃密な魔力を足元に向け、突破しようと試みるが、

ガンツ!!

それより先に牢獄内へと収監される。

そしてそこに、

「はっ!!」

玻璃珠カルセドニから放たれたのであろう、風の槍が牢の隙間を縫って襲いかかる。

「くそつ!!」

スビネル
尖晶!!」

行動を制限された魔神は必死に脱獄しようとしているが、そう簡単には抜け出せなさそうだ。

なんせ、壊れた端から修復されていくんだから。

未だに相手が機巧魔神アスラ・マキーナの能力を使ってこないのが疑問だけれど、使われるよりも前に制圧してしまった方がいい。

単純な腕力?だけでも、氷の牢獄は壊されそうだし。

まあ、魔神が脱出するよりも前に、

「チエックメイト、だ」

八條さんが襲撃者を制圧する方が早かった。
槍の穂先を相手の首元に突き付ける。

「アスラ・マキーナ機巧魔神を戻してもらおうか」

相手に突き付けた言葉は当然の要求で、断ればどうなるかは相手にも分かつているだろう。

青い魔神も動きを止め、牢獄内で立ち尽くしている。

「……………」

槍を突き付けられている男は黙ったまま、俯いている。
観念したのか、それとも……………

「おい、さつさとしろ!!」

槍を突き付けた状態なのに、いつまで経っても魔神を影に戻そうとしない襲撃者に焦れてきたのだろう、槍の穂先が相手の顎を押し上げ、俯いていた顔を無理矢理引き上げる。
が、

「……………てめえ……………!!」

引き上げた相手の顔を見て、八條さんは怒りを顕わにした。
悔しくて俯いているかと思った相手は、そんな予想を裏切り、嗤っていたのだ。

「あー、ようやく来た」

そんな相手の表情を見て槍を振り上げた八條さんを余所に、その男はそんな言葉を呟いた。

その言葉を疑問に思った瞬間、

ゴウツ！！

一筋の翠色の何かが八條さんに迫ってきた。

「チツ！！」

振り上げていた体勢を止め、すぐに後ろにいた僕らの場所まで下がる。

だが、迫っていた翠色の物体はそのまま進み、襲撃者を掻っ攫った。翠色の物体はそのまま宙に進み、遠ざかって行った。

「逃げられたね」

気付けば牢獄内にいたはずの青い魔神も消え去り、雪原さんも純白の魔神を影の中に戻していた。

「みたいですわね」

それに返事を返しながらも、誰も警戒を緩めはしない。唐突に起きた戦闘がこれで片付いたとは考え難い。

一先ずそれぞれの得物は閉まっているが、いつでも展開できる状態だ。

『それにしても、何が目的だったんだらうね……?』

「なんか、『補充補充』って言うってたけどな」

結局相手が襲ってきた理由が良く分からない。

判断できるだけの手掛かりが少なすぎる。

手掛かりは、相手が洩らしていた『補充』という単語と、その前に向いていた雌型悪魔に向けた視線。

もしくは、『回ってきた』と言っていた情報。

「大丈夫でしたか、お兄様……?」

「ああ、特に怪我らしい怪我はない。

お前は大丈夫だったか……?」

「はい!」

そう言えば、何だかんだで有耶無耶になってたけど……どうして雪原さんの機巧魔神が白銀じゃないんだらう……?

僕たちの世界とは違うから絶対に白銀じゃないといけないというわけではないけれど……

この分だと、冬琉さんの機巧魔神も?アスラ・マキナ鐵じゃないかもしれない。

「あの……だいじょうぶ……?」

「あ、ああ。

僕は大丈夫だよ。

嵩月は……?」

「私も、平気、です」

まあ、今度アニアに会った時にでも聞いて見よう。
あいつなら何か知ってそうだしな。

自分の中で燻っている疑問に一先ずの区切りをつけ、歩き始めた皆の後を追う。

・・・はあ、すごく内容の濃い1週間だったな・・・

そんな風にこの一週間を思い出しながら、僕は家に帰りついた。

?
?
?
?

そして、春休みに入って早いもので1週間。

僕と奏と操緒、それに塔貴也さんは空港にいた。

来日するアニアを迎えに来たのだ。

一応表向きは、塔貴也さんが科学狂会からの指示で彼女の世話をすることになっている。

で、僕らはそんな彼に頼まれた護衛役ということだ。

何故なら、やたらと黒科学の技術をあいつが発展させまくったせいで、アニア自身かなりの重要人物になってしまったのだ。
だから、護衛なんかが必要になってしまっている。

向こうの家からも一人付いて来るらしいけれど・・・

「はあ・・・」

空港の到着ロビーにおいてあるベンチに腰を下ろし、溜息をつく。

今は塔貴也さんはトイレに行っている。

アニアに会えるのは全体的に見ればプラスなんだろうけれど、僕個人としてはマイナス面が大きい。

出来るだけ運気を吸われないようにしなければいけない。

『・・・なんか、かなり憂鬱そうだけど・・・どうしたの・・・？』

「いや、何でもないよ。

仕方ない。

うん、仕方ないんだ」

「『？』」

二人とも僕の態度が不思議なのだろう。

首を捻っている。

とまあ、そんな風に時間を潰していた僕たちの前に一人の少女

幼女？ が現れた。

相変わらず無駄に豪勢な衣装だ。

クラシカルなドレスを身に纏い、いかにも貴族のご令嬢といった雰囲気だ。

最後に会った時よりもかなり背は低くなっているが、その銀色に近い金髪は相変わらずの長さだ。

思っていたよりも幼い容姿に驚きつつも、ベンチから立ち上がって声をかける。

「久しぶり、でいいのかな？ニア・・・」

「ああ、8年ぶりか、智春、奏。

それに・・・操緒」

『うん、久しぶり？ニアちゃん』

「ニアちゃんも、元気そうで・・・」

彼女、アニア・フォルチュナ・ソメシエル・ミク・クラウゼンブル
ヒは僕たちに声をかけてから、僕に向き直り、

「ふむ・・・ガブ」

「つて！！会っていきなりそれか！？

噛むな！！吸うな！！」

僕の腕に噛みついてきた。

ほんの少しの間ではあったけど、幾らか運気を吸われたのが分かる。

「むう・・・脂肪が減って筋肉がついているな・・・噛みにくいわ

！！」

「そんなことでキレるな・・・！！」

噛んでくる方の事情なんか噛まれる方が知ってるわけないだろうが
！！

ギャーギャー言い合いを始める僕とアニア。

「ふふ・・・」

『はあ、子供・・・』

そんな僕らを見ながら、奏は嬉しそうに笑い、操緒は呆れの溜息を

ついていた。

何にせよ、これで揃ったのだ。

神デウスに襲われ、過去という名の別世界に逃げ出した未来の知識を持った人物が。

さあ、二年前の扉を開こう。

秋希さんや鳳島兄妹、それにクルスティナさんたちを救うための一年を。

29回 襲撃と再会（後書き）

瑠と冬琉の機巧魔神、まあGDのデストラとシニストラの問題については次回、もしくははその次辺りで書く予定です。

オリジナルの機巧魔神とか、書ききれない気もしますがご容赦ください。

30回 天才幼女（前書き）

祝、PV：20万件、ユニーク：34000件突破。

ありがとうございます。

まさか、こんなにたくさんの方々に読んでいただけるとは・・・

感無量です！！

今後ともどうぞよろしくお願いします。

P.S

タイトルは少女でもよかったです、彼女の年齢なら幼女でもありですよ・・・？

あー、運気が凄い勢いで減ってる気がする。

明日辺り事故ったらどうしよう・・・

30回 天才幼女

アニアと合流し、塔貴也さんも戻ってきたので一先ず皆で橋高・？家へと向かうことになった。

その際に、アニアの護衛の人が加わることになった。それは、

「皆さんはじめまして。

アニアお嬢様の護衛をしております、ダルア・ミドラマルスイ・クラウゼンブルヒですわ」

1巡目の世界で出会ったクラウゼンブルヒ財団の雌型悪魔。

アニアとは違い、ショートヘアの金髪で、ビシッと黒いスーツに身を包んでいる。

年齢は以前出会った彼女よりも幾らか若く20代の前半と言ったところだろうか。

・・・うん、まだオバさんじゃなくてお姉さんで十分に通じるな。あまりにも予想外な人物の登場に僕は呆気にとられてしまった。

いや、この世界にいてもおかしくはないし、クラウゼンブルヒの名前を使っていたことから何かアニアと関係あるんじゃないかとは思ってたけど・・・

ふと、アニアの方に目を向けてみると、

「ふふん」

悪戯が成功した悪ガキのような表情　いや、アニアの年齢を考えれば悪ガキそのものかもしれない　を見せていた。無駄に得意気なのがどこことなく腹が立つ。

「わざわざ、遠いところをお越しいただきすみません。
僕は？塔貴也。」

こっちの二人は、夏目智春と嵩月奏。
ベリアル・ドール
副葬処女の少女は水無神操緒です。」

「夏目です。」

よろしくお願いします」

「嵩月奏、です」

僕らが呆気にとられている間に、塔貴也さんが僕らの分も自己紹介を済ませてしまっていた。

「ハンドラー
演操者……」

そんな僕らを見たダルアさんは、僕と操緒に視線を向けると嫌悪の表情を顕わにした。

まあ、気持ちは分からないでもない。

僕だって奏の護衛に佐伯兄が就いていたら似たような表情になっているだろう。

とはいえ、僕にしても、操緒にしても、それらの感情を向けられて嬉しいとは思わない。

かといって、初めて会ったばかりの相手にいくら言った所でも変わらないだろう。

どうしたものか……

あの塔貴也さんも珍しく困惑した表情になっている。
そう思い、悩んでいた時だった。

「ああ、こいつらなら問題ないぞ、ダルア」

意外？な所から助け船が出された。

言葉を放ってきたのは、彼女にとっての護衛対象でもあるアニア。

「何故です、お嬢様・・・？」

ハンドラー
演操者とは私たち悪魔の敵であるはず。

それはいくら科学狂会から派遣されている相手であろうと、変わらないはずです」

本来の存在意義は違うけど、世間一般？の認識としてはそれで合っているのだろう。

アニアもそれは分かっているだろうに。

「お前は、紹介された面々を見ていなかったのか？

ハンドラー
この演操者と一緒に紹介されたのは誰だ？」

「一緒に・・・？」

アニアの言葉で思い出したのか、僕の隣に立っている奏に視線が向く。

そして、彼女は暫く奏に視線を向けていたのだが、

「ああ、そういうことですか・・・」

納得したのか、僕たちに対する嫌悪の視線を一先ず収めてくれた。

「そうだ。」

ハンドラー
この演操者の隣にいるのは、悪魔。

しかもかなり高位の悪魔だ。

そんなのが無警戒で隣に立っているんだ。
— 先ず信用してもいいだろう」

そうダルアさんに言ってるけど、本当は昔から僕らのことを知ってるからアニアは警戒してないのだと思う。

実際、以前初めて会った時は、隣に奏がいても警戒心丸出しだったし。

そんなことを思い出しながら、塔賣也さんに先導されて空港の出口まで歩いて向かう。

とりあえず、バスで向かうのだ。

と、僕が集団の最後尾を出口の自動ドアに向かって歩いていくと、

ガンツ！！

「グツ！！」

ドアが開かず、思いつきり顔と体をぶつけてしまった。

「ッー……」

ぶつかった部分をさすりながら再びドアに向かうが、全く開く気配がない。

「……なんですか……」

『……何やってるの？』

『トモ』

ドアをすり抜けて先に進んでいた操緒が戻ってきた。

いつまで経ってもやってこない僕を迎えに来たらしいのだが、

「なんか、ドアが開かない・・・」

『・・・へ・・・？』

僕もかなり情けないことを言っているのは分かるけど、そんな風に
あからさまに憐みの視線を向けるのはやめてほしい。
僕だって原因が全く分からないんだから。

『お、開いたよ』

「・・・」

とりあえずドアの横に立っていたのだけど、後ろからやってきた青
年がドアに近づくと普通にドアは開きその青年は外に出て行った。
何とも言えない気分になりながらも青年の後に続き、僕も外に出る。
その後は幸い何事もなく皆の所に合流できたのだけ・・・

「ふむ、思ったよりも早かったな・・・」

そんな合流した僕らに最初に言葉をかけてきたのは、奏と談笑して
いたアニアだった。

因みに、ダルアさんは塔貴也さんと会話中。

「思ったよりって・・・」

「もっと吸っておくべきだったか・・・？」

『吸う・・・？』

ああ、思い出した。

そういやさつき少しだけど運気を吸われてたっけ。
さっきの自動ドアの原因はアニア、お前か。

「まあ、安心しろ智春」

「・・・何を・・・？」

「以前よりも運気は溜まっているから、そんなに吸わなくてもすむ。
・・・多分な・・・」

「不安になる言葉をありがとう」

どっちにしろ吸われるってことだろうに・・・

まあ、奏とか冬琉さんが余計不幸になって何が起きるか分からない
よりはましただと思って納得しておこう。

そうとでも考えておかないとキツイ。

?
?
?
?

アニアとダルアさんは、橘高家に暫くの間逗留することが決まった。
? 家でも良かったのだけれど、警備装置とかがより高性能なのは橘
高家の方だったのでそうならしい。
で、現在、

「・・・ふむ、こっちの事から話しておいた方がよさそうだな」

アニアにあてがわれた部屋に僕と奏に操緒、それに現在の部屋の主であるアニアがいた。荷物の整理がある程度終わったので、全員畳の上に敷かれた座布団に座っている。

ドレス姿のアニアが座布団に座っているのはかなり違和感があるけれど、本人がさして気にしていないので特に問題はないのだろう。

「どうも、そちらの方が色々あったようだからな」

操緒の方に視線を向けながらアニアがそう言う。

そんな彼女の視線と言葉に苦笑で返事を返す操緒。

「まあ、私から話すことはあまりないが・・・

ああ、そうだ。

姉様のことはもう心配しなくていいぞ」

「『』・・・え・・・？』」

最初に彼女の口から飛び出した言葉は、重要な事であるはずなのに凄く軽い調子で放たれた。

「奏と操緒、お前たち二人まで何を呆けた顔をしている。

智春だけならまだしも・・・」

「いえ、その・・・」

『』というか、クルスティナさんって、まだ日本にも来てないはずなのになんで大丈夫なの・・・？』

奏は困惑を、操緒は疑問を口にのせ、アニアに返す。
僕はと言えば、未だに啞然としていたりする。

「なに、理由は簡単だ。

姉様には既に契約者がいる。

それだけだ」

「『』……………」

で、更に続けられた理由は、尚のこと僕らを啞然とさせた。

確かに、契約者が既にいるのなら大丈夫なのだろうが、それで良い
んだろうか……？

「まあ、私としても気に入らない相手には違いないが、姉様を大事
にしてくれている分加賀篝の奴よりはました」

そう洩らすアニアから続けられたのは、クルステイナさんをどうや
ってその方向に持っていったのかということと、自身のこれまでだ
った。

まず、クルステイナさんのことだが、アニア曰く、彼女にしるクル
ステイナさんにしる、貴族の令嬢らしく周囲の人間や悪魔からは蝶
よ華よと育てられてきたそうだ。

ついでに言えば、屋敷の外に出たこともほとんどなく、出ることが
あってもダルアさんのような護衛が何人も付いてきたらしい。

まさしく籠の中の鳥だ。

前回の世界でもそれは同じだったらしく、以前の世界でクルステイ
ナさんが初めて自由を手にしたのが洛高にやって来た時。

その際に加賀箒と出会ったのであろう。

アニアはその事から考え、屋敷の外に出たがっていたクルステイナさんを手助けして、一度独りで屋敷から外に出してあげたのだそう
だ。

その際、アニアはこっぴどく叱られたのだそうだが、本人があまり
気にしていないのでどうでも良い事だったのだらう。

それで、アニアの作戦は見事に的中した。

クルステイナさんは見事にとある人間の男性に引っ掛つたらしい。

引っ掛つたと言つと言葉が悪いかもしれないが、要は一目惚れ。

もしくは、色々あつて惹かれたのかもしれない。

何にしろ、とりあえず恋愛対象が出来た。

その後の過程はアニアも特に語らなかつたが、結果として、その男
性と結ばれ契約に至つたらしい。

つまり、クルステイナさん選ばれる相手は一種のインプリンティ
ングのようなものが原因だったのだ。

以前の世界では加賀箒。

彼も世界的に有名なロックギタリストだし、女性のファンもたくさ
んいた。

クルステイナさんが惚れるのもなんとなく納得がいく。

今回の世界の相手はどんな人物かは知らないけど、アニアの言葉を
聞いているとなんとなく想像はつく。

まあ、どっちにしろ、

「そっか・・・良かった」

一つ未来が変わった。

加賀篝が薔薇輝ロードナイトの演操者になることは回避できないかもしれないが、
一人の悪魔の命が悲劇から遠ざかった。

「……そうです、ね……」

『……うん』

奏や操緒も僕と同じように、色々と思うところがあったのだろう。
感じ入ったようにアニアの事を見つめていた。
再び独りで頑張ってきた少女のことを。

後は、アニアのこれまでだ。

クルステイナさんの事以外は、ひたすらこの世界の歴史やアスラ・マキーナ機巧魔神
の事について学んでいたらしい。

その過程で、新技術の提案だとか、新プラグインの開発をしていた
そうだ。

たまに、息抜きでオンラインゲームをしていたと言っていたが、絶
対息抜きのレベルじゃないと思う。

それで、こつちに連絡で来たのだから良いのかもしれないけど。

「まあ、私の話はこんな所だな。

次は智春、お前たちの番だ」

自分の語るべきことが終わり、卓上に置いてあったお茶を啜るアニ
ア。

ドレスに湯呑……

まあ、アニアだしな……

「ああ、了解」

今度は僕が話し始めた。

所々で奏の補足を加えながら全て。

飛行機事故の後に目覚めたことから、入学式で奏と再会したこと、その後嵩月組に連行されたことと認められたこと、橘高道場に通うようになってからのことや、悪魔の家同士の会合、それに合宿のこと、以前の世界の操緒と黒鐵の帰還のこと、秋希さんの副葬処女化ベリアル・ドールを止められなかったこと、そして、先日の演操者の襲撃事件まで、ハンドラー全て話した。

こうして改めて振り返ってみると、それなりに内容の濃い一年だった。

「そうか・・・」

僕たちのこれまでを聞いたアニアは手を口に当て、考え込むような体勢になる。

考えている途中で悪いが、

「なあ、ニア。」

スピネル尖晶の演操者が、カルセドニ玻璃珠の演操者が学生連盟のデストラ右手 って言っ

てたんだがどういうことか分かるか・・・？

アスラ・マキーナ雪原さんの機巧魔神が白銀じゃないのはこの際措いとして・・・」

つい先日感じた疑問を彼女にぶつけてみる。

本来学生連盟に所属し、GDとして活動しているのは金属の名を冠した10機の強力な機巧魔神の演操者だけであるはずだ。

それなのに、カルセドニ玻璃珠とかいう機体がGDに所属し、あまつさえデストラ右

手 という位置に納まっている。
あまりにも以前の世界と違いすぎる。
一体、どうなっているのか。

「そのことか・・・」

伏せっていた顔を上げ、僕らの方に視線を向け直すアニア。
特に考え込む様子もなく、既に答えは知っているようだった。

「まず、前提として知っておいてほしいのが・・・この世界に黒
鐵と白銀は本来であれば存在しない」

『どうということ・・・？』

白銀はともかく、黒鐵なら呼びだせないけどトモの影の中にいる
よ・・・？』

操緒の疑問は尤もだ。

確かに存在しているのに、存在しないというのはいくらなんでもお
かしいんじゃないだろうか・・・？

「話は最後まで聞け。

それに、私は“本来”と言ったのだ。

私自身、先程まで納得がいかなかったが智春の話聞いて納得が
いった」

そこでまた、ズツ、とお茶を啜るアニア。

いいからサツサと続きを話せ。

僕の視線に何か感じ取ったのか、単に僕が黒鐵の演操者だからか、
とにかく僕に視線を向けて続きを話し始めるアニア。

「いいか、今お前の影の中にいる黒鐵はこの世界の機巧魔神アスラ・マキーナどもの間では例外中の例外だ。

黒鐵と白銀、この二機はイクストラクタこそ存在しているもの、こちらの世界では一度も召還されていない」

「・・・契約が出来ないってことか・・・？」

「ああ、そうだ。

過去にイクストラクタを使い、ベリアル・ドール副葬処女を奉げた連中もいたそうだが、一生をただの“幽霊憑き”として過ごしたらしい。

その事から推測するに、この世界が始まった時点では黒鐵も白銀も“うずしお”に帰還していなかったのだろう。

・・・いや、白銀は初めから使えなかったのかもしれないが・・・まあ、何にせよ、その状態が世界の始まりから今迄続いてきた。

だが、以前の世界の操緒がお前を見つけて、こつちの世界の操緒と同化したことで黒鐵は非在化もせず、お前の影を通して“うずしお”に帰還できた。

つまりは、ようやく黒鐵もこの世界に追いついたということさ」

・・・えっと、アニアの言ったことを時系列で纏めると、

1：世界の狭間で黒鐵・改と操緒が取り残される

2：この世界が始まる

3：僕や奏、それにアニアがこの世界に辿り着く

4：以前の世界の操緒と黒鐵・改がこの世界に辿り着く

5：黒鐵・改が“うずしお”に帰還する

と言った感じだろうか。

まあ、矛盾はしていない。

“うずしお”に帰っていないのであれば召還出来る訳もないからだ。それ故に、この世界では存在しないもの　消滅した機体　として扱われても不思議ではない。

だけど、それが学生連盟の　^{デストラ}右手　とかの問題にどう関わってくるのかさっぱりだ。

そう思い、納得しながら頭を傾げるといっておかしな行動を取っていると、その僕の行動を見て察してくれたのかアニアが続きを話し始めた。

「それで、知っているとは思うがこの世界は2巡目の世界の様に進んでいる」

「ああ、それはまあ・・・」

「おかしいとは思わないか・・・？」

2巡目の次の世界、と来れば2巡目で塔貴也が跳ぼうとしていた3巡目であるはずだ。

だが、この世界は歴史がほぼ間違いなく2巡目として経過している」

それは・・・確かに。

部長が創った3巡目であれば、悪魔や^{アストラ・マキナー}機巧魔神が存在しているわけがないし、それらが存在していたとしても秋希さんが^{ベリアル・ドール}副葬処女になる訳もない。

では、この世界は一体・・・？

気付けば、僕と奏、それに操緒の顔から冷や汗が垂れている。知らない間に、この世界の真実に気付いてしまったかのような。

「私も推測だったが、さっきのお前たちの話を聞いてそれが正しいと確信した。

この世界は

リセットされた2巡目、もしくはあの1巡目から分岐した2巡目だ。

そう考えれば、全て説明ができる」

アニアから続けて語られるこの世界の歴史観に基づいた、真相。

悪魔などの存在が変わらずにあるものの、黒鐵や白銀などの抜けたパーツも存在すると言う本来の2巡目ではありえない世界。

だが、確かにアニアの理論であれば、学生連盟の問題も瑤さんの問題も納得がいく。

この世界が2巡目としてやり直している以上、歴史も同じように動いていく。

であれば、学生連盟に デストラ 右手 や シニストラ 左手 は存在していなければならぬ。

だが、肝心要の黒鐵も白銀も存在しない。

それ故の カルセドニー 玻璃珠、もしくはもう一体の アスラ・マキナ 機巧魔神ということか。

「世界の修正力というのか、歴史の強制力というべきなのか分からないが、カルセドニー 玻璃珠の演操者が デストラ 右手 と呼ばれているのはその辺りが理由だろう。

何故金属の名を冠していないあの機体が選ばれたのかまでは私に

は分からないがな・・・」

そこまで喋ってまた一囁り。

だけど、おかげでなんとなくの理由は分かった。

後は、冬琉さんの機巧魔神アスラ・マキナを確認して話を聞けばこの問題は終わら
だろつ。

奏と操緒も張りつめていた表情から一転して、清々しい表情に変わ
っている。

流石、天才少女。

頼もしいことこの上ない。

「まあ、残る当面の問題は秋希の解放と尖晶スピネルの演操者ハンドラーと鳳島兄妹に
風斎の悪魔と真日和、それに智春のナノマシンか・・・
そうだな・・・智春」

「なんだ？」

「一度、学生連盟の本部に行つて来い」

「・・・は・・・？」

疑問が解け、すぐくすつきりとした気分になっていた僕にアニアが
次にぶつけてきたのは、かなりの難題だった。

30回 天才幼女（後書き）

カルセドニー
ガラス珠が
右手
で。
に選ばれた理由については、持ち越しということ

外伝 智春 リア充街道まつしぐら（前書き）

・・・リア充なんて爆死すればいいんだ・・・

友人の一人がモロにリア充だから、凄い反応に困る・・・

外伝 智春 リア充街道まっしぐら

本日2月14日は月曜日。

普段の休み明けの学校に漂う気だるさはなりを潜め、どこか浮ついた雰囲気が漂っている。

かく言う僕自身、

『・・・バカみたい・・・』

操緒にそんな台詞を吐かれていることから分かるように、かなりだらしなないことになっていた。

因みに僕の場合、学校に漂っている男子のソワソワした様なものではない。

相手がいるという安心感からか、今後の展開に対しての期待だったりする。

多分放課後に貰えるはずなので、学校で貰うということはあまり考えていない。

いや、他の女子から貰えるものなら貰いたいとどうしても思ってしまうのは仕方ないと思う。

僕だって、中学1年 精神年齢なら高校2年 という年齢の男子生徒なんだから。

以前の世界では、母親から貰う病院内のイベントの余りモノ 入院患者用なので美味しくはない だったり、杏から貰える義理のモノが精々だった。

全く無いよりマシなのだろうけれど、それでもどうしたって樋口の奴が大量に貰っていたのを思い出すと凄く自分が虚しくなってくる。

そんなことを思い出しながら奏と2人 実質3人 昇降口に到着すると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

そこでは、大量の屍　という名の玉碎したであろう男子達　が
哀愁の念たつぷりに互いを慰め合っていた。

「・・・靴箱がだめでも、まだ今日は始まったばかりじゃないか！
！」

「そつだ!!」

ひよつとしたら、俺にも佐伯や嵩月から・・・!!」

「可能性がないわけじゃないんだ!!」

遅しいなあ・・・

というか、もうちょっと場所を考えた方が良いと思う。
昇降口は男女が分かれているわけではないんだから、

「・・・あの、通ってもいい、ですか・・・？」

「「「「「!!」」」」」

丁度先程話題に上がっていた奏が男子達の間をすり抜け　男子か
ら期待の眼差しを一身に浴び　、靴箱から自身の上履きを取り出
し廊下へと抜けて行った。

僕も後ろから自身の靴箱に向かい、上履きを取り出し　当然ナニ
か入っているわけもなく　奏のいる廊下へと抜ける。

「お待たせ。
行こう」

「はい」

二人揃って教室へと向かう。
そんな僕ら二人の後ろからは、

「ちくしょー！ーっ！！」

「な〜っくめー！ー！！」

「何であいつばっかり！！」

なんて言う男子の絶叫が聞こえてきたけれど、当然無視。
奏も入学したばかりの頃は、あんな感じの男子生徒からの魂の叫び
や視線に反応していたのだけれど、慣れたもので顔色一つ変えずに
前を向いて階段を上がっていく。

いやー、以前の世界の奏からは考えられない進歩だ。

そんな奏も、どことなく落ち着きがない。

いつもよりも周囲の視線が気になっているようだ。

まあ、それでも奏を見るたびに一々挙動不審になる男子連中よりよ
っぽどマシだけれど・・・

そう、本日2月14日はバレンタインデー。

製菓会社が商品の売り上げ拡大のために広めたとも言われている日。
本来は、269年にローマ皇帝の迫害下で殉教した聖ウァレンティ
ヌスに由来する記念日であるとされている。

だが、これは主に西方教会の広がる地域における伝承であり、聖ウ
アレンティヌスを崇敬する正教会の広がる地域では、西欧文化の影
響を受けるまでこのような習慣はなかったそうだ。

まあ、何で聖人が殉教した日が記念日なのか知らないが、とにかく
日本では女性が男性にチヨコレートを渡し親愛の情を示す日とされ
ている。

最近では友チヨコやら、逆チヨコやら色々あるらしいけれど、ベース
は女性から男性へ。

そして、世の男子学生にとってはなんとなく勝ち負けがハッキリし
てしまう日。

それは僕たちの通っている中学でも同じだった。

?
?
?
?

「はい、トモ。

チヨコレート」

「ああ、ありがとう、杏」

「まあ、トモは私なんかよりカナちゃんからのモノの方が嬉しいん
だろうけど……」

「そんなこと……」

「ない、って言える……?」

「……すいません、言えません……」

でも、たとえ義理だったとしても、杏から貰えるなら嬉しいよ」

「……っ……!」

時刻は昼休み。

昼食を終え、近くに寄って来た杏からチョコレートを受け取る。

僕の間接としては、これで杏から貰うのは4回目だ。

友達として貰っているから、今更照れもない。

一方の杏はと言えば、初めてだからだろう、どことなく照れが入っているように見える。

これがあと数年もすれば、お返し前提のただの慣習になってしまうのだから何となく惜しい気がする。

「杏ちゃん……?」

「な、なんでもないよ……!!」

誰も、カナちゃんの相手を取ろうだなんて!!」

どこか反応に詰まった杏の後ろから奏が肩を掴む。

その時に奏が出した声は、地獄の底から響いて来るような、普段の彼女からは考えられないほど底冷えする声だった。

正直、怖いです奏さん。

クラスの面々もかなりひいてるし。

「夏目くんを、と……?」

「ち、違う違う!!」

取らないって!!」

そもそもトモはそんな対象じゃなく……!!」

「トモ・・・？」

随分仲が良いんですね・・・」

「今更そこ！？」

ああ、日に日に奏の独占欲というのか、依存度というのか、その辺りが凄いことになってるなー
そりゃあ、個人的には嬉しいけれど、あんまりそのことで周囲に迷惑かけない方が良くと思うのだけれど。

『ねートモ・・・そろそろ止めた方が良くんじゃない・・・？』

奏ちゃんの周囲の空気がヤバいことになりつつあるんだけど・・・

『

操緒の言葉につられて見てみると、確かに、周囲の空気が微妙に揺らぎだしている。

確かに、そろそろ止めないとまずいだろう。

「あー、高月さんや」

というわけで、奏に声をかける。

「なんですか・・・？」

ゆらり、と。

幽鬼のように僕の方に視線を向けてくる。

『今良い所なんだから邪魔するな』と、その眼は語っていた。

うん、下着泥に会った時の奏を見た時と同じように僕の背筋が凍りつく。

確かに、周囲の温度は上がっているのに、背筋が凍りつくとは・・・

「とりあえず、杏の肩から手を放してあげて」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

奏は渋々杏の肩にかけていた手を放し、僕の方に視線を向けてくる。一方の解放された杏はというと、すぐさま僕の後ろに逃げ込む。

まあ、今の奏に対しての一番の安全地帯は確かにそこかもしれない。そこかもしれないけれど、できれば遠慮してほしかった。

杏が僕の背後に逃げ込むということは、奏からの絶対零度の視線が僕に向けられるということなのだから。

しかも、僕が奏から杏を庇っているという図式になる。

その為、奏から向けられる視線の温度が更に下がった気がする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ジツと奏の視線に耐えながら考える。

何か、何かないか・・・!?

こんな状況を打開出来る方法は・・・!?

クラスにいる生徒全員の視線が集中しているため、あまり下手なことは言えない。

言えないが・・・

「た、嵩月さん・・・」

「・・・何ですか・・・?」

「夏目くん・・・」

ここは僕が折れるしかないのだろう。

というか、何だつてこんな日に僕は自分の彼女から絶対零度の視線を向けられなければならないのだろう……？

いや、原因を考えればこんな日だからなのかもしれないけれど……

「春休み中に一度だけ何でも言うことを聞くと言うことで、どうでしょうか……？」

ざわっ……

「なんでも……？」

「は、はい」

『うわー、情けなー……』

しょうがないだろ、この場でこれ以上奏を暴走させないために僕が出来ることといたらこれぐらいしかないんだから……

ちなみに、クラスの空気もかなり変わってしまったている。

さつきまでは今にも崩壊しそうなくらいに緊張の糸が張りつめていたのに、今はもうそんな糸は緩みまくって熱狂的な会話が為されている（主に女子の間で）。

そんな空気を知ってか知らずか、

「な、なんでも……」

何故か頬を染めながらあらぬ方向を向き、何かを考え出した奏。とりあえず、危機は脱せたと見て良いだろう。

「ふう……杏、もう大丈夫だと思うから」

「……そう……」

「え？」

あ、杏さん……？

どうかされましたでしょうか……？」

奏の機嫌が回復したと思ったら、何故か今度は杏の機嫌が急降下していた。

……なんで……？

ポンポン

そのことで頭を捻っている僕の肩を誰かが叩いてきた。
頭を悩ませながらも振り向くと、

「智春……お前もなかなかやるな!!」

ビシッと親指を立てて、非常にいい笑顔をした樋口が目の前に立っていた。

とりあえず、

「グハツ!!」

なんとなくムカついたので一発殴っておいた。

?
?
?
?

学校も終わり、一路高月組へ。

あの後、奏の機嫌が悪化する事はなかったけれど、杏の機嫌が回復することもなく、それなりにキツイ状況下だったとだけ報告しておく。

因みに、操緒は普段よりもマイナス気味の機嫌。

まあ、許容範囲内だ。

それで、普段の勉強も終わり、さあどうしようとなった時、

「あの、智春くん・・・」

「どうしたの・・・？」

胸が期待で高鳴っているのを感じながらも、普段の様に返事を返す。いつの間にやら、操緒は姿を消していた。

高月祖母や母とお喋りにでも言ったのだろうか。割と良くあることなので気にしない。

「あー・・・うー・・・」

緊張しているのか、視線が色んな方向に向く。

凄いのは、色んな方向に視線が移るのに、決して僕の顔には向かないことだったりする。

普段だったら落ち込むけど、今日は何となく分かっているから、そんな奏の行動もかなり微笑ましく思える。

待つこと1分。

「・・・その・・・これ・・・
もらって・・・ください・・・」

奏が鞆から取り出したのは、手の平サイズの正方形の箱。
赤色のラッピングが施され、白いフリルのついたリボンが斜めがけ
にして掛けられている。

その箱を両手で持ち、僕に向けて差し出している。

「・・・あ、ありがとうございます・・・」

心臓の鼓動が速まるのを感じながら、両手を差し出し、奏から受け
取る。

「うー・・・」

恥ずかしいのか、頬を染めながら座布団を抱え、顔を隠す奏。

「あ、開けてみてもいい・・・？」

「え・・・!？」

僕が聞いたことがあまりにも予想外だったのだろうか・・・？
抱えあげていた座布団を手放し、僕の方に視線を向けてくる。

「だ、駄目・・・？」

僕もまさかここで却下されることになるとは思わなかったから、そ
れなりに戸惑っている。

人生初の彼女からのバレンタインチョコ。

出来ることなら早く食べてみたい。

それに、相手が奏なら料理も上手いから変な心配もなくていいから尚更だ。」

「か、帰ってからにしてください」

「ど、どつして・・・？」

「・・・」

「奏・・・？」

「・・・は・・・ら・・・」

「え・・・？」

「・・・はずかしい、から・・・」

「そ、そう・・・」

「う、うん・・・」

なんか、すごい空気がぎこちない。

僕としては早く食べたいのだけれど、奏は恥ずかしいので遠慮してほしいらしい。

まあ、僕が我慢すればいい話だから別に構わないけれど。だけど、やっぱり思うところはあるわけで・・・

一先ず、綺麗にラッピンングされた箱を鞆の中に丁寧にしまつ。間違っても潰してしまう様な位置には置かない。

「その、ありがとう、奏。」

やっぱり、嬉しかったよ・・・」

「そう、ですか・・・」

そう僕の言葉に返事を返し、にっこりと微笑んでくれる。

あー、やっぱり可愛いなあー。

「うん。」

チヨコの感想は明日になると思うけど。

きつと、『おいしい』しか出てこないと思う」

「そ、そんなこと・・・」

「ううん。」

奏が僕にくれたんだから、マズイ訳がないよ」

「・・・はい・・・」

そのまま、僕が橘高道場に行くまでずっと二人で寄り添って過ごしていた。

話していた内容は、今後のことであつたり、アニアのことであつたり、春休みにどこに行きたいとか、来年も同じクラスになれば良いな、等のとりとめのない、ただ僕たち二人にとっては何より大事な内容であり、大事な時間だつた。

?
?
?
?

P・S：その日の橋高道場

「塔貴也」

「なんだい、秋希・・・？」

「その、作ってみただが・・・」

「ああ、ありがとう。」

喜んで頂くよ」

普段の彼女からは考えられないほど可愛いラッピングを持って、年頃の恋する乙女のように塔貴也さんにチョコレートを渡す秋希さんの姿。

「兄様。」

「こんな女のものではなく、私を先に受け取ってください」

「和斉。」

「あなたまさか、妹のものを優先する様なシスコンだったの・・・？」

「・・・俺にどうしろってんだ」

「「私を先に受け取りなさい（ってください）！！」」

シンプルな黒でラッピングされた箱を持って八條さんに詰め寄る美呂ちゃんと、涼しげな水色に白いドットが描かれた紙でラッピングされた袋を持って八條さんに詰め寄る冬琉さん。

そんな二人に詰め寄られ、珍しくどうしようもない程困惑している

八條さん。

僕や塔貴也さん、それに秋希さんに必死に救援の視線が向けられているが、全力でスルーしている。

そうでもしないと確実に厄介事に巻き込まれるのが分かっている。

・・・まあ、結局逃げ切れず巻き込まれたけど。
それでも、

「何で俺がー！ー!?」

「すまん、蹴策。」

お前ぐらいいしかあの3人を止められない」

「後で、氷羽子さん用の衣装を作ってあげるから」

途中上機嫌で道場にやって来た蹴策を盾にしてなんとか逃げ切るこ
とができた。

そんな風景を見ながら、毎年毎年、こんなごく普通の日常が続けて
いけるように努力しよう、と改めて独りでひっそりと心の中で誓っ
たのだった。

31回 復活（前書き）

前回の外伝が意外にも皆さんの受けが良かったようで、一安心。今後も出来る限り日常は書いていこうと思っています。

折角だから、奏視点でホワイトデーでも書いてみましょうか。いや、智春が四苦八苦する姿でも良いんですけど・・・

31回 復活

「一度、学生連盟の本部に行つて来い」

というアニアの発言があつてから早5日。

既に春休みも終わりが近づいており、残すところ後2日といったところだ。

まだ多少肌寒いが、桜の花弁が舞い、桜並木の街道にはレジャーシート等を敷いて花見に繰り出している人をよく見かけるようになった。

そんな年度始めに僕とアニア、それに冬琉さんと瑤さんは揃つて学生連盟の本部へとやつて来ていた。

パツと見はごく普通のどこにでもあるビルだ。

特におかしな所は見当たらない。

それでも、ここが学生連盟の本部らしいのだからやはり緊張してしまふ。

特に危害が与えられる訳ではないとはいえ、学生連盟にはあまりいい思い出がないのだ。

というか、以前の世界ではっきりと味方になつてもらつた記憶が少なすぎる。

雪原さんも最初はスタビライザのことで争つたけど結果的には中立？みたいな立場だったし普通に会話もしていた。

千代原さんは加賀篝のことやピカソ仮面を被つた冬琉さんとの交戦の時などで加勢してもらつたから特に悪いイメージがある訳ではない。

だけど、里見の奴の所為で思いつきイメージがダウンした。

こつちの世界ではどうなのか知らないけれど、対して変わらないだろう。

今回、学生連盟の本部にやって来た名目は先日の尖晶スピネルの演操者襲撃事件の報告。

代表として連れてこられたのが僕だ。

一応瑠さんが報告はしているそうだが、他の人間からも話が必要との事だったので、これ幸いと僕が名乗りを上げた。

奏も付いて来たがついていただけ、今日は家で留守番。

八條さんや鳳島兄妹も付いて来ていない。

一緒に来ていないのは、嵩月組や鳳島家、それに高位の悪魔の家系である八條家の息子や娘がGDの本部に足を伸ばして、洛高の神聖防衛隊や巡礼商者連合などの他の組織を下手に刺激しないことが主な理由だ。

アニアもフォルチュナ辺境伯の娘だから本来ならやめといた方が良いのだけれど、幸いにも彼女は機巧魔神アスラ・マキナの専門家。

それも、恐らく世界の中でも指折りの実力を持った。

学生連盟の機巧魔神アスラ・マキナに興味があると言えば、学生連盟側としてもはつきりと拒否出来る訳がない。

あとは、冬琉さんと瑠さんだけと二人とも学生連盟に所属している人間だし、瑠さんは先日の襲撃事件の時の当事者だ。

何ら問題ない。

とはいえ、僕と操緒、それにアニアの本当の目的は事件の報告や、学生連盟の機巧魔神アスラ・マキナではない。

欲しいのは、学生連盟に保管されている？ 鐵のイクストラクタ。

いや、正確にはそこに保存してあるナノマシンだ。

まあ、アニアについていけば多分大丈夫なはず。

問題は、こっちの事情聴取の最中にアニアの見学が済んでしまうことだけで、

「では、私は学生連盟の機巧魔神アスラ・マキナのデータを得られる代わりに私の知る尖晶スピネルの情報を渡す、ということの良いのか・・・？」

「ええ、そうしてもらえると助かるわ」

『われわれ学生連盟にも知らないアスラ・マキーナ機巧魔神は存在しているからな。
スジネル尖晶は、名称を知っていても能力まで知っている訳ではない相手の良い例だ』

知らぬ間にアニアが行っていた学生連盟間との取引もあるため、大丈夫そうだ。

そんな頼もしくも、見た目、自分より遥かに幼い少女　精神年齢
だけならアニアの方が上　の姿を見ながら、僕と操緒は学生連盟
の本部に足を踏み入れた。

? ? ? ?

そんなこんなで、

「では、襲撃者側から一方的に襲ってきた、ということではないんや
な・・・?」

「はい」

「ふむ・・・ほとんど瑶の言っった内容と同じやな
他には、何かないん・・・?」

『他、ですか・・・?』

今、僕と操緒はGDの人に事情聴取を受けている。
別室では、アニアが冬琉さんと雪原さんに話を聞かれていますはずだ。
僕たちの目の前に座っているのは、おっとりとした雰囲気を持つ少女。

嵩月祖母と同じように京都弁で話しているけれど、やはりお祖母さんとは感じるモノが違う。

嵩月祖母の言葉は研ぎ澄まされているけれど、この人は柔らかい。以前の世界通りなら、この人も演操者ハンドラーであるはずなのだけれど、今迄ほとんど射影体を見たことがないのは何故だろう……？

千代原はる奈

学生連盟に所属しているGDで、亜鉛華の演操者ハンドラー。
彼女の機巧魔神である亜鉛華の能力はかなり上げつないから、可能ならば以前の世界の様に敵対しないままでいたい。

『そういえば、こっちに襲いかかって来る時に“補充”って言うてましたよ』

「補充、どすか……」

それだけじゃよう分かりませんなあ〜」

千代原さんに先日アスラ・マキナの襲撃事件の事を話しながら自分の中でも記憶を整理していた。

とはいえ、それで何か分かった訳じゃない。

むしろ、余計訳が分からなくなって混乱してしまっ。

“情報”と“補充”という単語、そして最後に割って入ってきた“翠色のナニか”

それらの断片的な情報から僕でも推測出来るのは、相手が単独犯ではないということ。

加賀簞の様な魔神相剋者アストラクラインかもしれないし、洛高の生徒会や学生連盟の様な組織の構成員なのかもしれない。

いずれにせよ、犯人があゝの襲撃者独りということはないだろう。絶対他にも協力者がいるはずだ。

「まあ、いずれにせよ犯人は学外で洛高の生徒、もしくは学生連盟ハンドラーの演操者に襲いかかりました。

ほんなら、GDが対処に当たるのが筋というもんやろ……?」

「……まあ、そうかもしれませんね……」

底知れぬ笑みを浮かべながら、僕と操緒に学生連盟としての方針を伝える千代原さん。

相変わらずこの人にしろ、雪原さんにしろ、本心が分かりにくい。

まあ成人もしていないのに、仮にも学生連盟というそれなりに大きい組織で人の上に立つ人間なんだ。

そう簡単に本心など悟られる様な真似はしないのだろう。

「今は情報が少なすぎるさかい、今後同じような事があつた場合は必ず学生連盟に報告することを忘れんようになあ。

まあ、瑠か冬琉に教えてもらえればそれでええから」

「分かりました」

『はい』

取り合えず、この件に関しては学生連盟、それもGDが動くことが

確定した。

今はまだ情報が少なすぎるから、判明している尖晶スピネルという機巧魔神アスラ・マキーナ関係から調べていくそうだが、捜査方法など特に質問もないので早々に部屋から退出することにした。自分が犯人ではないとはいえ、事情聴取はあまり気分の良いものではないしな。

部屋を出て、操緒と雑談しながら隣の部屋にいるアニアを待つこと10分。

ガチャ

扉が開き、アニアと冬琉さん（+秋希さん）が部屋から出てきた。

「お、智春、それに操緒」

「あら、待たせちゃったみたいね」

二人とも僕らに気付いたのか、そんな声をかけながら近寄って来た。

「いえ、そんなに待つてませんよ」

『そうそう、男が女を待つのは当然なんだから。』

それに、トモは奏ちゃんとのデートで待つのは慣れてるしね〜』

「……ノーコメントで……」

こんな場所でそんな余計な事は言わないでいい。

冬琉さんとアニアたちだけだからまだ良いけど、法王庁関連の人に聞かれてたらどうするのさ。

「ふん、気に食わないが今更か・・・
行くぞ、智春、操緒!!!」

そんな僕たちのセリフにやや不機嫌になるアニア。

大方僕と奏がそういつた関係なのが気に食わないのだろうけれど・・・
・ナゼニ？

ああ、僕みたいなハンドラー演操者が奏の相手って言うのが気に食わないのか？
それとも、僕じゃ情けなさ過ぎて駄目なのか・・・

そんな風に考えながら、歩き出したアニアの後を追って歩き出した。

『なあ、水無神・・・』

『何ですか、秋希さん？』

『お前の相方も大変だな・・・』

『・・・何を今更・・・』

それに、冬琉さんの狙ってる相手よりはマシじゃないかな・・・』

『いや、お前の相方の方がどう見てもキツイと思うが』

『・・・』

『・・・』

『・・・はあ・・・』

後ろで繰り返り広げられていたベリアル・ドール副葬処女同士の会話に気付かないまま。

?
?
?
?

「じゃあ、最初は保管されているイクストラクタのチェックからで良かったかしら」

「ああ、それで問題ない」

「そう、ならこの部屋よ」

暫くビル内を歩き回り、僕らが辿り着いたのはやたらとセキュリティが厳重な部屋だった。

扉を開けるのも指紋認証や網膜照合などの検査を通り抜けてから、パスワードを打ち込み、電子ロックを開け、冬琉さんがもっていた一般的な鍵で扉の鍵を開くことでようやく部屋に入ることができた。ちなみに、後から聞いた話では部屋の壁や扉には護法障壁が付与されており、魔術的な要因からも侵入はほぼ不可能とのことだ。

要は、それだけ厳重で重要な部屋だということだ。

本来ならアニアはともかく、僕のような人間は入れないのだろうけれど、幸いにも同行するGDの担当者は冬琉さんだ。

僕も手伝いとして特に問題がないと判断してくれたのか、同行を許可してくれた。

扉を開いた冬琉さんに付いて部屋に入っていく僕たち。

そこに合ったのは、

『うわ!!』

なに、このトランクの山・・・!?』

大量の銀色に輝くトランクの山。

そこに保管されているそれらはすべて同じ色形をしており、同じ方向に向けて積み上げられていた。

だが、アニアはそんな大量に積み上げられているトランクを無視して、中央に置かれている机を避けながらその奥に保管されているものへと歩みを進める。

奥に保管されているのは、周囲に積み上げられているモノたちと同じトランク。

だけど、明らかにこちらの方が嚴重に保管されているのが分かる。何故なら、それらは積み上げられるようなことはなく、棚の中にしっかりと収められ、一目で分かるように整理されていたのだ。

「冬琉」

「ええ」

棚には鍵がかけられ、更には魔術によって嚴重に保管されている。アニアの呼びかけに従い、冬琉さんがそれらの棚に掛けられた封印を解いていく。

封印が解かれ、棚に取り付けられている透明な扉が開いていく。

そこには、凄然と13個の銀色に輝くトランクが置かれていた。

その棚の中でも隅の方に長年誰の手にも触れられていないであろうことが容易に分かるほど埃に塗れた薄汚れた二つのトランクが置かれている。

その二つのトランクが置かれている棚の前に付いているプレートにはこう書いてあった。

【?鉄】・【白銀】

ああ、思ったよりも早く出会えた。

僕らを護ってくれる機械仕掛けの悪魔を呼び出すための機械に。

思えば、朱湊さんが鳴桜邸にこのトランクを持ってきた時から全てが始まったんだ。

そう考えると、世界は違えど再びこのトランクに出会えたのは中々感慨深いものがある。

「よし、じゃあ一先ず中央の机に全て運び出す。

智春、冬琉頼む」

「ええ、分かったわ」

「ああ」

アニアに指示された僕と冬琉さんが棚からトランクを運び出し、中央の机に置いていく。

指示した本人であるアニアは、自分の持ってきた鞆を漁り何らかの器具を取り出していた。

まあ、イクストラクタは尋常じゃないくらい重いから、8歳児の体系であるアニアに任せるのは得策ではないだろう。

「ふっ！！」

両腕に力を込め、端からトランクを運び出していく。

以前よりも腕力が付いたとはいえ、流石に重い。

一つ一つ足に落としたり、周囲にぶつかけたりしないように気をつけながら運んでいく。

そして、

『…………トモ…………』

「…………ああ…………」

最後に棚に残った一つのトランク。

？鐵のイクストラクタ

幸いにも冬琉さんはアニアの近くで彼女の手伝いをしている。

僕もすぐにこれを運び出さなければいけないが、その前に、

「………………………」

ゴクッ

緊張で咽が乾いたのか、唾を飲み込む。

片手でトランクの取っ手を握り、もう片方の手をトランクの留め金にかける。

そして、逸る心を抑えながら、片方の留め金を外し、もう一つの留め金も外す。

その瞬間、トランクの取っ手が淡く緑色に輝いた。

光は取っ手を握っていた僕の手を伝い、腕を通り、体の全身へと波紋のように広がっていく。

そして、全身に光が行き渡ると、その光もすぐに消えた。

それを操緒が確認すると同時に、すぐさまトランクの留め金を付け直す。

「『…………よし…………』」

心中喜びながらも、

「おい、智春何をしている。
速くしろ!!」

「ちょっと待てよ、流石に幾つも運んでたら疲れるって・・・」

「これくらいで・・・情けないわね。」

「今度から休日の休憩時間半分にしましょうか」

「い!?!」

わ、分かりました。

すぐに持っていきますからそれは勘弁して下さい」

アニアの返事に答えを返し、何事も無かったかのようにイクストラクタを机に運んでいった。

?
?
?
?

「・・・ん?」

どないかしはりました?

「・・・瑶・・・」

「・・・うん・・・」

「ちよっとね・・・」

智春たちが学生連盟の本部から去った頃、学生連盟本部内の一室で雪原瑠は頭を悩ませていた。

というのも、アニアから提供された尖晶スビネルの情報と学生連盟の調査結果が組合わさり、瑠たち学生連盟側の予想以上にキツイ現実を示していたのだ。

「……これが本当だとすれば……」

本格的な戦闘になった時に対抗できるやつはGDにはいない……

「

学生連盟のも世界の中ではトップクラスに戦力が整っている組織だろう。

だが、それでも、

「相性が悪すぎる……」

相手が悪すぎた。

特に、学生連盟のようなGDという個人の意思が強すぎる戦力に頼っている集団では。

これが、本当の意味での一騎当千の集団なら問題ないが、GDとして活動している面子は20にも満たない少年少女ばかり。

本当の意味での、一騎当千には成りえない以上、不安要素が多過ぎる。

「せめてもの救いは、夏目智春　彼が敵対していないということか」

天を仰ぐかのように天井に視線を向け、溜息を洩らす瑠。

そんな彼女の手には尖晶スビネルの能力が書かれた用紙と、調査報告書が握

られていた。

? ? ? ? ?

学生連盟の本部に行った日の夜。

以前もやって来た河川敷に僕と操緒、それに奏とアニアはいた。

改めて、? 鐵を召還するためだ。

夜遅いこともあり、既に周囲には僕ら以外の人間の姿は見受けられない。

できれば人払いの結界を使いたいのだが、生憎と僕らの中では誰も使える人間がいないのだ。

「いくよ、操緒」

『うん』

夜の闇の中で朧気に浮かび上がっている操緒に声をかけ、遠目に僕らを見守ってくれている二人の少女に視線を向ける。

奏は、不安そうに僕らに視線を向けている。

アニアは、眠そうに　まあ、肉体年齢上しょうがない　しかし期待を込めた視線を向けている。

そんな彼女たちからの視線を受け、僕は声を上げる。

「来い、? 鐵! !」

僕がその言葉を言った瞬間、僕の影の色が変わる。

ただの暗い色から、昏い、玄い、漆黒の虚無の色へと。
その変化により、夜の闇で見えなくなっていた僕の影がはっきりと認識できるようになる。

それと同時に、操緒が虚空に溶けるように姿を消す。

そして、そいつは顕れた。

僕の影を引き裂き、門を通して自身の体躯をこの世界に浮かび上がらせる。

右手には巨大な銀色に輝く剣を持ち、他を圧倒する威圧感を放っている。

つい一月前に見た時には存在した裂傷や陥没部、鏽といった負傷は消え去り、全身の装甲には傷一つ存在しない。

かつて僕らと別れた時と同じ完全な姿で機械仕掛けの悪魔は僕の背後に確かに存在していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この場にいる僕ら三人は黒鐵を見つめたまま、何も言葉を発しない。色々と思うところがあるのも事実だ。

これまでのこと、これからのこと、過去についても未来についても思うところがある

だけど、これで大きな憂いが一つ消えた。

秋希さんや哀音さん、それに新屋敷さんもアスラ・マキナ機巧魔神から解放できる。

紫湮さんはどうなのか分からないけれど、できれば助けてあげたい。
何にせよ、これでようやくスタートラインに立てた。
これから始まるんだ。

この世界を救うための戦いが。

31回 復活（後書き）

話が進まない・・・

いや、かなり必要事項にだけ絞って書いてるつもりなんですが、いつになったら原作に突入できるやら。

はあ、先は長いなー

32回 新年度（前書き）

先日、私の通っている大学でも前期入試がありました。

受験生の皆さん、一先ずお疲れさまでした。

まだ中期、後期などの試験が残っているとは思いますが、頑張ってください。

皆さんの志望校合格をささやかながら祈っております。

また、その他の皆様も新年度に向けて色々準備があるとは思いますが、大変ですが、応援しております。

32回 新年度

奏と再会してから早一年。

先日入学式も終わり、僕たちは二年生になった。

とはいえ、特に大きな変化があった訳でもない。

まあ、洛高の新生となった冬琉さんや塔貴也さんたちは大きな変化かもしれないが。

ああ、新生といえば美呂ちゃんが僕らの通っている中学の新生となった。

わざわざ佐伯兄妹のいるこっちの中学ではなく、鳳島兄妹の通っている所に行けばいいと思ったのだけれど、単にこちらの方が近いのだ。

まあ、入学式で見た時に知った訳だけれど・・・

八條さんとしては少しでも兄離れをして欲しいそうだが、
ただ、

『奏さん・・・どうやってたらそんなスタイルになれるんですか・・・？』

『え・・・？』

きゅ、急にどうしたんですか？』

『いえ、先日兄様のベッドの下からこんなものが出てきました』

スツと、数冊の雑誌を奏に見せる美呂ちゃん。

『う、こんな・・・！』

それを見て赤面する奏。

(赤面しつつも中身はしつかり確認していたりする)

『ちなみにこれが一番お気に入りの様です』

『う、うづうづ……』

上記のような会話からも八條さんの望みは当分先になりそうだといいことが分かる。

というか、そんな分かりやすい場所に隠すのもどうなんでしょうか・

・

おかげで、僕にまで被害が及んだ。

具体的には、奏からの妙に大胆なアプローチであったり、操緒の強制的な査察であったりだ。

前者は被害ではないかもしれないが、後者はかなり危なかった。

あれが見つかつたら流石にどうなるか分かつたもんじゃない。

他にも、八條さんの雑誌を見た冬琉さんや操緒(+美呂ちゃん)とア

ニア)によって(何故か)同盟が組まれていた。

……なんで冬琉さんが……?

秋希さんは我関せずだったし、氷羽子さんも特に気にしていない様子だった。

(後日、塔貴也さんと蹴策が酷い目に合つたらしいが、僕がそれを知つたのは随分後のこと)

とまあ、そんなことはともかく、

「……高月、大丈夫かな……」

「クラスが変わつたぐらいで心配することなんてないだろ。

大原の奴もいるんだし……」

「そりゃあ、そうかも知れないけどさ」

新しく始まった2年生のクラスで、僕と奏は別々のクラスになってしまった。

まあ、僕は樋口と一緒に、奏は杏と一緒にだから大丈夫だとは思っただけど、

「はあ、今年は佐伯とは別のクラスか・・・」

というか、何であっちのクラスは美少女率が高いんだ・・・」

「知らん。」

あれだ、成績の割合とかじゃないのか・・・？」

「にしても、納得がいかないぜ!!」

「・・・一応、こっちにも露崎とかいるだろ」

「露崎一人で嵩月と佐伯に対抗できると思えん!!」

「いや、対抗って何さ・・・？」

会話からも分かるように、奏と佐伯が同じクラスになってしまった。特に問題視することじゃないのかもしれないが、すごい不安だ。

去年、やたらと僕と奏のことを敵視していた彼女が何も起こさないと断言できない。

なんせ、洛高に入学したばかりの頃に奏を消そうとした第一生徒会との事件の一翼を彼女は担っていた。

こんな公立の学校で問題を起こす様な生徒ではないと思うが、心配するのは当然だと思う。

ちなみに、何故か露崎が2年連続で同じクラスになり、普通に中学

に通っている。

露崎波乃

ひよっとしたら、初めて僕に好意を持っていてくれたかもしれない女の子。

男性恐怖症気味だけれど、修学旅行委員として以前の世界では僕と樋口の邪魔にもめげず頑張っていた少女。

以前の世界の僕が知っている彼女と同じように、僕の視線に映る彼女は、特に病気にかかっているようには見えない。

だが、以前の佐伯の言葉が真実なら、今年の春　つまりは今シーズン　に彼女は体調を崩し入院することになる。

それを考えると安心できる訳がないが、ちよっとした事で歴史は変えられるかもしれない。

佐伯とクラスが分かれ、露崎と同じクラスになったのが良い例？だろう。

何にせよ、暫くは様子見だ。

というか、彼女に死んで欲しくないのは勿論だが、僕と樋口の間を曲解した小説が生まれ出すことは避けたい。

なんだってあれがベストセラーになったのか凄く疑問だ。

文才があったとしても、あの題材がベストセラーになって映画化までした日本という国はどこか終わってしまったている気がする。

こっちの世界では普段から奏と一緒にいたからそうそう生まれる余地はないと思うが、気にしすぎということはないはずだ。

そんな真摯な願いと、真面目な　傍から見れば間抜けな　願いを胸に秘め僕の新しい一年は始まるうとしていた。

取り合えず、一番最近のイベントはあれだ。

よく馴染めていないクラスが初めて一つになれるかもしれない企画。

まあ、男子は男子で女子は女子で、ということが多いけれど・・・

修学旅行

予定では一月後のゴールデンウィーク翌週の月曜日から三泊四日間。

行先は古都、京都

こういったイベントでは何か起きそうな気がしてしょうがないのは僕だけだろうか・・・？

?
?
?
?
?

少々不安を抱えながら始まった新学年。

その当日の夕方。

いや、時間的にはもう夜。

空は雲一つない満天の星空。

周囲にビルなどの高層建築物がないため、星がよく見える。

そんな綺麗な空とは打って違って変って地上では、

「あっ、はははははっ・・・!!」

もっと、もっと!!」

「も、もう、限界・・・うおえええー」

「汚えな・・・」

おゝい、夏目。
水持ってきてやれ」

「いえ、お兄様のお世話は私が。
夏目さんはもっと料理の方をお願いします」

「りよ、了解です・・・」

未成年主催の酒盛りが開かれていた。

一旦台所に引込み、作っておいた料理を持って再び庭に向かう。
一応名目としては庭に咲いている桜の花に託けた花見なのだが、年に一度の無礼講の宴会と化している。

参加人数は凡そ20人ほど。

おかげで調理する側としてはすごく忙しかったりする。

それでも、去年までは料理が酷かったから参加する人も少なかったそうだが、今年は僕と奏（+多少マシになった冬琉さん）がいるため、道場に通っている人のほとんどが参加していた。
因みに、警察関連の方とかがおられるのだけれど、

『この道場に世間一般の常識なんぞ必要ないわ！』

と言って学生たちの飲酒は黙認していただいている。

まあ、普段からヤのつく人と同じ場所で練習をしていれば、そんな気持ちになるかもしれない。

つい先程、蹴策が吐いていた。

流石に、日本酒や焼酎の濃いのを大量に飲めばああなるだろう。
というか、潰れていない八條さんとか氷羽子さんの方がおかしい。
塔貴也さんは既にダウン。

近くに秋希さんがいるし、何かあればすぐに対処できるはずだ。

・・・冬琉さんの状態が状態だから、いつ投影出来なくなるか分かったもんじゃないが・・・

冬琉さんは酔いが回っているのか、えらい上機嫌で笑っている。

「夏目く、お前と嵩月のお嬢さんは結局どういう関係なんだ・・・？
いい加減本当のことを教える！！」

「いや、どういう関係って聞かれましても・・・」

酒がまわったせいか、やたらと目が据わった八條さんがそんな言葉をぶつけてきた。

普段の彼からは考えられない乱れっぷりだ。

「それは俺も気になってた」

「蹴策！？

お前さっきまで寝てただろ！？」

「おう、復活したぜ！！」

吐いたら大分楽になったからな！！」

ビシッと指を立てて回復ぶりをアピールしながら、いつもと同じ調子で八條さんと一緒に詰問してくる蹴策^{バカ}。

まだ塔貴也さんはぶっ倒れているというのに。

悪魔というのは誰しもアルコールの処理能力が高いのだろうか・・・？

一応身体構造は人間と同じはずだけどなあ・・・

因みに、寝ていた場所は氷羽子さんの膝の上 要するに膝枕

で、蹴策に対する周囲の独身（彼女のいない方）男性の視線が厳しかったこと、厳しかったこと・・・

「こいつ（バカ）のことなんてどうでも良いんだよ。
今はお前と嵩月の話だ」

「そつだそつだ」

バカにされていることなどどうでもいいのか、慣れきっているのか、二人が追及の手を緩めることはない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一応奏の方に視線を向けると、

「ねえ、奏ちゃんやっぱり夏目くんをGET出来たのってこの胸なの・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

冬琉さんからやたらとドスの効いた視線を自身の胸に向けられていた。

「私だつて、私だつてそれぐらいあれば・・・・・・・・!!」

「あ、あの・・・・・・・・？」

『そうですよねー、流石に私と同じ歳であの胸は反則・・・・・・・・』

「み、操緒さん、まで・・・・・・・・」

因みにそこに操緒と氷羽子さんも加わっている。

いつもだつたら更に美呂ちゃんも加わっているけれど今日はいない。女性陣？では瑤さんも今日はいない。学生連盟の仕事があるのだそうだ。

・・・冬琉さんはいいいのか、と思つたけど本人が気にしていないし気にしなくてもいいのだろう・・・
代わりと言つてはあれだが、ダルアさんが何故か増えている。

まあ、夫持ちの彼女とはいえその手のガールズトークは好きなのだ。
「そうですわね。」

私もその胸には興味があります」

「ひ、氷羽子ちゃんまで・・・」

唯一の味方が裏切つたことが分かつたのだろう、それなりに呆然とする奏。

「それだけあればお兄様に色々と・・・!!」

さあ、教えなさいな、奏」

まあ、あつちはあつちで大変そうだ。

僕とどつちが大変かと聞かれれば判断に困る所ではあるが・・・

「おい、なにたそがれてんだ。

サツサと答える。

因みに、『ただの友達です』なんて答えは許さねえからな」

『八條さん、あなたこそ冬琉さんとはどうなんですか？

バレンタインで美呂ちゃんと張り合つてまでチョコを渡してたんですから何か進展あつたんですか・・・？』なんて・・・聞いたらいいなあ・・・

「智春、お前は巨乳派なんだろうが、俺はお前との友情は忘れないつもりだ。」

「だから・・・正直に微（美）乳派（俺たち）に真実を語ってくれないか・・・？」

うるさい蹴策（変態）。

勝手に人の好みを決めるな。

ああ、どうせなら喋ってしまおうか？

いや、それは流石に不味いか。

「勝手に俺も含めてんじゃねえ・・・」

「グウツ！！」

蹴策の発言が気に入らなかったのか、蹴策の頭をぶん殴る八條さん。酒が入っているせいか、いつも以上に手加減がない。

また沈んでくれると思ったけど、残念ながらすぐに蹴策は復活した。

「お、おまえは毎度毎度・・・これ以上馬鹿になったらどうするつもりだ！！」

「安心しろ、お前はこれ以上ないってくらい馬鹿だ」

「ああ、うん。」

「それは僕も同感」

「そうかそうか、俺はこれ以上ないくらい馬鹿か・・・って、ふざけんな！！」

どこか気に入らない所があったのか、更に突っ掛かって来る蹴策。なにもおかしいところなんてないと思うのだが？

「と、言う訳で、どれだけ殴っても問題はない。だから殴られとけ」

そう言い、再び蹴策それの頭に拳を振り下ろす影使いの雄型悪魔。あ、話が脱線してる。今のうちに……

「追加の料理作ってきます」

「おう、帰ってきたら話の続きだ……」

「あ、あははは……」

そんな八條さんの言葉に愛想笑いで返し、冬琉さんたちに囲まれている奏を連れ出し、台所に向かう。

その際、冬琉さんからの視線が豪い厳しかった。彼女の視線は、

『明日の練習は覚悟しときなさい』

と語っているようだ。

台所に戻った僕たちは、取り合えず冷蔵庫の中身を確認する。

「奏、材料とお酒どれくらい残ってる……?」

「あー、材料は半分ぐらいで、お酒は3分の1ぐらい、です」

『まあ足りるでしょ。
もう潰れてる人も結構いるんだし』

いや、生きてる人はこれからも調子よく呑み続けるだろうし、潰れた人もそろそろ復活してきそうだ。

「・・・無くなりそうだったら杏のところに頼むよ・・・」

『・・・はあ・・・』

そうだね、それが良いかもね。

そんなことより、ほら、トモも作った作った。

氷羽子ちゃんにも頼まれてたでしょ』

「あ、ああ」

操緒に急かされ、再び調理に取り掛かる僕と奏。

ここまでひたすら調理作業に追われ、一度もまともに宴会に参加していない。

台所と宴会場を行ったり来たり、だ。

まあ、あの酔っ払い連中　特に冬琉さん　に絡まれるよりは全

然マシだけど。

「奏もごめんな。

新年度早々に、こんなことさせて」

「いえ、私も料理は好き、ですし・・・」

若干の後ろめたさを感じながらも、奏と共に料理を仕上げていく。

というか、あの人たち食べるのが異様なほど速いし量も半端じゃない。

作ったそばから消えていく。

それでお酒の消費が少ないかというところ、そう言うわけではなく、寧ろ比例して加速している。

「おい、智春。

ちよつと来てくれ」

僕が葱を微塵切りにして鍋にぶち込んでいると、突然後ろから声がかげられた。

振り返って僕に声をかけた人物に視線を向けると、

「サツサとしろ」

僕に声をかけたアニアが既に身を翻し廊下を歩きだしていた。

「ちよ、ちよつと待てよ!!」

急いで調理道具を片し、アニアの後を追う。

「ごめん、奏。

あと頼む」

「はい!!」

調理の残りの行程を奏に任せ、廊下をアニアに次いで歩き出す。

向かう先は宴会が繰り広げられている庭とは逆の方向で、屋敷の奥に向かっていた。

どうやらアニアの部屋に向かっているようだ。

それにしたって今更何の用だろうか・・・？

スピンネル ハンドラー 尖晶の演操者の問題が残っているとはいえ、黒鐵が復活したから特

に大きな問題はなかったと思うのだが。
とまあ、そんなことを考えながら歩いていると、

「入れ」

「あ、ああ」

いつの間にやら目的地に到着していた。

予想通り、アニアに割り当てられた部屋だ。

促されるままに部屋に入り、座布団を引っ張り出しその上に座る。

「単刀直入に言おう」

そんな僕の様子を見たアニアは躊躇う様子もなく、かといって慌て
ている様子もなく、普段の落ち着いた？彼女の雰囲気のまま、

「私を1巡目の世界に送ってくれ」

そう言ってきた。

32回 新年度（後書き）

気付けば今年度も終わり。

早かったなー・・・

ほとんど何もなのまま終わったんですが。

来年度こそは！！

・・・まあ、何もないんでしょうが・・・

33回 出発（前書き）

修学旅行イベントですが、これは外せないという観光地、もしくは旅館やホテルでのイベントなど、何かありましたら是非教えてください。さい。

何もなかった場合、私の経験を基に書くのでかなり物足りないものになると思うので、是非皆様のリクエストをお書きください。

33回 出発

今日の天気は生憎の雨模様。

バケツをひっくり返した様な豪雨ではないものの、それなりに激しい雨が降っている。

そんな天気とは反対に、駅の中は興奮の坩堝と化していた。

これから三泊四日。

気心の知れた仲である友人同士で過ごすのが嬉しいのか、親の監視の下から逃げ出せるのが嬉しいのかは知らないが、何にせよ楽しみなのはよく分かる。

いくらか教員から行動を制限されているとはいえ、普段から顔を合わせている面々と違う場所に行くというのは誰だって興奮するものだ。

「5班、全員揃いました」

周囲の興奮を余所に班長の露崎が人数確認を終え、担任の教員に報告している。

今のところ彼女の具合が悪いようには思えない。

時期も5月頭だし、一先ず安心して良いのだろう。

何が原因で彼女の病気が発病しなかったのかは分からないけれど、こうして元気な彼女と修学旅行に行けるのなら構わない。

以前の世界ではそれは叶わなかったことなのだから。

「・・・？」

どうしたの、夏目くん？

私の顔に何か付いている？」

そんな風に彼女の方を見ていたからだろうか、僕の視線に気づいた

露崎が僕の方に話しかけてきた。

一応彼女は僕たちの班の班長である。
なぜ男女混合なのかは置いておこう。

教員側に理由を聞いても対した理由などないのだろうし。

「い、いや、別に何も付いてないよ。

うん、露崎はいつも通り」

「そう・・・？」

僕の慌てたような反応がおかしかったのだろう。

首を傾げながらも一先ず返事を返してくれる。

「そつだぞ、波乃。

お前の顔には何らおかしな所はない。

おかしな所があるとしたら、こっちの馬鹿の頭の方だ」

「・・・いきなり割って入って来て随分な言い草だな、ニア」

唐突に現れて僕のことを馬鹿にしたのは、一人の少女。

150センチに達しているかどうかという少し小柄な体からはその
小さな体躯に似合わない自信が漏れ出していた。

髪は銀色に近い金髪を腰まで伸ばし、先端部分がドリルの様にグル
グルと渦巻いている。

・・・絶対潮泉翁の影響を受けていると思ったのだが、本人は一貫
して否定している。

じゃあ、早朝からたつぷり時間をかけてセットしているその髪型の
こだわりはなんなのか問いただしてみたいが、時間の無駄の様な気
がする。

彫りの深い顔立ちは厭でも僕らと彼女の人種としての違いを認識さ

せる。

・・・スタイルとかの問題は奏とか朱湮さんみたいな例があるから何とかなるのだろうが・・・

アニア・フォルチュナ・ソメシエル・ミク・クラウゼンブルヒ（13歳）

本人の希望により、僕と操緒（？鐵）の手によって1巡目の世界に送られ、既に5年過し僕らと同じ歳に成長してきた少女。

1巡目に彼女が跳んだのは、今後塔貴也さんが暴走しなかった時に起こるであろう歴史の矛盾を無くすため。

さらに、既にこちらの手元にイグナイターがあったことも大きかった。

の軌跡によって生み出されたプラグインは1巡目に必ず一度は存在しなければ矛盾が起きてしまう。

そうしなければ、こちらの世界にイグナイターが存在することはないからだ。

これが消えてもかまわないプラグインなら問題なかったのだが、イグナイターは“神”^{デウス}を倒すためには欠かせない装置の一つだ。

失くすわけにはいかない。

そう言った諸々の事情が重なり、アニアが跳んだのは、こちらの世界の時間的には、先日の宴会の翌日の午前中から夕方6時ごろまでの大凡半日。（僕や操緒の休憩も必要だったので）

流石にそんな短時間だったので、僕や操緒には上手い具合にダルアさんとかを誤魔化す説明を思いつける訳がなかった。

まあ、その辺りの説明は帰って来たアニアがしていたのでどうにかなったが。

とはいえ、問題はそこではない。

「ふん、奏からお前がおかしなことをしないか見張っておいてくれ

と頼まれているからな。

それとも、お前は奏を裏切るつもりか・・・？」

「そ、そんなつもりじゃないって！！

ただ・・・」

「ただ、なんだ・・・？」

問題なのは成長して戻って来たアニアがとつた行動だ。

彼女は突然、僕らの中学に編入してきたのだ。

それも、何故か僕のクラスに。

いや、変に悪魔が揃って佐伯兄妹を刺激するよりいいのかもしれないが・・・

というか、ただでさえかなりの美少女で、しかも外国人ということ
で珍しいのに、編入してきた時期も新年度が始まったばかりという
おかしな時期であったため、彼女は一躍校内で時の人となった。

そんな彼女と普段から親しげに　口喧嘩とも言う　をしている

僕は更に周囲の人間とか、樋口から質問攻めにされた。

奏とのことで大分慣れたとも思ってたけど、甘かった。

今度は寧ろ僕よりも奏に大量の質問がいったようだった。

一応アニアが適当にそれっぽい説明をしてはいたが、それで納得す
る訳もない。

ついでにいえば、敢えて重要な部分をあの運喰らいの雌型悪魔は話
さなかった。

それで困っている僕を見て楽しんでいたのだ。

・・・分かった、アニアが来たらこんな事態が起きてても不思議じ
やないことぐらい分かってたさ・・・

にしたって、予想を裏切り過ぎだ！！

しかも悪い意味で。

ある程度用事も済んだんだろうからサッサと国に帰れ。

クルステイナさんのことかもほとんど解決してるんだろうから、2年ぐらいは実家で過してろ。

「そ、その・・・露崎の体調が心配だったというか、班長の仕事なんてして大変だなー・・・と・・・」

「・・・体調・・・？」

別に私は元気だよ？」

「う、うん。」

それは分かっているんだけど・・・」

言えない。

以前の世界で露崎がこの時期に入院することになったから心配してるなんて、アニアならともかく、露崎本人に言える訳がない。

「そら、それが裏切りだ」

「だから、違っつて言ってるだろ！！」

僕の露崎に対する態度がそう見えてしまうのか、アニアは糾弾してくる。

せめて操緒が出てきてくれればいいのだが、流石にこんな知り合いが大勢いる場所で姿を現す訳にもいかない。

とまあ、結局普段通りの口論をアニアと（間に露崎を挟みながら）繰り広げていると、

「あら、夏目さんにニア。」

こんな所で会うとは奇遇ですわね」

予想外の人物の声が聞こえてきた。

その声につられ、声の聞こえてきた方向に顔を向けると、

「あ、氷羽子さん。」

「こりやまた、珍しい所で会うもんだ」

自身の通っている中学の制服に身を包んだ鳳島氷羽子が、旅行用のトランクケースの取っ手を片手に持って立っていた。

「見たところ、旅行の様だが・・・お前も修学旅行か・・・？」

「ええ、そうですわ。」

「と言っても、決められた集合時間にはまだ少し時間がありますわね」

駅の構内に備え付けられている時計を見上げ、そう呟く様は周囲の雑多な光景からは切り離され、一枚の立派な絵画として通用しそうなほど画になっていた。

そんな、突然現れた人間離れた美少女に浮足立つ僕らの中学の生徒たち。

まあ、そんじよそこらのモデルよりよっぽど綺麗だし、漂っている雰囲気も大人顔負けだ。

この少女が通っているクラスが彼女にどんな対応をしているか、それなりに興味がある。

「それにしても、氷羽子さん一人でいる姿も中々新鮮だね。」

大抵は蹴策と一緒にいるから」

「・・・そう言われれば、夏目さんにこういった形で会うのは初めてですわね。」

ですが、私だつて一人の少女なのですから、四六時中お兄様と一緒にいる訳ではないですわ」

いや、あなたが言つてもその言葉に説得力は皆無ですけど・・・隣にいるアニアもかなり疑わしげだ。

そうそう、隣と言えは。

いつの間にやら僕とアニアの間にいたはずの露崎さんが樋口たち班員の面々が集まっている所まで戻っていた。

別に気まづくなつたという訳ではないが、こちらに合わせてくれたのだろう。

ありがたい。

「・・・なんだか疑わしげですわね・・・

良いですわ、証拠をお見せしましょう」

僕とアニアの疑惑の視線に何か思うところがあつたのか、そんなことを言ってくる（自称）氷の女王様。（因みに蹴策は王様ではなく女王様付きの下男らしい・・・似合ってるから良いか）

それにしても、証拠？

いや、この場でそんなもの見せられるものなんですか？

「ええ、要は私が常日頃からお兄様という訳ではないと分からせればいいのでしょうか？」

それだけ言つて氷羽子さんは荷物をその場に置き、どこかへと消えて行つた。

いや、いきなり何がしたいのやらあの人は・・・

僕とアニアが二人揃つてそれなりに呆然としてしていると、

「おい、智春。

お前、あの子とどういう関係だよ!？」

樋口が何故か鬼気迫る表情で、班員の男子と一緒に押し寄せてきた。

「いや、どういう関係って言われても・・・友達？」

なんとなくそう言っているのかどうか分からないので、確認の意味を込めてアニアに振ってみる。

あの子の場合、そう軽々と友達だとは言ってはいけない気がするし。

「そこで私に振られても困るのだが・・・まあ、間違っていないと思うぞ」

アニアも自身がある訳ではないのだろう。

首を捻りながらそんな答えを返してくれた。

まあ、あの雰囲気は常人には分かりにくいところがあるから・・・同レベルの存在としては、美呂ちゃんとかだろうか？

奏も雰囲気は違えど、似たようなものかもしれないが。

「そうか、それなら、俺たちにも・・・」

夏目を経由していけばなんとかチャンスが・・・!!！」

「おお、そうだな。

樋口、まずは名前だ!!」

あの子の名前を!!！」

「ああ、分かってるさ!!」

と、言う訳で、智春!!！」

なんか豪い盛り上がってるな。

しかも、氷羽子さんに相手がない前提というのがまたすごい。これで蹴策のこととか教えたらどれだけ一気に沈静化してくれるだろうか？

アニアも若干引いてるし、露崎とか班の他の女子に至ってはドン引きしている。

「あの子の名前」「いや、やめといた方が良いよ」を・・・って、なぜ？」

他の面々には僕が情報を独占しようとしているように見えたのか、それなりに鋭い視線が向けられる。

いや、ホントに氷羽子さんはやめといた方が良いんだって。

万が一、いや億、兆、京、分の一で好意が樋口とか他の男子に向いたとしても、その男子が酷い目に会うのが確定している。

特に鳳島本家辺りから。

とまあ、そんなことよりも、現実的な意見としては、

「だって、ブラコンだからね」

これが最も適当だろう。

「「「「「・・・は・・・!?!?」「」「」

僕の言った単語が信じられなかったのか凄い呆けた表情になる男子の面々。

そりゃそうだ、僕だって奏がファザコンとか言われたら似たような表情になるだろうから。

だが、**事実**は**事実**。

彼女は実の兄に恋する乙女なのだ。

「だから、ブラコン、ブラザーコンプレックス。兄のことが大好きな妹なんだよ、あの子は」

「一応私からも補足しておくが、事実だぞ。

先程の会話を聞いていたのなら分かると思うが、彼女は兄である蹴策に普段からベツタリだ」

僕の言葉だけでは信じてもらえないと判断したのか、アニアが口添えしてくれる。

そのことばで、それなりに信用したのか、ようやく僕の言葉を咀嚼できたのか、

「……マ、マジかよ……」「」「」

樋口たちはその場に崩れ落ちた。

と、そんな彼らが崩れ落ちると同時に、

「お待たせしました。

……って、どうしたんですのこれ……？

「樋口くん、たち……どうかしたん、ですか……？」

氷羽子さんと、彼女の連れてきた証拠（証人）が到着した。

二人揃って、崩れ落ちている男子のことを不思議そうに見つめている。

「いや、気にしなくて良いよ。

って、なんで嵩月が……？」

「ああ、こいつらの場合勝手に期待して盛り上がって、その大きく

なつた炎が一瞬で消え去っただけだ」

「「??？」」

美少女が二人揃って小首を傾げているのはかなり良い画だ。

氷羽子さんが連れてきたのは奏で、奏本人もなぜ自分が連れてこられたのかよく分かっていないようだ。

奏の頭の上には疑問符が浮かんでいる。

「ああ、そうでした。

奏、先日の休日私たちがどこで何をしていたか、あなたの彼氏に話してあげなさいな」

「べ、別に、夏目くんとは、そんな、関係じゃ・・・」

氷羽子さんの後半部分の単語に反応して赤面している奏。
いや、ここでそんな反応されると・・・

「うわー、やっぱり夏目ちゃんと嵩月さんってそう言う関係だったんだ・・・」

「えー、私夏目くんのこと狙ってたんだけどなー」

「まあ、相手が悪かったと思って諦めなよ」

「夏目えー!!」

周囲の面々との今後が色々厄介になるんだから・・・
と、そんなことより、

「嵩月、この間の休日って？」

氷羽子さんの言ってることの内容の方が気になる。

この二人の秘密というわけではないだろうが、中々考え難い話の内容ではあるようだ。

「あ、はい。

この前は、氷羽子ちゃんと美呂ちゃんと、一緒に買い物に行きました」

で、奏の口から語られたのは、氷羽子さんと美呂ちゃんと一緒に買い物に行ったという事実。

アニアも誘うつもりだったそうだが、塔貴也さんとの実験の真つ最中だったため断念したそうだ。

「ふふん。

どうです、私の言ったことは本当でしたでしょう」

そんな証人の発言にやたらと得意気な顔になる女王様。

これまた珍しい。

「う、うん」

「あ、ああ」

そんな彼女に僕たちはそんな言葉しか返せない。

いや、それ以上返せても困るけど。

この場合、どんな反応が正解なのやら・・・

まあ、奏と氷羽子さんが中が良いことは良いことだとは思いますが。

天敵同士の悪魔の家の次期トップの二人が仲が良いのは良いことだ

ろう。

これまでなかった交流が限定的とはいえ行われているのは喜ばしいことだ。

「ふふ、それでは私はそろそろ時間ですしもう行きますわね。

では、夏目さんに奏、ニア、姿は見えませんが操緒も、機会があればあちらでお会いしましょう」

そう言って氷羽子さんはトランクを引き摺りながら姿を消した。

大方自身の集合場所に向かったのだろう。

それにしても、“あちら”？

どういうことだろう。

「嵩月は何か聞いてる？」

そう言った言葉の意味の確認のために奏に聞いて見ると、

「あー・・・確か、氷羽子ちゃん、の学校も行先は京都のはず、です・・・」

ああ、そう言うこと。

まあ、修学旅行の行先が京都というのは何らおかしいことはない。日本で一番の観光名所なのだし。

「結局、普段の道場の空気とあんまり変わらない気がしてきた・・・」

まあ、それはまだ出発前だからということだろう。

実際に電車に乗って目的地に着けばテンションも上がって来るだろう。

まあ、行動パターンから推測すれば同じような行動になるでしょうが」

青月組の面々とダルアが行動を起こそうとしていた。

放っておけばいいものを・・・

余計な刺激を起こして、変な事が起きなければ良いが・・・
特に鳳島家との問題とか。

外伝 奏 ドキドキ（前書き）

まず始めに、今回の地震や津波の被害によって亡くなった方のご冥福をお祈りします。

読者の皆様の中にも今回の地震によって被害を受けた方が多数おられると思います。

怪我や避難所生活を強いられておられる方には、心よりお見舞い申し上げます。

外伝 奏 ドキドキ

私が智春くんにチョコを渡してから大凡一月。

その間に操緒さんが一巡目の彼女と同化したり、秋希さんが副葬^{ベリアル・ド}処女^ルになってしまったりと色々あった。

色々という一言で片づけてしまっただけで良い様な問題ではないと思うけど、この一言が適切だと思う。

だって、卒業式とか日常でのイベントもあつたんだから。

そんな風に、ここ一月あまりの出来事を思い返しながら私は、

「こ、これが良いかな・・・？」

・・・で、でもこっちの方が・・・

あ、これじゃ目立ち過ぎて・・・」

自分の部屋に置いてある鏡の前で服を選んでいました。

「うー・・・朱湮さんぐらい、だったら・・・」

両手を自身の胸に持っていていき、軽く、ブラの下から持ち上げるように触れながら、その言葉を漏らす。

それによって、またサイズが合わず、きつくなってきたことを再確認する。

「・・・はあ・・・」

鏡に映り、溜息を洩らしている私は下着しか身に着けていない。

上下1セットのもので、どちらも水色を基調とし、黒いレースのりボンがブラとショーツの両方の前面部分に付いている。

私がついている下着の中でもかなりお気に入りのお気入りの下着の一つだ。

そんなあられもない姿で部屋にいるのは 私以外誰もいないとはいえ 自分でもはしたないと思う。 だけど、そんなこと以上に、私は着る服のことで悩んでいた。特に自分の胸部の膨らみを眺めながら。

何故か私は胸が大きい。

自分でもどうしてこんなに大きくなってしまったのか分からない。操緒さんや冬琉さん、それに杏ちゃんたちは『自分もそうなりたい』と言ってくるけど、私はこんなに大きいのは望んでいない。

肩も凝るし、どんな服を着たって胸が強調されてしまい可愛い服や下着を中々着ることが出来ない。

それに、男女を問わず、他人からの視線がその胸に向けられる。

中学に入ってからには智春くんが一緒にいるから少なくなっただけ、小学校の時は凄かった。

特に、同級生の男子の視線が。

一度経験していたから、以前の世界よりまだマシだったけれど、それでも大変な事には変わりはない。

一応、自分でもブラの着け方を基礎から応用、更には発展と全部学んだり、胸を小さく見せる下着を買ったりと、努力はしてるんだけど……

成長するスピードの方が速くて、あまり良い結果は得られていない。せめてもう少し背が高ければバランスが良いと思うのだけど、私の努力も空しくそっちの方はさっぱりだ。

別に私の背が低いと思っっている訳じゃないけど、以前の世界より4、5?ぐらい高くなって欲しい。

……朱湮さんみたいなモデルみたいなスタイルが羨ましい。

身長はあるし、胸も私みたいに無駄に大きいという訳ではない。

誰にも話した事はないけれど、私の理想は朱湮さんみたいなバランスの良い人。

「・・・や、やっぱり、これにしよう・・・」

胸の悩みは一先ず措いておき、私が選んだのは派手過ぎず、かとい
つて変に暗くもない（と思う）服。

上は、白い長袖のシャツで首元には赤いリボンが結んである。

シャツの上から淡いベージュのジャケットを羽織る。

下は、若干紫も混ざった濃い青を基調とした布に白の線が走ったチ
エック柄のロングスカートと、黒タイツ。

普段は一纏めにしてある髪も今日はおろしてある。

一応お母様に教えてもらいながら顔にも軽く化粧はしてあるだけ
ど、失敗してないよね・・・？

「・・・ど、どうかな・・・」

鏡を見ながらその場で、クルッと一回転。

髪とスカートが回転に合わせてフワッと浮き上がる。

「・・・ちよつと、かたい、かな・・・？」

どこかの制服みたいな感じの服に見える。

や、やっぱりもう少し柔らかい色調の服に・・・

で、でも、もう時間が・・・

チラリと時計を確認すると、約束していた時間まであと5分。

「い、急がなきゃ・・・」

慌てて床に散乱していた服の中からイメージに合っている物を探そ
うとした時、

「お嬢様」

「ひゃ、ひゃい!!」

扉の外から声がかげられた。

その声に咄嗟に返事を返したものの、

・・・噛んだ・・・

あまりにも突然のタイミングだったこともあって、噛んでしまった。うー、舌がヒリヒリして痛いです・・・

床に膝を付け、服を漁っていた体勢でピタリと体が止まり、手は口元を押さえてしまう。

何もこんなタイミングで声をかけなくてもいいじゃないですか・・・

「夏目さんと水無神さんがお越しになりました。

いつもの部屋にお通ししてあります」

え!?

も、もう智春くんも操緒さんも来たんですか・・・?

そう思ったけれど、5分前ならほとんど一緒、寧ろやって来て当然と言ってもいいかもしれない。

と、とにかく、

「わ、分かりました。

すぐに、行きます」

慌てて部屋一杯に散乱している服を一か所に纏めながら声を返す。

自分でも若干声が上擦っていた様な気がするけれど、それだけ焦っているのだ。

幸いにも今度は噛まずに済んだけど・・・

教えてくれた構成員の方も私が焦っているのが分かったのだろう、

何も聞かずにそのまま扉の前から遠ざかっていくのが分かる。

「……………はあ」

お祖母様に見つかからないよう祈りつつ、一先ず服はそのまま置き去りにすることにした。

そうして服の処分を決めた私は、溜息を洩らし、改めて自身の姿を鏡で見直してから、部屋を出て智春くんたちの待っている部屋に向かった。

? ? ? ? ?

結局あの服のまま智春くんと操緒さんに会うことになった。

二人とも、

『似合ってるよ、奏』

『うん、可愛い。』

私じゃその手の服はどうしても背伸びした感じになっちゃうけど、奏ちゃんなら丁度いいと思う』

そう言って褒めてくれたから良かったけど、もし失敗していたらと思うと…………若干目の前が暗くなる。

智春くんは気付いてくれなかったけど操緒さんは気付いてくれてたみたいで、

『メイクも良い感じに決まってるね。』
「うう、変にどぎつくないし、奏ちゃんの魅力を押し出してる感じだ」

『あ、ありがとう』

そう褒めてくれました。

嬉しいけど、できれば智春くんにも気付いて欲しかったな・・・
自分でも分かりにくいものだとは分かっていたつもりだけど、操緒さんに気付いてもらったのだから、智春くんにも褒めて欲しかった。そういつた意味も込めて、期待を込めた視線を向けていたのだけど・・・

結局智春くんは気付いてくれず、私が来たこともあったので今日の目的地に向かって歩き出してしまいました。

・・・ぐすん・・・

少し悲しい気持ちになってしまいます。

仕方ないことなのかもしれないけど、やっぱり何か言葉をかけて欲しかった。

折角、初めて智春くんの家に御呼ばれされた日なのだから頑張ってみたのに・・・

はっ！！

そ、そうだ。

私、これから智春くんの家に行くんだった。

服とかメイクのことで頭から抜けてたけど　忘れてたわけじゃないんです　、思い出してしまった。　忘れてたわけじゃない

思い出して、思い当たって、浮かれて沈んでいた気持ちが緊張へと変化する。

今日は日曜日で、休日。

二人の予定が空く日が今日しかなかったからだけれど、どこか仕組まれたものを感じてしまう。

何故なら、今日この日は智春くんのお母様、夏目久沙子さんが休日であるため家にいる日で、私が訪問することを智春くんが話したら、尚のこと気合が入ってしまったそうだ。

私なんかに期待されても困るのだけど・・・
というか、頼むから普通にいてください。

私はあなたの息子さんをこれから一生縛り付けていくんですから。社会的な立場も、気持ちも、想いも、全てに私という存在が付き纏う。

だから、決して歓迎なんかはしないでください。

ひよっとしたら家族の絆を壊してしまうかもしれないんだから、私、雌型悪魔という存在は。

?
?
?
?
?

私の緊張を余所に、私たちの足は目的地向かって進む。

智春くんと操緒さんはいつも通り、寧ろ、橘高道場に向かう時よりも軽やかな足取りなんじゃないかと思えるほど。

そりゃあ、自分の家に向かうのに足が重くなる人も少ないでしょう。軽やかになることも少ないでしょうが、重くなることも。

どうしたって、自分の寝る場所なんですから。

一方の私は、外面は普段通り。

だけど、内面ではすっごく緊張しています。

もう、今の気持ちよりも、お祖母様とリツちゃんの鍛錬、地獄のフ

ルコースを1日通して受ける方が気分的には楽だと思えるぐらい。
・・・流石に言い過ぎ・・・？

いや、やっぱりそれぐらいは緊張してる。

と、そんな風に考え事をしながら歩いていると、

「奏、どうかした・・・？」

さっきから“ぼー”っとしてるけど・・・大丈夫？」

気付けば目の前には智春くんの顔が。

わ、わわわわ・・・！！

「だ、だいじょぶです。

平気です。

なんともない、です・・・」

慌てて答えを返すも、焦って同じようなことばっかり繰り返してしまっ
まう。

それに、顔が紅くなっているのが分かる。

うー、咄嗟に正面に顔をもってくる智春くんが悪いんです。

「そう・・・？」

智春くんは、若干首を傾げながらも顔を正面に戻し、再び歩き出す。

・・・ふう・・・あ、危なかった・・・

・・・あれ・・・？

・・・何が危なかったのだろうか・・・？

『かくなでちゃん!!』

「ひゃい!?!」

気を抜いた瞬間、耳元から操緒さんの声が。
い、いきなりなにするんですか。

『トモが気付いてくれなかったからって、いつまでも落ち込んでちやだめだよ。』

気持ちは分かるけど、トモが相手なんだし・・・
寧ろ気付いたら気付いたで、怖いし、気付いてたら明日辺り雨とか雪じゃなくて、下着が降ってくるよ。

しかも、女物じゃなくて男物が・・・』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

操緒さんの言葉につられ、つい想像してしまった。

以前、加賀簀さんに盗まれた下着が空に舞っていた光景を。
それらが全て男性用の下着に変わる・・・

なんか・・・・・・・・いや・・・

『うえ〜、キモ・・・』

「・・・・・・・・」

私たちのやや前方を歩く智春くんから、つい視線を逸らしてしまう。
一方、私と同じことを考えてしまったのか、言いだした操緒さんが嫌悪感丸出しの表情で空を睨んでいる。

あの一、今睨んでもしょうがないと思うんですけど・・・

『むー、トモのくせに私をここまで不機嫌にさせるとは・・・許すまじ』

空に向けていた視線を智春くんに向け、何故かそんなことを呟く。
いや、その感情は流石に理不尽だと思えます。

確かに、あんなことを考えた（しまった）原因は智春くんかもしれないけど・・・

そんなことを思いながら、

「あの、操緒さん」

操緒さんに話しかけます。

『むー、一週間毎晩眠れないように枕元で騒いでやるつか・・・つて、なに？奏ちゃん』

操緒さんが一旦考えるのを止め、私の方に視線を向けてくれました。それにしても、一週間毎晩つて・・・

翌日以降の智春くんの安眠をそつと祈りながら、操緒さんに質問を投げかけます。

「智春くんのお母様つて、どんな方、なんですか・・・？」

『久沙子さん・・・？』

「はい」

確かそんな名前だったと智春くんに教えてもらったことを思い出しながら、足を前へと進める。

智春くんからどんな人かは一応聞いてはいるけれど、出来ることから操緒さんからも聞いておきたい。

戦いであれば情報が多いに超したことはない。

(いや、とくに戦いという訳ではないのだけれど……)

『どんなって聞かれても……明るい人、だとは思うよ』

「操緒さん、みたいなの……？」

私にとって一番分かりやすい明るい人と言ったら、操緒さんだと思
う。

リツちゃんもそうなのかもしれないけど、何か違う気がする。
後は、杏ちゃんとか、樋口くんもそうかもしれない。

『私？』

うーん、トモは似てるって言うけど、違うと思うな。

誰に似てるかってことなら……由璃子さん……かな……
『？』

「え？」

操緒さんの口から飛び出した人物？の名前は私の予想の斜め上を逝
っていた。

ゆ、由璃子さんって、華島のあの人ですか……？

『そうそう、華島……いや、柱谷？由璃子さん。』

勿論、小母様はあの通りの人ではないけど、似てるとは思っ
『

破天荒なところとか、特に。

それだけ言い残して、操緒さんは智春くんを追いかけます。

パツと見は少し早歩きになるように、だけど実際は浮いたまま。

最後に不安な言葉だけ残していかないでくださいよ……

「う、うー・・・」

自然と両手、両腕が自身の胸を守る様な体勢になる。流石に、早々ある話じゃないと思うけど・・・不安だ。操緒さんにはそんな意図はなかったのでしょうけれど、緊張に加えて余計な不安まで出てきてしまった。

というか、破天荒な看護師ってなんですか・・・？以前の世界通りになるのだったら、智春くんのお母様は再来年の今は再婚してるのでしょうか、魅力がある人だとは思っただけだ・・・

「・・・はあ・・・」

こつちの世界で智春くんと再会してからというもの、溜息の数がうなぎ昇りになってるような気がする。

そんなどうでも良いことを思いながら、歩を進める。もう、こうなったらなるようになるしかないのだし。

? ? ? ?

「でかした、息子よ!!」

夏目家に到着し、久沙子さんに挨拶した私と、私の自己紹介が終わった瞬間に、久沙子さんが発した一言がこれだ。何が“でかした”なのだろうか・・・？

「いや、いきなり何を・・・」

そんな言葉をかけられた智春くんも戸惑っている。
操緒さんは苦笑い。

「あんたみたいなのへタレ童貞の馬鹿息子にこんな美人な彼女ができるなんてね!!」

しかも、直くんより先ということが尚のこと驚きだわ!!」

そんな言葉を口に出し、あはははっ!!と久沙子さんは大笑いしている。

そんな母親の言葉にうんざりしたかのように額に手をやり、首を振る智春くん。

確かに、操緒さんとこんなお母様と一緒に暮らしているのだとすれば賑やかだけど、大変かもしれない。

一方の私はというと、

「あ、あの、その・・・」

美人という評価に照れてしまっていた。

顔が熱くなってしまっているのが分かる。

私なんかより、操緒さんとかひかり先輩の方が可愛いですし、朱湊さんや氷羽子ちゃんの方が綺麗ですよ。

なのに、私なんて・・・

そんな私たち当事者二人を余所に、

『小母様、トモの評価ですけどいつまでも“童貞”って言う単語は使えないと思いますよ・・・?』

「あら、どうしてかしら、操緒ちゃん？」

『だって、奏ちゃんみたいな彼女がいるんですから……』

「だいじょぶよ」

こんなヘタレの息子が早々手を出せる訳がないんだから！！
というかこの子が手を出さないんだったら私が手を出すわ。

こんな綺麗で可愛い子、何もしないでいるのは勿体ないじゃない
！！」

『そ、そうですね……』

「そうよ！！」

かなり力強く自身の意見を力説している久沙子さんがいた。
操緒さんですら若干押され気味だというのがすごい。

「……はあ……奏、取り合えず移動しよう」

母親のそんな様子（醜態？痴態？）を見かねたのか智春くんがそんなことを提案してくれた。

確かに、あまりこの場にはいない方が良いのかもしれない。
特に、

「はあ、はあはあ、はあ……」

なんだから、操緒さんに力説している久沙子さんの息が若干荒くなっ
てきてるし……

少しばかり身の危険を感じ、背筋が寒くなる。

ああ、操緒さんが由璃子さんに似てる、って言っていた理由が少し

ただど分かりました。

コクコク

智春くんの提案に（それなりに激しく）首を縦に振ることです承の意を示し、彼の後を追う。

後ろの方でまだ久沙子さんと操緒さんが熱弁を互いに振るっていたけれど、幸いにもこちらには振りかかってこなかった。

向かった先は、智春くんの部屋。

こゝ、ここはここでマズイかもしれない。

ベッドと勉強机、それに本棚とクローゼット式の収納棚。部屋の真ん中には四角い机が置いてあり、座椅子が二つ。

「ああ、どこでも好きなところに座っててくれて良いよ」

智春くんは、クローゼット式の収納棚を探りながらそんな言葉を私に放ってきました。

す、好きなところ！？

その言葉で若干鼓動が速くなる。

や、やっぱり座椅子でしょうか・・・？

でもでも、それだといくらなんでも寛ぎすぎな気もするし・・・

じゃあ勉強机の椅子？

いやいや、勉強するつもりじゃないんですからそんなところはないはず。

となると、ベッド？

ろ、露骨すぎるってば、私の馬鹿！！

でもでも、そ、その・・・こゝ、恋人、同士、なんだから・・・

そ、それぐらい・・・普通・・・？

まさか、こんなタイミングで再契約することになるとは思わなかったけど、でも、今なら、いや、このタイミングなら……!!
で、でも、やっぱり、もっと慎重に。

だけど、待ってるだけじゃだめだって、雑誌にも書いてあったし・
・氷羽子ちゃんや、美呂ちゃんにも色々言われた訳で・
いや、そもそも、そんなことをして欲しくて今日は伺った訳じゃないんだから。

そう、そうよ奏、たとえそんなつもりじゃなかったのだとしても、
今なら!!

……ってあれ?

否定したはずなのに、肯定してる!?

「あつた、あつた。

……って、どうしたの奏?」

「はっ!!」

い、いえ、なんでもないです!!」

「そう……?」

クローゼットを漁っていた智春くんが目当ての物を見つけたのか、それを手に持ち、振り返って私の方に視線を向けてきました。

その時、私は表情がコロコロ変わっていたらしく、すごく心配そうに智春くんが声をかけてくれました。

それに慌てながらも　頭の中の妄想を頑張って打ち消しながら
ちゃんと返事を返します。

不審そうな顔をしながらも、気にしないことにしてくれたのか、それとも他に何か気にかかることがあるのか分かりませんが、智春くんは一先ずその問題にはこれ以上触れないでいてくれることにしようです。

そして、納得した様子でそのまま座椅子に腰掛けました。

うー、そっちで良かったんですか。

若干気落ちしながらも、私も智春くんの様に座椅子に腰掛けます。ええ、決して残念だとか、不満があるとか言う訳じゃないんです。ただちよつと、勝手に期待して舞い上がった自分が情けなくて。あ、また落ち込んできそう。

「うー」

「？」

よく分からないけど・・・はい、これ」

そんな私の様子に首を捻りながら智春くんが差し出してきたのはビニール製の水色の袋。

袋の表面には赤や緑などの様々な色の星が散りばめられ、鮮やかな模様を創り上げていた。

そんな袋の入り口は群青色のリボンで結ばれ、閉じられている。

「・・・え・・・？」

だけど、私はそれが何なのかよく分からず、首を傾げてしまいました。

それこそ、さっきまでの頭の中の熱など忘れ、ただただ呆けてしまったよう。

「いや、そこで首を捻られても困るんだけど・・・」

そんな私の様子を見た智春くんは苦笑を洩らしながら、この袋がな

んなのか説明してくれた。

「これは、バレンタインのお返しだよ。

ほら、明日が14日だから」

「ああ」

そう言えば、今日は3月13日。

確かに、明日がホワイトデーでした。

智春くんのお家にお邪魔して、久沙子さんにお会いするということが頭がいつぱいで、そんなこと　　って言ったら失礼か　　はすっかり頭から抜けていました。

そつと机の上に置かれた袋を手に取り、胸の前で抱き締めます。

なんだか・・・暖かい・・・

ビニールの無機質な冷たさがあるものの、確かに私の手の中にある“それ”には暖かみが在った。

決して私の手の体温や暖房の温度ではなく。

「あの・・・ありがとうございます」

それを感じ取った私は、顔に笑みが広がるのを自覚しながら、智春くんにお礼を言っていました。

こんな暖かい気持ちを、私が忘れていたのに、与えてくれてありがとうございます。

「うん、どういたしまして」

そんな私に智春くんも笑いかけてくれました。

それは、普段から樋口くんや蹴策さんとしているふざけた笑い顔じゃなくて、自然とこぼれ出たような優しい笑み。

この人を好きになって、この世界でも再び出会うことが出来て良かった。

彼の笑みを見て、そう、心から思えました。

そして、そんな穏やかな気持ちのまま、胸には“お返し”を持ったまま、自然と私は智春くんに近寄っていき、

「ん」

彼の唇に、私の唇を重ね合わせていました。

ふふ、“お返し”のお返し、の、っ・も・り

舌と舌を絡めるようなことなどしない、触れ合うだけの優しい口づけ。

それは、今の私たちの関係そのままを示してくれているようで。

出来ることならもっと感じていたいと思えるほど、私を幸せな気分にしてくれました。

外伝 奏 ドキドキ（後書き）

私自身は、幸いにも今回の地震や津波の被害を受けずに済みました。なので、今後も週一のペースであげていけるはずです。

一方で妹が仙台にいるのでかなり不安です。

幸いにも怪我は無いようですが原発の問題もあるので、油断はできないのが現状です。

両親は妹に早く帰って来いと言っていますが、チケットなどは既に売り切れており思うように動けないのが現状のようです。

こんな世の中ですが、この作品が少しでも皆様の楽しみとなるのであれば何よりです。

34回 露天風呂（前書き）

先日から実家に帰っています。

妹も無事実家に帰ってきて、一安心。

ですが、叔母の家族まで避難してきて大混雑。

しかも、そこに生後半年程度の赤ん坊までいるとくりゃ・・・凄く騒がしいです。

おかげで執筆作業が進まないこと進まないこと。

34回 露天風呂

「着いたぜ、京都!!」

新幹線から降りて一言、樋口がそんなことを言う。

やたらとテンションが高いのは、3日目の自由行動への期待が大き
いからであつたりするのだが・・・早くないか・・・?

今日明日とクラスごとに決められた観光地や店を巡り、明後日は丸
一日班ごとの自由行動だ。

と言つても、宿から出る時と戻ってくる時だけメンバーが揃ってい
ればいいので、戻ってくる時の集合時間と場所だけを決めてしつか
りと守れば個人行動も何ら問題の無いものとなつてしまつている。

この時に問題が起きると非常に面倒な事になるのだが、その辺りは
個人の責任感に委任することになっている。

「ああ、着いたな!!」

更にテンションが高い人物?が一人。

ググルと金髪の先端をドリルの様に巻いた女子生徒、アニアだ。
古き良き日本の文化が残っている京都は、アニアにとってはかなり
楽しみらしい。

5年(前の世界も加えれば+6年程)も過しているのにそこまで期
待出来るものなのか少々疑問だが、本人がそうなのだから別に良い
か。

「ふ、二人とも、先行くよ」

班長である露崎がトランクをコロコロと転がしながら、ホームで騒
いでいる二人にそんな声をかける。

僕たちの班はクラスの中では最後の番号の班であり、新幹線から降りたのも最後だ。

当然、他の班の面々は既にホームを下り、改札を抜けていることだろう。

急がないといけないのは自明の理だ。

「ほら、ニア、樋口、行くぞ」

班長を手伝うつもりで、僕も二人に声をかける。

「むう・・・智春のくせに私に命令するとは・・・だが、まあいい。早く行動すればその分観光名所を巡れるというものだ」

意外とニアはすんなり折れてくれた。

それだけ京都の神社やお寺が楽しみなのだろう。

僕には何が良いのかよく分からないが、本人が楽しそうだから別に構わない。

というかそんなに楽しみなのなら、嵩月祖母あたりに日本の伝統文化を習ってくればいいと思う。

懇切丁寧に教えてくれることだろう。

「待てよ、智春。

京都駅のホームにもそれなりに色んな言い伝えやら怪談とかがあるんだぞ!!」

その場所の写真も取ってないのに!!」

「ああ、はいはい。

分かったから行くぞ」

右手に旅行鞆、左手に樋口の上着の襟を掴み、足を進める。

こうでもしないとこいつはついて来ないのだから。

実際以前の世界では、その所為で僕はバスに乗るのが遅れ、タクシ
ーで合流する羽目になったのだ。

幸いにも今はそれなりに握力が付いてきたから、樋口一人を引つ張
ることなど造作もない。

そんな馬鹿げたことで貴重な財布の中身を失うなど二度とごめんだ。

「ま、待ってくれ智春!!」

首!!

首、が閉ま、つて・・・!!」

「大丈夫なはずだよ。

圧迫感はあるかもしれないけど、気道は確保してるから、呼吸困
難で死ぬようなことはないはずだから」

そうでもしないと、このオカルト馬鹿は逃げて撮影やら調査といっ
た行いに走るのだ。

ちなみに、この襟の持ち方は、何故か奏に教わった。

より正確に言えば、氷羽子さんに教わった奏に教えてもらったのだ。
まあ、あの氷姫がこの持ち方を奏に教えた理由が、奏に僕のことを
無理矢理連行できるようにするためだと知ってからは空恐ろしいも
のを感じずにはいられなかったが、それ以上に普段からこんな技を
かけられている蹴策に心底同情してしまった。

「何をしている、智春!?

っと、そいつの世話をしていたのか・・・仕方ない。

サツサといくぞ」

「ちょ、二、ニアさ、ん!?

助け・・・」

樋口の様子を見たアニアも樋口を助けようとはせず、寧ろ僕のことを支持する様な言葉を送ってくれた。

ありがたい。

・・・何故だろう、不覚にもドキッとしてしまった。

僕は奏と恋人同士で、操緒のことも好きだけれど、ひよっとしたら、奏や操緒に褒めてもらえるより、アニアに褒めてもらえるのが一番嬉しいかもしれない。

・・・多分、普段とのギャップの所為なのだろうが・・・

「はいはい、あと少しで着くからそれまで我慢な。

あ、階段は上下するからかなりキツイけど頑張れよ!!」

とりあえず樋口に一声かけ、僕とアニアはホームから改札口へと向かう階段へと足を向けた。

「ちよっ!？」

ああ、か、グゲ!？」

上下運動は!!!!」

樋口の悲鳴を耳元に大量に浴びせられながら。

全く、耳の鼓膜が破れたらどうするつもりなんだか・・・

?
?
?
?
?

ザッバーン!!

旅館内の浴場にそんな音と共に、水（湯）飛沫が飛び散っていく。浴槽に跳びこむのは列記としたマナー違反だが、現在屋内の浴場にいるのは僕らの中学の生徒たちだけなので特に誰も注意しない。寧ろ、飛び込んでいった人物に自分も続こうとして、急いで体を洗っている。

そんな風にしてはしゃぐクラスメイトや、他のクラスの男子達の姿を視界に収めながら、僕は何故か誰も向かっていない露天風呂の方へと向かうことにした。

・・・その時は湯気やらなんやらで気付かなかったけれど、入口付近にこんな注意書きがあつたらしい。

【この先混浴ですのでご注意ください】

「おー!!」

そんな注意書きのことなど知らずに足を踏み入れた先では、絶景とまではいかないにしろ、中学生が使うには少々勿体ないであろう光景が広がっていた。

空には満天の星空。
周囲の木々は夜の闇に吞まれながらも、旅館の明かりによって輪郭を顕わにしていた。

今は青々と葉が生い茂っているだろうが、秋には見事な紅葉見れるはずだ。

その事に気づき、少し残念に思いながらも、折角の露天風呂を楽しまないのは損だと思い、いそいそと浴槽へと身を浸ける。

・・・飛び込みはしない・・・

というか、飛び込むにはそれなりの深さが必要なのだ。

浅ければ腰を強打してのたうち回ることになるだし……流石に身に何も纏っていない　一応タオルがあるが、ほとんど無意味だろう　状態でそんな醜態をさらす破目になるのは避けたい。

「……ふう……」

今日一日のことを振り返りながら、大きく吸った息を吐き出していく。

それと共に体の力が抜け、四肢の先からじんわりと熱が沁み込んできて、体から疲れが抜けていくようだ。

やれ美肌効果だ、やれ腰痛や肩凝りに良いだ、色々言われているけれど、温泉の一番の効能はこうやって疲れが抜けていくことだと思う。

今日だけでもかなり樋口が暴走してくれたし、アニアも予定に無いところまで行こうとしてかなりてこずらせてくれた。

その度に僕や、班長である露崎が止めなければならなかったのだから、面倒くさいったらありやしない。

これが後3日程度は続くのかと思うと若干思うところが無い訳ではないが、今更気にしない。

これぐらいの騒動なら、洛高で起きていた騒動に比べれば全然大したことはないのだから。

「……たまにはこんなのも良いな……」

屋内の喧騒を聞きながら、露天風呂という一種の切り離された静謐な空間に身を任せる。

こうして独りきりになるのはいつ以来だろう。

身体的には1年と少しなのだろうけれど、主観的には凡そ5年ぶりだ。

普段からほぼ必ず一緒にいる操緒も今は姿を消し、奏やアニアは隣の女子風呂のはず。

樋口も中で騒いでいるし、嵩月組の方々や橘高道場の皆も京都からは遠く離れた地元の街にいるはず。

彼らのことが嫌いという訳ではないし、寧ろ普段から一緒にいることで楽しいから別に何も問題はないのだけれど、やはりたまには独りでごうして過すのも良いものだ。

というか、こんな学校行事じゃないと独りではいられない僕のプライベートっていったい・・・

そんなことに思考が進み、若干気落ちしながらも、体をお湯に浮かべる。

こんな場所でするのは自分でもどうかとは思うけれど、幸いにも周囲には誰もいない。

全身を露天風呂に浸け、力を抜き浮力にまかせて仰向けになった体全身を風呂の水面に浮かび上がらせる。

こう、浮いているのが体の前面ではなく背面だったら、水死体が浮かんでいるのではないかと思えるぐらい脱力している。

・・・一応誰か来ても大丈夫なように、タオルは腰に巻いている。マナー違反だけどこれぐらい許して欲しい。

目の前には夜の闇の中に輝く数多の星々

建物の光もこの場所には届いていないようで、幸いにも星の瞬きがよく見える。

こんな雄大な星空を眺めていると、いかに自分が矮小な存在なのか改めて思い知らされる。

「・・・そんな僕が世界を救おうとしてるんだもん・・・
・・・ふふ・・・」

我ながら自分自身がおかしく思えてくる。

傍から見れば気持ち悪い奴だとは思っけど、自分で自分のことを嘲笑してしまっ。

こんな僕でいいのか

と。

今更ながら。

奏の相手だって、もっと良い相手がいるだろうし、直貴の奴の保険だってもっとマシな人間がいるだろう。

やり直したいとは思わないが、そう思ってしまう。

もっと、最善の選択があつたのではないかと。

僕と奏の関係も、世界崩壊という時間の制約、時に焦り、その結果として供に歩み行くようになったのではないか。

僕が奏に抱いている感情も単に僕が愛だ、恋だと思っているだけで、本当は愛情にほど近い感覚であるだけなのではないだろうか。

チャプ

そんな風に思っていた僕の耳に音が届いた。

他の人間なんて誰もいないはずのこの場所に誰かが湯に入る様な音が。

(少なくとも男湯の扉が開けられた音はしなかった)

しかも、それはお湯を掻き分け僕の方に向かってくるような音だった。

「・・・智春くん、だから・・・」

「え・・・?」

それは男湯であるこの場所では聞こえるはずがないのだけれど・・・

確かに、聞こえた。

浮いている体の腰を風呂底につけ、視線を声が聞こえてきた方向へと向ける。

そこには、

「奏……」

奏がいた。

バスタオルを体に巻き、しっかりと肝心な部分は見えないようにしてはいるが、体の凹凸までは隠せていない。

髪を結い上げ、後頭部で纏めている。

中学2年生、という年齢からは考えられないほどの大人の色気を纏った少女の姿がそこにはあった。

そんな彼女は、しっかりと僕のことを見据え、

「智春くん、だから、私は、好き、になったんです。

智春くん、だから、操緒さんも、身を任せてるんです。

智春くん、だから、ニアちゃんも、信頼してるんです。

他の誰でもない、貴方だから……身を任せられる」

そう、僕に向かって言ってくれた。

諭すでも、怒るでも、説得するでもなく、ただ自身の想いの丈を言葉にのせてぶつけてくれた。

そして、確かに、その言葉は確かに僕の心に届いている。

独りになって緩んでいた心が、また奏によって締めつけられていく。

「だから、自分に自信を、持って……」

貴方は私の契約者なんだから

言葉にはしなくても、僕には奏がそう言ってくれたような気がした。

「・・・そう、だね・・・」

僕がいくら自分に自信を持ってなくても、奏には自信を持てる。

僕には勿体ないぐらい、出来過ぎた恋人だ。

そんな彼女が、操緒やアニア達が、僕のことを認めてくれる。

そうだ、なのに僕がこんなことで悩んでてどうするんだ。

彼女たちの期待にこたえるため

それで良いじゃないか。

世界を救うのはそのついでだ。

奏たちの期待に答えていくことにしよう。

そうすれば、ついでで世界もどうにか出来るはずなんだから。

時に焦った結果で共に歩むようになったのであったとしても良いじゃないか。

二人の心は寄り添っているのだから

そう考えたら、先程までの心の中にあつた狂騒が消えていた。

「ありがとう・・・奏」

フルフル

緩んでいた僕の心を再び強く、奏への情熱という形で締めつけなおしてくれた。

そのことにお礼を言ったのだけれど、首を振ってやんわりと断られ

てしまった。

まるで、何を今更、と言われた気分だ。
確かにそうかもしれない。

僕たちは互いに支え合ってこれからも生きていくことになるのだから。

『もう一人の当事者を放って、なに良い雰囲気になってるんだか・
』

「う、うわ・・・!？」

操緒、驚かすなよ!!」

『ふうんだ、どうせ私の入り込む余地なんて今更ないですよー、だ。
そんな格好で真剣に見つめ合ってる中二カップルなんて知りませ
ん!!』

それだけ言っていきなり現れた操緒は再び虚空に溶けるように消え
ていく。

その際、

『トモと奏ちやんの馬鹿!!』

僕らにそんな言葉を言い残して。

そんな風に突然現れた操緒によってその場の雰囲気は思いつきり壊
され、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

改めて、互いの格好に視線がいく僕と奏。

僕は腰にタオルを巻いただけの状態。

それもお湯で体にピッタリと張りついて、下手に全裸でいるよりもよっぽど恥ずかしい。

僕の正面にいる奏も、似たような格好。

隠しているのは胸元から膝の最上部あたりまでなのだが、これまたお湯でピッタリと張りついて・・・こう・・・有体に言って・・・
・・・凄いい、エロいです、奏さん。

「キヤッ!?!」

それに気付いたのか、奏は体全身を腕で抱え込むような体勢をとり、すぐに湯に体を浸ける。

幸いにもこの湯は乳白色に濁っており、湯に体を浸ければ見ることはできない。

だが、湯に浸かったは良いものの、目の前には僕の・・・その、タオルの部分。

しかも、さっきの奏の格好に知らぬ間に反応していたわけで・・・

「・・・・・・・・っつゝ・・・・・・・・!!」

顔を紅らめるところではなく、茹であがった蛸のように真っ赤にしてすぐさま顔を体全身を反対側に向けることで“それ”から視線を背ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕も気恥しくなり、体全部を使い奏とは逆の方に視線を向ける。

背中合わせになり、黙り込む僕と奏さん。

・・・さっきまでの空気はどこえやら、やたらと桃色な空気に変わってしまった。

?
?
?
?

一方の男子浴場では、

「おい、樋口!

混浴だぜ、混浴!!

女子が誰かいるかも!?

「馬鹿やるー!!!」

「ふうっ!?

な、何をするんだ!?

「いまどきの女子中学生が、そんなところに行くわけないだろうが
!!!

しかも、俺たちの最大の目的である嵩月や佐伯みたいな女子が行
くわけないだろ!!!

行ってる女子がいたとしても、それはどうせ期待もしてない奴な
んだよ!!!

「そ、そうか!!!

「ああ、だから……急いで部屋に戻るぞ!!!

「そうか!?

お前が仕掛けてたあれを使えば!!!

「おつよー!!」

「急ぐぜー!!」

こんな会話が繰り返され、折角の機会を見逃していた。

いや、希望を打ち砕かれなかった分危機を察して逃げたと見るべきか・・・

どちらにせよ、その後彼らは理想郷は見届けられず、代わりに地獄を見る羽目になったと記述しておく。

34回 露天風呂（後書き）

知らぬ間にこんな微妙にシリアスな展開に。

もつと樋口とか使ってバカやるつもりだったんだけどな。

しかも、修学旅行全く関係ないですし。

その分次回辺りで・・・できたらいいな・・・

35回 低気圧(前書き)

曜日の感覚が消えてきました・・・やべえ

大学が始まってもちゃんと通えるかどうか凄く不安です

35回 低気圧

露天風呂の一件の翌日、燃え尽きている樋口達（何があつたかよく知らない）を余所に、僕は気持の良い朝を迎えていた。

普段は朝4時に起きているから、5時半ぐらいたと少し寝過ぎた感じになる。

こう、普段の自身の生活を改めて振り返ってみると、やたらと健康的だ。

老人という年齢でもあるまいに……

良いことなのだろうけれど、中学2年生の生活じゃないやなく、と改めて思ってしまう。

ただ、そんな僕の気分とは真逆で外は生憎の雨。

昨日の地元の雨が遅れてやって来たような感じだ。

風向きとかが違うからそんなわけないだろうけれど……

心なしか、昨日の雨より激しい気がする。

風もかなり吹いているし……

「顔でも洗ってこよう……」

布団で眠っている樋口達を跨ぎながら部屋から出る。

部屋の扉を開け、洗面所へと向かう。

流石にまだ早いらしく、教員の方々も起きていないようだ。

いや、起きてはいるのかもしれないが、まだ部屋から出てきていない。

昨夜はかなり騒がしい気配で満ち溢れていた廊下も今ではひっそりと静まりかえっている。

それでも、宿泊客である僕らの朝食を用意してくれているのか、従業員の方々が活動している場所にはそれなりの活気があった。

バシヤツ！！

冷たい水道水を顔に浴びせ、まだ少しぼんやりしていた頭を覚醒させる。

うん、眼が覚めた。

目の前にある鏡で寝癖がないかどうか確認しながら髪を整えていく。蛇口から放たれる水流を両手を皿のようにして受け止め、口に持っていていき、その水を口に含み、口内を濯いで綺麗にする。口内に残っている水は勿論、吐きだしておく。

別に飲んでしまっても良いのだけれど、なんとなく気分的にそれは遠慮したいものがあるのだ。

「よしっ！！」

もう一度鏡で自身の顔を確認し、特に異常がないことが分かったので洗面所から出る。

洗面所から出て、僕が向かった先は階段。

部屋に戻り、未だに寝こけているであろう班員の寝顔を眺めているのも面白いかもしれないが、そんなことで残りの起床時間までの1時間を潰すのは勿体ない。

折角だから朝の京都の空気を吸ってこようと思ったのだ。

人はいないかもしれないけど、玄関の扉は開いているだろうから外に出ることはできるだろうし。

雨が降っているが、屋根の下なら問題ないだろう。

・・・それに、少しは体を動かしておきたい。

シャワーなどが朝から使える訳がないのだし、時間もあまりないのだから普段のトレーニングができるわけではないが少しは動いておいた方が良さだろう。

・・・なんか、思考がかなり秋希さんや冬琉さんに毒されてきた気がしないでもないが、気にしない。

軽くストレッチをしておくだけでも大分違うだろう。

全くやらない日はなるべくつくらないようにしないと、トレーニングは続かないものだし。

一日でもサボると、そこからズルズルとサボりたい欲求が続いていくのだから。

そんなことを思いながら階段を下り、一階にある旅館の玄関へと向かう。

と、

「……なんだ、ありゃ……？」

ロビーに置いてある観葉植物に紛れておかしなものが生えていた。

いや、よく見れば鉢から生えている訳ではないようだから、隠れている（隠している？）つもりなのだろう。

不自然なまでに鉢が集まって、旅館のロビーとは全く合わない鬱蒼とした景観を作り出しているし……

「……とりあえず……」

近寄って見る。

ひよっとしたら僕の見間違いかもしれないし。

だが、そんな僕の予想を裏切り、その生えている（隠れている）モノは消え去ることがなかった。

いや、寧ろ僕が近づくことによって動揺したのか、ピクピクと動いている（震えている？）。

「……」

やはり、見間違えではなかった。

何だってこんなものが京都の旅館にあるのか……？

いや、そもそも何故こんな隠れているつもりで尚のこと目立つようになっているのか・・・？
色々と疑問が浮かんでくるが、とりあえず、

「なんで、ネコ耳・・・？」

それが一番大きな疑問だろう。

ネコ耳。

いや、猫耳。

三角の形をしており、人の耳とはまるで違う。

生やしている猫の毛の色や質によって様々な模様が存在するが、いずれも猫という動物とは切っても切り離せない存在である。

獣耳という分類から言えば、犬耳だとか、バニーガールが装着しているウサ耳などがあるが、ああいった耳は須らく装飾品だ。

だが、今僕の目の前に鎮座？している猫耳は間違いなくその様な装飾品ではない。

なぜならさつきから動いて（震えて？）いるし、いつそ艶やかに思えるほど魅力的な黒の毛を生やしているからである。
こう、引っ張ってみたくなるぐらい見事に生えている。
上に看板でも吊るしておいたら、人気が出るだろう。

【引っ張ってください】

みたいな、看板を。

と、そんなことはともかく・・・

『・・・なにしてるの、奏ちゃん・・・？』

ビクッ!!

問題は正面にあるネコ耳の主が、僕の恋人だということ。操緒も周囲に誰もいないことから姿を現している。

「・・・な、なんのこと、で、しょう・・・?」

『いや、返事をするってのも・・・』

目の前で声が発せられた訳だが、当の本人が姿を現さないため、僕たちから見るとネコ耳が喋っているように見える。

・・・シユールだ・・・

だけど、傍から見れば僕と操緒はネコ耳と会話をしている痛い人間になってしまう。

それはそれで避けたい。

幸いにも周囲に人はいないけれど、そろそろ教員も起きてくるだろうし、従業員の方も受付に来るだろう。

「・・・奏・・・」

とりあえず、そこにいるのはどうかと思っ

「・・・」

『隠れてるだけじゃどうにもならないって・・・』

ネコ耳が横に揺れる。

奏が首を振って拒絶の意を示しているのだ。

いや、恥ずかしいのは分かるけれど、このままそこにいたんじゃ、

本当に取り返しのつかないことになると思うのですよ。

というか、以前の世界ではそのネコ耳のまま登校してきたというのに……

その度胸は……ないんだろうな……

「……なあ、操緒……」

『ん？』

「何か良い方法ないか……？」

こう、ネコ耳を隠してても不自然じゃない方法が。

一番良いのは帽子を被ることとか、仮装の一つとしてしまうことなのだろうけれど、残念ながら今は修学旅行中のため、仮装はおろか、帽子を被ることさえ難しい。

となると、髪型で誤魔化すのが僕には一番良い案に思えるのだが……

『うーん……奏ちゃんは髪が多いから、やってできないことはないと思うけど……』

『凄い、不自然になると思うよ？』

そう言うって操緒が例として挙げたのは、ツインテールだとか、無理矢理上に髪の一部を持って行ってから纏めるポニーテール。

後は、パイナップルみたいになる髪型（名称が分からない）などなど。

いずれも、創り上げるには一手間かかる髪型だ。

ついでに言えば、奏に似合うとも思えない。

それでも背に腹は代えられないというか、奏はその案に食いついてきた。

なんでも、自分でも四苦八苦しただらしいのだが、どうしてもネコ耳が少しは見えてしまう髪型ばかりになってしまったのだそうだ。

『よし、じゃあ鏡のあるところにLet's Go～!!』

「なんでそんな部分だけやけに発音が良いんだ・・・？」

『ニアちゃんに習ったから!!』

奏の髪を（間接的にはいえ）自身が弄れるとあって、操緒はかなり機嫌が良い。

一方の奏は、周囲にキョロキョロと視線を向けながら急ぎ足でかといって音を立てることなく 進んでいった。

まるで忍の様だ。

それでも、頭にはネコ耳が付いているのだからどこか緊張感に欠けるのは否めない。

幸いにも売店が開いており、そこで土産物と思わるピンやゴムといった髪留めを操緒の指示のもと僕が購入しているため、髪留めに関してであれば問題はない。

購入したモノは既に奏に渡してあるため、僕はロビーで待機である。あんまり離れ過ぎると操緒が活動しにくくなるため、外に出ることはできない。

なんとなく残念ではあるが、ロビーにも人がいるわけではないので、この場所で済ませてしまおう。

そう思い、ストレッチを始める。

それが終わると、腕立てや腹筋などの簡単な筋トレ。

あまり周囲に迷惑をかける訳にもいかないので、程々にして済ませる。

その後はイメージトレーニング。

普段は、自身の想像上のシャドー相手に実際に木刀を振るっているが、流石に旅館内でそんなことをする訳にもいかないので、座って目を閉じ、頭の中だけで戦闘をシミュレーションする。

頭の中に浮かぶ相手は、加賀箒が操るその名の通り真赤な薔薇の様なアスラ・マキナ機巧魔神、ロドナイト薔薇輝。

普通に体を動かす時なら、秋希さんや冬琉さん、それに八條さんなのだが、イメージだけなら、アスラ・マキナ機巧魔神にしている。

幸い、今のところ？鐵を使う様な戦闘は起きていないが、準備しておいて悪いということはないだろう。

目の前に浮かび上がるロドナイト薔薇輝から4本の鉛色の鎖が伸びてくる。

1本は僕に、残りの3本は？鐵に巻きつこうと勢いよく向かってくる。

それを？鐵に大剣を振るわせ、空間を切り取ることで防ぐ。だが、それを越えた残りの2本が向かってくる。

1本は体を横にずらすことで避け、もう1本は重力球で撃墜する。鎖が巻き戻っていく隙を逃さず、？鐵から重力球を発射させる。

？鐵の左手の先から勢いよく打ちだされた“それ”は、普通の人間ならばまず反応できないであろう速度で加賀箒達に迫る。

だが、それを迎撃しようとロドナイト薔薇輝から鎖が迫る。発射された重力球は一直線に進んでいるため、迎撃は容易だろう。

しかし、そうはさせない。

？鐵が右手に持っている大剣を振るい、重力球の進む先に空間の裂け目を作りだす。

出来上がった裂け目は、重力球を取り込むと同時に、迫っていた鎖から身を守る盾となる。

その様子を見届けた僕は、再び？鐵に大剣を振るわせ、加賀箒達の背後に裂け目を創る。

すると、そこから先程向かっていた重力球が飛び出してきた。

咄嗟のことに反応できない加賀篝だが、彼の使い魔^{ドクター}であるイングリッド（こちらの世界ではまずあり得ない）が防ごうと反応する。だが、それも重力球に更に重力をかけ、自壊させることで無意味なものにする。

高密度の重力球が壊れた場所は渦を巻き、周囲の物体を取り込もうとする。

光さえ捉える漆黒の大渦、ブラックホール。

それを小規模だが発生させ、相手の行動を奪う。

加賀篝は自身とブラックホール間に、鎖を巻いた巨大な瓦礫を置くことで一旦凌いでいる。

だが、長く持たないことは向こうも分かっているのだろう。

すぐさま薔薇輝^{ロードナイト}とイングリッドによる慟哭する魔神^{クライング・アスラ}を行い、僕に攻め掛かってくる。

それを、僕も？ 鐵とペルセフォネによる慟哭する魔神^{クライング・アスラ}で対処しようとして……

『トモ！！』

現実に呼び戻された。

目を開き、声が聞こえてきた方向へと視線を向ける。

「できたのか……？」

そこにいたのは何故か操緒だけ。

肝心の奏（ネコ耳ver）はどこにも姿が見当たらない。

まあ、時間も時間だから自身の割り当てられた部屋に戻ったのだから。

そう思ったので、

「じゃあ、僕たちも戻るか」

そう言ったのだが、

『何言ってるの、トモ・・・？』

寧ろ、トモはちゃんここに座ってて!!』

そう操緒に怒られてしまった。

何か変な事言っただけなの・・・？

と、そんな僕を余所に操緒は角を曲がり、廊下の方へと向かって行った。

そのまましばらく待っていたのだが、

『な・で・れ・るの!!』

だとか、

「あ・・・い・・・ら・・・な・・・も・・・これ・・・」

みたいな声が聞こえてくるだけで、一向に事態が進展しない。

まあ、奏はとりあえず大丈夫みたいだし、一先ず心配しなくても良
いか。

そう思い、さっきの続きをしようとして、ふと気付く。

あれ!?

僕はいつの間に秋希さんみたいなバトルマニアに・・・!?

知らぬ間に汚染されていたのか、僕の思考は普段から戦いのことを
考えるようになってしまったのか・・・!?

気付いてよかったのか、気付かない方が今後のためには良かったの
か・・・

どちらが良いのか判断に困るところではあるが、すごく微妙な気分になってしまう。

修学旅行で泊まっている旅館で。

しかも、早朝から。

我ながらおかしなテンションではある。

「あ、あの・・・夏目くん・・・」

そんなことを考えていると、気付かぬうちに悪魔と幽霊の問答は終わっていたらしく、

「・・・・・・・・ど、どうです、か・・・・・・・・？」

目の前には普段と違う髪型をした奏が立っていた。操緒は姿を消している。

よく見れば、周囲の人の数が明らかに増えているし、奏が呼び方を変えているのもそのためだろう。

「・・・・・・・・うん、上手く隠れてると思うよ」

正直言って、奏の新しい髪型は新鮮だった。

頭頂部の左右で無理矢理纏めた感は否めないが、何にせよ、二つ結び、奏のツインテールである。

決してグドンとワンセットになっている様な怪獣のことではない。普段の人間離れた美貌はそのままに、やや幼くなっている様な感じに見える。

ネコ耳もすっかり隠れているし、パツと見大きな問題はないように見える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな僕の気分とは余所に、奏は若干気落ちした様な表情になっていた。

どうかしたのかと思い、聞いて見たが、

「いえ、なんでもない、です・・・夏目くん、ですから・・・」

という、よく分からない返事が返ってきた。

？

とりあえず、その場はそれで別れ、互いの部屋に戻る事になった。その際に、昨日なんで露天風呂にいたのか聞いてみたが、

「その・・・杏ちゃんやニアちゃんから、逃げてて・・・」

という答えが返って来た。

要は、杏やニア(+多数の“小さい”方々)の追求から逃げた先が露天風呂だったと。

更に言えば、僕と同じように混浴だと気付かずに扉を開け、入ったのだそうだ。

それで逃げ込んだ先に僕がいたらしい。

僕で良かったのだろう。

樋口とかがいたら酷いことになってたのだろうから。

？
？
？
？

「す、すごい所見ちゃった・・・!!」

その少女は物陰に身を潜め、2人（3人？）の様子の一部始終を見てしまっていた。

偶然、昨晚早く眠りについたため朝早く目が覚めてしまったのだ。始めに智春がネコ耳（奏）を見つけ、それに話しかけている時は若干引いていたが、そこからは驚愕の連続だった。

空中から突然どこか姿が透けた少女が現れ、同じようにネコ耳に話しかけ始めたのだ。

更には、植え込みから姿を現したネコ耳の主は同学年では断トツの美少女である嵩月奏であった。

夏目智春と嵩月奏

この二人が仲が良いことは昨年から学校中で当然の認識になっていたため、二人でいることには特に驚きがあつた訳ではない。驚きは、二人の呼び方。

夏目智春から嵩月奏へは、奏

嵩月奏から夏目智春へは、智春くん

いつもとは違う呼び方でいつも以上に親しそう。

しかも、人が増えてくると、空中に浮かんでいる少女は姿を消し、二人の呼び方もいつも通りの物になっていた。

明らかに隠し事をしている。

別に少女としてはあの二人が付き合っていようが、何ら問題はないというか、個人的にはそちらの方が自然だ。

彼女と同じ部活に所属している佐伯玲子はやたらと二人を目の敵にしているが、自分は全く関係がない。

更に、嵩月奏と宙に浮いている少女が消えると、夏目智春はストレツチや筋トレを始めていた。

少女の記憶が正しければ、彼はどこの部活にも所属していなかったはずである。

にも拘らず、あそこまでする意味は・・・？

しかも、こなしている量がおかしかった。

自分の所属しているテニス部の男子たちが普段からこなしている量の軽く5倍程度はあった。

しかも、それを信じられないほどに少ない時間で終わらせていた。

更に、汗一つかいていない。

同級生にここまでの身体能力があったことは勿論驚くべきことだが、それをこんな修学旅行に来てまでやっている意味が少女には分からなかった。

その後の二人のカップルの様な会話や空気は今更としても、昨日嵩月奏が消えていた先が混浴の露天風呂だということは予想外すぎた。更に言えば、そこに夏目智春がいて二人で過していたということも少女　露崎波乃は、嵩月奏に女としての敗北を感じながらも、この特ダネをどうするべきか悩むことになる。

いつそ新聞部にリークするのも手だが・・・

「とりあえず、観察、観察」

今後、二人のことをもつとしっかりと見ておこうと決めたのであった。

特に、もう一人の、色素の薄い少女　夏目智春によれば“ミサオ

”さんというらしい　は誰なのか。

可能ならば正体を暴いてみたい。

そう思い、彼女も急いで自身の部屋へと戻るのであった。

35回 低気圧（後書き）

考えてみれば、奏のネコ耳ってどういう理屈何でしょうね・・・？
遺伝だとするなら、嵩月祖母、もしくは母も生えるのでしょうか。

嵩月祖母の遺伝だとすれば、ひよっとしたら社長も・・・！？
それは嫌だなー

母の場合は律都とかにいったら嬉しいのですが・・・

36回 始まる回転(前書き)

気付いたら杏よりも、露崎の方が重要なポストに収まっていた事実・
・・・なぜ・・・？

まあ、あの類のキャラをこついった話で目立たせるためにはある意味仕方がないこととは思うのですが。

36回 始まる回転

風雨が吹き荒れる中、バスに乗り込んだ僕たちのクラスが向かったのは二条城。

幸いにも屋内であり、風雨の心配はとりあえずバスから降りて、城の中に入るまでだろう。

とまあ、そんなことを思いつつも、バスの隣の席に座っている樋口と会話しながら、僕は異様な視線を感じ取っていた。

な、なんで・・・！？

表向きは平静を装いつつも、内心凄いことになっている。

慌てるというのとも違うけれど、いずれにせよ凄く居心地が悪い。

そんな視線のもとを辿ると、通路を挟んだ左斜め後ろに座っている僕らの班の班長である露崎に突き当たる。

昨日までは普通だったのにな・・・

「・・・はあ・・・」

それなりに大きな溜息を吐きつつも、前日までの彼女を思い出しながら必死に記憶を探る。

昨日まで普通だったというのなら、昨日彼女に最後に会ってから今朝再び顔を合わせるまでの間に何かがあったはずで・・・その何かが分かればいいのだけれど・・・

そんなもの分かるわけないって・・・

露崎に盗聴器とか監視カメラが四六時中付き纏っているのなら話は

別だろうが、一女子中学生であるところの彼女にそんな物いるわけがない。

(というか、付き纏っているのなら、それはそれで大問題になるだろう)

とりあえず推測出来るのは、女子同士の会話で僕が話題に上がり、それによって見る目が変わったのではないかということ。

自分のことを持ち上げるようであまり良い気分ではないが、こつちの世界で僕は以前の世界に比べて同年の女子の話題に上りやすいそれは、単に僕がどうという話ではなく、奏との関係についての話題が大半だ。

僕の場合はついで。

あくまでメインは奏であり、僕はその相手としか見なされていない。表向き僕たちは否定しているものの、裏で行われている噂話程度の会話まで介入できる訳もないのだからそれは仕方ない。

・・・ちなみに、何故僕がその類の話を知っているかだけど、理由は簡単。

樋口から流れてきた噂を聞いたり、(まだ同化していなかった頃の)操緒がどこかで聞いていた話が僕に振られたりしたからだ。決して、僕自身が直接聞いたというわけではない。

・・・けど・・・それにしたってあそこまでならないよなあ

露崎が僕に向けている視線は、世間一般の女子生徒の眼力を遙かに上回っている。

こつ、普通のレベルが僕や操緒ぐらいだとすると、露崎のは以前の世界の佐伯会長や朱湊さんレベルだ。

冬琉会長や雪原さんレベルじゃないのが救いなのかどうか判断に困る所ではあるが、それだけ異様だということ。

それに、そんな話題になるのであれば他の女子も数人がそんな視線を向けているはず、もしくはそれなりに女子が僕に向ける視線が変化しているはずなので、ガールズトークは一先ず違うと判断する。

「・・・おい智春、聞いてるか!？」

自分でも気付かない内に考え込みすぎていたらしく、話を振っても反応しない僕を不審に思った樋口がそれなりに強い調子で話しかけてきた。

「ん、なに?」

「なんだよ、聞いてなかったのかよ・・・へこむぜ」

そんな言葉を吐きつつも、全くへこんだ様子は見せない樋口。まあ、僕も悪いとは思っだけれどこんなやり取りは常日頃から行われている。

つまりは、樋口の話しなんて普段から話半分に聞いているということだが・・・やっぱり酷いかな・・・? それぐらいの調子じゃないとこいつの趣味の話はついていけないんだから。

「はいはい、へこむなら好きだけへこんでるよ。

それで、何の話?」

「ああ、今度はしっかりと聞いとけよ!!」

実はな・・・」

樋口の話に適当に相槌をうちながら、僕は再び露崎から視線を向けられる原因について頭を悩ませることにした。

ガールズトークが原因じゃないとしたら、僕と奏が二人きりの所とか他の問題のある場面を見られてたとか……？

昨夜の露天風呂然り、今朝のネコ耳騒動然りだ。

とはいえ、昨夜から今朝まで問題のある場面はその二つぐらいしかない。

奏が何をしていたのかまでは分からないけれど、彼女が僕みたいに下手な真似をするとは考えにくい。

かといって、僕も学校で普段過ごしているように過していたから、何か問題のある様な行動はしていない……はず。

なので、問題の場面としてはその二つぐらいしかないのだけど……

露天風呂は流石にないと思うから……今朝のあれかな？

昨夜の一件が原因だとはい少々考え難い。

奏と露崎が浴場にいたのは同じ時間帯だったのだろうけれど、あの混浴の露天風呂に他の女子がいなかったのはあの時確認済みだ。

それに、今朝奏に会った時も昨夜のことについては何も言っていなかったからバレてはいないはず。

そうなるなら、今朝のあれぐらいしか原因が思い当たらない。

もしそうなら……ちょっとマズイな……

勿論、推測だから間違っている可能性が高い。

だけど、間違いではなかったとしたら非常にマズイ。

あの一件が、どこからどこまで見られていたのかは分からないが、どこを見られていても非常に面倒だ。

奏のネコ耳も、操緒のことも、僕と奏の関係も。

あの時すっかりと周囲を確認しておくんだった、と若干憂鬱になりながらも今後の展開を思い、更に憂鬱に。

彼女は確か佐伯と仲が良かったから、下手すれば佐伯家に僕と嵩月家の関係がバレるかもしれない。

・・・流石にこの時点でそれがバレるのは避けたい。

せめて洛高に入学して、第3生徒会 ロイヤル・タークソンサエティ 王立科学狂会 の庇護下

に入ってからでないとかかなり面倒な事になる。

まあ、つまりは法王庁というある種の厄介事から逃れられたら公表してもいいのだ。

アスラクライン 魔神相剋者を危険視しているのは今のところあそこだけだし。

寧ろ他の二つは、率先して僕を魔神相剋者アスラクラインにしようとしてた感があるしな。

学生連盟も多分大丈夫。

故に、今バレルのは避けたいのだ。

最終的に佐伯兄妹と敵対する可能性は捨てきれないし、今のところその可能性が大きいのは仕方ないが、せめて中学時代は秋希さんたちのことに集中したい。

今日中に奏とニアに話を聞いてみないとな・・・

目的地に到着したという、担任からの声を聞きながらそんなことを思う。

僕だけで対応を考えるのは限界だ。

なんとなくの原因は分かったとしても、流石に一般の女子生徒にどんな対応をすりゃいいのかなんて全く分からない。

というか、何故僕がここまで悩まなければならぬのやら・・・

そんなどこか理不尽な世界に心中で盛大に文句を垂らしながらも、隣の樋口がバスを降りる準備を始めたように、僕もバスから降りる

準備を始める。

外の天気は未だに激しく、ちょっとやそつとでは晴れない様相をみせていた……

? ? ? ? ?

Side: Hano Tsuyusaki

「うん……これといって特に変わったところは無し、か……」

今私たちの班の女子は雨の中、京都のとある観光地を歩いている。歩いている場所の周囲は、江戸時代あたりにもタイムスリップしたかのようなどこか時代錯誤な街並みだ。これは映画の撮影用なのだそうで、言われてみればどこかで見たかのような風景がちらほらと。

「なに……?」

「どこがおかしな所でも探してたの?」

「あ、ごめんごめん。」

「そう言う意味じゃないから安心して」

さっきの私の言葉を聞きつけたのか、同じ班の友達が話しかけてくる。

幸いにもこの場所についての感想だと思ってくれたようで、助かった。

さつき私が呟いたのは、今日、今迄夏目くんを観察して判明したことについてだ。

夏目くんは全く普段通りの彼だった。

それこそ、今朝のあの甘ったるい空気など全く感じられないほどサバサバとした対応で樋口くんと話していた。

だけど、まだ・・・そう、まだ他の子にこの情報を知らせる訳にはいかない。

あの二人が隠してたことを私が勝手に話していいわけないしね。

そんなことを思いながら、私はとある人物に視線を向けた。

クルクルと自身の使っている傘を回しながら、周囲の景色を写真に収めたり、売られているお土産品に目を輝かせたりと、表情をコロコロと変化させているアニアさん。

最初、彼女が私たちのクラスにやって来た時は非常に驚いたものだったけど、今となっては慣れたものだ。

最大の問題と思われていた言葉の壁は、彼女が流暢な日本語で自己紹介をした時点で問題ではなくなったし、どの授業でも彼女が間違えを言った所など見たことがない。

寧ろ、先生たちの方が間違えを指摘されていたぐらいだ。

そんな、なんでもできる大人びた雰囲気彼女が、目の前に売られているありふれたお土産品に目を輝かせている光景について、クスリ、と微笑んでしまう。

「む、どうした、波乃？」

どこかおかしい所でもあったか・・・？」

そんな私の溢した声が聞こえたのか、私に視線を向け、そんな言葉

を投げかけてくるアニアさん。

「ううん。

なんでもない」

「そうか・・・？」

それに首を振り、否定の言葉を使うことで答える。

そんな私の様子を不思議に思ったのか、アニアさんは首を傾げている。

雰囲気は大人びているけれど、身長は私と同じぐらいだからそんな仕草をされると凄く可愛く見えてしまう。

うう・・・相変わらず卑怯とも思えるほど整った容姿だことで・・・

そう言えば、夏目くんの周りにいる女の子って皆可愛い　もしくは、綺麗な　女の子ばかりの気がする。

嵩月さんやアニアさんは言うに及ばず、去年彼と同じクラスだった大原さんも健康的で元氣瀧刺な可愛い女の子だし、先日廊下で彼と話をしていた一つ下の女子生徒はお人形さんかと思えるほど整った容姿だった。

更には、昨日の朝駅のホームで話していた他の学校の女子生徒。ゾツとする様な美貌。

正直、同じ年というのが全くもって信じられない。

夏目くんや嵩月さん、それにアニアさんと仲良さそうに話していたから、知り合いだというのは分かる。

それに、今朝見た宙に浮かんでいた少女。色素の薄い髪はふんわりと柔らかさそうで、容姿も遠目から見ても西洋人形みたいな可愛らしさ。

“ミサオ”さんというらしい少女は、下手なアイドルやモデルなんかよりもよっぽど可愛かった。

更には皆揃いも揃って足が長く、胴体が短い。

スタイルは・・・勝ってる人も少々。

目の前の金髪美少女とか、宙に浮いていた西洋人形見たいな色素の薄い少女とか・・・

・・・あれ？

こうして考えてみると、夏目くんって結構な女誑しなのでは・・・？
全ての少女が彼のことを好きだと思っっていることはなかったとしても、誰も否定的な感情は（パツと見）見せていなかった。

・・・ひよつとして彼は女の敵なのではないだろうか・・・？

だけど・・・今朝見た夏目くんと嵩月さんの空気はどう見ても恋人
同士だったからそんなことはないと思いたい・・・

そうだ、今日の前にいる彼女に今朝の二人のことについてちよつと
聞いてみよう。

他の同じ班の友達的面々はともかく、彼女は（何故か）夏目くんと
も嵩月さんとも仲が良い女子生徒の一人なのだし。

あの二人だつて揃って仲の良いアニアさんには、隠してないだろう
し、バレても問題ないだろう。

・・・ひよつとしたら、アニアさんが夏目くんを狙っているという
可能性がない訳でもないが、普段の空気を見ている限りどちらかと
言えば悪友なのりだから大丈夫なはず・・・

（まあ、そんな人がその悪友を好きなケースも大量にあるから一概
に断言はできないが）

「ねえねえ、アニアさん」

「なんだ、波乃？」

というか、ニアで良いと言っているのに・・・堅苦しいなお前は「

ぼやく彼女の最後の後半部分をスルーし、質問を投げかける。周囲の他の友達たちの立ち位置や視線を見渡し、私たちに今のところ向けられていないことに安堵しつつ。気楽に、全く気負うことなく口にした。そう、

「なんで夏目さんと嵩月さんって普段は名前で呼び合っていないの・・・？」

私の今後の世界がガラリと変わってしまうことになる一言を。

？
？
？
？

ガキヤツ！！

目には見えない歯車が新しく組合わさる。以前の世界では組合わさることなく、脱落してしまった歯車が。今のところ新しい歯車が組み合わさっているのは一つの歯車のみ。しかし、それは組み合わさった歯車により廻り始める。

ゆっくりフルフル狂々と、ゆっくりコロコロ殺殺と

新しい歯車の世界が回ることによって狂い出す。それは、世界にとっては些細な事で、彼らにとっては重大な事。守るべきものが増えるということはそれだけ存在が削られていくと

いっことで・・・

それでも歯車は回り続ける。

狂^{クルクル}狂、殺^{コロコロ}殺、ゆっくり、しかし確実に・・・

36回 始まる回転（後書き）

露崎の性格が正しかったのかどうか凄い疑問です・・・なんせ、話
があれ一つだけです・・・

37回 怒声（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

只今スランプ真っ最中

本編のネタが浮かばない　つまりは執筆作業も滞る。
なので、内容が酷いですし、量も少ないですがご勘弁ください。

37回 怒声

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ど、どうしたのさ・・・・・・・・？」

「あ、あの・・・・？」

旅館に戻った僕と奏を待っていたのは、以前の世界で雪原さんに会った時の朱湮さん並の憤怒の表情を浮かべたアニアだった。

いや、僕とアニアはクラスが一緒に、バスが一緒だったから“待っていた”という表現は正しくないのかもしれないが・・・

それにしたって、ここまで怒った表情を浮かべているアニアを僕は見たことがない。

しかも、僕だけではなく奏にまで。

・・・こりゃあ、彼女がこんなことになってしまうほどの何かがあったとしか思えない。

「・・・・・・・・・・が・・・・」

「え、な、なに・・・・？」

二日目の予定が無事終了し、旅館で行われていた班員の点呼が終わってすぐに、僕と奏は首根っこをアニアに掴まれ、問答無用で旅館内にある人気のない部屋まで連行された。

当然のように周囲の面々から奇異の視線で見られたが、そんなものなど全く気にせずアニアは突き進んでいた。

部屋に到着すると扉に鍵をかけ、更には持っていた札を使い、簡易

的な人払いの結果で部屋の周囲を覆う手際の良さ。
というか、そんなの持って来てるなら教えといてくれてもよかった
だろ。

「この、バカップルが!!」

「うわ!!」

「きゃっ!!」

アニアの声を少しでもはつきりと聞き取るうとしていた僕と奏は、
耳をすませ彼女の声を聞きもらすまいとそれなりに近づいていた。
結果、

「ぬ、あー・・・!!」

耳が・・・」

「うー!!」

耳元でアニアの怒声を聞く羽目となってしまった。

あー、頭が揺れる。

頭の中で鐘が鳴り響いているような感じだ。

知らず、耳と頭を抱えて蹲る羽目になってしまう僕と奏。

が、そんな僕らの醜態など気にも留めず、

「いちやつくのはお前たちの勝手だが、バレてこっちまで面倒事に
巻き込むな!!」

波乃の奴からかなりしつこく聞かれたぞ。

やれ、『夏目くんと嵩月さんって本当に付き合っていないの?』だ
とか、『ミサオさんって誰?浮いてたけど何で!?!』やら、『夏目

くんと嵩月さんってもう“ヤッちゃって”るの!? 『やら・・・私
が知るかー!!』

まず、昨日露天風呂に二人でいたというのは本当か!?
もしそれが本当なら、“ヤッて”しまったんじゃないだろうな!?
修学旅行の真っ最中に何をしてるんだお前ら二人は!!』

怒鳴り調子でそんな言葉をマシンガンの様に連続して向けてきた。
が、僕も奏も先程のアニアの怒声が耳に直撃した後遺症のため、ま
ともな反応が出来ずにいる。

僕は未だに蹲ったままだし、奏は目をグルグルと回転させている。
というか、僕と奏が“そういうこと”になったのがアニアの中で確
定してるのはなんで・・・?

頭は働いているけれど、体はついてこない。

そんな僕ら二人を見かねたのか、

『はーい、ニアちゃん。

ストップストップ』

いつの間にやら、僕たちとアニアの間の空間に操緒が姿を現してい
た。

「そっだ操緒!!」

お前もお前だ!!」

周囲に他の人間がいるというのに姿を現しおって!!」

しかも、宙に浮いていただと!?

そう言ったことがバレないように、普段から地に足を付けてから
現れるといつも言っていただろう!!」

なのに、それを無視して、しかもバレる羽目になるとは・・・!
!」

が、アニアはそれでも治まることなく、（寧ろ新たな標的を見つけ
たかのように）操緒にくっついてかかっていった。

『いや、まあ・・・そこはごめん。』

まさか、見られてるとは思わなかったし・・・

それに、今からそのことについてちゃんと説明するからニアちゃんも一旦落ち着いて』

とはいえ、操緒は特にダメージを負っている訳でもないので、ニアに冷静になる様呼びかけている。

「・・・む・・・」

操緒に言われ、自身が普段では考えられないほど狼狽していたことに気付いたのか、一転して黙り込むアニア。

・・・落ち着いてくれたようで何より。

そんな彼女の姿を確認した操緒が、

『んじゃあ、このバカップル二人がバレた経緯だけど・・・』

とりあえず自身の推測を多分に含んだ経緯の説明を始めた。

その内容は大体僕が考えていたのと同じものではあったけど、やっぱり操緒が考えている分少々異なっている。

・・・まあ、だからどうだという話でもないが
というか、操緒・・・お前もバカップルだということところは否定しないんだ・・・

僕と奏の関係は、そんな風に見えるものなのだろうか・・・？
自分たちじゃ全く分からないんだが・・・
そんな操緒の話に、

「……ふむ……」

頷きながら、考え出すアニア。

当事者であるはずの僕と奏を放って、二人の話は続く。

時折、操緒の話の途中でアニアが疑問に思ったことを操緒　もしくは僕が奏　に問いかけることがあるが、あくまで推測の下なので疑問にまともに答えられる回数も少ない。

それでも、なんとか答えを返すが、あまり状況は好転しなかったりする。

そんなこんなで10分ほど経過

操緒の話も終わり、アニアも考えを纏めているのか黙り込んでいる。今は自由時間だからあまり問題はないだろうけれど、あんまり長引くと同じ班の生徒だけではなく、教員側も放置してくれなくなると思うから早めに部屋に戻った方が良いと思うのだけど……それこそ、露崎がまた露骨に怪しんでくるのではないだろうか？

「……なあ、ニア……とりあえず修学旅行が終わってからじゃ駄目なのか……？」

そういったことも気になったので、アニアにそう提案してみたのだけれど、

「駄目だ」

即座に却下された。

「いや、そんなすぐに却下しなくて「駄目と言ったら、駄目だ」……も……」

更に否定してくるアニアの顔は全くふざけた様子が見られない。つまりは、いたって真面目ということだ……うう……どうやら僕の意見は一考の余地がない程度のものらしい。そんな風に落ち込んでいる僕を放って、操緒が小声でアニアに話しかけている。

何を話しているのかまでは聞き取れないが。

『因みになんでか聞いていい……？』

「ふん、簡単な事だ。

明日の自由行動でどうせ智春と奏は班を抜けて二人で回るつもりなのだろう……？

そんな絶好の機会を波乃の奴が逃すと思うのか？」

『あ……思えないね……』

トモと奏ちゃんが別行動を取るぐらい有り得ない』

「そうだろう。」

この二人が別々に行動するのなら全く問題ないのだが、それは余程のことがない限り起こらないだろうからな……」

ジトー、と二人揃って僕らを舐めつけるように見てくる。

「う、うー……？」

何がなんやら訳が分からない僕と奏にしてみれば堪ったものではない。

せめてこっちにも事情を説明してくれば楽なのだが……現状、そんなつもりはないのだろう。

『ていうか、もう、二人の関係ぐらいはバラしちゃってもいいと思うんだけど……』

? 鐵もいるんだし。

そう言う操緒だが、

「それは止めた方が良い。

デウス 神を消滅させるのにどれだけ魔力が必要になるか分からないし、

これから魔力を消費しなければいけない 操緒、お前が削られる

可能性は以前の世界よりも格段に増えているんだからな」

そう、アニアに否定される。

今のところ佐伯兄に哀音さんが憑いている姿は見えていないが、それも時間の問題だ。

僕らが出会った時には、哀音さんは既に感情の大半を失っていたのだから、もう間もなく副葬処女ベリアル・ドールになってしまうのだろう。

止められるのなら止めたいが、いつ、どういった経緯で行われたのが全く分からない以上、止めるのはほぼ不可能だ。

四六時中付き纏っていればいいのかもしれないが、そんな危険な賭けには出られない。

「むー……露崎さん、が黙ってて、くれれば……」

『そんなに簡単にはいかないって……』

女性の好きな噂話、しかも恋愛話とくれば黙っていてくれるわけがない。

元々親友同士なら別だろうが、僕らと露崎はそこまで仲が良い訳でもない。

唯一アニアがそうなるかもしれないが、今はまだそこまでいいない。

それが分かっているから、操緒も奏の案を却下したのだろう。人は信用するべきなのだろうが、無条件でクラスメートを信頼できる訳もない。

というか、以前の世界で僕と樋口のことをBL小説の題材にしたような人間を無条件で信用できるほど、僕は人間ができていない。

「というか、操緒のことはどう説明するんだよ!？」

僕と奏の関係にはかり話がいつていたけれど、先程のアニアからの情報に寄れば操緒のこともバレてしまっているのは確実だ。

「あー、それは話してしまっても問題ないさ・・・」

知ったところで波乃に何ができるわけでもないし、誰かに相談できるはずもない。

“世界は一度滅んだ”なんて、周囲の人間に言っても誰が真面目に取り合ってくれる？」

が、僕の焦りなど全く気にも留めず、アニアはその点に関してはかなりどうでも良さそうだ。

確かに言われて見ればそうかもしれないが・・・

「それは・・・佐伯とか？」

「確かにそうだが、波乃はあの兄妹がそちらに関係しているとは知らないはずだ。

知ってたら話せるだろうが、知らないのに相談できる訳もないだろう」

それこそ、樋口のように普段から言っている人間でもない限りキチガイ扱いされて終わるのがオチだ。

そう言っつてその話を締めくくるアニア。

ついでに言えば、逆に樋口のような人間が話しても全く信用されないから問題ないらしい。

つまり、アスラ・マキナ機巧魔神や悪魔といった存在を実際に見られなければ問題ないということ。

・・・いや、その問題である副葬処女ベリアル・ドールが見られたから問題なのだと思うのだけど・・・

「そんなことより、明日だ。」

智春、奏。

お前たち二人とも明日は別々に行動するつもりはないのだろうか・・・

・？」

僕の悩みを余所に、いきなり切り出すアニア。

そんな唐突なアニアからの質問に、

「僕はまだ決めてないけど・・・」

そう答える僕と、

「当然です!!」

やたらと強気に意気込んで答える奏。

いや、こんな状態になったんだから止めといた方が良く僕は思うんだけど・・・

奏にしてみれば、(ある意味)初めて心から楽しめる修学旅行だからなのかもしれないが。

そついった考えを伝えてみるものの、

「夏目くんは、嫌、ですか・・・？」

「そ、そんなことは・・・」

捨てられた仔犬の様な表情で飼い主（僕）を見る仔犬（奏）。
そんな表情で見られるとかなりヤバイんだけど・・・
それに、勿論僕だって奏と回れるなら回りたいに決まってる。
けどなあ・・・

そう思っていた時だった、

「御心配なさらず」

そんな声と共に部屋の扉が開き、

「我々が二人の関係をサポートいたしますわ！！」

この場にいる訳がない二人の人物が部屋に入ってきた。

「・・・なんでここにいますか・・・？」

入ってきたのは、嵩月組若頭の雄型悪魔 八枝さんと、アニアの
護衛役としてクラウゼンブルヒからついて来ていた雌型悪魔 ダ
ルア・ミドラマルスイ・クラウゼンブルヒ女史だ。
いや、ホントに何でいるんですか・・・！？

37回 怒声（後書き）

本編じゃなくて外伝のネタが思い浮かぶ不思議・・・

臓物アニマル関連で『けんぷファー』の設定使った話でも書いてみようかと。

『けんぷファー』は読んだことないんですが、アニメを少々見たことはあるので。

智春 ともは（ナツルみたいにする・・・）

それだけ決めて他の女子の面々の配役は決めてないんですけどね・・・

まあ、またいつか外伝で書けたらいいなと思ってます。

38回 人任せ（前書き）

そういえば、和葉の事件があったのっていつごろですかね・・・？
確か、和葉が中一か中二で、真冬ではないものの冬服で過ごしていた時期だったはずなのですが・・・10、11月ぐらいかな。
もしそうなら、プロットの時系列を少しいじらないといけないかもしれない。

38回 人任せ

「露崎様の様子は如何ですか？
アニア様」

本日は修学旅行の三日目。

樋口がこの修学旅行において何よりも楽しみにしていた日。

それはこの修学旅行に参加している生徒の大半が同じ様で、昨日まではほとんど感じることの出来なかつたある種異様な空気が旅館に漂っていた。

教員側もそれは分かっているだろうが、特に何か言ってくるようなこともない。

『今は部屋で準備をしているな・・・だが、もうそろそろ準備も終わるはずだ』

「了解しました。

ダルアさん、お願いします」

『分かりましたわ』

天気は曇り。

晴れてはいないものの、昨日程荒れてはいないので奏の頭部にネコ耳が現れていることもない。

・・・なんとなく勿体ない気がしなくてもないが・・・仕方ない。

それに今後も見れる機会はあるのだろうか、次の低気圧の日を待つとしよう。

今度は隠さなくても良いように、関係者だけの日になってくれると

ありがたい。

その方がしつかりと奏のネコ耳姿を目に焼きつけられるだろうし・

「では、夏目さん、お嬢様を今日一日お願いします」

「はい」

『トモ、しつかりね』

「分かってるって」

八枝さんとは旅館の一室で別れ、僕とアニアは班員たちと一緒に旅館の入り口から外に出ていく。

その中には当然、班長である露崎や樋口たちも一緒にいる。

以前の世界では自由行動の時は、樋口に誘われ京都一体の心霊スポット巡りの旅に誘われていたが、今回は幸か不幸か誘われていない。逆に、僕ではなく佐伯を猛烈に誘ってはきっぱりと　それこそ樋口の精神が心配になるぐらい　断られていた。

僕自身は代わり？と言っては何だが、やたらと露崎から今日の行動予定を聞かれている。

ただ、それも昨日からで、それ以前はほとんど聞かれなかったことから、余計に露崎の情報源がいつか分かってしまうのだが・・・

「さて、と・・・」

暫く歩き、旅館からある程度離れた所にあるコンビニに到着すると、示し合せたかのように班員が全員立ち止まり、班長である露崎に視線を集める。

それは、僕やアニアも例外ではない。

その様子を見た露崎が、グルリと首を回し、全員がいることを確認し、

「16:30にこのコンビニに集合すること。」

途中で教員にバレると厄介な事になるからなるべく見つからないように「

そう言った。

全員彼女の言いたいことは分かっているのか、黙って頷く。

ここで余計な事をして騒ぐような馬鹿な真似はしない。

時間が減るといふ問題もあるし、まだ安心できる程距離が離れていないということもある。

いずれにせよ、まだまだ慎重に行動しなくてはいけないのだ。

「忘れ物とかはないよね・・・？」

取りに戻るなら今しかないよ」

露崎からの質問に全員が黙って首を振ることで答える。

それを確認した露崎は、

「よし、じゃあ・・・解散!」

班員にそう指示を出す。

その班長からの指示を聞いた面々は、勢いよくそれぞれの目的に沿った方向へと向かい出す。

樋口は道路で走っていたタクシーをすぐさま呼び止め、乗り込んでどこかへ向かって行く。

以前の世界と同じであるのなら、多分最初は本能寺辺りだと思うのだが・・・

「波乃〜結局あんたはどこ行くのよ〜」

「ふふふ、ひ・み・つ」

「え〜、なんでよ〜」

「良いじゃない、教えなさいよ〜」

「私とあんたの仲でしょ・・・?」

「どんな仲よ・・・」

露崎が班員の女子と会話している隙？を見計らって僕もいそいそと奏との待ち合わせ場所である最初の目的地へと向かって歩き出す。

ここから先は僕ではなく、アニアやダルアさんたちに任せるしかないのだし・・・

決して僕がヘタレなんじゃない。
単に適材適所というだけの話だ。

そんなことを思い、自分を納得させながら僕が道を歩いていると・・・

「え〜、なんで〜!?!?」

という叫び声が聞こえてきた。

聞こえてきたのは僕から見ると先程のコンビニの方向。

つまりは、向かっている方向とは真逆。

「ダルアさんが上手くやってくれたのか・・・」

作戦　　というほどのものか分からないが　　通りに今のところ無事に進んでいることに一安心する。

というのも、聞こえてきた声が僕たちの班の班長である露崎のもの

だったからだ。

とはいえ、これで上手くいったわけではない。

叫び声とはいえ、誰のものか判別できる程度の距離なのだ。そんなに離れている訳ではない。

『トモ、急いだ方がよいよ』

周囲から知り合いがいなくなったため、操緒も姿を現す。

表情を見る限り、作戦が上手くいっていることに操緒は喜んでいるようだが、まだ気を抜いてはいない。

そんな彼女は、今回ちゃんと路地の方から歩いて姿を現してくれたから、特に周囲の人から奇異の視線を向けられることもない。

「そうだな、サッサと離れよう」

その操緒の言葉に同意して、奏との当初の約束通りの場所へ早歩きで向かいながら、僕は昨日の夕方のことを思い出していた。

?
?
?
?

「・・・それで、なんでいるんですか・・・?」

目の前には正座をしている八枝さんと、普通に足を崩して座っているダルアさん。

そんな二人に対して、やや強めの調子で声をかける。

なんだって中学生の修学旅行にこの二人が付いて来てるのか・・・

奏は折角の修学旅行を邪魔されたとあって、かなり不機嫌な様子だ。操緒は驚きつつも、そこまで怒っている様子は見受けられない。むしろ、面白いことが増えたと思っっているのか、楽しそうだ。アニアは先程までの怒りはどこへやら、頭を抱えてしまっている。

「勿論、お嬢様と夏目さんの護衛のためです」

「お嬢様の護衛のためですわ」

「……ああ、そうですか……どうせそんなことだと思いませんよ。」

「というか、ダルアさんならまだ（仕事だから）納得できるけど、なんで八伎さんまで……!？」

「私は社長と大奥様　お嬢様のお婆様　に頼まりましたので。部下を10人ほど連れて参りました」

「余計止めてください!!」

「ええい!!」

「八伎さんとダルアさんだけでも面倒なのに、この上何故人数が増える!？」

「勘弁してくれ!!」

「ご安心ください。」

「一般人と区別がつかない格好で旅館の周囲や、皆さんの行先を警護しているだけです。余程のことがない限りバレることはないはずです」

「・・・本当、ですか・・・？」

「ええ、決して皆さんの邪魔になるようなことはしていませんわ」

『それなら、まあ、いいのか・・・な・・・？』

いや、そこで僕に聞かれても困るんだけど。

まあ、2日間特に騒ぎが起きることもなく、僕たちも全く気付かなかったぐらいなのだからこの旅行の邪魔をしている訳ではないというのは本当なのだろう。

・・・だからと言って安心できるかということ、そういう訳でもないのだが・・・

「とはいえ、問題が一つありまして・・・」

「・・・なんですか？」

八枝さんが神妙な顔で僕らに語りかけてくる。

この話になっていく状態で、真剣な顔、しかも問題ときた。どう考えたって碌なものじゃないと思う。

自然、場の雰囲気緊張によって固まっていく。そんな空気の仲、

「実は、鳳島のお嬢さんも近くの宿に泊まっているらしく・・・」

「氷羽子ちゃんが、ですか・・・？」

「はい。」

部下に命じて遠目に確認させた所、その宿は鳳島の連中が警備しているようです

「ああ、それはまた面倒だな・・・」

奏と氷羽子さんの仲は良好だが、家自体がそうなのかということそう言う訳ではない。

ある程度以前よりは良好になっているようだが、相変わらず高月と鳳島の両家の関係は水と油。実質冷戦状態にあると言っていていいだろう。

「こちらも向こうも互いに手を出さなければ、何もしません。ですが、その分お二人には気をつけていただきたいのです。

旅行中鳳島のお嬢さんと会うことは早々無いとは思いますが、念のため」

「分かりました」

コク

僕と奏は揃って首を縦に振り、了承の意を示す。

僕としては、こんな些細な事で両家を本格的に戦争状態にする訳にもいかないという思惑があるのも事実だが、折角奏に同い年の悪魔の友達が出来たということの方が大きい。

以前の世界でも、杏みたいな同い年の友達はいただけど、悪魔という隠し事をしてしまっていたのも事実。

そんな後ろめたさを感じながら過していかなくても良い相手。

二人の関係がこれからも続いていくのであれば何よりだと思う。

「・・・それで、ダルア、八伎。

お前たち二人が智春と奏の二人をサポートするとはどういうことだ・・・？」

若干脱線しかけた話をアニアが強引に修正して、元の話題へと戻す。

「ふふふ、お嬢様は私の能力をお忘れですか……？」

そんなアニアからの詰問に自身満々に答えを返すダルアさん。

それにしても、彼女の能力？

以前の世界と同じなのであれば、可視光線の操作のはずだけど……

「お前の能力？

確か、可視光線の操作だったはずだが……それがどうかしたのか？」

ああ、一緒だったんだ。

つてことは、使い魔も以前の世界同様巨大なカメレオンの姿なのだろう。

彼女の使い魔は対人戦ではかなり強力だから、味方でいてくれるのなら非常にありがたいけど……見た目はかなり気持ち悪いからなあ。

「ふふ、で、す、か、ら！！」

夏目さんと奏さんの姿を消し、幻影を作り出すことなど容易なのです」

ああ、だから自身の能力の話になったのか。

確かにダルアさんに協力してもらえるのは非常に助かるが……良いのだろうか？

悪魔の能力を使うということは、それだけ自身が非在化する可能性が高くなるという事なのに。

「良いのか、ダルア・・・？」

こんな馬鹿な二人を助ける義理などお前にはないのだぞ？

大体、このバカツプルが注意を怠ったせいで今の状況があるのだから」

アニアもそれは分かっているのだろう。

その事を聞いている。

だが、主人からのその質問にも、

「構いませんわ。

奏さんの気持ちも私、痛いほど分かりますもの。

そんな彼女の手助けをして消えることになるのであれば、それもまたヨシですわ」

全く怯むことなく、堂々と答えるダルアさん。

その姿は、どことなく“女傑”という言葉を連想させるものだった。

以前の世界の彼女からは考えられない大物ぶりだ。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます、ます」

奏と二人揃って頭を下げる。

そんな若輩者二人を、

「良いんです。

ただし、成功しないとただではおきませんわよ」

ダルアさんは笑って許してくれた。

これが大人の女性というやつだろうか・・・？

?
?
?
?
?

時間を戻して、今は修学旅行三日目。

僕と奏は無事合流し、京都の街を歩いている。

一応目的地はあるのだけれど、特に急いでいる訳でもないのでブラブラと歩いている。

いざとなったらタクシーにでも乗って向かえばいいのだし。

「・・・それにしても、ニアとダルアさん様々だね・・・」

「そう、ですね」

昨日考えた作戦の概要はこうだ。

- 1：僕が班から離れて歩き出す。
- 2：恐らく尾行してくるであろう露崎を撒くため、ダルアさんが僕の姿を消し、代わりに幻影を作り出す。
- 3：ある程度距離が離れたら幻影を消す。
- 4：驚いているであろう露崎にニアが近づき、行動を封じる。
- 5：そのままニアが僕らの予定と被らないように露崎を誘導する。

6：何かあれば八枝さん経由で僕らに連絡が入るようになる。
最終手段の退避場所として、京都での嵩月祖母の家が用意されて
いる。

と行ったところだ。

今のところ八枝さんからも連絡はないから大丈夫なのだろう。

「ニアちゃん、には悪いこと、しちゃいましたね・・・」

やや気を落としながら奏がそう呟く。

「大丈夫だと思うよ。」

何だかんだでニアの奴も楽しんでたし」

盛大に文句を垂らしていたものの、ニアの顔は確かに笑みを浮かべていた。

大方、目的が無くなった露崎を引っ張りまわして自分の好きなどころを巡るつもりなのだろう。

・・・ご愁傷さまで、露崎さん。

「ほら、二人の分まで楽しまないと損だつて。」

折角ダルアさんとニアが作ってくれた時間なんだから」

現金な自分が若干嫌になるが、

「そう、ですね」

にっこりと満面の笑みを浮かべた奏の表情でそれも消え去る。

代わりに、顔が熱くなっているのが自分でも分かる。

きつと熟れたリングゴの様に真赤になっていることだろう。

それを誤魔化すつもりで、

「……じゃあ、行こうか」

奏を促し、先を歩きだす。

そんな僕を見た奏は、

「……クスツ」

と微笑んで、

「はい！」

僕の横に立って一緒に歩き出した。

僕の横に立った彼女は僕の手を自身の手で繋ぐ。

そして、更に自身の指を僕の指と指の間に絡め、ちよつとやさつと
のことではほどけないようにしっかりと手を握り締める。

俗に言う“恋人繋ぎ”

熱くなっていた顔が更に熱を持ったのが分かる。

なんだか、奏がかなり大胆になって来たような気がするが……

手を繋いできた奏の方もかなり恥ずかしいのか、顔をやや伏せ気味
にしている。

が、それも嫌な感じではなく、寧ろ心地良い。

そんな状態で僕らは再び歩き出した。

知り合いに見られたらマズイよなー、と思いつながらも止めるつもり
は更々ない。

こんなことだから、露崎にバレてしまうのかもしれないが止められ
ない。

精々知り合いに会わないよう祈っておこう。

?
?
?
?

日は変って翌日、修学旅行最終日。

僕らのクラスは既に全員が新幹線へと乗り込み、それぞれ座席に座っている。

僕の隣では樋口が、

「つ、着いたら、教えて、くれ、智春」

そう一言呟き、すぐさま眠りについていた。

どうやら昨日の強行軍がたたったらしい。

常時ハイテンションで一日50件のオカルトスポット巡りは流石の樋口でもキツかった様だ。

が、かく言う僕も結構疲れたから寝てしまいそうだ。

昨日は道中、蹴策のために北野天満宮で合格祈願のお守りを買っている氷羽子さんに会ってやたらとからかわれたし 幸い手を繋いでいる時ではなかった・・・もう、この際道場の人たちにはバラしてしまっても良いんじゃないかという気もするが、雪原さんは秘密にしておかないといけないので少々面倒だったり。

また、アニアやダルアさんの方も特に問題はなく、露崎のことは帰ってからしっかりと対応していくことになった。

今は露崎も疲れたのか、座席に身を預け、夢の世界へと旅立っている。

それにしても、僕も疲れた。

目的の駅に着くまで1、2時間はあるはずだし僕も寝てしまおう。
そう思い、座席に身を委ね、僕も眠りについた。

38回 人任せ（後書き）

肝心のデート部分を書かなかつたり、色々物足りないとは思いますが、ご容赦を。

いくらかネタは思いついていたんですが、途中で断念してしまいました。

次回、露崎さん決着・・・の予定

その次ぐらいから苑宮姉妹の話に入ろうか、間に数話を挿むべきか考えている途中ですが、間もなく苑宮姉妹の定番・・・の予定です。

39回 暴露(前書き)

とうとうこの話に・・・

39回目でようやくって、我ながら引き延ばしたもんだ。幕間やら外伝やらを含めると44話目になるそうですが、これ、いつになったら原作に入れるんだろう？

39回 暴露

修学旅行から帰って来た翌日、

「これ、お土産です」

「あら、ありがとう」

僕と操緒はいつもの様に橋高道場へとやって来ていた。

今日は橋高姉妹に八條兄、それに道場に通っておられる社会人の方々のみ。

鳳島兄妹や美呂ちゃんは来ていないし、塔貴也さんもアニアと共に（珍しく）実験作業の真つ最中。

僕が冬琉さんに渡したのは普通に京都のお土産屋で売っている様なお菓子　まあ、八つ橋だけど・・・

因みに生地を焼いていない生八つ橋だ。

それと、もう一つ手に持っているのは、

『秋希さんにはこれで〜す!〜!』

『あ、ああ、ありが、とう・・・?』

秋希さん用のお土産・・・の守護札。

因みに選んだのは秋希さんと同じ副葬処女ベリアル・ドールの操緒である。

『とりあえず、冬琉さんが持つといてください』

「・・・神棚や仏壇があればそこに置いておくように、だそうです」

ただ、これってどちらかと言えばお被い用のお札だったはずだから冬琉さんが持つてるとまずいような気がしないでもないが・・・

「・・・ありがとう、と言つべきなのかしら・・・？」

流石の冬琉さんも反応に困っている。

そりゃそうだ、こんな物を貰つて喜ぶ演操者がいるわけない。ハンドラー

しかも厄介なことに、それを選んだ人間が傍から見れば同じ演操者ハンドラーで、実際は、副葬処女ベリアル・ドールなのだ。

喜ぶべきか、僕らの非常識さを嘆くべきか・・・

『でも、それ以外だと線香とか、お供え物みたいなものになっちゃいますよ・・・？』

いや、それしか選択肢がない訳でもなかったと思うのだが・・・僕の覚え違いだろうか？

『・・・まあ、ありがたく貰つておくか。』

ベリアル・ドール 副葬処女として言えば、そっちの方が先輩になるわけだしな』

頭を押さえながらも、一先ず納得して見せる秋希さんと、まあ本人がそつ言つのなら、ということでお札を受け取る冬琉さん。

「あ、それと“これ”を・・・」

忘れないうちに、鞆からも一つのお土産を渡す。

因みにこれは秋希さんと冬琉さん用にしっかりと二つ。

「嵩月からのお土産です。」

一週間ぐらいは来れないそうなので、僕が預かって来ました」

そう言って冬琉さんに差し出したのは京都で有名な神社のお守り。
そして、若干声を落として話しかける。

「……縁結びのお守りだそうです。

秋希さんのはこっちの小さめの方で、冬琉さんのは大きめの方です」

「『……!?!?』」

これはこれで予想外だったのかそれなりに驚きの表情を浮かべる姉妹。

それでも、先程の様に嫌な顔になることはなく、すぐに受け取ってくれた。

因みに冬琉さんのは恋人が欲しい人用のお守りで、秋希さんのはカップル用のお守りだったりする。

「財布とか定期入れに入れておくと良いそうです」

どっちにしる冬琉さんが持つことになるだろうが、この場合どうすりゃいいんだ……?

カップル用と、独り身 訂正、相手が欲しい人用のお守りを一人が両方持つって。

すごいややこしいことになりそうだが……まあ良いか。

そんな僕の割とどうでも良い疑問を余所に、橘高姉妹は、それぞれがそれぞれのお守りを見つめ、思うところがあるのか、(多少ではあるもの)意識を飛ばしていた。

こんな二人でも一応女子高生なんだな……と、二人に知られたら間違いない張り倒されることを考えながら僕は二人の様子を眺めていた。

『トモは奏ちゃんとかップル用のお守り買ったもんね』

そんな僕に二人に聞こえない様、操緒が耳元で話しかけてくる。

その操緒の声は若干嫉妬の様なものが感じられたが、そんなもの以上にも多量のからかいの成分が含まれていたような気がする。

「……うるさいな……良いだろ別に」

『べつについ……』

私は悪いとは言っていないですよ』

「……」

そう、操緒の言う通り、僕と奏もカップル用のお守りを買っていたりする。

まあ、先日の自由行動の時の最終目的地がその神社だったからだけど。

(そこを目的地に選んだ理由は、奏が普段からは考えられないくらい強い調子で要求してきたからなのだが……)

P.S.: 操緒とアニアにその話をしたら、揃ってバカップル扱いされた)

と、そんなことは今はいいんだよ。

早いうちに冬琉さんに聞かなきゃいけないことがあるんだから。

そう気付くと同時に、すぐさま行動開始。

まずは、目の前にいる妹の方に話しかけねば。

「あ〜、冬琉さん」

「・・・何かしら・・・？」

少しばかり期待が籠った眼差しを向けられる。

ひよっとしたらまだお土産があるのだと思われてるのかもしれないが、残念ながらそうではないんですよ。

期待を裏切るようで悪いのですが、厄介事です。

「GDって、一般人に裏の世界の説明とかしてくれませう・・・？」

「『・・・は・・・？』」

あまりにも予想外の質問だったのか、秋希さんと冬琉さん、二人揃って呆けた表情になってしまっていた。

気持ちは分かるけど。

・
・
・
・
・
「・・・なるほどね・・・このバカップル！！」

『ふむ、見事なまでにバカップルだな』

「姉妹揃ってその反応ですか・・・」

露崎の問題を相談するために二人に経緯を全て話し終わると、上記のような反応が返って来た。

・・・いや、なんとなく予想はついてたけどね。

因みに、冬琉さんや雪原さんと言った僕らと親しいGDの面々に相

談するよう決めたのは、僕、奏、操緒、アニア、4人の総意だ。

その際、僕と奏の関係もバラしてしまうことにした。

いや、僕としては出来ることなら隠していたかった。

だけど、露崎を連れて来て説明したり、事情聴取を行うとなるとどうしても漏れてしまうということがアニアからの言葉でほぼ確定したのだ。

それなら、いつそのこと自分たちの方で言ってしまった方が良い。

露崎の事を学生連盟側に任せず、自分たちで処理してしまえば良いんじゃないかと思われるかもしれないが、僕たちとしてはこれ以上不確定要素を増やしたくない。

ただでさえ冬琉さんたちに干渉してきたことによって、未来がどれだけ変化しているのか分からないのだ。

それなのに、露崎が関わって来るとなると、ややこしいなんてものじゃない。

下手すりゃ戦争一直線だ。

勿論、僕たちが説明して？鐵とかの証拠を見せる方が、学生連盟に僕と奏の情報を洩らすよりもメリットは多いだろう。

露崎の行動が予測できないというリスクは多々あるが、それも可能な限りアニアが傍にいれば減らせるはず。

だが、今後の事を考えると、少しは学生連盟がどれほど動いてくれるのかを測っておきたいという思惑もある。

学生連盟の最大戦力であるGDは特徴から言って、どうしても個人プレー、もしくは独断専行が多い。

しかも、彼らが所持する機巧魔神アスラ・マキナは総じて強力な機体ばかり。

今後協力してくれる可能性が少しでもあるのであれば、個人が請け負っている役割も見ておきたい。

それに、こちらの洩らすデメリットだが、幸いにもまだ大きな問題にはなっていない。

奏は擬態を解いてもまだ未契約の状態だし、ペルセフォネを見られるような機会がない限り、僕が魔神相剋者アスラクラインだということはまず分か

らない。

恋人同士だからといって、即座に法王庁、もしくは神聖防衛隊が出てくるとは考えにくい。

それに、雪原さんは神聖防衛隊寄りのGDだが、佐伯兄妹程魔神相剋者イブに問題があるとは考えていないようだ。

そのことが法王庁内部も一枚岩でないことを物語っている。

僕らが賭けに出なければいけないのは、そこだけだ。

後は、学生連盟がどれだけ露崎の事を管理してくれるかにかかっているが、それこそ今回の目的の一つであるため何とも言えない。

「・・・はあ、まあいいわ。

その事については今更だしね・・・」

『そうだな。

そもそも、あの空気で付き合っていない方がおかしい』

が、僕と奏が散々悩んだというのに、この姉妹は然して興味がなかったらしい。

この人たちの前ではそんなにそれっぽい会話とか空気はしてなかったと思うんだけどなあ・・・

その事を言つと、

「いや、あれでそれ程じゃないって・・・あなた達二人は本来ならどれだけバカップルなのよ・・・」

『語るに落ちる、とはこの事だな』

逆に呆れられた。

そして、

「『あなた（お前）も大変ね（だな）……………』」

操緒に憐みの視線が向けられる始末。
それに対して、

『いえ、もう慣れましたから……………はあ……………』

諦観の表情で答える操緒。

そんなに酷いかな……………？

自分ではそこまでだと思っただけ……………
って、今はそのことじゃなくて、

「あー、それで露崎のことはどうすれば……………」

いや、勿論僕たちのことも本題の一つではあったんだけど、それよりも露崎の問題をどうするのかの方が大事だと思うのですよ。

「……………ああ、そうだったわね」

そんな僕の言葉にやたらと間をとって答える冬琉さん。

おいこら、今の表情見る限り、素で忘れてただろ。

頼むからそこはしっかりしつかりしつといて欲しい。

なんのためにバラしたのか分からなくなってくるではないか。

『まあ、個人で勝手に処理せずに、学生連盟を頼われわれってくれたのは正しいと思うが……………

ふむ……………そうだな……………一度ここに連れて来てくれないか。

話を聞く限り、誤魔化すことは不可能の様だ。

とはいえ、いきなり本部に連れていくほどの事態でもないようだからな』

そんな頼りない妹をスルーして、秋希さんが答えを返してくれる。
・・・まあ、妥当なところかな。

確かに、いきなりあの本部で事情聴取、というほど事態が悪化している訳でもない。

「分かりました。

向こうの予定次第ですけど、今週末辺りにでも連れてきたいと思っています」

その辺りの連れ出す役割はアニアにやらせてもらうことになるのだろうが、大丈夫だろう。
それと、

「あの、僕と奏のことは、口外しないでいただきたいのですが・・・」

別に八條兄妹とか、鳳島兄妹ぐらいなら構わないし、雪原さんもしようがないと思う。

だけど、学生連盟の他の面々や洛高の関係者に話すのは勘弁して欲しい。

その事を伝えると、

「分かってるわよ、それぐらい。

・・・私たちに話してくれたたってことは信頼してくれたって事なんでしょ？

そんな信頼を破るほど私たち姉妹は薄情じゃないわよ」

という、ありがたい言葉が返ってきた。

『ああ、1年掛かってようやく、だがな』

そう言われ、改めて気付いたことがある。

ようやく、僕はこの世界に馴染めたのかもしれない。

今まで少なからず残っていた疎外感も知らぬ間に消えている。

自分でも全く気付かなかったが、無意識のうちにそう思えるようになっていたのか。

・・・うん、良かった。

感慨深いものがあるが、そんなことは特に表に出すことなく、

「・・・そう、ですね」

出来る限り普段通りに返事を返す。
だけど、

「・・・でも、瑠とかはズルイわね。」

私たちよりも短い期間で信頼されてるんだから」

冬琉さんのその予想外の一言で場が凍りついた。

折角良い空気だったのに・・・なんで壊すようなことするかなあ。

秋希さんもやや呆れ気味。

だが、冬琉さんは普段と変わらない調子で、不思議そうな顔をしていた。

そんな微妙な空気を、

『・・・え、と・・・』

じゃ、じゃあ今週末には露崎さんをお願いしますね!」

操緒が明るい声を出すことで無理矢理修正する。

『あ、ああ、そうしてくれ!』

秋希さんもそれに乗っかり、やや大きめの声で返事を返す。

いそいそと、僕と操緒は次のお土産を渡す相手　八條さんか塔貴也さん　の許へと向かう。

「？」

そんな僕らを眺めたまま、冬琉さんは不思議そうに首を傾げるのだった。

・・・何故、この人が一巡目にしろ、二巡目にしろ生徒会長になれたのか疑問に思えてきた。

？
？
？
？

そんなこんなで週末。

当事者である僕に操緒、それ学生連盟のメンバーである橘高姉妹や雪原さんは勿論、何故か塔貴也さんに八條兄妹、更には鳳島兄妹も道場にやって来ていた。

残念ながら奏は今日は来れないので、後日改めて報告することになっている。

で、今はアニアが露崎を連れてくるのを皆で待っている最中だ。

別にこんなに人がいなくても良いような気はするが、冬琉さん曰く

それっぽい空気にするためとのこと。

人数が少ないよりは、大勢がいた方が真実味が増すのだそうだ。

・・・そう言われるとそうかもしれないが・・・

当事者の一人がいらないのに真実味も何もあつたもんじゃないうような気はするが。

因みに、すでに道場にいる面々には僕と奏の関係は知れ渡っているし、口外しないと約束してくれた。

ただ、それを聞いても誰一人驚くことなく、

【ようやく認めたよ、こいつら・・・】

みたいな空気になったことに奏と二人、若干気落ちしたものだ。

そんなに分かりやすかつたかな・・・？

と、皆と会話しながら先日のを思い出していると、

「入るぞ」

道場の外からそんなアニアの声が聞こえてきた。

が、誰もそんなアニアの声に驚いたりしない。

足音が二人近づいて来ていたのは全員聞き取っていたし、秋希さんや冬琉さん、それに八條さんといったレベルの人たちは、

「緊張してるみたいね」

『仕方ないだろう』

「まあ、普通の女子中学生が堂々としていても空恐ろしいが・・・」

露崎の心理状態まである程度把握していた。

いや、ホントに何者ですか貴方達は。

そんな中の声など無視して、アニアが道場の扉を開け、いつもの様に無駄に自信満々な様子で入ってくる。

そのアニアの後ろをビクビクと脅えながら露崎が付いて入って来る。彼女は道場に入った瞬間、

「…………え…………!？」

驚いて目を丸く見開き、すぐさま回れ右をして道場から出ていこうとしたが、

「これで全員ですわね」

彼女の後から道場に入ってきたダルアさんに阻まれ、逃げられなくなってしまうた。

ダルアさんは後ろ手で扉を閉め、露崎の前に進むよう促す。

逃げ場を失った露崎はしばらく呆然としていたが、我に返ると諦めたのか道場の中央へ向かってきた。

そして、彼女に用意された座布団に　　というか、空いている座布団がそこしかない　　正座をする。

露崎の正面には、冬琉さん。

そして、（露崎から見て）冬琉さんの右隣りに僕、左隣は雪原さんと塔貴也さん。

斜め右前には鳳島兄妹、斜め左前には八條兄妹。

最後に、彼女の右隣りはアニア、左隣りはダルアさんと言った席順。そんな場に置かれた露崎が一言、

「…………ねえ、ニアちゃん…………帰っちゃ駄目？」

……………気持ち分かるが、第一声がそれというのは如何なものだろうか。

アニアの返事は当然、

「駄目だ」

これまた一言。

全く誤解の仕様がなかったので、非常に分かりやすい。

そんな最後の希望が断たれた露崎はというと、

「う、う、う、う、う」

かなりへこんでしまっていた。

若干の罪悪感はあるが、ここで戸惑う訳にもいかない。
なので、始めることにしよう。

どうして、露崎が呼ばれたのか、そして今後の彼女について。

「じゃあ、始めます」

そう言っつて、冬琉さんは話し始めた。

それぞれの自己紹介から始まり、操緒の正体と、彼女が封印されて
いるアスラ・マキナ機巧魔神という存在について。

更には、どうしてそんな物が存在するのか、その世界的な背景。

そこから派生するのは、悪魔や、世界崩壊。

更には、自分たちの所属についてまで。

所々で、露崎の疑問を聞き、それに的確な答えを返しながら話は続
く。

僕を始めとして、話していない他の面々は黙って冬琉さんの話を聞
いていた。

途中で補足する必要があるれば話しに参加する。

そうして、大凡1時間程が経過し、最後には、

「氷羽子ちゃん、美呂ちゃん、お願い」

「分かりましたわ」

「……はい」

座っていた氷羽子さんと美呂ちゃんに頼んで、悪魔としての能力を見せつける念の入用。

氷羽子さんは氷の薙刀を作り出し、美呂ちゃんは影を操り自身の体を宙に浮かび上がらせる。

それを見た露崎はというと、

「ほえ〜〜〜」

口を開き、かなり間抜けな顔になって驚きを顕わにしていた。というか、一気に大量の情報を頭に叩き込まれ、処理能力の限界を超えたようにも見えるが……
と思った瞬間、

バタツ！！

露崎がいきなり倒れた。

「は、波乃！？」

急いでアニアが駆け寄り、様子を見ると、

「……気絶している」

との事。

39回 暴露（後書き）

露崎の件が少し消化不良なので、次回に少し喰いこみます。
とは言え、話の大筋ではないので本当に少しの予定ですが・・・

40回 決心（前書き）

前回のあとがきで、露崎の件が少し喰いこむと書いていましたが、何故かガツツリ主役級の扱いになってしまいました。

・・・いや、ある意味予定通りの立場なんだが

40回 決心

露崎に説明会が行われた日から既に数日。

その翌日から今日に至るまでの間、学校での露崎の様子は普段通りに見えた。

中の良い友人通しで取りとめのない会話に興じ、授業を受け、放課後になったら彼女の所属しているテニス部へと向かって行く。

表面上は普段通りで、周囲との関係も全く変化がないように見える。

ただ、僕らから見れば明らかな変化もあった。

同じクラスで普段から会話を交わしていたアニアや僕をどこことなく避けるようになっていたのだ。

はつきりと誰にでも分かる様に避けている訳ではない。

アニアが友人同士の輪に入り、会話に参加していればいつもの様に会話をしていたし、僕たちの方から話しかければ返事を返す。

ただ、露崎の方から僕たちに話しかけてくるようなことはなかった。

仕方がないことだとは思いつけれど、どこことなく物悲しい。

それと、彼女が一人でいる時はほぼ必ず虚空に視線を漂わせ、何かを考えている様子だった。

以前の彼女には物事を考えている様子が見られなかったという訳ではないが、今迄にはない真剣さを感じられた。

直接聞いたわけではないが、多分先週末に話した事について悩んでいるのだと思う。

話が終わってすぐに気絶していたから少々不安だったけれど、ちゃ

んと話の内容は覚えていてくれたようだ。
あの時話したのは、裏の世界での一般的な知識だけだ。

世界が一度滅んだこと。

アスラ・マキーナ
機巧魔神や悪魔の存在。

ダイクソサエティ
学生連盟や科学狂会といったいくつかの組織。

それよりさらに詳しいことは話していない。

何故世界が滅んだのか、ということや、悪魔とは何なのか、等のこととはそうそう話す訳にもいかないのだし・・・

それはともかく、そういった情報を得た露崎が今何を悩んでいるのかは僕には分からない。

とはいえ、ハンドラー演操者でもない一女子中学生が何か出来るわけでもない

とは思ってから、僕個人としてはあまり深刻に物事を捉えてはいない。何か問題が起きたとしても、大抵はGDが出てくるのだし・・・そもそも、洛高の様に学生連盟に所属している学校に進学しなければ早々事件に巻き込まれる訳もない。

・・・いや、加賀篝が起こした事件みたいに何とも言えない物もあるけれど・・・

と、ここ数日の彼女の様子はそんな調子で大きな変化はなかったのだけれど・・・

『今日の放課後、体育館裏に来てください。

アニアさんや高月さんたちと一緒に。

露崎波乃』

今朝登校してきた時に、僕の靴箱の中にはそんな文面の手紙が入っていました。

ご丁寧に、淡い桃色の封筒に入れられたそれは傍から見ればラブレットにしか見えないような代物で・・・

「・・・夏目くん・・・ちよつといいですか？」

僕の後ろにいた僕の恋人が勘違いするには十分な代物だ。

「い、いや、あの・・・嵩月さん？」

その時は僕もまだ封筒の中身を読んでいなかったから何も言えなかった。

いや、勿論そんなことがあったとしても断るつもりだけど、目の前にいる黒い炎を纏った雌型悪魔の姿は、圧倒的な威圧感を僕に向けてはなつてきていたのだ。

つて、奏さん!?

なんかやたらとランクアップしてませんかねえ!?

そんなことを考えつつ呑気に目の前の悪魔に引き摺られながら、僕は原因の手紙の主に盛大に呪詛を送るのだった。

・
・
・
・
・
そんなこんなで、放課後。

僕と奏、それにアニアは微妙に時間をずらしながらも、別々のルートを使い体育館裏にやって来ていた。

ドス黒い奏の前で（正座して）手紙を読み上げたことにより、手紙の内容はしっかりと奏には伝わっていたし、アニアには直接僕から

伝えてあった。

呼出しに使われる場所としては定番の体育館裏ではあるが、幸か不幸か今日は先客は誰もいなかった。

体育館裏の静寂とは違い、校庭や体育館からは部活前の柔軟をやっている生徒たちの明るい声が聞こえる。

僕たち3人が集まってから大体5分程経った頃に、そんな学校の敷地の中でも薄暗く、人の目に付きにくい場所に、露崎はやってきた。何度も後ろを振り返り、誰も自分に付いて来ていないかを確認する念の入用。

その心遣いはありがたい。

が、バレたくないのなら、早めに終わらせて欲しかったりする。

そんな僕の心情など関係ないとばかりに、露崎は中々話したそうとはしなかった。

「うー……」やら、「え、つと……」やら、「むうううううー……」などの呻き声を洩らしながら、どう切り出したものか悩んでいるようだ。

果ては、頭に手をやり、ガシガシと整えられた髪を掻き始め、及び腰になる始末。

そんなクラスメイトの様子に我慢できなくなったのか、

「……それで、この間のことで話があるのだろう、波乃？」

そうアニアが切り出した。

「う、うん……」

促され、どもりながらも返事を返す露崎。

そして、口を開けた勢いそのままに話し出す。

「……その……自分の中でもまだよく纏ってないんだけどね。」

私はまだ悪魔とか、ア、アスラ、マキーナ・・・だっけ？とかのことは信じられないんだ。

い、いや、いないって否定する訳じゃないんだよ！

あんな風に証拠も見せられたんだしね・・・

・・・だから、って訳じゃないけど、この前橘高先輩が話した事も全部本当なんだと思う」

正直言っ、世界が一度滅んだって言われても、信じられないけど・・・

そう言っで一呼吸置く露崎。

一度話し出してしまったからか、先程のどもり具合もかなりなりを潜め、徐々にはあるものの普段の彼女の喋り方に戻りつつある。

「それで・・・自分はどうしようかっ、て考えてみたんだ。

・・・私なんて、戦うなんてことは出来るわけないし、頭もあんまりよくないから、きつと何も出来ないと思っ、たから、これからはいつも通りに過していかうとしたの」

普通の中学生ならそう思い、留まると思っ、し、それがきつと正解だ。僕や橘高姉妹の様な例外でもない限り無理にこの世界の真実に関わる必要はない。

アニアもそう思っ、たのだろう、

「そっ、だ、波乃。

お前はそれでいい」

露崎の言葉を肯定し、特に反対する様な様子はない。

それは僕たちも同じだ。

僕も奏も、アニアに賛同するかのよう、に首を縦に振る。

だが、アニアや僕たちの意見とは逆に、露崎はそこで首を横に振っ

た。

「うっん、私はこのまま普段通りに過すことはしたくないの。
アニアさ……ニアちゃんたちが私の事を心配してくれて言うて
るのは分かるけど……」

「だけどね、私もやっぱりニアちゃんたちのことが心配なんだ」

そんな彼女の言葉に驚いている僕らを余所に露崎は言葉を続ける。
「というか、僕も奏もそこまで露崎に思われるほど仲良くしていた記
憶はあんまりないのだけれど……」

「ああ、そっか、メインはアニアか。
それなら納得がいく。」

「それにね、話を聞いてから出来るだけ普段通りに過ごそうと思っ
てたんだけど、やっぱりどこかで無理してる自分がいたんだよ。」

玲子ちゃんとか、皆と会話をしてもどこか不自然なの。

自分の過してる今の世界がハリボテの世界に見えちゃう。

「まるで、今にもこの世界が終ってしまいそうな錯覚……」

「だからって、露崎が“こっち側”に関わる必要なんてないよ」

危険がない世界の方が良い。

巻き込まれるようなことがあっても僕たちがすぐに守れる方が。」

「……ふふ、夏目くんは優しいね」

僕のそんな思考が僕の一言から分かったのか分からないが、露崎は
そんな言葉を返してきた。

「そんなに仲が良い訳でもない私なんかのことを真剣に考えてくれ

てる。

「……うん、嵩月さんが好きになるのも分かる気がするよ」

そう言っつて、露崎は柔らかく笑った。

話の内容や、場の雰囲気にもそぐわない穏やかな微笑み。

「だけどね、夏目くんたちは私のことなんて気にしなくて良いんだよ。」

私が関わろうとしてるのは、自分勝手な理由なんだから。

私が勝手に夏目くんたちの様子を盗み見して、勝手に探ろうとして、勝手に心配させちゃって、勝手に真実を知っちゃっただけ。

それで、今いる世界を信じられなくなっちゃったの」

だから、私が関わっていくのは自分のため、あなた達が気に病むことはないんだ。

露崎はそう言っつてるが、自身の危うさには気付いていないのだろうか……？

最初に悪魔とかの存在がまだ信じられないと言っているのに、今いる自分の世界も信じられなくなっている。

どちらの世界も信じられない今の露崎は、非常に不安定だ。

彼女の今迄の言葉を信じるのであれば今後に関わって来るつもりなのだろうが、それにしただって不安すぎる。

「……話はそれだけ。」

今週末に橘高先輩たちにも同じ話をするつもりだから」

それだけ言っつて露崎は体育館裏から歩き去っていった。

後に残ったのは、呆然としているアニアと、僕。

それと、どこか納得した表情を浮かべている奏だけだった。

?
?
?
?
?

そんなこんなで週末。

1週間前と同じ面子（+奏）が道場には揃っていた。

が、先週とは違い場に緊張感が漂っている訳ではない。

今日の主役である露崎が若干緊張してはいるけれど、それも先週ほどではない。

そんな、穏やかな空気の中で語られた露崎の決意。

この一週間で自分が感じ、考えたこと。

その上で決めた覚悟。

先日僕らに語った内容と殆ど変わらない内容を冬琉さんたちに話し、最後に一言、

「お願いします。」

私を学生連盟に入れてください!!」

と、頭を下げながら冬琉さんや雪原さんに頼んでいた。

冬琉さんや、八條さん、それに鳳島兄妹辺りはその突然の申し出に呆気にとられているが、僕や奏はそれほど驚いてはいなかった。

彼女が今後も関わっていかうとするのなら、僕のように橘高道場にも通うか、どこかの組織に所属するぐらいしか選択肢がないからだ。
……まあ、本当に言うとは思ってなかったけれど。

「・・・学生連盟に、ね」

呆気にとられている冬琉さんではなく、もう一人のGDである雪原さんがポツリと呟いた。

「はい。」

雑用でも、なんでもしますから手伝わせてください!!」

そんな彼女の言葉に喰い付く露崎。

そんな半一般人の様子を値踏みするかのような視線で雪原さんは見つめている。

「君がどうしてそんな思考に至ったのかはさっき聞いたけれど、本当に良いのかい？」

恐らく、君が考えている以上に僕らの仕事は大変だし、危険だ。いつ何時、死んでもおかしくはない」

「分かって、「いや、分かってないね」・・・っ!!」

雪原さんが纏う空気が変わる。

今までは清涼感を持った夏の様な空気だったけれど、今は違う。極寒の、それこそ永久凍土にでも漂っていそうな冷たい空気。

有体に言って殺気

それが、露崎一人に向けられる。

当然向けられた露崎は息を呑み、黙り、腕を体に巻き付け、震えだす。

今雪原さんが露崎に向けている殺気は本気の彼女の殺気からしてみれば、3分の1にも満たないだろう。

だが、それでも一般の中学二年の女子生徒に向けるには酷だ。
この場にいる人間の大半からしてみれば可愛いものだが、露崎にとつては今迄まるで感じたことのないモノであることは疑いようがない。

露崎は体に巻き付けた腕で必死に自身の体を掻き抱く。

「……………あ……………っ……………!!」

言葉を放とうとしても、声が出ていない。

彼女の口から洩れるのは擦れる様な吐息と、喉の奥から漏れ出たかのような弱々しい悲鳴ともつかぬ声。

そんな状態に露崎が追いやられたのも一瞬。

当人からしてみれば永劫の時間にも感じられたのかもしれないが、実際は10秒と経っていない。

「は、はあっ!!」

ドサツ!!

雪原さんから向けられていた殺気が消え去ると、露崎はその場に崩れ落ちる。

顔は青白いを通り越して土気色になり、夏手前だといつのに体は震え続けていた。

唇も真っ青だ。

そんな彼女に容赦なく雪原さんは言葉を投げつける。

「分かったかい？」

それがこつちの世界では普通なんだよ。

軽い気持ちで『分かっている』なんて口にしないで欲しいね」

雪原さんはこれで露崎が諦めてくれると思ったんだろう。

実際、僕も奏も、ニアや冬琉さんだってそう思っていたと思う。だけど、

「わ、分かり、ました。

・・・これが普通なら、尚更、ニアちゃんたちを放っておけません」

露崎は諦めなかった。

寧ろ、より決意が固まったようだ。

これには正直言って、道場にいる全員が呆気にとられた。

そこまでして関わろうという彼女の心意気に感銘を受けた訳でもない。

ただ、純然たる呆れがあった。

「・・・もし、自分が物語か何かの主人公にでもなったつもりなら考え直した方が良いよ」

雪原さんの再度の警告にも首を横に振って答える露崎。

その後も暫く問答が続く。

露崎には関わりたくなるような言葉を投げかけ続けるが、あまり効果がない。

寧ろ、決意がより固まっていつてしまっているかのようにだった。

・・・仕方ないのか・・・

僕がそう、露崎が関わるのを認めようかと思った時だった、

「・・・仕方ない、僕が面倒を見よう」

雪原さんがそう、了承の言葉を口にした。

「ホントですか!？」

そんな彼女の言葉にすぐさま喰い付く露崎。
先程までの暗い雰囲気はどこへやら、だ。

「ああ、ただし、本当に雑用とかその辺のことを手伝ってもらおうか
らね」

「大丈夫です!!
いくらでも言ってください」

雪原さんに認めてもらえて嬉しかったのか、喜色を顔に浮かべ、満
面の笑みをみせる露崎。
そんな彼女を横目に、

「良かったんですか・・・？」

僕は雪原さんに話しかけていた。
露崎には聞こえないよう、声を響めながら。

「・・・ああ、人員が足りないのは事実だしね。
スピンネル尖晶の件やその他の案件で大分人が出払ってるから事務処理が滞
っててね・・・」

そう言った意味では渡りに船だ。
そう言って、雪原さんは溜息を洩らす。

どちらかと言えば、あまり取りたい手段ではなかったようだ。

「・・・まあ、瑤の言っただことは事実ね。

それに、これ以上厄介事に巻き込まれない落とし所であれば、最善とはいかなくても最良ではあったと思うわ」

「・・・まあ、露崎の面倒を見ることになる当人のお二人がそう仰るなら別に構いませんが・・・」

「一先ず、露崎の件は片付いたと考えて良いのだろう。

後は、どれだけ雪原さんたちが世話してくれるかに掛かっている。

露崎が関わってくることは予想外の事態だったけど、一先ず学生連盟が処理してくれるのなら問題ない。

法王庁辺りに行ってややこしいことになるよりは100倍マシだ。そう思い、安堵していた僕には聞こえなかった。

「・・・これで、夏目くんたちを呼び出しやすくなった・・・」

雪原さんのそんな呟きが・・・

40回 決心（後書き）

これで良かったのかどうか・・・
というか、露崎の件も決着したのだから、そろそろ佐伯兄妹を構わ
なきゃいけない気も・・・いや、苑宮姉妹が先？
ああ、ややこしい。

幕間 C o u s i n ? ? a n d f r i e n d f o r (前書き)

GWも終わりか・・・

気付けば今日からは大学があるという事実。

結構テンションが下がります。

P . S

後書きにアンケートを載せるので、良かったら答えていただけると助かります。

幕間 C o u s i n ? ? a n d f r i e n d f o r

むかつく!!

むかつく、むかつく、むかつく!!

思えば最初にあの二人の事を聞いてから、いつも私はあの二人に対して否定的な感情しかもっていなかったような気がする。

自分でもどうかとは思うが、こればかりはどうしようもないと思う。

何故なら、私自身が何も問題だと思っていないからだ。

なんせ、相手の片方は悪魔だ。

学校では巧妙に隠しているようだが、私は知っている。

彼女の本性が人間を堕落させるようなものなのだ。

一部には『悪魔こそがこの世界を救う存在だ』などと言っている連中がいるが、馬鹿らしい。

世界を救う存在ならばなぜあいつらは私たちを襲ったのだ。

3年前の地中海沖で起きた事件

あいつら 悪魔崇拝者 が襲ってこなければたくさんの人が死
なずに生きていられたのだし、何より、哀音が死なずにすんだ。
お兄様は哀音と普段から一緒にいるらしいが、私には見えない。
姿が見えなければ、声も聞こえない。

あの元気溍刺な彼女の声を、周囲にいる私たちを元気づけてくれる
彼女の姿を、私はもう感じ取ることができない。

今は大分楽になったけれど、彼女がいなくなった当初の私たち兄妹
は酷かった。

叔母様は娘が亡くなったことを信じられず、ただ呆然と日々を過ごし、私は悲しみの果てに泣き叫び、お兄様に辛く当った。そして、お兄様はそんな私たちを見て、自責の念に駆られたのか、ただひたすら自分の体を虐めていた。誰もが思ったことだ。

どうして、彼女なのだ！！

と。

代われるものなら代わってあげたかった。

お兄様の取り合いをしていたことはあったけど、本当にお兄様の事を好きなのは哀音なのだと、子供心に分かっていたからかもしれない。

だけど、生贄に選ばれたのは私ではなく、哀音。

私たちに悲痛を齎したその事実を徐々に受け止めつつあった私たち兄妹の前に現れたのがあの二人。

夏目智春と嵩月奏

片やハンドラー演操者、片や四大名家の悪魔の家の跡継ぎ娘。

別にこの二人が同学年で、同じクラスにいようが、特に思うところはなかった。

勿論、嵩月奏を認める訳ではないが、学校に通うだけであれば特に何も問題はなかった。

私たちが通っている中学はごく普通の公立校なのだから。私がどうこう言える訳がない。

だが、あの二人は私たちの予想通りの存在ではなかった。定説通りでいくなれば、ハンドラー演操者と悪魔は仲が悪い。

互いが互いの敵であるからだ。

そんなものこの世界に関わっている者の間ならば常識。

たまたま魔神相剋者アスラクラインなんていう例外が生まれているが、それだつてすぐに排除される。

なのに、仲が良い

それこそ、『付き合っているのではないか?』と恐怖を覚えるくらい。

朝は一緒に登校してきて、教室でもほとんど一緒。

昼食や休憩時間はそれぞれの友人と摂っていることもあるが、その友人も互いの共通の友人である場合が多い。

そして、授業が終わると二人揃ってサツサと下校。

放課後に何をしているかまで“私は”知らないけれど、どうせ碌な事じゃない。

・・・これで“付き合っていない”などと言つただから、ふざけているのかと思う。

私たち兄妹が不安なのは夏目智春が嵩月奏コントラクタの契約者となり、彼が魔神相剋者アスラクラインになることだ。

彼がそうなった場合、どれだけの被害が周囲に及ぶか分からない。

学校生活で見る彼は、そこらにいる一般生徒よりも少し押しが弱い
が責任感が強い程度の少年だ。

だけど、力を手にしたら人間なんてどうなるのか分かったものじゃない。

私たちが遭った事件の様な関係者だけのモノならまだ良い。

最悪、一般人に被害が出る。

過去にそんな事例はいくらでもある。

一般社会で起きる事件でも周囲の人間は口を揃えて、

『そんなことをする人間には見えない』

と言っているモノなんてまさにそうだ。

だから、私も、お兄様も、神聖防衛隊や学生連盟に常日頃から、
『彼らを即刻排除』する許可を出して貰えるように嘆願している。
けれど、どちらの組織からも芳しい返答は返ってきていない。
神聖防衛隊側からは、

『未だ対象 夏目智春 がイクストラクタを開き、アスラ・マキーナ機巧魔神を
得たという情報はどこの組織からも入ってきていない。

その為、監視体制の強化に努める』

といった内容の返答が返ってきている。

こちらの言い分はまだ分からないでもない。

私たちは未だに彼のアスラ・マキーナ機巧魔神を見た訳ではなく、ペリアル・ドール副葬処女を見ただけ。

ならば、ただの幽霊憑きかもしれない可能性が高いし、世界に散らばっているアスラ・マキーナ機巧魔神が全て確認されている以上ほぼ確定していると
言っても良い。

勿論、予断は許さないが、彼らにも他に仕事があるのだ・・・仕方ない。

問題は学生連盟だ。

『対象 夏目智春、嵩月奏兩名 が校外で引き起こした事件は
今の所確認されておらず、現段階で我々が干渉すべきではないと判断する』

何よこの返答は!?

事件が起きてからでは遅いのに、事件が起きないと動かない。学生連盟がそう言った組織だって言うのはお兄様から聞いていたけど、まさか本当にそんな組織だとは思わなかった。

哀音をあんなことにして、たくさんの人に被害を及ぼす悪魔を、契約者を、私たちは決して認めない。

・・・だというのに、彼らの周りには何故か人がいる。

嵩月奏と同じ、悪魔のアニア・フォルチュナ。

オカルトマニアの樋口琢磨。

陸上部期待のエース、大原杏。

他にも、同じクラスの男子連中や、数人の女子。

本来の学生の交友関係としては少ない方だとは思いますが、悪魔や演操^{ハンド}者の交友関係としては多い方だ。

なんせ、彼らは周囲と自身の間に壁を作ることが多いのだから。

それこそが私たちが付け入る隙であるのだけれど・・・

まあ、今はその事は良いの。

問題は、先日から私の友人の一人が彼らと良く話すようになったということ。

いえ、その事だけならさして問題ではないわね。

別に彼女が誰と仲良くなるうとも私にそれを阻む権利なんてないんだし。

・・・まあ、同じ相手を狙う様な事があればそうなるかもしれないが、それもそうそうないはずだし・・・コホン

とにかく、問題は、彼らとよく話すようになった友人がそのころを

境に部活を辞め、何か別の事を始めたのだということ。

私たち部活の友人がどれだけ聞いても、彼女は頑として口を開くことはなかった。

その為、はつきりとした理由が分からないけれど、私は何となく彼女を夏目たちが引きこんだんじゃないかと思っっている。

勿論、本当だという根拠がある訳じゃない。

だけど、彼女と夏目たちがよく話すようになった時期が重なるのだから、疑うなという方が無理だ。

これで、夏目たちが一般人なら何の問題もないが、あいつらがこちらに関わっているのは分かっている。

・・・よくも、私の友だちに手を掛けてくれたわね！！

正直言つて、腸が煮えくりかえる気持だったし、出来ることなら彼らを直接問い詰め、私の手で間違いを正し、露崎を引っ張り出してあげたかった。

実際、彼らの教室の前まで押し掛けたこともある。

だけど、いつもタイミング悪く実行できない。

自身の知らない所で友人が一人、表から脱落したのだ。

こんなに悔しいことはなかった。

お兄様に相談しても、確証がない以上校内では動けないとの事。

それに、お兄様は洛高の受験で忙しい身。

あまり頼ることはできない。

悔しく、また、自分の無力が許せず、暫く、まともに眠れず、部活や勉強に身が入らなかった。

そんな私とは逆に、同じクラスの嵩月奏はいつもの様に、いや、ひよっとしたらいつも以上に生き活きとした生活を送っている。

・・・ユルセナイ

私から大切な従姉妹を奪った存在が、今度は私から友人を奪って行く。

フッフ、ソツチがそノ気なら・・・

いいわ、私も徹底的にあなた達を排除してあげる。

私、佐伯玲子の全てを使ってあなた達を壊してア・ゲ・ル。

幕間 Cousin ??? and friend for (後書き)

さて、この『闇と炎の相剋者』ですが、昨年の6/21から執筆を開始しまして、上手くいけば来月末には書き始めてから1年になります。

これだけちゃんと続いているのは読者の皆様のお陰です。
ありがとうございます。

つきましては、一周年記念に皆様からのリクエストの題材を募集し、それを一周年記念の外伝、もしくは番外編としたいと思います。

題材の内容はアスラクライン関係なら何でもあります。

原作の14巻以降の話でも、原作の所々抜けている話でも、智春と奏ではなく他のカップリングの話でも、何でもかまいません。

勿論、この作品内のIFやカップリングでもかまいませんが・・・
(すみませんが、クロスとB1だけは遠慮させてください。

前者は私が元ネタが分からない可能性がありますし、後者は私にはきつと(精神的に)書けないので)

ですが、アスラクラインというだけでは選択肢が多すぎると思うので、ジャンルだけはアンケートの票数の多いものに絞ろうと思います。

1：ギャグ

2：ほのぼの

3：恋愛

4：シリアス

戦闘が必要であればどこにも入れます。

選択肢は上記の4つでお願いします。

以上の4つを選んでいただいたのち、どんな話が良いかをお書きください。

一番多く投票されたジャンルの中から私が選ばせて頂きます。

期限は、一月後の2011/6/10までとさせていただきます。

また、期日が近づきましたらお知らせいたしますので。

それでは、今後ともよろしくお願いいたします。

41回 遭遇（前書き）

アンケートで恋愛が人気なのはある程度予想がついていたのですが、操緒が人気というのは何と言ったものか・・・

流石はメインヒロイン

現状、彼女がぶっちぎりです。

アニアとか朱湮はほとんど出ない不思議。

まだまだ皆様のご意見お待ちしております。

（何のことか分からない方は、【幕間 Cousin ?? and

friend for】の後書きをご覧ください）

41回 遭遇

「は、は、はっ！！」

夜も明けきつていない川沿いの道を走る僕の息が漏れ、秋の朝の空
気の中に溶けるように消えていく。

『はい、あそこの橋まで！！』

時間もないんだし、急いで、急いで』

懸命に堤防の上を走る僕を尚のこと急かすように いや、実際急
かしているんだけど 操緒が声を張り上げる。

この（無駄に）優秀なトレーナーがいるため、僕の早朝トレーニングは今迄一度も不完全に終わったことはない。

ありがたいはありがたいのだけれど、たまに口の端に上る僕に対する文句はできれば勘弁して欲しい。

『……ん……？』

そんな彼女が目的の橋の方を見やり、首を傾げた。

走りながら僕も橋の方を見やるが、朝日に照らされた街の中に浮か
び上がる灰色の橋は、いつも見ている橋と特別大きな変化があるわ
けではない。

いや、通っている車だとか、橋の上の通行人とかは勿論違うのだけ
れど些細な問題だろう。

が、

『……どこかで見たような……？』

操緒が疑問に思ったのは、僕が些細な問題だと思ったその通行人の方だったようだ。

早朝の街に浮かび上がる橋の上には、遠目で見ても数えるのにさして苦労しない程度にしか人がいない。

しかも橋の上に見える人は僕と同じようなロードワークに精を出している人ばかり。

ここ一年毎朝走っているから特に珍しいとは思わない。

まあ、今日は休日だからいつもよりは若干人が多いけれども。

けれど、そんな見飽きた風景の中に、普段とは違う光景があった。

「ん？」

あれって……」

橋の欄干に腕を載せ、橋の下に流れる川の水面にじつと視線を向けている一人の少女。

彼女の身を包んでいるのは、白地に青いラインの入ったセーラー服で、市内ではお嬢様学校として有名な名門女子中学の制服だ。

こんな時間帯にそんな学校の生徒が街を一人でうろついているのはかなり不思議で異常だ。

『……あの子、どっかで会ったと思うんだけど……どこだったっけ？』

そんな少女の様子を遠目に見やり、首を傾げながら操緒が言葉を紡ぐ。

僕も走る速度を落とし、操緒が言っている少女の顔を見る。

「……って、和葉!？」

始めは良く分からなかったけれど、近づくにつれて顔の輪郭がはっ

きりと見えるようになり、目や鼻、口といった顔のパーツも何となくが見えるようになっていた。
結果、見えるようになったその女子生徒の顔を僕は知っていた。
操緒は覚えていなかったようだが、確かに僕は覚えていた。

苑宮和葉

以前の世界でも、母親の再婚相手との顔合わせの時や、奏との強制二人三脚での下校の時など、直接顔を合わせたことは数回しかないけれどそれでも覚えている。
義理の、血の繋がっていない妹ができるということにそれなりの期待感を持っていた僕だ。
そうそう忘れることはない。

『ああ、和葉ちゃんか!!』

どこかで見た顔だと思った』

僕の洩らした名前を聞き取っていたのか、操緒が驚きの声をあげる。そんな驚愕の表情を浮かべている操緒を余所に、僕らの足は橋へと更に近づく。

結果、和葉の顔　　というか、表情がよく見えるようになった。

細部まではっきりと見えるようになった和葉の表情は、何かを決意したかのような、それでいて決して明るくはないものだった。

「それにしても、なんでこんな時間にあんな場所に……」

いるんだ？

と言おうとして気付く。

彼女のいる場所と表情、そしてほとんど周囲に人がいないという時間帯。

そういつたことを考えると、どうしたって、飛び降り自殺をしようとしているのではないかということに。

『トモ・・・』

「分かってる」

操緒も気付いたのだろう、先程までの嬌声はどこかになりを潜め、声には真剣なものへとかわっていた。

そんな操緒と小声でやり取りを交わし、慎重に和葉の後ろに近づいていく。

彼女が自殺でもしようとするのならすぐに止められるように。

だが、バレたり怪しまれたりしては意味がないので、見られても言い訳が聞くよう、ごく普通に出来る限り気配を殺し、足音を消して近付いていく。

既に操緒も姿を消している。

自分がいてややこしい事態になるのを避けたのだろう。

・・・なんか、二人揃って橋高道場の影響を凄く受けてる気がしないでもないが、気にしない。

そうして、僕と操緒が慎重に和葉へと近づいていくとすぐに彼女は行動を起こした。

白いセーラー服に身を包んだ彼女は、コンクリート製の橋の欄干に足をかけ、眼下に広がる川の水面へと大きく身を乗り出していた。

「何してるんだ？」

「え!?!」

僕はすぐに彼女に駆け寄り、和葉の肩を掴む。そのまま和葉を自分の許へと引き寄せ、欄干に身を乗り出させていた和葉の体を強引に橋の通路の上に引き戻す。

「わ、わっ!？」

無理矢理体勢を崩された和葉は当然の様に体のバランスを崩してしまふ。

何が起きているのか分からないらしく、顔には驚きの表情が張られ、大きく両腕を振り、必死に体のバランスを取り戻そうとしているが、その努力の甲斐もなく、

ドンッ!!

引き寄せた僕の体に自身の体を預けるようにぶつけてきた。

「と、とっ」

そんな（未来の）義妹の体をそつと抱き留めるように支える。流石にこれぐらいの勢いで自身のバランスが崩れることはない。

「大丈夫？」

怪我とかしてないよね？」

未だに呆然として、僕の腕の中に納まっている和葉を見下ろしながら聞く。

些か乱暴に扱ってしまったから、怪我とかしてないといいのだけれど。

パツと見では外傷はないが、足とか捻ってたら申し訳ない。

そうこうしているうちに、自身の今の状況に気付いたのか、

「は、離してください!!」

僕が聞いたことがない強く、堅い調子で和葉はそう言い、体を暴れさせた。

まあ、彼女からしてみれば見知らぬ男子にいきなり体を抱きとめられているのだ、暴れるのもごく普通の反応だと思う。

・・・というか、僕がこの光景を奏に見られた場合のほうが大変とは思いますが・・・気にしないようにしよう。

「あ、ごめんごめん」

一先ず和葉の体に回っていた僕の腕を解き、彼女の体の拘束を外す。いや、外そうとして、

「やめてえええええー!!!」

周囲に響き渡った絶叫に遮られた。

「・・・へ?」

「・・・え?」

僕の腕の中で暴れていた和葉と、彼女の拘束を今にも解こうかとしていた僕の二人は揃って呆気にとられ、声の聞こえてきた方向へと振り返り、声の主を見やる。そこには、

「お、同じ顔?」

僕の腕の中にいる少女と同じ顔で、同じ服を着た少女がいた。しかも、その和葉と同じ顔をした少女は必死な形相で僕らの、いや、“僕”の方へと走り寄ってくる。

「・・・咲華・・・」

自身と同じ顔の少女を見た和葉がポツリ、と呟いた。

先程まで僕の腕の中で暴れていた彼女とは打って違って、大人しいものだ。

まるで悪戯がバレた子供の様に。

そんな和葉に回していた腕を僕はそつと解き、彼女から離れるが、

「え？」

和葉に咲華と呼ばれた少女は方向を変え、僕に向かって勢いよく突き進んできていた。

・・・なんで!?

呆気にとられている僕を余所に彼女は足を速め、両手を自身の前に突き出す。

ドンッ!!

そしてそのまま勢いよく僕に体当たりをぶちかましてくれた。

「うわっ!!」

僕はそのまま勢いよく橋の欄干に激突。

腹部から当たる形になったため、それなりにきつかったが、問題はその後。

メキ

と、嫌な音が早朝の橋の上に響いた。

恐る恐る視線を下に向けてみると、分厚いコンクリートの欄干に罅が入り、それが勢いよく広がっていつていた。

うそだろ!?

慌てて欄干から離れようとするも、時既に遅し。

僕の体を支えていた欄干は呆気なくへし折れ、下に見える川の水面へと落下していく。

ついでに言えば、体を支えていた欄干が無くなるということは僕の体を支えるものは無くなってしまふという訳で……

「う、うわああああああああっ!!」

『智春!!』

姿を現し、唾然と僕を見下ろしている操緒の身体が見えるが、次第に遠ざかっていく。

浮遊感と落下感を同時に味わいながら僕は水面へと落下していった。

その頃橋の上では、

僕にぶつかってきた彼女はそのまま

「和葉!!」

大丈夫だった……!?

変な事とかされてないよね!？」

「う、うん。

私は大丈夫だけど、さっきの人が……」

「良いの!！」

和葉が無事ならそれで!！」

「いや、でもさっきの人私を助けようとしてくれたのかもしれないし……」

『トモーー!！」』

「あ、女の人が飛んで行った……って、えーっ!？」

みたいな会話が繰り返られていたらしい。

? ? ? ? ?

僕がなんとか岸まで泳ぎ着き、体を休めていると、

『トモ!！」』

大丈夫!？」』

操緒が橋の上から一直線に飛んでやってきた。

遠目に見ると、二人の和葉?も走ってこちらに向かって来ている。

「ああ、なんとかね。」

「これも秋希さんたちに鍛えられたおかげかな？」

実際、去年の僕だったら死んでたかもしれない。

そう考えてみると、予想外の所でこの朝のトレーニングが役に立っているのが分かる。

いや、普通こんなこと予想してトレーニングをしている人間がいるとは思えないが。

秋に入ったばかりで残暑が厳しいとはいえ、こんな夜明け直後は流石に冷える。

上下ジャージで、下も吸水性の良い下着やシャツを着ているとはいえ、あまり効果はない。

が、そんな僕の様子を見ても、無事だと分かり一安心したのか、

『はあく……良かった……』

深い溜息を吐き、安堵の言葉を投げかけてくれる操緒。
ただ、

『奏ちゃんがこの場にいないくて……』

その後が続いた言葉で色々台無しになった気がしないでもないが、とまあ、操緒には後で色々問い詰めるとして（可能なら）、今はちよつと僕らの目の前にやってきた二人の少女の相手をしよう。

僕の前に来てきた二人の少女は本当に瓜二つ。

髪止めの位置や、被っている帽子に多少の差異は見受けられるけれども、一見しただけでは違いが分からない。

さて

そんな少女二人になんて声を掛けようか迷い、悩んでいると、

「よく生きてますね・・・」

「どうして生きてるんですか？」

と声を掛けられた。

片や呆れたように、片や本当に僕が生きているのが不思議なようだ。いや、前者はともかく後者はどうよ・・・？

「ははは、普段の鍛錬の成果かな」

顔を青褪めさせながらも、とりあえず苦笑で返しておくが、そんなに僕が生き残っているのは不思議なのだろうか？

確かに、7、8m落下して生きているのは不思議かもしれないが・・・
幸い、それなりに水深があつたので助かったようなものだしな。
というか、寒さよりも落下した時の精神的ダメージの方がきつい。

『おお、久しぶりに高所恐怖症発動？』

他人事のように声を挙げている操緒を無視して和葉？（咲華？）は口を開いた。

「それで、あなた達は何なんですか？

いきなり人のこと抱き抱えたりして・・・

それに、そっちの人は何か浮いてますし」

無表情のまま、ややきつめの視線を僕と操緒に向けながら彼女は言

う。

成程、こっちが和葉・・・か？

隣に視線を向ければ、和葉？よりも厳しい視線を咲華？が僕らに向けている。

そんな彼女たち二人の視線に晒されながら、僕は上半身に来ているものを脱ぎ、服を絞る。

「ひゃっ！！」

僕の行動に驚いたのか、それとも男子の上半身に驚いたのか知らないが、慌てて視線を外す和葉と咲華。

別に女性じゃないし、隠すようなものでもないから気にしなくて良いのだが・・・

そんなとりとめのないことを思いつつも、頭を捻り、どう答えたものかと悩む。

とりあえず、絞った服は着るが・・・うわぁー湿って、体に張り付いて来て気持ち悪い・・・

そして、服を着終わった僕が二人に向けていったのは、高一の春に散々後悔したこの言葉。

よりによってまた和葉相手に使うなんて・・・

幽霊って信じる？

41回 遭遇（後書き）

今回の話で初めて原作の話を使わせていただいているのですが、4ページぐらいしか使っていないという驚愕の事実。

これ、原作に入れたとしても完結まで持って行けるんだろうか・・・？

P・S：夏休みとか、露崎のその後は飛ばしました。

42回 妹の悔恨(前書き)

あー、早いところPSNが復活してほしい・・・

もうSONYは駄目かもしれんが、それでも早期の復活を切に願う。

・・・というか、何で欧米からなのさ!?

いや、日本からやってまたハッカーにやられたらマズイから外国で試してるんだろうけどさ・・・

理屈では分かっても納得しにくいのが現状ですなあー

42回 妹の悔恨

橋の上を通るいつも以上に激しい車の往来に耳を傾けながら、

「幽霊、ですか・・・？」

操緒を見やり、戸惑いを隠せていない苑宮姉妹？

だが、あからさまな否定の感情を見せていないだけ以前の世界よりはマシな反応だと思う。

あの時は、気まずいっただらなかつたからなー・・・いや、僕のせいだったけどさ。

「うん、幽霊」

ぼんやりと当時の事を思い出しながら、答える。

正確には違うけれど、一般人からしてみれば対して違いがあるとは思えない。

「・・・信じてはいないですけど・・・」「目の前にいるので信じ
るしか・・・」

未だにどう反応したものが困惑しているようだが、別に操緒のことはそこまで重要ではないのであまり長引かせるつもりはない。

・・・濡れてて寒いし。

「まあ、分かってくれたみたいだから、操緒のことはとりあえず措
いといてもらっていい？」

「ええ、良いでしょう。」

私たちとしてもそこまで長引かせるつもりはないですから」

こう答えるのは、咲華？と呼ばれていた後から駆け寄ってきた方の少女。

ついでに言えば、僕を川に突き落とした張本人でもある。

和葉と僕の間立ち、和葉を護るかのような姿勢を取っている。

個人的には、そこまで警戒される理由が分からないんだが・・・

「・・・じゃあ、そっちの、えっと・・・君の後ろにいる方の子」

僕が和葉の名前を今の歴史で知ってる訳がないので名前は使えない。となると、こういった呼びかけしかできないから仕方がない。

ただ、その呼びかけの所為か、後ろの和葉と、目の前の咲華？の両名の身体が強張るのが分かった。

だから、なんでそこまで警戒するのさ？

「さっきはどうして橋から飛び降りようとしてたの・・・？」

若干怒りつつも諭すような口調で和葉にそう言つと、

「飛び降り？」

何のことですか・・・？」

訳が分からない、とでも言うつかのように目を大きく瞬かせ、疑問で返事をされた。

が、それは当人だけの疑問だったようで、

「和葉、それ本当！？」

和葉のことを護る体勢を取っていた少女は驚き、自身の背中側にい

る少女を詰問しに掛かっていた。

「いや、だから、私には何のことやら……」

「ほんと？」

それなら良いけど……」

渋りつつも抜き放っていた言葉を鞘に収め、再び僕と和葉の間に立つとする少女。

だが、

『え？』

でも、さっき確かに橋の欄干に足を掛けてたよね』

「和葉ーっ!？」

操緒の一言で再び詰問再開、と思いきや、

「ああ、その事なら……」

一言呟いた和葉が一瞬躊躇いを見せたが、制服の胸ポケットに手を突っ込み、

私はこれを破り捨てようとしていただけです」

一枚の何かのチケットの様なものを取り出した。

パツと見は、手作り感満載の……というほどでもない手書きの原稿をコピーしただけのチケット。

書かれている文字までは読めないが、そこまでのいいものとは思えない。

まあ、こちらとしては自殺しようとしていたのではないと分かり安心だ。

それで興味がそのチケットに移ったのだが・・・
正直言つて、いらぬものでも渡されたのかな？と思つたが、

「そ、それつて・・・まさか、お母さんの・・・」

そのチケットを見て声と体を震わせているもう一人の少女の姿を見ると、ただの紙切れではないことはよく分かつた。

「・・・・・・・・・・」

和葉の方は、明らかに視線を逸らし、気まずそうにしている。

・・・成程、こうして知られなくなつたからこんな朝早くから態々うるついていたのか。

「なんで・・・なんでそんなことしようと思つたの!？」

僕が勝手な憶測をしているうちに、目の前で同じ顔の人間が喧嘩を始めていた。

「・・・良いじゃない、私が何をしようと、私の勝手なんだから」

「良くないわよ!!」

和葉は、それが何かちゃんと分かつてるの!？」

お母さんが私たちに遺してくれた・・・分かつてるよ!!」「・・・」

あー、結構服も乾いてきた。

けど、生乾きの方が気持ち悪いかもしれない・・・

「最後の最後で、私に渡されたのがこのチケット!!
咲華は違うよね!？」

だって、咲華の方がお姉ちゃんだし、お母さんとも仲が良かったから良いもの貰えてるはずだもん!!」

「な!!」

何言ってるのよ和葉!？」

私だって同じものを貰ったこと知ってるでしょ!？」

そう言つて、自身の制服を弄り、一枚の紙切れを取り出す咲華。確かにそれは和葉が持っているチケットと同じものに見えた。

「それは・・・!!」

自身の破り捨てようとしていたものと同じものを目の前に出され和葉は若干怯むが、尚も口喧嘩を続けようとする。

咲華も引きさがることはなさそうだ。

そんな二人を、

『はいはい、二人とも落ち着いて』

操緒が間に割つて入ることで止めていた。

なんだか最近の操緒の役割つて喧嘩の仲裁が多いような気がしないでもないが・・・

『なんでそんなに熱くなってるのか知らないけど、一旦落ち着きなつて』

未だに一色即発の空気を纏っている二人を無理矢理押し留めている。

「・・・関係ない人はどいでください。
これは私たち家族の問題なんですから」

『そう言われても、目の前で始まった喧嘩を放っておける訳もない
でしょうが』

「それでも、これは私たちのことなんですが・・・というか、改めて聞きますけど貴方たち誰ですか？」

和葉は未だに憤っているが、操緒と僕の間にいる咲華？の方はといえば幾分落ち着いてきたようだ。
今更な気もするが、僕たちの事を聞いてくれるぐらいには落ち着いていたのだから。

「私？」

私は水無神操緒。

そこにいるトモの幼馴染で、トモに憑いてる幽霊みたいなもの、
かな・・・？』

首を捻りつつ自己紹介。

まあ、特に何が間違っている訳ではないから別に良いか。

「で、僕が夏目智春。

操緒に憑かれてる中学2年の男子生徒。

因みにここにいるのは、朝のロードワーク中に橋から身を乗り出していたそっちの和葉？さんを引き留めたら、咲華？さんに突き落とされたから。

それで、君たちは姉妹でいいのかな・・・？」

出会ってから自己紹介に至るまでの過程がやたらと遅かったような

気がするが・・・

「はい、私が姉の苑宮咲華で、」

「・・・私が妹の苑宮和葉です」

咲華の方は礼儀正しく、妹の和葉の方はぶっきらぼうに自己紹介をしてくる。

個人的な意見としては咲華の方が以前の世界の和葉に抱いていたイメージに近いが、些細な問題だろう。

・・・というか何故和葉に姉がいるのだろうか？

少なくとも以前の世界ではそんな事実は聞いていないのだが。

『それで？』

何だって和葉ちゃんはこんな時間にあんな場所でそれを破ろうとしてたの・・・？』

「・・・あなた達には関係ないです」

『関係あるよー』

「何ですか!？」

『だって、それが原因でうちのトモは川に落ちちゃったわけだしね。そんな目に合わされたんだからせめて原因ぐらいは知っておきたいじゃない』

「む・・・」

操緒の指摘に押し黙る和葉。

痛い所を突かれたといった感じだ。
自身の姉である咲華を睨んでいる。

黙ってしまったところを見るに上手い手ではあったのだろう。

とはいえ、僕がダシに使われている感じがするのであまりいい気は
しないが・・・

操緒は絶対そこまで気にしていないのだろうし。

「あの、水無神さん・・・」

『なに、咲華ちゃん？』

操緒にやり込められた妹に睨まれ思うところがあつたのか、咲華が
操緒に声をかける。

「夏目さんを勘違いで突き落としてしまったのは私です。

和葉は悪くありません。

・・・すみませんでした」

僕と操緒に向かって頭を下げる咲華。

僕としてはこの程度慣れっこだったから別に気にしていなかったの
もあって、

「ああ、うん。

別に良いよ、こんなことしょっちゅうだし」

早々に咲華の謝罪を受け入れていた。

このての事は後まで引つ張ると面倒だから、サッサと互いの落着点
を見つけてしまった方が今後のためにも良いと思う。

だが、

『うん……』

操緒はそれで済ませる気はないようだ。

『咲華ちゃんの方はそれで良いんだけど……結局和葉ちゃんがやこしいことしてたのが原因でしょ？』

「それは、そうですね……」

『なら、せめてそんなことした理由ぐらいは教えてくれてもいいんじゃないの？』

普段の操緒ならまず使わない声音。

やや低めの、いたって真面目なものだ。

「……でも……」

それでも渋る和葉。

余程他人には知られたくないのだろうが、今の和葉は周囲の想いなど無視して駄々をこねている子供そのままだ。

世間的にはそうなのかもしれないが、このまま放っておく訳にもいれない。

僕たちがこのままここで帰ってしまったら、きっとこの姉妹の關係や和葉と母親の關係は修繕不可能な程に壊れてしまうのが目に見えるている。

次に再会するのは多分1年後ぐらいなのだろうが、その時になって崩壊した家庭など目にしたくない。

……これが、自身のエゴだとは分かっているけれど、仕方がない。黙ってしまった和葉に向かって僕が口を開く。

「・・・今の君は逃げてるだけだよ。」

さっきの言い合いから判断するに、そのチケットは君たちのお母さんが二人に遺してくれたものなんだろう？

君たち姉妹と母親の関係がどんなものだったのか僕には分からない。

だけど、それを受け取りもせず破り捨てるなんて、馬鹿のすることしか思えないよ。」

想いを残してもらえただけ良いじゃないか。

世界にはそれすら残してもらえない存在がいるんだから。

「なっ!?!」

馬鹿ってなんですか馬鹿って!?!」

突然僕が口を開いたかと思えば、自身の決意を馬鹿にされたのだ。

当然、気に食わなかったのであろう和葉が僕に食って掛かる。

が、今回ばかりは僕も退いてやるわけにはいかない。

「馬鹿だよ。」

周囲の意見なんて無視して、自分の考えだけで全てを決めて行動しようとする。

君がどうしてそこまで意固地になるのか知らないけど、僕からして見れば君は駄々をこねてる子供そのものだ」

「っつ!?! だったら!?! だったら、私はどうすればいいんですか!?!」

お母さんにあんな酷いことを言っておいて、それでもお母さんの優しさを受けとる資格なんて・・・!?!」

髪を振り乱し、瞳に涙を浮かべる和葉に言葉を掛ける。

先程までの諭すような冷たい感じではなく、包み込むように暖かく、

そして、励ますように熱く。

「簡単だよ。」

そのチケットを使ってみれば良い。

それがどんな物かまで僕は知らないけど、君のお母さんが遺してくれたものなんだ。

どんな答えが待ってるにしろ、それを全部受け止めるのが遺されたものの務めだ!!」

「……………」

僕が言葉を言い切った後、和葉はそれ以上動くことなく、ただぼんやりと自身の手の中にあるチケットに目をやるのだった。

? ? ? ? ?

「…………あの、ありがとうございます。」

夏目さん

そんなこんなで僕や操緒、それに苑宮姉妹は揃ってこれからチケットに書かれていた店に向かうことになった。

その道中、激しい車の喧騒に掻き消されそんな声で咲華ちゃんが話しかけてきた。

和葉は僕たちの後ろをやや距離を取りながら歩いている。

一応操緒と一緒にいるから大丈夫だとは思うが、少々不安だったり

する。

「ん、何のこと？」

「さつき、和葉に言い聞かせてくれたことです」

「ああ、別に構わないよ、あれぐらいのこと」

喧嘩の仲裁役……というか、巻き込まれるのは慣れているし、自分から行動を起こしている分他の時よりも何倍もましだ。

それに、この世界でどうなるのか分からないけれど未来の義妹たちの面倒ぐらい見れる兄でありたいと思うのだ。

自分の兄と呼べる存在は、一巡目にしろ、この世界にしろ碌な奴らじゃないのだからせめて僕ぐらいは。

「それでも、ありがとうございます」

やたらと丁寧に感謝の言葉を述べてくる咲華。

「……私、駄目な姉ですよ」

歩いていると彼女はポツリと呟いた。

感謝の姿勢から一転して、落ち込んでいる。

「そんなことないと思うよ？」

こんな朝早くから妹の事を想って街中掛け回ってたんなら、立派なお姉さんだと思うけどな」

少なくとも我家の母や兄は僕が行方不明になっただとしても、一日やそこらでは絶対にしてくれないと断言できる。

「いいえ、駄目な姉なんです。」

お二人がいなかったら和葉とも喧嘩を止められなかったでしょうし、それに、お母さんとの約束も果たせてないのに……」

「約束……?」

「……はい」

大分暗くなっていた彼女の雰囲気は更に暗くなる。

触れてはいけない話題だったかと思い、慌てて話を逸らそうとするが、

「良いんです。」

私は大丈夫ですから……それと、良かったら聞いてもらえますか?

……私たち姉妹と母親の話を」

咲華はやんわりと僕の話題転換を断り、逆に自身の話を聞いてくるよう催促してきた。

……さっきまでの僕らへの態度から一転し、やたらと殊勝な咲華の姿にどこかうすら寒いものを感じながらも、

「僕で良いのなら」

ひとまず咲華の話を聞くことにした。

「……私たちの母は1年前に亡くなってしまったんです」

「……」

口を開いた咲華に合わせて歩む速度を緩めながら、彼女の話に耳を傾ける。

「そのこと自体は悲しむべきことなんですけど、元々母は身体が弱くて、入退院を繰り返していたこともあって私は割と覚悟はできてました・・・和葉の方はどうか分からないですけど・・・

だから、私に対しては変な気はまわしていただかなくて結構ですよ」

僕がまた暗くなったのを敏感に感じ取ったのか、咲華は先に気遣うかのような言葉を僕に放ってくる。

この子、本当に僕より一つ下の中学1年生なんだろうか？

「・・・それで、私たち姉妹のことなんですけど・・・お分かりのように仲がすごく悪いんです」

いや、そこまで仲は悪くないと思うけど・・・？

まあ、兄弟、もしくは姉妹の関係は各家庭によって違つかもしれないが・・・

それこそ鳳島兄妹のような関係から、我が夏目家のような関係まで。

「いえ、悪いんです」

僕の疑問をよそにきっぱりと断言する咲華。

「今でこそ、私は和葉のことを何とかしてあげようと思って頑張ってますけど、昔は違ったんですよ。」

・・・お父さんは仕事を頑張っていたから、その分、お姉ちゃん
の私が病院にいつもいるお母さんのお世話をしなきゃいけないと思

つていつも病院に入り浸っていたんです。

一人家に残された和葉のことなんて考えもしないで」

「……それは……」

苑宮家の事情なんて知らない僕からしてみても、和葉の置かれた境遇は否が応にも想像できた。

「私が和葉と一緒にお母さんのお世話をすれば良かったのかも知らない。

だけど、当時の私はお母さんのお世話をするのに精一杯で、和葉のことなんて眼中になかったんです。

……気付いた時には、私と和葉の関係は悪化するとこまで悪化していて、和葉とお母さんの関係も……」

「お母さんが亡くなる日の前日、和葉とお母さんは喧嘩したんです。いえ、和葉がお母さんに今迄の不満をぶつけるように一方的に文句を言ったんです。

ただ一言、

あんななんかいなくなっちゃえ!!」

僕は黙って先を促す。

以前会った和葉が母親とどんな別れをしたのかは知らないけど、彼女は母の死を引き摺っている様な暗い雰囲気ではなかったと思う。だから、きつと乗り越えられると思う。

「……お母さんはそんな和葉の言葉を聞いてすごく悲しそうな顔になって、和葉もそれで自身の言ったことに気付いたのか逃げるように病室から飛び出していきました。

私は急いで和葉の事を追いかけたんですけど、見つからなくて・
一旦病室に戻った時に、寂しそうな顔をしたお母さんに言われたんです。

『咲華・・・貴女が和葉を護ってあげて、お母さんになってあげてって。』

今思えばお母さんは死期を悟っていたのかもしれないです。
けど、あの時の私はお母さんのそんな言葉が信じられなくて、母が何を言っているのか分からなくて、ただ呆然としたまま頷いていました」

「その後、面会時間も終わりになったので和葉を探し出して一緒に家に帰りました。

・・・その日の夜、母の容体が急変し、母はこの世を去りました」
「きっと和葉は母が死んだのは自分が酷いことを言ったせいだと思ってるんです。」

あのお母さんがそんなこと思ってた訳ないのに・・・」

それっきり、咲華は口を閉ざし、僕らはただ黙々と歩き続けた。

謝る機会を失った妹と、母との最後の約束を護ろうとする姉。
どちらがどれだけの重荷を背負っているのか僕には分からない。
だけど、ひとまず答えは出るはずだ。

ここで二人を何が待っているのか僕には分からない。
願わくば、それが二人の義妹を助けてくれるものであることを祈る。

僕らの目の前には『ゆのみ屋』という名前のありふれた大衆食堂が

一軒。

チケットに記されていた住所は確かにこの店を示していた。

42回 妹の悔恨（後書き）

和葉と咲華ってこんな感じだったけなー？

一応14巻を見ながら書いてるんですが、どうしても違和感はないですが・・・

また、和葉と咲華の話は次回で“ひとまず”決着？予定です。

43回 姉の約束（前書き）

憑かれた・・・あ、いや違う、疲れた・・・

気付けば字数が1万字を超えていたという驚愕の事実。

間違いなく今作品で最長だと思われます。

最後の方がかなり駆け足気味になってしまいました。気がしない
で頂けると助かります。

43回 姉の約束

ガラガラ

と、音をたてながら咲華が『ゆのみ屋』の扉を開き、和葉と二人店內に入っていく。

「あれ？夏目さんと水無神さんは入らないんですか・・・？」

不思議そうに咲華が聞いてくるけど、残念ながら僕たちは所持金がほぼゼロなのだ。

操緒については言うまでもないが、僕にした所で朝のロードワーク中だったのだ。

小銭は幾らか持っているが、食事を頼めるほどの資金を所持していない。

その旨を伝えると、

「・・・そうですか・・・」

残念そうな表情を見せながら、店内に戻っていった。
と、思いきや、

「あ・・・夏目さんの分ぐらいなら私が出しても・・・」

再び咲華が店の入り口に顔を見せ、そうやってきた。

「いや、流石に年下の女の子にそんなことしてもらう訳にはいかないよ」

折角の申し出だが断ることにする。

確かに、ロードワーク中に二人に出会ったため、まだ朝食を摂っていないから空腹ではあるが、そんな情けない真似は出来ない。

「・・・分かりました」

今度こそ店内に戻り、咲華は席に着いたようだった。

『よかつたの、トモ？』

別に注文しなくても店内にいるぐらいは良いと思うけど・・・』

どこか不満げな顔で操緒が聞いてくる。

大方、苑宮姉妹の母親が二人に遣したものを知りたかつたのだろう。それは僕も同じだし、知りたくないと言えは嘘になるが、

「いいんだよ。」

あの二人のお母さんが二人に遣したものなんだ。

部外者の僕たちは立ち会わない方が良さ」

後で教えてもらえば良いと思う。

教えてくれるかどうかは分からないが、その時はその時だ。

大体、ついさつき会ったばかりの人間が家庭の問題に関わり過ぎるのもどうかと思うし・・・

まあ、今更感が満載だけど。

『別に部外者じゃないと思うけどね・・・』

実際、操緒は未だにどこか納得していない様子で僕の横に浮いている。

それでも店内に入っていない所を見ると、僕の意見を尊重してく

れたのだらう。

普段から割と傍若無人なところがある操緒だけれど、こういった引くべき場面はちゃんと分かってくれているから助かる。そんな割かし不機嫌な様子で浮いている隣の操緒に、

「それに・・・」

『？』

「少し気になることもあったしね」

もう一つ、店内に入らなかった理由を告げる。

『気になること？』

コク

不思議そうな顔をしている操緒を横目に、

「すみません、八枝さんを呼んでもらえますか」

近くに“それとなく”立っていたスーツ姿のビジネスマン風の男性に声を掛ける。

『え？』

い、いきなりどうしたの、トモ？』

唐突過ぎる展開に呆気にとられている操緒を余所に、僕が声を掛けた男性は黙って頷くと、

「他に何か御用はありませんか？」

と訊ねてきた。

『へ、へ、へ！？』

操緒が目をグルグル回しながら僕とその男性を交互に見ている。

戸惑うことは大体予想が付いていたので、説明を後回しにして男性に返事を返す。

「・・・そちらに預けてある春棟と春棟・闇を念のため持ってきてもらえますか。」

それと、最悪、ペルセフォネを呼び出す可能性があることを奏や社長に伝えておいてください」

「了解いたしました」

僕の言葉に返事を返すと、スツと建物脇の路地へと消えていく。

午前中で、様々な会社で始業しただしたばかりの時間で普段よりは人の量が少ないとはいえ、周囲の人に全く気付かれることなく消えるのは流石だなー、と感心していると、

『トモ、さっきの人誰よ！？』

ていうか、なんで刀なんか持ち出すの！？

果ては、ペルペルまで！？』

復活した操緒が勢いよく訊ねてきた。

いや、戸惑ってて、焦るのは分かるが、

「とりあえず落ち着け。」

ちゃんと説明するから」

大声で問題のある単語を含んだ質問をするんじゃない。

“刀を持ち出す”とか、一般の人が聞いたら下手すりゃ通報されるかもしれないんだから。

『あんな訳のわからないやり取りをいきなり見せられて、そう簡単に落ち着けられるかー!!』

が、そんな僕の意図など無視して、操緒のテンションはほとんど変わることなく、僕のことを詰問しにかかる。

周囲の目など気にせず宙に浮いており、興奮しているのが嫌というほど分かる。

「だから、落ち着けて。」

いや、落ち着かなくても良いから、せめて声の音量を下げてください

『むう……分かったわよ……』

渋々、といった様子で宙に浮かんでいた体を、普段の位置に戻す操緒。

ひとまず話を聞いてくれるらしい。

そのことにホッと、溜息を吐きつつ、

「じゃあ、さっきの人のことだけど……」

説明を始めることにした。

「さっきの人は、嵩月組の構成員の人だよ。」

普段は近くにはいないけど、何かあった時は僕らの近くに来てく

れることになつてゐるらしい」

この辺りの説明はそう言えば操緒にはしたことがなかったな、と思ひながら話を進める。

「何か」つて、何？」

「分かりやすく言えば、以前の世界で加賀簀が起こした悪魔狩りみたいな事件さ。」

僕や奏、正確には嵩月組に害が及ぶと判断されるような事件」

または、その事件が起きる前とかさ。

そう言つて、視線を操緒から目の前の車道へと向ける。

道路では朝方と変わらない様子で、たくさん車が行き来していた。より正確に言えば、嵩月組やその傘下の悪魔組織所属の車が大半だ。因みに、嵩月組とその傘下の組織の車や、それらの組織の人間は車体や来ている服のどこかに火蜥蜴サラマンダーをあしらったマークが付いている。一見ただけでは分かりにくいが見慣れると意外と分かるようになるものだ。

・・・なんだつて僕は分かるようになってしまったのか・・・

「で、今回もそれが起きた、もしくは起きる前だから僕の所にも構成員の人が来てたんだよ」

ハア

若干重い溜息を吐きながら操緒に説明を続ける。

因みに何故僕がここまで嵩月組の内情に詳しく、かつそれなりに上の立場にいるかについてだけど、奏の契約者コントラクターと認められたからである。

奏は嵩月組の、つまりは嵩月家本家の一人娘。

そんな大事な存在の相手なのだから、組のやり方もしっかりと学んでおけということらしい。

・・・多分将来は嵩月組の社長、もしくはそれに準じた立場に僕がなるのが社長たち、嵩月組の組員たちの間ではほぼ確定しているのだろう。

華鳥風月の一角を担う程の名家だ。

家が没するのは恐らく認められない。

分家とかから後継者を選ぶという手段もあるのだろうが、その辺りは僕はあまり詳しくない。

それに、幾ら奏が家業を嫌いで家督を継ぎたくないのだとしても、流石にそこは妥協してくれないのだろう。

例え奏は良くても、誰かが継がないといけないのだろうから仕方ないと言えば仕方ないのだけれど・・・

そついった背景も含めて操緒に説明していく。

『ふむふむ・・・つまり、トモは奏ちゃんの彼氏だからそついった扱いをされてて、今回も何かがあるだろうから刀とか、ペルペルを頼んでおいたってわけね』

「まあ、そついうこと。

大抵僕が何もしなくても、構成員の人たちの間で処理は済むはずだけど、念のため」

実際この一年半ぐらいの間でも何度かあったけど、僕らが巻き込まれるほどの事件は起きていない。

いや、だから大丈夫という訳でもないが・・・

『でも、和葉ちゃんたちのこともあるのに大丈夫・・・？』

「それなんだよ」

僕と操緒だけなら、もし何らかの事件に巻き込まれるようなことになったとしても、まだ何とかなる気がする。

が、苑宮姉妹も一緒となると流石に難しい。

誰かを護りながらという戦いは、今迄意識してやったことがほとんどないということもあるし、純粹に二人に裏の事を教えたくないという思いもある。

「・・・いざとなったら？鐵を使うよ。」

だから、操緒も覚悟はしておいてくれ」

『うん』

幸か不幸か、僕は？鐵を影の中に封印させたまま攻撃できるようになってる。

これが、以前の世界で経験した大量の事件の所為だと思つと若干泣けてくるが、気にしない。

何にせよ、？鐵本体を態々呼び出さなくても能力を使えるので、咄嗟の判断でもかなり速く動き出せる、等。

「そうそうないとは思つけど、こついつ時に限って・・・」

『トモは巻き込まれるからね』

自身の不幸體質の所為で、未来の義妹たちが巻き込まれるなど勘弁して欲しいのだが・・・

まあ、ひとまず操緒に対しての説明は終わった。

「お待たせしました、夏目さん」

そして、タイミングを見計らったのかの様に登場する八伎さん。格好は普段通りの黒いスーツ。

他の構成員の皆さんが私服に着替えたりして行動しているのに、この人だけは流石に変わらない。

「わざわざすみません」

「いえ、お気になさらず」

出合いがしらの軽い挨拶を交わし、すぐさま本題へ。

「それで、早朝から構成員の方々が動いておられるようですが・・・何があつたんですか？」

僕の問いに若干顔を顰めながら返事を返す八伎さん。

「はい、実は機巧魔神アスラ・マキーナのイクストラクタがこの街に運び込まれることになっていまして・・・」

「イクストラクタが？」

それだけなら特別大きな問題だとは思わないのだが・・・問題は問題だが、ここまで下部組織を使って大々的に行動するほどの事とは思えない。

以前の世界で、鳴桜邸に？鐵のイクストラクタが運び込まれると知った嵩月組の方々は事実襲撃してきた。

それに、この辺りの大半は嵩月組の縄張り（シマ）だから管理のた

めに動くのは分かるのだが、何故これだけの人数で？
その辺りの事を聞いてみると、

「いえ、問題なのはイクストラクタではなく、イクストラクタの取引相手なのです」

と、返事が返ってきた。

にしても、取引って・・・

いや、僕が？ 鐵を得ることになったきっかけもそうなのかもしれないが。

「・・・誰ですか？」

「華島の本家です」

「それは、また・・・」

四大名家が一つ華島家。

割と最近まで後継者争いで揉めていた家であり、未だにどこかきな臭い空気の漂っている家だ。

嵩月、鳳島のように後継者が完全に定まっていたという訳でもなく、未だに家全体が纏っていないのだとか。

「恐らくは、本家お抱えの魔神相剋者アスラクラインを生みだすことよって当主としての地位の確保、同時に華島家の勢力拡大を狙っているのだと思われまます」

「それで、その勢力拡大の範囲に嵩月組が入っている、と」

「はい、その通りです」

なんとまー、はた迷惑な。
しつかり家の中を纏めといてくれよ、と言いたいが、今回の件はその為の一手なのだろう。
自分も魔神相剋者で高月組所属みたいなものだから否定の言葉は言いにくいのだ。

「幸い、封鎖網は完成しているのでまず逃げられることはないと思いますが、万が一の時は・・・」

「分かってます」

僕も出ないといけない。
そこまで話が進んだ所で、

「夏目さん、お持ちしました」

頼んでいた刀が届いた。

「ありがとうございます」

ここまで僅か15分。
速いものだと思う。
すぐに受け取り、いつでも使えるように刀を入れている袋の紐を緩め、袋を肩にかけておく。

「いえ、では若頭、私も捜索に加わります」

「ああ、逃がすなよ」

「はい」

刀を持ってきてくれた構成員の方は八仗さんに挨拶して、すぐに街の人混みへと消えていった。その姿を見届けると、

「では、私も戻ります」

「はい、わざわざすみませんでした」

八仗さんもスツと、群衆に紛れ、消えていく。あんな格好だからもつと目立つ物かと思っていたが、気配の消し方が半端じゃなく上手い。

自然と周囲に溶け込むように街の中へと消えていった。

『……何だかトモが別世界の住人になっちゃた気がするよ』

八仗さんを見送る僕を横目に操緒が言葉を洩らす。

……気持ちは分からないでもないが……

「出来れば慣れてくれると助かる」

少なくとも、こういった扱いが早々変わるとは思えないし。

『私は別に良いけど……』

朱湮さんとかにはなんて説明する気？』

「……」

そう言えば、そろそろ朱湮さんと会うことができるかもしれないの

だ。

最近になって、フェミニナ・エクス・マキーナ機巧化人間の少女としてこっち側で割と有名になってきている。

今のところ嵩月組での対応の仕方は決まっていそうだが、近々接触してみるとの事。

朱湮ダイクンサエティさん自身は科学狂会側の人間だから、悪魔の組織である嵩月組には悪い印象をもたれると困るだろうから早々関係が悪化するとは思えないが……

ま、そんな今後のことも大事だけど、とりあえず、

「刀のこと、なんて説明しよう……」

今は店内にいる二人の少女に自分の持っている刀の事をどう説明するべきか、頭を悩ませることにしよう。

? ? ? ?

そんなこんなで更に待つこと20分。

カラカラ

『ゆのみ屋』の扉が開き、苑宮姉妹が姿を見せた。

「ぐすっ」

「・・・」

彼女たちの目元は赤く、頬には涙が流れた跡が見て取れる。それでも、店に入る前の陰鬱さは鳴りを潜め、スッキリとした表情だ。

二人仲良く手を繋いでいる所が微笑ましい。

手を繋いでいない方の咲華の手には何やら分厚いノートが。店に入る前は持っていないかったから、そのノートが何らかの答えなのだろう。

そんな二人の様子を見ると、咲華は和葉と仲直りできたのであることが良く分かる。

「・・・どうだった？」

話しかけるべきか一瞬迷ったが、出来るだけ柔らかい声音で、そつと二人に話しかける。

「・・・お母さんが・・・っ!!」

喋ろうとして、和葉が声に詰まる。

再び涙がこみ上げて来たのか、顔を俯かせる。

『良いよ。』

話したくないなら話さなくても』

二人が店に入る前までの不機嫌顔はどこへやら。

歳不相応な慈愛に満ちた表情を浮かべた操緒がそこにはいた。

「・・・いえ、お話します。」

私たち姉妹の背を押してくれたのはお二人なんですから」

操緒の気遣いを断り、顔を俯かせた妹の手を引き歩き出した咲華が、喋ろうとしていた和葉の代わりに語り出す。

僕と操緒も黙って二人の後について歩き出した。

「・・・幸か不幸か、今の二人は僕の持っている袋については何も聞いてこない。」

ありがたいことはありがたいのだが、逆に気まずい。色々考えてた僕らが馬鹿みたいだ。

「あそこのお店、『ゆのみ屋』は私たちのお母さんの親友の方が経営しておられるお店でした。」

「・・・それで、その親友の方は、お母さんから『咲華と和葉に料理を教えてほしい』と頼まれてたんです」

そう言って、持っていたノートを僕に渡してくれる。

「・・・見てください」

言われるがままにノートを開き、ノートの中身に目を通す。

そこにはびっしりと手書きで料理のレシピが書かれていた。

書かれているのは食材の分量や、調理方法だけではない。

咲華と和葉の好き嫌いに合わせた食材の使い方、二人の母親だけの特別な調理方法、そして隠し味やお皿に盛り付ける方法まで。

二人の愛娘に美味しく食べさせるための秘訣がそこには記されていた。

そして、当人たちしか分かりようのない二人がそれらの料理を食べた日の日付や、思い出までも・・・

母親の愛を感じずにはいられないノートだ。

『・・・良いお母さんだね』

操緒が感じ入る所があったのか、目を潤ませている。かくいう僕も若干涙腺が緩みつつある。

涙が出て折角のノートを濡らす訳にもいかないのです、丁寧にノートを閉じ、咲華にノートを返す。

僕が差し出したノートを受け取り、大事そうに胸に抱えた咲華は自分の決意を語り始めた。

「・・・私、今迄自分が何をしたらいいのかよく分かりませんでした。

和葉のお母さん代わりになるって意気込んでいたんですけど、何をしたらいいか全く分からなくて・・・

けど、今日のこと何をしたらいいか分かりました」

「咲華・・・」

和葉が呆然と、姉の決意を聞いている。

今迄咲華の決意は聞いたことがなかったのだろう。

目を見開き、一言も聞きもらすまいと、一心不乱に耳を傾ける。

「・・・私、ここに書いてある料理を全部作れるようになりたいんです。

幸い、『ゆのみ屋』の奥さんには『いつでも来て良いわよ』って言われてますから、困った時には聞きに行けると思いますし」

「・・・私もやる」

「和葉？」

咲華の決意に触発されたのか、黙って俯いているだけだった和葉が

口を開いた。

「咲華だけには頼ってられないよ。」

私だって、お母さんの娘なんだから」

「・・・うん、そうだね。」

二人で頑張ろう」

改めて決意を口にし、握り合っていた手の指を絡ませ合い、更に強く二人を繋ぎ合う。

「・・・そっか・・・」

うん、二人ならきつと出来るよ」

そんな二人を見てみると、自然と言葉が漏れ、手が二人の頭に伸びる。

「え・・・？」

「あ、あの？」

なでなで

咲華と、和葉の二人の頭に手を乗せ、撫でる。

一つしか変わらない女子にこんなことするのは自分でも若干どうかとは思いますが、止められない。

「「・・・っ！！」」

思いつきり拒絶されると思っていたのだが、全くそんな様子が見ら

れない。

それどころか、撫でられている二人の顔が段々と赤くなっているのは何故だろう？

『トモ・・・』

暫く撫で続けていると、ジト〜と操緒から睨まれる。

『・・・奏ちゃんに言っよ・・・？』

遂には目を据わらせ、光の消えた視線を向けながらそんな最後通牒を言ってくる始末。

「んな！？

・・・分かったよ」

別にやましいことなどしていないのだが・・・

それでも、操緒が奏に僕の何かを言う場合決まって誤解される場合が多い。

どこか納得のいかないものを抱えながら、二人の頭から手を離すと、

「あ・・・」

「ふえ・・・？」

何故か名残惜しそうな顔をする苑宮姉妹。

暫く自身の頭に手をやり、どこか呆っとしている。

「・・・何か、夏目さんってお兄ちゃんみたいですね・・・」

「兄さん・・・」

「はい!？」

訳の分からない眩きが二人の口から洩れる。

い、いきなり何を!？」

が、そんなトリップ状態から大体1分ぐらい経ってようやく我に返り、二人とも急いで歩き出す。

「?」

今一訳が分からないが、まあ良いや。

『・・・はあ、トモの馬鹿』

操緒がいつものように呆れたように言葉を掛けてくるが、ひとまずスルーし、僕も先行する苑宮姉妹の後を追って急いで歩き出すのだ。

?
?
?
?

「それじゃあ、ありがとございました」

「わざわざ、すみませんでした」

二人と出会った橋の所まで戻ってくると、突然二人がそう言った。

僕が返事をする間もなく、二人は続ける。

「私たち二人じゃきつと、何も出来ませんでした」

「夏目さんと水無神さんのお陰で、今日のことはあつたんだと思います」

「「ありがとうございます」」

揃って頭を下げ、

「失礼します」

「また、いつか」

別れの言葉を述べた二人はサッサと立ち去って行ってしまった。

「うん、またいつか」

『料理の練習頑張つてね』

そんな二人の背中に僕らも声を掛ける。

「どうか操緒、お前がそれを言うな。」

まあ、ともかく、二人といる時に何も起こらなかったのを良しとしよう。

そう思い、僕と操緒も二人に背中を向け、歩き出す。

いや、歩き出そうとして、

「咲華!？」

和葉の悲鳴が聞こえ、振り向いた。
見れば数人の男が咲華を引っ掴み、無理矢理車に乗せようとしていた。

和葉は押し倒され、地面に押さえつけられている。

「なんだ!？」

急いで刀の袋を開きながら和葉の許へと駆け寄ろうとすると、

「邪魔すんじゃねえ!!!」

和葉を抑えている男が叫び、掌を僕に向け、“雷撃”を放ってきた。

「っ!!!」

「悪魔か!？」

咄嗟に身を捻り、雷撃をかわすも、

「おらぁっ!!!」

再び雷撃が飛来する。

急いで春棟と春棟・闇を鞘から抜き放ち、春棟・闇の方で雷撃を受け止める。

普通の刀じゃまず受け止められないが、この刀は製作過程に悪魔が関わった曰くつきの妖刀。

この程度の雷撃なら問題ない。

「はっ!!!」

左手に持った春棟・闇で雷撃を消すと同時に、右手に持っている春棟を和葉を抑えつけている男に向けて裂帛の気合と共に突き出す。それと同時に、春棟の切っ先から雷撃が飛び出て、男へ向かって行く。

やや距離はあるが、和葉を抑えている男は咄嗟の事で、和葉を離して避けるか、このまま防御するのか判断が出来なかったのだろう。

「があああっ!?!」

春棟から放たれた雷撃をくらい、

ドサッ

地面に倒れ伏す。

因みに説明しておく、春棟と春棟・闇は二振り一対の黒刀。悪魔が製作過程に介入したため、特殊能力が付いている。

それは、春棟・闇で受け止めた魔力の籠った攻撃を吸収し、春棟から放つことが出来るということ。

基本、吸収した後に春棟を振るうと吸収した攻撃が放たれる。

吸収できる量は大体ごく一般的サブ・シンな魔精霊20体程らしい。

と言われても、基準が良く分からないが・・・

「大丈夫か、和葉!?!」

「は、はい」

急いで和葉の許へと駆け寄り、男たちと和葉の間に割り込む。

「チッ!!」

「出せ！！」

「僕らの攻防を車中から見ていた男たちは、仲間がやられたと知るや、すぐさま車を発進させようとする。」

「そんなことさせるか！！」

「操緒っ！！」

『OK！！』

「こつちの世界でちゃんと実戦で使うのは初めてだが、問題ない。咲華と和葉のためだ。何を躊躇う必要がある。」

「来い、？鐵　　！！」

「僕の掛け声とともに操緒の姿が虚空に溶けるように消え、僕の影の色が昏い虚無の闇の色へと変化する。そこから出てくるのは機械仕掛けの悪魔、ではなく、一振りの巨剣。それは虹色の軌跡を描いて空間を薙ぎ払い、

「・・・はあっ！！？」

「車の前輪と後輪を全て切り取っていた。」

「ちくしょう、何だっつてんだ！！？」

「急いで車から降り、それぞれが腕に雷を奔らせたり、刀を構えたり、銃口をこちらに向けていたりする。車から降りてきた人数は6人。」

そんな中、一人、銀色のトランクを持ちながら、咲華を捕まえている男が一人。
そうか、

「・・・お前ら、華島の奴らか」

先程八伎さんから聞いた内容。

イクストラクタが運ばれているという情報は、本当だったらしいにしても、本当に巻き込まれることになるとは思わなかったが。

「・・・・・・・・」

僕の言葉に男たちは答えず、ただ黙って武器や腕を構えているが、その沈黙こそ肯定だ。

「夏目さん!!」

僕らが対峙している間に、男たちの後方から青月組の人たちが駆け付けてきた。

中には八伎さんもいる。

「大丈夫、すぐ終わりますから」

若干、挑発の意味も込めて八伎さんたちに返した返事は、

「てめえ、どういふことじゃああ!？」

「ああんっ!？」

思った以上に効果抜群。

流石に中学生程度の男子にそんな言葉を言われるのは我慢ならなか

ったようだ。
腕を奔る雷撃が目に見えて強力になっている。
それでも、こちらの能力が今一良く分かっているから、自分たちから動くことはしない。
好都合だ。

「ごめんね、和葉ちゃん。
少し伏せといて」

「え、あ、はい!！」

とりあえず後ろにいる和葉に防御の姿勢を取らせておき、

「? 鐵っ!！」

再び巨剣を幾度も振るう。

再度描かれた虹色の軌跡は正確に相手の持っている武器を破壊し、

「ん、な、なんだと!？」

咲華とイクストラクタを僕の許へと転移させた。

ついでに、幾らかの腕や指もだが、それはいらないので元の位置に戻しておく。

イクストラクタを足元に置き、

「大丈夫だった？」

とりあえず転移させた咲華に声を掛け、

「は、はい……」

「良かった・・・じゃあ、僕の後ろにいて」

和葉と同じ様に僕の後ろに移し、防御の姿勢を取らせておく。
その上で、

「さて、まだやりますか？」

目の前にいる男たちに声を掛ける。

「・・・当たり前じゃ」

そして帰ってきた返答もある意味予想通り。

彼らがどうして咲華に手を出したのかは知らないが、いずれにせよイクストラクタが僕の手の内にあるまま帰れないだろう。

これが本当に華島本家のものなら、早々簡単に失う訳にはいかないのだろうし・・・

かといって、このまま逃げ切れるとも思えない。

刀や銃といった武器の大半は僕が破壊したし、何より、嵩月組の大半に囲まれている現状。

ほぼ手詰りだ。

「まあ、分かってましたけど・・・じゃあ、お願いします、八伎さん」

「・・・ええ、分かりました。

ここまでしていただいて、取り逃がしたんじゃ我々の面目丸潰れです。

いくぞお前ら！！！」

「「「おおおーっ！！」「」

「ちっ、やるしかないんか・・・」

・・・その3分後、華島家の面々は全て捕縛され、嵩月組の面々に連行されていった。

流石に武器もない状態ではこんなものだろう。

というか、嵩月組の皆さんの働きが凄かったというのもある。

戦闘中、所々で

『若にみつともない所なんか見せるんじゃないぞ、てめえらーっ
！！』

やら、

『てめえら、若の手を煩わせやがって！！』

なんて言う発言が聞こえたのは気のせいだと思いたい。

「・・・では、私たちはこれで」

「ええ、また後で伺います」

イクストラクタを八伎さんに引き渡し、一旦別れる。

咲華と和葉をちゃんと家まで送っていくためだ。

流石にあんなことがあった後だから二人とも黙って受け入れてくれた。

「二人とも、さっきのことは忘れた方が良い」

二人を送っていく道中、そう言っておく。

「早々巻き込まれることはないから気にしちゃ駄目だよ。
今回は、運が悪かっただけなんだから」

僕の言葉が聞こえているのかどうか分からないが、二人は黙って足を動かさず続ける。

どうやら、僕が八丈さんと話している間にまた喧嘩をしたらしい。操緒に聞いたところ、男たちに攫われそうになった“和葉”を“咲華”が庇い、結果として咲華が攫われそうになったからだとか。咲華がそのような行動を取ろうとした理由は、母親との約束、自分が和葉を護るという約束を実行しようとしたかららしい。

・・・こればかりは僕にはどうしようもないので、二人で解決してもらおうしかない。

頭を悩ませつつも、苑宮家に到着。

以前の世界で一度だけ見たことのあるマンションとは違い、やや古めのマンションだ。

「・・・ありがとうございます」

『うん、最後に咲華ちゃん』

「・・・なんですか？」

『あんまり約束に縛られ過ぎちゃ駄目だよ。』

貴女の人生は貴女のものなんだから自由に生きないと。
きつと貴女たちのお母さんもそう望んでるから』

「・・・はい・・・」

操緒が一言声を掛けるも、意気消沈した二人はあまり反応せず、マ
ンションのエレベーターの中へと消えていった。

「・・・次に会う時、二人はどうなってるのかな・・・？」

結局一度も刀のことや、アスラ・マキナ機巧魔神のことについて触れてこなかった
二人の事を思い出しながら操緒に話しかける。

『さあねえ・・・でも、きっと上手くいってるよ』

「なんで分かるんだよ？」

『ふふ、女の勘、ってやつかな』

そんなどうでも良い会話を交わしながら、僕と操緒は苑宮のマンシ
ョンに背を向け、歩き出した。

次に会うのがいつになるかは分からないが、せめてそれまで二人が
無事に暮らせるよう祈りながら・・・

43回 姉の約束（後書き）

当初の予定では、咲華に重傷を負わせ、和葉憑きの副葬処女にする予定でした。

ですが、その場合原作を終わらせるのが大分先になりそうなので、泣く泣く却下。

個人的にはそっちの方が面白そうだったので、先日露崎も引き込んだばかりだというのに、これ以上は・・・ねえ。

次回、ストーリー上結構重要な話にする予定です。

これぞ逆行の醍醐味。

智春たちの介入で歴史が大きく変わる・・・はず。

具体的には八條、鳳島兄妹辺り。

オリキャラで逆行の醍醐味も何もないような気がします、まあ、次回をお楽しみにということ。

44回 再襲撃（前書き）

え、前回の後書きで、

「次回、ストーリー上結構重要な話にする予定です。」

とか言っていました。すみません、長くなりそうだったので次回に
回すことにしました。

楽しみにしておられた方には申し訳ありませんが、そうでもしない
と前回以上の文量になってしまいそうだったので・・・
連続でそれは流石に気力が持ちません。

44回 再襲撃

「うっ、夏目くん、奏ちゃん、助けてっ！！」

「駄目だ、波乃。」

君も手伝いとはいえ学生連盟の一員ならこれぐらい耐えてみせろ」

「ふえええっ！！」

現在時刻、午後8時30分。

場所は橋高道場。

響いているのは主に露崎の悲鳴。

原因は、雪原さんが露崎を扱っているから。

扱いているといっても殺気は出ていないし、彼女が振るう剣速もさほど速くないから特別助けは必要ないと判断する。

というか、助けを求められた僕だって、

「ほらほらほら！！」

どうした智春、そんなもんか！？」

「くっ！！」

蹴策の相手をするので手いっぱいなのだから、助けられる訳もない。

「ええい、なんで秋だっっていうのに防寒具が必要なんだよ！？」

お前はもう少し出力を抑えろ！！」

現在僕の相手は蹴策、なのだが、今僕が相手取っているのは以前の
世界でこいつが使っていたような氷の妖鳥、つまりは蹴策が創り出

した魔精靈。サブ・ジン

蹴策の主戦力のうちの一体だ。

対人戦とは要領が違うのが厄介なところだが、それ以上に、寒い！！

「はははは！！」

これぐらいで寒いなんて言ってるうちはまだまだだぜ！！」

蹴策の勢いと呼応するかのように、目の前の氷鳥から放たれる冷気の密度が上がる。

「だからって、道場の床を凍らせてどうすんだ！？」

正直言つて単純にこのサイズの鳥を相手取るだけならば然して問題はないのだが、寒さで体がまともに動かなかつたり、道場の床が凍つて足を取られたりと、非常にやりにくい。

「・・・まあ、時間が経てば溶ける、はず・・・」

僕の指摘に今更気付いたのか急に顔の色が悪くなっていく蹴策。

チラ、チラ

凄いい勢いで秋希さんと冬琉さんの方を見始める蹴策。バカ

僕もそつちを見ようと思つたが、怖くて見られない。

幸いにも“何故か”魔精靈サブ・ジンの動きが鈍つてきたので幾らか楽にはなつたのだが・・・別の所から凄い寒気が・・・

「・・・ねえ、蹴策・・・」

その寒気の発生源から聞こえてくるのは、奏の相手をしていたはず

の冬琉さんの声だ。

結構久しぶりに聞いたなあ、この地獄の底から響いてくるような声。以前最後に聞いたのは、確かGW辺りだったか・・・

「は、はい・・・

なんででしょうか？」

と、呑気に考え事をしている僕の前で蹴策と、彼の“サブ・バ・ジン魔精霊”が一

緒になって震えている。

その光景を目に捉えた瞬間、

シュタツ!!

僕は自身の出せる限りの速度を使い、急いで道場の壁際へと退避した。

そこには既に先客が居て、

「・・・お疲れ様です、智春くん」

『お帰りー、トモ』

「お、夏目、お前は無事か」

退避してきた僕を快く迎えてくれた奏と操緒、それに八條さん。それと、

「お兄様・・・強く生きてください・・・」

「大丈夫ですよ、師匠。

蹴策さんは強い・・・はずですから」

兄を心配するにはやや強すぎる眼差しで蹴策の方を見ている氷羽子さんと、そんな彼女を励ましている？美呂ちゃん。心配そうに見ているのに、決して助けに行こうとしないあたりこの道場で生き抜く術が良く分かっている。

「はぁ・・・あいつには道場のルールは教えてあつたはずなんだから・・・」

やや大きな溜息を吐きつつ、言葉を洩らすのは槍使いの雄型悪魔。

「というかそれ以前に、魔力制御の訓練なのにどうしてあいつはあそこまで馬鹿みたいに魔精霊サブバ・ジンを強化するんですか・・・」

「俺が知るか」

僕の疑問を八條さんはバツサリと切って捨てる。

本気でどうでも良いと思っっているようだ。

そもそも、今日の道場でのあいつの鍛錬の目的は、いかに少ない魔力でどれだけ戦えるかというもの。

悪魔という存在にとって、魔力を消費する量は少ないにこしたことはない。

なので、使用する魔力を減らしつつも、戦闘力を上げるとというのが今日の鍛錬の課題になったのだ。

にも拘らず、あの蹴策バカはバンバン魔力を使い、魔精霊サブバ・ジンを強化する始末。

思いつきり本来の趣旨から外れた戦闘方法だった。

その結果、道場の床を凍らせ、道場内のほぼ全員（氷羽子さんの様な寒さに強い人？以外全員）が防寒具を着ないといけないうらい道場が冷えきった。

終には、

「・・・蹴策、私と鍛錬しましょうか・・・」

「ま、待て、落ち着け冬琉！」

俺をヤツても、事態は解決しないぞ!？」

「少なくとも、この寒さは止まると思うがな・・・」

「うるせーぞ、和斉!！」

(暗い空気を纏った)冬琉さんとやり合う羽目に。

まあ、いつだったかの八つ当たりの時に比べれば大分マシだとは思
うが・・・

「さあ、始めましょう、蹴策・・・!！」

「俺は嫌だと言っててるだろうが!！」

「問答・・・無用!！」

「ぬおおおおおー!？」

既に当事者である二人以外の道場にいる人間のほとんどが壁際に退
避している。

巻き込まれるのを避けるためだ。

誰だつてあの状態の橋高姉妹と関わりたくないなどと思わないのは当然
だ。

さあ、今日はどれくらいで終わるのか・・・

一応残り時間は後30分くらいだが、

「5分ぐらいかな」

『えー、精々3分ぐらいじゃない?』

「いや、あれで冬琉は結構じわじわ攻めてくるところがあるからな・
・・4分」

「むー、確かにそれぐらいが妥当、か?」

それぞれが好き勝手にどれぐらい蹴策が持つか予想し始める。

因みに、僕が知っている中で今迄の最長は、八條さんの30分。

よっぽど嫌だったのだろう、物の影の中に身を潜め（比喻ではなく）
ひたすら防御と、逃げに徹した結果がそれだ。

因みに、僕は最長で10分。

とまあ、そんな風に僕らが好きに時間を潰している目前で、

「ぎゃああーっ!」

蹴策の悲鳴が高らかに響き渡るのだった。

?
?
?
?

Side: Kazunari Hachijō

「あー、冬琉の奴、滅茶苦茶しやがって……」

「あれはお兄様が悪いと思いますけど……」

未だにぶつくさと文句を呟く蹴策と、そんな駄兄を軽く窘めている氷羽子の二人を視界に収めながら夜道を歩く。

こいつら、鳳島兄妹との付き合いは割と昔からなのだが、出会った当初からずつとこんな調子だ。

「……というか、お前の相手をしていた夏目も言ってたが、なんであんなに大量の魔力を使ってた、お前は……？」

一年半程前から道場に通い出した少年の顔を思い出しつつ、蹴策に問うてみるが、

「いやあー、つい……」

「つい、じゃねえ。」

だからお前は馬鹿なんだ」

「うるせー!!」

殆ど反省している様子が見受けられないのは割と問題だと思う。

こいつだって雄型悪魔の一人なのだし、魔力の問題は言わずとも分かっているはずなのだが……

普段の様子を見ているとどうもその辺りが不安になる。

「……そう言えば、兄様」

「なんだ、美呂？」

蹴^{バカ}策と会話をしていると、唐突に、何かを思い出したかの様子の美呂が問いかけてきた。

「……夏目さんの機巧魔神^{アスラ・マキーナ}って、何なんでしょうか……？」

「またその話か……」

聞いてきたのは、これまた今迄何度も繰り返してきた内容。

夏目が橘高道場に通い出してから凡そ一年と半年。

その間 通い出した当初が一番多かった この議論は一度も答えを出さずに終わっている。

「いえ、今回は今迄とは少し状況が違いますの」

「……どういうことだ？」

疑問を口に出したのは美呂だが、言葉が続けたのは、駄兄の面倒を見ていたはずの氷羽子だ。

因みに今、夏目たちは一緒にいない。

雪原の奴に呼び止められ、橘高道場にまだ残って話をしているはずだ。

「……まあ、だからこそこんな陰口の様な会話が出るのだが……」

「先日、華島の本家がイクストラクタを取り寄せようとして嵩月家に阻まれた、という話は和斉さんもご存じですわよね？」

「ああ」

話だけなら両親や、第三生徒会の奴らから聞いている。

一時は、嵩月組が魔神相剋者アスラクラインを得るために使うのか、と神聖防衛隊や他の悪魔の家々が警戒していた。

だが、そんな関係各所の予想など完全に無視し、嵩月組はイクストラクタを売却する、と学生連盟に提案。

学生連盟側も裏を探りはしたようだが、特別問題は発見しなかったためこれを受諾。

結局華島本家だけが損をした形に治まった。

これにより、華島の家がまた内紛じみた状態になっているらしいが、俺たちには（今のところ）関係ないはずだ。

「その時、主に動いたのが中学生ぐらいの演操者ハンドラーだったらしいのです。」

後から駆け付けた嵩月組の構成員と幾度か会話を交わした後、華島の面々の大半を無力化。

同時に、イクストラクタと人質になっていた少女も救出したとのこと」

「そいつが夏目だという根拠は何だ？」

「あちらの若頭が、大声で『夏目さん』と呼んでいるのですもの」

成程。

存外、あちらの若頭も抜けているものだな。

「それは、どこから仕入れた……？」

「勿論、“とある筋”の人物からですわ」

「……そうかい……」

それなら、ほぼ正確な情報なのだろう。
出所が氷羽子の言う“とある筋”ならば、まず間違いがない。

「続けてくれ」

一応言っておくが、現在俺たちは認識障害の御符を使用しているから、周囲の人間や悪魔には普段通りの会話をしているように聞こえるはずだ。

・・・この辺りは、氷羽子が普段から持ち歩いている。

なんでも、これぐらいは鳳島の次期後継者としては当然なのだとか。
俺の言葉に頷き、再び氷羽子が口を開く。

「ハンドラー 演操者の少年は、二振りの黒刀と、アスラ・マキナー 機巧魔神と思われる力を行使し、事態を収束させた、との事ですわ」

今更かもしれないが、お前小学生ぐらいまでは“ですわ”ってキャラじゃなかっただろうが。

まあ、本人が良いのなら別に問題ないが・・・

「でっ」

「はい？」

「そこで不思議そうな顔してんじゃねえよ。

この会話の主題を分かってねえのか？」

「勿論、分かっています」

「なら、サッサと続けてくれ」

「途中でそつちが割り込んできただけの気がするが・・・」

「うるさいぞ、蹴策」

なんとなくムカついたので蹴っておく。

「理不尽なっ!?!」

騒いでいるバカをスルーして、氷羽子に先を促す。
妹としても兄のこんな行動は慣れっこなのだろう。
俺と同じように無視して話を続ける。

「その演操者ハンドラーが使った機巧魔神アスラ・マキナは・・・不明、との事でした」

「はあっ!?!」

ここまで来ておいてそりゃねえだろ!?!

「なんでも、演操者ハンドラーの影から巨大な剣が飛び出て来たのは確認できたそうですが、それがどのような能力を持っているのかまでは分かっていなかったとの事です。」

・・・ただ、その巨剣が通った後、武器等が破壊され、知らぬ間に人間やイクストラクタが少年の手元に移動していたそうです」

能力が分からない、と言っている割には色々判断できる材料は揃っているな。

「・・・名前ぐらいは分からなかったのか?」

「・・・残念ながら」

「そうか」

鳳島の情報は信頼はしているが、あまり鵜呑みにしない方が良い。少々間があつたということは、何らかの情報はあらず。

しかし、俺たちに話せる程固まっていない、あるいは洩らせない話なのだろう。

それにしても、今迄全くと言っていい程情報の無かつた夏目の機巧アスラ・マキナ魔神だ。

以前よりもかなり前に進んだのは事実。

「何か分かつたのですか、兄様？」

黙り込んでしまった俺が何かを思いついたとでも思ったのか、美呂が声を掛けてくる。

「いや、単に情報を纏めてただけだ」

「そうですか・・・」

流石にさっきの今でいきなり何かが分かるというほど、俺の頭は回るわけではない。

その辺りはクラウゼンブルヒの嬢ちゃんの仕事だ。が、それでも幾つか分かつたことはある。

一つ目は、夏目が機巧魔神アスラ・マキナを手に入れたのは昨日今日ではないということ。

勿論、それはあいつが通い出した時から副葬処女の姿ベリアル・ドールを見ているのだから何となく分かつているが、そういうことではない。

夏目はかなりの時間機巧魔神を使っているはずで、しかも武術とは違い、演操者としての才能は間違いなく高い。ハンドラー
そうでなければ、機巧魔神を影に封印したまま操ることなど出来ないからだ。アスラ・マキーナ

実際に、どれだけ使用時間が長くても、封印したまま使うことは出来ない奴だっている。

佐伯のお坊ちゃん辺りがそれか。

確か、3年前ぐらいに演操者ハンドラーになっているはずだが、未だにさっき言った技術は使えていないそうだしな。

二つ目は機巧魔神アスラ・マキーナの能力が最強に近い能力であるということ。

剣を振るっただけで対象を破壊したり、自身の手元に移動できるなど、俺の知っている機巧魔神アスラ・マキーナの能力ではどれも不可能に近い。

勿論、ただ単に武器を破壊したり、人質や物体を転移させるなどの行為自体は可能だ。

だが、それらをほぼ同時に行うなど有り得ない。

いや、実際に行われているのだから有り得ないということはないが、どんな能力でそれを行っているのか考えられない。

・・・幸いにも、今のところ夏目と敵対する予定はないし、嵩月組に手を出すつもりもない。

敵対していたらと考えれば恐ろしいが、中立、もしくは味方であってくれるのであれば、こちらとしては非常に助かる。

若干鳳島家が不安要素だが、現在の氷羽子と嵩月のお嬢さんの関係を考えれば、そこまで深刻に考える必要はないだろう。

勿論、万が一ということもあるが・・・まあいい。

その時はその時だ。

それ以上に問題なのが他の二つの家の反応。

風斎は基本中立にいるからあまり気にしなくても良いが、問題は華

島。

今回の件で嵩月家との仲は、ほぼ決裂したと言っていいだろう。

となると、どう行動してくるか。

今のところは家の内部を取りまとめるので必死だろうが、それが落ち着いた場合、あそこは何かを必ず仕掛けてくる。

しかも、今回の件で分かったただろうから直接対決は避けるはず。ならば、向こうが取るのは裏の手法。

政治的、社会的排除か、もしくは自分達ではない外部勢力を使った排除計画。

不幸にも我が八條家は中立の立場で、実質的な実力なら四名家に劣らない（と周囲には見られている）。

しかも排除対象が演操者である夏目であった場合、八條に依頼が来る可能性は高い。

【影使い】の『八條』

その力を最大まで行使すれば機巧魔神アスラ・マキーナを影に完全に封じ込めることも可能。

それ故に八條の悪魔に付いた二つ名が『演操者殺し』ハンドラーさらに使い魔ドクターがいれば影の中にまで攻撃が出来る。

その所為で法王庁の連中がウザいっただらないが、まあ今は関係ない。

鳳島、嵩月両家を敵に回すぐらいなら俺はそんな依頼は受けないんだが、残念ながら我家の当主様は血気盛んなお方だからな・・・もし話が来たら夏目と嵩月に伝えるぐらいはすることにしよう。

と、そこまで考えを纏めた所で、

「・・・またてめえか」

槍を一人の人物に向けて構える。

俺たち4人の正面。

街灯の下にポツン、と一人佇んでいる男。

行く手に立ち塞がったのはいつぞやの演操者^{ハンドラー}。

たしか、尖晶^{スピネル}とかいうよく分からない機体を使ってきたが・・・

「今度は逃がさねえぞ!!」

相手が分かったからだろう、蹴策が血気盛んに言葉を奔らせる。

一度勝っているということは大きいが・・・油断しないに超したことはない。

「残念ながら、今回は俺も目的を果たさないといけないんでな、逃げるわけにはいかんのよ。

そろそろ、持たない奴らが多そうなんでな」

男の口から洩れたのは以前の醜態を晒した時とは違い、考えられないほど落ち着いていた。

そう、緊張も何もない。

ただ、目的を果たすことしか目にない男。

・・・チツ、なめられたもんだ。

「・・・目的？」

氷羽子が首を捻ると、男が反応する。

「ああ、流石に内容までは言えないがな・・・というわけで、来い、使い魔^{ドクター}たち!!」

「んな！？」

使い魔^{トウター}“たち”！？

有り得ない！！

こいつが魔神相剋者^{アストラクライン}であつたとしても不思議ではないが、呼んだ使
い魔^{トウター}が複数とはどういうことだ！？

「は、はつたりです！！」

美呂が不安を掻き消すかのように、大声で男の言葉を否定する。

しかし、そんな美呂の言葉を嘲笑うかのように男の周囲に次々と様
々な現象が巻き起こる。

雷鳴が轟き、吹雪が吹き荒れ、風が舞い、炎が湧き上がる。

水が流れ落ち、地面が罅割れ、周囲に光が満ちたと思ったら、闇が
全てを呑みこむ。

急に地面から剣や槍などの武器が乱立し、植物の蔦に覆われ、武器
諸共植物が腐敗し、そこから虫が溢れ出す。

それらの現象全てが止むと、そこには闇に蠢く大量の異形の姿と、
闇夜でも爛々と輝く無数の目があつた。

俺たちを、見つめる目、目、目、目、目、目、目、目……

それら全てが緑色。

しかも、信じられないことに、本当に、有り得ないはずなのに、そ
の眼の所有者たち全てが、目の前の男 ^{スヒネル} ^{ハンドラー} 尖晶の演操者を護る体勢
を取っている。

「さあて・・・」

驚愕し、固まっている俺たち4人に向かって、

始めようか!！」

男は言い放った。

44回 再襲撃（後書き）

と、言う訳で次回。

次回こそ、智春たちの介入によって歴史が変わる……はず。

具体的には言えませんが、原作のストーリーは智春たちが介入しなかった場合になっている予定です。

つまりは、主に蹴策の記憶の問題であったりとか、その辺ですね。

45回 敗北(前書き)

ようやくPSNが一部とはいえ復旧しました!!
およそ一月・・・長かった。
今後、二度と起きないように祈っています。

45回 敗北

Side: Kazunari Hachijo

マズイ

未だに信じられないが、目の前で蠢いている大小様々な異形の姿を
目に捉えながらそう思う。

こちらのメンバーは雄型悪魔2人と、未契約の雌型悪魔が2人。

しかも、美呂の奴は、殆ど戦闘行為に及んだことがない。

以前の襲撃の時はこちらが完全に有利だったから何とかだったが、
今回は無理だ。

相手の男が声を掛けても、使い魔^{トウター}たちは動く様子が無い。
それが不気味だ。

いや、待て、戦おうと考えるな。

逃げ切ることを第一に考える。

はぐれ眷属^{ロスト・チャイルド}ならまだ俺たちだけでも何とかなるかもしれないが、今
目の前にいる奴らは全て真つ当な使い魔^{トウター}でしかも成体。
俺たちだけで勝てるわけがない。

「和斉……いけるか……?」

冷や汗を垂らしながら、蹴策が小声で話しかけてくる。

「少し厳しいが……なんとかな」

俺の能力は【影使い】

つまりは、影が殆ど無い夜には無意味なものになりやすい。幸い、ここには街灯があるし、月夜だから影も幾らか伸びているが、それでも昼間に比べるとかなり能力が制限されてしまう。

「……美呂……」

「は、はい」

声を震わせながら返事を返してくる妹を背中であぐらをかきながら指示を出す。

「俺の合図で氷羽子と、お前自身をどこかの影の中に隠せ。」

「俺は蹴策を隠す」

「……わ、分かりました」

「よし」

影の中に隠れるということは単なる時間稼ぎだ。

大半の相手は影の中に攻撃できないが、その反面隠れている俺たちも殆ど移動が出来ない。

影と影が重なった瞬間に別の影に移動することは可能だが、今は夜。早々影が動くような事態は起きない。

それでもここまでは雪原や夏目の奴の帰り道に入っている。

あいつらがどれだけ早く来てくれるか……

最強クラスの演操者ハンドラーが二人来てくれれば、まだどうにかなる。

それまで持たせられるかどうか……

相手の使い魔ドクターたちの能力が多過ぎて分からない、ってのが一番の問題か。

出来るだけ大きな影に隠れて距離を取るしかないな……

「打ち合わせは終わったか？」

何故か声を張り上げておきながら俺たちに対して攻撃をしてこなかった男が声を掛けてくる。

それが余裕の表れなのか、それとも単なる馬鹿なのか。個人的には後者であって欲しいものだが、これだけの戦力差があるのだから前者の可能性が高い。

いや、それで気を緩めすぎた馬鹿の可能性もあるが……

「……」

男が声を掛けてきても、俺たち4人は誰も返事を返さない。ただタイミングを見逃さないよう、必死に相手の姿を探る。

「……じゃあ、今度こそ行くぜ」

男が言うと同時に、一体の使い魔^{トウター}が動く。

動いたのは、全身を黒い鱗で覆っている巨大な蛇。

いや、あれはコブラか。

そんな蛇身に鳥の足が生え、これまた鳥の翼が付いている。

バジリスクとナーガを混ぜ合わせたみたいなものだろうか……？

それならば視線を合わせただけでマズイが、今のところそんな兆候は見られないから、姿が似ているだけなのだろう。

それでも敵がこちらに向かって来ていることに変わりはない。

急いで俺たちも迎撃しようとして、

「キシヤアアアーーーーッ!!!」

向かって来た使い魔ドウターに遮られた。

目の前の蛇身が叫ぶと、そいつの身体を起点にして周囲に闇が広がった。

そう、影を取り込み、光を無くす漆黒の闇が……

S i d e : K a z u n a r i H a c h i j o E N D

?
?
?
?
?

時間を凡そ1時間ほど巻き戻して、蹴策が冬琉さんにズタボロにされた直後。

氷羽子さんが介抱に駆け寄り、美呂ちゃんも付き添い、八條さんは、

「何だ、生きてたのか……」

「勝手に殺すな!!!」

いつも通り冷やかしに。

それでも、何だかんだで心配している辺り仲が良いよなー、と思っ
てしまう。

別に、自分が部外者だとは思わないけれど、中々あの輪の中には入
り込めない気がする。

そんな微笑ましい光景を見ると、

「少し良いかい、夏目くん？」

雪原さんが話しかけてきた。

「何ですか・・・？」

彼女の後ろにはぶつ倒れた露崎が奏と操緒に介抱されている光景が見えるが、この道場では誰かが倒れている光景など日常茶飯事なのでそう大きな問題ではない。

むしろ、雪原さんが話しかけてきた方が個人的には大きな問題だ。

「道場が終わった後、“君たち”に少し話があるから残っていてくれないかい？」

話しかけてきた雪原さんは、表情は普段通りのやや気取った調子の笑顔。

だが、目が明らかに笑っていない。
ひよっとしたら、以前スベネル尖晶の演操者ハンドラーに向けていた時よりも鋭いかもしれない視線。

「・・・それは、GDとして、ですか・・・？」

僕も声を控えめにして、真剣な調子で問い返す。

「そう取ってもらっても構わないよ」

「・・・」

露崎のことだけならこれ程真剣な顔はしないだろう。
となると・・・

この前の事件の件か・・・

嵩月組との関係が漏れているのは覚悟しているから問題ないし、何より、雪原さんには奏との関係も既にバラしているからあまり気に留める必要はないだろう。
残る問題は、

？鐵、か・・・仕方ない

僕の機巧魔神アスラ・マキナのことについての筈。

「分かりました」

なら、変に否定しない方がよい。

ある程度の捏造した話は創ってあるからそれを言えば良いだろうし。
・
・

「うん、なら嵩月奏と一緒に残っておいてくれ・・・魔神相剋者アスラクライン、
夏目智春」

「ッ!？」

最後にどうでも良さそうな調子で一言残し、雪原さんは露崎の許へと戻っていった。

これから先刻行われていた露崎の鍛錬についての講義が始まるのだろう。

だが、僕はそんなこと以上に最後に言われた言葉に囚われていた。

「……魔神相剋者……」

アスラクライン

まさか、バレたのか……!?

・
・
・
・
・
「やあ、ちゃんと約束通り、残っててくれたね」

橋高道場の隅。

というよりも出入り口の端の方。

道場での鍛錬が終わったのにいつまでも道場内に残っている訳にも
いかず、妥協案として出入り口の所に僕たちは残っていた。

「まあ、こっちとしても聞きたいことが出来ましたし」

「……うー……」

「そうかい。」

「じゃあ、行こうか」

威嚇している奏を無視して雪原さんは歩き出す。

この場で話すつもりはないということだろう。

つまりは、GDという立場ではあっても冬琉さんたちには聞かせられ
ない内容。

……あまり良い話ではなさそうだ。

それでも、仕方ないから僕と奏、それに操緒は雪原さんに付いて歩
き出す。

露崎は自転車で来ているのでとづくに帰っている。

へ口へ口になりながら自転車をこいでいる姿はかなり危なっかしかったけれど、然程遠くないらしいから大丈夫だと思いたい。そのまま黙って歩き続けること5分。

唐突に雪原さんが口を開き、

「……さて、と」

自身の服に付いているポケットを探り始めた。

「ああ、有った有った」

そうして彼女が取り出したのは、一枚の御符。いつぞや誰かが使っていた認識阻害用の物だ。

「……禰……」

雪原さんが一言呟くと、一瞬輝き御符が発動したのが分かる。光が治まったのを確認した僕は早々に切り出すことにした。

「……それで、僕たちに何の様ですか……?」

ひとまず何も知らない体で話しかけてみる。

「ふふふ、分かってるだろうに……先日の一件と、君のアスラ・マキーナ機巧魔神のことね」

やっぱり、それが……

分かっていた事とはいえ、安心できる内容ではない。

『先日の一件・・・？』

「ああ、嵩月組と華島家の間で起きた抗争・・・というよりちょっとした争いの事さ」

まあ、学生連盟にこの情報が漏れてるのは別に予想していたので、

「はあ、それがどうかしましたか？

確かに僕も少しは手伝いましたけど・・・」

認めてしまっ。

雪原さんにも多量の情報は回っているのだから、僕が否定すると怪しまれる。

それに奏との関係のこともバラしているのだから、嵩月組との関係もある程度予想はついているのだろうし。

「そう、問題はその時夏目くんが使った“力”のことだよ。

僕の推理が正しければ、“白銀”の筈だ」

・・・成程、能力は伝わっているようだが、名前までは情報が回っていないのか。

学生連盟に白銀のイクストラクタは保管されているし、1巡目からある程度の情報が回ってきているのが当然と考えると、使われていない機巧魔神アスラ・マキナの能力も少しは知られていると考えられる。

それなら、確かに、巨大な剣で空間を切断しているのだから、白銀の方が正しい判断ではあるが・・・

が、認めてしまうと、それはそれで今後の関係が少しややこしくなる。

「・・・・・・・・・・」

なので、少し言葉を閉ざす。

「だんまりか・・・まあ、いい。」

僕としては、君がどこでその機械仕掛けの魔神を手に入れたのか聞いてみたい所ではあるが、今は聞かないでおこう」

黙って足を進める僕らとは違い、雪原さんは流暢に芝居が掛かった動作で話し続ける。

「で、本題だが・・・一度だけ、君の力を貸して欲しい」

・・・少々予想外な提案が飛び出てきた。

『一度・・・？』

一回で良いの？』

雪原さんの言葉を聞いた操緒も不思議そうだ。

？鐵、というよりも白銀の力を知ったのだからもつと大胆な、それこそ『学生連盟に所属してGDになれ』とでも言ってくるのではないかと思っただが・・・

まあ、言われても断るつもりでいたが・・・その分、今回の案は少々予想外だ。

「ああ、君らにも“色々”事情があるだろうからね。」

一度だけ、学生連盟の仕事を手伝って欲しい」

「こちらの受け取れるメリットが全く見えませんが・・・？」

能力を知った上で誘ってくるのはまだ分かる。

では、その際のことらにとってのメリットとは何なのか。
今のところ、デメリットしか見えないが・・・

「そうだね・・・」

やや悩む様な体勢を取る雪原さん。

「・・・君たちの関係が神聖防衛隊、もしくは法王庁に流れないようにする、ということかどうかだろうか・・・？」

「む」

確かに、今回の一件ではほぼ間違いなく悪魔の家々や、学生連盟などには情報が伝わってしまったはずだ。

だが、それでも今のところそちら側に流れたという話は聞いていない。

流星にどの組織もまだ流すが流さないかで迷っている段階なのだろう。

何かあったら、八岐さん辺りから話ができることになっているし

それを未然に雪原さんが防いでくれるというのであれば、心強いことではあるが・・・

取り合えず持って帰って、一旦奏や社長たちと相談した上で返事をした方が良い。

そう頭の中で結論付けて、返事を返そうとした時、

「そうですね・・・明日ま・

ドオーンッ！！

ッ！？

突然周囲に地響きのような音が響き渡った。

『な、なに!?!』

「・・・方向は、私たちの進んでる方向、です」

驚いている操緒と、冷静に音の聞こえてきた方向を把握する奏。それにしても、“僕たちの進んでいる”方向？

こんな時間にこの道を通っている人って誰がいるのか、と不思議に思った時だった。

「・・・まさか・・・!!」

雪原さんが何かに気付いたかのように急いで走り出す。

「ちょ、待って下さい!!」

僕と奏も雪原さんの後を追って急いで走り出す。

そして、走り始めて気付いたのは、“僕たち”がこの道を普段から通っているということ。

いま僕の周囲にいるのは、僕を含めた4人で、残りの4人の面々の姿が今日はないということ。

「く!?!」

更に言えば、その4人が全員悪魔。

「無事でいて!!」

先行している雪原さんを追う形で僕と奏、3人が全力で道を駆け抜けていくと、突然目の前に凍った道路や樹木が現れた。

「これは・・・!?!?」

足の速度を緩め、周囲を観察しつつ向かっていると、道端に一羽の氷の鳥が転がっていた。

それは4枚の羽根を持った氷の妖鳥。
蹴策の魔精霊だ。サブ・ジン

「急いで、智春くん!!」

「ああ!!」

ここにこいつが転がっているということは、まず間違いなく彼らの身に何かあったのだ。

そして、それは少なくとも、良いことではない。

「操緒、先に行って様子を見てきてくれ!!」

『了解!!』

飛んで僕たちよりも速く移動できる操緒を先行させ、更に走ること1分。

「八條!!」

「蹴策!!」

「氷羽子ちゃん!!」

傷付き地面に倒れながらも、必死に目の前にいる敵に影を伸ばそう
としている八條さん。

左腕を抑えながら必死の形相で敵を睨みながら氷羽子さんを護って
いる蹴策。

気を失い、地面に倒れている氷羽子さん。

そして……

『美呂ちゃん!!』

敵の使い魔らしき異形の背に載せられている気絶した美呂ちゃん。

「く、吹き荒べ、カルセドニ玻璃珠!!」

そんな惨状を目の当たりにした雪原さんの行動は早かった。

すぐさまアスラ・マキーナ機巧魔神を呼び出し、攻撃を仕掛けようとする。

が、

「ちっ、退き時か……行くぞお前ら!!」

男は使い魔ドクターたちに指示を出し、空を飛び、高速で逃げ去っていく。
美呂ちゃんを連れて。

「逃がすか!!」

操緒!!」

『OK!!』

「来い、アスラ・マキーナ機巧魔神!!」

咄嗟に先程までの会話を思い出し、？鐵の名前を伏せ、？鐵の一部を呼び出す。

僕の影から巨剣が飛び出し、逃げる男たちの背に追い縋り、虹色の軌跡を描く。
が、

「クソツ！！！」

振るわれた剣は使い魔^{ドウター}たちの尻尾や爪先など、一部を切り裂きはしたものの、美呂ちゃんには届かなかった。

「^{カルセドニー}玻璃珠！！！」

僕の攻撃が外れたのが分かると、雪原さんが急いで純白の騎士に指示を出し、^{カルセドニー}玻璃珠から勢い良く大気の弾丸が打ち出される。しかし、それも距離があるため悠々と避けられてしまう。

「クツ！！！」

急いで追いかけてよとするも、相手は使い魔^{ドウター}の能力を使ってもしたのか、完全に闇夜に紛れ姿を消していた。

「そん、な……」

呆然と、男たちが消えた方向に目を向ける。

相手に完全に逃げ遂せられたことが分かると、雪原さんはすぐに^{カルセドニー}玻璃珠を影の中へとしまい、どこかへと連絡を始めた。

恐らく学生連盟辺りだろうが、今はそんなことはどうでも良い。

「くそーっ！！！」

助けられなかった！！

僕らの目の前で男に美呂ちゃんが連れ去られてしまった。

僕には、僕には何も出来ないのか！？

ただただ悔しくて、奏に声を掛けられ、八條さんたちの応急処置を始めるまで、僕は独りで男の逃げた方向へ向かって叫んでいた。

45回 敗北（後書き）

ちなみに原作では智春たちが途中で介入しないため、八條は死亡、美呂はそのまま連れ去られ、氷羽子を護るために蹴策が魔力を大量に消費し記憶を失う、という流れになっている、という設定です。瑶もそこまで八條達と仲が良くなかったので一緒に帰っていません。たという違いがあります。

46回 理由(前書き)

アンケートの途中経過、発表です。
重複意見も入れた結果です。

- 1：ギャグ 1
- 2：ほのぼの 5
- 3：恋愛 7
- 4：シリアス 1

カップリングは、智春×操緒、もしくは智春×奏(一巡目)がツートップです。

期限はあと一週間はあるので、皆様のご意見お待ちしております。

46回 理由

「急げ！！」

「この傷ではそう長くは持たんぞ！！」

八條さんを載せたストレッチャーが手術室へと勢い良く向かって行く。

台の上に寝かせられた八條さんに意識はなく、ピクリとも動かない。左腕と右足は本来では考えられない方向を向いており、体中のいたる所から血が流れ出し白いガーゼや包帯を瞬く間に朱に染め上げていく。

また、所々に火傷や凍傷、といった傷まで見える。

内臓がどうなっているのかは全く分からないけれど、医者たちが交わしている言葉を聞いているだけでも、樂觀視して良いものではないことがよく分かった。

バタンツ！！

手術室の扉が勢いよく閉まり、『手術中』のランプが点灯する。

手術室前に並べられた椅子には怪我の処置を終えた氷羽子さんが座り、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈痛な面持ちで手術室に視線を向けている。

「・・・・・・・・行きましょう、智春くん」

「・・・・・・・・うん」

奏に促され、手術室へ背を向け歩き出す。

もう間もなく、連絡を受けた八條さんの家族が病院に到着する筈だ。雪原さんが氷羽子さんに求めた役目は、その人たちへの状況説明。本来であれば雪原さん本人がすべきことなのだが、彼女は学生連盟などの関連各所などと一緒に事後処理を行っている真っ最中で、今も現場で指揮を取っている。

ならば僕たちがするべきかもしれないが、僕と奏は今巷で話題の嵩月組の跡継ぎと、ハンドラー演操者。

『かなりの武闘派である悪魔の家の八條家には今は会わない方が良い』と氷羽子さんから提言されたため、却下。

心苦しいことではあったが、無理を承知で幸いにも軽傷で、八條家とそれなりに親交のある氷羽子さんに家族への対応を任せただ。その代わり、僕と奏、それに操緒の今の仕事は他にある。

蹴策への事情聴取だ。

蹴策は今も治療を受けている最中だが、八條さんほどの重症ではなかったため、割とすぐに話を聞けるらしい。

冬琉さんにも連絡がいつていて、今向かっているらしいから、冬琉さんと秋希さんが到着し次第、蹴策から話を聞くことになっている。

「……クソッ!!」

ガンッ!!

右拳を握り締め、病院の壁に思いっきり打ちつける。

「……智春くん……」

奏が心配そうにこちらを見てくるが、今はその視線に答えられない。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

操緒も奏の横で黙って首を横に振っている。

だが、そんな二人の様子など気にしている場合じゃない。

また護れなかった!!

? 鐵・改を使って華島本家の面々を制圧したことで良い気になっていたのか・・・?

自覚はないけど、ひよっとしたらそうかもしれない。

だとしたら、僕はとんだ大馬鹿者だ。

こんなことじゃ、秋希さんを、蹴策を、美里亜さんを、なにより美呂ちゃんを助けることなんてできるわけがない!!

「・・・・・・・・クツ!!」

ガンツ!!

再び壁にぶつかる僕の右拳。

「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」

今度は奏も、操緒も、何も言っ来なかった・・・

・
・
・

・
・
『大丈夫か、夏目……？』

「ええ、僕は平気です」

秋希さんたちを待っている間で、ある程度頭は冷えた。

そつだ、ここで僕が焦ったって事態が何か変わる訳じゃない。焦るならせめて、相手の正体と目的が分かってからで良い。今は、やるべきことをしっかりとこなそう。

この時ばかりは、橘高道場で習った心構えに感謝したのだった。

『それなら良いが……』

未だに秋希さんはどこか釈然としないものを感じているようだったが、

「……夏目くん、まずは蹴策の所で良かったかしら……？」

「え、あ、はい」

「そう、じゃあ早く行きましょう。」

案内してもらえる……？」

「わ、分かりました」

冬琉さんがいつも以上に醒めた声で話しかけてくるので、気にしている暇がなくなった。

いつぞやの奏並、いやひよつとしたらそれ以上。
普段の道場の暴走など全く比較にならないほどの怒りに満ちた冬琉さんがそこにはいた。

冷静に見えるのは、感情を無理矢理押し殺しているから。

GDの一員として立派に動いているように見えるのは、それが最も相手に辿り着きやすい最短ルートだと知っているから。

一言も八條さんの名前を出さないのは、その名を口にしたら自分が動けなくなることが分かっているから。

冬琉さんの本気の怒りと、いつもとはまるで違う本気の戦闘モードが相まって逆に冬琉さんの様子を普段通りのものとしていた。

それでも、彼女と交流があり、分かる人には分かる。

今の冬琉さんを相手にしてはならない、と。

その証拠に、彼女が背に掛けている大太刀　冬櫻がいつでも抜き放つことが出来るようになっていた。

きつと、冬琉さんは相手の居場所が分かっただらすぐにも単身飛び込んでいくのだろう。

自身の目の前に立ちふさがる物、全てを薙ぎ払いながら。

それが僕の想像、もしくは予想で終わってくれればいいのだけれど、残念ながらその可能性は低そうだ。

つまり、今の冬琉さんに逆らってはいけない。

逆らえばほぼ間違いなく八つ裂き、もしくは肉片にされるだろう。

・
・

・ ・ ・
ひとまず治療を終えた蹴策がいるはずの部屋に向かい、ドアをノックする。
すると、

「・・・どうぞ」

一瞬聞き間違いかと思ったぐらい暗い返事が返ってきた。
普段の鳳島蹴策という人物からは全く考えられない調子の声。
しかし、確かにその声は蹴策のもので間違いなかった。

「失礼します」

そんな声に影響されてか、自然と僕の声も畏まったものになってしまふ。

頭では普段の調子で良いと分かっているのに・・・
扉を開き、蹴策に与えられた“個室”へと足を踏み入れる。
蹴策程の年齢で、そこまで重症でもない人間が個室にいるというの
もかなり不自然ではあるがこれは病院側の配慮だ。

この烈明館医大付属病院は巡礼者商連合の系列のため、マキナ悪魔やアスラ機巧
魔神といった裏の事情に詳しい人間が多い。
そのため、こういったことが出来るのだろう。

「・・・なんだ、夏目たちか」

部屋に入ってきたのが僕らだと分かると、見るからに蹴策は落胆した。

「氷羽子さんじゃなくて悪かったな・・・」

「別に・・・そうだ、和斉の奴はどうなった!？」

まるでたった今思い出したかのように、その名前を蹴策が口にする
と、

ピク

今迄機械の様にここまで進んできた冬琉さんが肩を少し震わせる。
そんな彼女の様子を横目に収めながらも、

「今手術中」

スルーして、端的に答えを返しながら近くに閉まってあつた椅子を
人数分引っ張り出して座る。

「・・・そうか・・・」

蹴策もその答えを聞いた後は俯き、それ以上言葉を続けてくること
はなかった。

手術室に入る前の八條さんの容体も、攫われた美呂ちゃんのこと
についても、そして何より、氷羽子さんについて何も聞いてこない。

それだけ今回の件が重く押し掛かっているのかと思つたが、

「・・・なあ、冬琉」

どうやら違うようだ。

今まではただ単に自身の中で考えを纏めていただけの様で、俯いて
いた顔を上げ、僕の出した椅子に腰かけた冬琉さんに問いかけてい

た。

「・・・何かしら？」

問いかけられた冬琉さんの方かというと、先程の一瞬の動揺は既に消え去り、病院の入り口で会った時の様な冷徹な表情（仮面）が顔に張り付いている。

そんな彼女の表情を気にすることなく、

「お前、俺と和斉どっちが夜の戦場では強いと思う・・・？」

予想外な質問に若干戸惑いながらも、

「？そりゃ、和斉のほうが強いと思うわよ」

厳然たる事実を述べる冬琉さん。

また少し肩が震えたけれど、以前に比べれば幾らかマシになっている。

「まあ、そうだよな。」

秋希、それに夏目と嵩月、お前たちはどうだ・・・？」

冬琉さんの答えに頷きながら、今度は僕らに同じ質問をしてくる蹴策。

『まあ、和斉の方が強いだろうな』

「僕も同意見」

コクコク

全員が八條さんの方が強いと答える。

確かに、夜は影が使いにくいから能力という点から見れば蹴策の方が強いと思うが、いざ戦闘となれば勝つのは八條さんだろう。

戦闘のメインが自身の能力である蹴策とは違い、能力を補助に使っている八條さんはそこまで地形に左右されずに戦える。

まあ、完全に能力を封じこまれたらキツイとは思うが・・・

「だよな・・・じゃあ、なんで俺の方が軽傷ですんでるんだ？」

「それは・・・」

確かに、今回の戦闘では蹴策の方が軽傷だ。

早々起きる事態ではない。

勿論、八條さんが蹴策を庇ったりしていなければだが、蹴策の様子を見る限りそれはなさそうだ。

その事を蹴策に指摘され、僕と奏、それに操緒が揃って頭を悩ませていると、

「その理由はね、今回の敵の目的が“鳳島”ではなく“八條”にあったからよ」

「え・・・？」

唐突に冬琉さんが口を開いた。

呆気にとられる僕ら。

しかも、どうやら今回の事件の犯人も、動機も、その口ぶりからすると知っているようだ。

「・・・どういうことだ？」

訝しげに、探るような視線を蹴策は冬琉さんに向ける。
そりゃそうだ。

現場にいなかったはずの人間がどうして犯人の事を知っているというのか。

「・・・構わないわよね、秋希ちゃん？」

『ああ、ここにいる面々なら大丈夫だろう』

何か話したらマズイ内容なのか、冬琉さんは自身の斜め上に浮いている姉に確認を取り大丈夫だと判断すると、話し始めた。

「ここに来るまでに瑤からの連絡で聞いたのだけど、今回の犯人はスピンル ハンドラー 尖晶の演操者だったのでしょう?」

まず一つ、確認事項を冬琉さんが口にすると、

「ああ、そうだ。

と言っても、今回あいつは一回も魔神を呼ばなかったけどな」

蹴策が若干補足しながらそれを肯定する。

「そう・・・じゃあ、学生連盟わたしたちの予想は多分間違っていないわね。
まず、知っておいて欲しいのだけれど、今回の犯人には罪状がい
くつかあるの」

「罪状?」

「ええ、窃盗罪だとか、殺人罪といった一般的な刑罰を思い浮かべ

てもらえればまず間違いないわ。

それで、学生連盟が最初にあの“男”を追いかけて始めたのは以前あなたが襲われてからだから、最初は“暴行未遂？事件”だったの」

成程、学生連盟の中でも一応そういった区分はしてあるのか。

まあ、悪魔とか機巧魔神アスラ・マキナの能力は様々なものがあるから、その区分の仕方は予想以上に分かりやすいものなのかもしれない。

「そして、“男”の調査を続けていくうちにその“暴行未遂？事件”と、とある“拉致監禁事件”が繋がったの。

前者の“暴行未遂？事件”の動機も当初は分からなかったのだけれど、その“拉致監禁事件”の犯人が尖晶スレネルの演操者だと分かっていたからは非常に分かりやすいものになったわ」

ここまで喋って、一旦口を閉ざす冬琉さん。

出来ればこの先は話したくないようだ。

それが何故なのかは分からないけれど、少なくともまともな内容ではないことは分かった。

何故なら、冬琉さんと秋希さんが揃って嫌悪の念を隠さず、顔に出しているのだから。

それでも話すと決めたのか、冬琉さんは首を横に振り、口を開いた。

「以前の事件の際、“男”が“補充”という言葉を使っていたと言っていたわね？」

操緒の方に確認の視線を向ける橘高姉妹。

『え、と・・・多分・・・』

自信無さそうに返事を返す操緒だが、流石に半年程前のことだし仕方がないと思う。

「まあ、いいわ」

操緒の返事に若干気落ちしながらも冬琉さんは言葉を続ける。息を吸い、

「スピネル ハンドラー尖晶の演操者が起こした“拉致監禁事件”はGDの間ではこう呼ばれているわ。

「……連続雌型悪魔誘拐事件」

「……え……？」

雌型悪魔の誘拐……？

どこかで聞いたような？

僕、それに、同様の疑問を感じたのか奏と蹴策も頭を捻っているが、無視して冬琉さんは続ける。

「その事件が最初に起きたのは確認出来ている中では、凡そ1年前の夏。

日本全国の悪魔の名家が集った会合の会場で起きたわ」

「ああ、あの時か！！」

蹴策が声を上げる中、僕と奏も納得し、首を縦に振っていた。確かに八伎さんから

「名家やそれ以外の雌型悪魔が数人、行方不明になりました。いずれも中学生から、高校生の年代で、未契約の悪魔たちです。」

お嬢様や、美里亜さんも含まれますので、十分注意してください』

みたいなことを言われていた気がする。

その後特に何も起きなかつたからすっかり忘れていたが……

「話を戻すわよ、良いかしら？」

「あ、ああ」

蹴策を黙らせ冬琉さんが話を続ける。

「その前に、蹴策」

「なんだ？」

「今回襲ってきた使い魔ドクターは何体だった？」

「あ？」

あゝ……大体10体前後だったと思うが……」

「……全部男を護るようになっていたのよね？」

「ああ」

「……そう」

向こうもかなり減ってきたようね……

ボソリと冬琉さんが何か呟いたが、僕たちには全く聞こえなかつた。何故なら、普通に考えてあり得ない情報が僕らの目の前で交換され

たのだから。

10体前後の使い魔ドウターが全て一人の人物を護るなど考えられないことなのだ。

悪魔と契約者コントラクターは二人で一つ。

そうでなければ互いに消耗して雌型悪魔はすぐに非在化して消え去り、契約者コントラクターはその相手への想いを忘れてしまうのだ。

「で、特に驚いた様子がないってことは、お前たちはその理由を知ってるんだろう？」

「ええ」

『ああ』

が、僕らの驚きなど余所に冬琉さんと秋希さんは淡々と言葉を繋げる。

それは、

「あの場にいた使い魔ドウターは全てあの男の使い魔ドウターよ」

改めて禁忌を侵す言葉だった。

「いや、それは分かっているから。

俺は雄型とはいえ、悪魔だぞ。

使い魔ドウターと主人の関係ぐらい見て分かる」

理由を教える、と返事を返す蹴策。

それに、『今言つわよ』と返す冬琉さん。

そして、冬琉さんは拳を握り締め、八條スビネルさんを想ってではない

純粹に橘高冬琉として、あの尖晶ハンドラーの演操者に怒りを向けながら、

「あいつ、あの“男”はね、自分の攫った雌型悪魔全てを強姦レイプして無理矢理自身の契約悪魔にしているのよ!!」

隠していた真実を口にした。

「な!？」

「う、そ……」

「……は……?」

「え?」

その事実を初めて聞かされた僕たち4人は全員が呆気にとられ、言葉を失った。

レイプ……?

攫っている相手が中学生から、高校生の年代なら処女である可能性が成人した雌型悪魔よりも高い。

それが分かっている、全員……?

呆然としている僕らを余所に冬琉さんは言葉を続ける。

「あの男にしてみれば、使い魔は自身と想い人との愛の結晶ドクターでもなんでもない単なる道具なの。

それは、無理矢理契約させられた悪魔に対する扱いも同じ。

どれだけ契約した悪魔が非在化して消えていってもそれは、自身の中身の喪失感を感じるほどではない。

単に道具が壊れてしまった、程度の認識なのよ!!」

更に全て言ってしまうと、冬琉さんは言葉を吐き出していく。

「・・・恐らく、今回の目的　誘拐の対象　は美呂ちゃんで、
氷羽子ちゃんはおまけだったのよ。」

だから、八條家の対策を念入りにしてきたのだと思うし、それ故
和斉は美呂ちゃんを護ろうとして狙われ続けた。

かといって鳳島家やGDを無視するわけにはいかないから、必要
最低限の数を揃えてきたのでしょね・・・」

そこまで話して、冬琉さんは口を噤み、黙り込んでしまった。
だけど、僕にはそんな冬琉さんの様子など殆ど目にはいつていなか
った。

頭にあるのは、その男が以前言ってきた言葉。

道具が壊れたのならばまた取り換えれば良い。

だから以前『補充』という言葉を使ってきたのか！！

そして、相手のことを何とも思っていないから、次へとすぐに切り
替えられるし、どれだけ契約してしようと全く問題がない、か・・・

「・・・ふざけるな」

気付けば自然と口から言葉が漏れる。

それは、自分で自分が出したとは思えないほど暗く怒りに満ちたも
のだった。

「何だよそれ！？」

あいつは何様だ！？

攫われた子たちが何したんだよ！？」

『なにも“ヤツて”いないからこそ狙われたのだろうか』

「そんな……馬鹿な事が……」

「あるのよ、実際何人が助け出したのだけれど、すぐに非在化して消えてしまったわ」

悔しそうに言う冬琉さんを挟んで、温度に壁ができていく。

「……許しません」

静かに怒りに打ち震える奏から漏れだす高温と、

「あいつ、絶対殺す!!」

激しく怒りを顕わにしている蹴策から漏れだす冷氣。

普段だったらそれに怒っている操緒や秋希さんはただ黙ってそんな部屋の空中に浮かんでいた。

?
?
?
?

S i d e : M i r r o H a c h i j o

パンツ、パンツ

肉と肉がぶつかり合う音、

ぐちゅ・・・

何か水気を含んだものが掻き回される音。
そして、

「ひあぁっ、そこは、だめええっ!!
やめっ、ふあぁあぁんっ!!」

周囲に響き渡る女性の喘ぎ声。

噎せ返る様な性臭が周囲には立ち込め、私が閉じ込められている部屋　いや、独房まで入り込んでくる。

気がつくのと、既にこの部屋で、下着を残して服は全て剥ぎ取られていた。

そのときからずっと周囲には喘ぎ声が響き渡り、時に何かが殴られているかのような音まで聞こえてくる。

その度にかかる悲鳴とも嬌声ともつかぬ声。

そして時折聞こえる懇願と否定の声。

ヤメテヤメテイレテヤメテ、イレテイレテイレテヤメテヤメテヤメ
テイレテヤメテヤメテ、ヤメテイレテヤメテヤメイレテヤメテヤメ
テヤメテイレテヤメテ・・・オネガイ!!

そんな音聞かせないで!!

ここでは私は身を抱き抱え、隅に縮こまり耳を塞いでいることしかできない。

魔力封じの結界でもしてあるのか、能力を使うことも出来ず、ただただ行為の音を聞かされる。

そして、自身の身体が火照り、熱を帯びていくのが分かる。

周囲に影響されたのか、それとも・・・理由は分からないけど、私の身体が、脳が熱に犯される。

何が何だかわカラナイ・・・

自身の身体を掻き抱いていた手が緩み、指の先が体を伝い、降りていく。

そうして、指が股の部分に触れ・・・

お願い、兄様、助けて・・・!!

46回 理由（後書き）

まず、最後の部分については出来れば見逃していただけると非常に助かります。

一応R - 15にしてあるので大丈夫だとは思いますが・・・

今回の話、というか展開は美呂を出す前から考えていた話です。

純愛が大前提っていうのは当然良いことなのですが、犯罪者はそれをぶち壊すのですよ。

原作を読んだときから、

『機巧魔神との契約はナノマシンの都合上一回でも、悪魔となら何回でもイけるんじゃない？』

と考えていた私はきっと最低の人間なのだと思いますが・・・
勿論、私がこの様な犯罪を肯定しているわけではありません。
ただの話の展開なのだと思います。

47回 非道（前書き）

遅くなつてすみません。

発表の課題があんなに面倒だとは思わず・・・

ええい、C・レヴィ「ストロースの曖昧な和訳なんて分かるかっ

！！

いえ、大事な考えだとは思うんですけどね、エスノセントリズム（
自文化中心主義）に対する批判って・・・

47回 非道

驚愕の事実が冬琉さんから告げられた日の翌日。

僕と奏、それに操緒の3人は普段通りに学校へ行き、授業を受けていた。

いつもと変わらないごく当たり前の日常の光景。

休憩時間になれば廊下には生徒が溢れかえり、大量の声で満たされる。

そこに翳りの色は見えない。

あつたとしても、それは『次の授業の宿題をしていない』程度の些細なもの。

気に病むほどのことではない。

そんな明るい空気の中に混じり込んでいる3人の異物。

僕、奏、そしてアニア

昨日の事件が僕ら三人の心に暗い影を落としていた。

冬琉さんから驚愕の事実を知らされた後、1時間程度で八條さんの手術は終わった。

病院の医師たち総出の大手術の結果八條さんは一命を取り留め、今は蹴策の隣の部屋で眠っているはずだ。

「・・・はあ・・・」

比較的軽傷で済んだ蹴策も大凡全治一ヶ月。

氷羽子さんはかすり傷や些細な切傷が体中に点在していたものの、そこまで酷いものはなかったため、日常生活には何ら支障がない。

肌に残るといったこともないようだ。

鳳島兄妹のことだけを見れば喜ばしいことだが、肝心の八條さんが

酷い。

医者からの診断では、大凡全治6ヶ月　つまりは半年ほど。リハビリをサボらずしつかりと取り組みれば後遺症は特に残らない、と言われたがそんな言葉だけで安心できる訳がない。

攫われたのが八條さんの実妹である美呂ちゃんである以上、彼が重症の身をおして動く可能性がある。

下手すれば傷が悪化する可能性が高いのだ。

だから、僕たちが彼が出てこなくても良いぐらいに動かなければいけない。

あの後、上記の診断結果を医師から聞き、蹴策からも必要事項を聞いた冬琉さんは隣室に運び込まれた八條さんの顔を見ようとせせず、すぐさま病院を出て一目散に夜の闇の中へと消えていった。

多分、雪原さんの許へと向かったのか、自身の情報を基に捜査を始めたのだろう。

そんな彼女を僕らは止めることは出来なかった。

それは、僕らが冬琉さんの話を聞き、スピンネルハントラーの演操者に対して怒りを覚えていたからかもしれないし、学生連盟に所属していないからかもしれない。

だけど、それ以上にあの時の冬琉さんには声が掛けられなかった。

今にも壊れてしまいそうで、それでいて誰かに構って欲しそうなくらい・・・震えていた。

「・・・ああ、もう・・・!!」

昨夜の彼女の姿を思い出したからか、改めて自身の無力さが身に沁みる!!!

今僕らがこうして学校にいる間も学生連盟の方々や、八條家、（氷

羽子さんたちの要請を受けた）鳳島家、（僕や奏が頼んだ）嵩月組の皆さんなどの直接は事件に関係のない人たちが市内、あるいは県？内、果ては関東圏にまで範囲を広げて敵のアジトを探している。その証拠に　　という訳でもないが　　今日は露崎が欠席している。きつと、彼女も搜索、或いは情報整理に駆り出されているのだろう。・・・・なのに被害者の友人である僕らはこうして普段通りの生活を送っている。

これで良い訳がない！！
良い訳がないのは分かってる・・・だけど、何をしたらいいのかも分からない・・・

一先ず学校が終わればすぐに嵩月家へ直行し、何か情報が入っていないか聞き、無ければ橘高家やGD本部へと行こうとは思っている。思っているが・・・正直言ってあまり期待はしていない。

犯人の目的が本当に未契約の雌型悪魔との契約ならば、一刻の猶予もないのは言うまでもないが、それは相手も分かっているはず。

向こうだつて見つからない様になっているのだ。

それは、学生連盟が根絶やしに出来ていないことから分かる。

昨日今日の出来事が一日そこらで片付くとは思えない。

それに、犯人“たち”がどれだけ数の使い魔ドクターを維持できるのかは分からないが、そう多くはないだろう。

使い魔ドクターを最善の状態に保ち、契約悪魔を生かしておくとなると、最低でも、昨夜現れた数。

多くても20程度だとは思うが、相手の状態が分からない以上樂觀視する訳にもいかない。

そんな風に悶々と頭を悩ませながらも、ただ今日の授業が早く終わってくれることを願っていた。

?
?
?
?
?

S i d e : A k i K i t s u t a k a

「はあはあ、これで3つ!!」

息を切らせながら私の目の前で冬琉が冬櫻を振るう。

それと同時に大太刀に付いていた朱色の液体や、ピンク色の物体が刀身から剥がれ落ち、周囲に散らばる物の中に混じり、消えていく。本来ならしつかりと紙を使って拭き取るべきだが……今は仕方ない。

一刻でも時が惜しいのだから。

昨夜、八條の手術が成功したと知るや、すぐさま冬琉は病院を出て街の郊外にあるとある廃屋に向かった。

その廃屋に向かったこと自体は別に不思議でもなんでもない。

そこは以前から学生連盟の調査で怪しいと言われていた場所なのだ。廃屋にしては人の出入りが多過ぎるし、何より悪魔など、裏の世界もしくはある程度表社会でも顔の知れた著名人などの関係者の顔が何度も見受けられた。

そう、あの尖晶^{スピネル}の演操者^{ハンドラー}である男が所属しているであろう組織、もしくはグループの活動拠点の一つである可能性が非常に高い。

勿論、違う可能性も高かったが、どちらにせよ違法的な活動をしているのはほぼ間違いない、と学生連盟内では結論付けられていた。

それでも中々動けなかったのは裏づけがしっかりと取れなかったから。
学生連盟がいくら戦力上は十分な組織でも、我々は決して司法組織ではない。

あくまでGDは生徒指導員であり、戦闘行為や取り締まりはその延長線上でしかない。

「……まあ、最近は若干やり過ぎていてる感が否めないが……
因みに、犯人が何らかの組織に属しているのは以前から言われていたことだ。」

前回の襲撃の際に“^{ドクター}回ってきた情報”という言葉を使っていたそうだし、何より使い魔や契約した雌型悪魔の保持を十二分に行えているということ。

更には、関係各所への情報隠蔽工作。
少なくとも単独犯ではありえない。

「……秋希ちゃん、次はどこ……?」

『今のところ連絡は回って来ていないから、まだ不明だな……
一旦休んだ方が良さそう』

「……そんな暇はないわ」

『……はあ、10分程度で良いから休め。』

『それでもしないと次の場所で死ぬことになる』

「……そう、ね……」

今いる敵の拠点を潰した冬琉はすぐさま次の判明している拠点へと移動しようとする。

が、姉として、更には冬琉に憑いている副葬処女^{ベリアル・ドール}としても彼女の無

茶は見過ごせない。

情報が回って来ていないことを理由に、冬琉を休ませようとするが、バツサリと拒絶される。

それでも、流石に体力が限界だったことは冬琉も分かっているのだろう、潰した敵のアジトから出て、移動用に学生連盟が用意してくれている車に乗り込むと、すぐに肩の力を抜いた。

そんな冬琉の様子を確認した運転手に車を発進させるよう声をかけると、緩やかに車は動き出す。

「……すう……」

肩の力を抜くと同時に気も緩んだのか、冬琉は目を閉じ寝息をたて始めた。

……無理もない。

昨夜廃屋に襲撃を掛けてからほとんど休むこともなく動き続けていたのだ。

さっきの場所で襲撃した拠点は3件目。

敵の戦力があまり集中していないとはいえ、連続した戦闘行為は精神に強い負担を強いる。

それに上乘せするかのように各拠点で行われている行為も、私たちが姉妹、更にはGDの構成員たちにもかなりの衝撃を与えた。

一件目の廃屋（の地下）で行われていたのは、薬の開発。

と言ってもまともな薬であるはずもなく、作られていたのは麻薬、幻覚剤、あるいは媚薬と呼ばれる人の精神を狂わせる類の代物。

恐らくああいった物を使って捕えた雌型悪魔たちを洗脳、あるいは発情させ、円滑に物事を進めているのだろう。

あそこにいたのは研究者風の男たち数人と、薬品投与の実験対象でもある数人の雌型悪魔たち。

それに、護衛役の男が5人程と使い魔が^{ドクター}一体。

使い魔^{ドクター}や男たちが然程強くなく、制圧自体は存外すぐに終わったのだが、問題は雌型悪魔たちだった。薬の所為か、ほとんどの少女たちが狂ってしまっており、下手に触れると異常なまでの過剰反応をしてきたのだ。学生連盟から応援が来るまで、そんな彼女たちの惨たらしさをマザマザと見せつけられてしまった……

二件目のごく普通のビルで行われていたのは、娼館紛いのオークション。

ビルは5階建ての然程珍しくないタイプだったが、やっていた内容が内容だ！！

1階は事務室兼、警備室。

ここで人の出入りをチェックし、特定の人間しか上階には行けないようになっていた。

2階は……その……風俗店の様な……いや、行ったことないから本当にあんなところなのか私は知らないが！！……実際にヤッている真最中の奴らもいた。

昼間から、ナニをしてるんだ！？

3階はオークション会場。

当然、普通のオークションではない。

売買されているのは、雌型悪魔。

既に契約済みである彼女たちだが、客が求めているのは使い魔^{ドクター}ではない。

欲しいのは彼女たちの希少な能力。

種床にでもして、その子供に能力を継がせ、家、あるいは個人の力としようとしていたのだ。

このオークションに参加していたのは、とある政治家や、大手企業の社長、会長、さらには少数ではあるものの同じ悪魔であるはずの家々まで。

4階にはまた警備室の様なものと、鉄格子の様なもので所々通路が

閉ざされており、その上迷路の様な非常に分かりにくい構造になって5階に行くのも一苦勞だ。

5階はこの従業員？や商品である雌型悪魔たちの居住スペース。1階から3階までは一本の階段で直通だが、3階から4階、更には4階から5階はやたらと複雑な工程を経なければたどり着けない構造になっていた。

・・・それだけ逃がしたくないということだろう。

その反面、2階と3階は客が逃げやすいようになっていた。

その所為で客を取り押さえるのが一苦勞だったのは記憶に新しい・

捕えた客の大半の素性が、私の守りたかった一般人だと分かった時には何とも言えない気分させられたがな。

そして、先程の廃工場で行われていたのは、使い魔^{トウター} いや、正確にははぐれ眷属^{ロスト・チャイルド} と契約悪魔を使い実験をしていた。

行われていた実験は、どれ程使い魔^{トウター} はぐれ眷属^{ロスト・チャイルド} を酷使すれば、契約悪魔がどの程度非在化していくかを計測するというもの。

これによって使い魔^{トウター}たちの耐久限度の見積もりを出して、それを基に契約時期を決めていたのだろう。

言い方は悪いが、一件目の廃屋で行われていた薬の投与は始めから見捨てられた雌型悪魔たちで、ここで実験対象にさせられた雌型悪魔は一度あの男に心を許したのにその後捨てられた雌型悪魔たちだ。どちらが良い、酷いとは私には言えない。

前者は始めから男を拒絶した結果精神を壊され、後者は男から捨てられた結果身体を壊された。

死んでも良いと覚悟を決めたものは精神を壊され生き地獄、生きるために男を認めたのに、結果として身体が非在化。

そんな彼女たちの姿は私には見ていられなかった。

それは、冬琉も同じだったのだろう。

ここだけは徹底的に破壊した。

ロスト・チャイルド
はぐれ眷属は全て切り捨て、実験をしていた連中も全て重症、或いは・・・殺した。

捕らわれていた雌型悪魔たちは、生き残っていた者は学生連盟の他の面々に任せていたからどうなったかは知らない。

が、それでも少しでもマシな暮らしに戻れることを切に願う・・・

これら3つの拠点をほぼ徹夜で回っている冬琉の身体は、すでに限界のはずだ。

何がここまで妹を動かすのか。

なんとなくの原因は思い付いているが・・・

「・・・うん、和斉・・・」

『・・・』

やはりそうか。

が、私が関与して良いものなのだろうか・・・？

塔貴也が私を選んでくれたのは嬉しかったが、心のどこかで冬琉を振ったことに対する怒りも覚えていた。

無論、私の勝手な思い込みだとは分かっているが、それでも妹を幸せにしてくれなかった幼馴染の男を若干許せなかったのも事実。

・・・少し、ほんの少しだけ、私がすり減って消えてしまった方が良いのではないかとも思ってしまった。

そんなことを思っていたが、知らぬ間に八條に惹かれていた冬琉を見て安堵したのも覚えている。

自分が消えなくても妹は大丈夫なのだ。

だから、八條が大怪我をしたが生きていると聞いて焦っていたのは実は冬琉じゃなくて私だったのかもしれない。

「か、鳥・・・？」

アスラ・マキーナ
機巧魔神並の大きさの巨大な鳥。

全身黒一色で巨大なだけかと思いきや、足が“3本”

それに気付いたのは私だけではなく、冬琉も同じだったようだ。

「・・・う、うそ・・・そんな!？」

『まさか・・・!?!』

二人同時に諦念の声が漏れる。

出来れば嘘であって欲しい、夢であって欲しい。

そう願う私たちを余所に、

「ガアアアアーーーーッ!!!」

巨大鳥は一声大きく啼き、その巨大な翼を羽ばたかせ、私たちへと向かって来た。

?
?
?
?

その頃、智春たちのいる中学で、

『2年 組、夏目智春、アニア・フォルチュナ・ソメシユル・ミク・クラウゼンブルヒ、2年 組、嵩月奏、至急生徒会室に来なさい。繰り返す。』

2年 組、夏目智春、アニア・フォルチュナ・ソメシユル・ミク・クラウゼンブルヒ、2年 組、嵩月奏、至急生徒会室に来なさい。以上』

そんな放送が流れていたとか・・・

47回 非道（後書き）

宣言しておきますと、私が書くとかかなり暗くなる可能性があります。
その辺りをご理解いただきたく・・・

原作の様な学生同士のライトなテーマも勿論扱いますが、今章？は
かなり重たく暗い話になる予定でいますので・・・

48回 死地（前書き）

先週の6月9日、声優の川上とも子さんが卵巣がんの為に亡くなりました。

川上さんの代表作は『ヒカルの碁』の【進藤ヒカル】、『少女革命ウテナ』の【天上ウテナ】、『ケロロ軍曹』の【日向冬樹】、『AIR』の【神尾観鈴】などです。

享年41歳だったそうです。
心よりご冥福をお祈りしております。

P・S：アンケートの結果、ジャンルは【恋愛】、キャラは【智春×操緒】に決まりました。

皆さんのご意見を無駄にしないよう、しっかりと考えながら仕上げていきたいと思えます。

ご協力ありがとうございました。

私がそれらの動作をしている間に相手の鳥は体勢を整え、3本ある足に付いている爪を使って連撃を繰り出してくる。

「ふっ！！」

そんな巨怪の爪を今度は受け流すようなことはせずに、大きく横に避けることでやり過ごす。

いくら冬櫻が普通の太刀よりも頑丈なのだとはいえ、あんな巨体とそう何度も打ち合えるほど日本刀は頑丈ではない。

“斬る”という動作のみに限定すれば、冬櫻や秋楓は十二分に頑丈なレベルなのだから、あまり文句は言えない。

これが秋希ちゃんが夏目くんに渡した春棟になると少し事情が変わってくるのだけど、あれは変り者の刀だから例外と言っている。

・・・こんなことを考えるようになるほど、刀でこの巨怪の相手をするのはキツイ。

いえ、違うわね。

普通のはぐれ眷属ロスト・チャイルド・ドクターや使い魔ならここまで苦戦することはない。

何が違うかと聞かれれば、やはり、早々“攻撃”する訳にはいかないということよね・・・

そんな私の葛藤が伝わったのだろう、秋希ちゃんが分かっている筈なのに確認の言葉を投げかけてきた。

『・・・使つか、冬琉・・・？』

気遣わしげに聞いてくる姉の言葉を、

「馬鹿言わないで。」

秋希ちゃんだって分かっているでしょ・・・？

即座に切つて捨てることで返事とする。

幸い、今は襲いかかつて来ている巨怪も一旦距離を取ってこちらの様子を観察しているため、多少会話に余裕が割ける。

普通だったら戦闘中に会話なんて自分でもどうかと思うけれど、今は誰かと話して、少しでも気を楽にしたかった。

『だが、今のままでは・・・』

「分かつてる！！」

このまま攻撃をしないで受け身に回っているだけでは、ほぼ確実に殺られる。

それでも、普段の体調ならまだ逃げることも出来ただろう。

けど、こんな所で昨日から行ってきていた強行軍が祟ることになるなんて！！

まともな睡眠を取っていない上に、起きぬけで頭が上手く回らない。更には、徐々に四肢の先から力が抜けていく感覚。

一刻も早く相手を“処理”して休まないとマズイけど・・・それが出来るのなら既にやっている。

『分かっているなら尚更使え！！』

今ここでお前が死んでは元も子もないんだぞ！！』

「・・・そう、ね・・・」

秋希ちゃんの怒声に自分でも考えられないほど弱い言葉で返す。

幾ら睡眠不足で頭が回らない私にだって、秋希ちゃんが言うことぐらいは分かる。

だって、そうしないと、私が・・・死ぬ・・・んだから。

自分がまともに戦えず、逃げることも出来ないなら、自身の影の中に封印されている魔神を呼び出すしかない。呼び出してあいつを操るぐらいなら、まだ何とか出来るし、それぐらいしか手札が残っていないことも分かる。秋希ちゃんだって分かって言っているんだろ。ただ、それでも・・・

「私は・・・“あいつ”を殺せない」

私たちからやや距離を取った場所で、こちらの様子を観察している三本脚の巨大鳥を見やりながら呟く。

私が視線を向けると、こちらの弱音を感じ取ったのか、怪鳥は一声大きく雄叫びを上げ、宙へとその身を投げ出した後、勢い良く滑空して今度はその嘴を私に突き刺すように突き出しながら向かって来た。

相手の体躯が大き過ぎ、勢いも凄まじい・・・避け切れない！！

キンツ！！

受け流そうにも翼や足も向かってくるため、必死になって敵の嘴を受け止める。

受け止めた嘴からは、生物の武器ではなく鉄がぶつかり合った時の様な音が響く。

『・・・あれが、“八條”の使い魔だからか？』

「・・・・・・・・・・」

必死に相手の攻撃を受け止めている私の耳元で秋希ちゃんが囁く。

そう、なのだろう・・・

意識が少し戦闘からズレる。

三本脚の烏　つまりは八咫鳥の使い魔は八條一族の使い魔だ。

今迄あの男がその使い魔を使役していたという報告はなされていないかった。

今も、男の姿が認められた訳ではないが、向こうの組織の拠点をいくつか潰した後に、狙った様にGDの車を襲ってきたのだ。関係ないと考えるのはほぼ不可能。

そして、以前までいなかったのに新たに加わったのなら、つい最近攫われたということ・・・私の、いや、私たちの頭の中に浮かぶのは一人の少女の姿。

無愛想だったけれど、自身の兄のこととなると熱くなっていた少女。そういった点から氷羽子ちゃんを“師匠”と呼び、慕っていた少女。自身の想い人と同じ姓と、髪の色を持っている日本人形のような少女。

八條美呂

決して仲が良かったとは言えない。

むしろ、和斉を巡って争っていたから仲が悪いほうだったかもしれない。

それでも、彼女は自身の想い人の妹で、私たち橘高道場の仲間だ。ここで私がこの使い魔を殺してしまったら、二度と彼女は戻ってこないのではないか、と想着ってしまう。それに、

「これ以上、あの人を、和斉を、私は傷つけられない・・・」

妹が攫われ、自身も深い傷を負った彼をこれ以上痛めつけるわけに

はいかない。

足を踏ん張り、必死に受け止めていた烏が私から離れ宙へと舞い上がる。

と同時に、地面にいる私目掛けて上空から連続して嘴を突き出してくる。

その攻撃を、足を動かし、体を捻り、当たらず、そして相手の攻撃範囲から最短で逃げ出そうとする。

しかし、

「ガツ!？」

嘴を避け切った先に待っていたのは烏の巨大な翼。

普段だったら余裕で対処できていたであろうそれを、咄嗟に冬櫻を盾にして防ぐも、その程度で振り抜かれた翼は止まることはなく、私は勢い良く近くの木の幹へと体を叩きつけられた。

「か、はっ……!!！」

一瞬、息が詰まる。

体中が痛みで強張り、四肢から力が抜けていく。

体は気の幹を伝って地面へとずり落ち、すぐさま立とうとするが・・・足腰には力が入らない。

「・・・クツ!!！」

地面に落ちていた冬櫻を掴み、支えにして必死に立ち上がる。

幸いにも骨折や出血などはないが、これ以上は・・・マズイわね。

体がまともに動いてくれるのなら良いけど、思い通りには動いてくれない。

自身へと向かって来る巨大鳥が徐々に大きくなり、私の眼前一杯に相手の姿が広がったところで、

「^{ククロウ}? 鳥」

「グアアアーーーーッ!!!」

私たちの上からもう一体巨大な鳥が現れ、私に向かって来ていた巨怪を弾き飛ばしていた。

「……え……?」

現れた鳥はどこか虚ろで、今にも闇に溶けて消えてしまいそうなほど薄っぺらいクセに、妙に存在感があった。

しかも、その鳥からは悪魔ではない私にも感じられるほど大量の魔力が漏れ出している。

一度だけ、今迄の人生で私はこの鳥を一度だけ見たことがある。

その時は、まだまだ私も未熟で 勿論、今もそうだけれど こんな風に危険に陥ってしまっていた。

あの時、この鳥に乗って私を助けに来てくれたのは……

「よう、生きてるか？」

「この大馬鹿が!!!」

「和斉!!!」

怪我のせいで、病院のベッドの上で眠っているはずの影使いの雄型悪魔だった。

48回 死地（後書き）

非常に珍しい冬琉視点の話でした。

しかも、3400字程度と言う短さ。

まあ、次回に繋げるための話なのでしょうがないか・・・いや、一話に収めようと思えばやれないこともないんでしょうが、ちょうど区切りが良かったので切りました。

その分、次回を早く書き上げたいと思います。

49回 雨降って地固まる？（前書き）

次回を早く、と言いながら遅くなってしまいましたすみませんでした。

最近パソコンの処理が遅いです。

ちょっとデータ入れすぎたかなあ・・・

ノートだから外付け容量付けられないし、そろそろ要らないデータ消さないといけないかもしれない。

49回 雨降って地固まる？

走る、走る、走る！！

少しでも早く敵を見つけるため、冬琉さんと八條さんを助けるために必死の想いで奏と一緒に街中を駆け抜ける。

車道に目をやりタクシーを探すも、こんな時に限って一台も走っていない。

代わりに走っているのは黒塗りの高級車で・・・うん！？

僕が疑問を持つのと同時に、車道を走っていた高級車が急に止まり、窓を開けると、

「お嬢様、夏目さん！！」

八丈さんがそこから顔を出し、僕たちに向かって声を掛けてきた。彼の顔は珍しく焦り気味で、余裕がなかった。

「八丈さん！！」

「お乗りください！！」

走る速度を若干緩め、嵩月組の車の後部座席に二人揃って乗り込む。そして、僕ら二人（＋一人）が乗り込んだのを確認すると、車は再び動き出した。

平日の昼間なので、道路もほとんど混んでいないこともあり、車はすぐに街中を抜け郊外へと至る。

「はあ、はあ・・・」

「連絡は我々の方にも回っています。」

今回の相手は学生連盟側でも余程手に余る存在なのでしょう。」

息を整えつつ、車の中で八枝さんからどこに向かっているのか、またその情報がどこから来たものなのかの説明を受ける。

「・・・はあ、あ、あと、どれぐらいで着けますか・・・？」

「・・・恐らく、この調子で飛ばせば凡そ10分程で現場に着けるかと・・・。」

「10分・・・。」

予想以上に遅い。

走って向かうより断然早いのは分かっているが、それでも、遅い。それだけあったらもうとつくに戦闘は終わってしまったていることだろう。

学生連盟側から僕らに連絡があったのが大体20分前。

単純計算で連絡があつてから、僕らが現場に到着するまで凡そ30分。

そうそうあの二人が窮地に立たされることはないと思うが・・・今回ばかりは分からない。

冬琉さん、秋希さん、無事でいてください！！

・
・
・
・
・
20分程前、

『2年 組、夏目智春、アニア・フォルチュナ・ソメシユル・ミク・クラウゼンブルヒ、2年 組、嵩月奏、至急生徒会室に来なさい。繰り返し。』

2年 組、夏目智春、アニア・フォルチュナ・ソメシユル・ミク・クラウゼンブルヒ、2年 組、嵩月奏、至急生徒会室に来なさい。

以上』

という校内放送が午後の授業が始まったばかりの学校に流れた。

クラスメイトや授業担当の教員の疑惑の視線を受けつつも、僕とアニアは授業中の教室を抜け、途中で奏と合流し生徒会室に向かった。その道中、呼び出される理由が3人とも全く分からなかったため、それぞれに勝手な推測を言い合っていたのだが、結局納得できる理由は3人とも持ち合せていなかった。

僕らの通っている中学は学生連盟に所属していなかったはず。その割には裏の関係者が多いが、だし、僕ら3人の内誰も生徒会には所属していない。

それどころか、3人揃って極力生徒会に関わり合いの無いように学生生活を送ってきたはず。

なんせ、今の生徒会長はあの佐伯兄なのだ。

虎兇もないのに虎穴に入ろうとするほど僕らは馬鹿ではない。

なのに、前置きもなく、突然授業中に呼び出された。

学生生活で呼び出される程の問題も特に起こした記憶はないし……

・
そうになると、否が応でも裏の事件のことで何かあったのではないか
と思ってしまう。

・
前日にあんな事件があったばかりだし、攫われた美呂ちゃんはその学校の生徒なのだから、その事が関係しているのかとも思ったが、

まあ、行ってみるしかないよな

あくまで推測でしかないのだし、ああも大々的に呼び出されたのでは無視するわけにもいかない。

それに、幸いにも今は授業中なのだから佐伯兄は生徒会室にはいないはず・・・いや、いないと信じたい。

「・・・はあ・・・」

重い溜息を吐きながら階段を昇り、最上階にある生徒会室の前に立つ。

奏とアニアに確認の視線を送ると、

コク

コク

二人揃って真剣な面持ちで頭を縦に振り、同意の意を示してくれた。そんな二人に黙って頷き返し、

コンコン

生徒会室の扉を叩く。

「どつぞ」

予想していた佐伯兄の声ではなく、若い女性の　普段から聞き覚えのある　声が返ってきたが、特別不思議な事でもないので、

「失礼します」

一言言ってから扉を開けると、

「ああ、夏目くんやつと来てくれた!!」

「ニアちゃんと、嵩月さんも!!」

「え……露崎?」

今日は学校に来ていなかったはずの露崎が、今にも泣きそうな表情で僕らに近寄ってきた。

生徒会室には彼女以外誰もいない。

「あのね、あのね、冬琉さんが施設を襲撃して、それで捕まえたは良いんだけど、襲われちゃって、雪原さんが助けに向かおうと思っただけど動けなくて、それで八條さんが消えちゃって、それでそのあのね……」

「分かったから、一旦落ち着け波乃」

僕らに何か伝えないといけないことがあったのだろうが、あまりにも露崎が焦り過ぎて、僕たちに伝えたいことが全く伝わってこない。彼女は彼女なりに必死なのだろうが、肝心の内容が伝わってこないのでは本末転倒だ。

「ニアがそんな彼女を宥めるが、

「ねえ、大変なんだよニアちゃん。

冬琉さんが、八條さんが!!」

むしろ対象がアニアに換わったことで露崎の焦りはより激しいものになった。

それでもその分、伝えないといけないことが要約されたのか、支離滅裂だった単語が二つに絞られ、彼女の口から漏れ出した。当然、そんな言葉を天才少女であるアニアが聞き逃すはずもない。

「・・・冬琉と、和斉がどうかしたのか・・・？」

即座に聞き返す。

聞き返されたことで露崎も多少だが落ち着き、

「冬琉さんが使い魔トウターに襲われてるんだよ」

「・・・それが、そこまで焦ることなのか・・・？」

アニアの言葉は非情なものに聞こえるかもしれないが、冬琉さんの実力を知っている者としては、そこまで焦ることではない。

むしろ、彼女に襲いかかったその使い魔トウターの身柄を心配する人の方が多いだろう。

だが、

「違うの！..！」

露崎が言いたいことはそういうことではなかったらしい。

「なら、どういうことだ・・・？」

アニアが若干不思議そうな顔で露崎に聞き返す。

最近関わり始めたばかりだが、露崎だって冬琉さんの実力は知っているはずなのだが・・・

「冬琉さん、昨日の夜からずっと寝ないでGDとして仕事をしてるから・・・」

今の冬琉さんの体調だと殺られちゃうかもしれない!」

「な!?!」

露崎の言葉に愕然となる僕ら。

「まさか冬琉さん、昨日、病院から出ていってそのまま・・・!?!」

何やってるんだあの人は!!

八條さんがあんなことになって焦っているんだろ?ということとは分かるけれど、それで自分が死んでしまっただけでは身も蓋もないじゃないか・・・!!

つて、「八條」さん・・・!?!?

「露崎、八條さんはどうしたんだ?」

冬琉さんという喫緊の問題があるというのに、露崎はもう一人の人物の名前を挙げた。

今彼は病院のベッドの上で寝ているはずなのだから、ここで問題になる筈がないのに・・・!

「八條さんも、病院のベッドの上から消えちゃって・・・」

絶対安静で、体中大怪我だらけで動けないはずなのに」

「はあ!?!」

八條さんまで!?!?

ああ、もう、揃いも揃って!!

普段から僕たちに体調管理云々だとか、色々言ってる人たちが実際に事が起きたらそれを真っ先に破るってどうなんだよ!?

そんな憤りを覚えている僕を横目に、アニアが冷静に露崎に質問を続ける。

「それで、私たちを呼んだということはGD側は何か用事があるのだろう……?」

「あ、うん、そうなのニアちゃん。」

学生連盟の盟主さん、というより雪原さんからの依頼なんだけど、ニアちゃんは私と一緒に八條さんの搜索。

夏目さんと嵩月さんは冬琉さんの救援に向かって欲しいって。

学生連盟側からも人を割きたいんだけど、今はこれ以上割ける人員がなくて……

報酬が必要なら支払う用意はこっちにもあるから」

凄く申し訳なさそうに露崎が言ってくるが、こちらとしては渡りに船だ。

学校で授業を受けているだけなんて、僕にはこれ以上できそうになかったのだから。

その上で、報酬と言っている。

それなら依頼という形なのだからいざとなったら断れるのだろう。

昨日の夜雪原さんが言っていた、法王庁への根回しの代償という形ではまだない、というのも気になるところだけど……
考えていても仕方ない。

「僕は良いよ。」

「奏は……?」

「私も、大丈夫、です」

「ふん、私も良いだろう」

「ありがとう!!」

取り合えず3人揃って了承の意を示し、僕と奏はすぐさま露崎から必要な情報を聞き出す。

「冬琉さんが襲われた場所と、相手の特徴は・・・？」

本来なら報酬のことも先に決めておくべきなのだろうが、今は少しでも時間が惜しい。

全く見ず知らずの相手ならともかく、助ける対象が自分の友人なのだから、そんなことは後回しだ。

「えっと、ちょっと待って!!」

露崎が近くに置いてあった自分の鞆から数枚のメモ用紙を引っ張り出し、

「場所は、街の郊外にある廃工場跡近くの道路で、相手は3本脚の巨大鳥」

「え・・・？」

露崎の言葉に奏が愕然とした表情になる。

それはニアも同じだったが、今はこんな所で時間を取っている場合じゃない。

片や雄型悪魔が自身の力を使い創り上げた破壊の力、影が形取った
2本脚の魔精霊^{サブバ・ジン}。

本来、使い魔^{ドクター}と魔精霊^{サブバ・ジン}では圧倒的に前者の方が強い。

勿論、四名家の雄型悪魔が創り出す魔精霊^{サブバ・ジン}とそんじょそこらの下級の雌型悪魔が呼び出す使い魔^{ドクター}とは、力関係が逆転することはあるが、今私の目の前で争っているのは同じ一族出身、いや、兄妹同士の力がぶつかり合っているはずだからその理屈は当てはまらないはずだ。

なのに、

「嘘……」

目の前で繰り広げられる戦いは明らかに魔精霊^{サブバ・ジン}の方が優位に事を進めていた。

使い魔^{ドクター}の方が私と幾らか戦った後だから消耗している、という訳ではない。

和斉が？^{クロウ}鳥と呼んだ影の鳥が3本脚の鳥と衝突する度、相手の身体は何か巨大な刃物で斬られたかのような切傷を負っていく。

ただ翼と翼がぶつかり合っただけであんなことが起きるわけがない。多分、いや、ほぼ確実にあの魔精霊^{サブバ・ジン}は体のほぼ全てが刃物のような形状になっているのだろう。

そんな相手と自身がやり合うことになった時のことを考えただけでもゾツとする。

その事だけが理由という訳ではないが、何にせよ魔精霊^{サブバ・ジン}の方が優位なのは事実だ。

現に、今も相手の翼を切り裂き、深い傷を負わせている。
そんな巨大鳥同士の戦闘を余所に、

「お前は馬鹿か!!」

なんで反撃せずにされるがままになってやがる!？」

私は和斉から説教を受けていた。

・・・何、この状況・・・？

私に説教をしている和斉は左腕と右足をギブスで固められ、体中包帯やガーゼで覆われており、どう見ても、絶対安静の怪我人の姿だ。間違ってもこんな戦場に出てくる姿ではない。

「普段、あれだけ俺たちに散々言ってるくせして、いざ自分の番になったらそれか・・・」

ふざけるのも大概にしとけよ、なあ聞いてんのか!？」

強い調子で、和斉が言ってくるけど、私には彼が何を言っているのか全くと言っていい程分からなかった。

どうして、なんでここに貴方がいるの・・・!？」

ただその言葉だけが頭の中を回り続け、気付けば、

「・・・どう、して・・・？」

「ああ!？」

口から言葉が漏れ出してしまった。

そして、一旦漏れ出してしまった言葉は止まらない。

「どうして、ここにいるのよ!？」

貴方が動けないから、私が代わりに頑張らなきゃいけないと思っ

てたのに!!

貴方が、安心して怪我を治療できるように動こうとしているのに、なのに、なのに、どうして……!!?」

『……………』

こんな時に限って秋希ちゃんは喋りもせず、ただ黙って私の傍で浮いている。

そんな姿が……!!

「だれがそんなこと頼んだ!？」

私の言い分など知ったことかと和斉は強い調子で言ってくるが、

「頼まれてないわよ!!」

でも、でも、それでもしないと貴方はこうして動き出して、また傷が広がって!!」

そうして、取り返しのつかない傷を負うんだ。

それが嫌だったから、彼ならやりかねないと思ったから自分は出来るだけ彼に負担をかけないようにと、必死に動いてたのに……

私の気持ちなんて思いっきり踏みにじって、和斉は……!!

彼の顔を見てられなくて、俯いてしまう。

「……馬鹿……!!」

結局言葉がそれ以上出てこなかった。

漏れ出たのは、ただ一言、いつも通りの言葉。

ああ、嫌われた、と思った。

向こうは自分のことを想って言うてくれたのに、それを全部私が無視して、私の理由だけを押し付けた。

それでも、和斉が私を助けてくれるなんて、もう・・・思えないけど、

「そうか・・・やっぱりお前は馬鹿だな」

帰ってきたのは普段の私と彼の関係からは予想も出来なかった優しい言葉。

「・・・え・・・？」

咄嗟に俯いていた顔を上げ、目の前の青年の顔を見る。

彼の顔は言葉と同じように優しくして、

「本当に俺のことが心配なら、俺が目覚めるまで傍にいろ。」

傍にいて、それで俺が動き出そうとしたなら必死で止める」

後ろで繰り広げられている大決戦など全く耳に入らない。

「俺がいつ、お前を拒んだ？」

「それは・・・」

ない

私の記憶が確かなら和斉は嫌がりつつも、私のことを明確に拒んだことは一度もなかった。

「今回は仕方ないが、次からは・・まあ、次なんてない方が良いが・
お前は必ず一番に俺の傍にいる。」

「・・・そうじゃないと、またこうして俺が動き出すぜ」

「・・・和斉、それって・・・

良いの？」

それがどんな意味を持つてる言葉が分かって言ってるの？」

本気になるわよ？」

それでも、本当に、

「・・・良いの？」

自分でも自分の声とは思えなかった不安げで寂しげな私の問いに、

「当たり前だろ。」

お前以外に誰がいるっていうんだ？」

さも当然の様にそんな返事を返す、私の想い人。

そんな彼からの返答に、啞然としている私を余所に、

「さて、うちの馬鹿な妹が呼んだ奴はしっかりと兄が躡けてやらな
いとない！」

三本脚の巨怪鳥に再び挑んでいった。

49回 雨降って地固まる？（後書き）

明日で一週年だけど・・・投稿できるかまだ分かりません。
出来るだけ急いで書いていますが、ひよっとしたら少々遅れるかも
しれません。

一周年記念　　ミサオの願い（前書き）

一周年記念のくせして、一月もお待たせしてすみませんでした！！リアルが忙しかったのもありますが、それに加えて今迄にないほどのスランプ。

ネタも思いつかないし、書いても碌な文章が書けない始末。

そんな状態で一周年記念など書きたくなかったのですが、読者の皆様をこれ以上お待たせするわけにもいかないので、気合いで書きました。

その為、折角の一周年記念なのになかなかしなくなってる気がします。

重ね重ねすみませんでした。

一周年記念 ミサオの願い

“夢、夢を見ている。”

夢の中の私は自分でも信じられないほど楽しそうで、隣にいる少年の腕を持って嬉しそうに少年を引っ張って回っている。

少年も苦笑しながらも、特に嫌がることはなく一見したところ、諦めた様子で少女に付き合っている。

そんな二人の姿は傍から見れば、付き合っている年頃のカップルに見える。

押しの強い少女と気の弱い少年。

周囲がどう思っているのかわからないけど、少なくとも当人たちはそのつもりだった。

普段から少年と一緒にいる黒髪の少女も、少年の友人である男子生徒も、少年と少女の先輩の眼鏡の少女も、誰も彼らの間にはいない。居ても、周りで微笑ましく二人の様子を見ている。

“ああ、きつとこんなのが私の理想なんだ”

普段から少年に触れることができて、それでいて周囲には何も問題がなく 勿論日常の騒々しいイベントなら大歓迎、皆が私たちを認めてくれる世界。

……だけど、それはきつと叶わないこと。

諦めるつもりはないけど、無理に叶えようと、今の私は思わない。

あの二人の間を邪魔してまで、少年の心を自分に向けさせることな

んてきつと私には出来ない。
だけど、

・・・本当に？

自分の心の奥からそんな声が聞こえてくる。
今迄必死に隠してきた物が溢れだそうとする。
私だって、自分の気持ちを否定する訳じゃない。
けど、これは表には出したらいけない！！
だって、出したら私と二人の関係が・・・！！

なんで、我慢するの・・・？

だけど、今の私の気持ちは私だけのものじゃなくて、あの子・・・
いや、あの人のものまであるから・・・
夢の中だというのに、意識が落ちる。

夢から覚める時の様な上昇していくような感覚ではなく、深い沼に
足を捕られ、抜け出ることのできないような感覚。

・・・今度こそ、幸せ・・・

?
?
?
?

「う、うん」

「操緒！？」

早く起きなさい!!」

「むう〜・・・あと、50分・・・」

「何馬鹿なこと言ってるの、サッサと起きなさい!!
もう智春くん、来てるわよ」

「え、トモが!?!」

誰だか分からない、けど、どこか懐かしい声を聞きながら“被っていた”布団を“手で”撥ね退け、急いでベッドから降りる。

つて、え・・・?

「うそ・・・」

布団に触れる・・・?

私、足で立ってる・・・?

「な、なんで、なんで、どうして・・・?」

ペタペタと、両手を動かし自身の体中を弄り、近くの壁に手を触れてみたり・・・

そうして、自身の腕が壁をすり抜けないと分かると今度は、

むぎゅ〜

自身の頬に手をやり思いつきり抓り上げる。

「いつ!?!」

慌てて指を離す。

い、痛い・・・

手加減なんて全くする気がなかったから力一杯抓ってしまった。

うっ・・・なんで私がこんな目に・・・？

まあ、自分でやったからなんだけど・・・

それが分かってても痛いものは痛いのだ。

赤く染まった頬を先程抓り上げた手で押さえ、その場に蹲る私。
そんな私を、

「・・・何してるの、操緒？」

すごく不思議そうな顔で見ている母親の姿が・・・って、

「お、お母さん!？」

「何よ、急に。」

そんな慌てた様子で・・・」

蹲っていた状態からすぐさま立ち上がり母親に詰め寄るが、詰め寄られている方のお母さんは娘の様子に若干の戸惑いの声を上げていた。

けど、そんな母親の様子なんてその時の私には分からなかった。

ただただ、今目の前に自分の母親がいて、私のことを認識できていて、私に“触れ”ているということが信じられなかった。

そのことに、また改めて気付いて、戸惑って・・・結局、自身の

寝ていたベッドの上に座り込んでしまう。

「・・・大丈夫、操緒？」

そんな私を心配そうに覗き込むお母さん。

ていうか、なんているのよ・・・？

母親のことや自身の身体のことを疑問に思い、頭を悩ませていると、

「ま、大丈夫そうなら良いわ。

それよりちゃっちゃと制服に着替えなさいよ〜

智春くんだからっていつまでも待たせるのは流石にね・・・遅刻
しないにこした事はないんだから」

お母さんはそう言葉を残し、さっさと部屋から出ていった。

「・・・制服・・・？」

・・・着替え・・・？」

母親の言葉に促され、ツイと視線を動かすと壁にはハンガーに掛け
られた中学の制服があった。

その制服に視線をやるのと同時にその上にある時計に目をやると・・・

「や、バツ!!」

時計の長針は8、短針は7と8の間にあった。

つまりは7時40分。

なんで私の身体がこんなことになっているかはさておき、急がない
とマズイ。

普段通りに学校があるんだとしたら・・・このままいけば間違いなく遅刻だ！！

? ? ? ? ?

ここしばらく忘れていた生身での着替えに四苦八苦しながらも特に胸部につける下着とか・・・ええそうですよ！！私は奏ちゃんみたく大きくないから今迄まともに付けたことなんてありませんでしたよ！！ なんとか着替え終わり、これまた懐かしい髪をリボンで結うという作業を行い、鞆を持って部屋から飛び出す。部屋から出て左手にある階段を慎重に下り、洗面所で顔を洗って歯を磨く。
忘れていたかと思っていたけれど、存外覚えていたものだ。
玄関に向かう途中でリビングに顔を出す。

「お父さん、お母さん、おはよう」

「ああ、おはよう、操緒」

以前と変わらない、私の知っている様子で返事を返してくれるお父さん。

「おはよう、朝ごはんはいいの？」

さっきまでの私の奇行を一言も聞かず、朝食のことを訊ねてくるお母さん。

「時間も無いから今日はいらない」

「あら、そう」

特別不思議にも思わず、お母さんは弁当を差し出してくれる。私は弁当を受け取り、鞆に詰め込みながら玄関へ向かう。

「じゃあ、行ってきまーす！ー！」

「ああ、いってらっしゃい」

「はい、いってらっしゃい」

リビングを抜け、玄関で靴を履き、扉を開けると、

ガンツ！！

「だっ！？」

「え？」

勢い良く何かにぶつかつた。

咄嗟に扉を閉めようとすると、時既に遅し。

今度はそっつと扉をゆっくり開き、玄関前の様子を伺う。
と、

「っ！ー！ー！」

「……何やってるの、トモ……？」

玄関前で腰を押さえ、蹲っている幼馴染の姿が・・・
多分、玄関扉の前で待っていてくれた所に私が扉を思いつきり開き、
激突させたのだろう。

抑えてるのは、丁度出っ張っている取っ手の付いていた高さの腰の
辺りだし・・・

うん、私の身体がおかしいことになっていても、この少年の不幸体
質っぷりは相変わらずの通常運行の様でなんとなく安心する。

「何やってるの、じゃないって・・・お前がいきなりドアを開ける
から・・・」

よろよろと腰を押さえながら力なく立ち上がるその姿は、老人の姿
に見えなくもない。

そんな彼の姿に吹き出しそうになるが、流石に自分が悪いと分かっ
ているので我慢する。

「あゝ、ごめんごめん。

って、そうじゃなくて、トモ時間は!?!」

さっきリビングで時計を見た時は既に50分ぐらいだったけど・・・

「多分50分ぐらいじゃないか？」

僕が家出てから15分ぐらいだし・・・」

「じゃあ呑気にこんな所において良いわけないじゃん!!」

急ぐよ、トモ!!」

未だに腰を押さえたままのトモの手を握り、引っ張り走り出す。
うわゝ、体が風をきって走るこの感覚・・・やっぱり良いなあゝ

つい走る勢いにも力が入る。

「・・・ちよ、ちよっと待てよ、操緒！！

どうしたんだよ、いきなり!？」

後ろでトモが何か叫んでいるけど、あまり気にならない。

今迄1年程トモの後を憑いて回っていただけだったけど、うん、やっぱり憑いて回るより自分の足でトモを連れ回してる方が私の性に合ってる。

今はただ、遅れないことを理由に走り続けよう。

・・・その後すぐに赤信号で止まることになったのはかなり虚しかったけれど・・・

?
?
?
?

「はあ、はあ、はあ・・・せえ、な、なんだってこんな目に・・・」

なんとかギリギリ時間前に学校に到着した私たちは階段を上がり、教室に到着した。

到着すると同時にトモは自身の机に崩れ落ち、荒い息を吐き始めた。

「・・・はあ、はあ、はあ、え？」

そこまで飛ばしてないでしょ・・・？」

少なくとも、今迄のロードワークはこれより何倍もきついものだったのだから……
クラスメイトにさりげなく聞いた自身の席に鞆を置いて腰掛けながら、トモにそう声をかける。

「……いや、部活の練習でも、ここまで飛ばさ、ない、から」
「……へ……?」

部活?

トモは部活なんてやってなかったはずなんだけど……どういうこと?

私が疑問に思い、頭を悩ませている横で、

「トモ、大丈夫?」

「あ、おはよう、杏。
なんとかね……」

杏ちゃんがトモに話しかけていた。

トモの予想外の疲労困憊ぶりに驚いているようだけど、そこまで重要視せず、

「操緒ちゃんもおはよう」

「……」

「操緒ちゃん……?」

「ん？」

「ああ、おはよう、杏ちゃん」

近くにいた私にも挨拶してきた。

最初は私が呼ばれているとは分からず反応できなかったけど、考えてみれば幽霊の方が普通じゃないんだから、こうして肉体があるなら声を掛けられて当然か……
改めて慣れって怖いなーと思う。

「……ねえ、トモ……操緒ちゃんどうしちゃったの？」

が、杏ちゃんは返事を返した私を不思議に思ったのか、何かをトモに問いかけている。

一応私には聞こえないようにしているつもりなのだろうけど、小声とはいえ流石に目の前で話し始めたら分かるって。

まあ、私がおかしいと思うのは事実だから、今回は気付かないふりぐらいしてあげるけど……

「いや、僕にも、よく、分からない……」

乱れている息を整えながらヒソヒソと話を続けるトモと杏ちゃん。

以前までの私がどんな生活をしていたのか知らないけれど、そんなに今の私はおかしいのだろうか……？

私も長い　　と言つても一年になるかならないかぐらい　　幽霊生活の間に一般常識が抜け落ちてしまったのだろうか……？
うー……無いとも言えないのが怖いなー

若干の不安を覚えながらもトモと杏ちゃんの会話に耳を傾ける。

「……いつもだったら散々トモを弄ってるのに……それをしないで考え事なんて!!」

「いや、今日はひよっとしたら朝のランニングがそれなのかもしれない……」

「ランニング……？」

何それ？」

「……操緒が遅刻寸前に家から飛び出してきて、そのまま学校まで全速力……」

「うわー……お疲れ様。」

けど、それと学校での操緒ちゃんとはまた別でしょ？

見た感じ、操緒ちゃんは全然疲れてないし……」

「……そうなんだよ……それがまた不気味でさ……」

む、いくら以前の私とは違うとはいえ、流石にそこまで怖がられる筋合いはないと思うけど……

そんな風にやや不条理なものに怒りを覚えつつも、

……この私って、そんなだったの……？

トモと杏ちゃんの会話からある程度判明した“ここ”での私の性格や態度については頭を抱えずにはいられない。

“ここ”の私はまるで、小学生の時の私そのまま体だけ大きくなっただけの様で、同じ水無神操緒としてはそれなりに思うところがある。

お父さんとお母さんがいるから、多分、この世界では私もトモもあの飛行機事故に遭っていないのだろうけれど……それにしたってここまで変わるものだろうか？

・・・まあ、私の場合トモが実は未来から来ていたり、奏ちゃんが既にトモの彼女だったりと色々あったから精神的な成長は上だとは思うけど・・・って、そうだ!!

「トモ！」

ガタツ、と音をたてながら椅子から立ち上がり、トモに声をかける。

「な、なんだよいきなり・・・？」

突然の私の行動に驚いたのか、若干ビクついた様子でトモが返事を返してくる。

隣では杏ちゃんも驚いた表情で私の方に視線を向けている。

が、今重要なのは二人のそんな反応ではなく・・・

「トモ、奏ちゃんは!？」

彼女の所在だ。

嵩月奏

私が今迄過してきた世界での中学に入ってから出来た初めての友達で、トモの彼女で契約悪魔。
当然、この学校にも通っているはずだ!!
だけど、

「・・・は？」

私の言葉を聞いたトモから返ってきたのは予想外の言葉。
心底不思議そうな顔で私の顔を眺めている。

「だ、か、ら、奏ちゃんだよ奏ちゃん、嵩月奏！」

この時の私はトモがふざけているんだと思ってた。

だって、そうでしょう。

あれだけ普段から一緒にいた二人が。

これでもかと言うほど私の前でイチャついてた二人が。
相手のことを知らないなんて、考えられるはずがない！！

あの二人の絆がないのなら、一体何が本当の絆なのだ！？

そう、どこか無根拠に、ただ自分を納得させる為にそう思っていた。
けれど、私に帰ってきた言葉は、

「・・・いや、誰？」

トモの呆れたような表情から放たれた一言だった・・・

? ? ? ? ?

若干呆然自失となりながらも、朝礼が始まったので自身の席に戻り、
担任からの連絡を聞く。

そうして、嫌な事を思い出してしまった。

そうだ、今私が座っている席は彼女 嵩月奏が座っている席じゃないか・・・

私の記憶が確かなら、今の教室内の席順は私が過してきた中学生生活と変わらない。

違いがあるのは、私か彼女かという違いだけ。

嵩月奏という存在が抜け落ち、水無神操緒という存在がそこに居座っているかのようにだった。

けれど、クラスが違うだけかもしれない。

そう思った私は授業と授業の合間、それに昼休みや放課後を使って徹底的に校内を探し回った。

学年が違うかもしれないと思えば、上級生のクラスにも足を伸ばした。

幸いにも学校内で私の顔は（良い意味で）広い方だったので人探しは思ったよりも容易だった。

けれど、

「……いない……」

嵩月奏という人物の姿は学校内には全く見当たらない。

「う、そ……」

その事にはつきりと気付いてしまった。

別に気にすることじゃないかもしれない。

奏ちゃんとトモによれば、以前の世界では中学は違ってても、高校は一緒だったのだし……
だけど、やっぱり……

そんな風に結構真面目に気落ちしていると、

「ああ、いたいた。

何やってるんだよ操緒、こんな時間まで……?」

「え?」

突然声をかけられた。

声に反応して、俯いていた顔を机から上げると、

「トモ……」

今迄一度も見なかったことのない格好をしたトモが夕日に照らされ、目の前に立っていた。

「……なにそれ?」

「何って、お前も普段から見てるだろ?」

陸上部のユニフォームだよ」

「……そう」

確かに物珍しいものではあるけれど、今はそんなトモの格好以上に気になることがある。

だから、と言う訳ではないけれど、視線を目の前にいるトモから逸らし、校庭へと向ける。

視線を向けた先には、夕日に照らされ朱に染まった校庭で部活動に勤しむ生徒たちの姿。

それは、どこまでも平和な日常で、それでいて活気に満ちた世界。
悪魔や機巧魔神なんてまるで関係のない世界。

……本当に……なんで私はこんな所にいるのか。

十中八九、あの人が原因なのだろうけれど・・・
目が覚めて、今日一日を過ごすようになる前に見ていた夢。
いや、あれは本当に夢だったのだろうか・・・？

「み・・・お・・・」

夢にしては妙にリアルで、だけど、現実にしては臆気で・・・
ひよっとしたら、私が今迄過してきた世界の方が偽物なんじゃない
かと思ってしまう。
けど、そんな筈がない。
あれだけ必死に未来を追いかけていたトモが、奏ちゃんが、偽物の
わけがない！！

「・・・さお・・・」

じゃあ結局この世界は何・・・？
私は一体・・・誰・・・？

「操緒！！」

「ふえ！？」

ガタン

突然大きな声をかけられ、慌てて椅子から立ち上がる私。
そんな私の目の前には、呆れた様子のトモが・・・

「どうしたんだよ、操緒。」

今日のお前、本当におかしいぞ？」

「そ、そうかな・・・？」

珍しく、トモからジト目での視線を向けられる。

「・・・・・・・・」

「う」

別に私自身に後ろめたいことがある訳でもないのに、なんとなく私
が悪いことをしてる気になってしまう。

「何か悩み事があるなら聞くぞ？」

トモは、ドカツ、と私の前の席に座り、しっかりと話を聞く体勢に
なる。

こうなると、私がある程度何か話さないと動かないだろう。
だけど、今更目の前のトモに相談して何になるというのか。

目の前にいる幼馴染は本当のことを話したとしても、あからさまな
否定はしてこないと思う。

だけれども、やっぱりこの夏目智春には話すべきではない。
危険のない日常を謳歌する彼とは無縁の話だ。

「・・・・・・・・」

10分ぐらいだろうか、暫く私が沈黙を続けていると、

「・・・・・・・・分かった。」

お前が話さないならそれも良いさ。

代わり・・・・・・・・ってわけじゃないけど、僕の話聞いてくれないか・

「・・・？」

「・・・うん」

「僕はさ、ずっと一人の人物に憧れてたんだ。

その人はいつも縮こまって何も出来ない僕を引っ張ってくれた。

僕が失敗しても、笑って前を向かせてくれた。

僕が成功したら、一緒に喜んでくれた。

気付けば憧れてただけの筈だったのに、いつの間にか自分もその人みたいになろうと努力していた。

そうして、憧れが恋慕へと変わっていった」

そこまで言って、私のことを正面から見据えるトモ。

それに、ただボンヤリと視線を向ける私。

唐突に始まったトモの話。

それは、全く予想外のもので、だけど、

「操緒」

ある意味この世界では、

「好きです。

僕と付き合ってください」

必然の話だった。

私に向けられたトモの視線は真剣そのもの。

間違ってもふざけて返事を返していいものではない。ただ、

「・・・そういうこと、か・・・」

私の口から洩れたのは、人を嘲るかの様な口調の言葉。何故なら、私には彼が、目の前にいる少年がふざけているようにしか見えなかったのだから。

当然、目の前の幼馴染は私の突然の変貌に戸惑っている。が、私がここにいる理由も、なんでこの少年から告白されてるかも、奏ちゃんが学校にいないのかも、今の彼の一言で全部分かった。だから、今は彼の相手をしている場合ではない。

それでも、すっかり返事だけは返してこの場を立ち去るとしようか。

「ごめん、トモ」

「え？」

まさか、振られると思っていなかったのだろうか、私からの返事にトモは啞然とした表情になる。

その顔に若干の胸の痛みを覚えながらも、言葉を続ける。

「その言葉はちゃんと、“この世界”の私に言ってあげて。

私もトモのことは好きだし、付き合いたいけど、それは“この世界”のトモじゃなくて“私のいる世界”のトモだから」

それだけ言っつて、教室を飛び出し、目的地に向かって走り出す。

教室に取り残されたトモのことなど、今はもう全く気にならない。

悪いけど、私は人の夢に付き合うほど酔狂な人間ではないのだ。

例えそれが、自分と同じ人間であろうと関係ない。

自分が進む道は自分で決める！！

目指すは、鳴桜邸

?
?
?
?
?

学校を抜け、街中を走り抜け、一度も来たことがないはずなのに、その屋敷に辿り着く。
既に日は沈み、夜の住宅街に浮かび上がるその屋敷は、遠目から見れば誰がどう見ても幽霊屋敷だ。

「はあ、はあ……」

全力で走りぬけてきた所為で乱れた息を整え、鉄郷土で出来た門扉を押し開ける。
その際、金属が擦れる音が周囲の住宅街に響き渡るが、気にしていい暇はない。
門扉の隙間から体を滑り込ませ、屋敷の庭へ。
目指しているのは屋敷の中、ではなく、

「あつた」

庭に立っている大きな桜の木。
何か確信があつた訳じゃない。
ただ、なんとなく幽霊と言ったら桜の木じゃないかと思ったのだ。
そして、

『……ナンデ……』

「やっぱり」

いた。

私と殆ど同じ背格好で来ている服も同じく中学のもの、だけど違う。宙に浮いていてどこか薄らと透けている。

私、いや、以前の世界の私。

「もう、何勝手なことしてくれてんのよ!」

開口一番、口から飛び出たのは文句の言葉。

『……………』

そう、私が今日一日何故か肉体を持って学校を一日過ごしていたのも、奏ちゃんが中学にいなかったのも、トモから告白されたのも、全部、目の前のこの人の所為。

『……………ダツテ……………アナタハ、ウラヤマシクナカッタノ……………?』

きつと、目の前の彼女はずっとトモを探し続けてきたから、トモのことしか考えられなくなってるんだと思う。

なのに、トモが選んだのは結局奏ちゃん。

それが残念で、せめて私には幸せになってもらおうとでも考えたのだから、こんな夢を見せてるんだ。

けどね、

「何言ってるの、羨ましかつたに決まってるでしょ!」

私があの人との関係を全くなんとも思っていないと思ったのなら大間違いだ。

『エ・・・？』

「人が見てるのに気にせずイチャつき出すわ、普段から互いが互いのことを一番分かっているかのような行動をするわ、さりげなく奏ちやんが私のことを気遣ってきたりするわ・・・！！
羨ましいし、妬ましいと思ったらありやしない！！」

『・・・・・・・・』

目の前のワタシが呆気に取られているが、知ったことか！！
あー、思い出すだけでムカついてきたあー
けど、それ以上に、やっぱり私はこの世界よりもあの人二人がいる世界の方が好きなのだと分かる。

「けどね、私はもうあの人二人の関係は認めてるの。
そりゃあ、隙あらば私がトモの彼女になりたいとは思っけどさ、
それで奏ちやんが消えるようなことになったら嫌でしょ？」

『ソレハ・・・ソウ・・・ダケド・・・』

目の前のワタシも分かっているようだが、分かっているようだが、
どうにも納得できないらしい。

この辺りになると、幽霊の悔恨の念みたいなものかな・・・？
恋愛絡みで自殺した女性の怨霊って凄いらしい・・・
だけど、その辺りを声にのせるようなことはせず、

「じゃあさ・・・私があつちに戻ったらすぐにトモに告白するよ・・・それで良い？」

そう、提案する。

『・・・エ・・・デ、デモソレハ・・・』

私の気持ちを想ってくれたのか、ワタシは否定的な態度を取るが、

「良いの、私もこんな気持ちのままあの二人と付き合っていきたいとは思わないからね」

それをバツサリと切って捨てる。

私だって、振られること前提の告白なんてしたいとは思わない。

告白するからには、成功したい。ただ、これから私たちがしようとしているのは普通の恋愛とは違う。

「ここで区切らないと、私たちはきつと先に進めないと思うんだ」
だから、

「それで、納得してくれない？」

上手くいくとは思えない。

ほぼ間違いなく振られるであろうことが分かっている告白。それでも、

『・・・ウン・・・イイヨ』

彼女は笑って許してくれた。

そんな彼女に心の中で何度も謝りながら、

「じゃあ、戻ろっか」

『ウン』

私は夢から醒めることにしました。

・
・
・

その後の結果は御存じの通り、見事玉砕。

あの時は大声で泣いたりしたけど、それでも確かに一つの区切りには出来た。

これで、あの人も納得してくれると良いな・・・

一周年記念 ミサオの願い（後書き）

リクは【恋愛】で【智春×操緒】だったはずですが、気付けばシリ
アスト直球で、操緒 智春みたいな感じになってしまいました。
改めて自身の不出来さを感じました。

期待して下さっていた皆様、お詫びの仕様が無いぐらい、誠に申
し訳ありません。

50回 決意と造反(前書き)

あー、大学の試験がめんどくさい・・・

レポート提出の締切日と試験の日程が重なると、かなり地獄をみます。

そんな状態なのに、先輩たちに誘われてAM:2:00ぐらいまでカラオケに行っていた私はきつと大馬鹿者に違いないw

まあ、昼からのテストで良かったと思うけど・・・

50回 決意と造反

Side: Toru Kitsutaka

「やれ、？^{クロウ}鳥」

「グアアアアアーーーーッ！！」

今までも十分鋭い動きで敵の使い魔トウターに攻撃を仕掛けていた和斉の魔精霊バジンだが、和斉が声をかけると更に動きが機敏になった。

飛翔する速度は目に見えて上がり、翼を振るう勢いも今迄の力が嘘だったのではないかと思うぐらい鋭く、強い。

僅かに魔精霊側サブ・ジンが上回っていた現状は大きく傾き、場の流れは完全に和斉の方へと優勢なものになった。

そのことに安堵しつつも、私は体に入力必死に立ち上がるうとしていた。

『……大丈夫か、冬琉？』

「まあ……なんとか、ね」

目立った外傷はないけれど、私自身が戦えるかと聞かれれば否、だ。既に冬櫻を振るうことすら出来そうにない……

それでも、ただ見ていることなど私には出来ない。

さっき彼が私に言ってくれた言葉を信じてても良いのなら、私は彼の傍に一番にいないといけない。

……ううん、違う。

彼が言つてたから傍にいないといけないんじゃない。

確かに彼が、和斉が言つてくれたからそう思えるのかもしれないけど、それは一つのきっかけに過ぎない。

私が傍にいたいから、一緒にいるんだ！！
だから、

「良い、秋希ちゃん・・・？」

私は“あいつ”を呼ぶことを決める。

彼の隣に立つために。

大怪我を負つた体をおしてこの場にやってきた和斉を助けるために
！！

『無論。』

というか、さっきから催促していたはずだが・・・』

若干呆れながらも同意を示してくれた秋希ちゃんに頷き返し、

「行くわよ・・・」

地面に突き刺したままだった冬櫻を引き抜き、背中の鞘に収めながら一歩、踏み出す。

『ああ、さっさと終わらせて美呂ちゃんを助け出すとしようか』

「そうね」

眼前で、影の鳥と二本脚の鳥が再びぶつかり合う。

そんな魔精霊サブ・ジンと使い魔ドゥームの様子をやや離れた位置で、やや小さめの影の鳥を隣に従えた和斉が見守っている。

そこまで歩いて行き、

「和斉・・・私たちも、手伝うわ」

一声かける。

ちよつとぐらい驚いてくれるかと期待してみたのだけれど、

「・・・ああ、お前たちの好きにすると良い」

期待外れの落ち着いた声が返ってきた。

その事にやや気落ちしながらも、彼が私の 正確には私たち姉妹の ことを良く分かっていてくれることに気付き、無性に嬉しくなる。

『さて、冬琉・・・行くか』

「ええ」

秋希ちゃんが虚空に溶けるように消えていき、彼女の気配を感じ取れなくなる。

が、全く気にならない。

目を閉じてみれば、隣には愛しい人の気配。

普段の荒々しい嵐の様な空気じゃない、どこか優しく、私のことを包みこんで護ってくれるかのような春の風に吹かれる大樹の様な空気。そんな空気の中に冬の残りのような若干の冷たさを感じるが、逆に彼らしいと思い、自然と笑みがこぼれてくる。

ああ、こんな気持ちで戦闘に臨むのなんて初めてだ。

だけど、

「悪くないわね」

目を閉じたまま一言洩らす。

それでも、隣にいる彼の空気は変わらない。

私を急かすでもなく、押し留めるでもなく、ただジッと私のことを待っていてくれる。

それが、また何とも言えない力となり、先程までの自身の弱気が嘘のように、体には活気が満ち溢れていた。

それこそ、今、冬櫻を振るえばなんでも切り落とせそうなぐらいに

つい背中へと伸びる手を慌てて押さえ、

「すう……はあ」

深呼吸。

よし、大丈夫。

行こう。

彼の隣に。

そう、決意を新たに口を開き、一言、

「来なさい、琥珀金」
エレクトラム

機械仕掛けの悪魔の名を呟く。

叫ぶでも、宣言するでもなく、ただ今を変えるために、続けていくために。

私が言葉を洩らすと同時に、私の影の色が変わる。

ただ黒かっただけの影が、全てのモノを呑みこもうとする闇の色、漆黒の虚無の色へと変化する。

そのまま周囲のモノを呑みこもうとする影を引き裂いて現れたのは、

私の隣にいる和斉が琥珀金を見上げながら、どこか感心したかのような声を洩らす。

ああ、そう言えば道場の関係者には今迄見せたことはなかったわね。まあ、そんなに簡単に見せる様な物ではないから別におかしくもない。

「ええ、GDの中でも盟主の側近である【左手】^{シニストラ}が使う機巧魔神^{アスラ・マキーナ}。それが、この琥珀金よ」

やや誇らしげに言っつて、私も目の前で敵の烏を押さえつけている魔神を見上げる。

全身を覆う装甲は、やや黒味を帯びた金色を基調として、赤や白の線が入り、装甲としては若干豪勢だとも思える模様を描いている。

亜鉛華^{スビネル}や尖晶^{アスラ・マキーナ}の様な細身の機巧魔神とは異なり、全体的に横幅が広めだ。

かといつて、太っている様に見えるという訳ではない。

人間の男性で言えば、肩幅が広めで、がっしりと全身に筋肉が付いている様な体型・・・ボディービルダーみたいな体型と言えば分かりやすいだろうか？

そして、右手にはその体型に見合った巨大な斧槍^{ハルバード}。

自身の能力を使って戦う機巧魔神の中では珍しい、武器を持ったタイプ。

・・・まあ、里見の蒼鉛^{ヒスマス}も似たようなものを持っているが、あれとは別だ。

琥珀金^{エレクトラム}の能力はあの槍？（ドリル）の様なものではないのだから。

「怪我の身をおして来て良かったぜ。

こんな珍しい機体が見れたんだからな」

「おう、お疲れさん」

和斉も魔精靈サブバ・ジンの背中に乗りながらこちらまで移動してくる。

「・・・どうやってこんな郊外にまでやって来たのかと思ったら、そういうことね・・・」

普通に歩くことさえ難しい体ではあるが、自身の魔精靈サブバ・ジンに乗ってくるのなら話は別。

多少なりとも体への負担　非在化云々は別問題　も普通の乗り物より減らせる筈だし、何よりどこからでも移動可能である。

便利と言えば便利だが・・・それで傷が悪化したらどうするのよ・・・

よし、今度から和斉の部屋には魔力封じの結界でも張っておこう。

そう、私が一人で決意していると、ふと、疑問が湧き上がってきた。

「ねえ、和斉・・・」

「ん、なんだ？」

「一息ついてるとこ悪いけど、少し気になることがあるの」

「・・・気になること？」

「ええ」

視線を和斉から、捉えてある使い魔ドクターの方へと視線を向ける。すると、そんな私につられてか、和斉も視線をそちらへと。互いに向いている方向を合わせたまま、私は疑問を口にした。

「あの使い魔ドクター、本当に八條・・・美呂ちゃんの呼びだした使い魔ドクターな

のかしら？」

「……どういうことだ？」

未だに影の縄から抜けだそうともがいている三本脚の巨鳥へ疑惑の視線を送りつつ、私は話を続ける。

「いえ……戦闘中もずっと不思議だったんだけど、あの使い魔^{ドクター}、まったく能力らしき能力を使ってこなかったのよ」

「……ああ、言われてみれば、確かにそうか……」

そう、翼や足、それに嘴といった部位を使ってくるだけで、八條の使い魔^{ドクター}特有の能力であるはずの“影操作”を使ってこなかった。ひよつとしたら、主である契約者^{コントラクター}や呼び出した雌型悪魔が近くにいないと能力を使えないのかと思っただが、

「やっぱりおかしいの……？」

「ああ、八條^{ちゅうぢ}の悪魔が呼び出したんなら、“影操作”の能力は使えて当たり前のはずだ。

幼体、あるいははぐれ眷属^{ロスト・チャイルド}ならそう言った可能性がない訳もないんだが、あそこまで成長した姿だと、間違いなく成体だろうからな……」

和斉の言葉により、その考えは否定される。

まだ美呂ちゃんが攫われてからまだ一日と経っていない。

つまりは、契約したとしても一日と経っていないということ。

やつらの狙いが何なのか知らないが、呼び出して一日程度の使い魔^{ドクター}であるのなら、何らかの不調があったとしても別段不思議な事では

ない。

寧ろ、こちらにとっては非常に好都合なのだから全くもって問題ではないが。

仮に、能力を使うな、と命じられていたとしても、（私が劣勢だった時はともかく）こんな状態になってまでそんな命に従っているとは少々考え難いし……

そんな不可思議な状況の中で、ふと、思い出す。

「ひよつとして、この使い魔……」

とある能力を持った一族の雌型悪魔が攫われていたということにもし、その一族の使い魔ドクターが呼び出されているのならば……

そこまで思考を進めた時だった。

その気配に気づいたのは。

「……冬琉」

「ええ」

隣にいる和斉と視線を合わせ、警戒の体勢を強める。

琥珀金エレクトラムには私たちを護るような姿勢を取らせ、和斉の魔精霊ソルバ・ジンは捕ら

えてある使い魔ドクターの周囲を警戒する様に視線を彷徨わせ始める。

使い魔ドクターを敵に奪わせないようにするために上下左右、更には前後を探り、敵に隙を付かれないよう全ての方向に警戒の網を張る。

そのままの状態です分ほど経った頃だろうか、声が聞こえた。

「消える、フォーゼ」

声が聞こえると同時に、捉えていた敵の姿が溶けるように消えていく。その事に驚きながらも、声の聞こえてきた右斜め後方にすぐさま体を向け、

「そこか！」

声を上げながら影で編み上げた弾丸を放つ和斉が、敵もさる者。

弾丸が木々を貫き、彼方へと去っていく風切り音は聞こえても、敵を貫いたと思われる音は聞こえない。

防いだ音や、地面に落ちた音などは聞こえなかったから、全て避けるかいなすかしたのだから・・・

だが、私は一先ずそちらへの対処を和斉に任せ、琥珀金を動かす。動かした先は、先程まで捕らえた使い魔を転がしてあった場所。

私のさつきまでの考えが正しいのなら、きっと・・・

そう思い、琥珀金に斧槍を振り上げさせ、勢い良く目の前の地面に叩きつけようとす。

だが、その直前、

「・・・すみません、冬琉さん・・・兄様」

琥珀金の目の前に一人の少女が現れる。

現れた少女は自身の影を操り、瞬時に自分とその後方にある“何か”を影の中へと沈めていく。

あまりにも突然現れた彼女に呆気に取られ、魔神の動きを止めてしまふ。

その間に、彼女はズブズブと自身の影の中へ消えていくというのに。

「……美呂、ちゃん……?」

ようやく、頭が働いた私が洩らした一言。

その一言に、

「なんだと!?!」

後ろを向いていた和斉が慌てて振り返るが、

「……」

その時にはもう、彼女の姿はどこにもなかった。

その場に残っていたのは、周囲を警戒し続ける影の巨鳥と、斧ハルバードを振り上げたままの体勢で固まったままの琥珀エレクトラム金。

そして、自身の影の中に消えていった少女の兄と、彼女の姿を唯一確認した私だけだった。

・
・
・
・
・

それから2、3分後に夏目くんたちが到着したけれど、時既に遅し。彼らが見たのは、激しい戦闘の残り傷と、この場にいるはずの無い和斉のみ。

敵の姿はどこにも見当たらない。
せめて彼らがもう少し早く来てくれていたら、と願わずにはいられない。

和斉は怪我の事なら心配する必要などない、と夏目くんたちに言っ

ているけれど、そんな訳ない。

敵には逃げられ、美呂ちゃんにも私たちの前から去られたのだ。

自身の怪我以上に、妹が敵側についたというその事実が彼をどれだけ苦しめているのか。

なぜ、彼がこんなにも辛い思いをすることになるのか。

美呂ちゃんは どうして、敵側についたのか。

そんな考え出したらきりが無い様な事を、和斉を見ながら考える。

それに、敵はともかく、美呂ちゃんの事を伝えるべきかどうすべきか すごく迷ったけれど、今は言わないことにする。

だって、あの時、影の中に消える直前、私の見間違えじゃないのなら、確かに彼女はこう言っていたのだ。

……ごめんなさい

と。

50回 決意と造反（後書き）

なんか、しばらく智春視点で話が進んでない気が・・・
今回は冬琉視点の話になりましたし、前回は操緒視点の記念会だったので。

次こそ、話が進んでくれることを祈って！！

P・S：ちなみに、琥珀エレクトラム金は金の合金のことです。

まあ、詳しくはwikiなどで金を調べていただければ分かると思います。

金がもともになった機巧魔神が原作で登場していないのはご存じだと思いますが、黄金とか、金剛なんていう名前は他のSSでも見受けられていたので、若干捻って合金にしました。

綱もあるし大丈夫だろ、みたいなノリで。

途中、白金プラチナとかに行きそうになったけど、何とか自粛。
いくらなんでも在り来たりすぎたと思ったので。

51回 月と鳥(前書き)

すみません、実家に帰っていて投稿が遅れました。

そして、お盆にも拘らず集中講義を行う大学、まあ素敵・・・んな

訳あるかー!!

せめてお盆休みぐらいしっかりしてくださいな。

51回 月と鳥

冬琉さんたちが正体不明の 今のところ未確定なため 使い魔^{ドクター}
とやり合ってから早5日。

取り合えず（戦闘での）大きな傷もなく二人と合流できたのは良かったのだが、それ以降敵の方が何かをしてきたという話を全く聞いておらず、事件の解決に向けての大きな進展はない。

今は学生連盟や悪魔の家々が毎日のように動き回り、敵の組織の物と思わしき建物を潰して回っている。

それでも、あちらは何の動きも見せようとしもないのだ。

徹底して必要な物を隠しているのか、それとも何か大規模な犯罪の準備をしているのか・・・

いずれにせよ、不安は募るばかり。

「・・・はあ・・・」

自然、溜息が出てくる。

僕らも、学生連盟や嵩月組に協力して毎日空いた時間は調査に回っているからか、余計に焦りが出てくる。

焦っても良い結果は出ない、と頭では分かっているても感情は別だ。

敵の拠点だった場所に行つて調査を手伝う度に自身の無力感に苛まれる。

まあ、何にせよ結局僕らがやれるのは地道に市内の怪しい場所に足を運ぶことぐらいなのだ。

・・・学校側にバレると非常に面倒な事になるので、そう言うところに行く時は出来るだけ学生連盟の大人、或いはパツと見はカタギの人間に見える嵩月組の構成員の方と行くようにしている。

こういう時に、学生連盟に学校が所属していないという不便さを感じてしまうが・・・仕方ない。

公立の中学なのだから、所属していたら所属していたで問題はあるのだろうし。

ただ、その捜査の結果もあまり芳しいものではない。

元々あまり期待はしていないが、それでも捜査に進展がないとやる気がかなりの勢いで削がれていくから、多少なりとも何か見つかって欲しいのだが・・・

そんな中で異様にやる気が高いのは冬琉さんだったりする。

普段の彼女のGDとしての仕事ぶりがどうだったのかは分からないが、今の冬琉さんはワーカーホリック気味に思えるほど忙しく動き回っていた。

だがまあ、それだけならば特別異様だとは思わない。

今回の事件では美呂ちゃん　つまりは自身の身内　と言ったら言い過ぎかもしれないが　或いは友人、仲間が攫われており、今までの仕事以上にやる気が出て熱心になるのも特別おかしいことではないのだから。

事実、僕や奏、それに氷羽子さんは3人とともに睡眠不足気味だし、雪原さんに至ってはここ数日目の下から隈が消えた日はない。

なので、ワーカーホリック気味になるのはある種当然の事だった。

・・・それが良いことなのか、悪いことなのか聞かれると、判断に困るところではあるが・・・

いずれにせよ、冬琉さんが疲れていても特別思うところなどはない・・・まあ、体の調子が大丈夫かどうかという不安はあるけれど、それにしただって捜査を行っている人全員に共通していえることだ。

問題なのは、冬琉さんの捜査に臨む態度。

ここ数日で何度か捜査中に顔を合わせることがあったのだけれど、いつも彼女はどこか鬼気迫る表情で捜査を行っていたのだ。

まあ、その事自体はおかしなことではないかもしれない。

前述したように、美呂ちゃんが攫われているのだし、焦る気持ちは

分かる。

ただ不思議なのは、僕たちを急かすようなことはせず、寧ろもつとゆっくりと捜査をした方が良い、と促してくる。

直接その様に言われたのではない。

ただ、遠回しに遠ざけられている様な気がしてならないのだ。

そのくせ、冬琉さん自身は率先して調査を行っており、言っていることと実際の行動に差があり過ぎる。

・・・学校が終わるとすぐに八條さんの入院している病室へ向かっているそうだが、その事と何か関係があったりするのだろうか・・・？

そう言えば、八條さんの様子もおかしいと言えばおかしい。

事件に対しての態度もそうだけれど、冬琉さんへの態度もおかしい。事件に対しては、前回大怪我の身をおして参戦していたというのに、ここしばらくは全く実行しようとしなない。

前回は懲りたのか、或いは冬琉さんに何か言われたのか、とも考えたけれど、それにしても大人しすぎる。

まあ、まだ5日程度しか経っていないのだから特別不思議な事ではないのかもしれないが・・・

僕が知っている八條和斉という雄型悪魔はもつと行動的だと思っただけだ。

というか、こういう思考に陥っている時点で、僕も大概橘高道場の考え方に汚染されてるよなー、と思う。

本来、あれだけの重傷を負った人間　この場合悪魔　が病院を抜け出してまで捜査するのは、まず、考えられないことだ。

だけど、あの道場の面々ならいくらでも方法があると思ってしまうから困る。

・・・実際は、5日前の件で魔力封じの結界でも病室や病院一帯に張られているのかもしれないが・・・

まあ、下手に動かれるよりはマシだから全然今のままで構わないんだけど、どこか不気味な物を感じてしまうのは僕だけだろうか……？

それから、八條さんの冬琉さんに対する接し方が妙にぎこちない。ぎこちないと言っても、喧嘩をした後のあの気まずい接し方ではなく　　というか、この二人が喧嘩するのはしょっちゅうだから今更ぎこちないもない　　何と言うか、その、変に甘酸っぱい空気なのだ。

前述した冬琉さんの行動からも分かるように、冬琉さんはここ数日、毎日病院に通っている。

だから、冬琉さんが避けるような関係ではないはずなのだけれど……
・
なんとというか、今迄妙にストイックに生きてきた男性が、初めて女性をデートに誘った時のような、とても言えば良いのか、或いは、付き合いだしたばかりで互いに気を使い合っている初なカップルの空気、とても言えば良いのか……
要は、とても周囲にいる人間にはむず痒い空気なわけで……

『ああ、夏目たちか……今は入らない方が良いぞ』

なんて部屋の外にいる秋希さんに忠告されるほど。

その忠告を無視して部屋に入った僕と奏は、非常に居心地の悪い気分を味わうこととなった、とだけ言うっておこう。

まあ、二人の関係が進展したのだろうか、深くは聞かない。というか、聞けるわけがない。

多分、5日前に二人でいた時に何かあったのだろうか……特に問題がある訳でもないし、構わない。

寧ろ、これで塔貴也さんが“仮に”暴走したとしても、冬琉さんは協力しない可能性が高くなった。

秋希さんを消滅させるつもりはないが、また一つ未来が変えられたと思う。

後は、一先ず、この事件を解決して、秋希さんや蹴策の無事を確保するだけだ。

・・・あ、真日和のこともあったっけ・・・

? ? ? ? ?

「・・・状況は逼迫しかけてる」

とある料亭の一室で嵩月父が重々しく口を開く。

対面式の座席で、こちら側には嵩月父を筆頭に八枝さん、や嵩月組の幹部の方々。

そして、何故か僕と奏。

「こちらこそそれは重々承知している。

現に、先刻華島が明らかな敵対行動を示してきた」

それに答えるのは、向かい側に座っている鳳島家の当主

彼の横　つまりは僕たちの正面にはあちらの家の幹部の方々。

そして、いつも以上に冷たい雰囲気を漂わせている氷羽子さん。

蹴策は・・・いない。

「・・・ふむ・・・風斎はいつも通りとして・・・問題は八條か・・・

」

「あちらは放っておいてもよろしいのではないでしょうか。
今のところ、我々に不利になるような行動を起こすとは考えにく
いかと思われます」

現在行われているのは、嵩月、鳳島両家の当主による会談だ。
例によって操緒は姿を消している。

今回の事件における両家の対応は一致しており、互いの家やそれぞ
れの傘下である下部組織にも被害が出ている以上放っておくことは
出来なくなつたのだ。

被害は日本国内、或いは近場である韓国や台湾などの国外にも広ま
つていたため、本来であれば以前行つた会合の様な形式で問題の解
決に臨むのが望ましいのだが、残念ながら今回は無理なのだ。

「であるならば、我々が対処に当たるのは華島に属している家々と、
件の組織のみということが良いのか？」

「いや、この機に乗じて法王庁が動く可能性もある。

そちらの警戒も必要だろう」

何故無理なのかというと、今回の事件の組織が行っている活動によ
つて利益を得ている家々も存在するからだ。

嵩月や鳳島は違つが、華島は利益を得ている家々の代表格と言つて
もいい。

前回の機巧アシラ・マキナ魔神取得に失敗した華島家が次に戦力増強の手段として
選んだのが、何故か外の組織と手を組み、自身の味方となつて闘う
戦闘員を増やすという手段だつた。

・・・正直言つて、どうしてそんな手段に走つたのか僕には分から
ないが、それによつて華島家は“ほぼ”完全に嵩月、鳳島の両名家
と敵対することとなつた。

“ほぼ”というのは、あちらの家も一枚岩という訳ではなく、当然

の様に反対している一派もあるのだ。

それは、自身の娘が実際に攫われた家々であったり、単純に現当主のやり方を是としない家々であったり、とそれなりの数になる。

表だって本家に逆らおう、と意思を示している家は少ないが、ある程度いるのも事実。

あちらは、そういつた家も抑えなければならぬのだが・・・何故か、先程明確な敵対行動を鳳島家に示したのだそうだ。

四名家の内の二つを敵に回して、そこまでの自信がどうして湧いてくるのか僕には全く理解できないのだけれど・・・

そんなにあちらの組織は強いのだろうか・・・？

「・・・ふむ。」

となると、学生連盟側の動向も気になるところじゃが・・・その辺りはどうなつとる、夏目」

「はい。」

学生連盟側もGDをほぼ全員投入し、ここ数日敵方の拠点を潰して回っているようですが芳しい情報は得られていないようです。

今のところ、悪魔の家々を警戒する動きは見受けられませんが、今回の華島の動き次第によっては・・・方針の転換も有り得るか」と

嵩月父に振られた言葉に、畏まった調子で答えを返す。

今、この会合における僕の役割は、嵩月組内での学生連盟との取次役みたいなものだ。

そういつた役割でもないこの場にはいられないから仕方ないにしろ、

「フフフ」

氷羽子さんの生温かい視線が何ともいえず、

「……うつつ……」

微妙に居心地が悪かったりする。
更には、

「……むー……」

その視線を（何故か）勘違いした奏の機嫌が悪くなったりして……
真面目な話し合いの場面だから普段のノリで行けるはずもなし、足の痺れと重なって結構苦痛だったりする。

が、それでも表には出さず、しっかりと当主二人の会話に耳を傾ける。

「……ふむ。」

その辺りは任せるが、学生連盟の面々に我々は敵対する意図が無いよう、しっかりと伝えておけや」

「はい」

社長からの言葉に頭を下げてしっかりと返事を返す。

「……氷羽子、お前も任せたぞ」

「分かりましたわ、お父様」

あちらはあちらで氷羽子さんが学生連盟への対応の担当らしく、父親 鳳島家当主 に命じられ、畏まった様子になりながら返事を返していた。

普段、道場では中々見える姿ではないので中々新鮮だったりする。

そんな風に珍しい光景に、心中で楽しんでいると、

「では、どの程度の人数を華島や法王庁らの対策に充てるかですが・
・・・」

八伎さんの言葉を皮切りに、具体的な人員や対応策を決める話し合いが始まった。

・・・うとう、早く終わってくれないかな。

あ、脚が、そろそろ限界・・・！！

?
?
?
?

「し、死ぬ・・・」

足を伸ばし、両腕を後ろへと思いつきり伸ばして体が倒れないように支える。

隣で奏がどう対処したものかとおろおろと困っているが、残念ながら今の僕にはそちらに反応できる程体が回復していない。
出来ても精々顔を向ける程度だ。

「フッフ、夏目さん。

だらしない、ですわよ」

座布団の上に“正座”している氷羽子さんが奏とは対照的に、やたらと優雅にお茶を飲みながらこちらに声をかけてくる。

その顔に浮かんでいるのはどこか勝ち誇っているかのような笑みが

浮かんでいる。

うつつ、これでも以前に比べれば大分マシになってるはずなんだけどなあー

だけど、それを認めるのは癪なので、

「……ほつといてください」

顔を背け、軽く拒絶の意を示しておく。
すると、

「あら、嵩月組の構成員程度が、今私にそんな態度を取って良いと思っっているのですか……？」

「へ！？」

「ひ、氷羽子ちゃん……？」

突然顔を強張らせ、態度を硬化させる氷姫。

さ、さつきまでの普段の調子で話しかけてきてた姿はいつたいどこへ！？

奏も友人の突然の豹変振りに戸惑っている。

「……これは嵩月家との付き合いを元に戻さなければなりませんか……」

「ちよっ、い、いきなりどうしたのさ！？

あ、いや、ど、どうされたんですか？」

ここで鳳島家との関係が悪化するのにはマズイ。
個人的にも、嵩月組の一員としても。

僕が悪かったなら謝りますから！！

「フフ、冗談ですわよ。

言いましたでしょう。

そちらがお兄様に手を出さない限り、私は貴方たちの敵になるつもりはない、と」

そう言い放ち、硬化させた顔を和らげ、顔を綻ばせる氷羽子さん。
・・・綻ばせるといつても、その笑みは相変わらずゾツとする冷たいものだ。

「・・・心臓に悪いんでそんな冗談はやめてください・・・」

コクコク

「先ず冗談と分かって安堵し、奏共々氷羽子さんのブラックジョークに文句をつけるが、

「ですが、夏目さんのその態度はあまり褒められたものでないことも事実。」

今部屋にいるのは私や奏だけですから構いませんが、家の幹部勢に見られたらさっき言ったことが現実になりかねませんわ。

「ご用心を」

「うつつ、分かりました」

改めて態度を指摘される。

今度は真面目なものであったので、流石に拒否する様な事はせず、呻きながら同意しておく。

「頑張りましょう、智春くん」

奏が横から励ましてくれるが、

「う、うん」

弱々しい返事しか返せなかった。

うう、自分が情けない。

ツン

「ヒッ!?!」

自身の情けなさに落ち込んでいると、突然氷羽子さんに足先を突かれる。

まだ痺れは抜けていないというのになんてことを!!

咄嗟に足を引っ込めようとするも、

「逃げちゃ駄目、ですよ」

「へ!?!」

か、奏?」

何故か奏が僕の身体を全身を使って抑え込む。

しかも、今迄見たことが無いぐらい良い笑顔で。

「フッフ、脚の痺れを治すには脚の血行を良くするのが一番ですから、揉・ん・で、差し上げますわ」

こちらも凄くいい笑顔で脚に手を伸ばしてくる氷羽子さん。

って、笑いながら指をやたらと動かすの止めてもらえませんか！

「いつ!？」

け、結構です。

時間が経てば治りますから、遠慮しますっ!!

だから、奏も放して!!」

「断ります」

笑い・・・いや、嗤いながら即答する僕の恋人。

ああ、奏。

君があのお祖母さんとかお母さんの娘だって今改めて納得したよ。

「嘘っ!？」

こんな予想外の場面で自身の契約悪魔に裏切られることになるとは
!!

あっ、背中に何か二つの柔らかくて大きいものが・・・ってえ!？」

「だって・・・智春くんの、あんな反応、初めて見ました、から・・・

可愛かった、ですよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぐすん・・・」

背中に伝わる感触と、脚へと忍び寄ってくる悪魔の手に挟まれながら、必死に僕が逃げようとしていると、

「では、逝きますわよ!!--」

「字が違つうーっ！！」

勢い良く氷羽子さんの細長くて白い指先が僕の足に絡まってきた。

「いやーっ！！」

.....

その時のことは多くは語らない。

ただ、脚に伝わってくる地獄の感触と、僕が暴れるたびに形を変え、背中に伝わってきた天国の感触とに挟まれた僕の場合は崩壊寸前まで“逝った”とだけ記述しておく。

.....あ、結局この字で良いのか.....

? ? ? ?

智春が天国と地獄を両方同時に味わっている頃、

「ほれ、飲めや」

「ああ」

同じ料亭内のある一室に二人の男がいた。

片方の男の手には徳利。

その口からもう片方の男が持つ盃へと透明な液体が注がれていく。

注いでいるのは高月家現当主

注がれているのは鳳島家現当主

「おまえも飲め」

「おう」

注ぐ方と、注がれる方が交代し、互いの盃に液体が入っているのを二人が確認すると、

「ほれ」

「・・・」

チン

と、音を鳴らし互いに盃をぶつけ合う。
そして、

グイ

互いに一気に飲み干す。

そのまま注いで注がれて、黙って飲み続ける。

そうして、一本目の徳利の中身が空になった頃、

「・・・こんな形で顔を合わせることになるとはな・・・」

鳳島家の当主が口を開いた。

「・・・ああ、そうじゃな」

自身の盃の中身を眺めながら嵩月家の当主が返事を返す。
互いに先程の会合で見せ合っていたような威厳の有る姿ではない。
が、そこにいるのは確かに二人の漢おとこだった。

「鳳島と嵩月、今迄決して相容れることのなかったこの二家が手を
取り合うなど・・・」

喋りながら鳳島の当主は盃を呷る。

「・・・数年前までであれば考えられなかったことだといつのに・・・」

言い切つて、また一口。

それによつて空になつた盃へと再び液体が注がれる。

「・・・子供たちじゃ。」

儂おとこらは何もしとらん」

「ふん、そんなことは言われずとも分かっている」

子供“たち”と言いながら二人の頭には一人の人物しか浮かんでい
なかつた。

それは、自身の娘でも、息子でもない いや、ひよつとしたら義
息になるかもしれないが 一人の少年。

彼が悪魔の家々 特に嵩月家 と関わり始めたことによつて明
らかな変化が表れていた。

彼自身は何もしていないと思うかもしれない。

だが、この二家の当主は彼自身が思っている上に少年のことを評価
していた。

「あいつ」がおらんかったら、今こうして酒を酌み交わすことなどなかったんじゃないかな・・・」

「そうだろうな。」

そう考えると存外、うちの馬鹿息子も役に立ったというものだ」

また一口、盃を呷る。

嵩月にしろ、鳳島にしろ、子供たちが出会っただけではここまでは寄り寄ることは有り得なかっただろう。

有っても悪魔の家が集まった以前の会合の様な場所で意見を交換する程度。

だが、間に第三者　　というと語弊があるかもしれないが　　一人入ることによってそれもかなり解消された。

そこに元々楽天的な鳳島家の長男が入ることにより、壁がほとんど消えたのだ。

・・・まあ、実際は八條家の子供たちもいるのだが、この場では割愛させてもらう。

子供が仲良くなっていくからと言って、家同士の関係が良好になるという訳ではないが、一つの切掛けにはなる。

そこに更に両家にとって同一の被害者を抱えた問題が発生した結果が、現在の状況だ。

「・・・まあ、たまにこうして酌み交わすくらいなら」

「ああ、儂も構わん」

二人とも全面的に協力体制を取るつもりは更々ないが、

「・・・・・・・・」

「……………」

こうして二人揃って酒を飲むのは悪い気分ではなかった。

・
・
・
・
・
「…………お父様…………」

氷姫の冷たい眼差し

「…………お母様と、お祖母様に言わないと…………」

巨乳巫女っ娘の呆れた溜息

「…………社長」

ハンドラー
演操者の少年の同情の視線

それらは全て、酔い潰れて顔を真っ赤に染め上げた二人の大人に向けてられていた。

…………そりゃあ、あれだけハイペースで日本酒を飲んでいればザルか、余程強くない限り普通は潰れるだろうて…………

その後二人の当主がどうなったかは、皆さんのご想像に任せます。

51回 月と鳥（後書き）

前回までが完全に鬱路線でしたので、今回は休憩も兼ねて若干ほのぼの風味にしてみました。

まあ、事件の真っ最中ですので完全に日常と言つ訳ではありませんが少しでも休憩になったらと思います。

52回 呼び出し(前書き)

結構遅れてしまい申し訳ありません。

今更ながらゲームに手が伸びてしまっていたもので・・・

現在の話も結構佳境になってきたので、出来るだけ急いで書いてい
るんですけどなあゝ

52回 呼び出し

「さて、準備は良いかい？
素人くん」

「いや、あの…そもそも同意してないんですけど…」

僕の目の前にはやたらとフリルの付いたサテンシャツを着た人物が立っていた。

手にはやや太めの指揮棒タクト 確か、銃になつてた筈 を持ち、自信満々に僕の方を見ている。

GDの一人だから自信を持つ理由は分かるけれど、少なくとも素人と見ている相手を取る態度じゃないと思うんだけどなー

「おや、さっきはあんな態度を取っていたというのに、今更そんな言葉が通じるとでも？」

「あれは、事件に対しては協力するという胸を伝えていただけで、今回の様な事に同意したわけではないです！！」

ああ、相変わらずムカつく人だ。

誰だよ、こんな人に機巧魔神アスラ・マキーナ しかも、GD所属の機体 を与

えたのは！？

今更ながら僕が憤りを感じていると、

「まあ、どのみち、君がここを出られるのは君が負けた時のみさ！！

開演だ、蒼鉛ヒスマス！！」

向かいの男子生徒が勝手に自身の機巧魔神アスラ・マキーナを影から呼び出してた。

男子生徒の背後から浮かび上がってきたのは以前の世界でも見たことのある暗蒼色の魔神。

無骨な甲冑に身を包み、手には突撃槍ランス…というかドリルを持っている。

アスラ・マキナー機巧魔神自体の能力なのかどうかは知らないが、ドリルの能力は魔力拡散。

ただし、ドリルが回転していなければその能力も発動しないため、ハンドラー演操者の能力がもろに露呈する機体だ。

ただ、エクス・ハンドラー元演操者の魔力無効化能力と違い、限定的な力となる分、狙う場所さえ考えておけば然程脅威でもないだろう。

というか、別にこっちは？鉄を呼ばなくても勝てる気がするんだけど…

「…はあ、そちらが負ける時のことは考えていないんですね」

若干呆れながらも、

スウツ

春棟と春棟・闇を鞘から抜き放ち、構える。

翡翠や玻璃珠カルセドニの様な機体が相手になるのであれば、まず取れない手段だが、目の前の相手なら可能だろう。

そもそも、こんな馬鹿げたことで操緒の魂がすり減ることになるなど、するわけにはいかない！！

…というか、闘うことを認めてるあたり、僕も秋希さんや冬琉さんたちに毒されたな

そう思い、？鉄を呼ばずに刀を抜いたのだが…

「なんだそれは！！」

そんなもので蒼鉛ビスマスに勝てるとも思ってるのか…ふざけるな

よ!？」

目の前の相手には伝わらなかったようで、憤慨し始めた。
失敬な、ふざけてるつもりなんて全くない。

僕は至って真面目だ。

けれど、それを言ったところでヘリアル・ドール副葬処女のことをあまり考えていないこいつ　里見恭武に分かる訳もないし、言うつもりもない。
代わりに、

「アスラ・マキナ機巧魔神に勝つだなんて…」

そんな大層なこと思ってますよ。

ええ、「アスラ・マキナ機巧魔神”にはね」

ちよつとだけ皮肉を込めて、含み笑いをしながら返事を返してやる。

『うわ〜……トモ、絶対性格悪くなったよ…』

そんな僕を見て操緒が気味悪そうに言ってくるけど…分かってるって。

が、そんな僕らのやり取りが尚のこと気に食わなかったのか、

「ふ、ざ、け、る、なあぁー……っ!?!?!」

逆上した里見が暗蒼色の魔神を操り、僕らに突進させてきた。

それにしても、なんて丁度いいタイミング。

僕も以前の世界でのこいつのやり方は気に食わなかったんだ。

この世界の里見と、あいつは別人だということは知っているけれど、殆ど同じ思考回路の持主だということは先程までの会話で分かる。

なら、あんな越権行為を当然の様にやる人間のはず。
それなら、少しぐらい痛い目を見てもらった方が良いだらう。
彼のためにも、僕自身の鬱憤晴らしのためにも。

さて、と、

「ちょっとお灸を据えてやらないとね」

自分の無力さを知ってもらおうか！！

? ? ? ?

遡ること2、3時間程。

僕と操緒は、とある雌型悪魔と共に雪原さんと冬琉さんに呼ばれ、
学生連盟の本部へと足を運んでいた。

とある雌型悪魔と言っても、奏やアニアではなく、

「…ふう、冬琉さんや雪原さんも一々私たちに手間を掛けさせない
で欲しいですわ。」

折角、今日は一日中付きっきりでお兄様の看病ができると思っ
てましたのに」

鳳島家のお嬢様。

先日酷い目に遭わされた身としては、連れ立って歩くことにそれな
りの警戒心を覚えていたりする。

もっとも、当の氷羽子さん自身は、折角の兄との逢瀬?を邪魔され

たとあつてやや不機嫌そうだ。

『あはは、でも仕方ないって。

今回の学生連盟が主道なんだから』

「それは、私も分かっていますけど…理解と納得は別ですもの」

まあ、氷羽子さんなら公私の区別はしっかりとつけられる人だからとくに心配はしていない。

寧ろ心配なのは、

「大丈夫ですか、冬琉さん…？」

こつちの案内役のGDの方。

見るからに体調が悪そうだ。

顔色は真っ青だし、眼の下には歌舞伎で使われている様な見事な隈。

髪はボサボサ、制服もしわだらけ。

2、3日前に一度会った時はまだここまで酷くなかったんだけど…

ここ数日の間に何かあったのかもしれない。

氷羽子さんを操緒に任せ、僕は冬琉さんの話を聞くことにする。

「え、ええ勿論大丈夫よ。

どこか変な所でもあつたかしら…？」

けれど、余程隠しておきたいのか、どもりながらもはぐらかされる。どう見たって大丈夫じゃないのだが…

「…いえ、最近道場ではあまり見かけないので」

「ああ、ごめんなさいね。」

こつちの仕事が忙しくてあまり時間が取れないの」

「それならいいんですが」

こちらも一応合わせた受け答えをして、取り合えず体調についてはこれ以上聞かないことにする。

こう見えて冬琉さんはかなり頑固な人だから、今追及したところで本当の理由を教えてもらえらると思えない。

…後で心配そうに冬琉さんのことを見ている秋希さんか、雪原さん辺りに聞いてみよう。

時間があれば八條さんの病院にも行けたらいいなあ

と、冬琉さんの体調にやや不安を覚えながらも足を進める。

以前使った部屋の前を通り過ぎ、そのまま歩いてすぐの部屋に入る。入った部屋の中は会議室の様になっており、部屋の中央に長机が置かれ、その周囲に椅子が設置されている。

そして部屋の奥にはホワイトボードがある。

…うん、どう見ても会議室だ。

まあ、今回学生連盟に僕らがやってきた理由を考えてみれば、こういった部屋に通されるのは当然のことなのだろうけれど。

嵩月組の一人として、この世界に来てから色々な所に顔を出してきたが、それでも生来のものかやはり気後れしてしまう。

チラリ、といったの間にか僕の隣に足を進めていた氷羽子さんに視線をやると、

「フフ」

特に気後れした様子は見られず、寧ろ余裕が感じられる程の冷たい

笑みをその美貌に浮かばせていた。

氷羽子さんが鳳島家の一員として公的な場所が出る時は、大抵この表情である。

最初の頃は普段とのギャップに驚いていたけれど、今はごく当たり前のモノだと思って受け止めている。

つまり、それだけ氷羽子さんとそう言った場面でよく顔を合わせているということなのだ。・・・気にしないようにしよう。

「やあ、夏目くんに氷羽子。

忙しい所、態々呼び出してすまないね」

僕が若干、いやそれなりにこの世界に来てからの自分の行動を嘆いていると、元々部屋にいた人物が話しかけてきた。

普段通りのツカっぷりは健在だが、やや表情に疲れが見える雪原さんだ。

「ほんまに、すいまへんな」

けれど、そちらの二家にもご協力いただきますから情報はお知らせせなあかん、思いました」

久しぶりに顔を見た眉毛が特徴の千代原さん。

冬琉さんや雪原さんに比べて顔の翳りは少ない。

とは言っても、少ないだけでそれなりにはある。

「いえ、こちらも少々行き詰っていたところでしたので」

これは本当。

近隣の殆どの場所は調べつくしたし、関東圏もそろそろ終わりそうだ。

「そうですね。」

何か新しい情報があるのなら、鳳島^{ひづり}家としても是非とも聞いておきたいですわ」

早くこの事件を解決したいのは、学生連盟も、悪魔の家も同じこと。ただ、今迄この二つ（三つ？）の組織が協力してきたことなど殆どないので、慎重にならざるを得なかった。

それ故、単独で案件を進める以上に時間が掛かってしまうことになったのだ。

性質上仕方ないのかもしれないが、考えさせられることである。

「そうだね、こちらとしてもこの件は速く片付けてしまいたいから、早速本題に入るとしようか。」

好きなところに座ってくれ」

雪原さんに促され、僕と氷羽子さん、それに操緒はGDの皆さんと向かい合うようにして座る。

入口から見て、右側が僕たち、左側が冬琉さんや雪原さんだ。

千代原さんはホワイトボードの前に立っているから、そちらの仕事をしてくれるのだろう。

「じゃあ、始めましょうか」

僕らが席に着いたのを確認した冬琉さんが口火を切って、話が始まった。

・
・
・
「まずは、これを見て欲しい」

そう言つて雪原さんが提示してきたのは、この街周辺の詳細な地図と二枚の写真。

地図には赤のマーカーと青のマーカーで色が付けられており、その殆どが赤、青、二つの色が重なっている。

写真の方は、一枚目には一人の男性、二枚目は一人の女性がそれぞれ写っている。

男性の方は肌の色が黒く、黒人だと一見して分かる。

歳は僕らとそう違わないであろう、10代後半といったところか。

あまり黒人の若者に出会ったことがないので一見ただけでは詳しい年齢など分からない。

女性の方はやや浅黒い肌をしているものの、黒人と言うほど濃い肌の色をしている訳ではなく、日焼けしたアジア系の人間だろう。

歳は15、6ぐらい。

どちらの写真も、証明写真の様なもので、日常を写した一枚から抜き取ったものではないことは確かだ。

「…これは…?」

写真を指先で突きながら目の前の二人に説明を要求すると、間髪入れず答えが返ってきた。

「その二人が、今回の事件の主犯格。

スピネル ハンドラー
ペリアル・ドール
尖晶の演操者と副葬処女だ」

「この二人が…!？」

操緒と氷羽子さん、それに僕を合わせた3人が揃つて目の前の写真を食い入るように見つめる。

今迄数える程しか直接顔を合わせていないからはっきりと分かるわけではないが…

「ベリアル・ドール副葬処女は姿を見ていないので何とも言えませんが……少なくともハンドラーも演操者は違うのではないですか…？」

「これほど日本人と違う姿形であるのであれば、幾ら夜の暗がりといえ分かるはずですが」

コク

「僕も氷羽子さんの言う通りだと思う。」

「氷羽子さんに同意するように僕も頷く。だが、」

「いえ、この人物で合っているのよ」

冬琉さんはその僕らの言葉をやんわりと否定した。

「え？」

「以前あなたが交戦した相手は、この人物がたくさん持っている顔の一つにすぎないの」

『…ぶひいひいとっ』

「つまりね…」

意味が良く分からない僕たちに向かって冬琉さんは説明を続けようとしたが、

「…成程、使い魔ドクターの能力、ですか」

先に氷羽子さんが答えを口にしてしまった。
が、それで冬琉さんは不機嫌になるようなこともなく、

「ええ、そうよ。」

攫トウターわれた雌型悪魔のうちで、これに該当している使い魔トウターの能力は、
“幻覚”」

ああ、そう言うことが。

確かにそれなら主人の顔を変化させることや、自分たちの姿を隠す
ことなど容易だろう。

以前、簡単に逃げられたように見えたのはその使い魔トウターの能力、か…

僕らがそれぞれ冬琉さんの言葉に納得していると、

「分かってもらえたかい…?」

雪原さんが確認の問いを掛けてきた。

「ええ、納得しました。」

それで、この写真を僕らに見せてどうしる?」

ただ、これだけなら僕らを呼び付けてまで話すことではないと思う。
道場で会った時にでも言ってくれれば良い話である。

「それはこの地図と関係があるのよ」

続いて冬琉さんが示してきたのは、例のマークで印がされた地図。

「赤のマークで記されたのは実際に事件が起きた所で、青のマー
カーで記されたのはとある事象が起きた場所なのよ」

「…とある事象？」

「ええ」

何か、加賀簀が引き起こした事件とよく似てるんだけど…
もしかして、何か繋がりがあつたりするの？

そんな僕の疑問を余所に、冬琉さんは話を続けていく。

「青でマークがしてある所は、この写真の演操者ハンドラーが目撃されたところなの」

「うわ、分かりやすい…」

そんな直接的な理由で良いのかよ、と思わなくもないが…

『まあ、この街って外国系の神父さんとか、多いから別に外人さんでも珍しくないしね』

操緒に言われて思い出す。

そついや、洛高とかがあるせいかなんまり外人に抵抗ってないよな

「ええ。」

それで、実際にその人物が目撃されたところと事件が起きたところを重ねたのがこの地図なんだけど…」

「殆ど重なってますね」

大凡8割といったところか。

確かに、これだけ重なっているのであれば信憑性もある。

「で、改めて聞きます。

学生連盟は、高月、鳳島両家に何を求めておられるんですか……？」

さて、ここからが割と今後の方針として重要なところだ。

事情は分かった。

が、未だに学生連盟がさせたいことが良く分からないのも事実。
気を抜かずに会議を続けるとしましょうか。

52回 呼び出し（後書き）

次回、智春の里見を使った憂さ晴らしタイムに入る予定。

蒼鉛って対人だと非常に効率が悪いと思うのは私だけでしょうか・

・？

53回 立場(前書き)

Fate/extraの続編が出るとか、MH3(トライ)Gが3DSで出るとか、喜ぶべきかそうでないべきか判断に困るニュースがここ数日続いてます。

Fateの方は多分買いますけど、モンハンの方は微妙…
3DSですし、ガノトトスとか、レイアレウスの亜種が復活するらしいですけど、3(トライ)だけあって、水中もあるそうです。
つまり、水中でガノトトスとやらなきやいけないわけで…うわ、なにその地獄絵図

また、中古のゲームショップで月箱を見つけました。

値段は14800円とかなりの値段。

そりゃそれぐらいはするだろうけど、買うべきか買わざるべきか…
結構真剣に悩んでいます。

53回 立場

僕たちが闘わなければならぬ敵は分かり、その行動パターンも大凡掴めたと言っている。

ここまで分かっているのであれば学生連盟だけで行動した方が良く、ことぐらい僕にも分かるのに、雪原さんたちはそれをせず僕らに情報を回してきた。

その上で、

「で、改めて聞きます。

学生連盟は、嵩月、鳳島両家に何を求めておられるんですか……？」

僕たちにさせたい事とは一体何なのだろうか？

・
・
・

「なに、そう難しいことじゃない。

嵩月、鳳島両家には、学生連盟わいわいがあちらの本拠地を襲撃している際に、華島を始めとしたあちらの組織に協力している悪魔の家々を押さえておいて欲しいのさ」

「…それだけ、ですか？」

怪しい。

もし本当にそれだけなのだとしたら、僕は雪原さんの気を疑う。

「勿論違つよ。

でも、両家の代表として我々と話合いに来ている二人なのであれば先にそちらの要件を済ませておいた方が良いと思つてね」

「そうですね」

成程、GDとしての彼らの本題はあくまで僕ら個人に対してのものであり、両家と学生連盟を結ぶ立場を利用して呼び出したというところか。

「…どうします、氷羽子さん？」

普通に隣に座っている氷羽子さんに話しかける。
こんな近距離で小声で話しても、冬琉さん相手では全く意味がないし、逆に下手な不信感を与えてしまいかねない。

「そうですね…」

氷羽子さんもそれは分かっているのだろう。

特に躊躇する様な事はなく普段通りの音量で声を放ってきた。

「…取り合えず、家の代表としての役ぐらいは果たしましょうか。」

それ以降の話し合いに応じるか否かは、内容次第、ということだ。

「ええ、そうしましょうか」

雪原さんたちの狙いが何なのかは知らないが、最低でも嵩月家から与えられた役目は果たさないといけない。

それは、氷羽子さんも同様。

「ということですので、具体的に押さえておくべき日時と、場所。それから、相手の家々を教えてもらえますか？」

敵対している家のことであれば既にこちらも知っていることではあるが、今回は学生連盟の戦力が主体となる以上、学生連盟側に合わせるのが良いだろう。

「じゃあ、これを」

僕の言葉を聞いた冬琉さんが一枚の紙をこちらに差し出す。どちらも同じ内容が書いてあったため、一枚は氷羽子さんに。

「ふむ、相手の家々と場所については把握しましたわ。

後は日時ですが…」

「それを今から決めようと思うが、その前にもう一つの要件の方を済ませておきたい」

今から？

3人揃って不審気に顔を歪めながらも、

「良いでしょう、聞こうじゃありませんか」

氷羽子さんが冷たい笑みを更に深めながら雪原さんの提案に乗る。その事については僕も操緒も反対はしないが、ここで下手な対応をすると仲が拗れてしまう可能性があるのです、出来る限り慎重にいきたい。

「助かるよ」

雪原さんも雪原さんで、相変わらず表情の分からない笑みを浮かべながら話を進めてくる。

「さつきも言ったと思うけど、両家には悪魔の家々を抑えてもらいたいと思っている。」

それは、紛れもない事実だし、現状ではそうするのが最善だと考えた結果だ」

「はあ」

「けれど、相手の組織に対して攻撃を仕掛ける際に悪魔の家々から戦力が一人もいないのは問題だろうし、華島家たちを抑える際に学生連盟が参加していないのもマズイだろう？」

「それは、まあ、そうですね」

主に今後の両家と学生連盟の関係や、パワーバランス等を考えると学生連盟に襲撃作戦の全てを任せることになってしまつのはいただけない。

日本の悪魔の家々のトップである四名家が学生連盟の指示の許動いているとなつては、悪魔の家々が学生連盟よりも下に見られてしまふことになるからだ。

あくまでも協力体制にある、としなければならぬ以上、相手の本拠地を攻める際に学生連盟の面々だけで行つてしまふのは今後の関係に支障をきたす可能性が十二分にある。

それ故、本来であれば戦力上十分であろうとも、学生連盟だけで事を運ばせる訳にはいかない。

「だけど、こちらとしても華島程の相手を対処してもらつ以上、大人数に参加されても不安が残る。」

…幾らあちらの家が内部分裂に近い状態にあるとはいえ、弱体化している要素は現状では見られていないしね。

勿論、こちらからもGDを数名派遣する予定でいるが、何分相手

の残存兵力が明確でない以上下手に戦力を割く訳にもいかない」

となると、こちらもそれに見合った戦力を出さないといけない。

GDは学生連盟が誇る強力な機巧魔神アスラ・マキナを使役する演操者ハンドラーだ。

それを数名。

下級悪魔数名では到底見合う様な戦力ではない。

「…具体的には、どのようなメンバーを派遣していただけるのですか？」

やや億劫そうに氷羽子さんが雪原さんに問いかける。

そりゃそうだ。

派遣される人員の性格や、機体の能力などを考えて編成を組まなければならぬ。

非常に面倒な作業であるし、それを恐らく数日中にまとめなければならぬため、時間も限られてくる。

そうになると、早めに知っておくに越したことはない。

「そうだね……冬琉、はる奈、誰が行ける？」

「そうね…」

「ちよつと、お待ちを」

冬琉さんは手元の資料をめくり始め、千代原さんは一旦奥に引っ込んで誰かと話しているようだった。

そうして、戻ってきた千代原さんから告げられた人員は二人、多くて三人との事。

行けそうな人員の名前も挙げてもらったが、残念ながら僕の知っている人はいなかった。

それでも、後で八枝さんたちと相談しなければならぬので、一応手元の紙にメモはしておく。
冬琉さんからも似たような人員の名前が挙げられ、人数も同様。

「となると、こっちは…」

GDが2、3人ならこちらも上級悪魔を10人程度は派遣しないと吊り合わないだろう。

大体、嵩月家から5人、鳳島家から5人で良いとは思いが……その辺りは後で氷羽子さんと相談しないとイケない。

そう思い、その旨を伝えようと口を開こうとすると、

「いや、こちらとしては、夏目くん、君と奏が協力してくれればそれで構わない」

雪原さんがそう言って来た。

「え…?」

僕?

予想外の言葉に啞然となる僕と操緒。

いきなりすぎて全くもって意味が分からなかったけれど、

「成程…そう言うことですか」

氷羽子さんの方は寧ろ納得しているようだった。

ただ、そこには先程までの余裕の表情はなく、代わりに顔に浮かんでいたのは、

「雪原さん、これは学生連盟の総意と捉えてよろしいのですか…?」

憤怒。

と言っても、一見ただけで分かるような顔ではない。

目は細まり、冷たい笑みを浮かべていた口元は閉ざされる。

ただの無表情ではない。

冷静に現状を分析して必死に自分を抑えようとしているのに抑えられず、結局表情を固めるしかなかったのだ。

「いや、今のところは僕と冬琉、二人の意見と取ってもらいたいね」

「冬琉さん、貴女もですか…」

そんな怒れる氷姫の様子に気付いているだろうに、まるで表情を変えることなく、雪原さんは普段通りに対応をする。

一方の氷羽子さんは、視線を雪原さんから冬琉さんへと移す。

「ええ、私も夏目くんたちに協力してもらえるのならそれで十分よ」

が、冬琉さんも普段通り 若干疲れ気味 に返事を返す。

そして、

「あなた達は…!!」

あくまで普段通りの二人の対応に憤る氷羽子さん。

て、ちよっと待って!?

目の前に当人がいるのにその当人たちが全く話の流れについて行けてないんですが!!

『ねえ、話の腰を折るようで悪いんだけど、どうしてトモとか奏ちやんがそこまで重要視されてるの?』

憤る氷羽子さんの様子が疑問だったのか、操緒が心底不思議そうに訊ねる。

ああ、ちょうど良かった。

僕もそれはずっと疑問だったんだ。

「そうですね、僕もそれは是非とも教えてもらいたいです」

操緒の疑問に便乗する形で僕も口を開く。
すると、

「夏目さん…奏もそうですが、あなた達にはもう少し自分たちの重要性について自覚していただきたいですわね」

怒りながらも呆れるという世にも珍しい表情した氷羽子さんが、目の前のGD二人に強い視線を向けたまま説明してくれた。

「あなた達は、現在最も存在が危険視されてる二人なのです。」

奏は嵩月家の一人娘ですから然して問題ではありませんが、夏目さん、貴方は違います」

「え…?」

直接名指しされて戸惑う僕。

雪原さんたちの方に視線を向けてみると、彼女たちは黙ったまま氷羽子さんの言葉に耳を傾けていた。

「私たちは奏と貴方が付き合っているということを知っていますから問題ありませんが、周囲の組織から見た場合、ハンドラー演操者自身の能力もさることながら、所持しているアスラ・マキナ機巧魔神の能力も強力なのに、正

体不明ときています。

一度、華島の家相手にお使いになったそうですけど、その所為で今はあちこちで貴方の対処に必死になっているのですわ」

『へえ、そんなことになってたんだ』

「……………」

知らぬ間に自身が周囲に及ぼしていた影響を知らされ、操緒と二人揃って呆気にとられる。

僕個人としては、嵩月組の所属だと思っていたので今更な気がしてならない。

「そんな中で、

ジロリ、と二人に向ける視線を強める氷羽子さん。

二人は、GDの作戦に夏目さんと奏を要求しました。

嵩月の一人娘が参加するというのは問題ですが、今は構いません。問題なのは、夏目さん、貴方が参加することです」

はあ、と一旦深く息を吐き再び喋り始める氷羽子さん。

「ここで学生連盟の重要な作戦に演操者である貴方を呼ぶということとは、貴方を学生連盟の一員として捉えられる可能性があります。勿論、実情は違つとしても、周囲からはその様に見られることになる。」

つまりは、嵩月家の一大戦力である貴方がたを引きいれることによって嵩月家の弱体化、及び周囲の悪魔の家々に対して睨みを効かせることができるのです」

「別に僕たちはそこまで大層なことは考えてはいないよ」

氷羽子さんの説明に納得している僕らに対して、訂正するかのよう
に雪原さんが喋り始める。

「何が違うというのですか…?」

この期に及んで何を言うのか、と怒り心頭の氷羽子さんを余所に、

「僕たちは、確認しておきたいだけなのさ。」

夏目くんが使役しているアスラ・マキーナ機巧魔神についてね」

雪原さんは言葉を続ける。

「確かに、結果としては、氷羽子、君の言う通りなのかもしれない。
だが、僕らとしても管轄内に学生ハンドラーの演操者がいる以上その機体名
や能力を把握しておかなければならない。」

それは、万が一にも夏目くんが問題を起こした時に我々が対処し
なければならぬからだ」

これだけ聞くと、確かにそうかもしれないと思うのだが、

「戯言を」

氷羽子さんはその正論を即座に切って捨てる。

「それならば、態々こんな事件の時に呼び出す必要などないではあ
りませんか。」

学生連盟として一学生であるところの夏目智春を呼び出せば良い

はず」

「まあ、そうかもしれないけどね、現状それは難しい。

…それに、そんなに心配なのならば作戦の内容の重要なところは殆ど、鳳島、嵩月両家からの協力人員で締めるよう指示しておこうじゃないか。

それならば、夏目くんが我々に協力しようが、結果として事件を解決したのは両家のメンバーであり、僕たちはあくまで協力したという姿勢になる」

結局、氷羽子さんの正論を認める形で雪原さんは話を進めていく。いつの間にやら僕たちがかかなり重要な要因になっていることは驚いたし、考えさせられるところではあるけれど、最悪後で僕の所属をはっきりさせる旨を協力してもらっている家々に宣言すれば良いだけの話でもある。

……その辺りは社長たちと相談しないといけないけど……

僕が納得してしまったのを見た氷羽子さんは、

「……なら、嵩月から奏と夏目さんが出る以上、鳳島からは私ももう一人幹部クラスを付けることにしますわ」

諦め口調でそう言ってくれた。

ううう、何かすいません。

「まあ、それが妥当かな。

じゃあ、実際の日時だけね……」

雪原さんたちもそれで納得してくれ、さあ詳しい内容を決めようとした時だった。

「瑤、ここかい!？」

バアンツ!!

と、勢い良く扉が開かれ、一人のGDが入ってきた。

そう、里見恭武だ。

? ? ? ?

入ってくるなり里見は、何故自分が作戦の中核にいないのかと雪原さんに詰め掛かり、強い口調で詰問していた。

それに頭を抱えつつ対応している冬琉さんや雪原さんを見ると、

「うん? 誰だい、君たちは?」

やたらと上から目線で僕らに問いかけてきた。

氷羽子さんは相手にするのも馬鹿らしいとでも思っているのか、鼻で笑って相手にせず、操緒も無視。

僕も相手にしたくなかったので苦笑いでスルーしていると、勝手に雪原さんが今度の作戦についての役を説明してしまい、

「ってことは、君を倒せば僕がその役に着けるんだね!？」

訳の分からない解釈をした里見が暴走、結果として、

「…はあ」

52回の冒頭部分に戻るわけである。
ホントに勘弁して欲しいんだけど…

・

「いけ、ビスマス蒼鉛！！」

その生意気なやつを抉り殺せ！！」

里見の掛け声に合わせて暗青色の魔神が動き出す。

手に持ったドリル（という名の槍）を勢いよく回転させながら、こちらに向かって走ってくる。

その速度は腐ってもGDということもあり、中々侮れないものがある。

けど、

『見事なまでに直線的だね…』

「ああ」

僕らが避けなくても思っているのか、一直線に僕らの方に向かってくるのみ。

ドリルも後ろに引いて構えてはいるものの、ハンドドラ演操者である里見が興奮状態にあるせいか、勢いはあっても狙いが定まっていない。

「はあ、ホントになんでこんな人の相手なんてしなきゃいけないのか…」

呆れ、愚痴りながらも回避動作に移る。

アスラ・マキーナ
機巧魔神自体の体躯が人の数倍はあるので、割と大きめに回避するため、右斜め前方に向けて走り込む。

「待て、逃げるつもりか!!」

当然、相手も逃がすまいと機体を操り、方向を変え、こちらに向けて走ってくるが、

「よ、っと」

右手に握った春棟を振るい、

「なっ!!」

先日吸収しておいた悪魔の能力を蒼鉛ヒスマスに向けて放つ。

因みに、一番最近溜めておいたのは華島の構成員の能力だったため、現在相手に向かって迸っているのは雷撃だ。

まあ、下っ端構成員の能力だったようだから威力は期待していない。

「ふんっ!!」

驚きながらも、里見は走らせていた蒼鉛ヒスマスを“停止”させ、後ろに引いていたドリルを回転させながら勢いよく突き出し雷撃を無効化する。

「ははは、残念だったね!!」

僕の蒼鉛ヒスマスの槍の回転は、どんな強大な魔力をも消滅させる。

人間である君が魔力を使った攻撃をしてきたのには驚いたけど、そんな程度じゃ僕の機体は倒せない!!」

開始した場所から一步も動かず高笑いしながら長々と喋ってくれる里見。

勿論、蒼鉛ビスマスはドリルを突き出した体勢のまま立ち止まっている。

その間に、蒼鉛ビスマスの後ろに回り込み、正面に蒼鉛ビスマス、背中側に里見を置く形で相手取る。

「…はあ、言った筈ですよ？」

僕は機巧魔神に勝つつもりなんてない、って」

本当に、どうしてこの人がGDなんてやっているのか疑問でならない。

確かに蒼鉛ビスマスの持つ槍ドリルの能力は機巧魔神相手であれば非常に強力だ。

アスラ・マキーナ
機巧魔神に付いている護法装甲を無効化して直接攻撃できるのだから。

が、それも相手が魔力を主に使ってくる場合のみだ。

僕みたいな人間相手にはこの機体は非常に脆弱にならざるを得ない。勿論、雪原さんとか、冬琉さんみたく、一流の人間が使えばまた違ったことになるのだろうが、残念ながら里見では宝の持ち腐れも良いところだろう。

「はは、だったらどうするんだい!？」

君が蒼鉛ビスマスに対して攻撃手段が無い以上、僕が負けるはずはない!

「!

僕の言葉を聞いても、里見は自分が勝つことを疑っていないのか余裕の表情だ。

「ねえ、なんでこの人こんなに自信たっぷりなの…?」

操緒もかなり呆れ顔。

「僕が知るわけないって…」

小声でやり取りを交わしながら目の前の暗青色の巨人を見上げる。こんなに僕が近くににいるのに、全く右手のドリルを向けようとしてない。

…いくらなんでも酷過ぎる。

「さあ、終わらせようじゃないか、ビスマス蒼鉛！！」

それでも、里見が指示を出すことによって息を吹き返したのか、振り向きながらドリルを振り上げようとしている。

「ええ、終わらせましょうか」

正直言って、これ以上付き合っているのが馬鹿らしく思えてきた。相対していたビスマス蒼鉛を無視する形で自身の背中側に向き直り、

「はっ！！」

春棟を振るう。

若干残っていた雷撃が、前方にいる里見に向けて放たれる。

「へ？」

まさか自分に攻撃が飛んでくるとは思ってもみなかったのか呆気に取られる里見。

ビスマス蒼鉛は相変らず動いているため、雷撃を飛ばすと同時に僕も里見に向かって走り出す。

ビッ！！

春棟を突き付け、

「僕の勝ち、ですね」

宣言する。

「……………」

「?」

返事が無いので不思議に思い、どうしたものかと悩んでいると、

『トモ、気絶してるみたいだよ…?』

操緒からそう言われる。

言われて、後ろを振り返ってみると蒼鉛ヒスマスが里見の影の中に沈んでいく所だった。

「……………そう、みたいだな」

里見に突き付けていた春棟も鞘に収め、開いた扉からサツサと外に出で、待っていてくれた氷羽子さんと合流し、学生連盟本部を後にする。

途中で変な邪魔が入ったけれど、取り合えず今日の所の目的は達成できたし、善しとしますか。

……帰ったら社長たちとの調整もやらなきゃいけないから、若干気が重いんだけど……

53回 立場（後書き）

何故か準ヒロイン的な位置にいる氷羽子さん。

原作の8巻を読み直して、

「そういえば、（本編中の）智春の初キス相手って氷羽子だったっけ…」

と再確認。

いや、一応幽霊状態の露崎が本当の初キス相手なんでしょうけど。でも、確かに、下手すりゃヒロインに食い込んでくるなーと納得。まあ、蹴策に記憶がある限りそれはないでしょうが…

54回 嵐の前の静けさ（前書き）

幕間やら、記念の話を含めると60話を超えていたので、いい加減見難いこともあり、章分けを行いました。

改めてみると、“下積み時代”の割合が多いこと多いこと。それだけ、重要な話だったけな…？

54回 嵐の前の静けさ

コンコンコン

「……………どうぞ」

「……………失礼します」

部屋のドアをノックし、中から返事が返ってきた。やや間があった。のを確認したので、声を掛けながら扉を開き中に入る。

「夏目と水無神、か…」

「思ったより元気そうですね、八條さん」

呼んでいた本から顔を上げ、こちらを見てきた八條さんはやや疲れた表情を見せながら僕らに視線を向ける。

大怪我を負っている患者なので、顔色がそこまで好くないのは仕方ないけれど、

『冬琉さんじゃなくて残念でしたね』

明らかに期待外れの顔を向けるのは止めて欲しい。

当然気付いていた操緒が、笑いながらその事を指摘すると、

「ふん」

鼻を鳴らして、不機嫌そうな顔を造り上げ、サッサと僕らから視線を外して本に戻す。

分かりやすい反応、ありがとうございます。
…というか、いつの間にこんな分かりやすい顔をするようになったのやら…

「とりあえず、お見舞いの品です」

苦笑いしながら、僕は、来客用の椅子を引っ張り出して座り、途中で買っておいた簡素な果物詰め合わせを近くの棚に置いておく。
学生連盟の本部からここに来る途中、買っておいたのだ。

斜め後ろに浮かんでいる操緒は微妙な表情になりつつも、割と真剣な眼差しで八條さんの方を見ている。

「ああ、悪いな……で、何の用だ……？」

今迄殆ど顔を見せなかったお前たちが態々来たんだから、何かあるんだろっ？」

お見舞いの品にお礼を言いつつも、僕らの反応を無視して、八條さんは話を進めようとする。

すまし顔で話を進めようとしているから、なんとなく誤魔化そうとしているということは分かるが、別に僕はその辺りを弄るつもりで来たわけではないのでスルー！。

冬琉さんとか、氷羽子さん辺りなら喜んで弄るのだろうが、今日は来ていない。

「まあ、そうですね」

用事があるのは事実だし、当人がそれを望んでいるのだからサツサと本題に入るとしよう。

「八條さん……冬琉さんと何かありました……？」

先日から感じていた冬琉さんの不調。

その原因の一つに目の前の雄型悪魔が関係しているのは間違いないと思うのだが……

「どうしてそんなことを俺に聞く？」

逆に不思議そうな顔をして問い返されてしまった。

……本当に知らないのか……？

あまりにも自然に返されたため、一瞬、この人は本当に知らないんじゃないか、と思ってしまう。

が、我に返って考え直してみれば、知らない方がおかしい。

僕たちは八條さんが言っていた通り、あまり病院に来ていないが、冬琉さんが来ていないはずがないのだ。

チラ

操緒に視線を向けてみるも、

『トモに任せる』

あっさり返され、まるで意味がない。

……はあ、仕方ない。

「いえ……この前会った時、冬琉さんの調子がすごく悪そうだったので、八條さんなら何か知ってるんじゃないかと思っただんです」

取り合えず、さっき見て、感じた事をそのまま八條さんに話すこと

にしよう。

「眼の下には隈がありましたし、顔色も真っ青、髪もボサボサ、まるでここ数日まともに寝てないんじゃないかと思えるぐらい酷かったです。」

「こんな時だから“根を詰めるな”とは言えませんが、でも、やっぱり休むことは大事だと思うんです」

「あの冬琉が、ねえ……」

僕から見た冬琉さんの様子を聞いて思うところがあるのか、真剣な顔になって考え込む八條さん。

彼だって、こんな時分だから多少なりとも疲労が重なるのは分かっているだろうから、冬琉さんの暴走は不安なのだと思う。

それとも、僕が言うことに何か思い当たる節でもあるのだろうか？

僕だって、学生連盟の本部からここに来る間に、操緒たちと冬琉さんのあまりの不健康さについて話し合ったのだが、結局思い当たるものは見つからなかった。

今迄道場や、合宿の時に散々僕らに対して心構えを説いてきた冬琉さんだから、体調管理について知らないはずがないし、学生連盟に所属してから今回の件があるまではしっかりと実践できていた。

それが、突然あなってしまったのだ。心配するな、というのが無理な話である。

「ええ、なので八條さんなら何か知ってるんじゃないかと思って……」

『この間、冬琉さんが襲われた時一緒にいましたし』

期待を込めた視線を操緒と二人、揃って向けるが、

「悪いな。」

俺には分かん。

今度会ったら聞いとくわ」

「そう、ですか……」

期待とは真逆の返事が返って来た。

なんとなく分かっていた事とはいえ、やっぱり残念なものは残念だ。操緒と揃って落胆する。

ここで原因が分かれば、冬琉さんの体調を回復させることができると思ったのだけれど。

ひよっとしたら、二人の関係の変化に関係するものだから話せないのかもしれないが……

なおさら聞けるわけないよ

聞いたとしても、八條さんが話すとは思えない。

……はあ、仕方ない、か。

「すみませんでした、失礼します」

「いや、こっちも力になれなくて悪かったな。

冬琉の奴が来たら注意しといてやるよ」

『お願いします』

分からないなら分からないでどうにかするしかない、か。

肩を落としながらも椅子から立ち上がり、退室の挨拶をして八條さんの部屋から出る。

「蹴策のどこにも顔出していこうか、操緒」

「ああ、そだね。」

丁度ここまで来たんだし、氷羽子ちゃんもいるかもしれないからね」

「……いや、氷羽子さんがいるなら遠慮した方が良さと思うんだが」
ここまで来たんだし、蹴策の所にも寄っついていこうか。

あいつの心配なんてまるでしていないけれど、八條さんの隣の部屋なんだ。

折角だし顔だけでも見ていこう。

……ただ、氷羽子さんとの蜜月の時を邪魔するのもあれだから、氷羽子さんがいたらサッサと変えれば良さ。

うん

?
?
?
?

Side: Kazunari Hachijo

「まっさいぞ」

夏目と水無神が部屋を出て、隣の蹴策の部屋に入っていたのが聞こえたので窓の外に向けて声を掛ける。

「…そう、ありがとう」

普通であれば返事が返ってくるなど考えられないのだが、当然の様に返事が返ってくる。

そして、さっきまでの会話の内容からは全く想像できないほど身軽に窓を乗り越え部屋に入って来たのは、

「…夏目にまでばれてちゃ意味ないだろうが、冬琉」

「そうね……もっと化粧を濃くしなきゃいけないかしら…？」

先程までの会話の主要人物、橘高冬琉、その人だ。

最近忙しいだろうに、毎日俺の入院している部屋にやって来る。

それで今の様な体調になっているのだったら別に来なくていい……

一度、体調が悪くなっていた冬琉にその旨を伝えたことがあるのだが、

『いいの。』

心配してくれてるのは嬉しいけど、貴方が動かない分は私が動くって決めてるから』

あっさり断られてしまった。

しかも、冬琉に重荷を背負わせている理由が俺にあるのだから、あの時ほど悔しくて仕方ない時はない。

俺がはつきり止めれば、きっと冬琉は止まってくれる。

学生連盟としての仕事は普段通りにこなすだろうが、ここまで疲弊はしないはず。
けれど、その事が分かっているながらも、今の俺はその言葉を彼女に掛けることができない。

我ながら自分が情けなくて仕方ない！！

「そんなことを気にするぐらいなら、もっと休め」

口から出るのはそんな気休めの言葉だけ。

もっと言わなければならぬことがあるはずなのに、その言葉が俺の口から出てくることはない。

「いいえ……そうね、少しだけ休ませてもらおうかしら」

断りかけた自身の言葉を引っ込め、冬琉は珍しく俺の言葉に頷いた。

「なら、夏目たちが隣の部屋にいるうちに早く帰って……」

トサツ

「少して良いから……お願い」

休むんなら早めに帰った方が良いと思い、サツサと帰る様に促そうとした俺を遮るように、ベッドの端に腰掛けた冬琉が寄りかかってくる。

普段の冬琉であれば、まず考えられない行動。

先程まで纏っていた張りつめた空気を緩ませ、ただ俺に体を預けてくる。

……珍しいこともあるもんだ。

俺に寄りかかっている冬琉は緊張の糸が切れたのか、GDとしての顔ではなく、一人の年頃の少女の顔に戻っていた。

「……ああ、お前が満足するまでそうしてろ」

そんな顔をした冬琉を拒否するほど、俺は鬼ではないつもりだし、何より、

「ん」

仔犬の様にじゃれついてくる冬琉の姿は純粹に可愛いと思えたのだ。俺が見ている横で、冬琉は自身の頭を俺の肩に掛け、目を閉じる。

サワサワ

怪我をしていない方の手で、つい頭を撫でてしまっが、

「……うん……」

冬琉から漏れたのは、美呂が甘えてくる時に漏らす様な甘い吐息のみ。

予想外の反応に、心臓の鼓動が速まるのを感じる。

それでも、止めることなくそのまま撫で続けていると、

「……………すう……………」

余程疲れていたのか、冬琉は寝息をたて始めた。

間近に見える冬琉の肌の色は、夏目の言った通り、確かに青ざめて

いるし、目の下には隈がある。

「ばか、こんなになるまで働きやがって」

そんな冬琉の顔を見て、言葉が漏れる。

別に俺の頼みなんて無視して良いのによ。

時々、こいつの将来が無性に心配になる。

普段は真面目で、ふざけてるくせして、いざとなったら周囲の人間の言葉なんて気にせず一人で突っ走りやがるからな。

「やっぱり、俺がいてやんなくちゃ駄目なのかね」

こいつが起きていたら絶対に口に出せないであろう台詞が口から漏れるが、特に嫌な気はしない。

こいつの寝顔を見ていると、守ってやりたくなくなるし、ずっと一緒にいたいと思う。

今迄抱いたことのない感情だったが、そんな感情を自分が持っていることが全く不思議ではなかった。

だって、自分ではもうとっくに気づいていたんだから。

俺は、こいつ橘高冬琉のことが好きなんだ

って。

54回 嵐の前の静けさ（後書き）

タイトルから分かるように、戦闘直前の話なので短めです。正直幕間でも良いかな、と思っていたんですが、今迄の幕間の傾向からして結構違つと判断したので、やめました。

コンセプトは、甘える冬琉

表現できてる気がしません。

というか、この章だけで言ったら彼女がヒロインかも……

55回 開戦（前書き）

この間の月曜日から大学が始まりました。

久しぶりに行くと、キツイことキツイこと。

まあ、初っ端から自分の担当教授のゼミだったといっこともあるのですが……

55回 開戦

学生連盟との打ち合わせがあった日から、早いもので5日が経過していた。

前回は里見が途中で横入りしてきたので、実際の作戦内容などを煮詰めることは出来なかったが、その後改めて討議した結果、日時と作戦内容は決定。

嵩月、鳳島両家の長や幹部陣にも無事承諾していただけだったので、後は作戦決行まで待つのみ。

……まあ、今日の一九時から決行なのだが。

因みに、今現在、土曜日の午後5時。

つまりは、後2時間ほどで作戦開始なのだ。

「……………はあ、上手くいくかな……………？」

学生連盟との協議の結果、相手の本拠地と思われる場所に潜入するのは、

僕、奏、操緒、氷羽子さん、鳳島の幹部二名、橘高姉妹、雪原さん

の、計9名である。（紫漣さんも入れたら10名）

大多数で侵入すると、即座に気付かれて、防衛網を敷かれる可能性が高いため、少数で攻め込むことになった。

学生連盟からは デストラ 右手 と シニストラ 左手 の最高戦力。

嵩月、鳳島両家からは両家の跡取りである娘たち（+幹部勢）に加え、ハンドラー 演操者でありながら悪魔の家に所属している アシラクライン 魔神相剋者で

あるところの僕。

既に、嵩月組の幹部勢にはペルセフォネを呼び出す許可は（条件付きで）取ってあるので、心配する必要はない。

華島家や敵対勢力の下部組織には、千代原さんを筆頭とした信頼のおけるGDと、両家の総戦力が投入されているため心配する必要はないはずだ。

僕の組内での扱いが気に喰わない嵩月組の反抗的な若い連中が不安だが……その辺りは八伎さんに任せてあるので心配してはいない。

例え造反されたとしても、適切に処理されることだろう。

出来ることなら、穏便に済ませたかったから、（僕も奏との仲を解消するつもりなどさらさらないので）彼らには早々に諦めて欲しかったが、残念ながらそうはならないようだ。

寧ろ、この事件に乗じて裏切る可能性が高まってしまった。

幸いにも少数なのですぐ鎮圧されるだろうが……彼らには悪い事をしたなあ。

取り合えず、考えられる限り、これ以上ない戦力配置だろう……僕を除いて。

氷羽子さんに説明されても、未だに自分がそこまで重要視されている理由が良く分からない。

大体、そう言うのは直貴あいつの役割であって、僕の役割ではないはずなのに。

「ま、やるしかないか」

「はい」

『そうだよ。』

美呂ちゃんたちを助けなきゃ！！」

「キュルウー！！！」

右隣りに奏。

左隣りに操緒。

そして、僕の膝の上にはペルセフォネ。

こんな情けない僕に力を与えてくれた少女たちと、その証。

彼らがいてくれるなら、僕は負けない。

加賀篝にも、部長にも、直貴にも、そして、あの犯人にも。

「時間だし、行こうか」

「ええ」

『うん』

「キューー」

僕が春棟と春棟・闇を掴み、腰に差して立ち上がる。

奏も僕に続く様に、懐剣を懐にしまい立ち上がる。

操緒は宙に浮き上がり、表情を引き締める。

ペルセフォネは鳴くと同時に周囲に炎の魔法陣を描き、その場から消える。

そうして、僕らは目的地に向けて移動を開始した。

敵の拠点があるのは、暮海崎

暮海崎要塞観測所の地下ではないが、ごく近い所にあいつらの拠点は
ある。

まさか、そんな前回からの因縁の地になるとはね……!!

?
?
?
?
?

Side:???

「……うん」

いつもの様に、気だるげに頭を振りながら暗がりの中目を覚ます。
与えられた簡素な寝床は硬く、布団も薄いせいか寝心地は決して良
いとは言えない。
ま、物心がついた時からこんなところで寝ているから、今更言いも
悪いもないがな。

『おはよう、アイン』

「ああ、おはよう、イナンナ。
今何時だ……?」

寝惚け眼を擦りながら体を起こし、宙に浮かび上がる女性に話しか
ける。

『大体、午後6時半ぐらいね。』

いつもより少し遅いけど、特に問題ないわ』

「そうかい、そりゃ何より」

部屋の中に付いている水道まで歩いて行って顔を洗い、口を濯ぐ。水道から流れてきた水は、ぬるく俺の顔に纏わりつくかのような不快感を持っていた。

実際は少々金属臭のする水なだけで、俺の気のせいだろうがな。

「今日のノルマは？」

『そうね……昨日2人消えちゃったから、4人ぐらいいると安心できるわ』

「無茶言つな」

普段通りに今日の目標を告げてくるイナンナに、俺も苦笑しながら普段通りに返事を返す。

最近は学生連盟の連中が本格的に介入し始めてるから一日で4人なんてキツイっての。

『なら、2、3人つてとこかしら』

「ま、それが妥当かね」

取り合えずの目標を決め、扉を開いて部屋から出る。

一歩踏み出した廊下も、部屋と同様に暗い。

人が移動するスペースなので、流石に部屋の中よりは若干明るい。ほのかに明るく暗い廊下に浮かび上がるイナンナの姿は、先程の姿よりもどこか神秘的に見えるが、そんなことを言つと面倒な事にな

るので言うつもりはない。

うあ……んーんーっ!!

建物の外に向けて歩き出そうとすると、廊下の逆の方から女の嬌声が聞こえてきた。

それでも足の向ける方向は変わらず、気にすることなく歩き出す。ここでは情事の音や声など、常日頃聞こえてくるのだから今更気になる事もない。

防音設備なんて外に聞こえない程度にしかなされていないから、内部では丸聞こえ。
慣れてしまつて当然だ。

ああ、ただ、濡れてないのに無理矢理色々チ込まれた奴とか、ダルマにされたばかりの奴が叫んでる時の声なんかはうるさいがな。
取り合えず、やってる奴らには口を塞ぐぐらいの配慮をして欲しい。
俺たちの安眠妨害になるのだから。

ま、個人的には、そんなに叫ぶ元気があんなら、まだまだ余力があるということの証明になつてくれるから、あいつらの遊びも助かっているといえれば助かっている。

「なんだ、まだやってんのか……?」

熱心なこつた。

俺が寝る前からずっとやってるとすれば、かれこれ12時間以上になるわけだ。

……よくそんな気力、もとい精力があるな。

「みたいね。」

これから使う奴らもいるから程々にして欲しいのに……」

「それで止める連中なら苦労しねえよ」

俺にしろ、イナナナにしろ、あいつらに死なれると戦力が減って困るから遊びもほどほどにして欲しいのだが……まあ、流石に連中も組織に所属している以上、その辺りのことは分かっているはずだ。死なない程度に遊ぶはず。

『それもそうね。』

ま、良いわ。

死ななきゃいいんだし、いざとなったら、また連れてくればいいんだもの』

「だな。」

……と言つても、俺たちが働けばいい期間もあと少し。

そうすりゃ晴れて自由の身だ」

そう、物心がついた頃からこの組織に使われ続けて早15年。

ようやく解放されるのだ。

勿論、組織が色々知っている俺たちをそう簡単に自由にしてくれるとは思わないが、その時は上の連中を全部殺して俺がトップになればいい。

表向き連中に従っている様な態度を取ってはいるが、現在のうちの組織の最高戦力は実質俺一人。

油断している所で突然反逆しても、そうそう簡単に鎮圧など出来る訳もないのだから。

『ええ、頑張りましょう。』

私と貴方、二人の未来のために』

「ああ」

何にせよ、今はまだ準備期間。

もう少しで、俺たちは……

そうまだ見ぬ未来に思いを馳せていた時、

ドンッ！！

「『…つつ！？』」

地獄の底から響いてくるような衝撃音が聞こえると同時に、建物が、揺れた。

？
？
？
？

「じゃあ、行きましようか」

「そうだね。」

サツサと済ませて帰るとしようか」

土埃が舞う中、冬琉さんと雪原さんが軽い調子で会話をし、大きな穴が開いた建物の入り口へ悠然と歩き出す。

冬琉さんの背後に浮かんでいた秋希さんの姿は消え、代わりに冬琉さんの影の中から現れているのは巨大な斧槍ハルバードを持った金色の腕。

冬琉さんの機巧魔神アスラ・マキナ、琥珀金エレクトラムの一部だ。

先程建物の裏側を壊したのもこの魔神の力だ。
前回と今回、どちらの世界でも初めて見る機体だが冬琉さんが使役しているだけあって、殆ど隙が見られない。

「じゃ、僕たちも」

「はい」

『うん』

「分かりましたわ」

堂々と隠れる様子もなく歩く冬琉さんたちとは対照的に、僕と奏、それに操緒と氷羽子さんは事前に打ち合わせしてあった方向に向けて、コソコソと隠れながら進んでいく。

鳳島組の幹部の方は冬琉さんたちの支援に回ることになっているので、今回の行動は僕たち4人だけで行うことになっている。

うう、すごく不安だ。

背後から響き始めた戦闘音を受け、僕たちは誰からともなく足の速度を速めることになった。

・
・
・

Side: Toru Kitsutaka

「さてと、上手くいくかしらね、今回の作戦は」

エレクトラム
琥珀金を影の中に戻し、冬櫻を振るいながら建物の入り口付近で暴

れ回る。

どこからこれほどの数が湧いてくるのか、と疑問に思えるほど周囲にはたくさんの敵。

軽く200人程はいるんじゃないだろうか。

「僕が知るわけないだろう？」

今はそんなことを気にするより、目の前の相手を片付けるのが優先だと思うけどな」

『気を抜くなよ、冬琉。』

問題の男はまだ出てきていないが、それでもこの数だ。

『気を抜くと圧殺されるぞ』

「はいはい、ごもつともです」

秋希ちゃんと瑶に窘められながらも、冬櫻を振るう速度は緩まない。相手が集団戦闘に慣れていないから、幾らでも隙は有るし、攻める手段は有る。

まあ、気を抜いたらその瞬間に囲まれて終わりでしょうけど……でも、その緊張感が良い。

学生連盟の役割以外に、和斉に頼まれた仕事もあるけど、それをするにはこの面倒な相手を突破しなきゃいけない。

だから、結局学生連盟の一員としての役割をこなすしかないわけだ。

「ねえ、瑶。

一気に終わらせられないの……？」

目の前にいる男の腕を切り落とし、返す刃で向かって来た3人の胸を一薙ぎ。

3人揃って上半身と下半身が綺麗に分かれ、夥しい血が流れ出す。

返り血が私に掛かる前にそこから離れ、次の敵へ。

今着てるのは洛高の制服で、念のため予備もあるけれどあまり汚したくはない。

……これが悪魔だったら気をつけないといけませんが、今の相手は（身体構造は）普通の人間たち。能力面で注意する必要はないだろう。

そんなことはさておき、和斉との約束を思い出して焦る気持ちが言葉になって出てしまうが、

「何言ってるんだい、冬琉？」

作戦の内容を忘れたのか……？」

「あー、そうだったわね。」

「ごめんなさい、こつも敵の数が多いと、つい、ね」

再び一閃。

今度は頭と胴体が綺麗に分かれる。

私たちに与えられた今回の作戦での役割は囿。

デストラ右手 と シニストラ左手 というこちらの世界で良く知られたネームバリユーを利用してもらう。

まさか、私たちが囿で本命は別の相手だとは思つまい。

「その点に関しては同意するよ」

私の言葉を聞いた瑶も若干うんざりした様子でカルセドニ玻璃珠を操作する。

純白の魔神が腕を振るうと、それだけで猛烈な突風が吹き荒れ、群がっていた敵を大空へと撃ち上げていく。

そして、凡そ10mほど打ち上げられた敵の面々は、見事なまでに

空と地面を逆さにされ、

ズシヤツ!!

勢い良く頭から地面に落下し、綺麗な真紅の大輪の華を地面に咲かせた。

機体の名前が有名だというのは困ったもので、対処方法が準備されやすいものだが、カルセドニーガラス珠に関して言えば、あまり意味がない。

あの機体の能力は【大気掌握】

周囲に常日頃から存在する大気を操れるのだ。

空気の壁や刃を造り出すのは初歩の初歩で、大気中の物質を操れば幾らでも応用が利く。

敵の顔周りだけを真空にしてやれば、相手は呼吸困難ですぐに倒せるし、成分調整をしまえば幾らでも毒を作り出せる。

アスラ・マキナ機巧魔神同士の闘いであっても、大気を操れる分強力なアドバンテージを取れる。

まあ、今はそのことはいいわね。

こっちが優位な事には変わりはないのだから。

「ならサツサと片付けましょうか」

「まあ、良いけど……あまりに早すぎても意味がないから程々にね」

「ええ」

気分が乗ってきたこともあり、更に剣筋は鋭く、剣速は速く。

このまま終わらせてあげる。

その方が、私たちの目的は早く達成されるのだから。

さあ、あなた達に止められるものなら止めて見せなさい。

アスラクライン
魔神相剋者！！

?
?
?
?

場所は变つて、華島家本家付近。

「そろそろ始まった頃でしょうか…?」

周囲を固めるのは、膏月、鳳島両家の精鋭たちと、学生連盟から派遣されたGDたち。

「でしような〜。

こちらは動きがあるまで待機やから、実感はありませんけど」

見張りを各両家の構成員と、2名のGDに任せ、八伎と千代原を含んだ数名は打ち合わせをしていた。

彼らとしては動きがない方が怪我をする可能性も少ないし、魔力を消費しなくていいのでありがたいのだが……

「失礼します！！」

華島本家に動きがありました！！」

「監視対象の各家も同様!！」

そうともいえないらしい。

「あら」

「行きますか」

弛緩していた空気を一変させ、彼らの思考は戦闘に。

「ええ。」

頑張ってや、瑤、冬琉」

「お嬢様を頼みましたよ、夏目さん」

それでも、千代原と八丈は待機していた場所から移動する直前、そんな台詞を呟いた。

55回 開戦（後書き）

ようやく開戦。

2〜3回で終われば良いな〜

戦闘描写を書くかどうかしても長くなるので結構不安。

ちなみに、文中にある“ダルマ”の意味ですが、両手両足を根元からなくして、動くことを出来なくした状態のことです。

想像するとグロいので、考えすぎないようにすることをお勧めします。

56回 囷・潜入・追跡（前書き）

活動報告に書きましたが、風邪をひいて投稿が遅れました。すいませんでした。

大体治ってきたので、布団に埋もれながら書き上げました。

まあ、もうかなり事件も終盤ですので、早めに書き上げられたらなと思います。

56回 囷・潜入・追跡

建物の裏側から聞こえる悲鳴や落下音など様々な音を聞きながら薄暗い廊下を駆け、僕たちは建物の中枢を目指していた。

目指す先はこの組織の頭脳とも言って良いであろう会議室と、その周囲にあるであろう幹部連中の居住区画。

この組織は、明確なリーダーがいない代わりに、7名程の幹部たちが会議で活動方針を決めているのだ。

明確なトップがないから潰しにくい。

実際、今迄学生連盟が手こずっていた理由としてこれが大きい。

例えば6人捕えたとしても、残りの1人がまた6人集めてすぐに復活してしまう。

だが、事前に回ってきた情報によれば、今日は全員がこの建物に揃っているはずだし、こんな事態になったんだから、ほぼ間違いなく全員が会議室に揃って対応策を検討しているはず。

そこを叩く！！

ここで全員を捕縛すれば、実質組織は崩壊。

唯一の懸念は例の魔神相剋者だが、そこは後処理で学生連盟に任せることになっている。

……でも、こんな状況で交戦しないはずがない

下手すれば、中枢に向かう途中で僕らが出会う可能性もある。

魔神相剋者の恐ろしさを知っている身としては、出来れば会いたくないものだ。

「すみません、私はここで」

とある通路の分かれ道。
唐突に氷羽子さんが口を開いた。

「ええ、お願いします」

「美呂ちゃん達を、よろしく」

『頑張つて』

特に驚くこともなく、僕たちは返事を返す。

ここから氷羽子さんは、攫われた雌型悪魔たちの救出に。
一人では危険だけれど、今は頼るしかない。

「はい。」

では、また後で」

そう言つて、暗い廊下の奥に向かつて駆けていく氷羽子さん。

仄かに光る灯りを反射した銀色の髪先が暗闇の中に尾を引く様に流れ、どこか幻想的な光景の様だった。

こんな時だけど、少し見惚れてしまう。

「私たち、も、急ぎましょう」

「あ、ああ。」

そうだね」

そんな僕に、奏がやや不機嫌な様子で声を掛け、腕を引っ張り、走り出す。

……やっぱ、バレてたか……

若干気まずい空気を漂わせながら、僕らは廊下を走り続ける。
その先に何かがあるかも知らず。

? ? ? ?

Side: Toru Kitsuataka

『……おかしい』

私と瑠が目の前にいる敵の対処をしていると、秋希ちゃんが戸惑ったかのような声を上げた。

「どうしたの？」

勢いは減ったが、まだまだ向かってくる相手を切り、蹴り、時には殴り飛ばしながら秋希ちゃんの言葉に返事を返す。

既に周囲は敵の身体から流れ出した血で真っ赤に染まり、私や瑠の服や体も敵の返り血で染め上がっている。

……一応気を付けてはいたんだけど、仕方ない、か。

『これだけ騒いでいるのに敵の演操者^{ハンドラー}が姿を見せない』

「そつえばそうだね」

^{カルセドニ}玻璃珠を遠巻きに警戒する敵を睥睨しつつ瑠が呟く。

……確かに、かれこれ5分か10分くらい騒いでいるというのに相

手の主戦力が出てこないのはいくらなんでもおかしい。

もし仮に 本当に仮に この、ただ群がり襲ってくる烏合の衆にリーダーがいたとして、そのリーダーにこの場の対処が一任されているというのなら分らないでもない。

それなら、リーダーが参戦を断って中枢部の警護に問題の人物を任せたと考えられる。

もしくは、件の演操者ハンドラーをこちらが消耗するまで取っておき、ある程度私たちが疲れてきたら投入するというのはありだし、誰でも思い付く策だ。

が、

「何か考えがある、ってわけじゃなさそうよね……」

『むう』

際限なく湧き出しては、続々と戦線に加わっていく敵の構成員たちを見ると、そんな策があるとは考えにくい。

「……あちらさんが自分の意思で護衛に回ってるのか？」

魔神を使い敵を文字通り吹き飛ばしながら瑤が答える。

「それにしたって、あの機体の能力なら“一機ぐらい”回してくるでしょ」

本人が来ることはなかったとしても、尖晶スレネルと使い魔ドクターのコンビを一組み合わせぐらい回してくると思うのだが……

『単に向こうが物量で押し切るうとしているという案は……』

「「ないわね（な）」」

『それもそうか』

秋希ちゃんらしくもない馬鹿げた案を、瑠と二人、揃って切り捨てる。

敵だっていい加減物量でどうこうなる問題じゃないと気付いているはず。

現に、初めの頃は勢い任せに突っ掛かってきた連中が守勢に回り出している。

……マズイわね。

「どうする、瑠？」

戦場実際に立っているもう一人の仲間を確認の言葉を送る。

秋希ちゃんや鳳島の幹部の方々に聞くのも良いけれど、今この戦場で最も危険と見なされているのは瑠だろう。

アスラ・マキナ
機巧魔神という巨大な機械仕掛けの悪魔に比べれば、私なんて所詮一人の人間にすぎないのだから。

「そうだね……固まられると面倒だ。」

防衛陣を築かれると厄介だし、攻めるとなると、それは僕たちの役割ではない。

……仕方ない、仕掛けるなら今だろう」

確かに、一ヶ所に敵が集まりつつあるが、まだ陣形が整えられていない今なら絶好の的だ。

それに囿である以上、敵が寄って来てくれないと意味がない。

防衛陣など築かれては戦力が分散してしまい囿の意味が半減してし

まう。

……そういう意味では、早めに気付いて良かったと思う。

「じゃ、私たちがやるわ。

いくわよ、秋希ちゃん」

まあ、人がどれだけ陣を敷いたところで、この程度の人数だったら
アスラ・マキナ機巧魔神の前では殆ど意味をなさないからあまり関係なかったりするが。

『ああ、一撃で決めるぞ』

これまで散々猛威を揮ってきたカルセドニ玻璃珠に変わって力を揮うのは、私たちの悪魔 エレクトラム琥珀金。

秋希ちゃんが虚空に溶けるように消え、私の影が広がる。その異常に気付いたのか、敵が騒ぎ出すがもう遅い。

「来なさい、エレクトラム琥珀金」

私の言葉と同時に勢い良く広がる影。

そして、光さえ喰らう漆黒の虚無の色に変わった私の影から浮かび上がってくるのは金色の魔神。

既に右手に握った斧ハルバード槍を大きく振り上げ、今にも集まり出した敵に振り下ろさんとしている。

更に、影を引き裂き、浮かび上がってきたその魔神からは奇怪な音が漏れ出していた。

『闇より重き、天蓋を震わせし……其は……』

初めは秋希ちゃんの声だった“それ”は、次第に擦れ、機械の魔

神内部の歯車が絡み合い、擦れる機械音へと変わっていく。

其は、科学の斧が崩す惑星^{ほし}』

完全に機械音のみとなったそれは言葉を最後まで唱え、一つの呪文と為す。

呪文が完成した途端、振り上げていた斧槍^{ハルバード}の先端部に膨大な魔力が集められる。

悪魔ではない私にも分かるほどに強大な魔力。

集められた魔力があまりの圧力に軋み、周囲の空間が悲鳴を上げ、そして、

「やりなさい」

私が一言告げると、金色の魔神は集まっている敵目掛けて何の躊躇いもなく、その魔槍を振り下ろす。

勢い良く振り下ろされたそれは見事に敵の中央部に激突し、周囲に轟音を響き渡らせた。

圧倒的な破壊の力に曝された敵の面々は悲鳴を上げる暇もなく、蹂躪される。

土煙が晴れると、力の振るわれた光景が見えてきた。

斧槍^{ハルバード}が激突した先にいたであろう人間たちは木端微塵に吹き飛び、まだ影響の少ない人間でも激突の衝撃と琥珀金^{エレクトラム}の能力^{ちから}があるから、生きていたとしてもまず戦闘不能になっただけで間違いはない。

問題は……

「や、やり過ぎちゃったかしら……」

建物のかなり重要そうな柱を完全に根元から破壊してしまったことだ。

中に夏目くんたちがいるのに……まあ、大丈夫よね？

「相変わらず、一撃の破壊力だけなら最強だね」

「うるさいわね。」

「良いじゃないの、これで先に進めるんだし」

やたら嫌みたっぷりの瑤の言葉に琥珀金エレクトラムを影の中にしまいながらジト目で睨み返すも、あっさり涼しい顔で流される。

それはともかく、ここにいる敵は全て片付いた。まだ幾らか残っていた敵も、いつの間にか鳳島の方たちが片付けてくれている。

「じゃあ、私たちも中に……」

一度周囲を見渡し、ヤリ残しが見当たらないのを確認して先に進むとすると、

『待て、冬琉』

秋希ちゃんに呼び止められる。

「？」

敵も残っていないはずだけど……？

若干疑問に思いながらも、姉の言葉に従い、周囲に目を回し、耳を敬てる。すると、

「……っ！？」

誰かがこちらに向かってくる音が聞こえた。
右でも、左でも、ましてや後でもない。

前

建物内部から誰かがこちらに向かってくる足音が聞こえる。

しかも、先程までの烏合の衆とは違う雰囲気と、何か巨大なモノが床を歩く音と、翼を羽ばたかせる音。

そうして、建物の中からそれらは姿を現した。

浅黒い肌を持つ青年と、それに付き従う機械仕掛けの魔神と、翼を持った使い魔ドクターの姿。

「お、いたいた。

俺の担当はこいつらか」

それは、この建物内にいるはずの魔神相剋者アスラクラインの姿で相違なかった。

?
?
?
?

地図を頼りに廊下を駆けける。

もう、目的の階には5分程前に辿り着いているというのに、肝心の会議室までの道のりが複雑すぎて未だに到達できていない。
だが、

「おかしい……」

「はい」

異常はすぐ感じ取れた。

『誰にも会わないね』

薄気味悪そうに操緒が言う様に、この階に辿り着いてから誰にも会わない。

嚴重な階であるのなら、警備の人間、或いはそういった装置が設置されていてしかるべきだが、それらが全く見当たらない。

いや、警備の装置ならいくつも見かけたが、どれも完膚なきまでに破壊し尽くされていた。

僕たち以外にも侵入者がいるのだろうか……？

敵の多い組織らしいから考えられないことではないが……

そんな薄気味悪い空気を感じながらも廊下を駆け抜け、

「と、ここだ」

目的の部屋の前に辿り着き、扉を挟んで僕が右側、奏が左側の壁に背を付け改めて地図を広げ確認する。

「……間違いない、です」

確認し終えた奏がそう言うてくる。

僕も確認したし、確かに、間違いないが……それにしても中の音が全く聞こえてこない。

こんな状況下なのだから人がいないはずがない部屋なのだが……やはり、何か起きている。

「じゃあ、扉は奏の炎でお願い。
入ったら真っ先に退路を潰して逃げ場をなくす。
良いかな？」

「はい」

やや焦る気持ちを抑え、扉を間に挟んだ状態で、奏と簡単な方針を
確認し合い、

「なら、3つ数えてから」

「ええ」

突入の準備に入る。

僕は春棟と春棟・闇を構え、奏の後ろに立つ。

そして、奏は擬態を解いて、右手に地獄の業火を纏わせながら扉の
前に立つ。

「3」

奏の右手にある火球が一際大きくなる。

「2」

大きくなった火球が奏の手の平サイズにまで圧縮される。

「1」

圧縮された火球が猛り狂い解き放たれる時を今か今かと待ち望んで
いる。

「0」

僕が言った瞬間、奏は右手を自身の前に突き出し、掌にあった火球を解き放った。

圧縮から解き放たれた火球は勢い良く前方の扉に襲いかかり、爆音とともに扉を喰い破る。

……すごい！！

今迄見てきた奏の焰月や炎舞も綺麗で圧倒的だったけれど、今使った力は圧倒的に密度や破壊力が違う。

それだけ奏も鍛錬を積んでいたってことなのだろう。

と、感心してる場合じゃないな。

扉が吹き飛んだのを確認すると同時に、僕と奏はすぐさま部屋の中に入り、それぞれ構えを取り室内を見渡す。

煙が漂っているせいもあってか、室内の見通しは決して良くないけれど、それでも人影や物影ぐらいなら見える。

逃げ出す奴がいた場合は、すぐに対応できるようにしているが……何故か誰も動こうとしない。

いや、一人いた。

窓際に立ち、身を乗り出している人物が。

「くっ、待て！！」

気付いた瞬間僕は駆け出していた。

いや、駆けだそうとして。

ガッ

「うわ!？」

何かに躓いた。

よろめきながらもなんとかバランスを取り、幸い床に激突すること
はなかったが、その間に窓際にいた人影は消えてしまっていた。

「くそっ!！」

急いで窓辺に駆け寄ると、人を一人乗せた大きな鳥と思わしき物体
が海の方へ向かって飛んで行った。

あれか!？

急げばまだ間に合うはず。

幸い、今は僕と奏、それに操緒しか動く人はいないから、ペルセフ
オネを呼べる。

「と、智春……くん……」

『トモ……』

「え?」

僕が行動に移ろうとしていた時、後ろから二人の少女たちの震える
声が聞こえてきた。

何かあったのかと思い、振り向くと、そこにあったのは、

血の海

煙が消え、部屋の細部が見えるようになって見えたのは、床一面人

の血で真っ赤に染まり、死体が7つ部屋の中に点在している部屋の様子。

椅子に座ったまま殺されているのは3人。

3人とも首を鋭利な刃物で切り付けられたのか、見事なまでに真一文字に首を切られ、そこから夥しい量の血が流れ出している。

机に倒れ伏しているのは1人。

うつ伏せに机の上に倒れ込んでいるから一見寝ているだけにも見えるが、後頭部に大きな穴。

どうやら一撃で仕留められたようだ。

床には3人。

それぞれ頭部が大破していたり、胸元をくり貫かれたり、上半身と下半身が分離していたりと、死体ごとの特徴はあるが、共通しているのは足。

いずれの死体も両足の踝より下は全て消し飛んでいるか、ぐちゃぐちゃ、或いは床に縫い付けられている。

どうやら逃げられない様にした上で殺した様子。

僕が先程躓いたのも、床に転がっている死体のうちのひとつだったようだ。

「……さっきの奴か」

腹の底から湧き上がる吐き気を慣れた調子で抑え込み、両手に握った剣を鞘にしまう。

「はい、多分」

まだ顔が青いが、多少調子が戻ったのか奏が懐剣をしまいながら傍に寄って来る。

『うおえ……顔は確認できてないけど、7つあるから対象となっていた人間で間違いないと思う』

真つ青な顔の操緒がフラフラと宙を漂いながら教えてくれる。

……確かに、7つあるな。

けど、一応顔の確認はしとかなきゃいけないだろう。

犯人も追いかけないといけないが、ここで人違いがあっては困るのだ。

「奏、写真だけ貸して。

確認は僕がやるよ」

「だ、だいじょぶ、なんですか？」

心配そうに聞いてくる奏に、

「ん、まあ、この一年で何度かこういう機会はあったからね」

普段通りの調子で返事を返す。

ここで重苦しい返事を返しても仕方ない。

こんな時ばかりは嵩月組の研修に付いて行って良かったと思う。

……正直、死体には未だ慣れてないけれど奏や操緒よりはマシなはずだ。

一応言っておくが、僕自身が誰かを殺したということはない。

あくまで、死体に御目にかかる機会がそれなりにあったというだけの事だ。

「……すみません、お願い、します」

果たしてその“すみません”は何に対しての謝罪だったのか。

ただ単に、こんな仕事を僕に任せる申し訳なさか、それとも……まあ、考えても仕方ない。

「了解」

奏から渡された写真を片手に、サッサと確認作業を済ませて行く。頭部が大破している奴は分かりにくかったが、確かに対象の7人だった。

にしても、こんなタイミング良く全員が死ぬなんて。

疑問に頭を悩ませつつも、体は勝手に次の目的地に向かって動いている。

「じゃあ、さっきの奴を追いかけようと思うけど……それで良い？」

「はい」

『……うん、というか早くして』

僕と違って、操緒はあまりこういう事には関わっていなかったからやはりキツイのだろう。

それは僕も分かっているし、僕だってあまりこんな場所に長居するつもりはない。

「了解。

おいで、ペルセフォネ」

僕が窓際に移動して呼ぶと、建物の外に炎の魔法陣が描かれ、翼を広げたペルセフォネが宙に現れる。

「キュルウウー……ッ!!」

現れた彼女？は甲高く鳴き、窓辺に近づき、僕と奏が乗りやすいように調整してくれる。

「奏」

「はい!!」

僕が先にペルセフォネに跨り、続いて奏が。

落ちない様にだろうけど、僕の腰辺りに腕を回してギュッと抱きついてくる。

ああ、背中に柔らかくて大きなモノが……!!

と、取り合えず、あまり背中に神経を回さない様にして、更に、下を見ない様にしながら指示を出す。

「た、頼む、ペルセフォネ。

さっきの奴が逃げた方角に向かって飛んで、見つけたら、そいつの100m手前ぐらいで降りてくれ」

「キュウ!!」

主人と母親を乗せた使い魔ドクターは首を縦に振って頷く様な仕草をして、大きく翼を羽ばたかせる。

しっかり空気を捉えた翼それは大きく動き、自身の身体をより高度に押し上げて行く。

頼むぞ、ペルセフォネ!!

?
?
?
?
?

S i d e : H i w a k o T o r i s h i m a

夏目さんや奏たちと別れ、私一人で建物のより深部へ。

正直言つて不安で仕方ないですが、二人には私よりも重要な仕事
回っているのだから仕方ない。

勿論、他の方々の仕事がどれだけ大事なのかも知ってはいますが、
出来ればもう一人ぐらい回して欲しかった。

「さて、と」

事前に家から持ってきておいた銃器類や刃物を確認して扉の傍にあ
る壁に寄りかかる。

私の戦闘の主体は氷を使ったものだけけれど、これから潜入する場所
では使えない可能性が高い。

雌型悪魔を捕えている場所であるのなら、魔力を使える様になどし
ていないだろう。

念のため、魔力無効化への対抗策も持ってきてはいるが、これには
あまり頼りたくない。

効果も制限付きだし、未だ試験運用的な側面が強いからだ。

なので、まずは効果のほどを確認して、それから効果を及ぼしてい
る術式の中枢を破壊するべきだろう。

手に持った拳銃を一度確認して弾がしっかりと装填されていること
を確認する。

一応使い方は習っているがあまり自信はない。
こんなものよりも、直接斬って凍らせた方が確実なのだから。

「そろそろ行きますか」

バレない様に扉を音もたてず開き、出来た隙間へと身を滑り込ませる。

一度建物の図面を確認したのだが、逃げられない様に作っているせいか出入り口がここしかなかったのだ。

入った瞬間に襲いかかってくる、噎せ返るような性臭と、血の匂い。

顔を顰めながらも周囲に警戒の視線を送り、先へと進む。

ヤツテいると聞いてはいたから今更怯むことはない。

そう考えると、奏や操緒さんでは少しキツイ仕事だったかしら。

あちらがどんなことになっているか知らないですけど、女性としてはあまり立ち入りたい場所ではない。

念のため魔力を使って氷を生み出そうとするが、

「…………無理、ですわね」

予想通り。

氷が生みだされることはなかった。

特別驚きもせず、足を部屋の中央へと進める。

冬琉さんたちが騒がしくやってくれているおかげで、幸い、ここに敵は見当たらない。

状況が状況だから分かるけれど、一人ぐらいいた方が良いと思うのだが…………

まあ、私としては好都合なので、サツサと魔力無効化の機能の中枢を叩くのでしょうか。

もし結界なら起点を見つけて破壊すればいい。

そう思い、私は闇の中へと身を躍らせた。

所々に見える闇の中で仄かに輝く粒子を出来るだけ視界に入れない様にして。

?
?
?
?
?

智春たちが建物内に潜入し、冬琉たちの戦闘が始まっていた頃、烈明館医大付属病院から二匹の鳥が飛び立った。

片方は氷、そしてもう片方は影。

向かう方角には、暮海崎。

56回 囷・潜入・追跡（後書き）

実質戦っているのが、未だに冬琉と瑤だけ。

次回からは智春たちも戦うことになると思いますが……どうなることやら。

57回 望みを得るために（前書き）

また遅くなってすみません。

しかも、今回は然して大きな理由がないという（コラ

まあ、細かい理由を挙げれば色々あるんですが……

そんなこと（！？）はともかく、割と鬱展開の予感があるので、苦
手な方はご遠慮ください。

あ、今回じゃなくて次回辺りの予定ですが

57回 望みを得るために

Side: Toru Kitsutaka

「ほらほらほら、どうしたどうした!？」

「くっ!！」

絶え間なく空から降り注ぐ敵の攻撃を、私と瑠は避け続ける。

空を優雅に舞う敵の使い魔トウターが放っているそれは、泥。

既に周囲の地面は泥濘だらけとなっており、動きにくいつたらない。今のところ大丈夫だけれど、このまま逃げ回るだけなら体力も減って、転び、相手の放つ泥弾の餌食になってしまうだろう。

水分が少なく土塊に近い様な密度の濃い泥弾もあれば、水分ばかりで密度のやたら薄い泥弾もあり、バラバラだ。

前者は当たったら言うまでもなくマズイ。

多分一撃で死ぬ。

後者は水分の方が多いから直撃してもすぐにどうこうなることはないだろうが、こちらは避けるたびに周囲に大量の水をばら撒き、泥濘を飛躍的に増加させていく。

しかも、攻撃方法が投射や放出などではなく落下であるため、殺傷力の高い密度の濃い泥弾ほど勢い良く降ってくる。

……不幸中の幸いとも言えるのが、降ってきてるのが泥だということかしらね。

土弾や岩弾であれば、落下の際に割れて破片が飛んでくる可能性が高いが、泥弾であれば落下すると飛沫となってくれるため、余程密度の濃い弾出ない限りあまり注意しなくて良い。

……まあ、どちらにせよ面倒な相手であることに変わりはない。

普通の使い魔ドクターであればここまで無制限に力行使することは不可能だろうが、相手は魔神相剋者アスラクライン。循環が止まるまでこの状態が変わることはそうないだろう。

「やれる、瑶!？」

泥弾が雨霰と降る中、大声で瑶に呼び掛ける。

敵に聞こえる可能性があるので取るべき手段ではないのだろうが、泥弾の落下音のせいで大声で話しかけないと声が届かないのだ。

「……30秒くらいは欲しいね」

『無茶言ってくれる』

「けど、やるしかないわね」

私たちの力では残念ながら空を舞うあの使い魔ドクターを仕留められない。だけど、循環の環を断つ事なら出来る。その間に、瑶があドクターの使い魔を黙らせてくれれば良い。

「行くわよ!!」

「了解」

敵の攻撃の合間を縫って、私は魔神や演操者ハンドラーの男たちがいる方へと駆け抜ける。

何度か泥濘に足を取られそうになるが、耐えて走り抜ける。

「冬櫻、抜刀」

「お？」

愛刀を抜き放ち、魔神の足元にいた男に斬りかかるがあっさり避けられる。

まあ、そうだろう。

あんなに一直線に来ているのだから避けられて当然だ。

「はは、オレを殺るか。」

けど、残念だな、“オレ”は“俺”じゃない」

「でしようね」

元よりこちらはそのつもりだ。

ここでこいつを仕留めたところで戦局に大きな変化は起きないことぐらい想定済み。

巻き込まない様になっているためか、ここは泥が降っていないので、密着していれば頭上は心配しないで済む。

だけど、これだけ近付けば、

「エレクトラム
琥珀金！！」

魔神の魔槍を一瞬で敵の魔神に叩き込むことができる。

「ちい、それかよ スビネル
尖晶！！」

「遅い！！」

相手も気付き、スビネル尖晶に回避行動を取らせよつとするが、それより速く私の影から現れた金色の巨腕が持ったハルバード斧槍が敵の魔神に向かつて

いく。

殺った

と思ったが、

「つつ!?!」

背後に悪寒を感じてすぐに前方に向かって前転をし、その場から離れる。

それでも金色の魔神の腕は勢いを落とすことなく魔槍を振り抜き、見事に目標を破壊した。
のだけれど、

「惜しかったな」

「……………」

私のさっきまでいた場所には破壊したはずの魔神の腕。

あの一瞬で……

このスピードには驚愕せざるを得ないが、

目的は果たしたわね

取り合えず瑶の援護は出来た。

仕留められなかったとしても、30秒ぐらいは稼げてるわよね?.

「えっ、と……」

次は折角潰した環を復活させない様に、

攻めないと

相手に余計な行動をさせない様に、攻めて攻めて攻めまくる！！

? ? ? ?

「はっ、はっ」

逃げた敵を追い、僕たちは海辺の雑木林を駆け抜ける。

ペルセフォネを林の外に着陸させ、そこから走って向かっているのだ。

既にペルセフォネは姿を消し、僕と奏と操緒、三人で敵が逃げたであろう方向へと足早に進んでいく。

海から吹きつける潮風に紛れて微かに漂ってくるのは、異臭。

今迄に嗅いだこともないくらいに濃厚な獣と血と魔力、そして死の香り。

それが分かった瞬間怯み、逃げ帰りそうになる自分の足を必死に押し留め、藪を掻き分け進んでいく。

だが、進む程に香りは濃くなり、より濃厚な死の気配が足元から頭部目掛けて這い上って来る。

頭の中で警報が鳴る。

イクナ、ソコカラサキハ、ジゴクダ

本能というより経験。

この一年半で秋希さんや冬琉さんから叩き込まれた幾通りもの死の気配。

青月組の一員として介入してきた悪魔同士の争い。

それらの少ないながらも濃密な経験が僕に教えてくれる。

そこから先は自分には早い、行っても無駄に死ぬだけだ
と。

それでも足を止めることなく僕は突き進む。

本来であればGD程の手だれが数人がかりで挑む相手だ。

僕程度では力不足になってしまうなど、百も承知。

だが、僕には奏が、操緒が、ペルセフォネが力を貸してくれる。
それなら、

負けるはずがないじゃないか!!

心を震わせ、雑木林を駆け抜ける。

そして、ようやく林から抜け出ると、そこには、

「…………準備万端、か…………」

「ですね」

『うはー、スゴイスゴイ!!』

目の前に並び立つ11体の尖晶スピネルとその演操者たちハンドラー、それに付き従うは、主人とは違い様々な姿形の11体の使い魔たちトウター。

それぞれが既に慟哭する魔神クラインク・アスラを行い始めており、目に見えて敵の力

量が上昇していくのが分かる。

雷が爆ぜ、水が噴き上がり、空気が渦を巻く。
血の海から大小様々な異形の怪物が湧き出せば、それらを狩り尽くさんとばかりに砂が吹き荒れる。

草木が意志を持ったかのように撓り、地面から腐敗が広がっていき、どこからともなく腐敗を引き裂きマグマが噴き出す。

かと思えば、すぐに冷えたマグマから石の巨人が立ちあがり、それらを覆う様に影が纏わりつく。

敵の全力なのだろう。

アニアから聞いていた通り、多数の雌型悪魔と契約した魔神相剋者アスラクラインにとってはこれ以上ないくらい強力な能力だ。

いや、この能力の機巧魔神アスラ・マキーナだったからこそ多人数と契約したのかもしれない。

今となつては分からないことだが、何故この機体が敵の手に渡ったのか。

スピネル アスラ・マキーナ
尖晶の機巧魔神としての能力は【物質模倣】

それもただの模倣コピーじゃない。

模倣する前の物体と寸分違わず、意識があればそれさえも完璧に模倣コピーする能力こちら。

魔力で可能な限り幾らでも創り出すことができる。
劣化要素の無い分身の術みたいなものだ。

単体としては弱い能力だが、数多の雌型悪魔と契約した魔神相剋者アスラクラインであれば、これほど上手く使い魔トウターを使える能力こちらはないだろう。

何故なら、一つの機体で数体の使い魔トウターと慟哭する魔神を行ったりしたら、まず機体が持たない。

だが、一つの機体に一体の使い魔トウターであるのなら十全に力を行使でき

るし、魔神相剋者特有の問題である循環が断たれる可能性も減り、
極端な消耗もタイミングさえ考えれば克服できる。

それに、副葬処女の魂が削られるのも、最初の能力発動と維持だけ
で良い。

後は模倣した機体に納められている副葬処女の模倣品たちの魂を削
れば、本体に影響はない。

まさにこの演操者の為にあると言って良い機体ではないだろうか。

……正直言つて、非常に腹の立つ機体だが、今更アニアに文句を言
つたところで仕方ない。

「来たな、邪魔虫共」

僕たちの姿を確認すると、中央にいる青年が笑いながら口を開いた。
学生連盟の本部で見せられた写真通りの姿。

見かけからは想像もできないほど流暢な日本語で話す姿には、違和
感を抱かずにはられない。

そして、今ここで話しかけて来たということは、逃げるつもりはな
い、と言うことだろう。

てつきり、あの現場から逃げたのは、そのまま逃走するためかと思
っていたのだが……どうやら違うらしい。

いや、まだコピーで創り出した魔神達を囿にして自分が逃げる可能
性もあるな。

「……あなたが“あれ”をやったのか？」

奏や操緒たちという普段の自分から、嵩月組の一員としての自分に
切り替える。

声は低く、顔は面の様な無表情へ。

決してこちらの心意を悟られない様にしつつ、徐々に殺気を洩らし

ていく。

「あれ”……?”」

僕の問い掛けに対し、目の前の魔神相剋者アスラクラインは不思議そうに首を捻る。まるで、本当に僕が何を言っているのか分からないかの様だ。

「惚けるなよ。」

あんたが幹部の連中を殺したんだろ……?”」

自分でもゾツとする様な冷たい声。

何となく自分が直貴あいつに近付いている様な気がして良い気はしないが……今更変えるつもりもない。

そんな僕の冷たい詰問を受けても、

「いや、知らんけど……」

男は惚けるばかり。

まあ、惚けるだけならまだ良い。

幹部殺しをやっついていようがやっつてなかつてもどちらにせよこいつは捕えることになっているのだから。ただ、

「けど、そうか!!」

あいつら死んだのか!!」

僕の齎した情報を初めて聞いたかのように振舞い、無邪気に喜んでいる姿を見ると違和感を感じずにはいられない。

……僕らは何かとんでもない間違えを犯しているんじゃないか……？

この世界で初めてまともにもやり合うことになった強敵と対峙しているだけで感じる緊張感。

それに新たに加わった焦燥感。

二つのマイナス方向の思考は重なり、絡み合い、僕の中から集中力を奪っていく。

「ハ、ハハハハ……ってことは、お前たちさえ消えてくれれば本当に俺たちは自由になれるんだな!!」

高らかに笑っていた目の前の男は唐突に笑いを止め、玩具を前にした子どもの様に無邪気な顔で僕たちの方を睨んできた。

視線に乗って向けられたのは、明確な殺意。

そして、男の殺意に同調したのか周囲に控えていた魔神と使い魔たちが一斉に動き出す。
ドゥター

「っ、来ます!!」

奏は懐剣を構え、

『トモ!!』

操緒は虚空へと消える。

「ああ、行くよ!!」

来い、? 鐵!!」

そして僕は、影の中から魔神を呼び出す。

僕の呼びかけに応え、影は漆黒の虚無の色へと変化し、夜の浜辺に広がっていく。

影から浮かび上がってきたのは、右手に銀色に輝く巨大な剣を持ち、左手には闇を纏わせた魔神の姿。

他の魔神は全身が一つの色で大体統一されているが、白銀のパーツを流用しているため、所々に白い装飾があるのには少々違和感がある。

今迄の戦闘で使った様な部分召還ではなく、魔神の機体全てをこの世界へと浮かび上がらせる。

「……へえ、幻の黒鐵がこんなところで見れるとはね。

ただど関係ない……ぶち殺す!!」

一瞬相手は僕の呼んだ機体名に怯んだけれど、すぐさま魔神たちに指示を出し、使い魔たちと共に一斉に向かってきた。

本来だったなら、まず勝てない相手だけど……何だか、負ける気がしないね!!

「行くよ、奏、操緒!!」

「ええ」

僕の呼びかけに奏ははつきりと返事を返し、操緒は？鐵の機械音を響かせることで答えてくれる。

さあ、魔神相剋者アスラクラインとしての本当の強さ、見せてあげようじゃないか!!

?
?
?
?
?

Side :

「……後は、あいつだけ」

物陰に身を潜めながら時が来るのを待つ。

眼下では私たちの娘たちが理不尽な父親に酷使されているというのに、何も感じない。

ただ、早く現状が変わる事だけを望んで待ち続ける。

私は能力が役に立つという理由から殆ど拘束されていなかった。

だから、こうして動けるわけだけど……今となつては、それが良い事だったのかどうか分からない。

「……」

月が浮かび始めた夜空に向かって右腕を翳す。

けれど、手は影とならずに月の光を私の顔へと導いてくる。

もう痛みもないし、熱もない。

動かすことは出来るし、物を触ったりすることは出来るけれど、感触は消えた。

もって後4、5回程度の能力行使にしか身体は耐えてくれないだろう。

けれど、それで構わない。

必要なのは、移動と刺殺、それだけ。

悠長に戦闘をこなせるほどの時間はない。

だから、最後までもって私の身体。

それさえできれば、私はもう消えても良い。

私自身の為にも、彼女たちの為にも、あいつは、あの男だけは殺してやらないと気が済まない。

それが、今の私に残された唯一の救いなのだから。

だけど……一度で良いからもう一度、会って話したかったな……

「兄様……」

57回 望みを得るために（後書き）

尖晶の能力は割と思いつきだったり。

けど、上手く使えば凄い強いです。

多分、加賀簞辺りになら勝てるんじゃないかな……？

薔薇輝のあの鎖って数に制限あったはずですから。

ただし、白銀とか玻璃珠みたいな殲滅戦が得意な相手には弱いです。

数でおしても無意味ですから。

……勿論、蒼鉛には勝てますよ？

58回 VS尖晶（スピネル）（前書き）

……執筆が非常に滞っております。

「遅れてすみません」という台詞自体既に3連続ぐらいな気がします。

改めてすみません。

戦闘描写が非常に苦手だということを再認識したと同時に、話を進ませたいのに進まないジレンマ。

気づけば一月经過している始末……俺のバカ！！

P.S

総合評価がいつの間にか1000ptを超えてました！！

まさかここまでいくとは思っていなかったなので、感無量です。

皆様のこの期待に応えられるよう頑張っていきますので、今後ともよろしく願います。

58回 VS尖晶（スピネル）

Side: Hiwako Torishima

「……これは……」

眼前に広がる光景に息を呑む。

目の前にはうず高く盛られた白く輝く粒子の山。

それが一つだけではなく幾つも部屋の中に鎮座しているとあれば、言葉もない。

元々犠牲になった少女たちの数自体は報告で聞いていたから分かっていたけれど……

「……」

改めてその犠牲の大きさを眼にすると、以前の私の理解などふざけたものにしかならない。

これならば、まだ実際に死体を目にしていた方が幾分マシだったかもしれないですわね。

死体の山というのは、それはそれでえげつないものだけれど、この粒子の山に比べれば……

これだけの山を幾つも作ろうと思ったら、それこそ100人では済まない数の雌型悪魔が非在化しなければ作り上げられない。

予想していた以上に悲惨で、凄惨な光景は、どこか幻想的な雰囲気も相俟って現実感を希薄のものへと変えていた。

「……急がないと」

いつまでも呆けている訳にはいかない。

自身を無理矢理奮い立たせ、粒子の山の間を潜り抜け、奥へと急ぐ。今迄感じていた焦燥感がより激しいものになって私を攻め立ててくるのを感じながら。

? ? ? ? ?

「 ? 鐵」

迫り来る10体の使い魔ドクターと10体の機巧魔神アスラ・マキナたちを視界に収めながら、僕は?鐵に指示を出す。

僕らと彼らの距離は目算で凡そ50m。

使い魔ドクターたちにしてみれば、殆ど無いに等しい距離。

それでも、彼らが僕らに辿り着くより早く行動は起こせる。そして、

「奏、離れないで」

「はい」

その一度があれば十分だ。

?鐵が吠える。

その声とも駆動音とも取れる魔力の咆哮は、?鐵が左手に纏っている闇をより濃密なものへと変える。

そして、一瞬で臨界点に到達した左手の“それ”は敵に放たれるこ

とはなく、僕らを護る球形の重力壁に形作られる。

「ギツ？」

唐突に自分たちと獲物の間に現れた漆黒の壁に戸惑いの声を上げるも、

「気にするな、やれ!!」

主人からの命令に従い、使い魔たちは容赦なく僕らに攻撃を放ってくる。

「ぐっ……!!」

一撃一撃が通常では考えられないほどに濃密な魔力を含んでおり、今迄に防いできた使い魔の攻撃が可愛いものに思える程だ。

流石、慟哭する魔神で強化しているだけあり今にも破られそうだが

……このままならなんとか耐えられる。

魔力の嵐は、轟音を響かせながらも止むことなく暴れ続けていて、暴れ回りながらも、狂うことはなく一心不乱にこちらの防御を喰い破らんとしている事に加え、攻撃が激しすぎる所為か相手の様子が全く見えない。

それは、単に場所が砂浜だからと言うだけではなく、相手が考えも無しにひよっとしたら有ったのかもしれないが 一斉に攻撃を放ってきたからだ。

混ざり合った敵方の十撃は、巨大な一撃となり完全に僕らの視界を埋め尽くしている。

が、それは向こうも同じ事……のはず。

真ん中にいた奴が仮に敵の本体だとするのなら、指示を出すのはあいつのはずだ。

周囲のあいつらの意識がどうなっているのかは分からないが、どちらにせよ今の状況なら僕らの姿は見えないはず。なら、その間にこちらの準備をしておけば相手にこちらの拳動を悟られることなく攻撃できるはず。

「 ? 鐵つー! 」

防壁を張りながらも再び魔神の左腕に闇が集う。

だが、今度は僕らを護るための壁にするのではない。

防御に徹していれば相手の魔力切れを誘うことが出来るかもしれない、魔神相剋者アスラクライン相手なら相手の消耗を待つのが安全で確實だろう。だけど、この相手じゃそれは逆にこちらが負ける。

持久戦は数で勝るあちらに分があるのはいくら僕でも分かる。

だから、機会があつたら確実に攻める!!

? 鐵の左腕に集まった闇は手の先に集い、球体を形作っていく。

さつきは薄く広く張ったその闇を圧縮し、固める。

別に目新しくもない、? 鐵の能力ちからとして以前から使っている“黒の拳撃”だ。

「 今だ 」

相手の攻撃を耐えきり、攻撃が止むと同時に指示を出し、左手の先に創っていた黒の重力球を宙へと放り投げる。

今までだったら、幾つもの魔法陣を通って加速し、必殺の弾丸となっていたそれをただ相手の中心に向けて投げ込む。

「 ? 」

こちらの能力が今一分かってないのか、それとも分かかっていて様子見をしているのかわからないが、相手が一瞬戸惑っている間に、放

り投げられた重力球は僕の狙い通りの位置に放りこまれる。
相手の魔神達の上空に停滞したそれは弾けるでも、負荷を相手に掛けるでもなくその場に浮遊して停滞し続ける……ただし、周囲の物体を全て球体自身に引き寄せながら。

「ぐっ!？」

突然生じた不可視の力に演操者^{ハンドラー}たちは身を竦ませ、呻き声を上げる。咄嗟に防御態勢を取る面々だが、この力に姿勢など無意味。

「これは……重力か!？」

浮かび上がる機体や身体を、使い魔^{ドクター}たちの能力を行使することで緩和しながら男が叫ぶ。

「教える理由はない。

大体、?鐵の事を知っているのなら、力の事も知っているだろう……?」

以前、?鐵の 実際は白銀の 剣を使った力を聞いた瑶さんが、白銀のことを思い付いたぐらいだ。

?鐵という機体名を知っているのだから、能力の事は知られているのが当然と考えて良いはず。

「さあて、な……」

必死に抵抗しつつも不敵な笑みを浮かべるその姿には不気味なものを感じざるを得ない。

重力球に引かれているその状態で浮かべる笑みはただの強がりにか見えないが……

不安要素は早々に消しておくべきだ。

「 ? 鐵っ!!! 」

重力壁を展開し重力球の影響から僕らを護ってくれている魔神に指示を出す。

? 鐵が振るつたのは左手ではなく、右手の巨劍。

重力壁を越え、虹色の軌跡を宙に描きながら振るわれたそれは、重力球に必死に抵抗している使い魔^{トウター}たち全てを薙ぎ払わんと、彼らに吸い込まれるように向かっていった。

・
・
・

この世界に黒鐵がやって来た時からずっと考えていた。

今迄僕は、しっかりと? 鐵の力を十全に引き出せていたのかどうか、という事を。

以前の世界での僕は、大抵? 鐵の力は重力球を生み出すことにしか使っていなかった。

ハイジャック事件の時や、世界間移動の時とは別だけれど、それにしただって宝の持ち腐れも良いところだと思う。

攻撃で重力球以外の能力を真面目に使つたのは、一巡目のダルアとの闘いで光線を捻じ曲げたこととか蒼鉛^{ヒスマス}の槍の回転を止めた時ぐらいじゃなからうか。

…… だけど、改めて? 鐵の能力について考えてみた時にただ重力球をぶつけているだけだと考えると非常に無駄だと思つたのだ。

重力を操れるということは、敵の行動を幾らでも制限できるということだ。

例えどれだけすごい魔力を持っていようと地球という星の上で暮

らしている以上、重力の影響を受けない物はない。

防ぎたければ、重力の影響を受けない力が、状態にならないといけないが、そんな事をすれば自身が地球の重力からも影響を受けなくなってしまう、尚の事行動に制限が掛かることになる。

だから、今迄使っていた分かなりやすい能力行使などではなく、低出力でいいから相手を拘束してしまえば良いと考えたのだ。

幸いにも、白銀の剣を持っているのだから攻撃手段には事欠かない。

？ 鐵で相手を拘束し、そこに白銀の空間切断を喰らわせる。

それが、僕がこの世界で決めたアスラ・マキーナ機巧魔神戦での基本的な戦闘スタイルだ。

・
・
・

確かに巨剣は敵を薙ぎ払った。

空間を斬り裂く魔剣を敵が防ぐ術は無く、僕の予想通り一切の抵抗を受けずに敵の陣営を端から端まで通過した。

それによっていくらかの敵が消滅したのも確認したし、砂浜に巨体が沈む姿も確認した……と思う。

そう、僕らは確かに敵の戦力を大幅に削ったはずなのだ。
それなのに、

「嘘……だろ……？」

「そん、な……」

目の前に広がるのは砂浜を埋め尽くす勢いで今も増え続けている、
魔神と使い魔ドクターの群れ。

本体が切り裂かれた使い魔ドクターは増えていないけれど、それ以外の戦闘

可能な使い魔^{ドウター}たちは続々とその数を増やしていた。

『さあ〜て……』

信じられない敵の数と彼らが織りなす異様な光景に茫然となつてい
る僕たち二人に、揃って話しかけてくる数えきれない数の男たち。
全員が同じ表情で、同じ姿勢。

『第二ラウンドと行こうか』

それは、人としての死の恐怖や、圧倒的な戦力差を前にした戦慄な
んかよりも、余程不気味に僕たちの行動を束縛していた。

? ? ? ? ?

Side: Toru Kitsutaka

あーもう、きりがない!!

「「「「はいおめでとう、これで4体目だ。

けど、その間に何体増えたかな?」「「「「

「くっ!」

男の言葉につられて周囲に目を向ければ、5体の尖晶^{スピネル}と5人の同じ
顔をした男たち。

1体を潰しに掛かっている間に2組も増えている。

「1匹いたら30匹はいると思え、とは言つけど……節操無いにもほどがあるわよ!」

あれって30匹だったかしら?

50とも、100とも言うらしいけど、際限なく湧いてくるという点から言えば、結局は同じこと。

「……ジョニーさんと同列扱いか……」

この場合、褒められると取るべきか、貶されていると取るべきか判断に困るな」

「前者に決まってるでしょ」

普通、ジョニーさんと同じような反応をされて喜ぶ人間はいないと思う。

まあ、普通じゃない可能性大の相手だから意外と嬉しかったりするのかもしれないが……

それにしても、5人が5人とも揃って笑いながら同じ台詞を言うてるものだから、妙に頭に響いて集中力が削がれる。

周囲を5体の敵に囲まれているのだから気を抜いている余裕などないのに、何か霧の様なものが頭の中にもあるのか、思考が鈍くなつていつてしまいきそうだ。

いけない、いけない

そんな霧を振り払うつもりで、エレクトラム琥珀金に指示を出す。

「次!」

指示を受けた金色の魔神は、肩に担がせた斧槍ハルバードを両手にしっかりと握り直し、今度こそ全ての敵を粉碎せんと大きく魔槍を振り上げ、そのまま躊躇うことなく振り下ろした。否、振り下ろそうとして、

「……………危ねえ〜なあ〜……………」

何かに押し留められた。

「何を……………っ!?!?」

慌てて琥珀金エレクトラムに視線をやると、一見したところ普段通り。特に大きな問題点は見当たらない。ただ、

「……………土?」

何故か地面から盛り上がった土が琥珀金エレクトラムの腕や肩などへと蛇の様に絡みつき、魔神の動きを阻害していた。

「一体……………?」

尖晶スピネルの能力は【物質模倣】であり、土を操るような力ではなかったはず。

瑤が相手にしている使い魔ドクターの力であればひょっとしたら可能なのかもしれないが、今はしっかり抑えられているはずだし……………何故?

「……………おいおい、よそ見してていいのかよ?」「……………」

「つつ!？」

あまりにも予想外の事態だったからって、思考を停止させるなんて私の馬鹿!!

相手がそんな私の隙を見逃してくれる訳もなく、当然のように攻撃を仕掛けてきていた。

しかも、5体全部が揃って動きの鈍い琥珀金エレクトラムに向かってきている。彼我の距離差は、僅かに10m。

「マズツ!!」

動きが俊敏な機巧魔神アスラ・マキーナであれば余裕で避けられるのであるが、残念ながら琥珀金エレクトラムは俊敏ではなく、どちらかと言えば愚鈍な方だ。

一撃の破壊力に重点を置いているせい、動作が玻璃珠カルセドニや亜鉛華に比べて2、3歩遅れてしまっている。

彼らなら余裕で対処できる距離でも、私たちに取ってみれば致死圏手前。

下手すれば既に致死圏内かもしれない。

しかも、敵の尖晶スピネルは動作が俊敏な方だったらしく、急激にその距離を詰めて来た。

普段ならここで迎撃できるんだけど……土が腕に絡みついているせいで出来そうにない。

それなら、

「……戻りなさい、琥珀金エレクトラム」

魔神を私の影に戻せば良いだけの話だ。

私の指示に従い琥珀金エレクトラムが影の中へと勢い良く沈んでいく。

「……はあっ?」「」「」「」

私が下した判断が信じられなかったのか驚愕の声を上げる敵の男。5人全員が全く同じ表情で同じ言葉を発しているのには苛立つが、気にしない。

このまま呆けていたら向かってくる5体の魔神に踏み潰されることになるであろうことは明白なので、急ぎその場を離脱する。

琥珀金エレクトラムにとっては避けられない隙間でも、私が避けるのには十分過ぎるほど隙間が開いているから特に問題はない。

泥を跳ね上げながら突き進んでくる尖晶スピネルたちの間を縫うように抜け、奴らが引き返してくる前に、

「ふっ!!」

取り囲んでいた男の一人に一瞬で近寄り、冬櫻を一閃。

「な、にが……?」

閃光のように鞘から抜き放たれた冬櫻は見事に男の頭部から股までを斬り裂いた。

「……あら、血は噴き出さないのね」

『そうみたいだな』

てっきり普通の人間と同じように流血するのかと思っていたが、そうはならなかった。

体が仄暗い粒子へと変わり、空気に溶ける用に散らばると消えていった。

それは、この男が使役していた機巧魔神アスラ・マキナも同様の様で、男が消えると同時に機体も空気に溶けるように消えていく。

……これなら、一々アスラ・マキーナ機巧魔神を相手にするより操っている方を潰した方が良いわね

消えていった男の傍から急いで離れ、次の男へと向かって駆ける。他の男たちは一組がやられたことなど気にもせず私へと向かってくる。

魔神を操る男たちと、その男のうちの一人を刈り取らんと突き進む私、そしてその私を追う魔神。

元々体躯の大きさにかなりの違いがあるため、今にも追いつかれそうだ。

だが、私と男たちはあまり距離が離れていないから一瞬で詰められる。

「二人目!!」

右斜め後方に構えている冬櫻を上部に振り抜き、避けようとしてもしい(……………)男の身体を斬り捨てる。

斬られて仄暗い粒子となって消えていく男の姿など見向きもせず、迫ってくる魔神達に振り向き、

「エレクトラム琥珀金」

すぐ近くまで迫っていた2体の魔神へと振り向きざまに魔槍を呼び出し叩き込む。

勢い良く私に迫って来ていた魔神に吸い込まれるように魔槍は叩き込まれ、轟音と共に2体を崩壊させた。

「ふう」

崩れゆく機体を眺めながら冬櫻を構えなおし、再び琥珀金を影の中から引つ張り出す。
腕に絡みついていた土も消え去り、琥珀金はその雄姿をこの世界に顕現させていた。

……一安心、かしら……？

囲まれた時は一瞬呑まれかけたけれど、なんとか脱出することが出来た。

敵の陣形も一瞬だが崩せた……まあ、敵の能力を鑑みるにすぐ復活してくるだろうが、それでも仕切り直しと考えれば良い。

相手の方を見やり、決して気を抜くことなく軽く呼吸を整えていると、

『闇より古き混沌より出でし……』

「つつ！？」

女性の声が聞こえてきた。

やや低めの女性の声だった“それ”は金属音へと変わりながらもしっかりと周囲に溶け込んでいく。

間違いない、敵の呪文だ。

「秋希ちゃんっ！！」

咄嗟に琥珀金に指示を出し、急いで敵の攻撃を止めさせようとするが、

間に合わない!!

『……其は、科学の鏡が写す翳』

それより速く私の視界が黒に染まった。

58回 VS尖晶（スピネル）（後書き）

戦闘回もあと2回ぐらいかな……？

実際の戦闘はあと一回ぐらいで終わらせたいのですが。

次はできれば1週間で、さすがにこれが今年最後の更新とかは嫌ですしね。

幕間 Wishes of the victims (前書き)

唐突ながら幕間です。

内容は読んでいただくとして、タイトル訳は【犠牲者たちの願い】
結構ありきたりな話になってしまったんじゃないかと、個人的には
残念な気持ちです。

幕間 Wishes of the victims

Side:Ein

俺という存在の根底にあるのは“束縛”という二文字。

初めて“俺”が俺自身を認識してからずっとその言葉が俺に付き纏う。

朝起きた時も、食事を摂っている時も、床についている時も、用を足している時も、全ての行動は見張られ、一度たりとも自由にさせてもらったことはなかった。

だが、当時の俺からしてみれば、それは当たり前前の事だったし、特に疑問に思うほどの事ではなかった。

四六時中見張られているといっても、慣れてしまえばどうということはない。

それ故、俺は俺という個人の感情を捨ててきた。

“俺”という明確な個人があつたら耐えられないと分かっていたのだろう。

ひよつとしたら、下手な行動をとればその場で処分されるということが、幼心ながらに分かっていたからかもしれない。

……実際、周囲の似たような境遇の奴らの大半は不十分と判断されて処分されていたのも大きな理由の一つだ。

確かに、自由を知る人間から見れば、不幸な事なのだろう。

だけど、当時の俺にとっての世界はそこしかなかった。

俺の産みの親は、どこかの精霊信仰を未だに続けている部族の人間らしい。

らしいというのは、聞かされただけで俺が実際に会ったことがある

わけではないからだ。

まあ、今更そんなことはどうでも良い。

重要なのは、俺はその親に捨てられたという事。

といつても、現代社会のような悲観的に事実を捉えられても困る。

その部族の価値観で言うのであれば、“子供を捨てる”と言うよりは“子供を精霊たちの世界へ返す”という感覚なので、現代の日本の様な価値観ではないのだ。

そう言った価値観であったが故に、俺の親がいた集落では、子供が捨てられるのは割と普通の事だったのだ。

更に、産まれた子供を育てるか捨てるか決めるのは産んだ女性であり、それ以外の人間は例え相手の男であろうとも関与できないのだ。ついでに言えば、かなり若いうちからSEXをするため若年での妊娠、出産は当たり前。

確か、俺の母親は俺を生んだ当時は14、5歳だったはず。

まあ、そんな若年と言うのも子供を捨てる理由の一つなのかもしれないが……

ともかく、俺は捨てられ、殺されかけた。

捨てるといつてもその辺に放置するのではなく、埋葬するためしっかりと殺すのだ。

放置しても死ぬだろうが、そんな行動は彼らの信仰からいつて有り得ない。

俺が組織に拾われた（救われた）のはそんな時だ。

元々組織の連中は部族の信仰を知っていたからか、常に赤子が捨てられる瞬間を狙っていたそうだ。

殺されそうになった俺を母親の手から掻っ攫い、自分たちの建物の中で育てることにした。

そう言った点では、組織の奴らに感謝している。

消えるだけだったはずの“俺”を助けてくれたのだから。

ともかく、俺は組織に救われ、その組織の為に使われる駒として育てられた。

出生の秘密をあつさり教えてくれたのも、そういった恩義を俺に感じさせて反抗的な態度を取らせないようにするためのものだったと考えると納得はいく。

正直、教えられた時の俺はそんな事を気にも留めていなかった。そもそも、組織に反抗するつもりなどまるつきりなかったのだ。

……だけど、そんな　　今思えば暗い　　日々も“あいつ”と会ったことで変わった

あいつ　　イナンナは、俺が8歳の頃組織に連れられて俺のいる場所に来て来た。

先に組織に育てられていた俺や、他の子供たちが赤ん坊の頃からだったのとは違い、あいつは既に5歳程度まで育っていた。

十分幼いと言える年齢だが、当時の俺たちからしてみれば、やって来る年齢が珍しく遅い女と言う程度の認識でしかなかった。

5歳という年齢まで育っていたのだから、当然一般常識の様なものは身に付いている。

その為、俺たちの様に組織の中という狭い世界しか知らなかった面々には全く問題なかったことが、イナンナにとっては酷く苦痛となっていたらしい。

何度も逃げようとしてその度に大人たちに捕まる5歳程度の少女。俺たちのいたところに戻ってくる時には、毎度“仕置き”という名の暴力を受け、体中傷だらけとなっていた。

当然大人たちが手当てをする訳もなく、周囲の子供たちも罰せられた者に関わろうとするほど物好きではない。

かといって放っておいて死なれるのも寝覚めが悪かったから、俺が
応急処置だけはしてやっていた。

（まあ、余程重症の時は本格的な治療を受けてはいたが）

……そう、最初はただ、死なれると処分が面倒だからという程度の
認識で付き合っていただけだったはず。

なのに、そんな事をしていただけいか、いつの頃からか俺がイナンナ
の監督役兼救護役となっていた。

それでも、暫くは特に生活に何の変化もなく時は過ぎていっていた。
監視の眼差しは相変わらず俺たちに降り注いでいたし、役に立つかど
うかも良く分からない技術を学ばされていた。

イナンナも脱走を繰り返しては連れ戻され、毎度毎度俺が手当てを
する事になった。

組織の連中がどうしてここまで逃走を繰り返している奴を殺さない
のか当時の俺には不思議でしようがなかったが、結局連中に深くは
聞けてない。

それに、不思議だったのは殺されない事だけではないのだ。

何故毎度毎度皮膚が裂け、骨が折れ 時には砕け、体中を血塗れ
にされてまで逃げようとするのが当時の俺にはまるで意味が分から
なかった。

だから、

『……………どうしてそこまでして逃げたいんだ？』

気付けば昔の俺はそんな事をイナンナに向けて呟いていた。

特に答えが返って来る事を期待していたわけではない。

幾ら俺がいつも手当てをしてやっているからと言って、所詮俺は組
織の側の人間。

逃げ出そうとしている人物が理由を教えてくれるとは思ってもいな
かった。

けれど、

『どうして、ね……逆に聞くけどどうしてあなた達はこんな場所で普段通りに生きていけるの?』

俺の予想を裏切り、イナンナは億劫そうではあったけれど返事を返してきた。

『こんな場所……?』

当時の俺はイナンナの問いに対して本気で首を傾げていた。

イナンナの言っていることが全く分からない訳ではない。

単語の意味は理解できていたし、文章としてもすっかり意味は把握できていた。

だが、その単語や文章が何を指しているのかは分からなかった。

『こんな場所よ!!』

いつもいつも見張られてて、自由に出来る時間なんて一度もない

!!

私も結構な場所で暮らしてたけど……あなた達はおかしいと思っ
たことはないの?』

『この場所って、おかしいのか……?』

見張られてるのなんて普通のことだろ』

『……………!!』

俺の返答にあの時のイナンナは絶句していたと思う。

ただ、あの時の俺はそんなイナンナの反応すら不思議で仕方なかった。

今でもこの辺りの感覚では、あいつとは意見が分かれるところだ。

『それで、お前は どうして逃げたいんだ？』

絶句したイナンナに改めて問いを掛けたのは、我ながら酷いと思う。劣悪な環境を再認識させたうえでの敵側からの問い。

子供の頃の何も知らなかった状態とはいえ、決して褒められたものではない……はず。

『……自由……に、なりたいから』

驚愕していた顔が諦観の念を漂わせた表情へと移り、イナンナはポツリと一言だけ洩らした。

それが、切っ掛けと言えば切っ掛けだった。

『“自由”？』

何だそれ』

『“何”って聞かれると私も分からないけど……そうね、少なくとも此処より良い所。

監視の目もないし、一々大人たちから罰を受けなくても良くなる

の』

『……………』

『あなた達にはきっと分からないんでしょうけど、私はそこに戻りたいの。

爆発音が響いても良い、死体に埋もれて日々を過ごすのも構わない。

だけど、常に誰かに見られてるのは、嫌……！』

それだけ言っただけでイナンナは俺から離れて行った。
その時はそれでおしまい。

けれど、それ以来何となくイナンナの言っていた事が気になって普段からイナンナの言っていた事について考えるようになっていた。
正直、あいつの言っていた“自由”がどんな物かあの時の俺は分からなかったが、

……自由、か

誰の視線をも気にすることなく暮らしていく生活……それは、何となくいいものに思えたのだ。
だから、

『俺も、協力するよ』

『……え？』

俺もイナンナに乗ることに決めた。

その事を告げられた時のあいつの顔は、今思い出しても笑えるくらい間抜け顔だった。

告げた後に色々あったけれど、結局あいつは俺の協力を承諾してくれ、互いに組織を抜け自由になるまで裏切らないことを誓い合った。
当時は組織が何のために俺たちを育てているか分からなかったから大きくなれば二人揃って自由になれる機会があるのだと俺とイナンナの二人とも信じて疑わなかった。

ただ、2年前　俺が16、イナンナが13の時、イナンナが尖^{スビ}晶^{ネル}の副葬処女にされ、俺は尖晶^{スビネル}の演操者^{ハンドラー}になった。

それ以来、二人が自由になるための最低条件としてイナンナの解放と二人が組織から抜ける事を掲げ、その目的を達成するために動いてきた。

……別にイナンナの事など放っておけば簡単に自由になれたのかもしれないが……放っておけなかった。

自分でも何故そんな事を思うのか分からないが、俺は俺自身に希望と夢を与えてくれたイナンナをどうしても見捨てられなかった。有体に言って、好き、愛しているのかもしれない。

初めて俺に出来た親しい人間だったからなのか、一番近い所にいる異性の人間だからなのか……理由なんて幾らでも挙げられる。

だが、そんな理由なんて関係ない。

この感情は、俺が初めて持った普通の人間としての感情だ。

決して消し去るわけにはいかない。

例え、組織が潰そうとしても、イナンナの奴が否定しても、俺はこの気持で動き続けよう。

……まあ、イナンナ本人にはまだ言えてないけれど、あいつが解放された時に言うつもりだ。

それまでは、決して洩らさず、ただ心の奥底に留めておく。

閑話休題

……更に、組織の一員として働かなければならなかったので、可能な限りイナンナの魂を削らないよう、悪魔の女たちの魔力を優先して使い、尖晶スピネルに魔力を送らせた。

結果として戦力補強にはなったが、すぐに非在化して消えて行くので補充が非常に面倒と言うことが判明。

それでも、他に魔力を使わないで済む方法がなかったので仕方ない。

そうして、二人で準備をし、機会を待ち続け、組織の本拠地が敵に襲撃されるといふ絶好の機会を得た俺たちは、戦闘に向かうフリをして一目散に逃走。

念のため襲撃してきた敵の相手用に一機と一体向かわせたが、それも俺たちが完全に逃げ切るまでの時間稼ぎだ。

無事近くの海辺まで辿り着き、使い魔ドクターの力を使って周囲の索敵をすると明らかに俺たちを追ってきたと思われる奴らを発見し、交戦に入った。

「……あと、少しなんだ……だから……邪魔すんじゃない！」

お前たちさえ倒せば俺たちは晴れて、自由だ！！

幕間 Wishes of the victims (後書き)

当初の予定では、智春たちの視点の間に入れる予定でしたが、書き出してみると長いこと。

かといって、後で補足する形をとるのもあれなので、幕間という形をとらせて頂きました。

ちなみにアイン (Ein) の部族の話ですが、実際にそういった部族が今もいるそうです。

私も資料でしか拝見したことはありませんがね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1062m/>

闇と炎の相剋者

2011年12月13日00時23分発行